西を縱といひ、南北を橫といふ、因て天下を經營する義によりて名く。出典史記孟子傳に、天下方務於合從連衡と。素隱に、文穎曰、關東爲從、關西爲橫、高誘曰、關東地形從長、蘇秦相六國、縱爲合從、關西地形橫長、張儀相秦、攻關東從、使與秦合、號曰連橫。

【縱橫闔闢】 意義碁を圍むに、或はヨコに、或はヒラキ或はトダルをいふ。出典李巖の碁賦に、妙縱橫闔闢之機、神出沒死生之變。

六 夙（シユク）

【夙夜】 意義早く起き、晚く寢ね、以て事を勉るなり。出典書經舜典篇に、夙夜惟寅直哉と。又た詩經大雅蒸民篇に、夙夜匪懈、以事一人。

【夙昔】 意義宿昔に同じ、平生なり。出典古樂府に、夙昔夢見之。

【夙興夜寐】 ツの部夙（ツトニ）興夜寐を見よ。

【夙夜在公】 意義官吏が早朝より深夜まで君の御傍に詰め居るといふこと。出典詩經魯頌有駜篇に、有駜有駜、駜彼乘黃、夙夜在公、在公明明と。又た同書召南采蘩篇に、被之僮僮、夙夜在公と。又た同書召南小星篇に、夙夜在公、寔命不同。

七 叔（シユク）

【叔世】 意義衰季の世をいふ。叔は伯叔の叔にして、季の義なり。宇衆に、叔世、季世也と。一說に、國衰爲叔世、時亡曰季世。出典漢書刑法志に、三代之興、皆叔世也。

【叔孫通起朝儀】 意義叔孫通といふの時に朝廷の禮儀を興せしをいふ。出典史記叔孫通傳に、叔孫通薛人、秦時以文學徵、待詔博士、降漢拜博士、號稷嗣君、漢王爲皇帝、悉徵秦儀法、爲簡易、羣臣飲爭功、醉或妄呼、拔劍擊柱、上益懼之、通說上願徵魯諸生、與臣弟子、共起朝儀、頗采古禮與秦儀雜就之、上使徵魯諸生、與其弟子、爲綿蕝野外、習之、月餘通曰、上可試觀、七年長樂宮成、諸侯羣臣朝十月行、謁者言、罷酒、御史執法舉不如儀者、輒引去、竟朝無敢喧譁失儀者、帝曰、吾乃今日知爲皇帝之貴也、拜通爲奉常、賜金五百斤。

八 祝

【祝敔】 意義樂器の名、祝は樂を始むる者、敔は樂を止むる者。出典書經益稷篇に、下管鼗鼓合止柷敔と。又た周禮春官に、鼓鼗祝敔と。又た詩雅に、

九 祝（シユク）

【祝文】 意義文體の名。出典文體明辯に、謂祝史、陳信表、手次辭、不是也、昔伊尹始鑄以祭八神、其辭云、土及其宅、水歸其壑、昆蟲毋作草木、歸其澤、此祝文之祖也、厥後虞舜嗣、田、商湯告、帝、周禮詛、太祝之職、掌六祝之辭、蓋秋已降、史辭寖彫、則祝文久來尙矣、考其大旨、實有六焉、一曰告、二曰命、三曰誓、四曰報、五曰祥、六曰禱、用以警天地山川社稷宗廟五祀羣神、而總謂之祝文、其詞有散文、有韻語、今並採而列之、○祝融 我邦今世祝文と稱するは、祝賀の文にて祭祝の文に非ず、名同くして實異り、これ知らざる可らず、祝は禱なり、今之を祝の字に用ふるは字義み失へり。

【祝融】 意義○夏の神なり。○火の神なり。○南海の神なり。出典○禮記月令篇に、孟夏之月、其神祝融、○左傳昭公二十九年に、火正曰祝融と。又た淮南子時則訓高誘注に、祝融、顓頊之孫、一名黎、爲高辛氏火正、死爲火神也。○太公金匱

敔祝謂之止止と。郭注に、祝如漆桷、方二尺四寸、深一尺八寸、中有椎、連底、挏之令左右擊、止者椎名、書曰、合止柷敔、鄭氏注云、柷狀如漆桷、而有椎、合樂之時、擊其中、而揮之、宜從鄭注、今太常樂、赤人執其椎、投而擊之と。又た爾雅に、鼓敔謂之鐵、郭注に、敔如伏虎、背上有二十七鉏鋙、刻以木長尺、櫟之、鐵者、其名也、今唐碑、用竹長二尺四寸、破爲十枚、於敔背橫櫟之、又鄭注云、敔木虎也、背有刻、所以敔之以止樂。

一 宿

【宿乾】 意義日に干し乾かすこと。出典天工開物に、宿乾、空中泥圈。

【宿問】 意義毬はしきことあり、之を胸中に留め置きて、人に問はざるをいふ。出典荀子に、君子之學、無留義、無宿問。

【宿老】 意義年老いたるをいふ。出典唐書李嶠傳に、爲文章宿老。

【宿食】 意義前日炊きたる飯なり。出典北周書姚僧垣傳に、此有宿食。

【宿願】 意義久しき前よりの願ひ事。出典隋書張衡傳に、得償宿願。

【宿意】 意義久しき前よりの志。出典晉書王渾傳に、非陛下追述先帝文明太后待飯之宿意也。

【宿好】 意義久しき前々よりの嗜好。出典陶潛の詩に、詩書敎爲宿好。

【宿疾】 意義持病のことなり。出典北史に、少有宿疾。

【宿夕】 意義宿は夜なり、一夕一夜といふ義なり。出典戰國策に、不出宿夕、人必危之矣。

【宿夜】 意義終夜に同じ。出典漢書哀帝紀に、宿夜憂勞。

【宿學】 意義宿は舊なり、老學といふに同じ。出典史記莊周傳に、蓋當世宿學、不能自解免也。

【宿儒】 意義前條に同じ。出典漢書董仲舒傳に、是時宿儒胡常與方進同經。

【宿構】 意義豫め先づ文案を構成するをいふ。出典三國魏志王粲傳に、善屬文、舉筆便成、無所改定、時人常以爲宿構と。又た北史杜鉉傳に、杜正藏爲文宿構と。又た北齊書魏收傳に、迅速、有如宿構と。又た北史杜鉉傳に、杜正藏爲文宿構と。又た唐書中使倩促、收筆下有同宿構と。

【宿將】 意義舊き經驗ある將軍。宿は素なり、久なり、老練といふに同じ。出典戰國策に、田盼宿將也と。又た史記王翦傳に、當是時、翦爲宿將。

【宿緣】 意義舊きゆかり。出典何承天の答宗居士書に、愛欲未除、宿緣是畏と。又た姚合の詩に、結得無爲社、還應有宿緣。

【宿怨】 意義積年の怨をいふ。出典孟子萬章上篇に、仁人之於弟也、不藏怒焉、不宿怨焉、親愛之而已矣。

【宿瘤】 意義古の賢女の名、頸にふるきこぶ（コブ）あるによりて名く。出典古列女傳に、齊閔王之后、頸有大瘤、號曰宿瘤、初閔王出遊至東郭、百姓盡醉、宿瘤採桑如故、王怪問曰、寡人出遊、百姓振少長、皆來觀、汝不一視何也、對曰、妾受父母教、採桑、不受教觀大王、王曰、此奇女、憐哉宿瘤、女曰、婢妾之職、屬之不二、予之不忘、中心謂何、宿瘤何傷、王大悅曰、此賢女也、命後乘載之、女曰、父母在內、使妾不受教而隨王、是舞女也、王安用之、王大慙、遣歸、使使者奉璧、加金百鎰、往聘瘤之、父母驚懼、欲洗浴加衣裳、女曰、如是見王、變容更服、不見識也、於是如故、使者至、閔王以爲后、出令舉宮室、增池濠、損膳減樂、後宮不得重采、期月之間、化行鄰國、諸侯朝之、後三年、閔王逃亡而殺、於外。

【無宿諾】 意義一度承諾したるものは、急に履行して、絕えて留滯することなきをいふ、宿は留なり。出典論語顏淵篇に、子曰、子路無宿諾と。

【宿昔青雲志】 意義唐人の詩の句。出典張九齡の照鏡見白髮に、宿昔青雲志、蹉跎白髮年、誰知明鏡裏、形影自相憐。

二 淑

【淑妃】 意義女官の號。出典魏明帝紀原に、淑妃舊探、九嬪、爲淑妃、齊永明中有司奏、亞后之名、進同貴妃、加比三司。

【淑媛】 意義○淑は善なり、善良の德ある女子をいふ。○女官の稱。出典○後漢書列女傳に、曹大家女誡、夫嫂妹者、禮敵而尊、恩疏而義親、若淑媛謙順之人、則能依義以篤好、崇恩以結援と、又た曹植の與楊修書に、蓋有南威之容、乃可以

論於淑媛。㊁三國魏志后妃傳序に、文帝省貴賤淑媛、淑媛位、視御史大夫。僻比縣公。

【淑女】（シュクジョ）　意義善良の婦人なり。出處詩經周南關雎篇に、窈窕淑女、君子好逑。

【淑慝】（シュクトク）　意義善惡に同じ。出處書經畢命篇に、旌別淑慝、表其宅里。

【淑人君子】　意義善人君子といふが如し。出處詩經曹風鳲鳩篇に、淑人君子、其儀一兮と。又た同書小雅鼓鐘篇に、淑人君子、懷允不忘。

二　肅

【肅肅】（スミヤカ）　㊀敬しむなり。㊁嚴正の貌。㊂疾羽の聲。㊃松風の聲なり、謖々と通ず。㊄清きなり。㊅深きなり。㊆靜かなる貌。出處㊀詩經周南兎罝篇に、肅肅兎罝、椓之丁丁。㊁詩經小雅黍苗篇に、肅肅謝功、召伯營之。㊂詩經召南小星篇に、肅肅宵征、抱衾與裯。㊃詩經小雅鴻雁篇に、鴻雁于飛、肅肅其羽。㊄世說に、嵇康肅肅如松下風。㊅後漢書張衡傳に、出紫宮之肅肅。㊆嵇康の琴賦に、蹇門今肅蔦。㊇潘岳の寡婦賦に、蹇門今肅蔦。

【肅雝】（シュクユウ）　意義つゝしみ和らぐなり。出處詩經周頌清廟篇に、於穆清廟、肅雝顯相、濟濟多士、秉文之德。

【肅拜】（シュクハイ）　意義敬禮することにて、手を下僕篇に、不手拜肅拜。

【肅殺】（シュクサツ）　意義秋氣の物をそこなひ枯すを いふ。出處禮記鄉飲酒義篇に、天地肅殺、此天地之義氣也。

三　菽

【肅慎】（シュクシン）　意義國名、今の滿洲の地なり。出處國語魯語に、武王克商遂通道於九夷八蠻、於是肅慎氏來賀貢楛矢。と。又た後漢書東夷傳に、挹婁古肅慎之國也、在夫餘東北千餘里、東濱大海、南與北沃沮接、不知其北所極。

【菽粟】（シュクゾク）　意義豆と米となり。人の常食に して、缺く可らざるものなり。出處孟子盡心上篇に、聖人治天下、使有菽粟如水火。

【菽水之歡】（シュクスイ）　意義貧にして善く親に事ふるをいふ。菽は大豆なり、菽を以て粥として常に之を啜り、且つ水を飲み、更に餘物なきなり。出處禮記檀弓下篇に、子路曰、傷哉貧也、生無以爲養、死無以爲禮也、孔子曰、啜菽飲水、盡其歡、斯之謂孝。（次條參看）

【啜菽飲水】　意義貧士の生活をいふ。出處荀子に、楚王後車千乘、然知也、君子啜菽飲水、非愚也、是節然也。前條參看）

四　菽粟

【不能辨菽麥】（シュクバク）　意義菽は大豆、麥は麥なり、辨じ易し、而るに之を辨ずる能はずとれ至愚なり。出處左傳成公十八年に、晉樂書中行偃使荀罃士魴逆周子于京師、而立之、是爲悼公。周子者、兄無忌、不辨菽麥、故不可立と。杜注に、菽大豆、豆麥殊形易別、故以爲樂者之餘、不辨、蓋世所謂白癡。

【脩然】（シュクゼン）　意義長往の貌。出處莊子庚桑楚篇に、脩然而往、恫然而來。

五　蹴

【蹴蹴】（シュクシュク）　意義平易なる貌。出處詩經小雅道路篇に、蹴蹴周道。

【蹴踏如】（シュクトウジョ）　意義恭敬不安の貌。出處論語鄉黨篇に、君在蹴踏如也。

【蹴詭】（シュクキ）　意義倚りて正しからざるをいふ。出處莊子德充符篇に、彼且蹙然以滑詭幻怪之名聞。

六　熟

【熟覽】（ジュクラン）　意義可嘗に觀るをいふ。出處東坡集に、幸得熟覽。

【熟視】（ジュクシ）　意義目を止めて見ること。出處戰國齊策に、徐公來、熟視、自以爲不如。

【熟紙】（ジュクシ）　意義礬沙（ダミサ）引きの紙なり。出處夜航詩話に、唐人書詩文、必用熟紙、韓文公與陳給事書云、送孟郊序用生紙、寫急于自解、不暇擇耳、蓋生紙當是草草所用、故以用此錄文爲不敏也、熟謂礬熟、唐書百官志秘書監有熟紙匠八人、蓋打紙工也、薛能詩、越客隨厚俸、剡硬得尤名、自注、近相傳、擣熟紙名硬、陳放翁詩、硬敎紙熟、僧溫新、鼠得鑪騎候、熟官、其義尤明、或人寫詩必用生紙、草具留、僧只野蔬、則宋人不必用熟紙也、其詩載諸菁華錄、一部氏聞見錄所云、恐謬說耳。

【熟食】（ジュクシ）　意義よく調味せる食物をいふ。出處鹽鐵論に、古不食市食、其後市餔魚肉而已、今熟食鬻、列鼎籩成肆と。又た杜甫の詩に、幾年逃熟食、萬里遇清明。

【熟狀】（ジュクジョウ）　意義官府の決議書をいふ。出處夢溪筆談に、本朝要事、對案常事擬進入畫可、然後施行、謂之熟狀、熟狀、白

紙書、宰相押字、他執政具姓名と。又た陳龍川文集に、自艱宗以來、軍國大事、三省議定、面奏獲旨、差除、即以熟狀進入、獲可始下中書造命。

【熟慮】（ジュクリョ）　意義よく〳〵思考するをいふ。出處戰國策に、顏王熟慮之。

【熟羌】（ジュクキョウ）　意義羌は、戎狄の名なり、中國に近く馴れたるを熟羌といひ、遠きものを生羌といふなり、即ち生蕃熟蕃の義なり。出處宋史外國傳に、吐蕃各有首領、內屬者謂之熟戶、餘謂之生戶と。又た古今紀要逸編に、雙迴之近、漢、尙能火食者曰熟雙、其遠于漢、惟事射獵、以窟食、逐水草、以篙居、飽草青、爲一飽者、曰生雙。

七　縮

【縮慄】（シュクリツ）　意義身を縮めて畏れるをいふ。出處唐書に、馬嵬縮慄。

【縮朒】（シュクジク）　意義事に堪へざる貌。出處漢書五行志に、當春秋時、侯王率多縮朒不任事。

【縮鼻笑】（シュクビセウ）　意義鼻をしかめて笑ふをいふ。出處北史崔悛傳に、崇與魏收不協、收後專典國史、悛恐被惡言、乃悅之曰、昔有班固、今則魏子、收縮鼻笑之、悛不釋。

【縮地補天】（シュクチ）　意義地を縮め天を補ふとをいふ。出處舊唐書音樂志に、高麗縮地補天、重張國宇。

【縮地之術】（シュクチ）　意義仙人の術、數千里の遠きを目前に楽めて觀るをいふ。出處神仙傳に、費長房從壺公有神術、能縮地脈、千里楽在目前、放之復如舊。

八　蹣跚

【蹣跚】（バンサン）　意義足を暴ぐることの促狹なるをいふ。出處論語鄉黨篇に、蹣跚如也。

【蹣蹣】（バンバン）　意義如に同じ。又た禮記玉藻篇に、擧前曳踵、蹣蹣如也。

【蹣跚類】（バンサンルイ）　意義蹣跚は、西方の神鳥なり、實は柔物、今謂之鬼。

【蹣跚裘】（バンサンキウ）　意義長頸綠色、鴈に似たり、その皮を裘に作る。出處西京雜記に、司馬相如、初與卓文君逃、成都、居貧、愁悶、以所著蹣跚裘就市貰酒、與文君爲歡。

九　蹉跎

【蹉跎】（サダ）　意義姉妹の生みたる子、即ちオイなり。出處爾雅釋親に、男子謂姊妹之子爲出と。又た左傳成公十三年に、康公我之自出と。杜注に、秦康公、晉之甥也。

【出藍】（シュツラン）　意義青色は藍より出づれども、藍よりも青し、學問も勉むれば、弟子、師よりも優るべし。出處荀子勸學篇に、君子曰、學不可以已、青出於藍而青於藍、冰水爲之而寒於水と。又た淮南子俶眞訓に、今以涅染繒、則黑於涅、以藍染、青則青於藍、涅非繒也、青非藍也。

【出身】（シュツシン）　意義唐の制、鄉貢進士の吏部の試に及第せざる者をいふ。出處文獻通考選舉考に、按、馬參公題張籍子序、言、天下之以明二經舉、其得升于禮部者、歲不下三千人、謂之鄉貢、又第、其可進者、屬之吏部、歲不及二百人、謂之出身、又唐士之及第者、未能便解褐入仕、尙有試吏部一關、宋則一登第之後、即爲入仕之期。

【出母】（シュツボ）　意義父に離別せられし母をいふ。出處禮記檀弓上篇に、孔氏之不喪出母、自子思始也。

【出妻】（シュツサイ）　孔子家語に、曾參後母遇之無恩、而供養不衰、及其妻以梨烝不熟、因出之、終身不取妻。

【出婦】（シュツプ）　前條に同じ。　史記張儀傳に、出婦嫗於鄉曲者、良嫗也。

【出京】（シュツキャウ）　謝靈運傳に、馳出京都、詣闕上書。　出京とは、もと京都を出でゝ他處へ行く義なるに、此には京都へ行く義となり、出の字の用法太だ奇なり、我邦の語に、出京といふは、此等の語より出でしものならん。伊藤東涯の樂埴談に、邦人の出京の語は誤れりといひしは、未だ深く考へざるの過りなり、岡田挺之の養蟲錄に、之を辨じて曰く、京都に赴く事を出京といふはよからず、入京といふべしといふ人あり、宋書謝靈運傳に、馳出京都、詣闕上書と、沈攸之傳に、共に乘小船出京都と、世說注に、許詢出都と、何れも京に出る事なり、一槩に泥むべからず。

【出家】（シュツケ）　僧となるをいふ。　宋書隱逸傳に、漢明帝時、聰陽城釣峻出家と。又た文獻通考に、宋仁宗時、凡民避役者、或竄名浮圖籍、號爲出家、趙州至千餘人、遂詔出家者須落髮爲僧、乃可免役。

【出九】（シュツキウ）　博奕をいふ。　聽案に、山谷詩、肉食倒人如出九と。注に、引律、諸博戲賭物、並停止、主人和合者各令笞五日、蓋博徒勝、則入十、其負則出償止以九云。

【出奔】（シュツホン）　我國を去り出て、他國に奔るなり。　春秋宣公十年に、齊崔氏出奔と。又た襄公二十年に、陳侯之弟黃出奔楚。

【出入】（シュツニフ）　或は出で或は入るをいふ。　易繫辭上傳に、利用出入、民咸用之、謂之神と。又た孟子告子上篇に、孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與。

【出路】（シュツロ）　出る路なり。　積搜神記に、坎中窮無出路。

【出韻】（シュツイン）　詩の韻を押すべき處をハツすなり、出は區域外へ踏み出だす義なり。　夢溪筆談續餘に、首句出韻、晚唐人多爲之。

【出仕】（シュツシ）　出でゝ官に仕ふるをいふ。　東坡集に、元不出仕而已。

【出頭】（シュツトウ）　其の場に出づるをいふ。　冥報記に、男女出頭不得。

【出現】（シュツゲン）　神佛などの出でゝ形像を現はすをいふ。　搜神記に、時時出現。

【出錢】（シュツセン）　錢を出だすこと。　宋史食貨志に、農民出錢。

【出題】（シュツダイ）　試驗する時に文題を出すをいふ。　唐書選舉志に、從內出題、以試進士。

【出來】（シュツライ）　物の或る所より出來るをいふ。　世說文學篇中に、問云、公何處來、答云、今日與謝孝廉劇談一出來。

【出塞】（シュツサイ）　塞を越るをいふ。塞とは、中國の北方、戎狄の界限をなせる處をいふ。　史記周紀に、蠻夷謂東周君曰、秦破韓魏取趙問離石者、皆白起也、是善用兵、今又葬兵出塞攻梁、梁破則國危矣。

【出塞曲】（シュツサイキヨク）　古の樂府題なり、橫吹曲歌に出塞入塞あり。　李白の詩に、愁聞出塞曲、淚滿逐臣襟。

【出將入相】（シュツシヤウニフシヤウ）　出でゝは將となり、入りては相となる、文武兼備せる大臣をいふ。　唐書、李德裕出入將相二十餘年と。又た崔顥の詩に、兩朝出將復入相、五世鼎鼓乘朱輪。

【卒】（シツ）　いふ、卒は終る意なり。　禮記曲禮下篇に、大夫死曰卒。

【悼惕】（ツツチキ）　心もとなくづかひ思ふこと。　書經囧命篇に、俾惕惟厲。　孔子家語五帝篇に、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。

【怵迫】（ツツハク）　偉は誠に通ず、誘なり、利の賈誼の服鳥賦に、怵迫之徒、或趨西東。

【述】（ジユツ）　文體の名。　文體明辯に、按、字書云、述、譔也、纂譔其人之言行、以俟考也、其文與行狀同、不曰狀而曰述、亦別名也、此體見諸集者不多、姑錄一首、宋王安石先大夫述、以冠式云。

【述作】（ジユツサク）　創作なり。　論語述而篇に、子曰、述而不作、信而好古と。又た述記樂記篇に、作者之謂聖、述者之謂明、明聖者述作謂也と。又た中庸第十八章に、父作之、子述之。

【述職】（ジユツシヨク）　諸侯が天子に朝するをいふ。　孟子梁惠王下篇に、諸侯朝於天子、曰述職、述職者述所職也。

【恤刑】（ジユツケイ）　民を憐みて刑を施すを謂ひなり。　書經舜典篇に、欽哉欽哉、惟刑之恤哉。

【秫酒】（ジユツシユ）　モチアハを用ゐて酒を造る、之を秫酒といふ。　蘇軾の超然臺記に、釀秫酒。

【崒】（シツ）

【崒焉】（シツツエン）　山の高き貌。　賈至の虎牢關銘に、振之以五嶽、維嵩崒焉、迫之以四瀆、洪河突焉。

【崒然】（シツゼン）　前條に同じ。　柳宗元の邕州馬退山茅亭記に、是山崒然起於蒼莽之中。

【術中】（ジユツチユウ）　史記張儀傳に、張儀曰、此吾在術中而不悟、吾不及蘇君明矣。

【術數】（ジユツスウ）　はかりごと、方術權數なり。　脇冠子天則篇に、臨難而後可以見勇、臨事而後可以見術數之士と。又た管子に、人主務學術數、務行正理、則姦化日逃。

【旬】（ジユン）　十日なり、轉じて年齡に用ふ。　水滸傳第一回に、這王進卻無妻子、只有一箇老母、年已六旬之上。　新說十駕齋養新錄に、古十日を以て旬とす、故に旬の字、日に从ふ、古人の文字に十年を稱して旬と爲す者なし、唯、白樂天の呈夢得詩に、且喜同年添七旬の句あり、自注に、予與夢得甲子同辰、俱七十と、則ち其誤は唐の中葉より始りしなり。

【旬歲】（ジユンサイ）　漢書程方進傳に、方進旬歲間、免兩司隸、と。顏注に、旬、徧也、滿也、旬歲、猶言歲滿也、若十日之一周。

【旬宣】（ジユンセン）　王家の經營に勤勞するの意。　詩經大雅江漢篇に、王命召虎、來旬來宣、文武受命、召公維翰と。鄭箋に、來、勤也、旬、當作徇、徇、徧也、召康公、名奭、召虎之始祖也、王命召虎、女勤於勞於營四方、勤勞於徧聲理衆圖。

【巡守】（ジユンシユ）　天子が諸國を巡るをいふ。　書經舜典篇に、五載一巡守、天子適諸侯、朝諸侯、考其所守也。又た孟子梁惠王下篇に、天子之事、曰巡守、巡守者巡所守也。

【巡撫】（ジユンブ）　一巡行して人民を撫循するなり。　二明の時より官名となれり。　三晉書劉頌傳に、咸寧中詔遣撫荊揚、と。又た南史賈昂傳に、帝使豫州刺史李元履巡撫東土。　三明史に、洪武辛未勅遣皇太子、巡撫陝西。

【巡檢】（ジユンケン）　巡廻して點檢すること。　錄異記に、巡檢汝來。

【巡哨船】（ジユンセウセン）　巡廻して敵を伺ふ船なり。　庶物異名疏に、元史王思誠云、蟹船開洋之前、遣將士乘海船、庶巡檢哨探、蓋巡哨船也。

【春】（シユン）

【春秋】（シユンシユウ）　一書名。　二孔子の春秋に倣ふて春秋と名づけたる書。　三春と秋となり。　四年齡なり。　五此書は孔子が魯國の記錄に就きて節削せしものなり、春秋と曰へるは、杜預の左傳の序に、以事繫日、以日繫月、以月繫時、以時繫年とありて事を記錄するに何月何日に某事あり、何年何時に某事ありと記せる故に、四季の中春秋の二字を採りて一年中の記錄たる意を表したるものなり、唯魯國のみ斯く稱せるに非ずして、夏殷春秋周春秋、宋春秋等、其國の記錄を春秋と曰へる類多し、さて當時周室の權大に衰へて、封建制度の弊害甚しく、大國は小國を併呑し、强國は弱國を壓制し、諸侯各其土地人民を私有し、專權僭亂して、禮樂征伐の命令天子より出づることなかりしかば、孔子大に慨歎して王政を復古し、人民塗炭の苦を拯はんと欲ぜられしも、其位を得ず、且つ己を用ふる明君も無ければ、已むを得ず、魯の策書を修正し、隱公より哀公まで十二代二百四十二年間、列國に有りし天災時變征伐會盟、及び國君卿大夫の死生等、種々の事跡に就き、善惡を辨じ、名分を正し、大義を揭げ、天下後世をして尊王の道を知らしめたるものにして、孟子が孔子作春秋而亂臣賊子懼と曰へるは、實に孔子著述の本意を得たるものと謂ふべし、今五經及び十三經の一に列す、此書を注釋せる者五家あり、左氏傳、公羊傳、穀梁傳、鄒氏傳、夾氏傳是なり、鄒夾二傳は今傳はらず、左公穀を春秋三傳と曰ふ、宋の胡瑗傳を作る、之を胡氏傳といふ、今の朱子派の五經集注の一に列するものこれなり。　六史記管晏傳贊に、晏子春秋あり、同書屈原傳に、虞氏春秋あり、隋書經籍志

に、陸賈撰楚漢春秋・趙曄撰吳越春秋・崔鴻撰十六國春秋等あり。㊁詩經魯頌閟宮篇に、春秋記僖享祀不忒と。又た禮記王制篇に、春秋記僖享祀不忒と。又た禮記王制篇に、春秋記僖享祀不忒と。又た禮記王制篇に、春秋記僖享祀不忒と。又た禮記王制篇に、春秋記僖享祀不忒と。又た禮記王制篇に、春秋記僖享祀不忒と。又た禮記王制篇に、春秋記僖享祀不忒と。又た禮記王制

【春夏】（シユンカ）出典 ハルとナツとなり。出典 書節也と。又た左傳襄公二十六年に、賞以春夏、刑以秋冬。出典 歐陽玄の詩に、石欄花開自見春。

【春宮】（シユンキユウ）出典 ㊀東宮といふに同じ、皇太子の宮なり、因て直ちに皇太子を指していふ。㊁春の神の宮なり。出典 ㊁竹書紀年に、周穆居春宮と。又た劉孝威の詩に、明離信養德、能事舉春宮。㊂離騷に、遵吾道兮此春宮兮、折瓊枝以繼佩と。王逸注に、春宮、東方青帝舍。

【春坊】（シユンボウ）太子傳論に、繼明震林、守器春坊と。又た宮僚備要に、太子宮曰春坊。

【春丁】（シユンテイ）出典 中春卽ち二月の初めの丁故に春丁といふ。出典 上（ジヤウ）丁を見よ。

【春盤】（シユンバン）出典 立春の日に、盤に食物を盛り、春餅生菜號春盤。

【春笋】（シユンジユン）出典 春の竹の子なり、筍は筍に同じ。出典 白居易の和元微之新樂府偶集詩に、十指纖纖若笋、雙鬟鬱如鴉と。又た蘇軾の佳人詞に、報道金釵墜也、十指纖纖春笋纖長。

【春葩】（シユンハ）出典 春花をいふ、葩はばなびらと訓ず。出典 劉禹錫の新論に、陽氣主生物、所樂也、陰氣主殺物、所惡也、故春葩含、日似笑、秋葉墜、鄰如泣。

【春初】（シユンシヨ）出典 春の始めなり。出典 寄書周顯傳に、文惠太子問顯、朶食何味最勝、顯曰、春初韭、秋末晚菘。

【春首】（シユンシユ）出典 前條に同じ。出典 韓愈の詩に、宰相賀雪表、去歲冬聞雨雪頗多、今年春首、宿麥未蘇。

【春盡】（シユンジン）出典 春の終りなり。出典 書經堯典篇の疏に、春盡之日、與立夏之初、時相交也。

【春服】（シユンフク）出典 單袷の衣なり。出典 論語先進篇に、莫春者、春服既成。

【春半】（シユンメン）出典 春のなかばなり。出典 杜牧の惜春詩に、春半年已除、其餘強爲有。

【春江】（シユンカウ）出典 春の川をいふ。出典 蘇軾の惠崇春江晚景詩に、竹外桃花三兩枝、春江水暖鴨先知。

【春暄】（シユンケン）出典 春日の暖かなるをいふ。出典 詩經正義に、人遇春暄、則四體舒泰。

【春社】（シユンシヤ）出典 春の社日をいふ。出典 禮記月令篇に、仲春月擇元日、命民社と。又た淮南子類書に、立春後第五戊日爲春社、立秋後第五戊日爲秋社。

【春秋論】（シユンジユウロン）出典 春秋は六經の一なり、此の書の事を論じたる文章なり。出典 歐陽修の春秋論三篇は、春秋を講ずるには、專ら經に據るべし、傳は一々信憑するに難きをいへり、唐宋八家文讀本に載す、蘇洵の六經論中に、亦た春秋論一篇あり、孔子が周公の子孫、卽ち魯公を假りて褒貶せりと論ぜり、所謂强詞奪理の篇、從ふべからざるなり、此に歐陽公の春秋或問を載す、或問、春秋何爲始於隱公、而終於獲麟、曰、吾不知也、問者曰、此學者之所惑也、心焉不知何也、曰、春秋起止吾所知也、子所問者始終之義、吾不知也、吾無所用心乎此、昔者孔子仕於魯不用、去之諸侯、又不用、困而歸、且老始著書、得詩、自關雎至于魯頌、得書、自堯典至于費誓、得魯史記、自隱公至于獲麟、遂刪修之、其前遠矣、聖人著書足以法世而已、不勢遠之難明也、故據其所得而修之、孔子非史官也、不當職乎史、故止其所得修之而止耳、魯之史記則未嘗止也、今左氏經可以見矣、曰、然則始終無義乎、曰、義在春秋、不在起止、春秋隱無一言、而信萬世者也、予驟聞說之、曰、春秋者也、或問、子於陰城盾止之弒、曰、吾豈能廢傳、經簡矣、待傳而詳、可廢乎、經之事、時有顯其詳焉、至其失、傳則不詳、其失也、欲大罪人而反小之、欲掩經而反舉之、取其詳而得者、廢其失者可也、喜其尊大之心可也、信其卑小之說不可也、問者曰、傳有所廢、則經有所不通、奈何、曰、經不待傳而通者十七八、因傳而惑者十五六、日月萬物皆仰然不爲盲者明、而有物蔽之者、亦不得見也、聖人之意、皎然乎經、惟明者見之、不爲他說蔽者見之也。

【春秋富】（シユンシユウトム）出典 年の少きをいふ、餘年の多きを財の未だ盡きざるに喻ふ。出典 史記齊悼惠王世家に、今高后崩、皇帝春秋富、未能治天下。

【春秋高】（シユンシユウカウ）出典 年老いたるをいふ。出典 戰國秦策に、呂不韋說陽泉君曰、王之春秋高と。鮑彪注、春秋舉成歲、此言其年高と。又た新序に、楚丘先生行年七十、披裘帶索、見孟嘗君、君曰、先生老矣、春秋高矣と。又た漢書蘇武傳に、陛下春秋高。

【春秋長】（シユンシユウチヤウズ）出典 前條に同じ。出典 漢書劉澤傳に、太后春秋長。

【春鶯囀】（シユンオウテン）出典 唐教坊記に、春鶯囀、高宗樂、命樂工白明達寫之、遂有此曲。

【春女悲】（シユンヂヨヒ）出典 少女の春陽の天に當りて男子を慕ふをいふ。出典 詩經豳風七月篇に、女心傷悲と。毛傳に、春女悲、秋士悲、感其物化也と。鄭箋に、春女感陽氣而思、男、秋士感陰氣而思、女、是其物化所以悲也、一曰、心非爲悲、心之所以非則悲矣。

【春亭戲】（シユンテイギ）出典 劇場の語、春狂言をいふ。出典 清嘉錄に、二三月間、里豪市俠搭臺演戲、男婦來觀、謂之春臺戲、以祈農祥。

【登春臺】（トウシユンダイ）への部如春登臺を見よ。

【有春意】（ユウシユンイ）自然皆有春意を見よ。

【春王正月】（シユンワウセイゲツ）出典 春正月なり、王の字を加へたるは、王者大一統の天下なるを示せるなり。出典 春秋に、隱公元年、春王正月と。公羊傳に、元年者何、君之始年也、春者何、歲之始也、王者執制、謂

文王也。

【春日遲遲】 春陽の暄妍なるをいふ。詩経國風七月篇に、春日遲遲、采蘩祁祁と。又た同書小雅出車篇に、春日遲遲、卉木萋萋、倉庚喈喈、采蘩祁祁。

【春氣發動】 春意の起るをいふ。史記曆書に、百草奮興、楊倞先聲と。索隱に、子説、春氣發動、則先出野澤而鳴。

【春誦夏弦】 古は時によりてその學課を異にするものにて、春は口づから歌樂の篇章を誦し、夏は琴瑟を以て詩章の音節に播し被らしむるなり。禮記文王世子篇に、凡學世子及學士、必時、春夏學干戈、秋冬學羽籥、皆於東序、小學正學干、大胥贊之、籥師學戈、籥師丞贊之、胥鼓南、春誦夏弦、大師帥之、瞽宗。

【春祈秋報】 春の新年祭と、秋の新嘗祭とをいふ。詩序に、載芟、春藉田而祈社稷也、良耜秋報社稷也。又た白虎通に、社稷識再祭之何、春求秋報之義也、接神契曰、仲春祈穀、仲秋獲禾、報社祭稷。

【春蘭秋菊】 れも優劣すべからざるに喩ふ。太平廣記に、或問薛州長史三人優劣執先、陳崇樂曰、譬之春蘭秋菊、俱不可廢と。三人とは、裴子餘・李朝隱・程行諶なり。李昌符の婢僕詩に、不論秋菊與春花、簡簡能噓空腹茶。これは李昌符の侍婢の名なり。

【春蚓秋蛇】 春のミミズに秋のヘビなり、以て文字の細く曲りて骨力なき形容。管寧王羲之傳に、子雲近世擅名江表、僅得成書、無丈夫之氣、行行如蚓春蚓、字字如蛇秋蛇。

【春蒐秋獮】 蒐獮、皆狩獵なり、蒐は搜めて孕まざる者を擇び取る、獮は殺なり、殺を以て名となすは、秋氣に順ふなり。春は蒐といひ、秋は獮といふ。左傳隱公五年に、臧僖伯曰、春蒐夏苗、秋獮冬狩。

【春蛙秋蟬】 即ち蛙鳴蟬噪の語なり。無用なる言論をいふ、物理志に、唐無之談、無異春蛙秋蟬耳而已。

【春秋繁露】 書名。漢の董仲舒の撰にして、十七卷あり、其名義解すべからず、或は曰く、繁露は冕の垂るる纓貫する者にして、春秋の比事屬辭に象りて名けたりと、書中述ぶる所、春秋の旨を發揮し、多く公羊傳を主とす、而して往々陰陽五行の事に及べり、仲舒の傳を考ふるに、著書玉杯、竹林等、皆著すの所の書名にして、今此書中に、玉杯竹林あるを以て、或は仲舒の自著に非ざるを疑ふ者あれども、其文を觀るに、全く仲舒の手に出でずと雖、書中道理精確の言多く、後人の能く依託し得る所に非ず。

【春秋鼎盛】 春秋は年齡なり、鼎盛は方に壯なるをいふ。漢書賈誼傳に、天子春秋鼎盛、行義未過、德澤有加焉。顔注に、應劭曰、鼎方也。

【春秋無將】 孔子春秋を筆削し、其の人を罪するや、僅にその意あれば則ち之を誅するをいふ。公羊傳莊公三十二年に、公子牙今將卿、辭曰爲臣親獄者一回、君親無貳、將而誅焉。

【春山如笑】 春の山の溫藹なる形容なり。四時山色を見よ。

【擾亂春風】 亂さるゝかいふ。柳絲の春風にかき亂さるゝかいふ。

【若涉春氷】 極めて危險なるを形容していふ。書經君牙篇に、心之憂危、若履虎尾、涉于春氷。

【春樹暮雲情】 親友互に相思ふを いふ。杜甫の春日憶李白詩に、白也詩無敵、飄然思不群、清新庾開府、俊逸鮑參軍、渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論文と。この時杜甫は渭北、李白は江東に居りしなり、庾は、南北朝周の庾信、鮑は劉宋の鮑照なり。

【春在堂全集】 書名。清の俞樾撰す、樾字は臨甫、曲園と號す、德清の人、此書はその自著數十種を集めて刪せしものにして、凡そ四百餘卷あり、中に就て群經平議・諸子平議各三十五卷は、最もその力を用ゐしものに

して、古書疑義舉例七卷は、古書を讀むものに鴻益あり。

【春色滿皇都】 管人の詩の句。謝朓の和徐都曹に、宛洛佳遨遊、春色滿皇州、結軫青郊路、回戰蒼江流、日華川上動、風光草際浮、桃李成蹊徑、柔楡蔭道周、東都已�載、言歸望綠疇。

【春水滿四澤】 カの部夏雲多奇峯を見よ。

【春眠不覺曉】 唐人の詩の句。孟浩然の春曉の詩に、春眠不覺曉、處處聞啼鳥、夜來風雨聲、花落知多少。

【如春蠶吐絲】 蓋筆の輕妙なる喩。圓繪寶鑑に、愷之性は頗博學有才氣、丹青亦造其妙、筆法如春蠶吐絲、初見若平易、且形似時或有失、細見之、六法兼備、傳染以濃色、微加點綴、不求章飾。

【春秋一字褒貶】 春秋の書、一字を以て褒貶の意を示せるをいふ。范甯の春秋穀梁傳序に、一字之褒、寵踰華衮之贈、片言之貶、辱過市朝之撻と。楊士勛疏に、褒、王公之服、而有文章と。又た孔穎達春秋正義序に、因魯史之有得失、據周經以正褒貶、一字所寄、有同華衮之贈、一言所黜、無異斧鉞之誅。

【如坐春風之中】 春風は能く萬物を發育す、故に弟子が先生に從ふて、長益を受くるこ

とに比していふ。宋名臣言行錄に、朱光庭見明道先生於汝州、錄語、人曰、某在春風中、坐了一月。

【春風春水一時來】 唐人の詩の句。白居易の律府西池の詩に、柳無氣力枝先動、池有波紋冰盡開、今日不知誰計會、春風春水一時來。

【春來遍是桃花水】 唐人の詩の句。王維の桃源行の詩に、漁舟逐水愛山春、兩岸桃花夾去津、坐看紅樹不知遠、行盡青溪不見人、山口潛行始隈隩、山開曠望旋平陸、遙看一處攢雲樹、近入千家散花竹、樵客初傳漢姓名、居人未改秦衣服、居人共住武陵源、還從物外起田園、月明松下房櫳靜、日出雲中雞犬喧、驚聞俗客爭來集、競引還家問都邑、平明閭巷掃花開、薄暮漁樵乘水入、初因避地去人間、及至成仙遂不還、峽裏誰知有人事、世中遙望空雲山、不疑鏡境隔塵寰、問見漁人心未盡、惜哉桃源路、出洞無論隔山水、辭家終擬長遊衍、自謂經過舊不迷、安知桑壑今來變、當時只記入山深、青溪幾曲到雲林、春來還是桃花水、不辨仙源何處尋。

【春風桃李花開日】 白樂天の長恨歌の句。チャウ恨歌を見よ。

【春宵一刻直千金】 春の夜の一刻の閒の景が千金に價ひすとて、極めて之を貴ぶなり。漏刻は一晝夜を百刻に分つ、一刻は一時の十分の一なり。蘇軾の春夜の詩に、春宵一刻直千金、花有清香月有陰、歌管樓臺聲寂寂、鞦韆院落夜沈沈。津阪東陽の夜就館話に、此詩に就きて妙解あり、就て見るべし。

【春宵花月直千金】 明人の詩の句。唐六如の花月吟に、春宵花月直千金、愛此花香與月陰、月下花開春寂寂、花梢月轉夜沈沈、杯邀月影臨花醉、手弄花枝對月吟、明月易盈花易老、月中莫負賞花心。

【春色惱人眠不得】 宋人の詩の句。上安石の夜直に、金鑪香燼漏聲殘、翦翦輕風陣陣寒、春色惱人眠不得、月移花影上欄干。

【春潮帶雨晚來急】 ヤの部野渡無人舟自橫を見よ。

【春城無處不飛花】 唐人の詩の句。韓翃の寒食に、春城無處不飛花、寒食東風御柳斜、日暮漢宮傳蠟燭、青烟散入五侯家。

【春草碧色春水綠波】 春草碧色をなし、淥水には春水綠波を漂はすをいふ。

【春秋孝經成赤虹化玉】 聖人の著作を感賞し給へる義なり。初學記天部下に、干寶搜神記曰、孔子作春秋、制孝經、既成、齋戒向北辰、而拜、告備於天、赤

虹自上而下、化爲黃玉、長三尺、上有刻文、孔子聽受而讀之。

俊

【俊】シュン　モの部茂選英俊を見よ。

【俊士】シュンシ　才氣のすぐれたる士をいふ。出處禮記王制篇に、司徒論選士之秀者、而升之學、曰俊士。

【俊乂】シュンガイ　勝れたる人、又は賢才の稱。出處書經皐陶謨篇に、俊乂在官。

【俊德】シュントク　大德に同じ。出處書經堯典篇に、克明俊德、以親九族。

【俊傑】シュンケツ　才德衆に異なる者。出處孟子公孫丑上篇に、賢使能、俊傑在位と。又た淮南子泰族訓に、知過萬人者、謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之豪、十人者謂之傑。

【俊髦】シュンボウ　萬人に秀でたるなり、長き髮を髦といふ、因て士の俊秀なるものに喻ふ。出處詩經大雅思齊篇に、古之人無斁、譽髦斯士と。毛傳に、有名譽之俊士。

恂

【恂恂】シュンシュン　㊀信實の貌。恂、俊、逡、巡、皆同じ。出處㊀論語鄉黨篇に、孔子於鄉黨、恂恂如也。㊁柳宗元の捕蛇者說に、恂恂起而視其缶、吾蛇猶存。

【恂目】シュンモク　目を動かす貌、メクバセなり。出處列子黃帝篇に、俠然有恂目之志。

【恂慄】シュンリツ　イカメシキ貌、禮記大學篇の疏に、恂字、或作畯、讀如嚴峻之峻、言其容貌嚴栗也とあり。出處大學に、瑟兮僩兮者、恂慄也、赫兮喧兮者、威儀也。

郇

【郇公廚】シュンコウウ　味多し、因ていふ。又た人の多く奇書を藏するに譬へていふ。出處世說補に、章陟廚中、飲食香味錯雜、人入其中、多飽飫而歸、時人爲之語曰、人欲不飯筋骨舒、賓客須入郇公廚。

盾

【盾鼻】シュンビ　資治通鑑に、荀恪少居江東、博學能文、興上梁の武帝有布衣之資、知上有大志、然負氣不服、常謂人曰、會於盾鼻上磨墨椽筆之と。胡注に、若し非常の擧あらば、亦當に兵を起し、盾鼻上に於て墨を磨し椽を作り、以て其の罪を摩らすべし。又た林嘉齋集に、題范晞文詩稿に、才高欲逸羊頭步、興到還磨盾鼻吟。

浚

【浚渫】シュンセツ　泥をさらへて深くするをいふ。出處水經の注に、不曾浚渫。

殉

【殉國】シュンコク　殉は從なり、國難に從ふて死するをいふ。臣瓚云、身を以て一物に從ふを殉と曰ふ。出處漢書李陵傳に、常奮不顧身、以殉國家之急。

【殉死】シュンシ　君の死に從ひて死するをいふ。出處王粲の詩に、自古無殉死。

荀

【荀子】シュンシ　撰す、唐の楊倞之が注を作れり、況は戰國の時、趙の人にして、楚に仕へて蘭陵の令となり、書を著せしこと史記列傳に見ゆ、漢人稱して荀卿又孫卿といふは此人なり、書中論述する所、皆儒家者流の言にして、禮を崇び學を勸め、周公孔子の教を明かにせり、其中非十二子及び性惡篇は大に後世學者の譏議を招けり、然れども荀子の意は必しも然らず、人其性の善を恃んで、學を廢し禮を慢にせんことを憎みて、此說を立てたるものなり、荀子の學問は、其淵源孔子に出で、議論正を詭らず、言皆依據する所あり、古より孟荀並べ稱すること亦理なきに非ず、唯其文章に玉りては、孟子に及ばざる所多し、謙案清の盧文弨後釋を作れり、近頃王先謙の集解清の經解の編者）清朝の學者の荀子の注解を裒めて本文に挿入し、荀子集解と名けたり、又た我邦先儒物徂徠、讀荀子あり、家田大峯、荀子斷あり、其他片山兼山、荀子一適、久保筑水の增注、岡本保孝の荀子考あり、皆參考に資すべき書なり。

【純純】シュンシュン　主誠の意。出處莊子山木篇に、純純常常、乃比于狂。

【純粹】シュンスイキ　物の至て美にして雜り氣なきをいふ。出處易經乾卦彖傳に、剛健中正、純粹精也と。又た難厥に、昔三后之純粹兮、固衆芳之所在。

【純臣】シュンシン　忠義一方にして他に心を有せざる臣。出處左傳隱公四年に、石碏使其宰獳羊肩泣殺石厚於陳、君子曰、石碏純臣也と。又た明史に、石璞仕至兵部尚書、家居、英宗念之曰、石璞純臣也。

【純儒】シュンジュ　醇ジュン儒の類語を見よ。

【純如】シュンジョ　和らぐ貌。出處ェの部經（エキ）如を見よ。

【純熟】シュンジュク　熟練に熟ぜるをいふ。出處蘇軾の詩に、眞源未純熟。

【純正蒙求】　元の胡炳文撰す、炳文、李瀚の蒙求多く對偶を以て工み求め、盡くは法戒に關するあらざるを以て、因つて是の書を作る、上卷は教を設けて人倫を明かにすることを敍す、中卷は身を立て己を行ふことを敍す、下卷は人を待ち物に接することを敍す、每卷一百二十句、併せて自らこれが注を作れり。

淳

【淳巡】シュンジュン　王霄に、子貢淳巡而有愧色と。又た史記魏世家に、顧環淳巡再拜。

【淳遁】シュンジュン　前條に同じ、遁は巡に通ず。淳巡淳遁の字に就いて、三餘偶筆第五卷に之を論ずること詳なり。

【駿駿】シュンシュン　柔和なる貌。出處管子小問篇に、苗始其少也、駿駿乎何其舊子也と。房注に、駿駿柔順貌、穀苗始則柔順、故似舊子也。

【駿目】シュンモク　目を動かす貌。出處何承天の纂文に、吳人呼目瞬目爲駿目。

【惇惇】シュンシュン　純厚の貌。出處後漢書第五倫傳論に、惇惇隱諒。

【惇史】シュンシ　史官の篤厚なるもの、惇はアツシと訓ず。出處禮記內則篇に、皆有惇史と。注に、史之宰厚者也、非官名也。

【惇淳】シュンシュン　少智の貌。出處莊子胠篋篇に、舜之天性淡無爲、而悅夫惇淳之寡。

閏

【閏】シュン　なすものなり。每月の餘日を積みて、別に月を物紀原に、史記曰、黃帝起消息、正閏餘、則閏蓋餘分之月也、黃帝始曆始正之。

【閏月】シュンゲツ　堯典に、止統に非ずして天子の位に即くをいふ、閏は閏月の閏にして、閏餘の意なり。出處漢書王莽傳に、紫色亂雅、餘分閏位、聖王之罪、除云爲と。紫は正色に非ず、雅は邪音なり。出處莊子讓王篇に、子貢淳巡而有愧色と。

循

【循循】シュンシュン　次序ある貌。出處論語子罕篇に、夫子循循然善誘人。

【循吏】シュンリ　順良にして能く法律を守れる役人をいふ。出處史記循吏傳に之を論ずること詳なり。

【如循環無端】　いふ。出處孫子兵勢篇に、奇正相生、如循環之無端、孰能窮之哉。謙案荀子に、始則終、終則始、若環之無端也。

筍

【筍簴】シュンキョ　タケノコとラビなり。出處鶴林玉露に、從容步山徑、携松竹、與籬犢共僅息於長林野草間、座弄流泉、漱齒濯足、既歸竹窓下、則山妻稚子作筍簴、供麥飯、歡然一飽。

順

【順序】シュンジョ　物の次第あること。出處易經下系傳に、恆久也と、疏に、餐則剛尊在上、巽則柔卑在下、得其順序、所以爲恆也。

【順孝】シュンカウ　子が善く父に事ふるを孝と順といふ。出處禮記に、崇祀宗廟社稷、則子孫順孝。

【順孫】シュンソン　孫が善く祖父に事ふるをいふ。出處後書黃瓊傳に、瓊宜布詔令、百姓鄉化、孝子弟弟、良綱順孫、日以衆多。

【順守】シュンシュ　道理に從ふて事を守るをいふ。出處史記陸賈傳に且湯武逆取而以順守之、文武並用、長久之術也。

【順德】シュントク　經升卦彖傳に、地中生木、升、君子以順德積小以高大。謙案王肅本に順を慎に作る。

【順禮】シュンレイ　レの部順禮を見よ。

【順風】シュンプウ　カの部順風（カゼ）を見よ。

【順風吹起烏江水】　順風（オヒカゼ）が吹き起りたるを見て、昔項羽が敗北して烏江に帆を懸けて江東の地へ逃れんとせしを思ひ起したるなり。出處水滸傳第三回に、九里山前作戰場、牧童拾得舊刀鎗、順風吹起烏江水、好似虞姬別霸王。

舜

【舜典】シュンテン　書經虞書の篇名にして、眞舜側微、遭聞之聰明、將使嗣位、陳試諸艱、作舜典と。然れども孔壁より得たる所の眞の舜典は、當時之を失ふ、後好事者竟典を、中庸より割き、これを舜典を爲し、且つ

補ふに其殘遺の文を以てせり、加之ならず姚方興の傳ふる所のものは之を堯典に倣ひ、其篇首に曰若稽古帝舜曰重華協于帝、溶哲文明、温恭允塞、玄德升聞、乃命以位の二十八字を增せり。さて此篇は純全たる政治書にして、舜克く四門を闢き、遍く人才を登庸し、就中禹皐陶等を用ゐ、禮樂刑政を定め、以て堯の政を攝行せし等の事を載す、而して其文は所謂二典三謨の一にして、氣格渾厚、而も明白曉り易く、眞に三代文華の精と謂ふべし。

【舜之徒】 善を爲すの徒といふこと。鶴鳴而起、孳孳爲善者、舜之徒也。

【舜作五絃之琴】 絃の琴を作りし故事。禮記樂記篇に、昔者舜作五絃之琴、以歌南風、蓋始創樂、以賞諸侯之有德者也。

【舜棄黃金於山】 聖王は道德を輕んずるをいふ。新語に、舜棄黃金於嶄嵒之山、禹捐珠玉於五湖之淵。

【舜人也我亦人也】 凡人類なる故、奮勵すれば舜の如き聖人の地位に至り難からざるなり、故に志を立ることは宜く高尚にすべきをいふ。孟子離婁下篇に、君子有終身之憂、無一朝之患也、乃若所憂則有之、舜人也、我亦人也、舜爲法於天下、可傳於後世、我由未免爲鄉人也、是則可憂也、憂之如何、如舜而已矣。

【舜禹之指麾】 人を實行を貴ぶこと。疾雷人を驚ろかすが如し。

【舜之徒】 と。

【雖有舜禹之智吟而不言不如】 ないふ、疾雷とは、疾に

【舜人也】 史記淮陰侯傳に、故曰、猛虎之狀、不如駑馬之安步、五頁致遠、騏驥之踴躍、不如駑馬之安步、五頁之狐疑、不如痛夫之必至也、雖有舜禹之智、吟而不言、不如疾雷之振耳也、此言貴能行之、夫功者難成而易敗、時者難得而易失也。

【雋】 俊と同じ、英俊なる者をいふ。

【雋永之論】 雋は肥肉なり、永は長なり、甘美にして深長なる言論をいふ。漢書嚴助傳に、通論戰國時政士權變、亦自序其說八十一篇、號雋永、顏師古注に、雋、肥肉、永長也、言所論甘美而長。

【懲】 動き亂るゝ貌。左傳昭公二十四年に、王室懲懲。

【懲致】 段々となれ致すなり。易經坤卦象傳に、履霜堅冰、陰始凝也、馴致其道、至堅冰也。

【馴雉】 漢書魯恭傳に、拜中牟令、建初七年、郡國螟傷稼、犬牙縣界、不入中牟、河南尹寞安聞之、疑其不實、使仁恕掾肥親往廉之、恭隨行、阡陌俱在桑下、有雉過、止其傍、蓋有蠶兒、親曰、兒何不捕之、兒言雉方將雛、親慙然而起與恭訣曰、所以來者、欲察君之政迹耳、今蟲不犯雉、此一異也、化及鳥獸、此二異也、竪子有仁心、此三異也、遲、府具以狀白安、安因上書言狀、帝異之。

【馴擾】 柔順なるをいふ。書經阜陶謨篇に、擾而毅と。蔡傳に、馴擾而果毅。

【楯鼻】 盾（ジユン）鼻を見よ。

【醇醇】 自ら樂むなり、老子第五十八章に、其政悶悶、其民醇醇。

【醇醪】 美酒をいふ。漢書愛盎傳に、買二石醇醪と。顏注に、醇者不漓、言其醲也、醪、汁滓合之酒也。

【醇謹】 手厚く事を大切にする貌。漢書萬石君傳に、少子慶爲丞相、是時桑弘羊等致利、王溫舒之屬峻法、兒寬等推文學、九卿更進用事、事不關決於慶、慶醇謹而已。

【醇醨】 以て民情の厚薄に喩ふ。楊雄傳雅注疏序に、醇謂既異、步驟不同。

【醇儒】 純潔にして雜駁ならざる學者。漢書賈山傳に、涉獵書記、不能爲醇儒、顏師古注漢書鄭崇傳に、稱爲純儒。

【醇朴】 人情のウブなるをいふ。李密の詩に、風俗頗醇朴。

【若飲醇醪】 善き酒を飲むが如く、自然に其の人の德に化せらるゝをいふ。三國吳志周瑜傳の裴注に、江表傳曰、程普謂以年長數陵侮瑜、瑜折節容下、終不興校、普後自敬服而親重之、乃告人曰、與周公瑾三歲之字交、若飲醇醪、不覺自醉。

【尊彝鑊鬵】 セの部千里尊彝を見よ。

【尊彝鑊鬵】 ロの部鑊魚鬵を見よ。

【潤澤】 猶ほ潤色のごとし、澤は光澤なり。孟子滕文公上篇に、若夫潤澤之則在君與子矣。

【潤益】 潤澤附益の義にて、增し加ふるなり。隋書經籍志に、毛詩序、子夏所創、毛公及衞敬仲又加潤益。

【潤色】 已に修飾せる者に文采を加ふるなり。隋書鄭繹傳に、高熲戲謂繹曰、筆乾、繹答曰、出爲方岳、杖旋言歸、不得一錢、何以潤筆。又た宋史王禹偁傳に、雪草李繼遷、送馬五十匹、爲潤筆、禹偁卻之。

【潤筆】 傳に、高熲戲謂繹曰、筆乾、繹答曰、出爲方岳、杖旋言歸、不得一錢、何以潤筆。又た宋史王禹偁傳に、雪草李繼遷、送馬五十匹、爲潤筆、禹偁卻之。世說簡傲篇に、南唐獻續書詩、神照載撰其父神道碑、以珍貨幾萬緡、仍綴一歌、賢冠洞房者、爲潤筆之贈。

【諄諄】 ㊀詳に語る貌。㊁忠誠の貌。㊂孟子萬章上篇に、天與之者諄諄然命之乎。㊃左傳襄公三十一年に、趙孟年未、益五十、而諄諄焉、如九十者。

六　餕　鋅

【餕餘】 祀典禮上篇に、餕餘不祭。記曲禮上篇に、食物の餘りをいふ。

【鋅】 鋅にて作りたる器、鈴の類。國語晉語に、戰以鋅于丁寧、聲其民也と。又た三才圖會に、周禮、小師以金鼓和鼓、其形象鐘、頂大腹、擊、口奈以伏獸爲鼻、內懸鈴于鈴鋗舌、作樂、振而鳴之、與鼓相和。

七　遵

【遵養時晦】 道に遵ひ志を養ひ、時ふ。詩經周頌酌篇に、於鑠王師、遵養時晦。

八　駿

【駿馬肉】 秦の穆公の時に野人が公の駿馬を食ひし故事。呂氏春秋愛士篇に、昔者秦繆公右服失、繆公自往求之、見野人方將食之於岐山之陽、繆公笑曰、食我駿馬之肉、而不飲酒、余恐其傷汝也、於是徧飲而去、處一年爲韓原之戰、野人三百有餘人、爭力疾鬪、遂大克晉、及獲惠公以歸。

【駿足思長阪】 千里を馳する馬は、長阪の艱險を踏えんと思ふ、才俊の人は大難に當るを欲するに比す。陶淵明の詩に、駿足思長阪。詩經鄘風の詩に、駿足思長阪。

九　鶉

【鶉衣】 ラ）の屑は特に禿せり、衣の短結といふ。荀子大略篇に、子夏貧、衣若悬鶉、人曰、子何不仕、曰、諸侯之驕我者、吾不爲臣、大夫之驕我者、吾不復見。

【鶉居】 居處の定まらざる義。莊子天地篇に、聖人鶉居而鷇處。

【鶉首】 星宿の名。晉書天文志に、南方朱鳥宿、曰鶉首、鶉火、鶉尾。

【鶉之奔奔】 鶉の雌雄相隨ふて飛ぶを、詩經鄘風鶉之奔奔篇に、鶉之奔奔、鵲之彊彊、人之無良、我以爲子と。鄭箋に、奔奔彊彊、言其居有常匹、飛則相隨之貌。

十　蓋　蓋

【蓋蓋】 ㊀動き援る貌。㊁衆多の貌。左傳昭公二十三年に、今王室實蓋蓋焉。

【濬哲】 深智といふに同じ。書經舜典篇に、濬哲文明、溫恭允塞。

【瞬息之間】 瞬はメハタキ、息は一呼吸なり、少時間をいふ。優婆塞戒經に、瞬息到無色界と。又た杜甫の詩に、得失瞬息間。

【鵕鸃冠】 やまどりの毛羽を以て飾れる冠なり。史記張耳傳に、即侍中、持鵕鸃冠、貝帶と。索隱注に、以鵕鸃毛羽飾冠と。又た同書司馬相如傳顏師古注に、鵕鸃、鷩鳥也、似山鷄而小、背毛黃、腹下赤、項紋色、其尾毛紅赤、光采鮮明、今俗呼爲小鷄、其實非此也。

庶類。

【蠢爾】（シュンジ）【訓】詩經小雅采芑篇に、蠢爾蠻荊、大邦爲讎。

【如今】（ジョコン）【訓】今といふこと、如は助字なり、而今と通ず。【出】杜牧の悵別の詩に、如今風擺花狼藉、綠葉成陰子滿枝と。又た徐凝の詩に、一年無似如今夜。

【如干】（ジョカン）若（ジャク）干を見よ。

【如晦】（ジョクワイ）【訓】風雨にて天の晴きないふ。【出】詩經鄭風風雨篇に、風雨如晦と。毛傳に、晦昏也。

【如夫人】（ジョフジン）【訓】人の妾をさしていふ詞。【出】左傳僖公十七年に、齊侯之夫人三、皆無子、齊侯好內、多內寵、內嬖如夫人者六人。

【如馨地】（ジョケイチ）【訓】また爾馨、寧馨に作る、晉ノ此ノ同じ、馨の字は、雅語の「如」に用ふることとあり。【出】世說方正篇下に、桓大司馬詣劉尹、臥不起、桓彈棋、劉執丸迸碎、牀褥間、劉作色而起曰、使君如馨地、寧可調戰求勝、桓甚有慙容。

【汝陽三斗始朝天】【訓】唐人の詩の飲中八僊歌に、汝陽三斗始朝天、道逢麴車口流涎、恨不封向酒泉。【出】劉ヘウメといふこと。

【初古】（シンコ）【訓】向の九歌に、興離騷之微文兮、覽靈修之意旨、還余車于南鄙、兮、復蛙軌于初古。

【初度】（ショド）【訓】誕生日なり、度は節なり。【出】離騷に、皇覽揆予于初度、曰、攬揆、余以嘉名、名余曰正則、字余曰靈均、と。李善注に皇は皇考なり、覽は視、揆は度るなり、初度は始生年時なり。

【初雪】（シセツ）【訓】ハツ雪なり。【出】岑原詩話に、杜詩に、只應踏路初雪、踏馬后山初雪已覆地、晚風仍積、威、明の周憲王か送雪の詩に、天山一色凍雲垂、鄰畫樓相知自注に、汴中風俗、每歲遇初雪、則以合子盛雪、送與親知、以爲喜慶、置酒設席、相請歡飲、亦昇平之樂事、宮中尤尙之。

【初霜】（シソウ）【訓】ハツ霜なり。【出】梁簡文の詩に、初霜隈綱華と。又た顏桑の初霜の詩に、傷渚蘆先白、營籬菊自黃。

【初鶯】（シオウ）【訓】岑原詩話に、退之早春雪中聞鶯の詩に、共孙初聽日、誰貴後聞頻、元の楊載の詩に、城雪初消齊菜生、角門深巷少人行、柳梢聽得黃鸝語、此是春來第一聲。

【初日】（シジツ）【訓】日の出なり。【出】常建の詩に、初日照高林。

【初月】（シゲツ）【訓】①月の初めて出づるをいふ。②三日月なり。【出】①趙冬曦の詩に、舟得初月、②文苑英華天象六の詩に、纖、月初月賦、觀乎皎皎新月と。又た江盈科の警溝詩話に、初月新月詩、自古至今不知多少、余獨愛一聯秀絕句、尾語云、天邊怕看如鉤月、鉤起新愁與舊愁。

【初唐】（シショウ）【訓】ハの部晚唐を見よ。

【初冠】（シカクワン）【訓】初めて冠を着るをいふ。【出】漢書昭帝紀注に、謂初冠加上服也。

【初夜】（シヤ）【訓】戌（イヌ）の刻なり、卽ち今の午後八時をいふ。【出】涅槃經に、初夜後夜、亦勿有懈。

【初心】（シシン）【訓】未だ難苦せざるウブの心みをいふ。【出】曾護經に、梭越初心。

【初發心】（シホツシン）【訓】初めて佛道に入らんとする發心なり。【出】宜律師感應記に、從初發心、乃至成佛。

【初學記】（シガクキ）【訓】唐の徐堅等の撰する所にして、三十卷あり。玄宗皇帝、諸王が學に從ふを以て、徐堅に命じて、經史文章の要典故事を類纂せしめしなり、其部凡て二十三とし、子目は三百十三あり、天、歲時、地、州郡、帝王、中宮、儲宮、帝戚、職官、禮、樂、人、政理、文、武、道釋、居處、器用、寶器、果木、獸、鳥とす、劉中山子儀、甚だ其の書を喜び、止だ初學のみに非ず、終身の記と爲すべしと言へり。

【助力】（ジョリキ）【訓】他人の輔助の力をいふ。【出】漢書孔光傳に、得其助力。

【助理】（ジョリ）【訓】天子を助けて天下を治むるかいふ。【出】漢書百官志に、助理下字最新巧、人思不到、更似不待思者。

【初程】（シショテイ）【訓】發程などいふに同じく、旅行のカドデのときに、物事の初めにいふ。【出】梁簡軒詩話に、嘱北詩、一導指頃、盛裝珠、曾記初程使棄繩。

萬搜。

【助長】（ジョチヤウ）【訓】遂に成らんことを欲して卻つて事を害するにいふ。【出】孟子公孫丑上篇に、勿助長也、無若宋人然、宋人有閔其苗之不長而揠之者、芒芒然歸謂其人曰、今日病矣、予助苗長矣、其子趨而往視之、苗則槁矣、天下之不助苗長者寡矣、以爲無益而舍之者、不耘苗者也、助之長者、揠苗者也、非徒無益、而又害之。

【助成】（ジョセイ）【訓】事を輔助して成效せしむる義。【出】書經の孔傳に、助成道化。

【助產】（ジョサン）【訓】產婆をいふ。【出】漢宮小牘に、從助產朱婆婆墻外、得一銅器如壺。

【助教】（ジョカウ）【訓】官名、教授に次ぐの官をいふ。【出】事物紀原に、晉咸寧四年、初立國子學、置助教、以教生徒、魏始於太醫、置之、唐國子四門俱有其官、開元元年、諸州始置醫學助教、宋朝神宗元豐中除之、初宋朝惟以四門國子助教、命醫者、故官制行惟置大醫及州助教也。

【助語辭】（ジョゴジ）【訓】書名。【出】明の盧以緯の撰するもの、一卷なり、此書は助辭を集めて、其意義用法を說明したるものにして、字數は僅に一百餘なり。

【序】（ジョ）【訓】①文體の名なり。②堂の東西に在る牆をいふ。③學校なり。【出】①文體明辯に、按爾雅云、序、緒也、字亦作敍、言其次敍事理、次第有序者、緒之緒也、又謂之大序、則對小序而言也、其爲體有二、一曰議論、二曰敍事、宋眞氏嘗分列于正宗之編、故今倣其例而辯之、其敍事又有正變二體、其題曰某序、曰序某、字或作序、或作敍、惟作者問、窺而命之、無異也、至唐柳氏又有序略之名、則其題稍變、而其文益簡矣、今取以附焉。②爾雅釋宮、東西牆謂之序と。注に、內外を序別する所以なりと。疏に、此は室前堂上の東廂西廂の牆を謂ふなりと。③禮記王制篇に、夏后氏養國老于東序、殷養庶老于西序と。注に、東序は大學にして、國中王宮の東に在り、西序は小學にして、西郊に在りと。又た同書明堂位に、夏后氏之序也と。又た孟子滕文公上篇に、設爲庠序學校、以教之、庠者、養也、校者、教也、序者、射也、夏曰校、殷曰序、周曰庠、學則三代共之、皆所以明人倫也。

【所所】（シショ）【訓】注に、所所、斫木聲と。說文に、所、伐木聲也。

【所生】（シセイ）【訓】父母なり。【出】詩經大雅文王篇に、夙興夜寐、無忝爾所生。

【所天】（シテン）【訓】①天は人の仰賴する義に取る。②臣が君を指していふ。③妻が夫を指していふ。④友人を指していふ。【出】①後漢書梁竦傳に、昧死自陳、所天又殞と。②潘岳の寡婦賦序に、適人而所天又殞と。又た李白の去婦詞に、十五許嫁君、二十移所天。③吳質の書に、所天優游藝苑之場。

【所由】（シユイウ）【訓】①取次の官吏をいふ。【出】唐稗宗紀胡注に、所由、猶掌官物之吏也、事必經由其手、故謂之所由。

と。又た同書敎宗紀の注に、唐人謂府縣官爲所由官と。又た同書僖宗紀の注に、所由、謂倉督租稅之吏卒、又曰、所由、謂捕盜官吏、又た同書睿文帝紀の注に、所由、猶言所主也。

【所子】（シシ）【訓】漢書賈誼注に、所子、言養弟子、以爲子。

【所領】（シリヤウ）【訓】領收する地。【出】北魏賦琛傳に、邊外小經所領、不過百戶。

【所在】（シザイ）【訓】所々といふこと。【出】莊子に、敢問、舍所在と。又た後漢書陳蕃傳に、致令赤子爲害、豈非所在貪虐使其然乎。

【所望】（シマウ）【訓】企望する所といふこと。【出】杜陽雜編に、李泌曰、祿位茅土、皆非所望。

【所爲】（シヰ）【訓】動作をいふ。【出】莊子逸文篇に、世俗之所爲也。

【所作】（シサク）【訓】前條に同じ。【出】新婆娑論に、欲有所作、皆先思惱。

【所行】（シギヤウ）【訓】所爲に同じ。【出】法苑珠林に、所行惡事。

【所化】（シケ）【訓】佛法に歸依したる者をいふ。【出】正法念經に、所化衆生。

【所用】（シヨウ）【訓】俗にツマル所といふ義なり。【出】法苑義林章に、所說法者、所詮義也、名句字者、能詮文也。

【所願成就】（シグワンジヤウシユウ）【訓】願ふ所の事の成就するをいふ。【出】正法念經の語。

杵

【杵臼】（シヨキウ）　[和訓]ウスとキネ。[出典]事物紀原に、桓譚新論云、宓犧制杵臼、世本乃云、雍父作春杵臼、呂氏春秋曰、赤冀作杵臼、皇覽帝王世紀曰、黄帝内傳曰、帝既斬蚩尤、因掘杵臼、易繫辭曰、神農氏沒、黄帝堯舜氏作、斷木爲杵、掘地爲臼、臼杵之利、萬民以濟、蓋取諸小過、此蓋杵臼之始也、唐韻作鑊父作杵臼。

【杵臼之交】（シヨキウノマジハリ）　[意義]雷人の交際をいふ。[出典]晉書管寧傳に、後漢公孫穆來遊大學、無資糧、乃變服客傭、爲吳祐賃舂、與語大驚、遂共定交於舂春之閒。

【沮洳】（シヨジヨ）　[意義]漸濕なり、卽ちヌカルミの地をいふ。[出典]詩經魏風汾沮洳篇に、彼汾沮洳、言采其莫。

【胥靡】（シヨビ）　[意義]刑徒なり、胥は相なり、靡は繫なり、鐵鎖を以て相聯繫するをいふ。一說に、漢書楚元王傳の注に、靡は隨なり、古者相隨ふて坐する輕刑の名なりと。[出典]史記殷紀に、說爲胥靡、築傅險。說は傅說なり。

【胥吏】（シヨリ）　[意義]市の役人なり。[出典]周禮の鄉注に、胥吏肆長、市中給繇役者と。又た唐書車服志に、胥吏商賈之妻老者乘皂葉車。[類聚]前條に同じ。[出典]周禮に、治官之屬、府史胥徒。

【胥徒】（シヨイ）　[意義]諸侯相會合し、約束を申ねて、相命じて、血を歃りて盟ふことをいふ。[出典]春秋桓公三年に、夏、齊侯衛侯胥命于蒲と。又た公羊傳に、胥命、相命也、何言乎相命、近正也、古者不

書

【書】（シヨ）　[意義]㊀書經なり、古は單に書といひ、或は尚書といふ、後世經の字を加へて書經と呼びしなり。[出典]㊀文體明辯に、按、綱內篇、而此類復稱書者、則別以議論筆之、李翺有復性・平賦等書、而平賦書、法制精詳、議論正大、有天下者、誠能推其說而行之、致治可期矣、故特採之。以爲一體。㊁周禮地官大司徒に、六藝、禮樂射御書數と。注に、書は六書の品と。又た史記項羽紀に、書足以記姓名。㊂論語爲政篇に、子曰、書云、孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政と。又た孟子盡心下篇に、盡信書不如無書。

【書口】（シヨコウ）　[意義]書物の紙の兩面の折りたる處。[出典]古今說苑に、釘書十約齊線、要看書口黑縫、前後百餘葉、只如一葉、勿得或上或下。

【書腦】（シヨナウ）　[意義]書物の紙の左右兩端の絲に綴るべき所をいふ。[出典]古今說苑に、書上下天地頭及書腦毛邊、裝放寬展、以潤且長、爲貴、勿令食帶紙、以致短狹。

【書牘】（シヨトク）　[意義]手紙なり。[出典]史記何叔傳に、漢遣單于書牘、以尺一寸。

【書簡】（シヨカン）　[意義]手紙なり。[出典]韓非子に、無青簡之文。

【書翰】（シヨカン）　[意義]前條に同じ。[出典]文心雕龍に、符者孚也、徵召防僞事資中孚、三代玉璵、漢世金竹、末代從省、易以書翰矣と。又た宋書王弘傳に、書翰儀體。

【書幃】（シヨヰ）　[意義]書齋の入口に帷帳を垂るを いふ。[出典]周邦彥の詩に、簽度破窠、偸入書幃。

【書帷】（シヨヰ）　[意義]寒窗のとばりをいふ。[出典]錢起の詩に、遠軸入書帷と。又た白居易の詩に、夜雪有佳趣、幽人出書帷。

【書丹】（シヨタン）　[意義]朱砂にて石に書するなり。[出典]隸釋に、石經、察邕自書丹、使工鐫刻と。又た姜堯章云、筆得、墨則拙、得朱則肥、故書丹尤以復爲奇、而圓熟美潤有餘、遒勁老古當不足、朱使然也。[類聚]大戴禮武王踐祚篇に、武王踐祚三日、召師商父而問焉曰、黄帝顓帝之道存乎、曰在丹書と、この丹書は、書名なれど、本と丹を以て書せるによりて名けたるなり。

【書案】（シヨアン）　[意義]學問の机なり。[出典]臧榮緒に、陽僞勝方閣戰、至說天下樂、終日在書案。

【書林】（シヨリン）　[意義]多くの書籍といふこと。[出典]揚雄の長楊賦に、今朝廷純仁、遵道興禮、并包書林、聖風雲蔚、英華沈浮、洋溢八區、普天所覆、莫不沾潤。

【書舖】（シヨホ）　[意義]書籍を販賣する店舗なり。[出典]張籍の送裴尹詩に、得錢只了買書舖、僧宅常時事樂棋。

【書肆】（シヨシ）　[意義]前條を見よ。[出典]法言吾子篇に、好書而不要諸仲尼、書肆也、好說而不要諸仲尼、說鈴也と。又た朱熹の建陽縣學藏書記に、讀聖賢之書、師不

通于心、不有于身、猶不免爲書肆。

【書籍】（シヨセキ）　[意義]書册に同じ。[出典]後漢書蔡邕志土梁傳に、吾家書籍文章、盡當與之。

【書物】（シヨブツ）　[意義]書記したる物をいふ。[出典]後漢書藏封傳に、時同學石敬平溫病卒、封樂視殯斂以所齎糧市小棺送喪、到家更斂、見敬平行時書物皆在棺中、乃大異之。

【書卷】（シヨクワン）　[意義]書籍なり、古は卷軸（マキモノ）としたり、故に卷の字を用ふ。[出典]后山談叢に、古書皆卷、而唐始有葉子、今謂書册、是也と。又た天祿志餘に、今書籍必數以一、蓋存一卷之名耳、古人藏書作卷軸、鄭俠亦抑三萬軸、是也、其後以卷簿帙、以便簡閱、摺とは折本のことなり。

【書契】（シヨケイ）　[意義]木を刻し其側に書して以て事を約するものをいふ。[出典]易經繫辭下傳に、上古結繩而治、聖人易之以書契と。又た孔安國の尚書序に、古者伏犧氏之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政。

【書院】（シヨヰン）　[意義]唐以來學校を稱する語なり。[出典]陸龜蒙筆に、書院之名、起唐玄宗時、麗正書院・集賢書院、皆建于朝、爲修書之地、非士子肄業之所也、宋時有富人曹誠、捐資建立、事聞、京師、詔賜名應天書院、以誠爲助教、從此有四大書院之名、睢陽・石鼓・嶽麓・白鹿洞是也、太平興國元年、以江州白鹿洞主明起爲學術義補、選五品以上子孫工書者爲書手。

【書社】（シヨシヤ）　[意義]二十五家を一里とし、里に一社を立て、戶口と田穀とを書して之を藏む、故に二十五家の地を書社と爲す。[出典]左傳に、與衛地自濟以西、魯鉏吝以南書社五百と。又た史記孔子世家に、楚昭王將以書社地、封孔子。

【書劍】（シヨケン）　[意義]書物と劍となり、書生の生涯を形容するに用ふ。[出典]陳子昂の送別出塞詩に、平生聞高義、書劍百夫雄。

【書種】（シヨシユ）　[意義]學問をする人をいふ。[出典]陸游の緒訓に、子弟才分有限、無如之何、但書種不絕足矣。

【書齋】（シヨサイ）　[意義]讀書をする爲めの離れ座敷なり。[出典]歐陽修の東齋記に、或曰、齋謂夫閑居平心以養思慮、若於此而齋戒也、故曰齋。

【書篋】（シヨケフ）　[意義]書を藏むる器なり、徒らに書を讀みて道理に達せざる者に喩ふ。[出典]晉書劉柳傳に、劉柳爲僕射時、右丞傅迪廣讀書、而不解其義、柳讀老子而已、迪每輕柳、柳曰、卿讀書而無所解、可謂書篋と。又た圓機活法に、李邕詩、眞古今、然不能屬文、故時號曰書篋。

【書記】（シヨキ）　[意義]事物紀原に、漢書百官志曰、王公及大將幕府皆有記室、掌章表書記、續事始引魏志、太祖以陳琳阮瑀爲記室、文帝與吳質書稱、孔璋章表殊健、元瑜書記翩翩、宋江夏王乃以丘源爲掌書記、而未爲職名、唐開元元年、勅、節度置掌書記、自後藩侯得自奏請也、又魏志建安中、曹洪欲使阮瑀掌書記。

【書人】（シヨジン）　[意義]書家をいふ。[出典]班樓記に、劉秦妹善臨寫、右軍蘭亭及西安帖、足參眞、奈亦當時翰林書人也。[出典]通鑑書記の人をいふ。

【書佐】（シヨサ）　宋紀に、書佐荀宗道。[類聚]前條に同じ。[出典]唐書に、選書佐以上子孫工書者爲書手。

【書手】（シヨシユ）　五品以上子孫工書者爲書手、報應記宋衍云云、蓋唐時已有此名と。又た大

【書厨】（シヨチユウ）　[意義]傳に、讀易三年、不解文義、欲擬宋書、不成、王僧虔之曰、陸公書厨也。

【書櫃】（シヨキ）　[意義]主安石の勸學文に、有即起書櫃、無即登書樓。

【書樞】（ショコフ）　出典 漢書 ほんづゝみをいふ。出典 漢書 張敞傳 韻に、樞籍書具、漢杜篤有書樞賦。

【書判】（ショハン）　出典 漢書 書は楷法のすぐれたるをいふ。出典 漢書 判は文理の優りたるをいふ。出典 漢書 身言書判を見よ。

【書圃】（ショホ）　出典 漢書 書物の多くある處をいふ。出典 漢書 司馬相如の上林賦に、修容乎礒圃、翱翔乎書圃。

【書香】（ショカウ）　出典 漢書 學問の香氣として、學問をなす氣風あるものをいふ。出典 漢書 傅家實に、無論書香子弟與村童、因材教導。

【書聖】（ショセイ）　出典 漢書 能書を褒めていふ詞。出典 漢書 梁書王志傳に、志善草隸、當時以爲楷法、齊游擊將軍徐希秀、赤壁能書、嘗謂志爲書聖。

【書論】（ショロン）　出典 漢書 書法の論なり。出典 漢書 杜荀鶴 朝士致書論の詩に、孤望未公將卷讀、不求朝士致書論。

【書經】（ショキヤウ）　出典 漢書 書名。出典 漢書 此書は虞夏商周四代の政道を記せるものを孔子が刪定せられたるなり、五經及び十三經の一に列す、もと尚書と云ひしが、後世に至り書經と呼べり、其虞舜の時の記錄を虞書と曰ひ、夏の世のを夏書と曰ひ、商の世のを商書と曰ひ、周の世のみ周書と曰ひ、もと百篇ありしものなるが、秦火に逢ひて大に散佚せり、漢の世に及び、秦の博士たりし伏勝なる者此書を諳誦せるを以て學者に傳授したり、武帝の時に孔子の舊宅を壞ちたりしに、壁中より尚書若干篇を得たり、此書は科斗を以て上代の文字にて書したる故に古文と曰ひ、伏勝の傳ふるものは今代の文字にて書ける故に今文と曰ふ、而るに古文尚書久しく世に散亡せしを東晉の梅賾が更に僞作したり、今傳ふるものは古文今文合せて五十八篇あり、五經に列したるものは、宋の蔡沈の注、書經集傳六卷なり。十三經の一なるは、漢の孔安國傳僞作、唐の孔穎達疏、尚書正義二十卷是なり。書經の古今文に就いて、漢儒は各師門に之を研究せり、今その流派を示せば左の如し。

●漢儒古文尚書授受圖

孔安國—都尉朝—庸生—故常—徐敖—王璜
　　—倪寬（寬又治ニ今文ニ）—司馬璜
　　—塗惲—桑欽或作乘欽
　　—賈徵—賈逵—許慎—馬融
　　　　　　　　—張恭祖—鄭玄

孔僖、尹敏、庾尚、孔奮、周磐、張楷、劉祐、孫期、右諸人未詳授受次第

●漢儒今文尚書授受圖

伏生—張生—夏侯都尉—夏侯始昌—夏侯勝
　　—歐陽生（寬又治ニ古文ニ）—歐陽世—子—孫—歐陽高（歐陽氏の學）
　　—歐陽地餘—歐陽政—子—歐陽歙—曹曾—曹祉
　　—林尊—平當—鮑宣—朱普—桓榮
　　—陳翁生—殷崇—龔勝
　　—夏侯建—張山拊
　　—張又從五經諸儒問（小夏侯ノ學）—孔霸—孔光
　　—假倉—秦恭—馮賓—張無故—唐尊—趙玄
　　—季尊—總寬仲
　　—周堪—許商—辛晞
　　—吳章—王吉—炎欽
　　—唐林

歷代古文家

（梁）姚方興　費甝　後梁　巢猗　顧彪　陰　蔡大寶
唐　劉焯　劉炫　孔穎達　陸德明　衛包
清　毛奇齡　劉逢祿

その僞作たることを看破して、攻擊せしは、左の諸儒なり。

宋　吳棫（著書稗傳十三卷今亡）　宋　朱熹　元　吳澄
明　梅鷟（著尚書考異）　清　閻若璩（著古文尚書疏證）

今日にては、議論一定して、古文の僞書たるは既に明白となれり。

尚書百篇の目を擧ぐれば左の如し。

堯典、舜典、汨作、九共（九篇）、槀飫、大禹謨、皐陶謨、益稷（以上虞書）禹貢、甘誓、五子之歌、胤征（以上夏書）帝告、釐沃、湯征、汝鳩、汝方、湯誓、夏社、疑至、臣扈、典寶、仲虺之誥、湯誥、明居、伊訓、肆命、徂后、太甲（三篇）、咸有一德、沃丁、咸乂（四篇）、伊陟、原命、仲丁、河亶甲、祖乙、盤庚（三篇）、說命（三篇）高宗肜日、高宗之訓、西伯戡黎、微子（以上商書）泰誓（三篇）、牧誓、武成、洪範、分器、旅獒、旅巢命、金縢、大誥、微子之命、歸禾、嘉禾、康誥、酒誥、梓材、召誥、洛誥、多士、無逸、君奭、蔡仲之命、成王政、將蒲姑、多方、立政、周官、君陳、顧命、康王之誥、畢命、君牙、冏命、呂刑、文侯之命、費誓、秦誓（以上周書）。

【校ル書】（カウ）　カの部校（カウ）書を見よ。

【攤ル書】（シ）　出典 書 書物を開くことなり。出典 書 世說に、王戎嘗牀攤ル書。

【曝ル書】（シ）　出典 書 書籍の曝しなり。出典 書 四民月令に、七月七日曝ル經書及衣裳、不ル蠹。

【好ル書】（シ）　出典 書 書物を讀むことを好むなり。出典 書 法言吾子篇に、好ル書而不ル要ニ諸仲尼、書肆也、好ル說而不ル見ニ諸仲尼、說鈴也。

【焚ル書】（シ）　出典 書 秦の始皇が天下の詩書及百家の話を焚滅したるをいふ。出典 書 史記秦始皇紀に、臣（李斯）請史官非秦記、皆燒之、非博士官所ル職、天下敢有ル藏詩書百家語者、悉詣ニ守尉ニ雜燒之、有ル敢偶ニ語詩書棄市、以古非ニ今者族、吏見知不舉者與同罪、令下三十日不ル燒、黥爲ニ城旦、所ル不ル去者、醫藥卜筮種樹之書、出典 書 韓非子喩老篇に、王壽負ル書而行、見ニ徐馮於周塗、馮曰、事者爲也、爲生於時、知者無常事、書者、言也、言生ニ於知、知者不ル藏、藏、今子何猶負ル之而行、於是王壽因焚ニ其書而側之、故知者不ル以ニ言談ニ教ニ、而懸者不ル以ニ藏書篋、此世之所ル過也、而王壽復之、是學不ル學、故曰、學ニ不ル學、復過衆人之所ニ過也と、又た淮南子道應訓に見えたり。高誘注に、王壽、古好ル書之人。

【書畫船】（シ）　出典 書 宋の米元章の遊船をいふ。出典 書 錦字箋に、米元章每ニ出遊、以ニ船載ル書畫、自隨、人皆譏ル之曰、是米家書畫船也。

【書目答問】（シ）　出典 書 書名。出典 書 此書は清の張之洞の撰に係る、卷を分つこと四、經史子集の四部とし、其の中また子目を分ちて數十門とし、各種の書名其下に錄し、各書に就て、其の卷數と著者とを記し、且つ則本の善惡を擧する等、一朝著述諸家姓名略を揭げたり。

【書心畫也】（シ）　出典 書 文字は、書者の精神を寫し出だすものなり、故に心畫といふ。出典 書 揚子法言問神篇に、言、心聲也、書心畫也、聲畫形、君子小人見矣。

【書不ル盡ル言】（シ）　出典 書 文字にては十分に人の言を表はすことは出來ざるをいふ。出典 書 易繫辭上傳に、書不ル盡ル言、言不ル盡ル意。

【書不ル借ル人】（シ）　出典 書 書冊を大切にして人に貸さゞるをいふ。出典 書 五雜俎に、胡元瑞書、蓄得ニ之金華虞參政者、度藏書數萬卷、貯之一樓、在池中央、小木爲ニ杓、夜則去之、杪、其門、曰、樓不ル延客、書不ル借ル人。

【借ル書一癡】（シ）　出典 書 癡は酒器、古人書の借還に酒一甕を送りたりといふ。出典 書 邵氏聞見錄に、俗語、借ル書與ル人爲ニ一癡、還ル書爲ニ一癡、管癡借ル書還書理也、何癡之云、後見ニ王欒道與ニ錢穆四書、云古語借ル書一癡、還ル書一甕、乃知ニ今人訛以ニ癡爲ニ癡也。

【讀ル書亡ル羊】（シ）　出典 書 心、外に驕せて道を失ひたる喩なり。出典 書 莊子駢拇篇に、臧與ニ穀二人相與牧ニ羊、而俱亡ニ其羊、問ニ臧奚事、則挾ニ策讀ル書、問ニ穀奚事、則博塞以遊、二人者事業不ル同、其於亡

羊均也。

【校書如掃塵】 出典書籍の文字は幾回校合するも、猶ほ誤謬あるをいふ。出典夢溪筆談に、宋宣獻博學喜藏異書、皆手自仇校、常云、校書如掃塵、一面掃則一面生、每三四校、猶有魚魯。

【學書如泝急流】 出典書を學ぶには、全力を込めて毫も怠斷すべからざるをいふ。出典蘇軾曰く、學書如泝急流、用盡氣力、不能舊處。

【讀書不如寫書】 十(ジフ)讀不如一寫を見よ。

【書足記名姓而已】 出典書は字を識し、深く學ぶに足らざるをいふ。出典史記項羽紀に、籍(項羽の名)曰、書足以記名姓而已、劍一人敵、不足學、學萬人敵、於是項梁乃教籍兵法。出典漢書項籍傳には、名姓を姓名に作れり。

【書冊埋頭何日了】 出典宋人の詩の句。出典朱熹の出山道中口占に、川原紅綠一時新、暮雨朝晴更可人、書冊埋頭何日了、不如拋卻去尋春。

【書當快意讀易盡】 出典宋人の詩の句。出典陳師道の得意の詩に、書當快意讀易盡、客有可人期不來、世事相違每如此、好讀百歲幾回開。

【以書御者不盡馬情】 出典何事にに就きて研究せねば役に立たぬといふこと。出典戰國趙策に、武靈王曰、諺曰、以書御者不盡馬之情、以古制今者、不達事之變、故循法之功、不足以高世、法古之學、不足以制今。

【讀書破萬卷下筆有如神】 フの部雜

【讀書破萬卷不讀律致君堯舜知無術】 トの部讀(トク)書萬卷不讀律致君堯舜知無術を見よ。

芻疽徐

【詢芻蕘】 スの部芻蕘スウ蕘を見よ。

【吮疽】 出典疽の膿(ウミ)を吸ふをいふ、疽は癰の類。出典史記吳起傳に、卒有病疽者、起爲吮之。

【徐徐】 出典ユル〳〵と進む貌なり、よりて疑懼の義とす。出典易經困卦に、九四、來徐徐、困于金車、吝有終と。王弼注に、徐徐者、疑懼之辭也。

【徐行後長者】 出典ルと歩みて年少者がユルルと歩みて年長者に出る〳〵をいふ。出典孟子告子下篇に、徐行後長者、謂之弟、疾行先長者、謂之不弟、徐行者豈人所不能哉、所不爲也、堯舜之道孝弟而已矣。

【不爲徐凝洗惡詩】 蘇軾の詩の句。出典ウの部疑(ヲタカフ)是銀河落九天を見よ。

【恕而行之】 出典思ひ遣り深き心を以て事を行ふなり。出典左傳隱公十一年に、恕而行之、德之則也、禮之經也。出典孟子盡心上篇に、强恕而行、求仁莫近焉。

一處

【處女】 出典未だ嫁せざる女子なり。處は家處の義にて家に居ることなり。出典孫子九地篇に、始如處女、敵人開戶、後如脫兎、敵不及拒と。又た蘇軾の詩に、處花如脫兎、敵不及拒と。

【處子】 出典前條に同じ。出典孟子告子下篇に、踰東家牆而摟其處子、則得妻、不摟則不得妻、則將摟之乎と。又た莊子逍遙遊篇に、藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若冰雪、淖約若處子。

【處士】 出典士、未だ仕へざる者をいふ。出典孟子滕文公下篇に、諸侯放恣、處士橫議と。又た事物紀原に、史記、伊尹於湯、致於王道、曰伊尹處士、湯迎之、五反然後往、此名處士之始也、宋朝有沖晦處士、李退夫在慶曆皇祐之間也、林希兩朝寶訓曰、康定中賜興化徐復號沖晦處士、於南高僧號安素處士。

【處守】 出典居守に同じ留主居の役人なり。出典孟子告子下篇に、季任爲任處守。

【處所】 出典居所といふが如し。出典史記晉世家に、四蛇各入其宇、一蛇獨緦、終不見處所。出典十八史略に、處の字を重ねて、處處に作るは誤りなり。

【處置】 出典其れ相當の取り扱をすること。出典舊唐書王鑒后傳に、高宗王氏、其因所關、實、然曰、朕即有處置。

【處分】 出典前條に同じ。出典古焦仲卿妻の詩に、處分適兄意、那得自任專。

【處處春風枳殼花】 出典唐人の詩の句。出典雍陶の城西訪友人別墅に、澄水橋西小路斜、日高猶未到君家、村園門巷多相似、處處春風枳殼花。

【麻】 出典妻をいふ。出典孟子盡心上篇に、王子有其母死、其傅爲之請、數月之喪、と。趙注に、王之麻夫人死、迫於道夫人、不得行其喪、親之歿也。又た唐書王世充傳に、世充祖死、其妻與朝城人王摩訶麻姿。

【麻官】 出典朝廷の百官をいふ。出典晉經卓陶謨篇に、無曠庶官。

【麻徵】 出典多くのシルシ。出典書經洪範篇に、八、庶徵、曰雨、曰暘、曰燠、曰寒、曰風、曰時。

【麻政】 出典多くの政事をいふ。出典易以明庶政、无咎、敢折獄。

【麻子】 出典一官名、東宮職をいふ。二妾腹の子をいふ。出典一事物紀原に、禮記燕義曰、古者周天子之官有麻子、周禮夏官司馬之屬謂之諸子、樂記中麻子詹事員、漢因之、晉以爲東宮官、晉書鄭默爲中麻子、朝官以爲太子官、是也、陪分左右、通典曰、品官命數篇、漢有太子麻子、魏有太子中麻子、則非晉以爲東宮官也。三次條及び麻學公子を見よ。

【麻駿】 出典安腹の子をいふ。出典類書非一編長一也。

【麻幾】 出典近似の辭、チカシと訓ず。出典易經繫辭下傳に、顏氏之子、其殆庶幾乎と。又た詩經小雅車舝篇に、雖無旨酒、式飲庶幾、雖無嘉殽、式食庶幾。

【麻學公子】 出典安腹の公子なり。出典史記商君傳に、商君者、衛之麻學公子也。

【麻績咸熙】 出典政事が能く行き屆き衆功皆廣まるをいふ。出典書經堯典篇に、允釐百工、庶績咸熙と。百工は百官なり。

【麻女叫天】 出典天を呼んで寃罪を訴ふるなり、麻女は麻駿の女なり。出典淮南子覽冥訓に、麻女叫天、雷電下擊、景公臺陨、支體傷折、海水大出と。高注に、麻駿之女、齊之嘉幾、無子不孝、事姑謹敬、姑憐男有女、女利母財、令母嫁之、嫁益不肖、女殺母以誣、嫁不能自明、寃結呼天、云云。

【採麻子之春華忘家丞之秋實】 出典麻學の子の文華の美なるを愛して、而して、家令の實務に老けたるを忘るゝをいふ。出典通鑑に、魏公操擊袁紹、留少子侯植守鄴、操嘗諸子、高選官屬、以邢顒爲植家丞、顒防閑以禮、無所屈撓、由是不合、麻子劉植美於文辭、植親愛之、植以書諫植曰、君侯採麻子之春華、忘家丞之秋實、爲上招謗、其罪不小、願實懷之。

一黍

【黍稷】 出典キビとアハとなり。出典書經君陳篇に、黍稷非馨、明德惟馨。

【黍離之嘆】 出典國家が亡びて其の城郭宮室、皆黍となり、黍の離々たるを嘆ずるなり。出典詩經王風黍離篇に、彼黍離離、彼稷苗、行邁靡靡、中心搖搖、知我者、謂我心憂、不知我者、謂我心何求、悠悠蒼天、此何人哉。

【以黍雪桃】 出典キビを以て桃を擦りて消むるなり、實踐の分を知らざる喩へ。出典韓非子外儲說左下に、孔子御魯哀公、公賜之桃與黍、仲尼先飯黍、後啗桃、公曰、黍以雪桃也、對曰、夫黍五穀之長也、果有六、而桃爲下、丘聞、君子以踐雪貴、不聞以貴雪踐。

【不失黍粢】 出典少しの間遠ひもなきをいふ。黍も粢も穀の名にて、極めて少量なり、十黍を粢とし、十粢を銖とす。出典漢書律曆志に、度長短者、不失毫釐、量多少者、不失圭撮、權輕重者、不失黍粢。

一暑

【清清】 出典一盛んなる貌。二風の形容。三水泉の形容。出典柳宗元の湘源二妃廟碑に、其葉清清。四柳宗元の詩經唐風杕杜篇に、其葉清清。五振鷺餘話に、蔡元長侍蔡太清樓、論曰、有石巖巖、有泉清清。

【暑雨】 出典夏の炎天に降る雨をいふ。出典書經君奭篇に、小民亦惟曰怨咨。

【暑鄰子】 暑氣の時に發する腫物、俗にアセボといふもの。出典 帝城景物略に、立秋日相戒不飲生水、曰呷秋頭水、生暑鄰子。

鉏

【鉏優蘇矜】 クハの柄。出典 韓詩は ホコの柄なり。出典 賈誼の過秦論に、鉏耰棘矜、不下於鉤戟長鎩。

四 署

【署長】 いふ。出典 史記馮唐傳に、唐以孝著、爲中郎署長、事文帝、帝輦過唐、曰、父老何自爲郎、家安在、唐具以實對。

鉏

五 緒

【緒餘】 用ゐたる殘餘といふこと。出典 莊子讓王篇に、道之眞以治身、其緒餘以爲國家、其土且以治天下。

【緒言】 論說の緒口なり。出典 莊子漁父篇に、孔子曰、曩者先生有緒言而去、幸聞咳唾之音、以卒相丘也。

【蔗境】 ヤの部漸（ヤウヤク）入に佳見を見よ。

六 蔗

七 諸

【諸夏】 夏は大なり、四方の夷狄に對して中國のことをいふ。顏師古曰く、諸夏は、中國の諸侯なり、夏は大なり、其の四夷より大なるをいふと。クの部華（クワ）夏を見よ。出典 論語八佾篇に、子曰、夷狄之有君、不如諸夏之無。と。又た漢書刑法志に、內尊天子、以安諸夏。

【諸侯】 爵の名、公侯伯子男の一、と。孔傳に、侯、候也、爲王者斥候。出典 書經禹貢篇に、三百里諸侯

【諸父】 父の兄弟、即ち伯父叔父季父を合ゼて諸父といふ。出典 詩經小雅伐木篇に、既有肥羜、以速諸父。と。又た禮記文王世子篇に、諸父守貴宮貴室。

伯父
叔父
季父
我

【諸家】 諸種の家なり。出典 謙王經に、諸家內外。

【諸士】 多くの士をいふ。出典 史記魏其武安傳に、諸士在己之左。

【諸人】 諸種の人なり。又た多くの人なり。出典 梁書劉顯傳に、諸人莫能識。

【諸色】 諸種の物なり。出典 太平廣記に、盛鈞諸色假借什物。

【諸事】 世間一般の諸の事務をいふ。出典 史記李斯傳に、未必盡通諸事。

【諸方】 各地方をいふ。出典 晉書何劭傳に、每諸方貢獻。

【諸役】 租稅又は人夫役に出ることをいふ。出典 唐書食貨志に、耗七者諸役皆免。

【諸賢】 グレたる人。出典 謝靈運の撰魏太子鄴中集詩序に、今昆弟友朋、二三諸賢、共盡之矣。

【諸孤】 多くの孤兒をいふ。出典 禮記月令篇に、羣幼少、存諸孤、（孤部藐バク）諸孤を參看せよ）

【諸生】 學生をいふ、通俗編に云、諸生は猶ほ諸侯のごとし、一人と雖、亦諸と云ふことを得。出典 史記曹相國世家に、盡召長老諸生、問所安集百姓。

【諸許】 し、即ち許多なり。出典 世說容止篇に、形貌既偉、雅懷有樂、保而用之、可作諸許物也。

【諸葛巾】 諸葛亮の被りし巾なり。出典 詩林に、諸葛武侯與宣王在渭濱、將戰、宣王戎衣莅事、使人視武侯乘輿、葛巾毛扇、指揮三軍、各隨其進止、宣王聞而歎曰、可謂名士矣。

【諸葛菜】 菜の名、蕪（カブラ）に似たるもの。出典 事物紀原に、今所在有菜、野生類蔓菁、葉厚多飯差小、子如蘿蔔、復不先深、花四出兩色紫、人謂之諸葛菜、劉禹錫嘉話曰、諸葛所止、令軍士種蔓菁、何常謂云、菜不是取其種出可生啗、一也、葉舒可煮食、二也、久居隱以滋長、三也、葉去不憎、四也、回則易尋而採、五也、冬則有根可斬食、六也、此蔬其利不亦博乎、禹錫曰、信矣、蜀人呼蔓菁爲諸葛菜。

【諸行無常】 人生の常なきをいふ。出典 傳燈錄に、開時世尊至拘尸那城、告諸大衆、吾今背痛、欲入涅槃、卽往熙連河側、娑羅雙樹下、右脇累足、泊然寂滅、復起、指偈母說法、並說無常偈、曰、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂。

【諸子百家】 一切の子類をいふ、百家とは成數を擧げたるなり。出典 漢書藝文志の顏注に、諸子百六十九家、言百家舉成數也、又た史記始皇紀に、天下敢藏詩書百家語者、悉詣守尉雜燒之。

【諸門洞開】 宋の太祖大內を造りたる時の故事、宮城諸門のほがらかに開けたるは、我が心の豁然と開通して隱處なきが如しとなり、以て人の耳目聰明、心腹の明かなるに喩ふ。出典 宋三朝政錄に、太祖修大內、既成、令洞開諸門、無有禱祭、曰、此如我心、小有邪曲、人皆見之。

【九合諸侯】 齊の桓公が九度諸侯を會せしをいふ。出典 論語憲問篇に、子曰、桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也、如其仁、如其仁。と。又た小學紺珠に、九合會鄄、又會鄄、會鄭、又會幽、又會幽、會檉、會貫、會首戴、會寧母、會葵丘。出典 九合、左傳に、糾合に作る、僖公二十六年に、桓公是以糾合諸侯。と。又た論語朱注に、糾は督なり、古字通用と。

【諸公袞袞登臺省】 唐人の詩の句。出典 杜甫の詩、時歐に、諸公袞袞登臺省、廣文先生官獨冷、甲第紛紛厭粱肉、廣文先生飯不足。（全文古文眞寶前集に見ゆ）

【諸事不決問疵面】 事の決せざるものあらば、疵面の趙孟にたづねよとなり。出典 蒙求舊注に、晉趙孟長子旃、爲尙書令史、善濟歌、而有疵點、時人曰、諸事不決、問疵面。

八 顚

【顚憂】 經小雅正月篇に、顚憂以痒。出典 詩

九 升

【升恆】 注の月の昇り出るなり、人の長壽を祝する語なり。出典 テの部天保九如見よ。

【升平】 太平の世といふこと、穀物砂りて升斗の價平なりとの義に。出典 品字箋に、升平猶言成平、升平之價著曰、升平、又昇升也、日漸上升也、昇平、嗾日當空、六字昇平矣。

【升殿】 天子の宮殿に升るをいふ。出典 唐書禮樂志に、應升殿者

【升騰】 登るをいふ。出典 後漢書左雄傳論、東西階。二字皆ノボルと訓ず、天に

【升進】 官位ののぼりすゝむこと。出典 後漢書王符傳に、符獨耿介

【升遐】 官位ののぼりすゝむこと。出典 博雅に、合十日升、升四日遐。

【升桭】 といひ、升の四倍を桭といふ。出典 通鑒梁武紀に、先帝升遐。

【升進】 天子の崩ぜらるゝをいふ。出典 博雅に、合十日升、升四日遐。

【升量ノ石】 升は少量、石は多量なり、故に量る能はず。因て愚人が賢人の心を推測すること能はざるに喩ふ。出典 淮南子に、使桀度堯、是猶以升量石也。

【升龍降龍】 上り龍と下り龍とを、旌旗等の模樣に用ふ。出典 周禮大行人に、載大旆日月升龍降龍。

仍

【仍仍】 精神調に、仍仍然知益叡之足羞也。出典 淮南子

冗

【冗官】 剩なり。續師古曰く、散官の如しと。出典 漢書申屠嘉傳に、上曰、錯所穿非眞廟垣、乃外堧垣、故冗官居其中、錯無罪。と。又た品字箋に、無事備員曰冗官。

【冗長】 ダ長はアマルなり。出典 陸機の文賦に、要辭趨而理舉、故無取乎冗長。

【冗從】 休職にして王族に從ひ居るもの。出典 史記枚乘傳に、與冗從爭。

【冗兵】 兵卒のむだものをいふ、冗は剩に同じ、役に立たぬあまりものなり。出典 正字通に、冗、散也、雜也、今無事備員曰冗官、蘇軾曰、爲政在去三冗、冗官不可不去、冗兵不可不汰、冗費不可不節。

【冗官】 志を得ざる貌。出典 淮南子

六　丞

【仍孫】ジョウソン　かの部雲孫を見よ。

【丞相】ジョウシヤウ　助くるなり、君主の意を承け助くる義なり。出典史記秦紀に、悼武王二年、初置丞相とと。又た漢書百官公卿表に、丞相秦官、金印紫綬、掌丞天子、助理萬機。

【與丞相歎】ジョウ　蘇叔黨の鼠殘筆の詩に、太倉失陳紅、狡穴得餘腐、既與丞相歎、又發延尉怒、磔肉餧餓狐、分糧雖霜鬼、揮槊刀梨俊、落紙龍蛇驚、物理未易詰、時來即所遇、穿墻何卑微、託此得佳譽。出典史記李斯傳に、李斯者、楚上蔡人也、年少時、爲郡小吏、見吏舍廁中鼠食不潔、近人犬、數驚而恐之、斯入倉、觀倉中鼠食積粟、居大廡之下、不見人犬之憂、於是李斯乃歎曰、人之賢不肖、譬如鼠矣、在所自處耳、乃從荀卿學帝王之術。

【松鎖】ショウサイ　越亭の詩に、松鎖謂宮商、鶯憑勢翔迴。

【松濤】ショウトウ　漫題の詩に、軸長畫閉來喉、茗、下簾危坐聽松濤。

【松柏】ショウハク　詩經小雅天保篇に、如松柏之茂と。又た論語子罕篇に、知松柏之後凋。

【松竹】ショウチク　史張沖傳に、忠貫吳天、操逾松竹。

【松蕈】ショウジン　解に、松蕈生松陰、采無時、凡物松出、無不可愛者。

【松菊】ショウキク　せし植物なり。出典陶淵明の歸去來辭に、三徑就荒、松菊猶存と。又た唐書韋表微傳に、授監察御史裏行、不樂曰、吾年五十、試鏡揵白、冒逆少年間、取二班一級、不見其昧也、將爲松菊主人、不愧淵明云云と。又た鶴山題跋に、南廂退翁、蘇文公之兄也、子孫多賢、其五葉曰叔平者、自號松菊老圃。

【松明】ショウメイ　に、戴石屏詩に、麥隴朝充食、松明夜當燈、此是山西本色語、深山老松心、有油者如蠟、山西人多以代燭、謂之松明、蘇不長風と。又た正字通即字下に、楊慎曰、漢人以松心爲炬、號曰松明、呼其炬之燼曰明篝、節書近即。又云、楊炬之燼曰即。見管子弟子職と。又た笑林に、唐昭宗時、有司貢、官油估貫不行、多有松明、擔寄楊升菴集、漢人以松心爲炬、號曰松明、蘇軾の詩に、更燃松炬照幽探。

【松江鱸】ショウコウロ　府鄞亭縣にあり）に產する鱸といふ魚なり。鱸は淡水魚なり、我邦にてスヾキと稱ずれど當らず。出典晉神記に、公嘗採笑、顧來貧日、今日高會、珍羞略備、所少者、吳松江鱸魚爲膾と。又た蘇軾の後赤壁賦に、客曰、今者薄暮、舉網得魚、巨口細鱗、狀如松江之鱸。

【松竹梅】ショウチクバイ　皆霜雪に耐ゆるを以て歲寒の三友と呼ぶ。出典金樂退食錄記に、五龍亭蓋爲太宗殿、創于明天順年、在太液池西、南向、後有草亭、賓松竹梅于上、曰歲寒、又た唐の李邕の題雪の詩に、對雪樂富酌、敲氷吸關烹、茶、醉眠呼、童民、食、笑題松竹梅花、サの部歲寒三友を參看せよ）

【松使者】ショウシヤ　卷一に、明皇御案器曰龍香劑、一日見器上有小道士、如蠅而行、上叱之、即呼爲蒼蠅、曰臣即器之精、黑松使者也、凡世人有文者、其器上皆有龍須十二、上觸之、乃以器分賜掌文官。

【服松實】ショウ　學ぶなり。出典呼仙傳に、崔侯好食松實、能飛行如走馬、其服者皆壽三百歲。

【松漢紀聞】ショウカンキブン　書名。出典此書一卷、續一卷にして、宋の洪皓の撰なり、金國の事迹を記す、蓋し洪皓、金に使して冷山に在りしときに作りしなり、冷山は唐の松漠都督府の地たり、故に之を名づけて松漢紀聞といふなり。

【松柏之茂】ショウハクノシゲ　松や柏（コノデガシ）の常に綠色を變ぜざるが如く、幾く久しく榮ふるをいふ。出典詩經小雅天保篇に、如松柏之茂、無不爾或承と。鄭箋に、如松柏之枝葉常茂盛、青青相承、無衰落也。

【松柏之操】ショウハクノ　松柏の嚴冬にも凋まざるが如き節操ある人をいふ。出典南史に、與松柏比操。

【松喬之壽】ショウ　樂に秀で、且つ長壽を保つをいふ。出典漢書王吉傳に、心有堯舜之志、則體有松喬之壽。

【松樹千年終是朽】　松は常綠樹なれど、千年の後には朽ちて枯れ果つとて、天下の物死せざるものなきをいへるなり。出典白居易の放言の詩に、泰山不要欺毫末、顏子無心羨壽彭、松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮、何須一醉消世常憂死、亦莫悲身漫厭世、生去死來都是幻、幻人哀樂繫何情。

【松柏之下其草不殖】　ものは、大なるものに勢力を奪はるゝをいふ。出典左傳襄公二十九年に、鄭行人子羽曰、是謂不宜、必代之昌、松柏之下、其草不殖。

【松柏之姿經霜猶茂】　ホの部蒲柳之姿を見よ。

【承引】ショウイン　出典魏書刑罰志に、或拷不承引、依證而科、或有私錄、强逼成罪。

【承平】ショウヘイ　承平、豪富吏民、皆數鉅萬。

【承知】ショウチ　出典漢書食貨志に、今累世承平、天下太平の世をつぎ受くるなり。出典承はなりて知得すること。其事を承知するをいふ。

七　承

【承認】ショウニン　出典承知、認諾の略語。出典諾史に、誤斷一此獄、宜早其不承認也。

【承服】ショウフク　出典罪人が其の罪にオツルこと。出典諾史に、送獄鞫勘及略不承服。

【承乏】ショウボウ　官に任ずるの謙辭なり、空乏を承けて之を補ふの意。出典左傳成公二年に、敢告不敏、摠官承乏。

【承塵】ショウヂン　居處の上に施して、塵土を承くる者。出典三輔決錄に、有、塵從承塵上、飛下几前。

【承露盤】ショウロバン　漢の武帝が建章宮に設けたる銅製の盤の名。出典漢書郊祀志に、式帝即位、其後又作柏梁銅柱、承露仙人掌之屬。顏注に、三輔故事云、建章宮承露盤高二十丈、大七圍、以銅爲之、上有仙人掌、承露和玉屑飲之。又た班固の西都賦に、抗仙掌以承露、擥雙立之金莖。

【昇平】ショウヘイ　升平を見よ。

【昇天】ショウテン　天へ上るなり。出典後漢書虞詡傳に、延初生時、其上有物若一匹練、遂上昇天。

【烝】ショウ　姦淫するをいふ。出典已れより尊分の上なる女子に、衛宣公烝於夷姜。杜注に、夷姜、宣公庶母也、上淫曰烝と。又た小爾雅廣義に、男女不以禮交、謂之淫、上淫曰烝、下淫曰報、旁淫曰通。

【烝烝】ショウショウ　㊀物の盛に作（オコル）る貌。㊁隨行の貌。㊂火氣の上行する貌。㊃進む貌。出典㊀爾雅釋訓に、烝烝遂遂、作也。㊁詩經魯頌泮水篇に、烝烝皇皇。㊂韓詩の食旬詩に、烝烝沸鼎中、龜下白玉盤。㊃書經堯典篇に、烝烝乂不格姦。

【烝民】ショウミン　に、烝民乃粒と。粒は粒食なり。出典書經益稷篇

【烝餅十字瓊肌】　事、蒸餅の上が拆裂して十字形をなすなり、烝は蒸に通ず。出典書言故事に、晉何曾が故事、則不食。坡蘇軾の詩、吹裂十字瓊肌香。

【乘】ショウ　㊀一對をいふ。㊁物四つをいふ。出典康熙字典に、物雙曰乘、左傳僖三十三年、弦高以乘韋先牛十二犒師、揚子方言、雙爲曰乘。㊂康熙字典に、物四數皆曰乘、禮少儀乘壺酒、孟子發乘矢。

【乘輿】ショウヨ　天子の御する所の車馬をいふ、因て天子のことをいふ。出典獨斷に、乘輿出於律、律曰、敢僭乘輿服御物、謂天子所服食者也、天子至尊、不敢漸潰言之、託之於乘輿、乘、猶載也、輿、猶車也、天子以天下爲家、不以京師宮室爲常處、則當乘車輿、以行天下、故群臣託乘輿以言之、或謂之車駕、古は諸侯及び廣く一般に乘り物の稱とせり、伊藤東涯云ふ、乘輿之稱、古者通上下、子產以乘輿、濟人於溱洧、則大夫可以言也、魯平公乘輿將出、則諸侯可以言也、自漢已來、專係、倘方服御之稱、亦不必乘車輿也、辭之古今亦世道之變乎。

【乘龍】ショウリヨウ　出典楚辭先賢傳に、黃憲李膺俱

八　松

娶太尉桓焉女、時謂桓叔元兩女俱乘龍、言得壻如龍也。又杜甫の詩に、門闌多喜氣、女壻近乘龍。

【乘除】（シヨウヂヨ）出典 數學上の語にて、乘はカケルなり、除はワルなり。出典 殊瑰藝に、乘除、乘起、除下と。又た韓愈の詩に、名聲相乘除。これ或は譽を受け或は譏を蒙り、乘除すれば、譽もなく譏もなきに歸すとの意なり。

【乘槎】（シヨウサ）意義 筏に乘るをいふ、槎は査に同じ。出典 北史に、乘槎下釣磯。

【茸茸】（ジヨウジヨウ）意義 ㊀草の盛んに生ひたる貌。㊁小人の群り居る貌。出典 ㊀皇甫湜の春心文に、草茸茸兮既長。㊁皮日休の九諷に、彼草小之茸茸兮、如蠶之蛾之鬱鬱。

二　訟　從

【訟獄】（ショウゴク）意義 獄も亦訟なり、二字連用すれど、一意なれど、對言すれば財を爭ふを訟といひ、罪を爭ふを獄といふ。出典 孟子萬章上篇に、訟獄者、不之堯之子而之舜。

【聽訟】（ショウ）意義 爭訟を聽斷するをいふ。出典 書經周官篇に、以五聽聽訟、以來民情。

【聽訟吾猶人】（ウ）ウの部聽訟（ウツタ）吾猶人を見よ。

【以無訟爲貴】（ウ）ウの部以無訟（ウタ）タ（ヘ）爲貴を見よ。

【從容】（ジヨウヨウ）意義 ㊀舒緩の貌。㊁從慂に同じ、人に勸むるなり。㊂久しき意なり。出典 ㊀書經君陳篇に、從容以和と。又た中庸第二十章に從容中道、聖人也。㊁史記

三　勝

衡山王傳に、日夜從容。㊂禮記學記篇に、待其從容、然後盡其辭。

【從衡】（ジヨウクワウ）意義 戰國の時の合從連衡の策を言ふ。出典 漢書刑法志に、合從連衡。顏注に、衡、橫也、戰國時齊楚韓魏燕趙爲從、秦國爲衡、從、謂其地形南北從長、衡、東西橫長、故爲衡也。

【勝引】（シヨウイン）意義 善き友をいふ。出典 李善文選注に、勝引、勝友也、引猶進、良友所以進已、故通呼曰勝引。

【勝利】（シヨウリ）意義 勝ちて利を得たるをいふ。出典 唐高僧傳に、因此勝利。

【勝負】（シヨウフ）出典 韓非子喩老篇に、未知勝負。

【勝地】（シヨウチ）意義 形勝の土地なり。出典 王巾の頭陀寺碑文に、楚都之勝地也。

【勝日】（シヨウジツ）意義 五行家の言、木尅土、土尅水、水尅火、火尅金、金尅木、此の五日をいふ、勝は尅なり、カツと訓ず。出典 史記封禪書に、以勝日駕車胙、惡鬼。

【勝情】（シヨウジヤウ）意義 山水景勝の地を好むの情なり。出典 世說に、許掾好游山水、云、許非徒有勝情、實

三　頌　辣

之也、周謂亡殷之社爲亳社。左傳に、勝國者、絕其社稷、有其土地也。又た公羊傳哀公四年に、勝國之社亳、其上面棧、其下。出典 秉燭談に、漢このかたは、多く前代の禪を受くと云ふにより、其の辭も見えず、明の代になりて、胡元を攘て天下を取りたる故へか、明人の文字に多く勝國と云、みだりには言まじきにやといへり。

【勝母】（シヨウボ）イの部邑（イウ）名朝歌墨子回車を見よ。

【勝敗之數】意義 軍の勝敗を決する運命をいふ。出典 史記勝布傳に、勝敗之數、未可知也。

【勝負兵家之常】意義 勝負は兵法家の常なり。出典 唐書裴度傳に、帝曰、一勝一負、兵家常勢。

【勝地本來無定主】出典 唐人の詩の句。出典 白居易の遊雲居寺詩、穆三十六地主の詩に、鳳峯深處雲居路、共踏花行謂借春、勝地本來無定主、大都山屬愛山人。

【勝者所用敗者棋】意義 器は一なれども、用ふる者に由りて勝敗あるをいふ。出典 顧璨の文に、勝者所用敗者之棋也、興國所用、亡國之臣也と。又た五代史周臣傳贊に見ゆ。

【辣神】（シヨウシン）意義 恐れて精神を竦動するをいふ、竦は敬なり。出典 漢書禮樂志に、虛己竦神。

【頌】（シヨウ）意義 文體の名。出典 文體名辯に、按、詩有六義、其六曰頌、頌者、容也、美

盛德之形容、以其成功、告于神明者也、若商之那・周之清廟諸什、皆以告于神、乃頌之正體也、至於魯頌・閟宮等篇、則用以頌僖公、而頌之體變矣、後世所作皆變體也、其詞或用散文、或用韻語、今亦辯而列之、又有哀頌、則任昉所稱、漢張敞初作、陶侯哀頌者、是已、今其文雖未及見、而竊意大體與哀贊略同、結識以俟博聞者、劉勰云、頌之爲體、典雅清鍊、揚扢芳、敷寫似、論而不入邪、修之邁、敬慎如銘而異乎規戒之域、辭味雖斯言、可以得作頌之法矣。

【頌德】（シヨウトク）意義 人の德をほむるなり。出典 漢書諸侯王表に、或題稱美頌德、以求容譽。

【頌德碑】（シヨウトクヒ）意義 德行ある人の事跡を永てゝ之を世に示すをいふ。出典 北史に、立碑頌德と。又た集古錄に、唐獨孤府君頌德碑あり。

【稱首】（シヨウシユ）意義 第一番に稱する義。出典 漢書游俠傳に、陘擊而游說者、以四豪爲稱首、四豪は、孟嘗君、平原君、信陵君、春申君をいふ。又た司馬相如の封禪文に、前聖之所以永保鴻名而嘗爲稱首者、用此。

【稱制】（シヨウセイ）セの部稱制を見よ。

【稱美】（シヨウビ）意義 稱譽して之を美とす。出典 北齊書陽雄傳に、移書稱美之。

【稱號】（シヨウガウ）意義 名號を稱する、と。出典 史記嚴安傳に、稱號曰皇帝。

【稱量】（シヨウリヤウ）意義 物を稱り量ることなり。出典 管子に、人有逆順、事有稱量。

四　誦　慫　衝　愚　踵

【誦呪】（ジユシユ）意義 文を唱へて、ノロフこと。出典 關尹子七釜篇に、有誦呪者、有事神者。

【慫慂】（ジユヨウ）意義 スヽメ立てるなり。出典 方言に、已不欲喜而旁人說之、謂之慫慂。

【衝突】（シヨウトツ）意義 つき當るなり。廣韻に衝、當也、突也、又衝也。出典 南史蕭摩訶傳に、遂精騎八千、率先衝突と。又た朱子語類に、張子韶出來衝突了。

【愚悉】（グシツ）意義 オロカなり。出典 禮記哀公問篇に、寡人愚惑冥頑。

【接踵】（セツシユ）意義 足のカヽトを交へ接するまで、人の續くをいふ。出典 戰國策に、韓魏父子兄弟、接踵而死於秦者百世矣。

【不旋踵】（ジユ）意義 ㊀不暇旋踵といふべきを略せしなり、踵（カヽト）を廻らす間もなしとて、時を移さずといふ義なり、不得旋踵に作ることあり。㊁足を廻らし卻かざるの義とし、戰場に在りて勇氣ある形容とす。出典 ㊀史記吳起傳に、其父不旋踵、遂死於敵と。又た漢書京房傳に、不量淺深、危言刺譏、幕恕强臣、罪率不旋踵と。又た王安石の詩に、紛紛始滿眼、消釋不旋踵。㊁淮南子に、使曾子計不顧後不旋踵刻頭於陣中、則終身爲破軍擒將と。又た司馬相如の喻巴蜀檄に、觸白刃、冒流矢、蹈不測、反顧計不旋踵。意義 旋の字、一に還に作る、同じ、漢

五　鍾

書徐樂傳に、雖有彊國勁兵、不得還踵、而身爲禽と。注に、如淳曰、旋とこれなり。

【氄毛】（ジユマウ）意義 鳥獸細毛を生じて自ら溫むるなり。出典 書經堯典篇に、鳥獸氄毛。

【鍾愛】（シヨウアイ）意義 すること。出典 十人の愛を一人に集めて愛

【鍾王】（シヨウワウ）意義 古の能書家、鍾繇と王羲之との二人をいふ。出典 晉書王羲之傳に、羲之字逸少、尤善隸書、爲古今之冠、每自稱我書比鍾繇、常抗行、比張芝草、猶當屈行一也、制曰、伯英臨池之妙、無復餘蹤、師宜懸輔之奇、罕有遺跡、遜乎鍾王以降、略可言焉、鍾雖擅奪一時、亦爲絕、論其盡善、或有所疑、詳密古今、研精篆素、盡善盡美、其惟王逸少乎。

【鍾馗】（シヨウキ）意義 鬼を退治したる正鬼の名なり。出典 事物紀原に、開元中、明皇病、居小殿、夢一小鬼、緋一足、懸一履於腰間、顧太眞紫香囊、及拈玉笛、吹之、顧喧騫、上叱之、曰、臣虛耗也、上怒欲呼、武士、見一大鬼、頂破帽、衣藍袍、束角帶、徑捉小鬼、以指刳其目、擘而噉之、上問爲誰、對曰、臣終南進士鍾馗也、因觸、轟不捷、觸殿階而死、泰旨賜綠袍而葬、發除、犬下虛耗妖眵、言覓喪、而疾愈、乃召吳道士圖之、上賞其神妙、賜以百金、是以今人畫其像於門也、沈括筆談曰、歲首畫鍾馗、不知起自何時、臭帖中、金陵發一冢、有石鼓、乃宋宗愨母鄒夫人云、有妹馗、即知鍾馗之設

縱

赤遠矣。

【縱臾】（シヨウユ）出處漢書 強ひ勸むるなり。衡山王傳に、候二星氣一者。日夜縱二臾王謀反一事。

【縱觀】（シヨウクワン）出處史記 由に觀せしむるなり。高祖紀に、高祖書醪二咸陽一縱二觀秦皇帝一。

【縱囚】（シヨウシウ）出處唐書 臨時に囚人を解き放ちて各家に歸らしむるをいふ。刑法志に、太宗以二寬仁一治二天下一、而於二刑法一尤慎、六年、親錄二囚徒一、閔二死罪者三百九十人一、縱二之還家一、期以二明年秋即一刑、及期、囚皆詣二朝堂一無二後者一、太宗嘉二其誠信一悉原之。

【縱】（ショウ）出處 縱囚のこと。唐太宗に始まらず、後漢書の虞延傳封、晉書の曹攄、宋書の謝方明、梁書の王志、傅岐、何允、北齊書の張華原、後周書の蘇綽、隋書の王伽の如き、是れなり、但、天子にして囚人を縱ちしは、太宗を以て始めとす、陝餘叢考卷十九に、之を詳述せり、

蹤

【蹤跡】（シヨウセキ）出處 人の跡をツケルこと。春渚紀聞に、往二青州一、蹤二跡之一、果有二州民麻氏一。

【蹤】（シヨウ）出處蘇軾反、（音ソウ）蹤髮は髮の亂るゝなり、因て土などの秋かに〻カノ〻したるを土蹤といふ、その他種々のものにいふ、品字篇に、俗以爲二貨之對繁之反一也といへり。出處竹譜に、凡栽二竹士虛蹤則鞭易一行と。又た佩文韻府蹤の字の下に、毛髮蹤、馬跡蹤、履屧蹤、氣未蹤等の語を載せたり。

繩

【繩】（ショウ）出處 多き貌。

【繩】（ショウ）出處 ㊀老子第十四章に、繩繩不可名、復歸於無物。㊁詩經周南螽斯篇に、宜二爾子孫一繩繩。

【繩墨】（ショウボク）出處 ㊀大工の用具、スミナハなり。品字篇に、繩墨、墨以演繩、木工之所用者といへり。㊁轉じて法律また は紀律の義とす。出處 ㊀禮記經解篇に、繩之於曲直。㊁管子に、請謁任舉之說、廢則繩墨不正と、又た後漢書荒恂傳に、尚書背二繩墨一、案二聖勅一と。注に、繩墨、謂二法律一也と。

【繩】（ショウ）出處 歌の名なり。出處 冷齋到二都下一、問二赤嘉證道歌一、即作二證頂歌一、久之、謫者問二其故一、僧曰、此眞丹聖者所二說經一。

證

【證人】（シヨウニン）出處 人の事件に對し、其の信否を證據だつる人をいふ。出處北齊書循吏傳に、諸證人莫二不一涙泣。

【證左】（シヨウサ）出處 當時左右に在りて其事を見て以て證するもの、即ち證人なり。出處史記五宗世家に、請遣二物所一與盱一諸證左一、物は當山王劉勃なり。

【證明】（シヨウメイ）出處 事物を證據立つること。出處禮樂略文に、如二經所說、顧悉證明。

【證據】（シヨウキヨ）出處 事物の證として據るところある證。出處管書徐邈傳に、皆有二證據一。

【證道歌】（シヨウダウカ）出處 歌の名なり。出處冷齋夜話に、景德初、西土有二異僧一、到二都下一、問二赤嘉證道歌一、即作二證頂歌一、久之、謫者問二其故一、僧曰、此書流二播五天一、爲二眞丹聖者所一說經。

鐘

【鐘】（シヨウ）出處 人の老いて齒衰へ、御二大繩狀一。胡注に、繩狀、以版爲之、人坐二其上一、其廣前可容、腰後有二靠背一、左右有二托手一、可二以開一轝、其下四足著一地。

【繩梶】（シヨウスウ）出處 ナハのトボソ、貧家の形容、褻屬繩梶之子。

【繩糾】（シヨウキウ）出處 過失を矯正するなり。出處アの部繩愆（アヤマリ）糾謬を見よ。

【聞鐘爲日】（シヨウ）出處 人に教へられしこと、道理を取り違へて悟れる喩へなり。出處蘇軾の日喩に、生而眇者、謂之有目者、或告之曰、日之狀如二銅槃一、扣之槃而得二其聲一、他日聞鐘以爲日也。

【鐘鳴漏盡而夜行】出處 猶ほ官に在るに喩ふ。出處三國魏志田預傳に、豫曰、年過二七十一、而居位、猶鐘鳴漏盡而夜行、彈人也と。又た因學紀聞に、文選放歌行注引二崔元始正論一、永寧詔曰、鐘鳴漏盡、洛陽城中不得有行者、永寧、後安帝年號、元始崔寔字也、後漢紀不載此詔。

色

【色色】（シヨクシヨク）出處 俗にいふイロ〻といふこと、篇々ふることをいふ。出處唐書選舉志に、敦厚浮薄、色色有之。

【色莊】（シヨクサウ）出處 顏色莊嚴なるなり、外貌のみ莊嚴なる者をいふ、色厲といふに同じ。出處論語先進篇に、論篤是與、君子者乎、色莊者乎。

【色然】（シヨクゼン）出處 驚きて顏色を變ずる形容なり。出處道鑑唐紀に、上見二羣臣於紫

使力士舉二巨鑿一而至二於中書一、諸大夫見之、皆色然而解、開之、則陽然公子陽生也。

【色養】（シヨクヤウ）出處親の命を待たず、其の意を悟りて、其の欲する所に從ふをいふ。出處曾書潘岳傳に、膝下色養。

式

【式微】（シヨクビ）出處 衰微なり、式は發語の辭、微は猶ほ衰のごとし、「ソレ衰ふ」と讀む。出處詩經邶風式微篇に、式微式微、胡不歸。

【馮式】（シヨクフウ）馮、軾（ショク）を見よ。

六　伐

【伐然】（シヨクゼン）出處おそるゝ義。出處國語齊語に、於二其心一伐然。

【食口】（シヨクコウ）出處人口又た口數といふが如し。出處東坡集に、食口猥多、不知所爲。

九　食

【食事】（シヨクジ）出處飲食のこと。出處楚辭九章に、心煩憺兮忘二食事一。

【食指】（シヨクシ）出處手の第三指（クスリユビ）をいふ、（食指動を樂看せよ）。出處齊書張融傳に、方振二食指一、半日乃息。

【食物】（シヨクモツ）出處穀食のことをいふ。出處史記伊尹奴傳に、得二漢食物一、背去之、以示不如二遠酷之便美一也。

【食客】（シヨクカク）出處人の家に身を托して衣食せる者、若在二薛一、招二致諸侯賓客一、云云、以故傾二天下之士一、食客數千人。

【食頃】（シヨクケイ）イの部一（イッ）頃を見よ。

【食言】（シヨクゲン）出處僞るなり、前言を履行せざるなり。一度口より出したる言

をまた口へ入るゝ義とす。漢書の注に、言を食へば、終に不信を爲す、其の前言を棄つること、食みて盡すが如しと。出處書經湯誓篇に、朕不二食言一。又た左傳僖公十五年に、我食二吾言一、背二天地一と。又た揚子法言に、或問二信、曰不二食二其言一。

【輟食】（シヨクジキ）出處食事を中途にやめいふ。出處漢書張良傳に、王輟食吐哺罵曰。

【中食】（シヨクジキ）出處酒宴の中途をいふ。出處古書、王召二鄭袖一、召二所便亞夫一、謀欲殺二沛公一。注に、中食、飲酒之中也。

【推食】（シヨクジキ）出處史記淮陰侯傳に、推食食我。

【食指動】（シヨクシドウ）出處美味を食ふことを得るなり。出處左傳宣公四年に、楚人獻二黿鄭靈公一、公子宋與二子家一將見、子公之食指動、以示二子家一、曰、他日我如此必嘗異味一、及入、宰夫將解黿、相視而笑、公問之、子家以告、及食、食大夫黿、召二子公一而弗與也、子公怒、染指於鼎嘗之而出。子公は公子宋なり。

【食前方丈】（シヨクゼンハウジヤウ）出處坐の邊りに方一丈の食饌を陳ぬるをいふ。出處孟子盡心下篇に、食前方丈、侍妾數百人、我得志不爲也と。又た韓詩外傳に、北郭先生妻曰、結駟列騎、所安不過二容膝一、食方丈於前一、所甘不過二一肉一。出處漢書鄒陽傳に、重五味、方丈於前。

【食色性也】（シヨクシキ）出處飲食と女色とは、人の固有の性なりとなす、此れは告子の說にて欲と性とを誤解したるものなり。出處孟子告子上篇に、告子曰、食色性也、仁內也、非二外也一、義外也、非二內也一。

【食火之國】（シヨククワ）出處火を食物とする國をいふ。出處山海經に、南方有二食火之國一、其人飽食二火炭一。

【食牛之氣】（シヨクギウ）出處功にしてすぐれたる志氣あるをいふ。出處ウの部食牛氣を見よ。

【食不二味】（シヨクフミ）出處日常の食物は一品にして二品を用ゐざるをいふ、儉約の義なり。出處左傳に、昔關虞食不二味一、居不重席。

【食不重肉】（シヨクフジユウニク）出處齊の晏子が儉約せし故事。出處史記晏嬰傳に、嬰以節儉力行、重二于齊一、既相齊、食不重肉、妾不衣帛。

【以食爲天】（シヨクヲテン）出處食物は人民生命の本たるをいふ。出處史記酈食其傳に、王者以民爲天、而民以食爲天。

【食者民之本】（シヨクシヤミンノホン）出處食物は人民を養ふ根本なりとの義なり。出處文子に、食者民之本也、民者國之基也、國者君之本也。

【可使食無肉不可居無竹】（シヨクムニクフカキムチク）出處宋人の詩の句。出處蘇軾の錢鈎軒の

詩に、可レ使食無レ肉、不レ可レ居無レ竹、無肉令人瘦、無レ竹令人俗、人瘦尚可レ肥、俗士不レ可レ醫、傍人笑此言、似高還似疑、若對此君仍大喝、世間那有楊州鶴！

湜

【湜湜】 音ショク 貌。 ㊀水の澄んで底の見ゆる の正しき貌。 出典詩經邶風谷風篇に、湜湜其沚と。鄭箋に、湜湜、持正貌と。 朱傳に、湜湜、清貌。 ㊁柳宗元の邕州刺史李公墓誌銘に、湜湜李公、惟道之貞。

唧

【唧唧】 音ショク 音ショク ㊀機(ハタ)を織る聲。 ㊁秋夜鼠の聲。 出典㊀木蘭詩に、唧唧復唧唧、木蘭當戶織。 ㊁歐陽修の秋聲賦に、四壁蟲聲、唧唧如助余之歎息。 ㊂王維の青雀歌に、猶勝黃雀爭上下、唧唧空倉復如何。 ㊃通俗文に、唧唧鼠聲也。

蜀

【蜀魂】 音ショクコン 音ホト、ギスなり。 出典華陽國志に、帝譚位於開明、升西山隱焉、時適二月子規鳥鳴、故蜀人悲鳥鳴也と。帝は望帝なりと。又た寰宇記に、蜀之後主、名杜宇、號望帝、讓位於鱉靈、望帝自逃、後歿、復位不得、死、化爲鵑、每春月聞、晝夜悲鳴、蜀人聞之曰、我望帝魂也。

【蜀道難】 音ショクダウナン 樂府題なり、李白は蜀の人にして、群に蜀道の難きを知れり、今これを述べて、玄宗皇帝の西幸の不利なるを諷じたるなり。 出典李白の蜀道難に、噫嘻嚱危乎高哉蜀道之難難於上青天、蠶叢及魚鳧、開國何茫然、爾來四萬八千歲、不與秦塞通、人煙西當太白、有鳥道可以橫絕峨嵋巔、地崩山摧壯士死、然後天梯石棧相勾連、上有橫河斷海之浮雲、下有衝波逆折之回川、黃鶴之飛尚不能過、猿猱欲度愁攀援、青泥何盤盤、百步九折繞岩巒、捫參歷井仰脅息、以手拊膺坐長歎、問君西遊何當還、畏途巉岩不可攀、但見悲鳥號古木、雄飛雌從繞林間、又聞子規啼夜月、愁空山、蜀道之難難於上青天、使人聽此凋朱顏、連峯去天不盈尺、枯松倒掛倚絕壁、飛湍瀑流爭喧豗、砯崖轉石萬壑雷、其險也如此、嗟爾遠道之人、胡爲乎來哉、劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當關萬夫莫開、所守或匪親、化爲狼與豺、朝避猛虎、夕避長蛇、磨牙吮血殺人如麻、錦城雖云樂、不如早還家、蜀道之難難於上青天、側身西望長咨嗟。 解説唐宋詩醇に、幹此詩者、幾如聚訟、惟蕭士贇謂、爲祿山亂、張天子幸蜀而作者得之、蓋其詩雖奇崛、訓旨隱躍、往往求之不得、則妄爲之說、若析而論之、亦自瞭然可觀、題本古樂府、非白所創、即以蜀道之難二語、爲通篇節奏、蓋震及魚鳧、以遡題意、而其非尋常遊幸之地、已見言外、與手撫膺坐長歎、結篇以下文、神相貫注、問、君西遊何時還、正指幸蜀事、士贇謂、君字非泛然而言、猶杜甫北征詩、恐君有遺失、及君誠中興主之戀聽唏、寫出淒涼之狀、故曰、使人聽此測朱顏、此爲明皇悲也、以下重寫雄字、而以其險也如此二句、束之、遊道之人、蓋指從者、而言、故承以創開崢嶸四句、楚騷賈云、我能往、寇亦能往、蜀之險不必可恃、故爲危之之詞、以致其忠愛之意、若如諸說所云、爲守蜀者發、於義爲不倫矣、朝避猛虎六句、直言避寇、而說到其早還、通篇結穴在此、結語敢得住、有無限感慨、若徒賞其文章之奇、而不審其深情遠寄、未爲知白者也、胡震亨謂其泛說事理、故包括大、而有合樂府諷世立教本旨、蓋亦窮於解矣。 出典武元衡の嘉陵驛の詩に、悠悠風篠遶山川、山驛空蒙雨作烟、銘手、嘉陵頗已白、蜀門西更上青天。

【蜀道易】 音ショクダウイ 出典㊀唐の陸暢が李白の蜀道難に反し、蜀道の平易なるを述べて、章皐を美めたるなり、その詞は今傳はらず。 ㊁明の方孝孺の作れる詩にして、天下の治平より蜀の地の狀況を叙べたるなり。 出典㊂唐章皐傳に、陸暢字達夫、皐辟所、厚饋、始天寶時、李白爲蜀道易難篇、以斥嚴武、暢更爲蜀道易、以美皐焉。 ㊃方孝孺の蜀道易に、序曰、唐李白作蜀道難、以譏嚴將帥之酷虐、厥後章皐治蜀、陸暢反其名作、蜀道易、以美之、今其詞不傳、伏惟今天子以大聖御極、殿下以睿哲之姿、爲蜀藩、明主臨國以來、施惠政、樂文教、中外同庥、蠻夷、四方萬里之外、水浮陸走、無有寇盜、商賈駢集、如赴都邑、蜀道之易、于斯爲至矣、臣才雖不敏、竊聞、白而所遇之時、白不敢望、臣也、因率敎作蜀道易一篇、以遡聖上及賢主之德、名雖難、暢而詞無殺美、頌謂過之、曰、美矣哉西蜀之選、何今易而昔難、陸有重岩峻嶺萬仞錢、天之險關、水有瞿雷聲電懸流怒濤

之江關、白、背相戒不敢至、胡爲乎今人操舟秣馬、夕往而朝還、大聖建皇極、王道坦坦如弦直、西有彭廣鑿爾之夷、北有氐袁椎髻之貊、東南大海際天地、島居州聚千萬國、莫不奉琛執贄効朝貢、春秋使者來接迹、何況川蜀處華夏、賢王于此開封域、播以仁風、沾以義澤、家和人裕、棄兵歛革、射狼變化作騶虞、蛇虺消藏回蜥蜴、繫山焚荒穢、略水剷崖石、帆檣扇覆任所往、宛若宇宙開闢、美哉蜀道之易有如此、四方行旅絡繹來、成都萬室、比屋如雲、桑麻蔽原野、鷄犬聲相聞、文翁之化、孔明之仁、嚴鄭之節、揚馬之文、遺風漸被比鄰營、士行修舉方回曾、方今況有賢聖君、大開學館興墳典、坐令致化淳華勳、微賢一詔到岩穴、嘯爾四方之士、孰不爭先而駿奔、王道有通塞、蜀道無古今、至險不在山與水、只在國政以人心、六朝五季時、王路蹉跎陸沈、遂令三代民盡爲獸與禽、當時豈惟蜀道難、八荒之內皆晦陰、今遂天子聖賢王之德、世所欽、文教洽飛動、風俗無邪淫、孱夫弱婦懷千金、悍吏熟視不敢侵、蜀道之易誠在此、嘯爾四方來者、不憚山高江水深。

【蜀江錦】 音ショクコウキン 蜀の地の川(即ち錦江)にて濯ひ上げて織り成せる錦なり。美麗なる錦にいふ。 出典白氏六帖に、蜀成都有濯錦之江と。又た山謙の丹陽記に、歴代尙未有錦、而成都獨稱、並故三國時、魏則市吳赤實四蜀、至是始乃有之と。又た杜甫の詩に、越羅蜀錦金粟尺と。又た張何、蜀江春日文君濯錦賦あり、文君は、司馬相如の妻卓文君なり。

軾

【蜀犬吠日】 音ショク 蜀の地は、四面山高く、日出ること遲く、沒すること早し、其地の犬日を見ること少し、故に日を見れば怪んで之に吠ゆ、以て非常人の行は常人の疑ひを致すに喩ふ。 出典韓愈の書に、蜀中高霧重、見日時少、宗元の答章中立論師道書に、僕往聞廣州之南恆雨少日、日出則犬吠。

【蜀得其龍】 音ショク 蜀の三國に在る時、蜀國の孔明を得たるをいふ、孔明は伏龍又は臥龍と稱すればなり。 出典世說品藻篇に、諸葛瑾弟亮、及從弟誕、並有盛名、各在一國、於時以爲蜀得其龍、吳得其虎、魏得犬子。

【畏蜀如虎】 音ショク 孔明を畏れたるをいふ。 出典三國蜀志諸葛亮傳裴松之注に、漢晉春秋曰、亮圍祁山、司馬宣王(名懿)自渭州入朝、魏明帝使西屯長安、宣王登山掘營、不肯戰、賈詡魏平數請戰、因曰、公畏蜀如虎、奈天下笑何。

軾

【馮軾】 音ショク 音フウ 軾また式に作る、馬車の前にある橫木にて、人の憑(ヨル)る處、車上にて人に敬禮の意を表するときは、軾に憑りて俯す、故に釋名に、軾は式なり、伏して式敬する所なりと。その部越王式怒蛙に詳あり)。 出典漢書酈食其傳に、憑軾下齊七餘城と。顏注に、馮、據也、軾、車前橫板、隆起者也、云馮軾者、言但安坐乘車、而游說不用兵衆。

【伏軾】 音ショク 前條に同じ。 出典史記淮陰侯傳に、酈生者一士也、伏軾掉三寸舌、下齊七十餘城と。又た漢書酈通傳に、酈生一士、伏軾、掉三寸舌、下齊七十餘城。

嗇

【嗇夫】 音ショクフ 小臣なり。 出典書經胤征篇に、嗇夫馭、庶人走。

【嗇夫利口】 音ショクフ ことばいふ。 出典史記張釋之傳に、釋之從行登虎圈、上問上林尉諸禽獸簿十餘問、尉左右視、皆不能對、虎圈嗇夫、從旁代尉對、上所問禽獸薄、甚悉、欲以觀其能、口對答無窮者、文帝曰、吏不當若是邪、尉無報、乃詔釋之拜嗇夫爲上林令、釋之久之、前曰、中略、夫絳侯、東陽侯稱爲長者、此兩人言事、曾不能出口、尚質樸、此嗇夫諫諫利口捷給哉、且秦以任刀筆之吏、吏爭以苛察相高、然其敝徒文具耳、無側隱之實、以故不聞其過、陵遲而至於二世、天下土崩、今陛下以嗇夫口辯、而超遷之、臣恐天下隨風靡而爭爲口辯、而無其實、且下之化上、疾於影響、舉錯不可不審也、文帝曰、善、乃止、不拜嗇夫。

植

【植物】 音ショクブツ 草木の屬をいふ。 出典周禮地官大司徒に、其動物宜毛物、其植物宜草物と。鄭注に、鄭司農云、植物、似生之屬と。又た張衡の西京賦に、植物斯生、動物斯止。

殖

【殖殖】 音ショクショク 平正なる貌。 出典詩經小雅斯干篇に、殖殖其庭、有覺其楹。

溽

【溽暑】（ジョクショ）月令篇に、是月也。土潤溽暑、大雨時行、燒薙行水、利以殺草、如以熱湯、可以薅田疇、可以美土壤。柳宗元の詩に、南州溽暑醉如酒。

四　蓐

【蓐收】（ジョクシウ）篇に、孟秋之月、其帝少昊、其神蓐收。又た左傳昭公二十九年に、木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土。杜注に、秋物摧蓐而可收也、其祀該焉。

【蓐食】（ジョクショク）早朝寢蓐の中に在りて食す るなり。左傳成公十六年に、修陳固列、蓐食申禱、明日復戰。又た史記淮陰侯傳に、廼晨炊蓐食。

【蓐醫】（ジョクイ）婦人の產蓐に臨む醫士をいふ。夢溪筆談に、有二一蓐醫一適在其家。

五　穫

【穫契】（ジョクセツ）となり。書經舜典篇に、帝曰、龔、咨、禹汝平水土、惟時懋哉、禹拜稽首、讓于稷契暨臯陶。帝曰、俞、汝往、哉。

【穫卜】（ジョクカ）り、夢說の士多く此に棄れり、一說に、穫は山の名なりともいふ。史記田完世家に、齊宣王喜文學遊說之士、自ㇾ淳于髡、田駢、接子、慎到、環淵之徒一七十六人、皆賜列第、爲上大夫、是以齊稷下學士、復盛、且數百千人。

【穫蜂不攻】城（ジャウ）狐社鼠を見よ。

七　燭

【燭臺】（ジョクダイ）詩に、且蠟青絹紅燭臺。白居易の燭臺の異名。開元天寶遺事に、申王（明皇兄）亦務奢侈、每與諸王貴戚、聚宴、以龍檀木爲ㇾ成童子、衣以綠袍、繫之東帶、使執畫燭、目爲燭奴。寧王（明皇兄）宮中、每夜於帷前、羅列木雕矮婦、飾以彩繪、各執雕燭、目爲燈檠。

【燭淚】（ジョクルイ）淚在地、往往成堆。又た杜牧の贈別の詩に、多情恰似總無情、唯覺樽前笑不ㇾ成、蠟燭有ㇾ心還惜ㇾ別、替ㇾ人垂ㇾ淚到ㇾ天明。

【燭龍】（ジョクリウ）に、鍾山神名曰燭陰、視爲ㇾ晝、瞑爲ㇾ夜、吹爲ㇾ冬、呼爲ㇾ夏、身長千里、人面蛇身、赤色也、又名燭龍、天不ㇾ足西北、無ㇾ餘陽燐食、故有龍啣ㇾ火精、以照ㇾ天門一。又た楚辭天問篇に、日安不ㇾ到、燭龍何照。注に、天之西北國冥無ㇾ日之國、有ㇾ龍銜ㇾ燭而照。

【燭影斧聲】宋の太祖の故事なり。宋史新編に、宋太祖開寶九年帝大漸、後遣王繼恩召ㇾ皇子德芳、繼恩徑召ㇾ晉王（光義）王至宮中、散遣左右、所言皆不ㇾ得聞、但遙見ㇾ燭影下、王時或離席若ㇾ避ㇾ之狀。既而上引ㇾ柱斧ㇾ戳ㇾ地大聲謂曰、好爲之、遂崩。千百年眼に、藝祖令子立弟、亘古所無、迨其後也、德芳德昭、至不ㇾ良於死、太宗子惡乎殘忍矣、曹陳得之事、與諸將密謀以ㇾ黃袍加ㇾ藝祖、實出於太宗、彼自以爲手ㇾ天下、以授ㇾ之兄、而今返ㇾ之也、二子處ㇾ嫌疑之際、雖欲不ㇾ危、又何可ㇾ得耶、觀ㇾ夫即ㇾ位于開寶九年之十一月、不能ㇾ少待、而遽稱ㇾ太平興國元年、固已示ㇾ無ㇾ兄之跡ㇾ矣、燭影斧聲之疑、恐難ㇾ釋ㇾ嫌於後世一也。

【燭不見跋】燭は炬なり、跋は本なり、炬既に盡へ盡して、其の本の見はるゝは、これ夜の深けたるなり。禮記曲禮上篇に、侍ㇾ坐於所尊敬、毋ㇾ餘ㇾ席、見同等不起、燭至起、食至起、上客起、燭不見跋と。陳氏注に、小爾雅に云、跋は、本なり、本に、把處なり、古、未だ蠟燭あらず、唯々火炬を呼て燭とす、火炬を照らして盡き易し、盡れば則ち殘る所の本を藏くす、爾かする所以は、若し殘本を累積せんか、客之を見れば、即ち夜の深きを知り、主人の厭倦せんことを慮り、客は辭して退かんと欲す、故に殘本を見はさずして、恆に燃えて未だ盡きざるが如くすと。

【秉燭夜遊】好景の盡き易きを惜みて、晝日の遊行を以て足れりとせず、夜中まで遊ぶをいふ、古は、提燈又は燭秉なし、故に室の內外を問はず、手に燭を執るなり。文選古詩十九首の一に、生年不ㇾ滿百、常懷千歲憂、晝短苦ㇾ夜長、何不ㇾ秉ㇾ燭遊、爲ㇾ樂當ㇾ及ㇾ時、

古人燭ㇾ小乘る圖

（石索）

何能待ㇾ來丝ㇾ。又た李白の春夜宴桃李園序に、古人秉ㇾ燭夜遊、良有ㇾ以也、魏武帝の與ㇾ吳質書に、年一過往、何可ㇾ攀援、古人思ㇾ炳ㇾ燭夜遊、良有ㇾ以也。

【刻燭爲詩】蠟燭一すゞ〻燃るに間に、四韻の詩を作るをいふ。南史王僧孺傳に、竟陵王子良嘗夜集學士、刻ㇾ燭爲ㇾ詩、四韻者、則刻一寸、以此爲ㇾ率。

【背燭共憐深夜月】唐人の詩易の春夜與ㇾ盧四周諒華陽觀同居の詩に、性情懶慢好相親、門巷蕭條稱ㇾ作ㇾ鄰、背ㇾ燭共憐深夜月、踏ㇾ花同惜少年春、杏壇住僻雖ㇾ宜ㇾ病、芸閣官微不ㇾ救ㇾ貧、文行如ㇾ君尚惟悴、不知何得漢待ㇾ河人。

【如燭照數計而龜卜】智識の喻ふ。韓愈の送石處士序の語。

讒

【讒讒】松風の音なり。世說賞零篇に、讒讒如松下風。

【讒讒】衆多の貌。莊子玉樂篇に、萬物讒讒と。又た宋史樂志に、美芳讒讒。

六　職

【職人】諸職の工人なり。北魏書孫紹傳に、職人子弟、陵逐浮遊。

【職方】官名、天下九州の地圖を掌る官なり。周禮に、職方氏掌ㇾ天下之圖、以掌ㇾ天下之地一と。又た事物紀原に、隋初有職方也。通典曰、後周依ㇾ周官一有職方一也。

【職分】其官職によ分限あるをいふ。諸葛亮の出師表に、此臣所以報先帝一而忠陛下之職分也。

【職田】田也。女獻通考に、開皇中、始給職田、又給公廨田。

【職方外記】書名、明の艾儒略の撰する所にして、五卷あり、儒略は以太利人にして、明に事へたり、此書は亞細亞・歐羅巴・利未亞・亞墨利加・墨瓦蠟尼加に分ちて、各篇に總說あり、又首に五大洲總圖を置き、末に四海總說を附せり。

織

【織女】七（シチ）夕を見よ。

【織錦坊】錦を織る坊舍をいふ。唐書玄宗紀に、開元二年、禁織錦繡珠玉於前殿、廢織錦坊。

【織女渡河】七（シチ）夕を見よ。

二　屬

【屬】ノの部蝸（クワ）角之爭を見よ。

【屬鑒】我れに附屬せる外國をいふ。李陵の答蘇武書に、閒關屬國。

【屬吻】人に依賴するをいふ。漢書外戚李夫人傳に、上曰、夫人病甚、殆將不ㇾ起、一見我、屬託王及兄弟、豈不快哉。

【屬車】天子の從車なり、天子を斥言するを憚りて屬車といふ。司馬相如の上諫獵書に、犯屬車之清塵一と。又た蔡邕の獨斷に、大駕屬車八十一乘と。又た事物紀原に、周末諸侯有ㇾ武車九乘、武車即屬車也、亦周制所有、秦滅ㇾ九國、餘ㇾ其車服、故八十一乘。

【屬鬚】ま〻〻小しく飽き足るといふこと。屬は飽なり。たセの部以小（セウ）人之腹爲ㇾ君子之心一を見よ。

【屬者】一チカゴロなり。二從者なり。李陵の答蘇武書に、屬者頗有變一史記項羽紀に、屬者百餘人耳。

【屬文】文を作るなり、屬は綴るなり。漢書賈誼傳に、善屬文。

【屬目】目を注ぎて視るをいふ。左傳成公二年に、師有ㇾ功、先入國、人必屬ㇾ耳目一。

【屬辭比事】辭を合せ事を連ぬるなり。禮記經解篇に、屬辭比事、春秋教也、云云春秋之失亂云云、屬辭比事而不亂、則深於春秋者也。

【屬鏤之劍】鏤の名なり。左傳哀公十一年に、王（吳王夫差）聞ㇾ之使ㇾ賜ㇾ之ㇾ伍子胥一屬鏤一以死一と。又た史記伍子胥傳に、吳王乃使使賜ㇾ伍子胥屬鏤之劍一曰、子以此死。

【屬纊之際】人の臨終をいふ。纊は新綿なり、之を口鼻に屬

け、其動否を觀て、以て氣息の有無を驗するなり。出典禮記喪大記篇に、疾病屬纊以俟、絶氣と、鄭注に、纊今之新綿、易動搖、置口鼻之上、以俟之、餘。

シラ 知

【弗知實難知而弗從禍莫大焉】 出典左傳物を知りつゝ之れを行はざるの難をいふ。出典左傳昭公三年に、君子曰、弗知實難、知而弗從、禍莫大焉。

シラミ 虱

【虱處褌中】 出典風は蝨に同じ、シラミなり、褌名に、褌は、貫なり、兩脚に貫きて、上、腰中に繫ぐなり、サルマタの類なり。出典晉書阮籍傳に、籍虱之處褌中、逸乎深縫、匿乎壞絮、自以爲吉兆也。

【貫虱之技】 出典虱を射貫く技術なり、弓術の妙をいふ。出典懸虱於牖、望之。

シラミ

【虱處頭而黑】 出典虱は白き蝨なれど、頭髮中に居れば、黑しとて、人は交る所によりて化せらるるに喩ふ。出典文選に、虱處頭而黑、麝食柏而香。

【懸虱於牖望之】 出典藝術を研究する喩。出典列子湯問篇に、甘蠅、古之善射者、彀弓而歎伏鳥下、飛衛學射於甘蠅、而巧過其師、紀昌學射於飛衛、衛曰、關先學不瞬、而後可言射、昌歸偃臥其妻之機下、以目承杼、杼、二年之後、雖錐末倒眥而不瞬、以告衛、衛曰未也、學視而後可、視小如大、視微如著、而後告我、昌以牦懸虱於牖、而望之、旬日之間、浸大也、三年之後如車輪、

焉、以視餘物、皆丘山也、乃以燕角之弧朔蓬之幹、射之、貫虱之心而懸不絕、以告飛衛、飛衛高蹈拊膺曰、汝得之矣。

五 シル 汁

【啜汁】 出典啜はシラミなり、虱はヒネル家に、彼勸太子戰攻、欲啜汁者衆。出典甘き汁をスヽルなり、功勳

六 シル 知

【知者不言】 出典知識ある者は深く中に蔵して、濫に口に發せざるをいふ。出典老子第五十六章に、知者不言、言者不知、塞其兌、閉其門、挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、是謂玄同、又た韓非子喩老篇に、知者不以言談、書(シヨ)の類語に見ゆ。出典白居易の讀老子詩に、言者不知知者默、此語吾聞於老君、若道老君是知者、緣何自著五千文と。君、若道老子が不言を以て宗旨として、卻て道德經五千言を著せしを譏りしなり。出典凡そ物事を知るは、さほど難事に非ず、只之れを行ふこと甚難きをいふ。出典書經說命中篇に、說拜稽首曰、非知之艱、行之惟艱と。又た左傳昭公十年に、鄭子皮曰、非知之實難、將在行之。

シロ 城

【傾城】 ケの部傾(ケイ)國を見よ、

【城復于隍】 出典天下治極りて、亂を生ずるに譬ふ。隍は城下の池なり、隍土を掘り、之を積みて城と爲すは、治道を積みて泰を爲すが如し、故に城土の頹れて隍に復へるは、泰の終りて、又否に反へるが如きなり。出典易經泰卦に、上六、城復于隍、勿用師、自邑告命、貞吝と。象傳に、城復于隍、其命亂也。

ス

ス 相

【相撲】 出典二人力を較ぶること、即ち無、今相撲也と。又た夢華錄に、相撲手刎、格鬪。

三 須

【須臾】 シの部須(シユ)臾を見よ。

【須彌山】 出典一に修迷樓、又は蘇迷盧といふ、妙高山と譯す、一世界の中央金輪の上に在りて、七山七海環り列れり、水面より高き八萬由旬なりといふ。出典釋氏要覽に、長阿含並起世因本經等云、四州地心即須彌山、梵音正云、蘇迷盧、此名妙高、此山有八山遶、外有大鐵圍山、周匝圍繞、並一日月晝夜回轉照四天下、名一國土。

三 蘇

【蘇迷盧】 出典須彌山の一名にして、又は妙高山と譯す。前條を參看せよ。出典蘇迷盧西域記に、唐言妙高、蘇曰須彌、又曰頌彌樓、皆訛、四寶合成、社所、游會、七山七海、環峙環列、四面各有一色、東黃金、南琉璃、西白銀、北頗梨、隨其方面、水同山色。

四 スイ 水

【水天】 出典水と天と一色に連なること。出典盧仝の蜻蜓歌に、黃河中流日影斜、水天一色津無涯。

【水運】 出典水上の運漕のこと。出典漢書地理志に、眞州當運路之要、符離、睢寧、蕭、淮、泗、山陽、告便、水運、

【水濱】 出典水邊をいふ。出典左傳僖公四年に、昭王之不復、君其問諸水濱。

【水陸】 出典水と陸とをいふ。出典詩經大雅既醉篇に、其告維何、籩豆靜嘉。

【水程】 出典水路に沿ひ、其遠近を測る、水上の里程をいふ。出典元史世祖紀に、命選善水者一人、浩、賓河、計水程、遣東南、可通漕運、驗、驛以聞。

【水面】 出典水のオモテをいふ。出典宋史河渠志に、西湖水面、唯務深濶、不修築堤岸、可引入城內諸井、一城汲用尤在、渭潔、奪招軍士、止有三十餘人、今宜增置撩湖軍兵。

【水殿】 出典水に臨むの殿堂をいふ。出典宋史禮志に、咸平元年二月、賞花宴於後苑、帝作中春賞花釣魚詩、儒臣皆賦、遂射於水殿、盡歡而罷。

【水師】 出典水上のイクサをいふ、今の海軍なり。出典宋書孝武帝紀に、詔曰、春蒐之禮、著自周、令、講事之語、書、氣祭、中外寧晏、當因農隙、尊是舊章、可克日、於元武湖、大閱水師、並巡江右、講武校獵。

【水軍】 出典前條に同じ。出典三國魏志、滿寵傳に、司馬宣王治水軍於淮、受節度、至荊州會、冬水淺、大船不得行、乃遣屯方城。

【水戰】 出典舟イクサなり。出典後漢書岑彭傳に、上、光武、張、彭、曰、大司馬、吳漢、習用步騎、不、嫻、水戰。

【水怪】 出典水中の怪物をいふ。出典國語に、季桓子、穿井獲、如土缶、其中有羊焉、使問、孔子之仲尼、曰、吾穿井而獲、狗、何也、對曰、以、丘之所聞、羊也、丘聞之、木石之怪、曰、夔、蚿、罔、水之怪、曰、龍、罔象、土之怪、曰、墳羊。

【水萍】 出典水上の浮草をいふ。出典歐陽修、上都詩に、天昌地闊多岐路、身即飛蓬共水萍。

【水草】 出典水ある處と草ある處とをいふ。出典史記何敞傳に、遂、水草、遷徙、毋、城郭常處、耕田之業。

【水牛】 出典物の名。出典漢書西域傳に、罽賓地平溫和、出、封牛、水牛、象、大狗、沐猴、孔雀、珠璣、珊瑚、虎魄、璧流離、他奇異、諸國、同。

【水鳥】 出典水に住む鳥をいふ。出典春秋僖公十六年に、六鷁退飛、過、宋都、と、杜注に、鷁、水鳥、高飛、遇、風而退、宋人、以爲、災、告、於諸侯、故書。

【水禽】 出典水中を游泳する鳥をいふ。出典後漢書馬融傳に、水禽、鴻、鵠、鷖、鷖、鷗、鷺。

【水族】 出典水中に產する動物なり。出典南史何遠傳に、車服尤豔素、器物無、銅漆、江左水族甚賤、遠特食不、過、乾魚數片而已。

【水產】 出典水に產する魚介の類。出典博物志に、東南之人食、水產、西北

之人食ハ陸畜ハ食ハ水産ハ者、龜蛤螺蚌以爲ハ珍味ニ、不レ覺ハ其腥也、食ハ陸畜ハ者、狸兎鼠雀以爲ハ珍味ニ、不レ覺ハ其膻也。

【水虎】（スイコ）和名抄水經注に、水中有レ物、如ニ三四歳小兒ニ、鱗甲如ハ鮫鯉ニ、射レ之不レ可レ入、七八月中好在ニ磧中ニ自曝、膝頭似レ虎、掌爪常没ハ水中ニ、出ハ膝頭ニ、小兒不レ知欲ハ取弄戲ニ、便殺レ人、或曰、人有ハ生得者ニ、摘ハ其皐厭ニ、可ハ以小便ニ名爲ハ水虎ニ者也と。摘ハ皐厭ニとは、勢を去るなり。

【水神】（スイシン）皇紀に、水神不レ可レ見。

【水火】（スイクワ）水と火となり。一其怒如ハ水ニ、火といへば、怒怒の勢の甚しきを水火に喩ふるなり。二其勢如ハ水火ニ、といへば、勢の盛なること水のあふれ、火のもゆるが如きをいふ。三其用如ハ水火ニ、といへば、水と火とは日用缺く可らざるものなるをいふ。出典一三國志魏延傳に、延性矜高ニ、當時皆避ハ下之、惟楊儀不レ假ハ借延ニ、延以爲ハ至怒ニ、有レ如ハ水火ニ。二潛夫論に、邪之與レ正猶ハ水與ハ火、不レ同ニ原、不レ得ハ並盛ニ。三水火無レ交を見よ。

【水獄】（スイゴク）水中に牢獄を設け罪人を此に投ずるなり。出典通鑑の注に、聚ハ毒蛇水中ニ、以ハ罪人ニ投レ之、謂ハ之水獄ニ。

【水死】（スイシ）水中に投じ死するをいふ。出典國語魯語に、冥勤ハ其官ニ而水死。

【水葬】（スイソウ）人が死すれば、その屍を水中に沈めるをいふ。出典齊書林邑傳に、遠界有ハ寶窮島ニ、知ハ人將レ死、集ハ其家ニ、食ハ死人肉ニ、盡飛去、乃取ハ骨燒、灰投ハ海中ニ水葬。

【水歩】（スイホ）水軍と歩兵とをいふ。出典三國呉志に、水歩八十萬。

【水國】（スイコク）湖又は河などある土地をいふ。出典宋之問の秋蓮賦に、有ハ芳意ニ兮何成、長無ハ艷兮水國と。又た五浩然の送癸三詩に、水國無ハ邊際ニ、舟行共使レ風。

【水土】（スイト）舜典篇に、帝曰、俞咨、禹汝平ハ水土ニ、惟時懋哉。

【水攻】（スイコウ）河水を以て城を攻め、水浸にすること。出典事物紀原に、國語に、智伯攻ハ趙襄子ニ、決ハ汾水ニ、灌ハ晉陽ニ、城不レ沒者三版、襄出ハ於戰國呑並之世ニ云。

【水利】（スイリ）田地を沃灌する水の便利なるをいふ。出典史記河渠書に、用レ鄉者、爭言ハ水利ニ、朔方・西河・河西・酒泉皆引ハ河及川谷ニ以溉ハ田。

【水行】（スイコウ）水上を行くことなり。出典史記夏本紀に、陸行乘ハ車、水行乘ハ船、泥行乘ハ橇ニ、山行乘ハ橋ニ。

【水彩】（スイサイ）水より放つ光彩のこと。出典王履貞の水地照ハ寒月ニ賦に、水彩旁射、輝聯下映。

【水潦】（スイラウ）雨の水をいふ。出典禮記曲禮上篇に、水潦降、不レ獻ハ魚鼈ニ。

【水門】（スイモン）溝渠の水を導へ儲へ置かんが爲めに作れる關門をいふ。出典漢書林書名信臣傳に、時行視ハ郡中水泉ニ、開ハ通溝瀆ニ、起ハ水門ニ、提閼以數十處ニ、以廣ハ灌溉ニ。

【水碓】（スイタイ）水の力を計りて搗くカラウス。出典正字通に、桓譚新論に、水碓ハ輪車ニ、注ハ今俗依ハ水選ニ、壅ハ上流ニ、設ハ水車ニ、轉輪與ハ碓身ニ交激使ハ自舂ニ、即其遺制也。（ホの部翻ホン準に圖あり）

【水部】（スイブ）物紀原に、周禮夏官有ハ司險ニ、掌ハ溝澮ニ、蓋水部之職也、魏尚書始有ハ水部郎ニ。

【水衡】（スイカウ）苑を掌る。出典官名、京師の河川及び上林に、水衡都尉、武帝元鼎二年、初置と。類注に、衡、平也、主ハ平ハ其稅入ニ。

と。疏に、洪水爲ハ災、求ハ人治ハ之ニ、帝曰、咨嗟、嗟ハ水災之大也。

【水難】（スイナン）南條に同じ。出典韓非子喩老篇に、是以白圭無ハ水難ニ。

【水害】（スイガイ）水の患害なり。出典管子度地篇に、顧開ハ水害ニ。

【水手】（スイシュ）カコ、水夫なり。出典唐書食貨志に、江南之人不レ習ハ河事ニ、轉ハ顧河師水手ニ、重爲ハ勞費ニ。又た蘇軾の詩に、復令ハ與ハ官充ハ水手ニ、此生何止略知レ津。

【水車】（スイシヤ）田地に水を注ぐ水車のこと。出典事物紀原に、魏略曰、馬鈞居ハ京都ニ、城内有レ地、可ハ爲ハ園、無ハ水以灌ハ之ニ、乃作ハ翻車ニ、令ハ童兒轉ハ之ニ、而灌ハ水自覆ニ、今田家有ハ水車ニ、天旱時引ハ水溉ハ田者、即此器也、詳ハ此ニ、則其制起ハ自ハ魏馬鈞ニ也、而漢靈帝使ハ畢嵐作ハ翻車ニ設ハ機車ニ以引ハ水ニ、靈ハ南北郊路ニ、又爲ハ自ハ晃嵐ニ得ハ制矣、未ハ知ハ孰是ニ。（ホの部翻（ホン）車に圖あり）

【水嬉】（スイキ）舟を泛べて樂しみ遊ぶをいふ。出典逸異記に、日與ハ西施ニ爲ハ一ニ。

【水飲】（スイイン）水を飲むこと。出典禮記喪大記篇に、大夫之喪、主人室老子姪皆食ハ粥、衆士疏食水飲、妻妾疏食水飲、士亦如ハ之ニ。

【水漿】（スイシヤウ）禮記檀弓上篇に、曾子謂ハ子思ニ曰、伋吾執ハ親之喪也、水漿不入ハ於口ニ者七日。

【水晶】（スイシヤウ）玉の類なり、玲瓏として琉璃の如し。出典本草に、水晶亦類ハ黎之屬ニ、有ハ黑白二色ニ、倭國多ハ水晶ニ第一。

【水精】（スイシヤウ）一前條に同じ。二月をいふ。出典一國語楚語に、珠足ハ以寧ハ火災ニ、則其象起ハ自ハ魏馬鈞ニ也、而漢靈帝使ハ畢嵐作ハ翻車ニ設ハ機車ニ以引ハ水ニ、靈ハ南北郊路ニ、又爲ハ自ハ晃嵐ニ得ハ制矣、未ハ知ハ孰是ニ。二月の部翻（ホン）車に圖あり）

【水滴】（スイテキ）器なり、又た水注ともいふ。出典西京雜記に、玉蟾蜍一枚、大如ハ拳ニ、腹空容ハ五合水ニ、王取以爲ハ書滴ニ。又た類書纂要に、水滴俗名ハ水礎ニ、又名ハ水注ニ、又曰ハ蟾蜍ニ。

【水鏡】（スイキヤウ）人の鏡みとなる可き人をいふ。出典世說賞譽上篇に、衛伯玉爲ハ尚書令ニ、見ハ樂廣與ハ中朝名士談議ニ、奇之曰、自ハ昔諸人沒已來、實恐微言將ハ絕、今乃復開ハ斯言於君子矣、命ハ子弟ニ造レ之ニ、日、此人人之水鏡也、見レ之者、披ハ雲霧ニ覩ハ青天ニ。又た韓非子に、鏡ハ于水ニ見ハ面之容、鏡ハ于人ニ則知ハ吉與ハ凶ニ。又た隋書柳莊傳に、莊少有ハ遠量、博覽ハ墳籍、鉛槧ハ滿ハ腹、時ハ爲ハ陽蔡大寶有ハ重名ハ於江左、時ハ爲ハ岳陽王蕭詧諮議ニ、見ハ莊便歎曰、襄陽水鏡復在ハ於茲ニ。又た三國魏志李藹傳の注に、夫水者至平、邪者取法、鏡者至明、醜者無ハ怒、水鏡所ハ以能寧ハ物無ハ慾者、以ハ其無ハ私也。

【水銀】（スイギン）ミヅカネなり。出典本草綱目に、時珍曰、其狀如ハ水似ハ銀ニ、故名ハ水銀ニ。

【水經】（スイキヤウ）書名。出典此書は、後漢の桑欽の撰なりといふ、然れども書中に記する所の地理を考ふるに、實は三國の時の人の作なり、其注は後魏の酈道元の作なり、明より以來傳刻に舛誤あり、經注混淆せり、清朝に至り永樂大典に載する所の舊本に據り、校正を爲し、其の玄覽を補ふ者二千一百二十八字、其の玄覽を刪れる者一千四百四十八字、其の經文を正す者三千七百二十五字、今傳ふる所の水經注四十卷是れなり。

【水母】（スイボ）海中に生ずる動物、クラゲ。出典郭璞の江賦に、蠣蛤蜃蜃、水母目蝦。注に、俗名ハ海蛇ニ、有ハ知識ハ無ハ耳目ニ、常有ハ蝦依隨ハ之ニ、以ハ蝦爲ハ目ニ。

【水墨】（スイボク）畫家の用ふるウス墨をいふ。出典唐書紹宗傳に、實與ハ人書ニ曰、鄙夫書無ハ工者、特由ハ水墨之積習ニ耳。

【水墨山】（スイボクザン）淡墨にて畫ける山の圖をいふ。出典郟谷の詩に、孤峰未ハ得便騎去、名畫先求水墨山。

【水槨】（スイカク）クの部火（クワ）耕水耨を見よ。

【水平】（スイヘイ）ミヅモリなり。出典通典に、木槽長二尺四寸、開頭及中間整爲ハ三池ニ、三池各置ハ浮木ニ、上起ハ立柱ニ、以水注レ之ニ、三池浮木齊起、眇目視レ之ニ、三齒齊平則爲ハ天下準ニ、置ハ照版度竿ニ、亦以白繩ニ計ハ其平ニ、則高下丈尺分寸可レ知、謂ハ之水平ニ。

【水準】（スイジユン）水もりをして、平なるや否是以水者萬物之準也と。注に、萬物平ハ取レ之、故ニ準と曰ふ。

【水則】（スイソク）水の痩淺を測る表なり錢を以て之を製す。出典西湖志に、呉越王錢鏐築ハ塘以捍ハ江水ニ、置ハ鐵幢三ニ以爲ハ水則ニ、幢闊如ハ杵、徑七八寸、出ハ土可ハ三尺餘ニ、其趾入ハ土不レ知ハ若干ニ。

【水道】（スイダウ）水の通ずる道なり。出典左傳に、晉侯會ハ呉子于良ニ、水道不可ニ、呉子辭乃還。又た後漢書岑彭傳に、橫江水起ハ浮橋闕樓、立ハ楯柱ハ絕ハ水道ニ、結ハ營山上ニ、以拒ハ漢兵ニ。

【水脈】（スイミヤク）地中に在る水の脈。出典後漢書許揚傳に、建武中太守鄧晨後欲ハ修ハ復其功ニ、聞ハ藩曉ハ水脈ニ、召與議レ之ニ。

【水旱】（スイカン）洪水と旱魃（ヒデリ）となり。出典莊子秋水篇に、天下水旱、大ハ於海ニ云云、春秋不レ變、水旱不レ知と。又た漢書に、堯有ハ九年之水、湯有ハ十年之旱ニ。

【水災】（スイサイ）水害をいふ、災は天變の意なり。出典書經堯典篇に、帝曰、咨

【水墨圖】（スイボクヅ）　墨筆ウスズミにて畫ける圖をいふ。出典楊萬里の晚風寒林の詩に、樹無二一葉一萬梢苛、活底秋江水墨圖と。又た劉迎の詩に、海色樓臺市、山容水墨圖。

【水衡錢】（スイカウセン）　墨筆水衡は川澤を掌る官にして收入最多し、故に錢あり。出典漢書宣帝紀に、以二水衡錢一爲二平陵徙民一起二第宅一と。顏注に、應劭曰、水衡及少府、皆天子之私藏耳、鮮官工作當仰給司農、今出二水衡錢一言宣帝卽位爲異政一也。

【水晶宮】（スイシヤウキユウ）　墨筆水晶を以て作れる宮殿をいふ。出典杜甫の詩に、水晶宮在二禮川府西湖上一と。又た歐陽修の內直對月の詩に、水晶宮鎖黃金闕、故比二人間一分外寒。

【水晶鱠】（スイシヤウクワイ）　墨筆トコロテンを用ゐて鱠の如くすること。出典居家必用に、水晶鱠法、瑳芝菜（トコロテン）洗二去沙一頭換二米泔一浸三日、略煮一二沸、入二盆硯一攪細、下二鍋煎化濾二去滓一、鮫・蜆・蛤・蜊切爭・蕨・薇・筍・蒲・蓴・絲・生菜・香菜開裝、如二春盤一樣用、雜進食、

【水精籠】（スイシヤウレウ）　墨筆水晶もて作れる籠をいふ。出典宋之問の詩に、雲母帳前初況澁、水精籠外轉逶迤と。又た元稹の詩に、閒讀二道書一慵未起、水精簾下看梳頭。

【水滸傳】（スイコデン）　墨筆書名。出典此書は、宋末に成りし宜和遺事と云へる書に基づき、宋の徽宗の世に起りし群盜の事蹟、宋江以下三十六人の豪傑を其の首魁とし、指寫せるものにして、全篇百八十回あり、獨り其の趣向の勝れるのみならず、文章亦群渾壯絕なるが故に、三國演義、西遊記、金瓶梅と竝べ稱して、支那小說中の四大奇書と曰ふ、作者に就き諸說あれども、元の人施耐菴の著なりといふ說、蓋較に世に行はる。

【水心集】（スイシンシフ）　墨筆書名。出典宋の葉適撰す、韓侂胄に忤ひて貶せられ門を杜ぢて書を著せり、平生言ふ、文章世敎に關するに足らざれば、工と雖益なしと、以てその本領を見るべきなり。

【水心鏡】（スイシンキヤウ）　墨筆鏡の名なり。出典異聞集に、天寶中、楊州進二水心鏡一、背有二盤龍一、言鑄鏡時、有二老人一、自稱、姓龍名護、以二五月五日一、於二楊子江心一鑄之、後大旱、祠二龍乃雨。

【水梭花】（スイサクワ）　墨筆曹家にて魚をいふ、僧と酒肉を禁ず、故に異名を作りて之を呼ぶなり。出典東坡志林に、僧謂二酒爲一般若湯一、魚爲二水梭花一、雖爲二錢簿一、欺二己而已、人有一爲不義一、菜、竟無二所益一、但欺己而已、人有一爲不義一、而文之以二美名一、與此何異哉。墨莊漫錄に、僧謂二酒爲一般若湯一、鮮有知二其說一者、予偶讀二釋氏會典一、乃得二其說一、云、有二一客僧一、長慶中屬二一寺一、呼二淨人一酤二酒、寺僧見之怒氣薰蒸、乘二瓶罄一、柏樹、其瓶百碎、其酒灑滯、皆如二綠玉一、掬之可飲、僧曰、某常持二般若經一、須臾頓二此物一杯、卽誦詠、

【蹈水火】（スイ）　墨筆危險を冒すことにいふ。出典韓愈の後十九日復上二宰相一書に、蹈二水火一者之求、免二于人一也。又た論語衞靈公篇に、水火吾見二蹈而死者一矣。

【水村山郭】　墨筆河又は湖澤多き村と、山の邊の町なり。出典ナの部南朝四百八十字を見よ。

【水道提綱】　墨筆書名、清の齊召南の撰する所なり、酈道元の水經は、北方に詳にして、南方を知らず、黃宗羲の今水經は、南方を知りて北方を知らず、此書は乃ち大川を以て綱とし、衆流を以て目とし、南北に亘りて河川の要を提ぐ、大旨唯だ今日の水道を以て主と爲し、屑々として古蹟を附會せず、凡そ二十八卷とす。

【水月鏡花】　キの部鏡（キヤウ）花水月を見よ。

【水魚之交】　墨筆一君臣の親密なるにいふ。二夫婦相親むをいふ。出典一列女傳に、桓公出、葬戚擊二牛角一而商歌、桓公異之、使二管仲迎一之、葬戚辭曰、浩浩乎白水、管仲不二知所一謂、不二朝五日一而有二憂色一、其妾嬉遊曰、敝問國家之事耶、君之謀也、管仲曰、公使二我迎一葬戚、葬戚曰、浩浩乎白水、吾不二知其所一謂、是故憂之、其妾笑曰、人也聞君來、君不二知識一矣、古有二白水之詩一、詩不二云乎、浩浩白水、鰥鰥之魚、君來召我、我蒂安居、國家未定、從我焉如、此寡婦之欲、得二君一國家一也と。又た三國志諸葛亮傳に、先主與二諸葛亮一計

事、亮之情好日密、關羽張飛等不悅、先主曰、孤之有二孔明一、猶二魚之有一水、願勿復言、と。又た貞觀政要に、君臣相遇、有二同魚水一、則海內可安と。又た杜甫の詩に、稍令二社稷安、自契魚水歡。㊁管子小問篇に、桓公使二管仲求一二舊臣一、舊臣之曰、浩浩乎、青青乎、管仲不二知、至一中食一而應之、婢子曰、詩有之、浩浩者水、青青者魚、未有二室家一而安召我居、婢子其欲二室乎一。墨筆唐書契苾何力傳に、帝曰、何力入二延陵一、如二淵魚得一水と。一の類語として看るべし。

【水火無交】（スイ）　墨筆少しも交際せざるをいふ。出典漢書孫寶傳に、杜門不通、水火と。又た隋書趙軌傳に、轉二齊州別駕一、水火不與二百姓一交、墨筆孟子盡心上篇に、民非二水火一、不二生活一、昏墨卯入之門戶、求二水火一、無二弗與者一といふに本づく。

【不通水火】（スイ）　前條を見よ。

【水田飛白鷺】（スイ）　墨筆唐人の詩の句。出典李嘉祐の詩に、水田飛二白鷺一、夏木囀二黃鸝一と。又た王維の積雨輞川莊作に、積雨空林煙火遲、蒸藜炊二黍餉一、東菑、漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木囀黃鸝、山中習靜觀朝槿、松下清齋折二露葵一、野老與人爭二席罷一、海鷗何事更相疑。墨筆石林詩話に、詩下雙字、極難、須使五言七言之閒、除二五字三字一、外、精神興致全見二于兩言一、方爲工、妙、唐人記、水田飛二白鷺一、夏木囀二黃鸝一、爲李嘉祐詩、王駕詩鶯、取之、非也、此兩句好處、正在、添二漠漠陰陰四字一、摩詰爲點化、以見其妙。○王維は、盛唐の人、李嘉祐は、中唐の人、詩話、論ずる處、前後倒錯せり、蓋、李が王の詩の二字を去りて、五言とせしなり、胡應麟の詩藪、及び伊藤東涯の紫塵談に、之を辯ぜり。墨筆案ずるに李嘉祐の詩この二句を傳へ、其の全篇は既に佚せり。全唐詩李嘉祐の部に、水田飛二白鷺一、夏木囀二黃鸝一、と。此二句を載せ、注に李駢稱、嘉祐有二此句一、王右丞取以爲二七言一、今集中無、之とあり。

【水邊楊柳綠煙絲】　墨筆唐人の詩の句。出典楊巨源の和二練秀才楊柳一の詩に、水邊楊柳綠煙絲、立二馬煩一君折一枝一、唯有二春風景相憐一、慇懃更向二手中一吹。

【水北山人得名聲】　墨筆唐人の詩の句。出典韓愈の寄二盧仝一詩に、玉川先生洛城裏、破屋數閒而已矣、一奴長鬚不二蓋頸一、一婢赤脚老無齒、辛勤奉養十餘人、上有二慈親一、下妻子、先生結髮讀二書俗徒一、閉門不二出動一紀一、至二今鄰僧乞一來送、僕忝二縣尹一、能不二恥一、俸錢供給公私餘、時致二薄少一助、祭祀、勸君留守、謂、大尹、言語纔及、輒掩耳、水北山人得名聲、去年去作二幕下士一、水南山人又繼往、鞍馬僕從寒、閭里少、室山人素、價高、兩以二諫官一薦不起、彼皆刺口論二世事一、有二力未一免、證、編使先生事業、終日密、關羽張飛等不悅、先主曰、孤之有二孔明一、猶二魚之有一水、願勿復言、と。又た貞觀政要に、君臣相遇、有二同魚水一、則海內可安と。又た杜甫の詩に、稍令二社稷安、自契魚水歡。㊁管子小問篇に、桓公使二管仲求一二舊臣一、舊臣之曰、浩浩乎、青青乎、管仲不二知、至一中食一而應之、婢子曰、詩有之、浩浩者水、青青者魚、未有二室家一而安召我居、婢子其欲二室乎一。墨筆唐書契苾何力傳に、帝曰、何力入二延陵一、如二淵魚得一水と。一の類語として看るべし。

【水火無交】（スイ）　墨筆少しも交際せざるをいふ。出典漢書孫寶傳に、杜門不通、水火と。又た隋書趙軌傳に、轉二齊州別駕一、水火不與二百姓一交、墨筆孟子盡心上篇に、民非二水火一、不二生活一、昏墨卯入之門戶、求二水火一、無二弗與者一といふに本づく。

【不通水火】（スイ）　前條を見よ。

【水田飛白鷺】（スイ）　墨筆唐人の詩の句。出典李嘉祐の詩に、水田飛二白鷺一、夏木囀二黃鸝一と。又た王維の積雨輞川莊作に、積雨空林煙火遲、蒸藜炊二黍餉一、東菑、漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木囀黃鸝、山中習靜觀朝槿、松下清齋折二露葵一、野老與人爭二席罷一、海鷗何事更相疑。墨筆石林詩話に、詩下雙字、極難、須使五言七言之閒、除二五字三字一、外、精神興致全見二于兩言一、方爲工、妙、唐人記、水田飛二白鷺一、夏木囀二黃鸝一、爲李嘉祐詩、王駕詩鶯、取之、非

添丁、意令與國充、紇奸、閔家丁口連四海、豈無二農夫親一、未能二先生抱一、才必大用、宰相未、許終不、仕、假如不、在、陳、力列、立、官垂、範亦足、恃、喬當、蒙二十世宥一、豈謂貽厥無基址、故知忠孝出二天性一、嘗、身親、倫安足、經、昨夜長鯨來下、狀、隔、環惡少、暴、似、狐、蔚、屋山、下、竅、蹴、渾、舍、驚、怕、走、折、趾、遽、依婚媾、求二官吏一、不、信、令行能禁止、先生受、屈未、曾、訴、忽此來、告、良有、以、嗟我身爲、亦、鰥夫、操、權不、用、欲、何依、立召、賊曹、呼、五百、盡捉、鼠輩、戶、諸市、先生又遣、長鬚來、如此、處置非、所、宜、況又時當、長養、節、邵、未可、猛、政理、先生固是、余所、畏、度、意不、敢、窺、涯涘、放縱是誰之過歟、效、尤、戮、俟、愧、前史、買、羊沽、酒、謝、不敏、偶逢、明月、燈、挑李、先生有、願許、降臨、更遣、長鬚、致、雙、鯉、

【水部胸中星斗文】　墨筆唐人の詩の句。出典張文潛の齊岸碑後の詩に、水部胸中星斗文、太師筆下龍蛇字、天遣二子傳一、將來、高山十丈麟、著屋と。水部とは水部郎、卽ち元結の官名なり。全篇は古文眞寶前集に見ゆ。

【水驛路穿兒店月】　墨筆唐人の詩の句。出典曰居易の送二劉郎中赴一任蘇州一の詩に、仁風青雨去隨輪、勝境歡遊到逐身、水驛路穿兒店月、花船棹入女湖春、宣城獨詠意中人、柳惲草題汀上蘋、何似姑蘇詩太守、吟詩相繼有二三人一。

【水火吾見蹈而死者】　墨筆水火は人民に必要なれども、時に害あるをいふ。出典論語衞

靈公篇に、子曰、民之於仁也甚於水火、水火吾見蹈而死者矣、未見蹈仁而死者也。

【水行不避蛟龍者漁父之勇也】（スイ）　漁父人はその慣る所に於て勇なるをいふ。出典莊子秋水篇に、水行不避蛟龍者、漁父之勇也、陸行不避兕虎者、獵夫之勇也、白刃交于前、視死若生者、烈士之勇也、知窮之有命知通之有時、臨大難而不懼者、聖人之勇也。

【出納】（スイナフ）　出納イダスと入るゝとをいふ。出典書經堯典篇に、帝曰、龍朕堲讒說殄行、震驚朕師、命汝作納言、夙夜出納朕命、惟允。

【出售】（スイシウ）　售は、賣なり。出典方岳前集末頁題云、取四景花卉拾遺律詩詞古風、編爲後集、蠟、此出售。

【出納帳】（スイナフチヤウ）　金錢米穀等の收入支出を記錄する帳簿なり。出典唐六典に、上林署諸倉監云云、凡出納帳、歲終上于寺焉と。又た六書故に、今惟財用、出納之簿書、用壹貳參、以防姦弊。

【出師表】（スイシヒヤウ）　文章の篇名。出典諸葛亮、字は孔明、蜀漢の先主昭烈帝に仕へて丞相となり、卒して忠武侯と謚す、後主劉禪の世に及び、前後二回書を上りて警告せり、三國志本傳に、此文章を載せたれども題なし、故に佩文韻府出師表の條に云、按出師表諸葛亮作、文選擬此題、本傳無之といへり、出師表の三

六　西

七　吹

宇は、昭明太子の命名に出づるなり。前表は、正文章軌範に出で、後表は續篇に出でたり。本傳に唯、前表を載せて、後表を載せず、後人往々後表は孔明の作に非るを疑へり。

【出師表不捷身先死】　エの部英雄淚滿襟を見よ。

【讀出師表不泣者非忠臣】　出師表の文は語々肺腑より出づ、故に人を泣かしむるなり。出典安子順の評に、讀孔明出師表、而不墮淚者、其人必不忠、讀令伯陳情表、而不墮淚者、其人必不孝、讀退之祭十二郎文、而不墮淚者、其人必不友と。孔明は、諸葛亮、令伯は、李密、退之は、韓愈なり、

【西瓜】（スイクワ）　瓜の名、スイクワなり。出典瓜餘話考に、或謂西瓜自元世祖始入中國、然元初方鑿已有食西瓜、則非元初入中國可知矣と。又曰、楊詩所謂縷縷花衫點唾碧、痕疑丹血稻腐、紅者也、饌係浙之淳安人、是時浙中已有之、則非元初入中國可知矣と。又曰、楊用修云、余嘗疑本草瓜類中不載西瓜、後讀五代胡嶠陷虜記云、嶠於回紇得瓜種、實大如斗、味甘、名曰西瓜、則西瓜由嶠入中國也、今西瓜已遍天下、而整齋詩始於然、至十月、採取貢入京、以備月廟祭之用、蓋濟在關海東、則西瓜又可稱東瓜矣。

【吹噓】（スイキヨ）　中に飛揚せしむるを吹噓といふ。方言に、吹、助也、注に、吹噓は、相佐助するなりと。出典隋書儒林傳に、王孝籍、奏記於牛宏曰、伏惟明尚書公、咳唾足以活枯鱗、吹噓可以飛羽翼と。又た北史に、盧思道曰、霜拂吹噓、長其光價と。又た杜甫の贈獻納使起居田舍人詩に、揚雄更有河東賦、惟待吹噓送上天。

【吹毛】（スイモウ）　㊀苦き創のこと。㊁吹毛求疵の略語にて、人の缺點を摘出するをいふ。出典㊀杜甫の詩に、鉾先衣染血、騎突劍吹毛と。又た韓愈の岣嶁山祝融峰詩に、吁無吹毛刃血此牛諸殷、㊁張說の拙筆に、所貴仁恕、非矜察東、史荀吹毛、人安措足。

【吹花節】（スイクワセツ）　直陽の節、即ち九月九日をいふ。出典宋郊の後苑燕射賦に、月著長衣之令、日記吹花之選。

【吹簫客】（スイセウカク）　蘇東坡の前赤壁の賦に、客有吹洞簫者、との語あり、そのことをいふ。出典李華玉の登廣陵榜御臺詩に、髣髴出鹿鶴、想望吹簫客。

【吹簫女子】（スイ）　佛篇に、少昊母皇娥、宮側有井、日瑤靈、帝與皇娥、宴于宮、帝子命江妃、歌、神是旋歸之曲、發靈之神吹、簫以和之、故至今號井神、曰吹簫女子。

【垂垂】（スイスイ）　㊀將に、濟さに及ばんとするの意。出典杜甫の知猿過峽、蜀州東亭送客逢早梅、相憶見寄詩に、江邊一樹垂垂發と。趙注に、言我草堂江邊、亦有一樹、將發と。又た唐釋貫休の詩に、一瓶一鉢垂垂老。

【垂綸】（スイリン）　魚を釣るをいふ、綸は釣糸なり。出典世說に、王弘之性好釣、釣綸於此。

【垂涎】（スイエン）　物を欲する意なり。出典賈誼新書に、非、涎相告と。又た張元幹の詩に、扁舟莫浪發、蛟鼉正垂涎。

【垂拱】（スイキヨウ）　衣を垂れ手を拱ぬきて何事をも爲さざるをいふ。出典書經武成篇に、垂拱而天下治と。又た禮記玉藻篇に、凡侍於君、垂拱と。疏に、舍手也、身俯則宜手舍而下垂也。

【垂橐】（スイタク）　橐中空虛にして之を垂るゝをいふ。出典國語齊語に、諸侯之使垂橐而入、瘠載而歸。

【垂統】（スイトウ）　トの部垂統（トウ）を見よ。

【垂沒】（スイボツ）　書楊賜傳に、豈敢愛惜垂沒之年、而不盡其懷憂之心哉。

【垂迹】（スイシヤク）　佛篇佛より未覺者を度せんが爲めに、證果に到るべき教義を示して誘ふをいふ。出典法華經文句に、非本無垂、非迹無以顯本、本迹雖異、不思議一也と。又た法華經序注に、非本無以垂、非迹無以顯本。

【垂髫戴白】（スイ）　髫は、小兒の垂髮なり、故に幼兒を垂髫といふ。戴白は、白髮を戴けり老人なり。出典後漢書鄧禹傳に、禹所、此、輒停車住、而以勢來之、父老童稚、垂髫戴白滿、其車下、莫不感悅と。又た陸游の詩に、鄰曲今年又有

八　垂

九　帥

十　衰

十一　推

年、垂髫戴白各欣然。

【垂簾之政】（スイレン）　天子幼少なるとき太后などが代りて政を執るをいふ。簾を垂れ、その內にて政を聽く、故にいふ。出典漢書に、太后垂簾聽政と。又た宋史禮志に、奉明殿垂簾決事。

【炊人】（スイジン）　飯を炊く人、メシタキのこと。出典酉陽雜俎に、本是王家炊人。

【炊累】（スイルイ）　累は、動き升るなり、炊また吹に作る。出典莊子在宥篇に、從容無爲、而萬物炊累焉。

【炊臼之夢】　ウの部炊臼（ウス）之夢を見よ。

【炊金饌玉】（スイ）　炊は、爨なり、饌は飲食なり、飽食の美なるを褒めて金玉の貴重なるに比するなり。出典後漢書馮緄傳に、賓王の帝京篇に、平臺戚里帶崇墉、炊金饌玉待鳴鐘。

【帥使】（スイシ）　官名、諸路を安撫する役なり、即ち按撫使の別名。又た帥司・帥府ともいふ。出典書言故事に、諸路安撫帥使、安撫掌一道兵權、故曰帥。

【帥使】（スイシ）　物の衰ふる貌。出典史記周本紀に、王道衰微。出典貫休の詩に、宗武遲徵衰。

【衰微】（スイビ）　紀に、王道衰微。出典貫休の詩に、宗武遲徵衰。

【推官】（スイクワン）　官名、吟味役をいふ。出典李國使、嘗有推官、舊唐書百官志に、節察防團使、嘗有推官、舊唐書云、天寶機事也。

【推敲】（スイカウ）　人を上、薦め上るをいふ。出典史記韓長孺傳に、所推擧皆

【推擇】（スイタク）　下より推上げ、上より採擇するなり。出典史記淮陰侯傳に、不得推擇爲吏。

【推察】（スイサツ）　推し測りて察して知ること。出典後漢書邴彥傳論に、凡言成事者、以功著、易顯、謀幾初者、以理曖、難昭、斯固原情比迹、所宜推察者也。

【推輓】（スイバン）　車を前より引くを輓と爲し、後より推すを推と爲す、因て人を上へ薦むるをいふ。出典左傳襄公十四年に、衛君必入、夫二子者或輓之、或推之、欲無入得乎。

【推轂】（スイコク）　㊀轂を推して車を前進せしむるが如く、人の事業を助成するをいふ。㊁人を薦舉するをいふ。出典㊀史記荊燕世家に、呂氏雖故本推轂高帝、㊁就天下、㊁史記魏其武安傳に、推轂趙綰、爲御史大夫。

【推演】（スイエン）　推しひろむる義、敷衍に同じ。出典漢書外戚傳に、不知推演聖德、遂先帝之志。

【推命】（スイメイ）　十一星の運行を以て、人の運命を推し極むる術なり。出典困學紀聞に、以十一星行歷、推人命貴賤、始於唐貞元初、邵利衡士李編說。

【推步】（スイホ）　日月五星の度數を推して曆を作るをいふ。出典抱朴子に、黃帝精推步、別訪山禮力牧、講古銘、則觀風后。

【推敲】（スイカウ）　唐の賈島が詩を作り、推の字を用ゐんか、敲の字を用ゐん

かと、苦慮ぜしにより字句を鍛錬するを搥敲といふ。【出處】賈島の題李凝幽居に、閑居少鄰並、草徑入荒園、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、過橋分野色、移石動雲根、暫去還來此、幽期不負言と。池邊一に池中に作る。）又た細書雜記に、唐書載賈島僧浪仙初爲浮屠、名無本、來東都、時洛陽令禁獵、午後不得出、島爲詩自傷、韓愈憐之、因致其爲文、遂去浮屠、舉進士、當其苦吟、雖遇貴人、皆不之覺也、一日見京兆尹、跨驢不避、讟詰之、久乃得釋、會昌初以普州參軍改司戶、未受命卒、余按、劉公嘉話云、島初赴舉京師、一日於驢上得句、云、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、始欲著推字、又欲著敲字、煉之未定、遂於驢上吟哦、時時引手作推敲之勢、時韓愈吏部權京兆、島不覺、衝至第三節、左右擁至尹前、島具對所得詩句云云、韓立馬良久、謂島曰作敲字佳矣、遂與並轡而歸、留連論詩、與爲布衣之交、自此名著、後以不第乃爲僧居法乾寺、號無本、一日宣宗微行至寺、聞鐘樓吟詠聲、遂登樓、於島案上取詩卷、覽之、島不識帝、遂攘臂睨帝曰、即君何會此耶、遂奪取詩卷、帝悪愿下、樓而去、嘗爲長江渡、號賈長江、唐史與嘉話所載不同如此。

【搥扑】 【訓】ツイボク　【出處】鞭人を杖を以て打擊するを いふ。【出處】三國魏志何夔傳に、加其搥朴之罰。

【搥楚】 【訓】ツイソ　【出處】漢書路溫舒傳に、搥楚之下、何求而不得、故囚不勝痛、則飾辭以視之。

悴

【悴容】 【訓】スイヨウ　【出處】やせ衰へたる容。【出處】謝靈運の詩に、朽貌改鮮色、悴容變柔顏。

彗

【彗星】 【訓】スイセイ　【出處】ハハキ星、星の尾に光氣あり形ハハキに似たるを以て名く、昔は天文の學未だ開けず、故に此星出れば天下に禍災ありといへり、彗は、雖遂反音崇（スイ）で、祥歲反音歲（セイ）の二あり、孰れに讀むも可なり。【出處】爾雅釋天に、彗星爲孛、孛如字、孛如字、言其形孛孛出于東方と。注に、文穎曰、孛、彗、長三星、其形象小異、孛星光芒短、其光四出、蓬蓬孛孛也、彗星光芒長、參參如帚、蓬蓬長星、光芒有一、直指或覓、天、或十丈或三丈二丈、無常也。

萃

【萃然】 【訓】スイゼン　【出處】楽る貌。【出處】揚雄の長揚賦に、迺萃然登南山、瞰烏代、【出處】易經萃卦に、六云、萃如嗟如、无攸利、往无咎、

【萃如】 【訓】スイジヨ　【出處】繁る貌。【出處】易經萃卦に、六三、萃如嗟如、无攸利、往无咎、小吝。

雜

【雜賓】 【訓】スイヒン　【出處】（ヨウ）二律を見よ。

揣

【揣摩】 【訓】スイマ　【出處】はかるなり、揣は楚委反（音スイ）なり。【出處】戰國策秦策に、蘇秦乃夜發、書、陳數十、得太公陰符之謀、伏而誦之、簡練以爲揣摩と。又た鬼谷子に、揣篇摩篇あり。又た虞氏春秋に、揣摩篇あり、史記虞卿傳に見ゆ。又た管子輕重篇に、摩之符也、內內符者揣抱薪趨火、燥者先然、云云、此言內符之主也と。又た鬼谷子摩篇に、摩外摩也。

揣知 【訓】スイチ　【出處】物を探り知るをいふ。【出處】漢書翟方進傳に、揣知其指。

惴

【惴慄】 【訓】スイリツ　【出處】懼るる貌。【出處】詩經秦風黃鳥篇に、臨其穴、惴惴其慄と。穴は塚壙をいふ。又た莊子齊物論篇に、小恐惴惴、大恐縵縵。

隋

【隋書】 【訓】スイシヨ　【出處】隋書八十五卷、正史にして廿四史の一に列す、唐の魏徵等の纂述に係る勅撰の書なり、此書は衆人の手に成れるものにして、舊本無篇或は其名を題し、或は題せず、誰の作なるか盡く知るべからず、帝紀五卷、列傳五十卷、其の外に禮儀・音樂・律曆・天文・五行・食貨・刑法・百官・地理・經籍の十志あり、本と五代史志といふ、五代とは梁陳齊周隋の五代なり蓋し當時五史並に修む、故に志も五代を兼該し隋書を以て末に居けるみ以て隋書の中に列せるなり、今覓に隋志と稱するは、蓋し其實を失へるなり。

【隋和材】 【訓】スイワザイ　【出處】隋侯の珠と卞和の璧となり、材の美なるに喩ふ。【出處】司馬遷の書に、雖材漢、隨和之行若由夷、終不可爲榮。由夷は、許由と伯夷となり。

【隋侯之珠】 【訓】スイコウ　【出處】隋侯の獲たる珠にして、後世之を卞和の玉と並べ稱して、天下の寶とす、日記故事の注に、隋侯姓は諷、字は元暢といへり。【出處】淮南子覽冥訓に、隋侯之珠、和氏之璧、得之者富、失之者貧と。注に、隋侯、漢東之國、姬姓諸侯也、隋侯見大蛇斷而以藥傅之、後蛇於江中、銜大珠以報之、因曰隋侯之珠、

蓋明月也と。又た同書氾論訓に、明月之珠、不能無翳と。注に、夜光之珠有似月光、故曰明月と。又た班固の西都賦に、隋侯明月、錯落其間、懸黎垂棘、夜光在焉と。李善注に、高誘以隋侯爲明月、許愼以明月爲夜光、班固上云隋侯明月、下云夜光在焉、夜光非明月矣、經典不載、夜光本末、故說者參差、西京賦曰、流懸黎之夜光、吳都賦曰、隋侯於是鄰其夜光、鄧陽云、夜光之璧、劉琨云、夜光之珠、然則夜光爲通稱也と。又た搜神記に、隋侯行見大蛇傷、敬而治之、其後蛇含珠報之、徑盈寸純白、夜光可燭家、故歷世稱隋珠と。又た鄧陽の獄中上梁王書に、無因而至前、離出隋珠和璧、秪結怨而不見憐と。又た說苑に、隋侯之珠、國之寶也、然用之彈、曾不如泥丸。

【隋珠和璧】 前條を見よ。

【以隋珠彈雀】 【訓】ヨクスイシユダンジヤク　【出處】得る所寡くして失ふ所多きに喩ふ。【出處】莊子讓王篇に、以隋侯之珠、彈千仞之雀、世必笑之、是何也、則其所用者重、而所要者輕也。

絞

【絞絞】 【訓】スイスイ　【出處】①一匹の狐が行きて匹を求むる貌。②安泰の貌。③水の寒氣に遇て凝る風有狐篇に、有狐綏綏、在彼淇梁。【出處】④詩經衛風有狐篇に、雪、綏也、水下遇寒而凝、綏綏然也。⑤梅殘臣の雨中飲詩に、梅天下梅雨、綏綏如氣絪。⑥荀子儒効篇に、綏綏兮其有文章也。

【絞撫】 【訓】スイブ　【出處】安心して、なでるをいふ。【出處】三國吳志に、虛心綏撫得其歡心。

【絞寇紀略】 【訓】スイコウキリヤク　【出處】書名。【出處】十二卷、補遺三卷、清の吳偉業の撰す、明の末崇禎の時の流賊の事より、明の亡ぶるまでの事を紀せる史書なり。

瘁

【瘁瘁】 【訓】スイスイ　【出處】病ひ衰る貌。【出處】莊子在宥篇に、使天下瘁瘁焉人苦其性。

【瘁然】 【訓】スイゼン　【出處】うるはしく和かなるをいふ。【出處】孟子盡心上篇に、君子所性、仁義禮智根於心、其生色也、睟然見於面、施於背、施於四體と。注に、睟音粹、於面、施於背、施於四體と。注に、睟音粹、清和潤澤之貌。

睡

【睡仙】 【訓】スイセン　【出處】神仙拾遺傳に、夏侯隱登山、陳眞人、據隱於睡、小則互月、大則幾年、方一覺と。又た事文後集に、陳摶希夷先生、每睡則半載、或數月、近亦不下月餘。

【睡隱】 【訓】スイイン　【出處】耽りたる故事。【出處】事文後集に、徐光溥爲相喜論時事、大爲李昪所挾、光溥後不復修飾、吾初服。【出處】李白の詩に、久辭榮祿、遂卧白雲。

【睡相】 【訓】スイシヤウ　【出處】相寢ネムケをいふ。

【睡魔】 【訓】スイマ　【出處】詩に、建茶三十片、不一滋味如何、奉贈包居士、僧惑戰、睡魔と。又た耶律楚材の詩に、筆陣陣、兵詩思勇、睡魔卷甲夢魂除。

【睡語】 【訓】スイゴ　【出處】ネゴトなり。【出處】原病式注に、或發而多言者、俗云睡語。

【睡過半載】 【訓】スイカハンサイ　【出處】楚辭天問に、遂古之初、誰傳道之。

遂

【遂古】 【訓】スイコ　【出處】遂は往なり、往古に同じ。

【遂長】 【訓】スイチヤウ　【出處】成長するなり、遂はトゲルなり。【出處】呂覽去私篇に、萬物得遂長焉。

【遂初賦】 【訓】スイショフ　【出處】①前漢の劉歆の作りし文章の名なり。②晉の孫綽の作りし文章の名なり。【出處】①古文苑に、遂初賦者、劉歆所作、云云、是時朝政已多失矣、歆以論議見排擯、志意不得、之官經歷故晉之城、感今思古、遂作斯賦、以敘往事、而寄己憲と。全篇古文苑卷五に載す。②晉書に、孫綽居會稽、遊放山水、十餘年、作遂初賦、以致其意。【出處】蘇軾に、遂將復修吾初服。【出處】李白の詩に、久辭榮祿、遂卧白雲衣。

瑞

【瑞應】 【訓】スイオウ　【出處】詩經周南譜に、麟趾言公子之信厚、騶虞歎國君之仁心、自取獸名、別爲興喻、非歎瑞應。

【瑞感】 【訓】スイカン　【出處】前條に同じ。【出處】南史梁憑傳に、武帝之儲襄陽、淡瓶遣帝解、茅土玉璜、贈之、天監二年元日會、帝謂曰、卿所佩玉璜、是新亭所贈耶、對曰、既爾瑞感神裏、臣謹服之無斁。

【瑞命】 【訓】スイメイ　【出處】芽出度き命令なり。【出處】班彪の遊居賦に、謀神人以動作、

享ニ鳥魚之瑞命。

【瑞降】（ズイカウ）　音義　天ヨリ芽出度き物が降るを啓ニ、霖施而窮澤生ル流、瑞降而枯條更肆。

【瑞巽】（ズイキン）　音義　芽出度くして且つ不思議なるをいふ。出典　南方草木狀ニ、吳黃武中、交趾太守士燮獻ニ橘十七ニ、實同一蔕、以爲ニ瑞異、羣臣畢賀。

【瑞夢】（ズイム）　音義　芽出度き夢なり。出典　隋煬帝の答ニ智顗遺旨書ニ、即于今月十八日、仍感ニ瑞夢ニ、是知濟度、已降ニ舟航ニ。

【瑞圖】（ズイト）　音義　芽出度き圖畫なり。出典　王逸の九思ニ、慕ニ風后ニ兮受ニ瑞圖ニ。

【瑞徵】（ズイチヨウ）　音義　芽出度きシルシなり。出典　張司馬相如の封禪文ニ、厥塗靡ニ、蹤ニ天瑞之徵ニ。

【瑞驗】（ズイケン）　音義　前條ニ同じ。出典　皇甫枋の仙都草堂記ニ、山有ニ鼎湖ニ、中產ニ異蕈、鑄落ニ東隅ニ、因建ニ金華之邑ニ、表ニ瑞驗ニ云。

【瑞日】（ズイジツ）　音義　芽出度き日なり。出典　朱熹和風甘雨、龍德正中、厥施斯著。

【瑞月】（ズイゲツ）　音義　芽出度き月なり。出典　張仲素の聖明樂詩ニ、九陌祥煙合、千秋瑞月明。

【瑞星】（ズイセイ）　音義　芽出度き星をいふ。出典　晉書天文志ニ、瑞星一日ニ景星、如ニ半月ニ、生ニ于晦朔、助ニ月爲ニ明ニ。又た宋中興天文志ニ、瑞星有ニ十二ニ、一日景星、二日周伯、三日合譽、四日王蓬芮、五日格澤、六日玄保、七日昭明、八日昔昌、九日旬始、十日司危、十一日苑昌、十二日地維、減光、瑞星五行沖和氣也。

【瑞餞】（ズイカン）　音義　芽出度き餞をいふ。出典　李商隱の七月二十八日夜與ニ王鄭二秀才ニ聽ニ雨後夢作ニ、初夢龍宮寶燄然、瑞餞明麗滿ニ晴天ニ。

【瑞雲】（ズイウン）　音義　芽出度き雲なり。出典　西京雜記ニ、祥瑞之雲、曰ニ慶雲ニ、赤曰ニ景雲ニ、亦曰ニ卿雲ニ、外宗內青曰ニ孟雲ニ。又た洞冥記ニ、東海大明之墟有ニ蓬山ニ出ニ瑞雲ニ、應ニ王者之符節ニ。

【瑞雨】（ズイウ）　音義　芽出度き雨をいふ。出典　南史虞寄傳ニ、大同中嘗隙雨、殿前往往有ニ雜色寶珠ニ、梁武觀ニ之甚ニ喜色ニ、因寄上ニ瑞雨頌ニ。

【瑞雪】（ズイセツ）　音義　芽出度き雪をいふ。出典　張正見の玄圃觀春雪詩ニ、同雲遙映ニ、嶺瑞雪近浮ニ空ニ。

【瑞鳶】（ズイエン）　音義　芽出度き鳶をいふ。出典　許敬宗の披庭山賦ニ、擊雁陣ニ于石鏡、法ニ瑞鳶ニ于雲堂ニ。

【瑞氣】（ズイキ）　音義　芽出度き雲の如きモヤをいふ。出典　晉書天文志ニ、星氣一曰ニ慶雲、若ニ煙非ニ煙、若ニ雲非ニ雲、郁郁紛紛、蕭蕭然、瑞氣也。

【瑞年】（ズイネン）　音義　芽出度き年なり。出典　李幡の遊ニ禁苑ニ陪ニ幸臨渭亭ニ、遇ニ雪應ニ瑞年ニ、六出迎ニ仙漢ニ、千霜答ニ瑞年ニ。

【瑞物】（ズイブツ）　音義　芽出度き物をいふ。出典　李白の明堂賦に、神休傍臻、瑞物咸薦。

【瑞麥】（ズイバク）　音義　芽出度き麥なり。出典　宋史樂志に、太宗太平興國九年、嵐州獻ニ祥麟ニ、雍熙中蘇州貢ニ白麥ニ、瑞拱初復州河清、廣州鳳凰集、諸州麥兩穗三穗者連歲來上ニ、有司請ニ以此五瑞ニ爲ニ祥麟・丹鳳・河清・白麥・瑞麥之曲ニ、薦ニ于朝會ニ用ニ之。

【瑞芝】（ズイシ）　音義　芽出度き靈芝なり。出典　晉頭の賀封禪表に、遂登ニ日觀ニ、拜ニ雲封ニ、泥ニ瑞芝ニ、檢ニ珍玉ニ。

【瑞草】（ズイサウ）　音義　芽出度き草をいふ。出典　宋史輿服志に、論拱中詔作ニ瑞草・地毬路文方圓將帥、謂以ニ金魚ニ、賜ニ中書樞密院文臣ニ。

【瑞香】（ズイカウ）　音義　瑞草花の名なり。出典　清異錄に、廬山瑞香花始緣ニ一比丘盡養ニ盤石上ニ、夢中聞ニ花香酷烈ニ、及覺求ニ得之ニ、因名ニ睡香ニ、四方奇ニ之ニ、謂爲ニ花中群瑞ニ、遂名ニ瑞香ニ。又た呂大防の瑞香圖序に、瑞香芳草也、其木高纔數尺、生ニ山坡間ニ、花如ニ丁香ニ、而有ニ黃紫二種ニ。

【瑞相】（ズイサウ）　音義　芽出度き人相をいふ。出典　王褒の京師突厥幸碑に、至ニ于善見ニ神ニ通瓶沙ニ、瑞相ニ波斯錄ニ金優ニ、壞ニ、木ニ、莫ニ不ニ歸ニ依等覺ニ、聽ニ向佛乘ニ。

【瑞鳥】（ズイテウ）　音義　芽出度き鳥なり。出典　食經に、鸞・瑞鳥一曰ニ雜鄙ニ。

【瑞禽】（ズイキン）　音義　前條ニ同じ。出典　宋史燕懿王德昭傳に、德昭子惟吉五歲、日讀ニ書師ニ詩、帝嘗射ニ飛禽ニ、一發而中、惟吉從、旁雀躍、喜甚、帝亦喜、錫ニ黃金ニ爲ニ奇獸瑞禽ニ賜ニ之ニ。

【瑞烟】（ズイエン）　音義　芽出度き烟をいふ。出典　杜甫ニ寄賈司馬制詩ニ、半嶺通ニ佳氣ニ、中峰繞ニ瑞烟ニ。

【班瑞】（ハンズイ）　音義　諸侯が天子に朝するとき玉を天子に呈し、既に見えたる後之を諸侯に頒ち還へすなり。出典　書經舜典篇に、輯ニ五瑞ニ、既ニ月、乃日覲ニ四岳羣牧ニ、班ニ瑞于羣后ニ。

【瑞草魁】（ズイサウクワイ）　音義　茶の異名。出典　杜牧の茶山詩に、山實東南秀、茶稱ニ瑞草魁ニ。

【瑞世瓊瑤】　音義　太平の世の瑞物の義、故事成語考の注に、唐史、李賀字長吉、爲ニ承旨ニ、韓昌黎美ニ之ニ曰ニ瑞世之瓊瑤ニ也。新唐書本傳を按ずるに、此の文なし、而して李賀は、承旨の官に拜せず。

【翠然】（スイゼン）　音義　みどり色なるをいふ。出典　馬融廣成頌に、遊煙羣鷺、晨鳧翠作、翠然雲起、雪飄霞落。

【翠葉】（スイヨウ）　音義　青葉にかゝれる雨なり。出典　文徵明の詩に、翠雨滴ニ深篠ニ、と。又た陳旅建の詩に、城深翠雨迴。

【翠華】（スイクワ）　音義　翡翠の羽をもて飾りたる華麗なる旗なり。出典　司馬相如の上林賦に、建ニ翠華之旗ニ、樹ニ靈鼉之鼓ニ、と。又た沈約の詩に、方侍ニ翠華輿ニ、遙適ニ瑤池宴ニ、と。又た杜甫の詩に、憶昔過ニ幸新豐宮ニ、翠華拂ニ天來向ニ東。

【翠微】（スイビ）　音義　もと山の色をいふ、其の用法二樣あり。㊀山の中腹の處をいふ。㊁山の氣のモヤ〳〵としたるをいふ。出典　㊀爾雅ニ、山未ニ及ニ上ニ曰ニ翠微ニ、疏ニ、山未ニ及ニ頂上ニ、在ニ突・陂陀之處ニ、山氣青縹色、故曰ニ翠微ニ也、と。又た慣用漫筆に、雅俗稽言を引て云ふ、凡山遠望之、則翠、近之則翠漸微、故曰ニ翠微ニ、と。又た岳飛の詩に、經ニ年塵土滿ニ征衣ニ、得得尋ニ芳上ニ翠微ニ。㊁左思の蜀都賦に、鬱茫茫以翠微ニ、馬衛ニ青草ニ、嘶ニ杜甫の詩に、彩蠶ニ翠微ニ、と。

【翠霄】（スイセウ）　音義　ミドリの色の天空をいふ。出典　馮衍の此は宮殿の內に喻ふ。出典　望丁復の詩に、翠霄深處想ニ環樓ニ。

【翠雲】（スイウン）　音義　色の雲をいふ。出典　馮志賦に、鼇ニ紫蚪ニ而聽ニ鈴令、乘ニ翠雲ニ而相佯。

【翠霞】（スイカ）　音義　青き色の霞をいふ。出典　雲笈七籤に、秀葉翳ニ翠霞ニ、停陰清ニ冷渚ニ。

【翠霧】（スイム）　音義　ミドリ色のモヤをいふ。出典　王筠の望夕霽詩に、空樹合ニ翠霧ニ、遙峰凝ニ翠露ニ。

【翠靄】（スイアイ）　音義　ミドリ色のキリをいふ。出典　柳宗元の詩に、丹霞翠靄鬱ニ奇香ニ。

【翠煙】（スイエン）　音義　ミドリ色の煙をいふ。出典　本草に、龍涎惟入ニ諸香ニ、焚之、則翠煙浮ニ空ニ。

【翠空】（スイクウ）　音義　青き色の空をいふ。出典　唐太宗の出獵詩に、怪獸潛ニ幽壑ニ、驚禽散ニ翠空ニ。

【翠虛】（スイキヨ）　音義　青き色の空虛（ソラ）をいふ。出典　杜甫の寄劉峽州伯華使君詩に、翠虛捎ニ鵰翎ニ、丹棘上ニ鵷鸞ニ。

【翠峰】（スイホウ）　音義　ミドリ色の峰をいふ。出典　蜀太后徐氏の元都觀詩に、瀑布迸衝青石碎、蟠莒橫篇翠峰齊。

【翠巒】（スイラン）　音義　ミドリ色の山の中腹をいふ。出典　江淹の思北歸賦に、跨ニ金峰與ニ翠巒ニ、涉ニ桂水與ニ碧瀾ニ。

【翠巘】（スイゲン）　音義　ミドリ色なる險はしき山をいふ。出典　高士傳に、息意三年、風餐翠巘。

【翠屏】（スイヘイ）　音義　山の聳ゆるを、ミドリの屏風を立てたるに喻へていふ。出典　歷山後錄に、清輝賜對、蓋草如ニ青天ニ、翠屏初至、白雲英英起ニ山腰ニ、已而山披、翠朝、變態不ニ常ニ。

【翠波】（スイハ）　音義　ミドリ色の波をいふ。出典　皮日休の訶陵檀詩に、一片盛魚殺、其中生ニ翠波ニ。

【翠浪】（スイラウ）　音義　前條ニ同じ。出典　孟郊の皇浪多ニ萍蓋ニ。

【翠濤】（スイトウ）　音義　前條ニ同じ。出典　唐太宗の賜ニ魏徵ニ詩に、醽醁勝ニ鄭生ニ、翠濤過ニ玉瀣ニ。

【翠巖】（スイガン）　音義　ミドリ色の彩色をなしたる宮殿をいふ。出典　司空曙の元日觀早朝詩に、鳳旗當ニ翠巖ニ、輦敕滿ニ彤庭ニ。

【翠閨】（スイケイ）　音義　ミドリ色に塗りたる奧座敷をいふ。出典　許景先の詩に、紅樓

曉鶯啼、春風吸翠閨。

【翠樓】（スイロウ）　翠樓ミドリ色に塗りたる樓なり。出處攬轡錄に、過相州市、有泰樓・翠樓・廉樂樓、月白風清樓、皆旗亭也。

【翠臺】（スイダイ）　翠樓ミドリ色の瓦を以て葺けるを云ふ。出處朱有燉の詩に、春日醉酥上翠臺。

【翠壁】（スイヘキ）　翠巖山の崖などにて、青々として壁の如くなるをいふ。出處九華山錄に、獨秀巖翠壁橫峙可愛。

【翠蛾】（スイガ）　翠蛾女の青き眉をいふ。出處乾淳歷時記に、元夕內人及小黃門、百寮皆中裏、翠蛾、盛街坊清樂傀儡、綽綽於燈月之下。

翠蛾面條に同じ。出處古今注に、綠宮人多作翠眉、號翠蛾。

【翠眉】（スイビ）

【翠光】（スイクワウ）　翠羽ミドリ色の羽毛なり、翠の鳥の飛ぶ光をいふ。出處楊巨源の衙魚翠鳥詩に、臂破得金魚一點翠光去。

【翠氣】（スイキ）　翠氣青々としたる氣をいふ。出處揚雄の甘泉賦に、曳紅采之流離兮、飛翠氣之寃延。

【翠黛】（スイタイ）　翠黛山の遠くして青きを、女の眉を黛ミドリなるに喩ふ。出處杜甫の詩に、長安慈恩寺有數女仙、夜遊、題詩云、黃子破頭好月明、躡踏華筵到曉行、雖波山色翠黛橫、折得落花還恨生、化爲白鶴飛去。

【翠衣】（スイイ）　翠衣ミドリ色の衣をいふ。出處說苑に、襄城君衣翠衣、帶玉劍、履鳶舄、立乎流水之上、大夫莊辛過而說之。

【翠袖】（スイシウ）　翠袖ミドリ色の袖をいふ。出處杜甫の佳人詩に、天寒翠袖薄、日暮倚修竹。

【翠裳】（スイシヤウ）　翠裳ミドリの色のモスソをいふ。出處馬詡常の次前無題詩に、詩ふ。

翠鈿　翠鈿ミドリ色のスダレをいふ。出處元稹の憶事詩に、明月滿庭池水綠、翠鈿珊珊卷簾看。

【翠簾】（スイレン）　翠簾青きスダレをいふ。出處鮑照見鶴紙絹、翠簾。

【翠幔】（スイマン）　翠幔ミドリ色の幕掛なり。出處顯野王の豔歌行に、當開翠幔卷、散翹金星出。

【翠帳】（スイチヤウ）　翠帳ミドリ色のトバリをいふ。出處謝朓の擬風賦に、開翠帳之輕鳴。

【翠暮】（スイボ）　翠暮ミドリ色のマグレなり、雲の形容にいふ。出處潘岳の藉田賦に、青塊藝、翠暮號、以布雲。

【翠髻】（スイケイ）　翠髻ミドリの髮をマゲにすることなり。出處顧瑛の宮詞に、賽雀玉蟬鬟、翠髻、銀鵝金鳳踏文茵。

【翠蓋】（スイガイ）　翠蓋ミドリ色の絹にて張りたる蓋。出處淮南子に、遊於江海海蓋、聽聚議、建翠蓋。

【翠旗】（スイキ）　翠旗ミドリ色なる旗をいふ。出處夏侯湛の東狩賦に、擢翠旗、垂繁纓、徹雲垂、軒清風引旌。

【翠蕤】（スイレン）　翠蕤ミドリ色に塗りたるヲグルマをいふ。出處北史突厥傳に、帝幸啓人所居賦、詩曰、鹿塞鴻旗翠、龍庭翠蠻回。

【翠鳳】（スイホウ）　翠鳳ミドリ色なる鳳凰。出處李斯の諫逐客書に、建翠鳳之旗、樹靈鼉之鼓。

【翠羽】（スイウ）　翠羽翡翠（カハセミ）の羽毛をいふ。出處漢書江都易王非子建傳に、遣人通越、蘇王閩侯遺以錦帛奇珍、蘇王閩侯、赤漆、建筰、珠璣、犀甲、翠羽、蝮熊、奇獸。

【翠竹】（スイチク）　翠竹青々たる竹をいふ。出處洛陽伽藍記に、寶光寺園中有一海雙咸池、蔽茨拔岸、芰荷覆水、青松翠竹、羅生其旁。

【翠筠】（スイイン）　翠筠青き竹の茂りたるをいふ。出處橋巨源の池上竹詩に、翠筠入疎柳、清影拂池荷。

【翠羽編簾】（スイウヘンレン）　翠羽翡翠（カハセミ）といふ鳥の羽を以て編みたる簾なり。出處鄧賦錦賦自注に、洞冥記曰、元鼎元年、帝（漢武）起招仙閣於甘泉宮西、編翠羽麟毫爲簾。

【翠以羽自殘】（スイ）　翠以羽自殘なる羽あるを以て卻つて殺さるをいふ。出處劉子新論に、翠以羽自殘、龜以智自害、丹以含色膠、肌、石以抱能碎質。

出處困學紀聞に、莊子云、蘭以芳自燒、膏以明自煎、翠以羽殃身、蚌以珠自戒。

【翠華拂天來向東】（スイ）　翠華唐人の詩の章國錄事宅觀曹將軍畫馬圖引の詩に、憶昔巡幸新豐宮、翠華拂天來向東、龍顏孟落三萬匹、皆與此圖筋骨同。

篁

【篁策】（スイサク）　篁策ムチなり。出處馬策をいふ、孔子家語に、不能御民者、棄其法、專用刑辟、譬猶御馬、棄其銜勒、而專用鍾策、其不傷者鮮矣。

【篁轡】（スイヒ）　篁轡馬のムチとタヅナなり。出處漢書王吉傳に、口倦乎叱咤、手苦於鞭轡、身勞乎車輿。

五　醉

【醉人】（スイジン）　醉人酒に醉ひたる人。出處酉陽雜俎に、如醉人。

【醉貌】（スイバウ）　醉貌酒に醉へるさまをいふ。出處白居易の詩に、醉貌如霜葉、雖紅不是春。出處蘇軾の詩に、兒童誤喜朱顏在、一笑那知是酒紅。○鄭谷の詩に、衰鬢霜供白、愁顏酒借紅。○杜甫の詩に、

【醉狂】（スイキヤウ）　醉狂酒に醉ひて狂ふをいふ。出處石曼卿の詩に、醉狂鼓掌舞。

【醉聖】（スイセイ）　醉聖唐の李白の綽號。出處宋の曾子野の酒譜に、李白每醉爲一女、未嘗差、人目爲醉聖。白樂天自稱醉尹、皮日休自稱醉士と。又た開天遺事に、李白嗜酒不拘小節、然沈酣中所撰文章、未嘗錯誤、而與不醉之人、相對議事、皆不出太白所見、時人號爲醉聖。

【醉尹】（スイイン）　醉尹唐の白樂天の稱。出處前條を見よ。

【醉士】（スイシ）　醉士唐の皮日休の稱。出處醉聖及び醉吟先生の二を見よ。

【醉漢】（スイカン）　醉漢酒に醉ひたる男なり。出處開天遺事に、張曲江曰、李林甫議事如醉漢語と。又た劉克莊の詩に、年可五十前稱醉漢也、勝死後謚愚公と。又た近思錄に、程子謂謝顯道曰、與賢記話、卻似扶醉漢。

【醉石】（スイセキ）　醉石陶淵明の愛せし石の名。出處廬山記に、陶淵明所居栗里有大石、淵明常醉臥於其上、名曰醉石。

【醉輿】（スイヨ）　醉輿唐の申王が酒に醉ふて輿に乘りし故事なり。出處開元遺事に、申王每醉、使宮妓將錦繩結一兒子、擔歸寢室、號曰醉輿。

【醉翁】（スイオウ）　醉翁歐陽修の別號なり。出處陽修の醉翁亭記に、太守與客來飲于此。飲少輒醉、而年又最高、故自號曰醉翁也。出處歐陽公が醉翁と號せしは、正に四十歲の時なり、翁と稱するは、戲言なり、故に餘冬序錄に、公他日題醉博士二歌、我昔被謫居滁山、名雖爲翁實少年と。又た慎夏後筆に、公贈沈遵一詩云、沈夫子、君過滁陽、今幾時、滁人皆喜醉翁既、至今人人能言之、長昆山閒逸太守、筐輿酩酊獅花歸、我時四十猶強力、自號醉翁聊戲客、爾來憂患十年閒、鬢髮未老嗟先白、今觀此詩、則公之號醉翁、及蒼顏白髮、同屬實言、不必早衰之人、文人弄筆、宜言固多、是亦其一也。

【醉鄉記】（スイキヤウキ）　醉鄉隋の大儒、王通の弟王績の作りし文章なり、績、酒を嗜み、醉中の趣を述べて醉鄉と名けしなり。出處北夢瑣言に、唐東皐子王績字無功有杜康廟碑、詩鄉記、備言酒德と。又た醉鄉記に、醉之鄉去中國、不知其幾千里也、其土曠然無涯、無丘陵阪險、其氣和平一揆、無嗜欲憂患、其俗大同、無邑居聚落、其人甚淸、無愛憎喜怒、飲風飲露、不食五穀、其終于壽、其行徐徐、與鳥獸魚鱉雜處、不知有舟車器械之用、昔者葛氏嘗往遊、其國歸而者然喪、其天下以爲結繩之政已薄矣、降及堯舜、作爲千鍾百壺之飲、因姑射神人、以假道、蓋至其邊鄙、終身太平、禹湯立法、禮繁樂雜、數十代與醉鄉隔、其臣義和奔甲子、而逃、冀樂其鄉、失路而遂夭、故天下遂不寧、至乎末孫桀紂、忘而昇、其精丘、階級千仞、南向而望、卒不見醉鄉、武王得志于世、乃命公旦、文酒人氏之職、典司五賓、拓土七千里、僅與醉鄉連焉、三十年刑措不用、下逮周厲、迄乎秦漢、巴國喪亂、遂與醉鄉絕、而臣下之愛道者、往往竊至焉、阮嗣宗・陶淵明等十數人、皆游于醉鄉、沒身不返、死葬其鄉、中國以爲酒仙云、嗟乎醉鄉氏之俗、豈古華胥氏之歸乎、何其淳寂也如是、余將游焉、故爲之記。

【醉翁亭記】（スイオウテイキ）　醉翁亭記歐陽公の文集に載す、近くは唐宋八家文讀本に出づ。又た詩人玉屑に、風雅遺音を引いて云、歐陽公如淳日、自號醉翁、因以名亭作記、山谷嘗語其詞、合以解律、作瑰麗仙云、環滁皆山也、望蔚然深秀琅琊山也、山行六七里有泉、然泉上醉翁亭也、翁之樂也、得之心寓之酒也、更野芳佳木風高日出景無窮也、游也、山有野蔌酒肉泉香沸觥籌也、太守醉也、諠譁衆賓歡也、況宴酣之樂、非絲非竹、太守樂其樂也、問當時太守爲誰、醉翁是也、一記凡數百言、此詞備之矣、山谷其黃鶴括

如し此。

【醉吟先生】（スイ）　意義 ㊀唐の白樂天の號なり。㊁唐の皮日休の號なり。出處 ㊀唐書白居易傳に、居官纔病去、遂無立功名意、與弟行簡從祖弟敏中友愛、東都所居履道里、疏沼種樹、裁石樸、香山繫八節灘、自號醉吟先生、爲之傳、著節稱香山居士。又た白氏長慶集に、醉吟先生傳を載す。曰く醉吟先生者、忘其姓字鄉里官爵、忽忽不知吾爲誰也云云、陶陶然、昏昏然、不知老之將至、古所謂得全於酒者、故自號爲醉吟先生云云。㊁唐才子傳に、皮日休隱鹿門山、性嗜酒、有詩、號醉吟先生、又自稱醉士。

【醉生夢死】（スイ）　意義 何の爲す所もなく一生を終るをいふ。出處 程子語錄に、蓋し高才明智、膠于見聞、醉生夢死、不自覺也。

【醉者神全】（スイ）　意義 酒に沈醉する者は私意を無くす、故に神全といふ。出處 列子黃帝篇に、夫醉者之墜於車也、雖疾不死、骨節與人同、而犯害與人異、其神全也、乘亦弗知也、墜亦弗知也、死生驚懼、不入乎其胸、是故遭物而不慴、被得全於酒、而猶若是、而況得全於天乎。

【誰何】（スイカ）　意義 ㊀姓名の明ならざる者をいなり、何は猶ほ問のごときなり。出處 ㊁莊子に、不知其誰何と。又た淮南子に、不知爲之者誰何。㊂賈誼の過秦論に、良將勁弩守要害之處、信臣精卒陳列而誰何。意義 二の誰何の何は、訶又は呵として用ひられたるなり、漢舊儀に、宿衛郎官分五夜誰呵と。これ即ち誰何なり。

【誰昔】（スイセキ）　意義 疇昔に同じ、誰は發語の辭。出處 詩經陳風墓門篇に、墓門有梅、斧以斯之、夫也不良、國人知之、知而不已、誰昔然矣。意義 人々セメ、ノノシルなり。出處 漢書賈誼傳に、毋取糞壤、立

許

【許語】（スイゴ）　意義 雜と矢となり、物の疾きに譬ふ。出處 淮南子兵略訓に、積弩如雷霆、發如離矢、合如雷電、解如風雨。面詐語。

錐

【錐矢】（スイシ）　意義 陪後、錯車衢、旁、疾如離矢、合如雷電、解如風雨。

【錐刀之末】（スイ）　意義 些細なる利益といふこと。出處 左傳昭公六年に、錐刀之末、將盡爭之。

【以錐刀墮泰山】（スイ）　意義 微力を以て強大に敵するも、毫も之を傷つくること能はざる意なり。出處 荀子議兵篇に、以詐遇齊、譬之猶以錐刀墮太山也。

隧

【隧道】（スイダウ）　意義 地を掘りて溝の如くにして、其の中を通行し得らるゝやうにするをいふ。出處 管仲杜預傳に、預先爲遣令、曰、吾往爲驪郎、管管以公事使、過密縣之邢山、其造家居山之頂、其隧道唯容其後而空、其前不可解之示藏無珍寶、不取於重深也。

【隧埏】（スイエン）　意義 墓の道なり、地中を隧といひ、地上を埏といふ、埏又た羨に作る。出處 後漢書陳蕃傳に、民趙宣葬親而不閉隧埏と。又た周禮冢人の鄭注に、隧、羨道也と。疏に、隧道則上有貧士、謂若鄭莊公子母相見地隧而相見者、羨道上無負土、對則異、散則通。意義 地中の道なり。出處 淮南子隱、井隧通、此司空之官也。

【隧路】（スイロ）　面條に同じ。出處 三國魏志高句麗傳に、其國東有大穴、名隧穴、十月國中大會、迎隧神、還于國東上祭之、置木隧于神坐。

【隧分】（スイブン）　意義 物には皆其分限あるなり。出處 白居易の詩に、蓬蒿隨分有榮枯。

【隧身】（スイシン）　意義 大臣に從ふて儀衛に列するものをいふ。出處 漢書貨殖傳に、隨身數十百。

隨

【隨喜之淚】（ズイ）　意義 俗語にクレシ淚といふ。出處 法華經隨喜功德品に、世尊說是法、我等皆隨喜と。注に、隨は、事理に隨順し、無二無別、喜は是れ己を隱し人を慶す、己を慶するは、智慧、人を慶するは慈悲と。

【隨園詩話】（ズイ）　意義 書名。出處 清の袁枚の卷とあり、此書は詩に關する論說記事を筆に隨ひて錄したるものにして、毫も倫次なし、多く同時の人の事を錄し、聞々古人に論及することあり。

【隨駕隱士】（ズイ）　意義 駕は車駕なり、身は山中に在れども、志は仕官せんとするに在るを嘲りていふ。出處 世說輕逸下篇に、盧藏用初隱終南少室二山、時

有、意、當世、人目爲隨駕隱士。

【隨園三十種】（ズイ）　意義 書名。出處 清の袁枚の撰にして、凡て二百四十一卷あり、小倉山房文集、及詩集、袁太史稿、隨園尺牘、及詩話、玉山堂詞、飲水詩鈔等の書を收めたり。

【隨分笙歌聊自足】（ズイ）　意義 居人の詩の句。出處 白居易の重答劉和州の詩に、分無佳麗敵四施、敢有文章替左司、隨分笙歌聊自樂、等閑當詠被人知、花邊妓引尋香徑、月下僧留宿劍池、可惜當時好風景、吳王應不解吟詩。

【隨陸無武絳灌無文】（ズイ）　意義 前漢の隨何と陸賈とは、文學に長じたるも、武勇なし、故に高帝の世に在つて大功を建つる能はず、絳侯周勃と灌嬰とは、武勇はあれど、文學に長ぜざれば、文帝を輔けて漢の學業を盛にする能はざりしをいふ。出處 管書劉元海載記に、幼好學云云、無不綜覽、嘗謂同門生曰、吾每觀書傳、常鄙隨陸無武絳灌無文、道由人弘、一物之不知者、固君子之所恥也、二生遇高皇、而不能建封侯之業、兩公隱太宗、而不能開庠序之美、惜哉。

燧

【燧象】（スイヤウ）　意義 戰時の奇策にて、火を燒き、象の尾につけて敵に赴かしむるをいふ。出處 左傳定公四年に、鍼尹固與王同舟、王使執燧象、以奔吳師、杜注に、燧、火燧、繫象尾、使赴吳師、驚卻之。

遂

【燧人】（スイジン）　意義 太古火食を創めし人。出處 徐幹の中論に、太昊觀天地而寶斗、燧人察時令而寶火、帝軒開風鳴而調律、倉頡觀鳥跡而作書、斯大聖之學乎。

【鑽燧】（スイ）　意義 火を取るをいふ。出處 論語陽貨篇に、舊穀既沒、新穀既升、鑽燧改火、期可已矣。

【遂宇】（スイウ）　意義 大なる家屋なり。出處 宋玉の招魂に、高堂邃宇。

雖

【雖不逝】（スイ）　意義 苗の秀でて美好なる喩。出處 詩經大雅生民篇に、禾役穟穟と。

【雖陸】（スイ）　意義 項羽の故事にて、氣衰へ力盡きて、爲す可きなき境遇に陷りたるをいふ。出處 史記項羽紀に、項王軍壁垓下、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍之數重、夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎、是何楚人之多也、項王則夜起飲帳中、有美人名虞、常幸從、駿馬名騅、常騎之、於是項王乃悲歌慷慨、自爲詩曰、力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何、歌數闋、美人和之、項王泣數行下、左右皆泣、莫能仰視。

藥

【藥珠】（スイシュ）　意義 宮闕の稱。出處 黃庭內景經長君閒居蘂珠、上清紫霞虛皇前太上大道玉珠、上清境宮闕名也と。梁邱子注に、藥開蘂珠、作七言と。梁邱子注に、藥開蘂珠殿。

髓

【洗髓伐毛】（スイ）　意義 生れ變る義。出處 洞冥記卷二に、東方朔、以元封中、遊鴻濛之澤、有黃翁告朔曰、吾卻食穀氣、已九千餘歲、三千歲一反骨洗髓、二千歲一刻骨伐毛、吾生已三洗髓、五伐毛矣。

足

【足恭】（スウキヤウ）　シの部足（シュ）恭を見よ。

芻

【芻豢】（スウクワン）　意義 草を食ふ畜を芻と曰ふ、牛羊なり、穀を食ふを豢と曰ふ、犬豕なり。出處 孟子告子上篇に、理義之悅我心、猶芻豢之悅我口と。又た荀子に、人之情、食欲有芻豢。

【芻蕘】（スウジウ）　意義 芻は草なり、蕘は薪なり。出處 孟子梁惠王下篇に、文王之囿方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉、與民同樂也。

【芻狗】（スウ）　意義 芻は草なり、草を結び狗となし、以て祭時の用に供し、祭終ればこれを棄つるなり、用あればこれを用ゐ、用なければこれを棄るをいふ。出處 老子第五章に、天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗。

【芻靈】（スウレイ）　意義 藁人形にして、死者と共に之を葬る。出處 禮記檀弓下篇に、孔子謂爲明器者、知喪道矣、備物而不可用也、哀哉、死者而用生者之器也、不殆於用殉乎哉、其曰明器、神明之也、殯車芻靈、自古有之、明器之道也、孔子謂芻靈者善爲偶者不仁、不殆於用人乎哉と。陳注に、芻靈、束草爲人形、以爲死者之從、略似人形、偶則設、略發動、全似人能踊躍也、今倡、偶不善曰作偶。

【芻米】（スウベイ）　意味 芻は草なり馬を飼ふもの、マクサなり、米はコメ。出典 左傳僖公二十九年に、公在會饋之芻米、禮也と。又た穆愈の與于襄陽書に、愈今者、惟朝夕芻米僕貧之資是念、不過、廢閑下一朝之享而足也。

【芻秣】（スウマツ）　意味 マグサ。出典 周書王思政傳に、於是修城郭、把椎、營田農積、芻秣、凡可以守禦者皆具焉、弘農之有備、自思政始也。

【芻糧】（スウリャウ）　意味 馬草と兵糧とをいふ。出典 五代史唐臣劉延朗傳に、是時高祖悉握精兵、在此、饋運芻糧、遠近勞弊。

【芻粟】（スウゾク）　意味 馬草と穀粟とをいふ。出典 宋史太祖紀に、乾德元年、高繼沖、籍其錢帛芻粟、來上。

【芻蕘】（スウジュウ）　意味 馬草と豆とをいふ。出典 魏書韓麒麟傳に、高祖賞之、謂曰、猶命之禮、有死無辱、辭流放海隅、猶宜抱節致頌、歸不能長揖歸首、已是可恨、何乃�飲啄、自同大馬、有生必死、修短幾何、剛若殺身成名、貽之竹素、何如、甘彼芻蕘、以辱君父乎。

【嵩】

【嵩高】（スウカウ）　意味 嵩山をいふ、五嶽の一にして、中央に在りて、高きを以てなり。出典 爾雅釋山に、嵩高爲中嶽と。又た白虎通に、中嶽稱加高字、中央在四方之中、可高、故曰嵩高。意味 詩經大雅崧高篇に、崧高維岳、峻極于天、維岳降神、生甫及申、維周之翰。

【嵩丘】（スウキウ）　意味 南絲に同じ。出典 宋之問の温泉莊臥病詩に、頷有嵩丘山、高枕長在目。

【嵩華】（スウクワ）　意味 嵩山、華山なり。出典 張載の銘閣銘に、狹過彭碣、高陰嵩華。

【嵩霍】（スウカク）　意味 嵩山霍山なり。出典 宋書魯爽傳に、漢人思步、宣者願明、嵩霍咫尺、江流匪遠。

【嵩衡】（スウカウ）　意味 嵩山衡山なり。出典 徐陵の文に、財輕義深、義重嵩衡。

【嵩南】（スウナン）　意味 嵩山の南方を指す。出典 李嘉祐の江湖秋思詩に、嵩南春徧傷魂夢、壺口雲深隔路岐。

【嵩呼】（スウコ）　意味 萬歲と唱ふること。天子に限りていふ。出典 宋史樂志に、都人歡樂嵩呼、震聖壽、總天鼇。意味 漢書武帝紀に、元封元年正月登嵩高、御史乘屬在廟傍、吏卒咸聞呼萬歲者三。

【嵩嶽降神】（スウガクコウシン）　意味 人の子を生むを賞していふ。出典 范傳正の翰林學士李公新墓碑に、銘曰、嵩嶽降神、是生韓臣。意味 嵩高の類語を見よ。

【嵩山表裏千重雪】（スウザンヘウリセンヂウノユキ）　句。出典 白居易の八月十五日夜同諸客翫月の詩に、月好共傳唯此夜、境閑皆道是東都、嵩山表裏千重雪、浪水高低兩顆珠、清景難逢宜愛惜、白頭相勸強歡娛、誠知亦有來年會、保得晴明强健無。

【下嵩山兮多所思】（スウ）　意味 唐人の詩。出典 宋之問の下山歌に、下嵩山兮多所思、攜佳人兮步遲遲、松間明月長如此、君再遊兮復何時。

【鄒】

【鄒魯】（スウロ）　意味 孟子は鄒の人、孔子は魯の人、故に孔孟といふことを鄒魯といふ、鄒は今の山東省袞州府鄒縣の東南にして、魯は今の曲阜なり。出典 莊子天下篇に、鄒魯之士搢紳先生と。又た南史羊侃傳に、鄒魯遺風、英賢不絕と。又た五活然の詩に、惟先自鄒魯、家世重儒風。

【鄒魯大儒】（スウロ）　意味 鄒と魯と二國に於ける大學者なり。出典 漢書韋賢傳に、賢爲人質朴少欲、篤志於學、兼通禮尚書、以詩教授、號稱鄒魯大儒。

【鄒魯遺風】（スウロ）　意味 鄒魯の學者の遺風あるをいふ。出典 梁書羊侃傳に、高祖製武宴詩三十韻、以示侃、侃即席應詔、高祖覽曰、吾聞仁者有勇、今見勇者有仁、可謂鄒魯遺風。

【鄒衍感五月之霜】（スウエン）　意味 鄒衍は齊の人にして、陰陽の理に通じ、天を仰ぐ哭すれば五月に天之が爲に霜を下すといふことなり。出典 淮南子に、衍事燕王、盡忠、左右譖之、王繫之獄、仰天而哭、五月天爲之下霜。

【鵝】

【飛鵝輓粟】（スウ）　意味 急運を運載して疾くを至らしむ、故に飛ばすといふ。輓は船車を引くなり。出典 漢書主父偃傳に、使天下飛芻輓粟起於東陳瑣邪負海之郡、轉輸北河、率三十鍾而致一石。

【數】

【數多】（スウタ）　意味 數の多くして知り難きをいふ。出典 文獻通考に、過、場數多者。

【數杯】（スウハイ）　意味 酒を飲み杯の數を重ぬること。出典 冥祥記に、顏倜數杯。

【數似】（スウジ）　イの部一（イチ）仞及びシの部仞（ジン）を見よ。

【數奇】（スウキ）　意味 不運なり、數は音スウ、奇なり、サクと讀むは非なり、奇は耦合せざるなり。出典 史記李將軍傳に、廣自請曰、臣願居前、先死單于、大將軍青赤除受上誠、以爲李廣老數奇毋令當單于、恐不得所欲と。又た漢書李廣傳の注に、孟康曰、奇隻不耦也、師古曰、言廣之命孤隻不耦合也、數、音所具反。意味 數字の音に就いて、癸辛雜識に、攷文類聚、馮道期集、吾數奇命薄、王維詩衞青不敗由天幸、李廣無功緣數奇、杜詩數奇謫關塞、道廣存箕穎、坡詩數奇逢惡歲、計拙集枯魚、觀其偶對、則數爲命數、非疏數之數とあり、引證該博にして、そのスウの音たることは明かなり。

【數量】（スウリャウ）　意味 數量に關する文字を聚めて其解釋を揭ぐ。

出典 百。說文に、十十也、从一白、數十十爲百。千。說文に、十百也。○萬。說文に、十千也。○億、兆、康熙字典に、十萬曰億。一說、億數不定と。又た禮記內則篇の正義に、筭法億之數有大小二法、小數以十爲等、十萬爲億、十億爲兆也、大數以萬爲等、萬至萬、是萬萬億也。

忽。集韻に、一蠶爲一忽。○糸。徐鍇曰、一蠶所吐爲忽、十忽爲絲、糸五忽也。○毫、鑑。謝察微算經に、十絲爲毫、十毫爲鑑。

茶。說文に、十黍之重也。○銖。說文に、權十分黍之重也と。又た前漢書律歷志注に、應劭曰、十黍爲絫、十絫爲銖。○錙。說文に、六銖也と。又た一說に、八銖也。○兩。玉篇に、二十四銖爲兩。○斤。漢書律歷志に、十六兩爲斤。○鈞。說文に、三十斤也。○石。書經五子之歌正義に、四鈞爲石。○鍰。孟子趙注に、鍰、二十兩也。一說に、鄭玄云、三十兩也。○釜。左傳昭公二年の注に、六斗四升也。○庾。左傳昭公二十六年の注に、十六斗也。○籔。禮記聘禮に、十籔曰秉と。又た小爾雅に、秉十六斛四斗。○鍾。左傳襄公二十九年の注に、八斛也と。又た淮南子要略訓に、鍾十斛也。

龠、合、升、斗、斛。漢書律歷志に、龠者黃鍾律之實、躍物動、氣而生、物也、容千二百黍、合龠爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛。○豆。左傳昭公二年の注に、四升爲豆。分、寸。漢書律歷志に、一黍爲分、十分爲寸、十寸爲一尺。○尺。周髀に、夏十寸爲尺、殷九寸爲尺、周八寸爲尺。○丈。說文に、十尺也。○堯。小爾雅に、五尺謂之堯。

尋。常。周禮地官縫氏注に、八尺曰尋、倍尋曰常。

步。畝。康熙字典に、司馬法六尺爲步、步百爲畝、秦孝公制二百四十步爲畝。○頃。玉篇に、田百畝爲頃。

弓。度地論に、二尺爲一肘、四肘爲一弓、三百弓爲一里、三百六十步爲一里、卽三百弓也。

倪。小爾雅に、四尺謂之倪と。又た孔安國曰、八尺曰仞。

板、堵、雉。說文に、版、垣也、一丈爲板、五板爲堵と。又た左傳隱公元年の注に、方丈曰堵、三堵曰雉。

端。小爾雅に、倍丈謂之端、倍端謂之兩、倍兩謂之匹。

【數闕】（スウケツ）　意味 數曲に同じ、闕は樂曲の終を言ふ。出典 史記項羽紀に、于是項王乃悲歌慷慨、自爲詩歌數闕、美人和之、項王泣數行下。

【數行淚】（スウカウナンダ）　意味 二三行の淚なり。出典 柳宗元の詩に、今來數行淚、獨上驛南樓。

【數行啼】（スウカウテイ）　意味 前條に同じ。出典 王昌齡の別李浦之京に、故園今在淄陵西、江畔逢君醉不迷、小弟隣莊貧漁獵、一封書寄數行啼。

【數行字】（スウカウジ）　意味 二三行の文章をいふ。出典 羊士諤の詩に、蜀國魚牋數行字、憶君秋夢過南塘。

【數行書】（スウカウシヨ）　意味 前條に同じ。出典 杜甫の酔歌公詩に、拾遺貧奉數行書。

【數頃田】（スウケイデン）　イの部一（イツ）頃を見よ。

【數行竝下】（スウ）　意味 二三町の田をいふ。出典 梁書昭明太子傳に、太子讀書數行竝下。意味 後漢書應奉傳に、泰壇書、五行竝下。○北史安讓之傳に、讓之弟敬之、嘗從羣賢借書百卷、十許日便返、景猷曰、應奉五行俱下、彌衡一覽便記、今復見裴生矣。○南史宋孝武帝紀に、四行、或は六七行、十行も、一時に讀み下すをいふ。出典 梁書昭明太子傳に、太子讀書數行竝下。意味 後漢書應奉傳に、泰壇書、五行竝下。○北史安讓之傳に、讓之弟敬之、嘗從羣賢借書百卷、十許日便返、景猷曰、應奉五行俱下、彌衡一覽便記、今復見裴生矣。○南史宋孝武帝紀に、

少機穎、神明爽發、讀書七行俱下、才藻甚美。○北齊書河南王孝瑜傳に、讀書十行俱下。【語】五鋒俎豆六に、人有二一目數行俱下者、非眞俱下也、但目捷耳、湛遠初去其者歲四五載、不但一二也、一覽無遺、則書有之矣、閑林誌、遊南窩染坊、得其染帳、渡閱之匆匆而去、越二日、其家回映、索帳者紛然莫知、爲計、林復過之曰、我能記之、取筆疾錄、不爽一字、此天生之資、非强記可到者、嘉禾周鼎、讀百韻詩、一遍即誦、又能從末倒誦、亦絕世之資矣、而功名不顯、蓋似有別才也。

【有數存于其間】【語】自然の道理の存在するをいふ。【出】莊子天道篇に、得之于手、應之于心、口不能言、有數存焉于其間。【出】蘇洵の木假山記に、予家有三峯、予每思之、則疑其有數存乎其間。

【樞機】【語】樞は、クルヽなり、戸の開閉するは此の樞に由る、機は弩の引き金なり、弩の張弛するは此の機に由る、因て事の肝要なる所を樞機といふ。【出】易經繫辭上傳に、言行君子之樞機、樞機之發、榮辱之主也と。又た淮南子人間訓に、知慮者禍福之門戸也、聰辯者利害之樞機也。

【樞要】【語】緊要の處をいふ、樞は戸の轉關に、人君者、首分之樞要也。

【樞星】【語】北斗の第一星をいふ。【出】宋書符瑞志に、黃帝母曰附寶、見大電光繞北斗樞星、郊野、感而孕、二十五月而生黃帝於壽丘と。又た漢信の周大將軍長孫侈碑銘に、身圖牛宿、面授樞星。

【樞相】【語】官名、樞密使をいふ、【出】文獻通考職官考に、樞密使、帶相印、爲樞相。

【樞衡】【語】肝要の職をいふ、【出】魏書韓子熙傳に、竊惟故主大傅濟河王、職綜樞衡、位居輪道、德心忠貞、以奉公、錫心管、以事國。

【樞紐】【語】文章の肝要の所をいふ。【出】文心雕龍に、蓋文心之作也、本乎道、師乎聖、體乎經、酌乎緯、變乎騷、文之樞紐、云赤縛奏。

【樞務】【語】肝要の事務をいふ。【出】白居易の寄醒者詩に、去是右丞相、當國掌樞務。

【樞屬】【語】肝要なる職務を執れる人の下役なり。【出】楊萬里の承旨檢詳編修題名記に、樞屬與宰屬、異劇與暇也、

【樞柄】【語】樞柄といふに同じ。【出】唐書太宗文德順聖皇后長孫氏傳に、妾家以恩澤進、無德而祿、易以取禍、以外戚、率朝請足矣。

【樞要】【語】肝要の處をいふ、軸は車の樞、樞は戸の轉關、至和埃坦今玉烟獻、奇、樞軸旋轉、令萬器無期。

【樞密】【語】ることを掌る官衙をいふ。【出】唐書百官志に、中書舍人以久次者一人、爲閣老、判本省雜事、又一人知制誥、掌草詔、給食於殿事堂、其餘分番制敕、以六員分、押御寶、六寶佐宰相、判案到、署乃奏、惟樞密進奏不預。

【樞府】【語】肝要なる事務を掌る官衙なり。【出】隋唐嘉話、韓愈志に、陳執中在樞府、建排讓、頭夏竦使人上歎樞府不得人、於是王殿張觀、執中告罷。

【樞近】【語】天子に接近する肝要なる位置にある人、即ち大臣の如きをいふ。【出】幽閒鼓吹に、李德裕鎮揚州、監軍使楊欽義迫人、必爲樞近、而德裕致禮、皆不越常、欽義心銜之。

【樞密使】【語】宋史職官志に、樞密使、知院事、佐天子執兵政、而同知副使簽書爲二貳と。又た文獻通考に、唐代宗置內樞密使、以宦者爲之、其職掌惟承受表奏于內中、進呈若人主有所處分、則宣付中書門下施行。

【綰摺】【語】綰は紐の縮みたるもの、その如くシかにするをいふ。【出】童蒙須知に、凡書册須要愛護、不可褻污綰摺。

【趨風】【語】人を敬ふて其の前を疾く走ること風の如きなり。【出】左傳成公十六年に、郤至三遇楚子之卒、見楚子必下免胄而趨風。

【趨舍】【語】趨は走る、舍は止るなり、進退といふが如し。【出】史記伯夷傳に、鑿穴之士、趨舍有時。

【趨辦】【語】急速の時に間に合ざるをいふ。【出】漢書薛宣傳に、吏敏捷以趨辦、言有取捨。顏注に、言有取捷。

【趨炎附熱】【語】權勢ある人の機嫌を取ること。【出】宋史李垂傳に、見大臣不公、常欲面折之、焉能趨炎附熱、看人眉睫、以冀權貴乎。

【趨數煩志】【語】きをいふ。【出】禮記樂記篇に、文侯曰、敢問溺音何從出也、子夏對曰、鄭音好濫淫志、宋音燕女溺志、衛音趨數煩志、齊音敖辟喬志、此四者、皆淫於色、而害於德、是以祭祀弗用也。

【鯫生】【語】①鯫は小魚なり、故に小人いふ。【出】①史記項羽紀に、沛公曰、鯫生說我曰、距關毋內諸侯、秦地可盡王也と。集解に、徐廣曰、鯫音士后反、魚名、駰案、服虔曰、鯫音淺、小人貌也、蘇林曰、楚漢春秋、鯫姓也。②趙孟頫の詩に、鯫生小技眞榮遇。

【鞠虞】【語】①獸の名なり、詩經毛傳に、義獸なり。白虎にして黑文、生物を食はず、至信の德あらば則ち之に應ずと。陸機の疏に、鞠虞は、尾は軀より長くして、生草を屋まずと。②天子の囿に獸を畜へる處を掌る人。【出】①詩經召南鵲巢篇に、彼茁天子之囿也、虞者、囿之司獸者也。

【鞠使】【語】隨從の護衛兵をいふ。【出】秋燈叢話に、一進官肩輿至、擁鞠使之盛。

【鞠子】【語】戰國の世に鞠を姓とせる辯士三人ありしをいふ。【出】史記孟子傳に、齊有三鞠子と。又た小學紺珠に、三鞠子、鞠忌、鞠衍、鞠輿。

【鞠從】【語】騎馬にて隨從するをいふ。【出】東齊紀事に、鮮符中、蔡文忠狀元及第、上命特給鞠從儀呼。

【鞠駕】【語】のリものをいふ。【出】汶約の少年新婚篇之詠、詩に、高門列鞠駕、廣路從驂駒。

【鞠騎】【語】騎馬をいふ。【出】曾鞏興服志に、大使車立乘、駕四、赤帷裳、鞠騎導從。

【末】スエ

【末大必折】【語】樹木の枝葉大なれば、本根を折る、借りて支族大なれば、本宗を滅すに喩ふ。【出】左傳昭公十一年に、末大必折、尾大不掉。【語】淮南子に、末不可以强於本、指不可以大於臂。

【妙】スカメ

【妙能視】【語】妙にして猶能く視るを得るは、自ら專らにせずして、一に上に承るを以てなり。【出】易經繫辭に、六三、眇能視、跛能履、履虎尾、咥人、凶、武人爲于大君。

【過】スキ

【過猶不及】【語】物事は、中道を過れば、反て及ばざるに同じ。【出】論語先進篇に、子貢問、師與商也孰賢、子曰、師也過、商也不及、曰、然則師愈與、子曰、過猶不及。

【宿世】【語】宿昔の世にて、前世のことをいふ。【出】千佛經に、宿世因緣。

【鮮】スクナシ

【鮮矣】【語】物の少きを歎惜せるなり。【出】論語學而篇に、巧言令色鮮矣仁。

【鮮哉】【語】すくない哉と、嘆息するなり。【出】漢岳の籍田賦に、皆者明王以孝治天下、其政繼之者、鮮哉希矣。

【知進不知退】【語】前へ出ることのみを知りて、後へ引くことを知らぬをいふ。【出】晏子春秋諫篇に、商紂蒙恬二子、知利不知害、知進不知退、故身死而家敗。

【進思盡忠退思補過】【語】臣が君を思ひ、退いて私宅に在るときは、君の過失を補ふことを思ひ、念々その君を忘れざるをいふ。【出】孝經事君章に、進思盡忠、退思補過、然順其美、匡救其惡と。又た左傳宣公十二年に、晉の荀林父、楚の爲めに敗られ、歸りて死を請ふ、士貞子諫曰、林父之事君、進思盡忠、退思補過、其敗如日月之食、於是焉在、是晉侯使復其位。

【爵入大水爲蛤】【語】爵は雀に通ず、大水は海なり、雀が海中に入りて蛤に變ずるなり。【出】禮記月令篇に、季秋三月、鴻鴈來賓、爵入大水爲蛤。

【裾】スソ

【引裾】【語】衣の裾を引き留めるをいふ。【出】三國魏志辛毗傳に、辛毗字佐治、潁川陽翟人、文帝踐阼、遷侍中、帝欲徙冀州士家十萬戶實河南、時連蝗、民飢、羣司以爲不可、而帝意甚盛、毗與朝臣俱求見、帝知其欲諫、作色以見之、皆莫敢言、毗曰、陛下不以臣不肖、置之左右、厠之謀議之官、安得不一言、臣聽、臣

所言非私、乃社稷之慮也、帝不答、起入内、既陸而引其裾、帝遂奮衣不還、良久乃出、曰、勉持我何太急邪、既曰、今徙既失民心、又無以食、帝遂徙其半。

【筋信骨強】（スジ）（実義）筋伸びて骨強きをいふ、信は伸なり。（出典）管子に、人能正靜、則皮膚裕寛、耳目聰明、筋信而骨強、乃能察六四、而服六方。

【既雕既琢復歸於朴】（ステニ）（実義）物は極に達すれば、又元へ返るものにて、木を彫刻して刻り盡せば元の無地となるなり。（出典）莊子山木篇に、荘周之、既雕既琢、復歸於朴、侗乎其無識、儻乎其忘疑、萃乎芒、其送往而迎來。（類語）莊子應帝王篇に雕琢復朴。

【聚沙而雨】（スナ）（実義）其の人を得て之に語れば其語の入り易きをいふ。（出典）說苑に、仲尼曰、非其地而樹之不生也、非其人而語之不聽也、得其人、如聚沙而雨之、非其人、如案牧而鼓之。

【排沙簡金】（スナ）（実義）文章の時に佳處あるを評したる語にて、沙を排するに、時々にキラ〳〵と金の光が閃めくが如くなりといふ。（出典）世說文學中篇に、孫興公云、潘文爛若排沙簡金、披錦、無處不美、陸文若芙蓉出淥波、陸機開天遣事に、潘岳為陸機、陸機開天遣事に、明皇燕諸學士於便殿、顧謂李白曰、陛與天后、任人如小兒市瓜、不擇香味、唯取肥大、白曰、陛下任人如淘沙取金、剖石採玉、皆得其精粹、上大笑。

【飛沙走石】（スナ）（実義）大に風の吹き起りし形容なり。（出典）搜神記に、武王時、恆州城南有大樹、為妖、以兵圍伐之、乃有神、飛沙走石、雷電霹靂、無令得近。

【含沙射人】（スナ）（実義）人の部沙（サ）邑を見よ。

【乃文乃武】（スナハチ）（実義）天子の德を譽めたるなり、天地を經緯するを文といひ、鞏固を敬定するを武といふ。（出典）經犬禹謨篇に、益曰、都、帝德廣運、乃聖乃神、乃文乃武。

【酒玉酒金】（スナハチ）（実義）文酔金玉の如く美なるをいふ、酒は乃に同じ。（出典）漢書揚雄傳に、昔人之辭、酒玉酒金。

【墨】（スミ）（実義）スミなり、書畫の用に供す。（出典）西京雜記に、漢何曾令僕承郎月給、論墨墨、魏晉間以黍燒烟和松煤、宋熙寧間張遇之、唐初高麗歲貢松烟墨、宋熙寧間張遇供御墨、始用油烟、入麝謂之龍劑。（類語）東坡の人が墨を減せるを詠ずるに、時々にキラ〳〵と金の光が閃めくが如くなりといふ。（出典）蘇軾の詩に、寸田尺宅可治生。

【惜墨如金】（スミ）（実義）湯筆を以て畫くを、いふ。（出典）古今名畫記に、李成作畫、惜墨如金と、又た經詩錄に、作畫用墨最難、但先用淡墨、積至可觀處、然後用濃墨、分出畦逕遠近、故花生紙上、有許多滋潤處、李成惜墨如金是也。

【磨墨如病夫把筆如壯士】（スミ）（実義）墨をするは手やはらかにせざれば墨汁あらくして筆のはこび自由ならず、筆を把るに力なければ、文字勁からず、故にいふ。（出典）明の陳繼儒の語なり、岩栖幽事に見ゆ。

【無欲速】（スミヤカ）（実義）事を急ずに其成功を急ぐべからざるを戒めたる語。（出典）論語子路篇に、子曰、無欲速、無見小利、欲速則不達、見小利則大事不成。

【速登者易顚】（スミヤカ）（実義）利餌の者は卻て高智周傳に、吾聞速登者易顚、徐進者少患、天道也。

【寸寸】（スンスン）（実義）一寸一寸毎にといふこと。（出典）漢書枚乘傳に、寸寸而度之。

【寸陰】（スンイン）（実義）極く僅かの時間を惜みて勤勉するを寸陰を惜むといふ。（出典）司馬法に、不寶咫尺玉、而愛寸陰、又た晉書陶侃傳に、大禹聖者、乃惜寸陰、至于衆人、當惜分陰。

【寸馬豆人】（スン）（実義）畫中遠景の人物をいふ。（出典）荊浩の畫山水賦に、見畫山水、意在筆先、丈山尺樹、寸馬豆人、遠人無目、遠樹無枝、遠山無礫、隱隱似眉、遠水無波、高與雲齊、此其訣也。

【寸田尺宅】（スン）（実義）些少の財産といふこと。（出典）蘇軾の詩に、寸田尺宅今誰耕と。又た黃庭經に、寸田尺宅可治生。

【寸鐵殺人】（スン）（実義）僅か一寸の刃物を以て人を殺すとて、文章議論等の多辭を用ゐずして要を得るを評する辭とす。（出典）鶴林玉露に、宋景論、禪云、譬如一人戴一車兵器、弄了一件、又取出一件、來弄、便不是殺人手段、我則只有一寸鐵、便可殺人、朱文公亦喜其戲、云云、曾子之守約、寸鐵殺人者也。

【訓寸信尺】（スン）（実義）小利を捨てゝ大利を得るにいふ。（類語）訓は屈なり、信は伸なり。（出典）文心雕龍に、訓寸以信尺、枉尺以直尋、棄傷善之巧、學具美之類と。又た淮南子に、訓寸而伸尺、聖人為之、小枉而大直、君子行之。

【進寸退尺】（スン）（実義）一寸を進めて一尺を退くるは得る所なきをいふ。（出典）老子第六十九章に、用兵有言、吾不敢為主而為客、不敢進寸而退尺、是謂行無行と。又た韓愈の上李侍郎書に、進寸退尺、卒無所成。

【得寸得尺】（スン）（実義）少しにても物を得れば、即ち我が有となるをいふ。（出典）戰國秦策に、范雎曰、得寸則王之寸、得尺亦王之尺也。

【寸地尺天皆入貢】（スン）（実義）唐人の詩の句。（出典）杜甫の洗兵馬行に、寸地尺天皆入貢、奇祥異瑞爭來送、不知何處教白環、復道諸山得金鼎。

【寸膠不能治黃河】（スン）（実義）膠（ニカワ）は水の濁りを止むるものなれども、僅か一寸の膠にては、黃河の濁流を治むることを得ず、因て僅少の力にては、大事を成す能はざるに喩ふ。（出典）抱朴子外篇嘉遁に、欲推短才以整甫同、仗獨是以彈衆非、寸膠不能治黃河之濁、尺水不能卻蕭邱之熱、是以身名並全、甚稱、而先矣後號者多有也。

【寸而度之至丈必差】（スン）（実義）少しづゝ量れば終りに至りて必ず差違あるをいふ。（出典）孔叢子に、寸而度之、至丈必差、銖而稱之至石必過、石稱丈量、徑而寡失と。又た枚乘の諫吳王書に、夫銖銖而稱之至必差、寸寸而度之、至丈必過、石稱丈量、徑而寡失と、又た說苑說叢篇に、云云、〔孔叢子に同じ〕簡絲數米、煩而不察、故石必差、寸寸而度之、至丈必過、石稱丈量、徑而寡失と、又た說苑說叢篇に、云云、大較易為智、曲辯難為慧。

セ

【世尊】（セイソン）（実義）一佛の十號の一なり。二釋迦をいふ。（出典）一法數に、謂以智慧等法、破生死苦、得無上覺、天人凡聖世間出世間咸皆尊重、故號世尊。二世嫁拈華迦葉微笑を見よ。

【世事】（セジ）（実義）世間の事をいふ。（出典）列子周穆王篇に、心營世事、慮鑑家業。

【世俗】（セゾク）（実義）世上のならはしなり、俗は習俗なり。（出典）孟子梁惠王下篇に、寡人非能好先王之樂也、直好世俗之樂耳。

【世間】（セケン）（実義）一世の間の略語にて人世といふ義とす。（出典）史記淮南王傳に、人生一世間、安能邑邑如此。

【世網】（セマウ）（実義）世間の煩累に譬はるゝ網。（出典）陸機の詩に、世網嬰吾身と。又た晉九齡の詩に、形隨世網嬰。

【世界】（セカイ）（実義）三世を世といひ、八方を界といふ。（出典）楞嚴經、佛告阿難言、世為遷流、為方位、東西、南北、東南、西南、東北、西北、上、下、為界、過去、未來、現在、為世と。又た維摩經に、大千世界。

【世說】（セセツ）（実義）書名。劉宋の臨川王劉義慶撰す、三卷あり、梁の劉孝標の注本を世說新語と名づけしより、後世

相沿ふて新語と稱す、此書は漢晉間の名士の軼事瑣語を集め、分ちて三十八門と爲せり、其の文辭簡勁にして至味あり、孝標の注する所、引證該博にして、糾正する所多きを以て、後世考證家の材料を取る唯一の好書となれり。

【世智辨】 ヘン 音義 世俗の智慧辨才をいふ。出處 維摩經に、世智辨聰。

【世間甲子須臾事】 句。出處 唐人の詩の 送宋處士歸山に、賣藥餘琴歸去遲、山風吹盡桂花枝、世間甲子須臾事、逢着仙人莫看棋。

【世間何物催人老】 句。出處 清人の詩 餘の題旅店に、喚覺茅簷片月低、依稀鄉國夢中迷、世間何物催人老、半是雞聲半馬蹄。

【世人結交須黃金】 句。出處 唐人の詩 贈の題長安主人壁に、世人結交須黃金、黃金不多交不深、縱令然諾暫相許、終是悠悠行路心。

【世間好物不堅牢】 は、多く保ち難きをいふ。出處 白居易の簡簡吟に、世間好物不堅牢、彩雲易散琉璃碎。

【公道世間惟白髮】 句。出處 唐人の詩 の送隱者に、無媒巡路草蕭蕭、自古雲林道市朝、公道世間惟白髮、貧人頭上不曾饒。 補 宋の葉茵の白髮に、半世持竿笠澤濱、蘆邊留得幾蓑巻、近來白髮無公道、暗

施

【世俗所謂不孝者五】 音義 世上の 所謂不孝に五件あるをいふ。出處 孟子離婁下篇に、孟子曰、世俗所謂不孝者五、惰其四支、不顧父母之養、一不孝也、博奕好飲酒、不顧父母之養、二不孝也、好貨財、私妻子、不以爲父母戮、三之不孝也、從耳目之欲、以父母戮、四不孝也、好勇鬪狠、以危父母、五不孝也。

【世尊拈華迦葉微笑】 音義 世尊 は釋迦なり、拈華を拈りて衆に示せしに、衆人はその何の意なるを解する能はざりしに、迦葉といふもの微笑したり、これその意を悟りしなり、所謂以心傳心の妙處なり。出處 九燈會元に、世尊在靈山會上、拈華示衆、是時衆皆默然、惟迦葉尊者破顏微笑、世尊云、吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門、不立文字、教外別傳、付囑摩訶迦葉。

【施主】 シュ 音義 檀那に同じ、僧に物を施す人をいふ。出處 無量壽經に、我於無量劫、不爲大施主、普濟諸貧苦、誓不成正覺。 又た法苑珠林に、令施主得大利益。

【施行】 ギョウ 音義 僧に物を施し行ふをいふ。出處 大法句經に、雖復施行、

【施餓鬼】 ガキ 音義 餓鬼に施與するの義、此の功德を以て吾が後に天堂快樂に生るとの意なり。出處 釋氏要覽に、施食有二種、若施曠野鬼神者、即是同食、寺院佛會設二供養位、一曠野鬼神、一鬼子母、並取僧食、呼名施之、若比丘各自僧一餐食施者、即依瑜伽面大士經、施與餓鬼也。

【是非】 音義 或は善しとし、或は惡しとせざるなり。出處 莊子齊物論篇に、故有儒墨之是非。

【因是】 シの部因(是)を見よ。

【是非之心】 音義 惡を知りて非と爲す心なり。出處 孟子公孫丑上篇に、無是非之心、非人也。(ソの部惻隱之心を見よ)

【是耶非耶】 音義 事の是非の分明ならざるをいふ。出處 史記伯夷傳に、所謂天道是耶非耶。

【是非顛謬】 音義 事の善惡落だ違へるをいふ。出處 漢書司馬遷傳贊に、又其是非顛謬、於聖人、論大道、則先黃老、而後六經、序游俠、則退處士、而進姦雄、述貨殖、則崇勢利、而羞賤貧、此其所蔽也。

【是是非非】 音義 善き事を善しとし、惡しき事は惡しとして道理に違はざるなり。出處 荀子修身篇に、是是非非、謂之知、智、非是是非、謂之愚。

爲、身招患。

【是非只爲多開口】 音義 論者多き故に、事の是非決せざるをいふ。出處 事林廣記に、是非只爲多開口、煩惱皆因漏出頭。

井

【井井】 セイセイ 音義 ㊀經畫端整の貌。㊁井井有條を見よ。

【井田】 セイデン 音義 殷周の二代に用ゐられし田の制なり、田地を井の字の如く畫して、八家に其の周圍を與へて耕さしめ、其の中央を公田とし、八家共に耕して之を貢す、殷の時は一家の有する所七十畝なり、周の時は一家の有する所百畝なり、此くの如く畝數に相違あれど、大要ね十分の一の租稅を貢するなり。出處 孟子公孫丑上篇に、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也と。又た云、方里而井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田。

【井地】 音義 井田に同じ。出處 孟子滕文公上篇に、使畢戰問井地。

【井戸】 音義 井は古の市を爲すものゝ集る所、故に井戸といふ。出處 宋史食貨志に、井戸既爲商人所要。

【井幹】 カン 音義 井の上に設けたる欄干、ゲタなり。出處 莊子秋水篇に、吾跳梁乎井幹之上。

【井幹樓】 カンロウ 音義 井桁(ゲタ)の如く組上げたる樓。出處 漢書郊祀志に、立井幹樓、高五十丈と。顏注に、積木而高爲樓、若井幹之形也、井幹者、井上木欄也、其形或四角、或八角、長安四京賦云、井幹疊而百層、即謂此樓也。 補 崔後主の詩に、遠望凌霄閣、遙看井幹樓。

【操井臼】 セイ 音義 井水を汲み、又は杵臼を操りて、家事に勉むるをいふ。出處 後漢書馮衍傳に、妻恬不妒、操井臼。

【井井有條】 音義 經畫端整にして條理あるなり。出處 荀子儒效篇に、井井兮其有條理也。

【井中視星】 音義 井の中より星を視れば、僅に兩三星を見るに過ぎず、因て私心に蔽はるゝときは、その見る所一方に偏するに喩ふ。出處 尸子廣澤篇に、因井中視星、所視不過數星、自丘上以視、則見其始多出云云、私心、井中也、公心、丘上也。

【井渫不食】 音義 渫は潔なり、井の水は極めて、清潔なるも、汲み用ゐられず、才能ありて、世に用ゐられざるに喩ふ。出處 易經井卦に、九三、井渫不食、爲我心惻、可用汲、王明並受其福。

【坐井觀天】 音義 井戸の中に坐して、天を見たとけ、見る所の小なるに喩ふるなり。出處 韓愈の原道に、

五世

老子之小仁義、非毀之也、其見者小也、坐井而觀天曰、天小者非天小也、彼以無窮爲仁、子子爲義、其小之也則宜。出處 尸子廣澤篇に、井中視星、所視不過數星。○莊子秋水篇に、是直用管窺天、不亦小乎。○劉蓋の劉子通塞篇に、入井望天、不過圓蓋、登峰眺日、極於烟際。

【井蛙不可以語於海】 音義 人の 聞なるを井中に生活せる蛙に喩へていふ。出處 莊子秋水篇に、井蛙不可以語於海者、拘於虛也、夏蟲不可以語於氷者、篤於時也、曲士不可以語於道者、束於教也。 補 淮南子原道訓に、井魚不可與語大、拘於隘也、夏蟲不可與語寒、篤於時也。○荀子正論篇に、坎井之蛙、不可與語東海之樂。○後漢書馬援傳に、援謂隗囂曰、子陽井底蛙耳、而妄自尊大。

【世家】 セイカ 音義 ㊀世々祿秩ある家なり。㊁過ぎず、因て私心に蔽はるゝときは、その見る所一方に偏するに喩ふ。出處 尸子廣澤篇に、因井中視星、所視不過數星、自丘上以視、則見其始多出云云、私心、井中也、公心、丘上也。

【井渫不食】 音義 渫は潔なり、井の水は極めて、清潔なるも、汲み用ゐられず、才能ありて、世に用ゐられざるに喩ふ。出處 易經井卦に、九三、井渫不食、爲我心惻、可用汲、王明並受其福。

【坐井觀天】 音義 井戸の中に坐して、天を見たとけ、見る所の小なるに喩ふるなり。出處 韓愈の原道に、

史記に、諸侯の國を傳して世家と名く。出處 ㊀孟子滕文公下篇に、仲子齊之世家也。又た漢書食貨志に、世家子弟富人。㊁史記吳太伯世家の注に、索隱曰、系家者、索隱の著者、司馬貞は、唐人なり、故に太宗の諱世民の世を諱みて系の字を用ふ。記諸侯本系也、言其下及子孫、常有繼、故孟子曰、陳仲子齊之系家、又董仲舒曰、王者封諸侯非官之也、得以代爲家也と。又た王安石の讀孔子世家に、太史公叙帝王、則曰本紀、公侯傳國、則曰世家、公卿時起、則曰列傳、此其例也。

【世範】（セイハン）［語源］書名。［解説］三卷あり、宋の袁燮著す、其の書、睦親・處己・治家の三門に分つ、立身處世の道に於て、反覆詳盡す、文字は俚に近しと雖も、末俗を砥礪する所以の者、極めて篤摯と爲す。

【世父】（セイフ）［語源］伯父（おぢ）なり。嫡長にして世を繼ぐの義に取る。［出處］爾雅に、父之昆弟、先生爲世父、後世爲叔父と。又た漢書王莽傳に、世父大將軍鳳病。

【世母】（セイボ）［出處］儀禮に、世母叔母。

【世嫡】（セイシュウ）［語源］父子世を相續ぐをいふ。［出處］三國魏志武帝紀に、漢高祖之起、曹參以功封平陽侯、世嫡爵土、至今適嗣。

【世及】（セイキフ）［語源］父子相承く、世襲のこと。［出處］後漢書二十八將傳贊に、朝有世及之私。

【世運】（セイウン）［語源］時世の變遷するをいふ。［出處］班彪の王命論に、稽帝王之世運。

【世情】（セイジヤウ）［語源］世態人情なり。［出處］陶潛の詩に、林園無世情と。又た羅鄴の詩に、惟有春風不世情。

【世味】（セイミ）［語源］世味年來薄、似紗を見よ。［出處］世味年來薄、似紗の句。

【世繩】（セイジヨウ）［語源］國語志陳思王植傳の要注に、繩、繩於世繩、維繫於祿位。

【世中】（セイチユウ）［語源］皇侃の論語義疏に、世中蓋亦當有一日行仁者。

【世子】（セイシ）［語源］太子なり、古、世太字相通ず、後世は天子に太子と稱し、諸侯に世子と稱することゝなれり。［出處］孟子滕文公上篇に、滕文公爲世子。［解説］雨穀秋雨穀閟宮に、太世二字、大約古人有時而通、明堂世室、公羊・穀梁俱作太室、衛大叔儀、公羊作世叔、齊樂大心作樂世心、鄭子大叔、論語作世叔、齊樂大心作樂世心、鄭子秋傳曰、會王世子于首止、諸侯之子曰世子、而申生子率終生導並稱太子、又た黃生の字詁に、太古音特、故或作世、如太室、太子爲世子、太祖爲世祖、之類是也、蓋世太轉音之義と。（廬文弨の字詁に、集韻、類篇、竝他計切、音替、履中蔗也、或作𥳑とあり。）これ太世兩字の通用を觀き得て明白なり。

【世變】（セイヘン）［語源］世事の變遷をいふ。［出處］書經君陳篇に、惟周公左右先王、綏定厥家、毖殷頑民、遷于洛邑、密邇王室、式化厥訓、既歷三紀、世變風移、四方無虞、予一人以寧。

【世故】（セイコ）［語源］列子楊朱篇に、衞蝸木叔者、子貢之世也、蓋其先貴、家累千萬金、不治世故。

【世態炎涼】（セイ）［語源］世態の盛衰をいふ。［出處］故事成語考に、可歌者世態炎涼と。又た宋書樂志に、裁化遷寒燠、布政周炎涼と。又た白居易の和元稹松樹詩に、八月白露降、槐葉次第黃、此如小人面、變態隨炎涼。

【不知世務】（セイ）［語源］今の世に行ふべきことあるを知らざるをいふ。［出處］鐵鐵論に、孟子守舊術、不知世務。又云、信往而乖于今、道古而不合世務、意者不足以知士也。［解説］隨實柳莊傳に、江南人有學葉者、多不習世務、習世務者、又無學葉。

【世事浮雲何足問】（セイ）［語源］唐人の詩の句。［出處］王維の酌酒與裴迪に、酌酒與君君自寬、人情翻覆似波瀾、白首相知猶按劍、朱門先達笑彈冠、草色全經細雨濕、花枝欲動春風寒、世事浮雲何足問、不如高臥且加餐。

【世味年來薄似紗】（セイ）［語源］宋人の詩の句。［出處］陸游の臨安春雨初霽の詩に、世味年來薄似紗、誰令騎馬客京華、小樓一夜聽春雨、深巷明朝賣杏花、矮紙斜行閑作草、晴窗細乳戲分茶、素衣莫起風塵嘆、猶及清明可到家。

【正歲】（セイサイ）［語源］正月をいふ。［出處］周禮天官小宰之職に、正歲帥治官之屬而觀治象之法と。鄭注に、正歲、謂夏之正月得四時之正。

【正月】（セイゲツ）［語源］正陽の月をいふ、四月を指す。［出處］左傳莊公二十五年に、夏六月辛未朔、日有食之。惟正月之朔、慝未作。

【正義】（セイギ）［語源］忘に、刪其僞蹤、取正義、著於篇。

【正直】（セイチヨク）［語源］止しく且つ直きなり。［出處］詩經小雅小明篇に、好是正直。

【正道】（セイダウ）［語源］正しき道なり。［出處］韓非子說疑篇に、隱正道而行私曲。

【正格】（セイカク）［語源］正しき格法なり。［出處］夢溪筆談に、詩第二字側入謂之正格、第二字平入謂之偏格、如四更山吐月、殘夜水明樓之類、唐名賢輩詩、多用正格、如杜甫律詩用偏格者、十無一二。

【正路】（セイロ）［語源］正しき道、卽ち義なり。［出處］孟子離婁上篇に、仁、人之安宅也、義、人之正路也。［解説］孟子萬章下篇に、義、路也。○孟子告子上篇に、義、人路也。

【正名】（セイメイ）［語源］名と實と相稱ふやうに正しくすること。［出處］論語子路篇に、子路曰、衞君待子而爲政、子將奚先、子曰、必也正名乎。

【正德】（セイトク）［語源］一正しき德あることをいふ。二德を正しくすることをいふ。［出處］一書經大禹謨篇に、正德利用厚生惟和、二國語に、先王之子民也、茂正其德而厚其性。

【正人】（セイジン）［語源］才德正しき人をいふ。［出處］書經閟命篇に、昔在文武聰明齊聖、小大之臣、咸懷忠貞、其侍御僕從、罔匪正人。

【正位】（セイヰ）［語源］正しき位置。［出處］孟子滕文公下篇に、立天下之正位。

【正色】（セイシヨク）［語源］正しき色なり。［出處］禮記玉藻篇に、衣正色、裳閒色と。疏に、皇氏云正とは、青・赤・黃・白・黑、五方の正色なり。

【正鵠】（セイコク）［語源］射的なり、布に畫くを正といふ、皮に畫くを鵠といふ。［出處］一禮記射義篇に、孔子曰、射者何以聽、節以聲而發、發而不失正鵠者、其唯賢者乎、若夫不肖之人、則彼將安能以中と。又た中庸第十四章に、射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身。二孟子離婁上篇に、不射則已、射必見正鵠。

【正氣】（セイキ）［語源］正しき氣なり。［出處］文子符言篇に、君子行正氣、小人行邪氣、內便于性、合于義、循理而動、不繫于物者、正氣也、推于滋味、淫于聲色、發于喜怒、不顧後患者、邪氣也と。又た文天祥正氣歌あり。

【正妃】（セイヒ）［語源］嫡妻をいふ。［出處］孟子告子下篇に、無以妾爲妻と。趙注に、不得立愛妾爲嫡妻也と。孫疏に、正妃曰嫡。

【正室】（セイシツ）［語源］妻をいふ。二嫡子をいふ。［出處］一ソの部側室を見よ。二周禮春官小宗伯に、正室謂之門子と。鄭注に、正室適子、將代父當門者。

【正朔】（セイサク）［語源］正は年の始め、朔は月の初めなり、因りて曆數の義とす。［出處］禮記大傳に、立權度量、考文章、改正朔、易服色、殊徽號、異器械、別衣服、此其所得與民變革者也。［解説］王者革命すれば必ず曆を改む、その曆の行はるゝは統治の權の及べるを證するなり、故に、正朔を奉ずといへば、其統治の下に在ることなるなり。

【正統】（セイトウ）［語源］一歷代の天子が正しき道を蹈みて、天下を一統せるをいふ。二正しき血統をいふ。［出處］一歐陽修の正統論に、傳曰、君子大居正、又曰、王者大一統、正者所以正天下之不一也と。又た統者所以合天下之不一也と。又た蘇軾の正統論に、正統之爲言、猶將安能以一と云へり。又た資治通鑑綱紀一に司馬溫公の論あり。又た清の魏禧正統論三篇、儲欣正統論九篇あり。二後漢書崔瑗傳に、以數襲一姓、疊先帝、遂使數世正統、扶立疏遠、公羊傳隱南隨筆に、正統論始于宋元、如歐公楊鐵崖諸人、瀾翻千言、互相爭論、又有有正無統、有統無正之說、不知古帝王無正統之說、王猛謗苻堅伐晉曰、司馬氏正朔相承、高歡謂杜弼曰、江右有薰衍老公、專事衣冠禮樂、人以爲正統、石勒臨死、憂曰、恐後世不以吾爲受命之君、蓋惟苻堅、石勒、高歡皆不能得天下、故隱然欲竊附于正統耳、本朝儲同人先生作、論七篇、一掃而空之、殊快人意。

【正宇】（セイウ）［語源］官名、書籍の文字を校正するを掌る。［出處］事物紀原に、漢祖初置秘書監、掌圖書古今文字、考合同異、今正宇之官、蓋其遺意也、齊集書省有正書官、北齊始爲正宇。

【正史】（セイシ）［語源］紀傳體の歷史をいふなり。［解説］紀は平生の史または常の史といふがごとし。紀傳體の史は歷代必ず之を作る、他の編年體の史及び雜史別史の或は作り或は作られざるが如きものゝ比に非ず。故に之を正史といふ。正は正閏の正にして、正僞の正に非るなり。［出處］隋書經籍志に、史記以下陳壽周書まで六十七部

を列して云ふ、自是世有著述、皆襲班馬、以爲正史、作者尤廣、云云、今依其世代、聚而編之、以備正史。

【正本】 眞本なり。出典維摩經序に、常山公右將軍安成侯、與義學沙門千二百人、於長安大寺、譯羅什法師、重譯正本。

【正書】 楷書の名、楷書をいふ。出典翰墨志に、前人多能正書、而後草書。

【正營】 驚懼恐不安の義。出典漢書王莽傳に、人民正營、無所錯手足。

【正氣歌】 祥元に拘へられ、獄中にて作りし七言の古詩なり、正氣は即ち孟子の所謂浩然の氣を斥していふ。出典正氣歌の序に、予囚北庭、坐一土室、廣八尺、深可四等、單扉低小、白間短窄、汗下而幽暗、當此夏日、諸氣萃然、雨漬四集、浮穢相蒸、時則爲水氣、塗泥半朝、蒸鬱歷澗、時則爲土氣、乍晴暴熱、風道四塞、時則爲日氣、蓄陰薄雲、助長炎虐、時則爲火氣、倉腐寄蒸、陳陳相因、時則爲米氣、腥羶蔬穢、鹹臭汗垢、時則爲穢氣、疊是數氣、當之者鮮、不爲厲、而予以羸弱、居之、然爾、亦安知所、幾何哉、孟子曰、吾善養吾浩然之氣、彼氣有七、吾氣有一、以一敵七、吾何患焉、況浩然者、乃天地之正氣也、作正氣歌一首、其歌に、天地有正氣、雜然賦流形、下則爲河嶽、上則爲日星、於人曰浩然、沛乎塞蒼溟、皇路當淸夷、含和吐明庭、時窮節乃見、一一垂丹青、在齊太史簡、在晉董狐筆、在秦張良椎、在漢蘇武節、當厄顛將軍頭、爲嚴中血、爲張睢陽齒、爲顏常山舌、或爲遼東帽、清操厲氷雪、或爲出師表、鬼神泣壯烈、或爲渡江楫、慷慨吞胡羯、或爲擊賊笏、逆豎頭破裂、是氣所磅礴、凜冽萬古存、當其貫日月、生死安足論、地維賴以立、天柱賴以尊、三綱實繫命、道義爲之根、嗟予遇陽九、隸也實不力、楚囚纓其冠、傳車送窮北、鼎鑊甘如飴、求之不可得、陰房闃鬼火、春院閉天黑、牛驥同一皁、雞栖鳳凰食、一朝蒙霧露、分作溝中瘠、如此再寒暑、百沴自辟易、哀哉沮洳場、爲我安樂國、豈有他繆巧、陰陽不能賊、顧此耿耿在、仰視浮雲白、悠悠我心憂、蒼天曷有極、哲人日已遠、典刑在夙昔、風簷展卷處、宙讀、古道照顏色。

【正氣集】 書名。出典此書は一卷にして、撰者の名字考ふべからず、義士高敬命の檄文等を收載せり、讀史の參考とすべし。

【正字通】 撰にして、十二卷あり、明の張自烈の中下の三子卷に分てり、淸の廖文英その稿本を購ひ獲て、以て自著となし、自ら序を作りてその首に冠せり。四庫全書提要に、此書は梅膺祚の字彙に比するに、考據稍博し、然れども徵引繁蕪、顚倒舛誤多し、又喜て許愼の說文を排斥せりといへり。

【正統閏統】 正しき道を踐みて天下に帝たるを正統といひ、然らざるを閏統といふ。出典政關篇の正統論上に、有合天下於一二而不得居其正者、前世謂桀爲閏是也、由是正統之論興焉。又た資治通鑑魏紀一に、司馬光の正統閏統に關する論あり。

【正大高明】 人の心を形容せるなり。出典論語先進篇に、由也升堂矣、未入於室也と。由は仲由なり。朱注に、言子路之學、已造乎正大高明之域、特未深入精微之奧耳、未可以一事之失、而遽忽之也。

【得正而斃】 道を得て死するをいふ。出典禮記檀弓上篇に、吾何求哉、吾得正而斃焉、斯已矣。

【求正諸己】 吾が身に反正するをいふ。出典禮記射義篇に、射者、仁之道也、求正諸己、己正而后發、發而不中、則不怨勝己者、反求諸己而已矣。出典中庸第十四章に、射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身、○孟子公孫丑上篇に、仁者如射、射者正己而後發、發而不中、不怨勝己者、反求諸己而已矣。

【不失正鵠】 的を失はざるをいふ。出典正鵠を見よ。

【正誼堂全書】 伯行が朱子學派の叢書せる諸家の著書を節錄せるもの、其目は周濂溪集十三卷、二程文集十二卷、張橫渠文集十二卷、朱子文集十八卷、楊龜山集六卷、李延平集四卷、張南軒集七卷、等以下五十餘集あり、同治七年左宗棠之を校刊し、合せて唐宋八家文集以下五部を續刊した

もなり。

【正路之榛蕪】 孟の正道を害するものをいふ、榛は、木の茂りたるをいふ、蕪は草の生ひ茂りたるをいふ。出典小學外篇嘉言篇に、明道先生行狀を引きて云、明道先生曰、自道之不明也、邪誕妖妄之說蜂起、塗生民之耳目、彌天下於汗漫、是皆正路之榛蕪、聖門之蔽塞、闢之而後可以入道。

【正正之旗堂堂之陣】 正正は、旌旗の整ひ治れるなり、堂堂は、行陣の盛大なるなり。出典孫子軍爭篇に、無邀正正之旗、勿擊堂堂之陣、此治變者也。

【生】 即齊、麼生、怎生の生なり。出典李白の詩に、借問別來太瘦生と。歐陽修の詩に、爲問青州作麼生。

【生明】 サの部哉（サイ）生明を見よ。

【生日】 誕生日をいふ。出典顏氏家訓に、江南風俗二親若在、每至生日、當有酒食之事と。又た唐書に、太宗謂長孫無忌曰、某月日是朕生日、世俗皆爲歡樂、在朕翻爲感傷。

【生朝】 前條に同じ。出典斐廉談に、宋施德操北窓炙輠錄、妾父在時、每生朝、婢子輩上壽、亦必歌此曲。

【生人】 未だ熟知せざる人をいふ。出典艾子後語に、艾子嘗羊兩頭於圃、羊牡者好鬬、每遇生人、則逐而觸之、又た客越志に、杭人堂構簡略、上漏下濕、水鳴牀間、客子至門、索屐始入、又無佳客聒言、日對生人、作未同語、殊無味。

【生長】 生ひ育つをいふ。出典司馬相如の上林賦に、除冬生長。

【生年】 生れ歲なり。出典後漢書呂布傳に、袁術與布書曰、術生年以來、不聞天下有劉備。

【生靈】 猶ほ生民といふがごとし。出典皆書嘉容盛傳に、生靈仰其仁德、四海歸其仁。

【生事】 事件を起すをいふ。出典春秋繁露に、無危而擅生事、是卑君也。

【生氣】 敵愾の氣を發するをいふ。出典國語に、未報楚惠而抗宋、我曲楚直、其衆莫不生氣。

【生活】 ㊀生命を續ぐこと。㊁生計を營むをいふ、即ち活計なり。出典㊀孟子盡心上篇に、民非水火不生活と。又た文子道德篇に、自天子以下至于庶人、各自生活。㊁梁書に、武帝檢覈臨川王宏庫室百餘間、有錢三億餘萬、物稱是、謂宏曰、阿六汝生活大可。

【生業】 人の生活すべき產業をいふ。出典史記封禪書に、李少君常以祠竈、穀道、却老方、見武帝、帝尤尙之、少君亡、而方士之言不驗者、由是益怒、方士言言神者數千人、言海中有蓬萊、方丈、瀛洲、僊人居之、請齋而求之、於是遣方士入海、求蓬萊、蓬萊未至、望之如雲、方士言上如此、而海上燕齊怪迂之方士、皆自言有不死藥、羨門高誓、爲上言之、於是上益信、大爲宮室、海中三神山者、其傳言在渤海中、去人不遠、患至則船風而引之、蓬萊之屬、皆以金銀爲宮闕、未到、望之如雲、及到、三島皆沒、蓬萊、方丈、瀛洲、僊人之宮闕、皆在海中、黃帝之時、海內方士、傳聞之、皆言

【生前】セイゼン 意義 生きて居る中にといふこと。出處 杜甫の醉時歌に、不須問此意悠悠、生前相遇且銜杯。

【生類】セイルヰ 意義 生命を有せる物をいふ。出處 南史に、梁武帝不以生類爲饌。

【生平】セイヘイ 意義 平常に同じ。出處 史記張耳陳餘傳に、生平聞耳餘賢。

【生客】セイカク 意義 生はナマなり、熟の反なり、初めて面會せし客をいふ。出處 志林に、子由作樗寮堂記、僕爲書之、且欲與廬山一結緣、他日入山不爲生客也。

【生孩】セイガイ カの部孩(ガイ)孩の類語を見よ。

【生齒】セイシ 意義 當年生れたる子をいふ。出處 周禮司民に、掌登萬民之數、自生齒以上皆書于版と。鄭注に、男八月而生齒、女七月而生齒、生齒體備、故以齒名其年。

【生紙】セイシ 意義 唐の世に喪あるときに用ふる紙なり。出處 シの部熟(ジュク)紙を見よ。

【生硬】セイカウ 意義 かいふ、生は熟せざるなり、硬は堅きなり、文章などの熟煉を缺けるにもいふ。出處 白居易の初到忠州詩に、吏民生硬都如鹿。

【生米】セイベイ 意義 醉りて精げざる米をいふ。出處 太平廣記に、投生米於潭中。

【生魚】セイギョ 意義 活潑潑として未だ死せざる魚をいふ。出處 荀子に、俎之側生魚也。

【生鹽】セイエン 意義 鹽の味の生新なるをいふ。出處 曾實苻朗傳に、唯鹽味小生。

【嬾生】セイ 意義 志を屈して生存を厭ること。出處 楚辭卜居に、寧正言不諱以危身乎、將從俗富貴以偷生乎。

【毎生】セイ 意義 命を惜み、但々生存せんことを願ふなり。出處 漢書賈誼傳に、致死爲毎生と。又た班固叙傳に、致死爲毎生。

【生墓志】セイボシ 意義 郢死者の墓誌をいふ。出處 岩栖幽事に、白樂天自作生墓志。

【開生路】セイ 意義 活路を開くなり。出處 三國魏志曹仁傳に、城必示之開生路、所以開其生路也と。又た白居易之祈門、所以以生路或有奔逃。

【不聊生】セイ 意義 安心して生活すること能はざるなり。出處 史記主父偃傳に、丁男被甲、丁女轉輸、苦不聊生。

【生申令日】セイ 意義 申伯を生みたる朝と日をいふ。出處 詩經大雅崧高篇に、崧高維嶽、駿極于天、維嶽降神、生甫及申と。毛傳に、崧、高貌、山大而高曰崧、崧、四嶽也、嶽降神靈和氣、以生申甫之大功と。鄭箋に、申、申伯、甫、甫侯也。

【生意活動】セイ 意義 活物の如くなるをいふ、寶の妙を讃するなり。出處 圓翁寶鑑に、吳道子畫人物有八面、生意活動。

【生呑活剝】セイエン 意義 他人の作を丸竊みにするをいふ。出處 大唐新語に、李義府嘗賦詩曰、鏡月成歌扇、裁雲作舞衣、自憐超雪影、好取洛川歸、有秉强尉張懷慶、好偷名士文章、乃爲詩曰、生情鏡月成歌扇、出意裁雲作舞衣、自憐鏡自憐超雪影、時來好取洛川歸、人謂之語、曰、活剝玉昌齡、生呑郭正一。

【生知安行】セイ 意義 生知は生れながらに安じて之を行ふなり、卽ち聖人、これなり。出處 中庸第二十章に、或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之一也、或安而行之、或利而行之、或勉强而行之、及其成功一也。

【生旦淨末】セイ 意義 俳優の名稱なり。旦は女形(鄭女なり。淨は又た丑淨ともいひ、惡人なり。末は立役(男子)なり。生は熟の反なり。出處 莊岳委談に、今優俗聲大率八人爲朋、生旦淨末副亦如之云云、傳奇以戲旨稱、其名欲顚倒而無實也、故曲欲熟而命以生也、鄭賓夜而命以旦也、開場始事而命以末也、蓋汚不潔而命以淨也。意考 寺門靜軒の痴談に、漢土に、雜劇として絃唱小說の類は、唐宋より既にあり、場に上つて搬演するは、元の世に起るといふ、生、たちやく、或は戲頭といひ、或は末泥といふ、引戲は、二まいめのたちやくなり、生といふは、曲の熟さんことを欲する故に、反て名て生といふ、旦又孤衾といふ、正旦は、たておやま、小旦、副旦は、みな娘がたなり、旦とは、鄭は夜に宜き故に、反て名て旦といふ、又旦はあさ明んとして、未だあけず、曉色未だ分れざるの時ゆゑに、男にして女に粧ふ、暗昧未分の意なりともいふ、淨、だうけやく、けがれ醜き故に、反て淨といふ、丑、かたきやく、其醜なるをいふ、又賀頭といふ、(按に、丑、正韻に音醜、義亦通)末、あらごとし、外、末、はおやぢがたなり、其始めに出る故に、反て名て末といふ、祝允明が猥談に、生、淨、旦、末、丑等の名は其事を反して稱するなり、云々、今の所謂市語なり、生は卽男子、末尼といふ、孤は卽官人、其土音のみ、何の義理かこれあらん、今漢のしばゐの語なり、江戸の戲にひきあてゝいはゞ、開場は「ほつたん」定場(仝上)家門は「だいじよ」(梗子(仝上)沖場は、「ふたつめ」百は、「こうじやうぜりふ」賓白も、「せりふ」、詩板は、「きたいれる」、脚色は、「しぐみ」をいふ、一齣は、「ひとまく」、零齣は、「ひつかへし」、「はやまく」、小敎煞は、「なかいり」、大敎煞は、「おほづめ」、收場も、「おほづめ」結果、(仝上)丙人相對するを賓といふ、「かけあひ」なり、一人自ら說くを白といふ、南宋市肆記に、或は路伎あり、勾欄にいらず闘しく淵き處に在て場をなす、之を打野呵といふ、是又藝の次なる者なり、此は江戸の宮芝居にあたるべし、開元譜に、倡優の社南に居る者を呼で社南氏となし、北に居る者をよんで社北氏となす云々、按に、既に社といふときは、優人の居る坊を別にして、良民と雜居せしめぬこととみゆ、今江戸も倡をして良民とまじはり居らしめず、清濁貴賤を別つよろしと謂べし。

【生寄死歸】セイ 意義 人の命は百年に過ぎず、故に寄と曰ふ、死せば卽ち滅沒化して見えず、故に歸ると曰ふ。出處 淮南子精神訓に、生、寄也、死、歸也、何足以滑和と。又た魏文帝の樂府に、人生如寄耳と。又た語林に、謝大傅與支道林書曰、人生如寄耳、終日波戚、遐君一來、以晤言銷之。意考 國語吳語に、越王告吳王曰、民生於天地上、寓也。○尸子に、老萊子曰、民生、寄者、固歸。

【生芻一束】セイ 意義 刈り取りて未だ枯れざるマコモ一束なり、ツバなり、これもと詩經の句にて、賢者去りて留むるに、云云、傳奇以戲旨稱、其名欲顚倒而命以旦也、故曲欲熟而命以生也、鄭賓夜而命以末也、蓋汚不潔而命以淨也。意考 寺門靜軒の痴談に、漢土に、雜劇として絃唱小說の類は、唐宋より既にあり、場に上つて搬演するは、元の世に起るといふ、生、たちやく、或は戲頭といひ、或は末泥といふ、引戲は、二まいめのたちやくなり、生といふは、曲の熟さんことを欲する故に、反て名て生といふ、旦又孤衾といふ、正旦は、たておやま、小旦、副旦は、みな娘がたなり、旦とは、鄭は夜に宜き故に、反て名て旦といふ、又旦はあさ明んとして、未だあけず、曉色未だ分れざるの時ゆゑに、男にして女に粧ふ、暗昧未分の意なりともいふ、淨、だうけやく、けがれ醜き故に、反て淨といふ、丑、かたきやく、其醜なるをいふ、又賀頭といふ、(按に、丑、正韻に音醜、義亦通)末、あらごとし、外、末、はおやぢがたなり、其始めに出る故に、反て名て末といふ、祝允明が猥談に、生、淨、旦、末、丑等の名は其事を反して稱するなり、云々、今の所謂市語なり、生は卽男子、末尼といふ、孤は卽官人、其土音のみ、何の義理かこれあらん、今漢のしばゐの語なり、江戸の戲にひきあてゝいはゞ、開場は「ほつたん」定場(仝上)家門は「だいじよ」(梗子(仝上)沖場は、「ふたつめ」百は、「こうじやうぜりふ」賓白も、「せりふ」、詩板は、「きたいれる」、脚色は、「しぐみ」をいふ、一齣は、「ひとまく」、零齣は、「ひつかへし」、「はやまく」、小敎煞は、「なかいり」、大敎煞は、「おほづめ」、收場も、「おほづめ」結果、(仝上)丙人相對するを賓といふ、「かけあひ」なり、一人自ら說くを白といふ、南宋市肆記に、或は路伎あり、勾欄にいらず闘しく淵き處に在て場をなす、之を打野呵といふ、是又藝の次なる者なり、此は江戸の宮芝居にあたるべし、開元譜に、倡優の社南に居る者を呼で社南氏となし、北に居る者をよんで社北氏となす云々、按に、既に社といふときは、優人の居る坊を別にして、良民と雜居せしめぬこととみゆ、今江戸も倡

【生命有限】セイ 意義 生命限り有るといふ意。出處 沈約の與徐勉書に、開年以來、病增慮切、當由生靈有限、勞役過差、後此凋竭、歸之暮春、起居行止、努力亟事、時覽旁實、尙似全人、而形銖力用、不相綜撰、常須過自東持、方可暫蝕、解衣一臥、支體不復相關、帶當移孔、以手握寶、計月小半分。

【生龜脫筒】セイ 意義 情欲の時に生ずるをいふ。出處 黃庭堅集に、金華仙清老云、荊公欲使脫逃被書、附伽藍奉、香火於牛山寺、與之僧名曰、紫琳、無妻子之累云云、去作牛山道人、似不爲雜、然生龜脫筒、赤雞堪怨、後數年見之、儲冠自若。

【生之謂性】セイ 意義 人の生ける性をいふなり。出處 孟子告子上篇に、告子曰、生之謂性、孟子曰、生之謂性也、猶白之謂白與、曰、然、白羽之白也、猶白雪之白、白雪之白猶白玉之白與、曰、然、然則犬之性、猶牛之性、牛之性猶人之性與。

【養生送死】セイ 意義 生者は之れを養育し、死者は之れを送葬すること、是れ人道の大端なるの意なり。出處 禮記禮運篇に、禮儀也者、所以養生送死事鬼神之大端也。意考 孟子梁惠王上篇に、養生喪死、王道之始也。

【視生如死】セイ 意義 心を勞らし意を苦むる所なきなり。出處 列子に、視生如死、視富如貧、視人如豕、視我如人。

【生老病死苦】セイ 意義 シの部生(シヤウ)老病死苦を見よ。

【有生者必有死】セイ 意義 生きたる者は、必ず死するをいふ。出處 揚子法言に、有生者、必有死、有始者、必有終、自然之道也。

【生來不讀半行書】 唐人の詩の句。李賀の劍一年少に、青驄馬肥金鞍光、龍腦入レ樓羅衣香、美人狎坐飛瓊觴、貧人喚云天上郎、別起高樓連碧篠、綠鬼紅鱗出深沼、有レ時牛醉百花前、背把金丸落飛鳥、自說生來未レ爲客、一身美妾過三百、豈知斷地種田家、官稅頻催沒人織、長金狹玉誇豪毅、每揖閑人多意氣、生來不讀半行書、只把黃金買身貴、少年安得長少年、海波尙嚶爲桑田、枯榮遷傳急於箭、天公豈肯爲君偏、莫道韶華鎖長在、白頭面皺專相待。

【生前富貴死後文章】 蘇東坡の詩の句。

【生之樂未知生之苦】 人は吾が生の苦しきを知らずして、只その樂しきことのみを知る、此れは一を知りて未だ二を知らざるの意なり。列子天瑞篇に、人骨知生之樂、未知生之苦、知老之憊、未知老之佚、知死之惡、未知死之息也。莊子大宗師篇に、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。

【生年不滿百常懷千歲憂】 人生百年に滿たずして、千歲の計を營み、常に以て憂と爲すをいふ。文選古詩に、生年不滿百、常懷千歲憂、晝短苦夜長、何不秉燭遊、爲樂當及時、何能待來茲、愚者愛惜費、但爲後世嘲、仙人王子喬、難可與等期。

西

【生來不讀半行書】 唐人の詩の句。李賀の劍一年少に、青驄馬肥金鞍光、龍腦入レ樓羅衣香、美人狎坐飛瓊觴、貧人喚云天上郎、別起高樓連碧篠、綠鬼紅鱗出深沼、有レ時牛醉百花前、背把金丸落飛鳥、自說生來未レ爲客、一身美妾過三百、豈知斷地種田家、官稅頻催沒人織、長金狹玉誇豪毅、每揖閑人多意氣、生來不讀半行書、只把黃金買身貴、少年安得長少年、海波尙嚶爲桑田、枯榮遷傳急於箭、天公豈肯爲君偏、莫道韶華鎖長在、白頭面皺專相待。

【生前富貴死後文章】 蘇東坡の詩の句。

【知生之樂未知生之苦】 人は吾が生の苦しきを知らずして、只その樂しきことのみを知る、此れは一を知りて未だ二を知らざるの意なり。列子天瑞篇に、人骨知生之樂、未知生之苦、知老之憊、未知老之佚、知死之惡、未知死之息也。莊子大宗師篇に、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。

【生年不滿百常懷千歲憂】 人生百年に滿たずして、千歲の計を營み、常に以て憂と爲すをいふ。文選古詩に、生年不滿百、常懷千歲憂、晝短苦夜長、何不秉燭遊、爲樂當及時、何能待來茲、愚者愛惜費、但爲後世嘲、仙人王子喬、難可與等期。

【生來不讀半行書】 唐人の詩の句。李賀の劍一年少に、青驄馬肥金鞍光、龍腦入レ樓羅衣香、美人狎坐飛瓊觴、貧人喚云天上郎、別起高樓連碧篠、綠鬼紅鱗出深沼、有レ時牛醉百花前、背把金丸落飛鳥、自說生來未レ爲客、一身美妾過三百、豈知斷地種田家、官稅頻催沒人織、長金狹玉誇豪毅、每揖閑人多意氣、生來不讀半行書、只把黃金買身貴、少年安得長少年、海波尙嚶爲桑田、枯榮遷傳急於箭、天公豈肯爲君偏、莫道韶華鎖長在、白頭面皺專相待。

【生前富貴死後文章】 蘇東坡の詩の句。

【知生之樂未知生之苦】 人は吾が生の苦しきを知らずして、只その樂しきことのみを知る、此れは一を知りて未だ二を知らざるの意なり。列子天瑞篇に、人骨知生之樂、未知生之苦、知老之憊、未知老之佚、知死之惡、未知死之息也。莊子大宗師篇に、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。

【生年不滿百常懷千歲憂】 人生百年に滿たずして、千歲の計を營み、常に以て憂と爲すをいふ。文選古詩に、生年不滿百、常懷千歲憂、晝短苦夜長、何不秉燭遊、爲樂當及時、何能待來茲、愚者愛惜費、但爲後世嘲、仙人王子喬、難可與等期。陶淵明以五字盡之、曰、世短意常多、是也、東坡曰、意長日月促。

【自有生民以來未有孔子也】 人類有て以來孔子のごとき聖人あらざるをいふ。孟子公孫丑上篇に、可以仕則仕、可以止則止、可以久則久、可以速則速、孔子也、皆古聖人也、吾未能有行焉、乃所願則學孔子也、伯夷伊尹於孔子、若是班乎、曰、否、自レ有生民以來、未有孔子也。

【生木之長莫見其益有時而修】 生木は知らず識らずの間に成長するをいふ。淮南子に、生木之長、莫見其益、有時而修、砥礪礪砥、莫見其損、有時而薄。

【西席】 師の居る可き處をいふ。禮記學記篇に、大學之禮、雖北面所以尊師也。鄭注に、謂於天子無北面所以尊師也。皇氏云、武王踐阼、召師尙父而問焉、曰、昔黃帝顓頊之道存乎、師尙父曰、在丹書、王欲聞之、則齊矣、王齊三日、師尙父奉書而入、王下堂南面而立、師尙父曰、先王之道不北面、王東面而立、師尙父西面道書之言、王在賓位、師尙父主位、故西面、若琴常師從之數、則師東面、弟子四面。

【西顥】 秋の氣なり。

【西士】 西方の地を指していふ。左傳昭公九年に、王曰、我自夏以后稷、饋貽芮岐黍、吾四土也と。又た賓經酒誥篇に、王肇國西土。

【西賓】 師傅をいふ。隋書禮儀志に、案燕禮燕義、君位在東、賓位則在西と。又た柳宗元の重贈劉連州二年何事を西賓。

【西清】 西側の小座敷なり。閑馬相如の子虛賦に、象輿蟾蜍於西清と。顏師古云、西清者、西箱書殿之處也。箱は廂に通ず。

【西階】 賓に昇るに東西兩階あり客は西階より昇るなり。禮記曲禮上篇に、主人就東階、客就西階、客若降等、則就主人之階。

【西牕】 婦人の寢室をいふ。李商隱の寄北の詩に、何當共剪西牕燭、却話巴山夜雨時と。北は妻なり。又た趙德麟の妻の詩に、晚雲帶雨歸飛急、去作西牕一夜愁。

【西掖】 中書省をいふ、掖は、腋と通ず、宮旁の舍をいふ、中書は宮の西に在り、故に西掖といふ。漢宮儀に、左右書受尙書事、前世文士以中書在右、因謂中書爲右曹。又稱西掖と。又た劉禎の贈徐幹詩に、雖謂相去遠、偶此四掖垣。

【西施】 莊子天運篇に、西施病レ心而矉、其里、其里之醜人見而美之、歸亦捧レ心而矉、其里、其里之富人見之、堅閉門而不出、貧人見之、挈妻子而去之走、彼知美矉、而不知矉之所以美。又た、西施越女所謂西子也、有絕世之美、越王勾踐、獻之吳王夫差、夫差嬖之、卒至滅國。又た淮南子に、夫容皓齒形姣骨佳、不待傅粉芳澤而美者、西施陽文也と。又た韻語陽秋に、黃魯直詩云、世有珠心學、取笑如東施、太平寰宇記載、西施事云、施其姓也、是時有東施家、西施家。

【西征】 ふ。㊀人の死するをいふ、日の西に沒するに喩ふ。㊁竹書紀年に、穆王十三年、祭公師從王西征至于陽紆。㊂漢書悼李夫人賦に、超兮西征と。顏注に、以日爲喻、故言西征。

【西銘】 張橫渠の作れる書齋の銘なり。西銘に、乾稱父、坤稱母、予茲藐焉、乃混然中處、故天地之塞吾其體、天地之帥吾其性、民吾同胞、物吾與也、大君者、吾父母宗子、其大臣、宗子之家相也、尊高年、所以長其長、慈孤弱、所以幼其幼、聖其合德、賢其秀也、凡天下疲癃殘疾、惸獨鰥寡、皆吾兄弟之顚連而無告者也、于時保之、子之翼也、樂且不憂、純乎孝者也、違曰悖德、害仁曰賊、濟惡者不才、其辭、形惟肖者也、知化、則善繼其志、不愧屋漏爲無忝、存心養性爲匪懈、惡旨酒崇伯子之顧養、舜其功也、無所逸而待、烈、申生其恭也、體其受而歸全者、參乎、勇於從而順、令者伯奇也、富貴福澤、將厚吾之生也、貧賤憂戚、庸玉女於成也、存吾順事、沒吾寧也

と。又た東銘に、戲言出於思也、戲動作於謀也、發於聲見乎四支、謂非己心、不明也、欲人無己、展不能也、過言非心也、過動非誠也、失於聲、繇迷其四體、謂己當然、自誣也、欲他人己從、誣人也、或者謂出於心者、師咎咎爲己戲、失於思者、自誣爲己誠、不知戒其出、汝者、長傲且遂非、不知執其過、非、不知執其過、爲咎其不、出朱注に、橫渠學堂雙關、右書訂頂、左書砭愚、伊川曰、是起爭端、改訂頂曰、西銘、砭愚曰、東銘。朱熹曰、橫渠學力絕人、尤勇於改過、猶以戲爲無傷、一日忽曰、凡人之有心爲之也、其爲害尤甚、遂作東銘。○朱熹の答江仲謀書に、二銘雖同出於一時之作、然其詞義之所指、氣象之所及、淺深廣狹、迥然不同、是以程門專以西銘、謂之西昆體、大率放李義山之爲、豐富濃麗、不作枯瘠語と。名物六帖に、詩家稱李義山詩體、爲西昆體、不知其何以取義。庾信之夏、予偶閱市、有華刊宋人詩集、題曰西昆酬唱集、有二冊、有楊億大年序、曰、凡五七言律詩二百四十七章、其屬而和者又十有五人、析爲二卷、取玉山冊府之名、命之曰西昆酬唱集云爾、蓋宋國初楊億、王欽若、錢惟演、等諸人、專做義山體、與故襲積、此集乃諸人之作、故後人稱義山體、爲西昆、不與義山相涉也。

【西遊記】 サの部四(サイ)遊記を見よ。

【西廂記】 實甫の著なり、唐の元稹の會眞記に本づきたり、その內容は、西洛の書

又た古今韻會に、四川取崍江・沱江・黑水・白水・四大川、以立名也

【西王母】 傳一に、西王母、即龜蓋金母也、姓緱、諱回、字婉韡、一字太虛、漢元封元年、降武帝殿、進蟠桃七枚於帝、自食其二、帝欲留核、母曰、此桃非世間所有、三千年一實耳。

【西昆體】 宋人が、唐の李商隱の詩の體に倣ふて故事を用ゐて詩を作り、西昆體と號せしなり、又略して昆體といふ。冷齋夜話に、詩到李義山、謂之文章一厄、以其用事僻澁、時稱西昆體と。又た韻語陽秋曰、咸平景德中、錢惟演、劉筠等變詩格、而楊文公與王鼎、王絳、號江東三虎、詩格與錢劉亦絕相類、謂之西昆體、大率放李義山之爲、豐富濃麗、不作枯瘠語と。名物六帖に、詩家稱李義山詩體、爲西昆體、不知其何以取義。庾信之夏、予偶閱市、有華刊宋人詩集、題曰西昆酬唱集、有二冊、有楊億大年序、曰、凡五七言律詩二百四十七章、其屬而和者又十有五人、析爲二卷、取玉山冊府之名、命之曰西昆酬唱集云爾、蓋宋國初楊億、王欽若、錢惟演、等諸人、專做義山體、與故襲積、此集乃諸人之作、故後人稱義山體、爲西昆、不與義山相涉也。

【西遊記】 サの部四(サイ)遊記を見よ。

【西廂記】 此書は、元の王實甫の著なり、唐の元稹の會眞記に本づきたり、その內容は、西洛の書

生張茉と崔鶯々といふ女子との二人を以て主人公としたるものにして、其の結構は、甚だ稱するに足らざるも、詞采の絢麗なるを以て特に喝采せらる、全編十六齣、續撰四齣より成る、此書に批評せる者、數十家あれども、金聖嘆の評、李卓吾の評を加へたるものを尤も佳とす、水滸傳と雄を爭ひて、元代の一大傑作なり。

【西征賦】 [セイセイフ] 文章の篇。[出處]晉書潘岳[セイ]傳に、選爲長安令、作西征賦、述所經人物山水、文清旨詣。

【西都賦】 [セイトフ] 文章の篇名。[出處]後漢の班固の作にして、長安の繁華を述べたり、東都(洛陽)賦と併せて、兩都賦と名く、文選に載す。

【西京賦】 [セイケイフ] 文章の篇名。[出處]後漢の張衡の作にして、長安の繁華の狀を述ぶ、此の外に東京賦南都賦あり、文選に載す。

【西域記】 [セイイキ] タの部大唐西域記を見よ。

【西方英雋】 [セイ] たいふ。[出處]晉書姚興載記に、謂[セイ]董門侍郎姚文祖曰、卿知宗儆乎、文祖曰、與臣州里、西方之英雋、興曰、有表理王尙文義甚佳、當王尙研思耳。

【西方美人】 [セイ] 人。[出處]詩經邶風簡兮篇に、山有榛、隰有苓、云誰之思、西方美人、彼美人兮、西方之人兮。これ西周の幽王を指していへるなり。[意義]離騷に、恐美人之遲暮。

【西域賈胡】 [セイ] [意義]西域に仕める商人。[出處]後漢書馬援傳に、援謂[セイ]其兄弇書曰、馬伏波類西域賈胡、到處輒止、以是失利。

【西域妖僧】 [セイ] はざるないふ。[出處]通鑑唐紀十一に、太史令傅奕、精究術數之實、而終不[セイ]之信、遇疾、不[セイ]呼醫餌藥、有僧自西域來、善咒術、能令人立死、復呪之使蘇、上擇飛騎中壯者試之、皆如其言、以告奕、奕曰、此邪術也、臣聞邪不干正、請使咒臣、臣必不能行、上命僧咒奕、奕初無所忽、僧仆、若爲物所擊、遂不復蘇。

【西京雜記】 [セイ] [意義]書名。[出處]此書は舊本あり、或は晉の葛洪の撰と題するあり、實は梁の吳均が名を葛洪に託して作れるものなり、書中載する所は、劉歆の漢書の遺纂を取り、班固の記載せざる所を集錄せるなり、凡て六卷あり。

【西漢會要】 [セイ] [意義]書名。[出處]宋の徐天麟の撰する所にして、漢書に載する典章制度三百六十七事を取り、之を十五門に分類して、編載したるもの、凡て七十卷あり、其體裁は、略ぼ蘇晁の會要に依る、而して分類以外のものは、一括して雜錄中に收む、其採集する所は、頗る淹博といへども、一に漢書に依りて、他書を參酌せざるは、陋簡の譏を免れず。

【西清古鑑】 [セイ] [意義]書名。[出處]清の乾隆帝の勅撰にして、即ち內府所藏の古器を寫したるものなり、其體裁は、考古圖博古圖等に類するも、經傳に據りて款識を辨別し、一々考證を加へ、頗る精確なるものなり、凡そ四十卷あり。

【西河文集】 [セイ] [意義]書名。[出處]清の毛奇齡の撰にして、四百七十八卷あり、經書に關するものを經集とし、其目數十に分つ、文に關するものを文集とし、其目は亦數部あり、末に詩賦を併せ載せたり。

【西山文集】 [セイ] [意義]書名。[出處]五十五卷あり、宋の眞德秀撰す、德秀は、朱子の鄕に生れ、力めて朱子の學を崇奉す、故にその文、大抵儒者の言たるを失はず。

【西伯戡黎】 [セイ] [意義]書經の篇名にして、今文即ち眞古文なり。[出處]序に曰く、殷始咎周、周人乘黎、祖伊恐、奔告于受、作西伯戡黎、と、其意は文王既に虞芮の訟を斷じ、後、邘、密須、犬夷の三夷に勝ち、其勢漸强大となる、是紂王の惡みを招く所以なり、幾もなくして、又黎の無道を討にて之に克つ、是を以て紂益々之を惡み、己の不德なるを顧みずして、遂に周を伐たんとす、是自ら天命を絕つものなり、故に祖伊恐れ奔て其非を諫む、此篇は即ち史官其言を錄せしものにして、誥の體なり、故に其載する所は、殷德を以て周に勝つにあらざれば、天も遂に之を祐けざるに至らんと、然れども言頗る簡にして、百二十餘言に過ぎず、今竹書紀年を按ずるに、文王の時黎を討つの事なし、故に西

伯は武王ならんと、其說取るべし、而して伯は覇にして黎は國名、戡は、音カン、勝なり。

【西施捧心】 [セイ] [意義]西施は、古の吳國の美人なり、嘗て心痛にて胸をかゝへたりしが、其容貌の美は卻つて益せりといふ。[出處]西施を見よ。

【西狩獲麟】 [セイ] クの部獲(クワク)麟を見よ。

【唐突西施】 [セイ] [意義]書言故事に、好人に觸犯するをいふ。[出處]晉書周顗傳に、庾亮謂顗曰、諸人咸以君方樂廣、顗曰、何乃刻畫無鹽、唐突西施也。無鹽は齊の醜女、西施は越の美女なり、周顗云ふ、我を樂廣に比するは無鹽を刻畫して西施に對するが如く、唐突の至りなりといふことなり。又た詩經鄭箋に、家之性唐突難[セイ]禁制。[意義]通俗篇に、漢書孔融傳に、攜[セイ]突宮掖。文選吳宙賦に、春逕碭突と、注と碭と皆唐の通用字なりといへり。

【西湖眞西子】 [セイ] [意義]蘇軾の詩の句なり、西子は、即ち西施にして、古の美人なり、西湖の絕景を、西施の美貌に比したるなり。[出處]蘇軾の次韻劉景文登介亭に、漂國梅雨餘、衰年困蒸溽、高堂磨新磚、顏覺利腰足、松根百尺井、兩綆飛淨淥、流觴漿兒童、一笑爲捧腹、淸風信可御、剛氣在鼎鑊、始知共此世、物外無三伏、長歌入雲去、不持管絃逐、西湖眞西子、煙樹點眉目、警江少謹蕪、高浪翻雪屋、俛仰拊四海、百世飛鳥速、遺迹錢氏餘、近形祖侯躅、吾生如寄耳、寸晷鄙尺玉、誰似劉將軍、遂顧謝逢輻、千言一揮手、五車不再讀、春蚓秋蛇、一起、暮與寒蟲橫、我老廢吟哦、頓覺君時拂觸、從今事遠覽、發夢此幽谷、淸游得三昧、至樂謝五欲、莫作狂道士、氣壓劉師服。[意義]蘇軾の西湖の詩に、水光瀲灩晴偏好、山色朦朧雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜。○虞興記浙江杭州府の條、府城西周三十里、漢時金牛見、湖中、人言明聖之瑞、舊稱明聖湖、蘇軾守鄭上言、西湖有不可廢者五、乃築長堤、以便行者、堤上有六橋、云自紹興建都、君臣相娛嬉、游於此、金主亮聞而羨焉、卒起投鞭渡江之志、曾者以西湖爲九州破國、比之西施、亦稍過矣。

【西湖處士句】 [セイ] [意義]蘇東坡の西湖に隱居せし林和靖を詠ぜし詩をいふ。[出處]蘇軾の詩に、西湖處士骨應槁、只有此詩君獨倒。(全篇はチの部竹外一枝斜更好を見よ)

【西域見聞錄】 [セイ] [意義]書名。[出處]清の七十一撰すとありて、其詳かならず、此人西域に在住のときに、見聞せる所を錄したるものにして、凡そ八卷とす、其目は新疆紀略、外藩列傳、西陲紀事本末、回疆風土記、軍臺道里表とす、吾邦にては寛政十三年に翻刻せられたり。

【西湖遊覽志】 [セイ] [意義]書名。[出處]二十四卷あり、明の田汝成撰す、この書名勝に附するに事蹟を以てし細大漏さず、卷首に宋朝京城圖、湖山一覽圖、浙江省城圖あり。

【西門豹佩韋】 [セイ] [意義]西門豹は戰國の世、魏の文侯の臣にして、性急なる人、因てナメシカハを佩びて自ら戒めたるなり。[出處]韓非子觀行篇に、西門豹之性急、故佩韋以自緩、董安于之心緩、故帶弦以自急。

【西門豹投巫】 [セイ] [意義]西門豹、鄴の令となりしに、其の土地の習はしとして、河伯の爲めに婦を娶ると稱して、婦女を河水に投ずることあり、豹は斷然と其の弊を改めんとて、巫を河に投じたるなり。[出處]史記滑稽傳褚先生續に、魏文侯時、西門豹爲鄴令、豹到問民所疾苦、長老、曰苦爲河伯娶婦、以故貧、俗語不爲娶婦、水來漂溺人民、豹曰至時幸來告、吾亦往送女、至其時、豹往會河上、三老官屬豪長者里父老皆會、其巫老女子從弟子女十人、皆衣絮衣、立大巫後、豹呼河伯婦視之曰、是女不好、煩大巫嫗爲報河伯、更求好女、使、吏卒拘大巫嫗、投之河中、有頃曰、何久也、弟子趣之、又投三弟子、豹曰、巫嫗女子不能白事、煩三老爲入白之、復投三老河中、豹簪筆向河立、良久又曰、三老不還、欲使廷掾與豪長者一人入趣之、皆叩頭血流、豹曰、狀河伯留客之久、若皆罷去、吏民大驚恐、從是不敢復言河伯娶婦、豹即發民鑿十二渠、引河水灌民田、皆得水利、民人足富、豹名聞天下、澤流後世。

【西伯囚羑里】 [セイ] [意義]周の文王は殷の紂王が西伯(周の文

王）を奚里の獄に囚へしなり、奚里はイの部奚（イウ）里を見よ。

【西施有ㇾ所ㇾ醜】 然れども西施は美人なり、也正しといふ可らず、これ醜なる所あるなり。 ㊟ 淮南子に、嫫母有ㇾ所ㇾ美、西施有ㇾ所ㇾ醜と。嫫母は古の醜女なり。

【西山白雪三城戍】 句 ㊟ 杜甫の望野の詩に、西山白雪三城戍、南浦清江萬里橋、海内風塵諸弟隔、天涯流淚一身遥、惟將遺恨供多病、未有消埃答聖朝、跨ㇾ馬由來時極ㇾ目、不堪人事日蕭條。 ㊟ 唐人の詩の句。

【西施顔色今何在】 句 ㊟ 元稹の春詞に、山翠湖光似ㇾ欲ㇾ流、蜂來鳥思卻堪愁、西施顔色今何在、但看春風百草頭。

【西子蒙ㇾ不潔ㇾ則人皆掩ㇾ鼻而過ㇾ之】 ㊟ 西施の如き容色あるものにても、一旦不潔を蒙らば、人皆鼻を掩て、其の臭を聞かんことを懼るゝなり。 ㊟ 孟子離婁下篇に、孟子曰、西子蒙ㇾ不潔、則人皆掩ㇾ鼻而過之、雖ㇾ有ㇾ惡人、齊戒沐浴、則可ㇾ以祀ㇾ上帝。

【成均】 ㊟ 五帝の時の學校の名。 ㊟ 周禮春官に、大司樂掌ㇾ成均之法、以治ㇾ建國之學政、而合國之子弟焉と。鄭注に、董仲舒云、成均五均之學と。又た唐書百官志原注に、垂拱元年、改ㇾ國子監ㇾ曰ㇾ成均監。

【成憲】 ㊟ 先王の法憲なり。 ㊟ 書經說命下篇に、監ㇾ于先王成憲、其永無愆。

【成功】 ㊟ 事功の成るないふ。 ㊟ 論語泰伯篇に、巍巍乎其有ㇾ成功ㇾ也。

【成敗】 ㊟ 成ると敗るとなり。 ㊟ 史記范雎傳に、成敗之事。

【成人】 ㊟ ㊀ 猶ほ全人といふがごとし。㊁ 丁年、即ち二十歲に達するものゝ稱。 ㊟ ㊀ 論語憲問篇に、子路問ㇾ成人、子曰、若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝、文之以禮樂、亦可ㇾ以爲ㇾ成人矣。㊁ 曲禮に、男子二十、始冠、而成人矣。

【成童】 ㊟ 十五歲以上をいふ。 ㊟ 禮記內則篇に、十年出就ㇾ外傅、學ㇾ書計、十有三年學樂誦ㇾ詩、舞ㇾ勺、成童舞ㇾ象、學ㇾ射御と。鄭注に、外傅、教學之師也、先學ㇾ勺、後學ㇾ象、文武之次也、成童、十五以上。

【成相】 ㊟ 村木等を選ぶに、衆人の力を齊ふせしめんが爲めに謠ふ歌なり。 ㊟ 荀子成相篇に、成相、助ㇾ力之歌也、荀子有ㇾ成相一章、相者、助也、舉ㇾ重勸ㇾ力、以申其邪辭喻之聲也、託ㇾ此以諷喻也。

【成規】 ㊟ キマリなり。 ㊟ 周禮に、天子之弓合ㇾ九而成規と。又た莊子田子方篇に、昔之見我者、進退一成規一成矩。

【成竹】 ㊟ 竹の部竹（キヨク）有ㇾ成竹ㇾ を見よ。

【成蹊】 ㊟ 桃の部桃（タウ）李不ㇾ言下自成ㇾ蹊を見よ。

【成立】 ㊟ 事功の成就するをいふ。 ㊟ 柳氏家訓に、成立之難如ㇾ升ㇾ天、覆墜之易如ㇾ燎ㇾ毛。

【成就】 ㊟ 事物の成り畢るないふ。俗にジヤウジウと讀む。 ㊟ 史記呂后紀に、三年方築ㇾ長安城、四年就ㇾ半、五年六年成就。

【成風】 ㊟ 王の部王（イ）斷を見よ。

【成王有ㇾ過則撻ㇾ伯禽】 ㊟ 周公、成王に傳たり、成王過あるときは、周公その子伯禽を笞ちて、成王を懲らせりとぞ。 ㊟ 禮記文王世子篇に、成王有過、則撻伯禽、所以示成王世子之道也。

（石　崇）

【成功之下不ㇾ可ㇾ久處】 ㊟ 功既に成りて、その處を去らざれば、怨を受け禍を蒙むるべし、故に久しく處る可からずといふ。 ㊟ 史記蔡澤傳に、書曰、成功之下、不ㇾ可ㇾ久處と。書は、逸書なり。

【制】 ㊟ 文體の名。 ㊟ 文體明辯に、按、顏師古云、天子之言、一曰ㇾ制、書、謂ㇾ爲ㇾ制度之命也、蔡邕云、其文曰ㇾ制誥、三公敎令謨ㇾ令之屬是也、刺史太守相勑奏申ㇾ下土、選書文亦如ㇾ之、其體爲ㇾ九解、若遷ㇾ京師、近官則言官、具言ㇾ姓名、其免若得ㇾ罪無ㇾ姓、此漢之制也、唐世大賚嗣赦ㇾ宥虜囚、及大除授則用ㇾ制書、其褒嘉賛勞、別有ㇾ慰勞制書、餘皆用ㇾ勑、中書省掌ㇾ之、宋承ㇾ唐制、用以拜ㇾ三公三省（門下・中書・尙書）等官、而罷ㇾ免大臣亦用之、其詞宜ㇾ讓ㇾ于庭、皆用ㇾ儷語、故有ㇾ歌ㇾ告在ㇾ庭數告有ㇾ位數ㇾ告萬邦、誕揚休命、誕揚贊冊、誕揚丕顯等語、其餘庶職、則但用ㇾ語而已。是知以ㇾ制命ㇾ官、蓋唐宋之制也、今採ㇾ二代制詞、以爲ㇾ式、而古今文體之變、則作者所ㇾ深悼云と。又た事物紀原に、文心雕龍曰、古者有ㇾ命無ㇾ制、周禮太祝作ㇾ六辭、以通ㇾ上下、其二曰ㇾ命、是也、蔡氏演義曰、制也王也、禁也斷也、言君上用ㇾ人、或制斷而行ㇾ之、或禁制而止ㇾ之。

【制詔】 ㊟ 制は、帝王制度の命、詔は、告命なり、即ち天子の命令なり。 ㊟ 史記秦紀に、命爲ㇾ制、令爲ㇾ詔。

【制科】 ㊟ 天子自ら詔して舉人を試みらるゝをいふ。 ㊟ 唐書選舉志に、唐制取ㇾ士之科、多因ㇾ隋舊、其大要有三、由ㇾ學館者曰ㇾ生徒、由ㇾ州縣者、曰ㇾ鄉貢、其科之目、有ㇾ秀才、有ㇾ明經、有ㇾ俊士、有ㇾ進士、有ㇾ明法、有ㇾ明字、有ㇾ明算、有ㇾ一史、有ㇾ三史、有ㇾ開元禮、有ㇾ道舉、有ㇾ童子、此歲舉之常選也、其天子目詔者曰ㇾ制舉、所以待ㇾ非常之才ㇾ焉、大抵衆科之目、進士爲ㇾ尤貴、其得ㇾ人亦最爲盛焉、進士科、起ㇾ於隋大業中。

【稱制】 ㊟ 天子に代りて政事を行ふをいふ。 ㊟ 史記呂后紀に、今太后稱ㇾ制王ㇾ昆弟諸呂、無所不可と。又た漢書呂后紀の顏注に、天子之言、一曰ㇾ制書、二曰ㇾ詔書、制書者、謂ㇾ爲ㇾ制度之命也、非ㇾ皇后所ㇾ得ㇾ稱、今呂太后、臨ㇾ朝行ㇾ天子事、斷ㇾ決萬機、故稱ㇾ制詔。

【攜制】 ㊟ 天子の詔勑なりと詐ること。 ㊟ 漢書高五王傳に、攜制以命ㇾ天下。

【性命】 ㊟ 人の天より稟受する所をいふ。 ㊟ 易經乾卦彖傳に、乾道變化、各正ㇾ性命、保ㇾ合大和と。又た同書說卦傳に、窮ㇾ理盡ㇾ性至ㇾ於命。

【性說】 ㊟ 古來學者が性を說く所一ならず、今その重要なるものを揭ぐ。

（一）孔子……性相近也、習相遠也。（論語陽貨篇）
（二）子思……天命之謂ㇾ性。（中庸首章）
（三）孟子……孟子道ㇾ性善、言必稱ㇾ堯舜。（孟子滕文公上篇）人性之善也、猶ㇾ水之就ㇾ下也。（孟子告子上篇）
（四）公孫子……性無ㇾ善惡。（公孫子）
（五）告子……生之謂ㇾ性……性無ㇾ善、無ㇾ不善。（孟子告子上篇）
（六）荀子……人之性惡、其善者僞也。（荀子性惡篇）
（七）揚雄……人性善惡混、修ㇾ其善、則爲ㇾ善人、修ㇾ其惡、則爲ㇾ惡人。（揚子法言）
（八）董仲舒……質樸之謂ㇾ性。（漢書本傳）
（九）劉向……性情相應。（漢書本傳）
（一〇）荀悅……性有ㇾ三品。（申鑒）
（一一）王充……定有ㇾ善有ㇾ惡。（論衡）
（一二）韓愈……人之所ㇾ性者五。曰仁義禮智信。又曰、性有ㇾ三品、上焉善、中焉可ㇾ上下、下焉惡。これ荀悅に本づけり（原性）
（一三）李翺……性善情惡。（復性書）
（一四）程頤……性相近也、言ㇾ氣質之性、非ㇾ言ㇾ性之本也、若言ㇾ其本、則性即理、理莫ㇾ不善……性即理也（二程全書）
（一五）張載……張子曰、形而後有ㇾ氣質之性、善反ㇾ之則天地之性存焉、故氣質之性、君子有ㇾ弗ㇾ性者。（橫渠語錄）
（一六）蘇軾……性無ㇾ善惡。（東坡集）
（一七）王安石……性情一而善惡混。（性情篇）
（一八）朱熹……性即理也。（孟子集注）
（一九）胡瑗……性不ㇾ可ㇾ以ㇾ善言、趙說、蓋時便與ㇾ惡對、非ㇾ本然之性ㇾ矣。（文集）
（二〇）王守仁……知是理之靈處、就ㇾ其主宰處說、便謂ㇾ之性。傳習錄）

（三）達磨…作用是性、在目曰見、在耳曰聞、在鼻嗅香、在口論談、在手執捉、在足運奔。（傳燈錄達磨傳）

【性善】 孟子性は善なりといへり。

【性惡】 荀子性は惡なりといへり。

【性質】 柳公綽傳に、公綽幼孝友、性質嚴重、起居皆有禮法。

【性度】 性質度量を略していふ。

【性急】 元康傳に、神武曰、我性急。

【性理學】 氣を說く、故に其の學を性理學といふ、又た理學ともいふ。（性理大全書卷首凡例）性理の字面は、世說に、習鑿齒曰、性理逢錯とあるに本づけり。

【伐性斧】 女色をいふ。

【性猶杞柳】 人の性は杞柳（コブヤナギ）の如きものなるをいふ。孟子告子上篇に、告子曰、性猶杞柳也、義猶桮棬也、以人性爲仁義、猶以杞柳爲桮棬也、朱注に、桮棬は、木を屈めて爲る所、巵匜の屬の若し、告子言ふ、人の性は、本と仁義なし、必矯揉を待ちて、後ち成る、荀子性惡の說の如し。

【性猶湍水】 人の性は奔湍の水の東方へも西方へも流るゝが如く、善ともなり惡ともなるをいふ。孟子告子上篇に、告子曰、性猶湍水也、決諸東方則東流、決諸西方則西流、人性之無分於善不善也、猶水之無分於東西也。

【性理大全書】 明の永樂十三年胡廣等勅を奉じて編輯せるものにして、七十卷あり、書中に載する所は宋の道學者凡そ一百二十家の說を採集せり、而して其中、原書を採錄して部秩を爲す者九種、群說を摭拾し、門を分ちて輯纂する者十三類あり。九種の目は周子太極圖說一卷、通書二卷、張子西銘一卷、正蒙二卷、邵子皇極經世書七卷、朱子易學啓蒙四卷、家禮四卷、蔡元定律呂新書二卷、蔡沉洪範皇極內篇二卷これなり。四書大全、五經大全と共に、永樂の三大全と呼ぶ。十三類稱く統紀なきを以て、淸の康熙帝その要を提げて、性理精義を撰ぜり。

【率性之謂道】 人の天性に率ふて行ふを道といふ。中庸第一章に、天命之謂性、率性之謂道、修道之謂敎。

【性相近習相遠】 人生は本と大なる差異なし、その習慣の爲めなるをいふ。論語陽貨篇に、子曰、性相近也、習相遠也。

【性相近習相遠】 人生は本と大なる差異あるものは、習慣の爲めなるをいふ、即ち習慣を貴ぶの意。論語陽貨篇に、子曰、性相近也、習相遠也。

【姓名】 人の姓と名となり。史記項羽紀に、書足以記姓名。又た南史梁元帝紀、元帝著古今同姓名錄一卷。（南史記孟嘗君傳に、更封傳、變名姓、以出關。）

【姓氏】 姓と氏とになり。隨國隨侯賜氏、不賜姓、貴有氏、賤無氏、男稱氏、女稱姓、姓者所以統繫百世而不變者也、氏者所以別子孫所自出、一傳而變者也、天子賜姓、舜之嬀、周之姬、是也、非之士而命之氏、舜之有虞、禹之有夏、是也、國君無氏、故設土之封爲國不稱氏、（禮記史記高祖紀に、高祖沛豐邑中陽里人、姓劉氏、字季と。）これ姓と氏と混用するの始めなり。

【冒姓】 他の姓を名乘るをいふ。漢書衞青傳に、子夫自平陽公主家得幸武帝、故青冒姓爲衞氏。顏注に、冒謂假稱若人首之有覆冒也。

【征伐】 王者の討伐をいふ。左傳莊公二十四年に、征伐以討其不然と。又た孟子盡心下篇に、征者、上伐下也、敵國不相征也。

【征戰】 タヽカフなり。李白の詩に、鼓角徒悲鳴、樓船習征戰。

【征衣】 旅行の衣裳をいふ。

【征衣】 復古の詩に、鎧笠相隨走路傍、一春不換習征衣。

【征繕】 稅を取り兵甲を補繕するこゝ、即ち征は賦なり。左傳僖公十五年に、征繕以立、鄧子。

【征伐】 復仇の戰。

【征伐】 王褒の四子讚德論に、百姓征伐無所措其手足。

青

【征夫】 路上を行く人なり、行人に同じ。國語晉語に、莘莘征夫。

【征鳥】 一定の方向を定めて飛び行く鳥をいふ、雁などをいふ。呂覽季冬に、征鳥厲疾。

【征雁】 方向を定めて行く雁をいふ。說苑辨物に、南雁。

【征驂】 遠行の驂馬なり。驂はツヘウマなり。王勃の秦府序に、高林靜而霜鳥飛、長路晦而征驂動。

【怔忪】 狼狽の貌。王褒の四子講德論に、秦時百姓怔忪。（字、また征忪に作る。）

【青青】 ①堅剛茂盛の說。②草色の鮮なるをいふ。詩經衞風淇奧篇に、菉竹青青。③文選古詩に、青青河畔草、綿綿思遠道。

【青天】 黃帝篇に、上闕青天、下瞀黃泉。

【青雨】 竹葉に降れる雨の形容。吳錫麒の詩に、竹色飛青雨。

【青陽】 春なり、氣青くして溫陽なるをいふ。淮南時則に、春爲青陽、夏爲朱明、秋爲白藏、冬爲玄英、四時和調之玉燭。

【青春】 ①春は東方にして其の色青し、故に春を青春といふ。②人の少き時は春の如し、故に少年者を青春といふ。①楚辭大招に、青春受謝。②水滸傳第七回に、青春年少、休爲林冲誤了前程。

【青帝】 春の神は東に在り、東は青色なれば、青帝といふ。呂覽孟春紀に、其帝太皡、其神句芒、其數八、其味酸、其臭羶、其祭戶、祀先脾。

【青雲】 天をいふ、因て人の顯著なるをいふ。①聖賢の言を立て、世に傳ふるものをいふ、孔子の如き是れなり。②高位高官に登るをいふ。③世外に超然たるをいふ。①史記伯夷傳に、閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施于後世耶。②史記范雎傳に、范雎盛雜椒、侍者甚衆見之、須賈頓首言死罪、曰、賈不意君能自致於青雲之上、又た揚雄の解嘲に、當塗者升青雲、失路者委溝渠、又た蘇軾の次韻答滿思復詩に、但恐跛鼈隨赤驥、青雲飛步不容攀。③顏延年の五君詠に、仲容青雲器、仲容は、晉の阮咸の字なり。

【青年】 春を青陽といふ、人の一生に於て少年の時は春の如し、故に青年といふ。王世貞の詩に、若過長沙、應大笑、不將憔悴認青年。

【青宮】 太子をいふ。太子は、東宮に居る、東は五色に於て青とす、故にいふ。神異經に、東明山有宮、青石爲墻、高三仞、門有銀榜、以青石、碧鏤、題曰天子長男之宮と。又た初學記に、青宮、一曰東宮、太子宮也。

【青瑣】 太子の宮門なり、門扉に連鎖の模樣を彫刻し青色を以て塗るなり。漢舊儀卷上に、黃門郎屬黃門令、日暮入羽林青瑣門拜、名曰夕郎と。又た漢書元后傳に、曲陽侯根、王根一驕者、僭上、赤墀青瑣と。顏注に、孟康曰、青瑣以青畫戶邊鏤中、天子制也、師古曰、青瑣者刻爲連瑣文、而青塗之也。

【青樓】 ①青色に塗りたる樓。②美麗なる樓にて、女の居る處にいふ。①遊女の居る處。①南史齊廢帝東昏侯紀に、武帝興光樓上施青漆、世人謂之青樓。②曹植の美女篇に、借問女安居、乃在城南端、青樓臨大路、高門結重關。③梁の劉邈の採桑行に、倡女不勝愁、結束下青樓と。又た李白の在水軍宴司馬樓船觀妓詩に、對舞青樓妓、雙彈白玉童と。又た杜牧の詩に、贏得青樓薄倖名。

【青山】 遠山の青きをいふ。李白水邊東城に、白の送友人詩に、青山橫北郭、

【青海】 青海郡の東北部にある大湖をいふ。北史吐谷渾傳に、青海周回千餘里、內有小山、俗谷合後、以龍駒、曾得波斯草馬、放入海、因生駒駒、日行千里、世傳青海驄者也。

【青塚】 漢の王昭君の墓をいふ。大明一統志に、大同府王昭君墓、在古豐州西六十里、地多白草、此塚

獨青、故名青冢。

【青囊】（セイノウ）【和】藥囊をいふ。【出】晉書孝友傳に、顗含被失明、聞人疏方、須髯蛇瞻、尋求無得、含憂歎累時、忽有青衣童子、持一青囊授含、開視乃蛇膽也、服病即愈と。又た趙之傑の詩、遊寧羣峰暮雪詩に、爲君燎卻烟霞癖、比似青囊藥更神。

【青氈】（セイセン）【和】青色の毛氈にて、家の舊物のことにもいふ。【出】晉書王獻之傳に、獻之夜臥齋中、而有偷人入其室、盜物都盡、獻之徐曰、偷兒、青氈我家舊物、可特置之、群偷狼狽走と。又た杜甫の詩に、晨朝降白露、遙想舊青氈。

【青帘】（セイレン）【和】酒店の旗なり。【出】李融の送沈侯之京詩に、關河弱柳垂金縷、水驛青帘拂畫樓。

【青鈇】（セイフ）【和】鈇似蛭而稍大、生子草間、如鱉、取其子、母即飛來、以母血塗錢八十一文、每市物、或先用母錢、或先用子錢、皆復飛還、輪環無已。

【青衿】（セイキン）【和】學生をいふ、古の學生は青色の襟の衣服を着けたる故なり。【出】詩經鄭風子衿篇に、青青子衿、悠悠我心と。又た雪濤小說に、一青衿生、性狡、能以謫計壓人と。又た應璩詩に、西吳族世豐於財、不事詩書、其母有弟、補博士弟子員、衣青衿來謁、母大詫曰、而何服此衣服哉、嗟而貧、衣不足於素、故綴以青襟、奈何不覩我取、足耶、蓋不識青衿爲時制服也。

【青奴】（セイド）【和】一に竹夫人ともいふ。暑候一に食中に入れて涼を取る具。【出】黃庭堅の詩に、趙子充示竹夫人詩、蓋涼寢竹器、想臂休、膝、似非夫人之職、予爲名曰青奴、並以小詩取之、二首、詩に云、青奴元不解梳粧、合在禪齋參燕默、肌膚冰雪助清涼。（其一）稱李四絃風拂席、昭華三弄月侵牀、我無紅袖堪娛夜、政要青奴一味涼。（其二）【和】醫餘雜考に、編竹爲筒、空其中、兩寮其外、暑時置牀席間、可以憩手足、取其輕涼也、俗謂之竹夫人、按、陸龜蒙有竹夜膝詩、天祿識餘、以爲即此器也、然曰夜膝則尚未有夫人之稱、其名蓋起于宋時、東坡詩云、留我同行木上座、贈君無語竹夫人、又聞說牀頭惟竹几、夫人應不解鄰翁、自注云、世以竹几爲竹夫人也。○事物異名錄に、石珤苦熱行、竹姬染汗光模糊、按、竹姬即竹夫人、山堂肆考、楊繼崖有抱節君傳、抱節謂竹夫人也、楊維楨竹夫人傳、夫人竹氏、名簀、字玲瓏。

【青詞】（セイシ）【和】文體の名。【出】文體明辯に、按陳繹曾云、青詞者方士懺過之詞也、或以所禱、或以薦亡、唯道家用之、其謂密詞、則釋道通用矣、詞用醮語、諸集皆有、而事文類聚所載尤多、今錄數篇、以備一體、此外又有法語、而魯山、有告謁、有投簡、有解語、有法語、而魯山、有告謁、有投簡、其目至爲煩瑣、而諸集不載、愚謂二氏相傳、必有舊本、臨時錄用、亦何不可、何必別撰、而騁詞華於無益之地哉、故皆略而不錄と。又た翰林志に、凡太清宮道觀爲告詞文、用青藤紙朱字、謂之青詞と。又た兩般秋雨盦隨筆に、青詞乃醮壇請禱之詞、明世宗朝大臣嚴嵩從事于此、以希天寵。

【青史】（セイシ）【和】看せよ【出】范賓の詩に、南朝興亡、青史歷歷なり。（カの部汗簡を參す）【和】唐書に、千載後、青史と。今篇は宋文鑑に載す、近くは小學外篇に見ゆ。

【青銅】（セイドウ）【和】唐銅をいふ。【出】杜甫の詩に、恰有三百青銅錢。

【青蒲】（セイホ）【和】伏青蒲諫を見よ。

【青蠅】（セイヨウ）【出】詩經小雅青蠅篇に、營營青蠅止于樊、豈弟君子無信讒言。

【青眼】（セイガン）【和】悅びて視る眼つきなり、人と相親む意とす。【出】ハの部白眼を見よ。

【青盲】（セイマウ）【和】リ、アキメクラ。【出】筆苑雜記に、托青盲不仕。

【青柳】（セイリウ）【和】新に芽を出したる柳。【出】潘岳の詩に、青柳何依依。

【青石】（セイセキ）【和】青色の石。【出】水經注に、皆青石隱起。

【青苗法】（セイベウハフ）【和】一唐の代宗の時の稅法の名なり。二宋の時王安石の施行せし新法の一なり、その法は、春時苗の青くして田に在るときに當り、民に錢を貸し與へ、資本となさしめ、一百文に付き、二十文の利子を出し、敎授の時を待てその金を返卻せしむるなり。【出】一通鑑綱目集覽に、唐租庸調之法壞、代宗以歲定

稅、斂以夏秋、時又以國用急不及秋、苗方青即征之、號青苗錢也と。又云、青苗錢竝興、宋制不同、宋制尙有錢貸民、而加微其息、唐直計畝加稅耳。二宋史に、王安石欲行青苗法、以爲周官國服爲息法也と。國服爲息法は、周禮泉職に見へたり。

【青紹甲】（セイダカフ）【和】鵬黃威（モエギヂドシ）の鎧なり。【出】北轅錄に、甲士皆青紹甲居左、紅縧甲居右有。

【青蛇劍】（セイダケン）【和】劍の名なり。【出】萬花谷に、龜文、龍藻、白虹、青蛇、屢蟄、步光、皆劍名也。

【青琅玕】（セイラウカン）【和】青き寶石なり、琅玕とは其玉の磨の爽なるより取りて名く。【出】本草に、時珍曰、琅玕象其摩也と。又た張衡の詩に、美人贈我青琅玕、何以報之雙玉盤。

【青精飯】（セイセイハン）【和】道家の青精石を以て作れる飯をいふ。【出】神仙傳に、鄧伯元、王元甫、俱在霍山、服靑精飯、又た杜甫の贈李白詩に、豈無青精飯、使我顏色好と。又た本草に、烏飯一曰青精飯、蘇頌曰、陶隱居登眞隱訣載太極眞人靑精乾石飯法、飯音迅、殃也、謂以酒蜜藥草罨殃浸而暴之也、陳藏器曰、烏飯法、取南天燭莖葉、擣汁浸儒米、九蒸九曝、米粒緊小如珠、李時珍曰、此道家服食法、今釋氏四月八日造以供佛。

【青田酒】（セイデンシュ）【和】烏孫國の酒。【出】太平廣記に、烏孫國有青田核、大如五六升甕、空之盛水、俄而成酒、劉章會得一枚、擲資設之、可供二十人、一核方盡、一核所盛復中飲矣、因名其核曰青田酒。

【青烏飛】（セイウトビ）【和】使の來り、又は音信書のことをいふ。【出】漢武故事に、七月七日、急有青鳥、飛集殿前、東方朔曰、此西王母欲來、有頃王母至、二青鳥夾侍王母傍。

【仰青雲】（セイ）【和】いふ。【出】神仙を學ばんとするを貞白、幼有異操、年十歲、得葛洪神仙傳、奮夜研尋、便有養生之志、謂人曰、仰青雲、覲白日、不爲遠矣。

【青錢萬選】（セイ）【和】青銅萬錢あれば、制科の試驗に萬回及第すなり、皆全力の致す所なるをいふ。【出】唐書張薦傳に、薦祖鷟、字文成、調露初、登進士第、八以制舉、苦甲制、四參選、判策爲銓府最、員半千稱鷟文辭、謂青錢萬選、中、時號鷟青錢學士。

【青蓋黃旗】（セイ）【和】氣の凝りて青蓋黃旗の狀をなすものをいふ、王者興起の瑞。【出】羣書札記に、陸機石闕銘、青蓋南沿、黃旗東指、李善注、司馬德操與劉恭嗣書曰、黃旗紫氣、恆見東南、終成天下者、揚州之君乎、雲谷雜記、吳書陳化使魏、魏文帝因酒醴、朝問曰、吳魏峙立、誰將平之、一海內者乎、舊說、紫蓋黃旗、王者南帝心奇其辭、六朝以來、都於東南、故黃旗紫蓋之語、文士多引用之、雖用於東南、故爲符瑞事、而罕有究其職者、予一日讀宋符瑞志、云、漢世術士言黃旗紫蓋見於斗牛之閒、江東有天子氣、胸中於是釋然、因知讀書不脈於多也、按鮑照河清頌、黃旗西映、紫蓋東輝。

【青蓮居士】（セイ）【和】唐の李白の別號なり。【出】李白の贈玉泉仙人掌茶詩序に、荆州玉泉寺、近清溪諸山、往往有乳竇云云、後之高僧大隱知仙人掌茶發乎中孚禪子及青蓮居士李白也と。又た陳眉公筆記に、李白生于彰明縣之青蓮鄉、故號青蓮。

【青州從事】（セイ）【和】一善き酒の異名なり。【出】世說術解篇に、桓公（名溫）有主簿、善別酒、有酒輒令先嘗、好者謂青州從事、惡者謂平原督郵、青州有齊郡、平原有鬲縣、從事謂到臍、督郵言在鬲上住也と。これ齊は臍と音通じ、鬲は膈と音通ずるをいふ。【考】青州從事を人名とする說あり、徐彭年家純に云、其子問、青州從事謂何、曰湘江野錄、青州從事、古善造酒者、これ一說に備ふべし。【出】皮日休の醉中寄魯望一壺詩に、醉中不得親相倚、故遣青州從事來。

【青萍結綠】（セイ）【和】青萍は良劍、結綠は美玉なり。【出】李白の與韓荆州書に、青萍結綠、長價於薛卞之門と。又た唐書李德裕傳の贊に、公之智決、利若青萍、一海內者乎、舊說、紫蓋黃旗、王者南帝心奇其辭、六朝以來、都於東南、故黃旗紫蓋之語、文士多引用之、雖用於東南、故爲符瑞事、而罕有究其職者、予一日讀宋符瑞志、云、漢世術士言黃旗紫蓋見於斗牛之閒、江東有天子氣、胸中於是釋然、因知讀書不脈於多也、按鮑照河清頌、黃旗西映、紫蓋東輝、於是釋然、

【青山一髪】 [語義]渺茫たる海上遠に、青き山を見るをいふ。[出典]蘇軾の渡海詩、通潮閣の詩に、餘生欲老海南村、帝遣巫陽招我魂、杳杳天低鶻没處、青山一髪是中原と。又た漁隱叢話に、通潮閣詩、杳杳天低鶻没處、青山一髪是中原、伏波將軍廟有云、南望連山、若有若無、杳杳一髪耳、其語頗奇、雨用之、蓋得意也と。又た周權の詩に、青山一髪認郴州、蘸絲暮上魚豚市、[出典]郭山陽の天草祥の詩に、水天髣髴青一髪と作りしは、東坡の此句に本づきしなり。

【青天白日】 [語義]㊀快晴の天色をいふ。㊁明白にして包み隠す所なきをいふ。[出典]㊀韓愈の與崔群書に、青天白日、奴隷亦知、其清明、と。又た韓愈の同水部張員外曲江春遊寄白二十二舍人詩に、漠漠輕陰晚自開、青天白日映、樓臺、曲江水滿花千樹、有底忙時不肯來。㊁朱子文集に、父子魏元履云、武侯爲漢復讐之心、如青天白日、人人得而見之と。又た薛文清曰、大丈夫心事、當如青天白日、使人得而見之可也。[出典]我邦にては、冤罪を雪りしものが、無罪放免となりしを稱することゝせり。

【青松落色】 [語義]交道の衰失せるを松の色を落すが如きに比す。[出典]孟郊の詩に、近世交道衰、青松落顏色。

【青天霹靂】 [語義]筆勢の飛動するを狀するなり。[出典]陸游の詩に、放翁病過秋、忽起作醉墨、正如久蟄龍、青天飛霹靂。[類語]人の動作の上に就て、奇穩の中に大活動をなすに驚ふを得べし。

【青雲之志】 [語義]青雲の字義は、青雲の高潔なるたいふ。㊁功を顯はし德を建つるをいふ。[出典]㊀楊逸民傳に、嵇康早有青雲之志。㊁王勃の滕王閣序に、窮當益堅、不堪白髮之志と。又た張九齡の詩に、宿昔青雲志、騰跎白髮年。

【青鳥之書】 [語義]家墓家相などを記せる書をいふ。鳥の字或は烏の字に作る。[出典]抱朴子內篇極言に、青黃帝請古候利詣風后、著禮論、則受胥敖、窮神套則記曰白澤之辭、相地理則書青鳥之殷と。又た後漢書王景傳に、築宅禁忌と、注に、葬送造宅之法、若黃帝青鳥之書也。

【青囊中書】 [語義]管人の著、五行天文卜筮の事を記せる書。[出典]晉書郭璞傳に、璞字景純、博學有高才、有郭公者、客居河東、精於卜筮、璞從之受囊、公以青囊中書九卷與之、由是遂洞五行天文卜筮之術と。又た文獻通考經籍門に、青囊經、秦之隱君子作、陳希夷注と。又た容齋隨筆に、世傳錦囊經爲郭璞所著、行山卜宅兆者、印爲元龜焉。

【青衣行酒】 [語義]昏の懷帝平陽に黎行りし故事。[出典]晉書孝懷帝紀に、帝蒙塵於平陽、正月、劉聰大會、使帝著青衣行酒、侍中奥琨號哭。

【伏青蒲諫】 [語義]青蒲は天子の御座に敷ける青綠の蒲座なり、皇后に非れば此處へ至ることを得ず、史丹といふもの、その處まで進み出でゝ諫めたるなり。[出典]漢書に、史丹字君仲、養國人、元帝即位、爲侍中、時定陶共王有材藝、子母俱愛幸、而太子顏有酒色之失、母王皇后無寵、上疾、皇后太子皆憂、丹以親密臣、二得侍疾候、上間獨寢時、直入臥內、伏青蒲上、涕泣言曰、皇太子以適長、立十餘年、名號繫於百姓、天下莫不歸心、臣子見定陶王愛幸、道路流言、以爲太子有動搖之變、奈若此、公卿以下必以死爭、不然、誤臣頗先賜死、以示羣臣、天子素仁、見丹涕泣言又切至、大感曰、皇后護媢、先帝又愛太子、吾豈可違指、太子由是寧、綱、成帝立、累遷左將軍。

【紫青繚白】 [語義]青山白雲の中に在る人といふことなり。[出典]舊唐書傳奕傳に、常醉臥、驀然起曰、吾其死矣、因自寫墓誌曰、傳奕青山白雲人也、因酒醉死、嗚呼哀哉、其餘達皆此類。

【青雲紫陌議】 [語義]氣の合はざるを、天に在る青雲、地に在る紫陌の如く、甚だ懸隔せるをいふ。[出典]范成大の姑蘇同年會詩序に、當此時、通榜士、意氣相與甚厚、否則有青雲紫陌之譏。

【青山只磨青】 [語義]青山のいつも形を改めざるをいふ。[出典]

朱熹の詩に、邊疆前頭列翠屏、晚來相對靜儀形、浮雲一任閑舒卷、萬古青山唯磨青。

【青山可埋骨】 [語義]青山のある處は丈夫は必しも故郷に死せざるべしとの意なり。[出典]蘇軾の予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵、自度不能堪死、獄卒梁成、以遺子由に、塞主如天萬物春、小臣愚暗自亡身、百年未滿先償債、十口無歸更累人、是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神、與君世世爲兄弟、又結來生未了因。

【取青紫如拾芥】 [語義]官爵を得るの易きをいふ。[出典]漢書夏侯勝傳に、勝每講授、常謂諸生曰、士病不明經術耳、明經術者、其取青紫、如�拾地芥耳と。顏注に、言其易而必得也、青紫、卿大夫之服也、俛即俯字。

【乘青牛車過關】 [語義]老子、晚年函地に入りし故事。[出典]高士傳に、老子爲周柱下史、後周德衰、乃乘青牛車去、入大秦、過西關、(函谷關)關令尹喜望氣先知焉、乃物色迹候之、[類語]使之著書、作道德經五千餘言。

【青出於藍青於藍】 シの部出(シュツ)藍を見よ。

【青苔黃葉滿貧家】 [語義]席人の詩の句。[出典]劉長卿の酬李穆見寄に、孤舟柴訪至天涯、萬韓雲山路更賒、秋擣衆門迎遠客、青苔黃葉滿貧家。

【青衫老去未離身】 [語義]唐人の詩の句。[出典]張籍の寄洛陽孫明府詩に、久持刑憲屢名遠、老去未離身、常思從省連蹄馬、在覺同班少舊人、遙愛南橋秋日晚、雨邊楊柳映天津。

【青山有雪諸松性】 [語義]蘇軾の司馬溫公獨樂園の詩に、十載功名塵與泥、青山有雪諸松性、碧落無雲稱鶴心、帶月獨歸蕭寺遠、隨花頻醉更樓深、思君一見如瓊樹、空把新詩盡日吟。

【青苔地上消殘雨】 [語義]唐人の詩の句。[出典]白居易の池上閑吟の詩に、青苔地上消殘雨、綠樹陰前逐晚涼、輕屐單衫薄紗帽、淺池平岸綽蘼床、暫緩怪我情何薄、泉石諸君球莫長、獨問交親爲老計、多言宜靜不宜忙。

【青山在屋上流水在屋下】 [語義]宋人の詩の句。[出典]蘇軾の司馬溫公獨樂園の詩に、青山在屋上、流水在屋下、中有五畝園、花竹秀而野、花香襲衣襟、竹色侵盃斝、樽酒樂餘春、棊局消長夏、洛陽古多士、風俗猶樹雅、先生既不出、冠蓋傾洛社、雖云與衆樂、中有獨樂者、才全德不形、所貴知我寡、先生獨何事、四海望陶冶、兒童慕君實、走卒知司馬、持此欲安歸、造物不我捨、名聲逐吾駕、此物天所縫、撫掌笑先生、年來效喑啞。

【納懿不相容】 [語義]物の適合せざるなり。納は笞(セン)なり、懿は孔(アナ)なり、方納は圓懿に入らざるをいふ。[出典]楚辭九辯に、圓鑿而方枘兮、吾固知其鉏鋙而難入と。洪興祖補注に、鑿、穿也、枘、柄也、鉏鋙、不相當也。

【芮芮】 [語義]短小の貌。[出典]本草注に、石龍芮生于石上、其葉芮芮短小、故名。

【政府】 [語義]政事を爲す所。[出典]宋史歐陽修傳に、其在政府、與韓琦同心輔政。

【政本】 [語義]農を指す。[出典]管絃に、矣食爲人天、農爲政本。

【政道】 [語義]治道といふに同じ。[出典]後漢書安帝紀に、克念政道。

【政務】 [語義]政道の務めをいふ。[出典]後漢書仲長統傳に、以爲政務。

【政事】 [語義]大なる政を政といひ、小なる政を事といふ。韻會に、大曰政、小曰事。[出典]詩經邶風北門篇に、政事一埤益我一と。又た論語先進篇に、政事、冉有、季路。

【報政】 [語義]治績の報告をいふ。[出典]史記魯世家に、伯禽受封之後、三年然後報政、周公曰、何遲也、伯禽曰、變其俗、革其禮、喪三年而後除之、故遲、太公封於齊、五月而報政、周公曰、何速也、曰、吾簡其君臣、禮從其俗也、故速。

【政事堂】 [語義]政事を論議する處。今の官考に、元祐初、左僕射司馬光上言、唐初始

合中書門下之職、故有同中書門下三品同中書門下平章事、其後又置政事堂、蓋以中書出詔令、門下掌封駁、日有爭論紛紛不決、故使兩省先於政事堂議定然後奏聞、開元中張說奏、改政事堂爲中書門下、自是相承至于國朝、莫之能改、非不欲分也、理勢不可復分也、向日所謂中書者、乃中書門下政事堂也。

【政者正也】 政の字の本義は天下を正すの意なるをいふ。出典論語顏淵篇に、季康子問政於孔子、孔子對曰、政者正也、子帥以正、孰敢不正。

【政務十六事】 策をいふ。出典仲長統の時務策に、制國以分人、立政以分事、人達則離、統、事總則離了、今遠州之縣、或相去數百千里、蠻多山陵岑深、獸有可居人種穀者、蠻、當更制其境界、使遠者不過二百里、明版籍以相檢閱、審什伍以相連持、限夫田以節、井繁、定五刑以救死亡、益君長以興政理、急農業以豐委積、去末作以一本業、敎敎學以移情性、表德行以厲風俗、厥才藝以叙官宜、簡精悍以習師旅、修武器以存守禦、禁令以防僭差、信賞罰以驅懲勸、科游獵以杜姦邪、察苛刻以絕頑暴、審此十六者、以爲政務、操之有常、課之有限、安寧勿擾、有事不迫、遠人復起不能亂也。(後漢書本傳に據る)

【星星】 點々といふ意なり。總て物思の白髮賦に、星星白髮生と。又た謝靈運の詩に、感感惑物嘆、星星白髮垂と。又た歐陽修の秋聲賦に、黯然黑者爲星星と。白髮始めて生じて、髯華の點點たるをいふ。

【星辰】 星をいふ、辰は星宿の義。出典書經堯典篇に、曆象日月星辰。

【星官】 天官に同じ。出典事物紀原に、後漢天文志曰、軒轅始受河圖、閼苞授之、規日月星辰之象、故星官之書自黃帝始、至高陽氏、乃使南正重司天、北正黎司地、故曰重黎氏。

【星座】 星の定りたる位置といふこと。

【星次】 とにて、十二宮又は二十八宿の類なり。出典淮南子に、玉帝差遣紫微宮中兩座星辰下來。

【星宿】 物紀原に、帝王世紀曰、黃帝受命、乃推分星次、以定律度、劉昭補漢志亦曰、黃帝定星次、即今觀雅所記十二次、與二十八舍之度、皆自黃帝一類也。

【星辰】 星辰に同じ、「星」は「辰」の略。

【星使】 玉海に、引周禮疏、指星體、謂之星、日月所會、名宿、宿亦曰辰、辰日次日舍、舍有止宿之義、則晉風宿字俗書秀、然辰之所、會、有止宿之義、則晉風宿字俗書秀、然辰舍云、天發殺機、移星易宿、地發殺機、龍蛇走蟲、人發殺機、天地反覆、則從風書、久矣。

【星使】 他より來れる使をいふ。出典漢書に、季部知星、夜見二使星入蜀分野、果有二客入蜀、部問從京師來乎、曰然、曾聞遣使入蜀乎、二客相視大驚。

【星斗】 元帝紀論に、馳章獻、高蓋成陰、星斗星、詳、金陵表、慶。

【星査】 遠き國に航海するに用ふ、査は槎に同じ、イカダなり。出典拾遺記に、堯登位三十年、有巨査浮海、査上有光、夜明晝滅、常浮繞四海、十二年一周於天、周復始、名曰貫月査、又曰挂星査。

【星傳】 夜の明けざる中に行くなり。(二)星の飛行するが如く、急ぐといふ義。出典(一)三國魏志高貴鄉公紀に、晨夜星行、遠致本州。(二)風俗通十反篇に、星行電征、數日歸。

【星馳】 急ぎ行くなり。出典潘岳の世祖武皇帝誄に、羽檄星馳、征鼓日戒。

【星羅】 星のならべるが如く陳なれるをいふ。出典齊書孔稚珪傳に、今宜早發大軍、廣張兵勢、徽單甲於峴嶠、命樓船於浦海、使自青徐、馳、候騎星羅、沿江入蜀、雲陣萬里。

【星霜】 年毎に降る物にして、歲星は一年に天を一周す、故にいふ。出典杜牧集に、經年、日幾換星霜と。又た柳宗元の酬裴秀才詩に、風月歡寧閒、星霜分祭親。

【星火】 流星の瞬間に飛過するに喩へて、事の急なるにいふ。出典李密の陳情表に、郡縣迫迫、催臣上道、州司

臨門、急於星火。

【星期】 婚姻の期日をいふ。出典書詩經唐風綢繆篇の序に、刺婚姻不得其時と。その詩に綢繆束薪、三星在天、今夕何夕、見此良人と。これに本づきていふなり。毛傳に、三星、參也、在天、謂始見東方也、三星在天、可以嫁娶矣、鄭箋、三星、心星也、爲二月之合宿、故嫁娶者以爲候焉。疏に、或は七夕の牽牛織女の故事に基きて星期といふともいへり。王勃の七夕賦に、佇靈匹於星期、眷神姿於月夕、とあるこれなり。

【星海】 燈火の點綴して星の如きをいふ。出典趙嘏の詩に、燈火頓成星海沸。

【星寒】 星は些少の義、即ち少しく寒きをいふ。出典張谷山の詩に、冬來未覺有星寒、山未全攤一抹耐看。

【星貨舖】 雜貨店なり。出典貧暇錄に、鱗次異物、以霤者、曰星貨舖、言其列貨、燔雜如星之繁、今俗呼爲星火鋪、誤也。

【星宿海】 史河渠志に、至元二十七年、世祖皇帝命學士潘蔡篤實、西窮河源、今西番朶甘思南鄙、曰星宿海者、其源也。

【星行電征】 急ぎ行くをいふ。出典風俗通十反篇に、星行電征、數日歸。

【省】

【省文】 こと。又た文は字なり、字の畫を省くをいふ。出典異聞錄に、今人作字省文、以趨爲礼、以處爲、處、其實皆說文本字也。

【牲】

【牲牷】 羊豕、牷は牛の純色、且つ體の全く具はるものをいふ。出典祭饌の料をいふ、牲は、牛、に、吾牲牷肥腯。

【眚】

【眚災】 は不幸ないふ。出典書經舜典篇に、眚災肆赦、怙終賊刑。

【穽】

【落穽下石】 りたるを見て、その上へ石を落すとて、他人の患難に遭ふを見て、更に危害を加ふるに喩ふ。出典史記范雎子厚墓誌銘に、今夫平居里巷相慕悅、酒食遊戲相徵逐、翊翊强笑語、以相取下、攜手出肝膽相示、指天日涕泣、誓生死不相背負、眞若可信、一旦臨小利害、僅如毛髮比、反眼若不相識、落陷阱不一引手救、反擠之、又下石焉者、皆是也。

【悒】

【悒悒】 心の煩ひ悩む貌。出典章應物の英華張彥勝の露賦に、悒悒兮悅者有亡。

【悒惶】 節儉陰詩に同じ。出典章應物の詩に、悒惶戎旅下。

【悒然】 つゝしむ貌。出典史記范雎傳に、辭臣莫不酒然變色易容者。

【栖】

【栖栖】 猶ほ遑々のごとし、求むる所あるが如くして得ざる意。出典論語憲問篇に、丘何爲、是栖栖者與。

【清】

【清明】 といふ。出典淮南子天文訓に、斗指子則冬至、距冬至四十六日而立春、加十五日指寅、則雨水、加十五日指卯、則驚蟄、加十五日指乙、則清明風至と。又た照朝樂事に、清明前兩日、謂之寒食。

【清和】 (一)太陰曆四月の時候をいふ。(二)太陰曆二月の時候をいふ。

【悅】

【設悅】 ゐれば、悅を門の右に掲ぐ、故にいふ、悅は腰にさげ著くる巾(テヌグヒ)なり。出典禮記內則篇に、子生、男子設弧于門左、女子設悅于門右と。鄭注に、喪男女也、弧者、示有事於武也、悅、事人之佩巾也。

【倩】

【倩】 女顏、ムコなり。出典史記倉公傳に、黃氏諸倩見京下方石と。又た方言に、東齊之間、壻謂之倩。郭璞曰、昔壻爲借倩之倩、云近世方俗爲倩壻之倩と。又た宇詁に、倩少好之貌、草木初生色青、故从青、壻謂之倩、猶以美少年稱之耳。

【倩】 遊息の義なり。出典晉書潘逵栖遲十年、出爲河陽令と。又た陶潛の與從弟詩に、栖遲詎爲拙。

【栖鴉流水空蕭瑟】 句。出典王士禎の秦淮雜詩に、十里清淮水蔚藍、板橋斜日柳蘇蘇、栖鴉流水空蕭瑟、不見題詩紀阿男。

㊁善く治まりたる世をいふ。出典㊀何遜(一に謝朓に作る)の詩に、豪氣始清和と。又た司馬光の詩に、四月清和雨乍晴と。又た陸游の詩に、清和如夏初。㊁説詩略語に、張平子歸田賦云、仲春令月、時和氣清、原隰鬱茂、百草滋榮、明指二月。謝詩首夏猶清和、言時序四月猶餘二月景象。故下云芳草亦未歇、自後人誤讀謝詩有四月清和雨乍晴句、和沿到今、賢者不免矣、試思、猶字寃作何解。又た隨園隨筆に、張平子歸田賦、仲春氣清時和、蓋指二月也、小謝因之、故曰首夏猶清和、芳草亦未歇、今人刪去猶字、而寃以四月爲清和。㊂文選曲水詩序に、紹清和於帝猷、聽顯聲於王表と。又た揚雄の劇秦美新に、鎔淳粹之至精、馴清和之正聲、隨園の論ずる所は、餘に就いて、沈歸愚賞隨園の論ずる所は、右に掲げたるが如くなれど、其の實は二月四月雨樣に用ふることを得るなり、二家の說は未だ太拘を免れず。

【清世】セイセイ　意義天下事なく清く平なること。出典呂覽に、古之清也。

【清寧】セイネイ　意義天下の清く寧らかなるをいふ。出典老子第三十九章に、天得一以清、地得一以寧。

【清時】セイジ　意義平和なる時世をいふ。出典李陵の答蘇武書に、策名清時と。又た韓愈の詩に、林園窮勝事、鐘鼓樂清時。

【清道】セイダウ　意義天子の行幸の前驅なり。出典司馬相如の長楊賦に、且夫清道而後行、中路而驚、猶時有猶豫之憂と。又た夢溪筆談に、車駕行幸、前驅謂之除、則古之清道也。

【清廟】セイベウ　意義周の文王の廟、清は清淨の意なり。出典左傳桓公二年に、清廟茅屋。

【清華】セイクワ　意義華族といふ義に用ふ。出典北史李彪傳に、以才技等望、清華俊秀、我邦にて、藤家に次ぎて大臣にまで進み得べき家柄をいふ。

【清揚】セイヤウ　意義眼の清くして眉の揚りたること。出典詩經鄭風野有蔓草篇に、有美一人、清揚婉兮。

【清水】セイスイ　意義すみたる水なり。出典法苑珠林に、又以清水、行之。

【清淺】セイセン　意義ホの清くして淺きをいふ。出典林逋の梅詩に、疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏と。

【清要】セイエウ　意義尚き位に居るをいふ。出典朝野類要に、職優位顯謂之清要。緊位顯謂之要。蓋此二者謂之清要。

【清福】セイフク　意義清らかなサヒハヒなり。出典許孚の蔗園の詩に、唐人皆被富貴驕、或羨吾饕是清福と。又た耶律楚材の彈琴の詩に、秋思盡雅興、三樂歌清福。

【清越】セイエツ　意義聲が澄みてその調子が揚れるなり。出典禮記樂記篇に、叩之、其聲清越以長、其終詘然樂也。

【清穆】セイボク　意義清らかにして和らかなる風なり。出典管寧王粲傳に、軍國殊用、文武異容、豈可令涇渭混流、虛潤清穆之風。

【清苦】セイク　意義道に反きたる事を爲さずして、貧苦するなり。出典三國吳志陸抗傳に、或清苦自立、資能足用と。又た東觀漢紀に、鮑眞嘗號桓少君父學、父奇其清苦、以女妻之。

【清貧】セイヒン　意義潔白にして貧を守れること。出典姚崇の冰壺誡に、與其濁富、寧此清貧と。又た傳燈錄に、道匡曰、寧可清貧自樂、不作濁富多憂。

【清化】セイクワ　意義清明なる德化なり。出典李密の陳情表に、遽聖朝、沐浴清化。

【清光】セイクワウ　意義天子又は貴顯なる人の清らかなる光采をいふ。出典淮書遍鑑傳に、莫能望陛下清光。

【清朗】セイカン　意義他人の閑暇なる時をいふ。出典漢書龔遂傳に、顯賜清閑。

【清晨】セイシン　意義清らかに晴れたる早朝のこと。出典張九齡の詩に、山川歷歷在清晨。

【清楚】セイソ　意義さればいに、さつぱりとした意、楚は鮮なり。出典白居易の詩に、清楚看諸律。

【清暉】セイキ　意義清き光暉をいふ。出典謝靈運の詩に、昏日變氣候、山水含清暉、清暉能娛人、遊子曠忘歸。

【清漣】セイレン　意義高き小波のこと、サヾナミなり。出典謝靈運の詩に、綠篠緣清漣。

【清靜】セイセイ　意義清くして靜かなること、清淨と通ず。出典老子第四十五章に、躁勝寒、靜勝熱、清靜爲天下正。

【清冷】セイレイ　意義清らかなることをいふ。出典王褒の詩に、朝霧清冷而隱其側、令之。又た張衡の西京賦に、耕父揚光於清冷之淵。

【清晦】セイクワイ　意義立派なる教誨をいふ。出典後漢書趙岐傳に、親承清晦。

【清議】セイギ　意義岡白駒云、鄙論を清議と曰ふ。出典家來に、阮簡曠達と。注に云ふ、舊注引竹林七賢論曰、阮簡、咸之從子、亦以曠達自居、父喪、行過大雪、寒凍、遂詣凌儀令、令爲他賓設黍、簡食之、以致清議、廢頓幾二十年。

【清談】セイダン　意義魏晉人、莊子及び易を談ず、之を清談といふ。俗氣を帶びざる清潔なる談論の義なり。出典後漢書郭太傳に、孔公緒清談高論、噓枯吹生。後漢書卲二史劉記に、清談起於魏正始中、何晏王弼輩、以道老莊、謂天地萬物皆無爲本、無也者、開物成務、無往而不存者也、是時阮籍亦素有高名、口談浮虛、不遵禮法、籍嘗作大人先生傳、謂世之禮法君子如蝨之處褌、其後王衍樂廣慕之、俱宅心事外、名重於時、天下言風流者、以王樂爲稱首、後進英不談浮虛、遂成風俗、學者以老莊爲宗、而黜名檢、行身者、以放蕩爲通、而狹節信、仕進者、以苟得爲貴、而鄙居正、當官者、以望空爲高、而笑勤恪、其時未嘗無斥其非者云云、直至隋平陳之後、始撤除之、蓋關陝樸厚、本無此風、魏晉以來、初未漸染、陳人之遷于長安者、又已褻茶不振、故不禁而自消滅也。

【清言】セイゲン　意義前條に同じ。出典北史崔伯謙傳に、少讀經史、晚好老莊、容止儼然無慢色、親賓至則置酒相續清言、不及俗事、士大夫以爲儀表。

【清狂】セイキャウ　意義心清くして狂者に類するをいふ。出典漢書武五子傳に、清狂不惠と。注に、蘇林曰、凡狂者陰陽脉盡絕、今此人不狂而狂者、故言清狂也と。又た陸游の詩に、詩酒清狂二十年。

【清流】セイリウ　意義猶ほ清淡といふがごとし。出典唐書裴樞傳に、初全忠佐史李振曰、此等自謂清流、宜投諸河、永爲濁流、今忠笑而許之。

【清門】セイモン　意義門閥家に同じ。出典杜甫の丹青引に、將軍魏武之子孫、於今爲庶爲清門。

【清新】セイシン　意義俗氣を脫して且つ斬新なるをいふ。出典梁の昭明太子の詩に、淮蔬實溫雅、摛藻每清新、梁書孝經樓詩話に、唐の貫を得るは、清新にあり、庾開府杜少陵みな清新を主とす、故に蘇東坡ならざる無し、因て袁中郎石湖・誠齋等の詩、皆な清新立る清新を主とす、然るに李歐吉が杜子美を奉ずるは、穢腐醜むべし、放翁・中郎等より以下放翁石湖・誠齋等の詩、皆な清新の杜子美を奉ずるは清新尙ぶべし、同じく一杜子美を奉じて、新腐の異なる天地の懸隔なり、去れば詩を作るに先づ詩を學ぶ識見正しからずんばあるべからず、又詩學無んばあるべからず。意義俗氣を離れて且つ眞正なるをいふ。出典李白の詩に、右軍本清眞、蕭灑在風塵。

【清平調】セイヘイテウ　意義唐の樂曲の名なり。清調平調の二調を合せたりとの說は誤りなり。出典葛原詩話に、樂府雜錄云、李白清平調の詞三首、解者謂ふ、清調平調を合するものと、按に沈括筆談に、李白集中に清平樂の詞ありと云、又文獻通考の宋の四十大曲の中の大石調に、清平樂あり、太眞內傳にも清平樂の詞を書す、唐の教坊記にも清平樂の名を列す、これにより見るときは、清平は樂の名にして、調の名には非ざるに似たりと。(詩話止此)又た津坂東陽云、唐教坊記、具擧當時樂曲名、第十四有清平樂、蓋明皇命李白、依清平樂之調、以樂詞塡入其曲、故曰清平調詞、是後世詩餘之濫觴也、文體明辯分清平調、清平樂爲二非、是、清平調即清平樂調、故沈括筆談云、李白集中有清平樂詞と。又た云、東坡亦有清平調詞三章、見田汝成遊覽談、亦依清平樂之調塡、與歌之調也。

【清涼殿】セイリヤウデン　意義漢の時の宮殿の名なり。出典班固の西都賦に、清涼宣溫、神仙長年と。又た三輔黃圖に、未央宮有清涼殿。

【清愼勤】セイシンキン　意義清廉・謹愼・勤勉この三者は官吏たるものの守るべき道なるをいふ。出典三國魏志李通傳注に、李乘常答司馬文王問、因以爲家誡、曰、昔侍坐於先帝、時有三長史俱見、曙、辭出、上曰、爲官長當清、當愼、當勤、修此三者、何患不治乎と。又た呂本中の官箴に、

當官之法惟有三事、曰清、曰慎、曰勤、前輩當官、恐之一事、衆妙之門、當官處事、尤是先務、若能清慎勤之外、更行一恕、何事不辦。

【清異錄】 意味 書名。 出典 二卷あり、宋の陶穀撰す、穀字は秀實八月部尚書に進む、この書は唐及び五代の新異の語を采り、天文地理君道以下三十七門に分ち凡て六百四十八事を錄せり。

【清閒之燕】 意味 靜かなる休息をいふ。 出典 漢書蔡義傳に、顧賜清閒之燕。

【清白宰相】 意味 潔白なる宰相をいふ。 出典 淵鑑類函卷六十四に、宋慶曆中杜衍爲相、苞苴貨殖、不敢到門、時號清白宰相。

【清聖濁賢】 意味 清酒と濁酒とをいふ。 出典 三國魏志徐邈傳に、醉客謂酒清者爲聖人、濁者爲賢人と。又た都陽の酒賦に、清者爲酒、濁者爲醪、清者聖明、濁者頑愚。

【沐浴清化】 意味 清明なる德化の下に生活するをいふ。 出典 清化を見よ。

【揚清激濁】 意味 風俗の清潔と汚濁とをいふ。 出典 非類賦水賦自注に、尸子曰、水有四德、揚清激濁、蕩去滓穢、義也と。又た抱朴子外篇刺驕に、君子能使以亢亮方楞無於俗、揚清波以激濁流、執勁矢以厲羣枉。

【清白吏子孫】 次條を見よ。

【清白遺子孫】 意味 清廉潔白の美風を子孫に遺るなり。 出典 後漢書楊震傳に、性公廉、不受私謁、子孫嘗蔬食步行、故舊長者、或欲令爲開產業、震不肯、曰、使後世稱爲清白吏子孫、以此遺之、不亦厚乎。 類語 隋書に、房彥謙謂其子曰、人皆以祿富、我獨以官貧、所遺子孫、在於清白。○南史に、梁徐勉曰人遺子孫、以財、我遺之以清白。

【清風來、故人】 意味 清風吹き來りて、久し振りにて友人に面會せしが如き心地するといふこと。 出典 杜牧の詩に、夫暑去酷吏、清風來故人。

【清輕者上爲天】 意味 氣の清く輕きものは上りて天となるをいふ。 出典 列子天瑞篇に、一者形變之始也、清輕者上爲天、濁重者下爲地、沖和氣者爲人と。又た慎子、天地既判而生、雨儀、輕清浮而爲天、重濁凝而爲地、天形如彈丸、半覆地上、半墜地下。

【清風明月無人管】 意味 宋人の詩の句。 出典 黃庭堅の鄂渚南樓詩に、四顧山光接水光、凭闌十里芰荷香、清風明月無人管、併作南樓一夜涼。

【清唳數聲松下鶴】 意味 唐人の詩の句。 出典 白居易の在家出家の詩に、衣食支吾婚嫁畢、從今乞食餐、清唳數聲松下鶴、寒光一點竹間燈、家事不相仍、夜眠身是投林鳥、朝飯心同入中宵、入定跏趺坐、女喚妻呼多不聽。

【清風朗月不用一錢買】 意味 風月を玩賞するは一錢を費さずして之を得、極めて清雅なる遊びなるをいふ。 出典 李白の襄陽曲に、清風朗月不用一錢買、玉山自倒非人推。（全篇古文眞寶前集に見ゆ）

【清輝】 意味 蘇軾の前赤壁賦に、且夫天地之間、物各有主、苟非吾之所有、雖一毫而莫取、惟江上之清風與山間之明月、耳得之而爲聲、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭、是造物者之無盡藏也、而吾與子之所共適。

【嶙嶙】 意味 山の高く聳えたるをいふ。 出典 孫綽の遊天台山賦に、陵嶙峋之詭噎。

【淒淒】 意味 寒涼なる形容。又たイタマシキ形容。 出典 詩經鄭風風雨篇に、風雨淒淒、雞鳴喈喈。

【淒然】 意味 前條に同じ。 出典 淒然似秋を見よ。

【淒風】 意味 すさまじき風。 出典 左傳昭公四年に、春無淒風、秋無苦雨。

【淒其】 意味 スゴ〳〵と寒きこと、其は助辭。 出典 詩經邶風綠衣篇に、絺兮綌兮、淒其以風。

【淒日】 意味 淒要に、春曰遲〻、夏曰長日、秋曰淒日、冬曰愛日。

【淒楚】 意味 すさまじく感ずる寫。 出典 李子卿の聽秋蟲賦に、志苦者易感淒楚。

悽

【淒然似秋】 意味 涼しきこと秋の如きをいふ。 出典 莊子大宗師篇に、若然者、其心忘、其容寂、其顙頯淒然似秋、煖然似春、喜怒通四時、與物有宜、而莫知其極。

【悽如】 意味 淒淒に同じ。 出典 陸機の詩に、我思纏綿未紓、感時悼迹悽如。

【悽愴】 意味 悽は悲、愴は傷なり。 出典 禮記祭義篇に、霜露既降、君子履之、必有悽愴之心、非其寒之謂也と。又た後漢書喬公祖傳に、曹操過其墓、顧悽愴致祭。

盛

【盛夏】 意味 夏の眞最中なり。 出典 漢書五行志に、盛夏日長、暑以養物、政弛緩、故其罰常稽也。

【盛秋】 意味 中秋、即ち八月の天をいふ。 出典 漢書李廣傳に、以臨右北平盛秋。

【盛衰】 意味 事物の盛んなると衰ふるとなり。 出典 列子仲尼篇に、盛衰利害不能易、哀樂不能移。 類語 李山甫の詩に、笑做出衰盛。

【盛饌】 意味 人を饗することの盛なるなり。 出典 論語鄉黨篇に、有盛饌、必變色而作。

【盛年】 意味 人の血氣盛りの頃をいふ。 出典 曹植の鼓瑟賦に、況盛年而始立、修女職於衣裳。

【盛唐】 意味 唐の世を四期に分ちたるその一にして、唐代文學の極めて盛なる時なり。タの部唐代詩人分爲四を參看せよ。 出典 滄浪詩話に、論詩如論禪、漢魏晉與盛唐、則第一義也と。又た李百藥の贅道賦に、赫矣盛唐、大哉靈慶。

【盛德】 意味 隆盛なる德をいふ。 出典 易繫辭上傳に、顯諸仁、藏諸用、鼓萬物而不與聖人同憂、盛德大業至矣哉、富有之謂大業、日新之謂盛德。

【盛名】 意味 立派なる名譽なり。 出典 後漢書黃瓊傳に、陽春之曲、和者必寡、盛名之下、其實難副。

【盛德遺範】 意味 光人の盛德と遺範となり、遺範はのこれる儀範なり。 出典 唐書韋陟傳に、開元中居喪、以父不得志歿、乃與斌杜門不出、八年親友更往敦曉、乃罷訓爲洛陽令、宋璟見陟歎曰、盛德遺範盡在是矣。

【盛者必衰】 意味 盛なるものは往々怠慢の心を生ず、故に必衰の理あるなり。 出典 仁王經に、盛者必衰、實者必虛。 類語 韓非子に、萬物必有盛衰、萬事必有弛張。○漢書韓安國傳に、夫盛之有衰、猶朝之必暮也。

【盛年不重來】 意味 盛年は人の少壯の時をいふ、これ陶淵明の詩の句にして、人に少壯のときに當りて勉學すべきを戒めたるなり。 出典 陶潛の雜詩に、人生無根蔕、飄如陌上塵、分散逐風轉、此已非常身、落地爲兄弟、何必骨肉親、得歡當作樂、斗酒聚比鄰、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人。 類語 白居易の寫眞詩に、勿歎韶華子、俄成皤叟仙。○楚辭九歌に、時不可兮再得、聊逍遙兮容與と。王逸注に、言日不再中、年不再盛也。○三國吳志吳主五子傳に、孫和常言、志士愛日惜力、夫以天地長久、而人居其間、有白駒過隙之喻、年齒一衰、榮華不再。○張飛崖の動酒情に、別の詩に、春日遲遲、煖空碧、綠楊紅杏插春色、人生年少不再來、莫把青春枉拋擲。○林蒐の詩に、白日莫空過、青春不再來。（今篇、ハの部、白日莫閑過、青春不再來に載す）

【盛名之下其實難副】 意味 虛名甚だ盛なる時は、其の實德の稱ばざるをいふ。 出典 後漢書黃瓊傳に、盛名之下、其實難副。

【盛德之士亂世所疏】 意味 盛に德ある人は、亂世には疎遠にせらるゝをいふ。 出典 說苑に、美女者、醜婦之仇也、盛德之士、亂世所疏也、正直之行、邪枉所憎也。

【盛夏不銷雪終年無盡風】 意味 唐の詩の句。 出典 白居易の白羽扇の詩に、素是自然色、圓因裁製功、飄如松起籟、疑似鶴翻空、盛夏不銷雪、終年無盡風、引秋生手裏、藏月入懷中、鹿尾斑非、疋、蒲葵陋不同、何人稱相對、清夜白翁。

逝

【逝去】 意味 人の死し去るをいふ。 出典 東坡集に、當兄中舍九月中逝去。

【旌節】 意味 使臣が外國に聘くに携ふる物。 出典 事物紀原に、呂氏春秋曰、墨者田鳩見秦王、王悅之、將軍之節、將軍賜之節、戰國已然、周禮六節、道路用旌節、孟註錄帶前書云、以竹爲之、使人執導

之、又周使節四、旌節其一也、隋書禮儀志曰、後周制有旌節、畫白獸而拆羽於其上、唐車服志に曰、高祖初大將出賜旌以顧貴賜節以鎮殺旌以絳帛五丈一粉畫虎、銅龍一首、雜綵、紫纖爲袋、油囊爲表、節懸畫木盤三、相去數寸、隔垂赤麻、餘與旌同、此蓋唐制也。

【旌別】善人と惡人とを區別するなり。出典書經畢命篇に、旌別淑慝、表厥宅里。

【抗旌】ハタを揚るなり。出典漢書終軍傳に、票騎抗旌。

【棲棲】ざる貌、字また栖栖に作る。出典詩經大雅六月篇に、六月棲棲。

【棲遲】棲はスム、遲はタ、ズムなり、遊息するをいふ。出典詩經陳風衡門篇に、衡門之下、可以棲遲。

【棲屑】往來の煩しきをいふ。出典後魏書裴安傳に、京師遊遨、實憚棲屑。

【棲遑】乾したる菜なり。出典假日記に、北人樹上晒乾菜、冬春食之、詩所謂棲苴、言如鳥棲於苴、詩は大雅召旻篇なり。

【棲神之域】精神を棲す所、即ち墓所をいふ。出典書言故事に、陳堯佐自らその墓に誌して曰く、有宋潁川生堯佐字希元、年八十二、不爲夭、官一品、不爲賤、獨相納祿、不爲辱、眄可露見、父母棲神之域矣。

【萋萋】草の茂れる貌。出典詩經周南葛覃篇に、維葉萋萋。

【萋萋】く貌、出典詩經周南葛覃篇に、有斐君子、如切如磋、瑟兮僩兮、赫兮喧兮、有斐君子、終不可諠兮。

【萋斐】服色の盛なる貌。出典詩經小雅大田篇に、有渰萋萋、興雨祁祁、雨我公田、遂及我私、彼有不穫穉、此有不斂穧、伊寡婦之利、詩經周頌有瞽篇に、萋萋、文章貌、詩經小雅巷伯篇に、萋兮斐兮、成是貝錦、彼譖人者、亦已大甚、毛傳に、萋斐、文章相錯也、貝錦、錦文也、鄭箋に、譖人集作己過以成於罪、猶女工之集采色以成錦文。

【萋萋】アヤある貌。出典詩經小雅巷伯篇に、萋兮斐兮、是成是貝錦、彼譖人者、亦已大甚と。毛傳に、萋斐、文章貌、鄭箋に、譖人集作己過以成於罪、猶女工之集采色以成錦文。

【萋萋】く貌、出典詩經周南葛覃篇に、維葉萋萋。

【萋萋】く貌、出典詩經周南葛覃篇に、有斐君子、如切如磋、瑟兮僩兮、赫兮喧兮、有斐君子、終不可諠兮。

【萋萋】服色の盛なる貌。出典詩經小雅大田篇に、有渰萋萋、興雨祁祁、雨我公田、遂及我私、彼有不穫穉、此有不斂穧、伊寡婦之利、詩經周頌有瞽篇に、萋萋、文章貌、詩經小雅巷伯篇に、萋兮斐兮、成是貝錦、彼譖人者、亦已大甚と。毛傳に、萋斐、文章貌、鄭箋に、譖人集作己過以成於罪、猶女工之集采色以成錦文。

【萋斐】巷伯篇に、萋兮斐兮、是成是貝錦、彼譖人者、亦已大甚と。毛傳に、萋斐、文章貌、鄭箋に、譖人集作己過以成於罪、猶女工之集采色以成錦文。

【萋萋】く貌、出典詩經周南葛覃篇に、維葉萋萋。

【萋萋】服色の盛なる貌。出典詩經小雅

【聖益聖】（セイハマスマスセイ）　聖人は常に師に從ふを好む、故にますます其の智を益すをいふ。出典韓愈の師說に、是故聖益聖、愚益愚。解説史記裏公傳に、上曰聞、所不聞、明所不知、日益聖智、君今自閉鉗天下之口而日益愚。

【聖人僕】（セイヒトボク）　聖人の徒輩といふこと なり。出典莊子則陽篇に、仲尼曰、是聖人僕也と。注に、猶言聖人之徒也。

【聖得知】（セイトクチ）　感　感さとく知る義。出典韓愈成池、夜半斬蛙聖得知。

【中聖人】（チウセイ）　聖酔痛く酒に酔へるをいふ。出典聖人の二を見よ。

【聖經賢傳】　聖賢聖人の書を經といひ、賢人の書を傳といふ。出典文心雕龍に、常道曰經、述經曰傳と。又た小學明倫篇の序に、稽聖經、訂賢傳、述此篇、以訓蒙士。

【聖子神孫】　聖孫聖人の子孫なり。出典韓愈の平淮西碑に、聖子神孫、繼繼承承、於千萬年、敬戒不怠。

【聖澤流兮】　聖澤天子の恩澤の遠く及べるをいふ。出典朱熹の白鹿洞賦に、德隆業茂、聖澤流兮。

【聖人不雜】　聖雜聖人の德は純粹不雜なるをいふ。出典揚子法言問神篇に、或曰、淮南太史公者、其多知與、易其雜也、曰、雜乎雜、人病、以多知爲雜、聖人爲不雜。

【聖人無兩心】　聖心聖人は二端の心なきをいふ。出典荀子解蔽篇に、天下無二道、聖人無兩心。

【聖人無夢】　聖夢聖德ある人は身心安泰にして、煩累なければ、夜間も亦安眠して、夢みることなきをいふ。出典此の語大惠語錄に見ゆ。解説莊子大宗師篇に、古之眞人、其寢不夢、其覺無憂、其食不甘、其息深深。又た淮南子に、夫聖人用心、仗性依神、相扶而得、終始無是故其寢不夢、其覺不憂。（ユの部夢を參看せよ）解説これ莊子の語に本づいて、佛者が言ひし語にて、我儒教に於ては不通の說なり、洪範に、六夢あり、論語に、孔子吾不復夢見周公の語あり、聖人の夢みること歷々徵すべし。

【希聖希賢】　聖希聖人たらむことを希ひ、賢人たらんことを希ふなり。出典周敦頤の通書に、聖希天、賢希聖、士希賢。

【聖門人物志】　聖書名。解説十二卷あり、明の郭子章撰す、此の書は孔子の門に遊ぶ者と、其の以外の孔廟に從祀せらるゝ者とを輯めて之が小傳を作り、論贊を附せり、且つ卷末に明代の會典祀儀釋菜等の事を附記ざり。

【聖人無兩心】　聖心聖人は二端の心なきをいふ。出典荀子解蔽篇に、天下無二道、聖人無兩心。

【聖人有金城】　聖聖王は忠誠の臣を有するをいふ。出典漢書賈誼傳に、故交見之臣、誠死宗廟、法度之臣、誠死社稷、輔翼之臣、誠死君上、守閫扞敵之臣、誠死城郭封疆、故曰、聖人有金城一者、此物此志也。

【以聖賢爲杖】　聖賢聖賢の道を以て身を維持するをいふ。出典新語輔政篇に、自處不安則墜、任杖不固則仆、是以聖人居高處上、則以仁義爲巢、乘危履傾、則以聖賢爲杖、故高而不墜、危而不仆。

【聖人不凝滯物】　聖凝聖人は事勢の變遷を知りて、よく推移するものなり、故に一處に拘泥せざるをいふ。出典楚辭漁父篇に、夫聖人者、不凝滯於物、而能與世推移。

【聖人被褐懷玉】　聖被聖人は外貌を略して內心を持するをいふ。出典老子第七十章に、夫唯無知、是以不我知、知我者希、則我者貴、是以聖人、被褐懷玉。

【聖人作而萬物睹】　聖聖人が此世に出でゝ初めて萬物の是非曲直判然するをいふ。出典易經文言に、聖人作而萬物睹、本乎天者親上、本乎地者親下、則各從其類也。

【聖人鵠居而殷食】　聖聖人は自然の常處なきが如く、物に拘束せられざるをいふ。出典莊子天地篇に、聖人鵠居而鳧處と。注に、如鳥之無常處。

【聖人見霜而知冰】　聖聖人は幾先を知るをいふ。

ふ。出典淮南子說山訓の語なり。

【聖人南面聽天下】　聖聖人は南向きに坐して、天下の政を聽くをいふ。出典易經說卦傳に、聖人南面而聽天下、嚮明而治、蓋取諸此也と。又た禮記禮器篇に、是故聖人南面而立、而天下大治と。又た南面而聽天下の語は、荀子正論篇及び禮記大傳篇に見ゆ。

【聖人之言似水火】　聖聖人の言說は水火の如くにして其の力其の用極めて大なるをいふ。出典揚子法言問道篇に、聖人之言似水火、或問、水火、曰、水測之而益深、窮之而益遠、火用之而彌明、宿之而彌壯。

【聖人不易民而教】　聖聖人が世を治めて、世の善く治まるは、是れ其の民を交易したるに非ずして、誠に道あるを以てなり。出典商子更法篇に、聖人不易民而教、知者不變法而治。

【聖人工乎天而拙乎人】　聖聖人は自然に任す、故に能く天道に從ふも、人世に合するには拙なるをいふ。出典莊子庚桑楚篇の語。

【聖人復起不易吾言】　聖聖人が言ふ所の確乎として一點の疑ふべき所なきをいふ。出典孟子滕文公下篇に、閉先聖之道、距楊墨、放淫辭、邪說者不得作、作於其心、害於其事、作於其事、害於其政、聖人復起、不易吾言矣。解説孟子公孫丑上篇に聖人復起、必從吾言矣。

【聖人不貴尺璧而重寸陰】　聖聖人は直徑一尺大の璧よりも、一寸の光陰を惜むをいふ。出典文子に、聖人不貴尺之璧而重寸之陰、時難得而易失也。（淮南子原道訓の文同じ）解説說苑の文帝の典論に、古人賤尺璧而重寸陰、惜乎時之過也。〇千字文に、尺璧非寶、寸陰是競。

【聖王見賢以樂賢見不肖以哀不肖】　聖聖人の心の公平無私なるをいふ。出典說苑に見ゆ。

【聖人不以一己治天下而以天下治天下】　聖聖人は衆と俱に天下を治むるをいふ。出典

誠

【聖人不以一己治天下】　聖聖人は衆と俱に天下を治むるをいふ。出典

【誠懇】（セイカク）　聖懇ねすなほなること。出典禮記檀弓下篇に、忠信誠慤之心。

【誠齋集】（セイサイシフ）　聖書名。解説一百三十二卷、宋の楊萬里撰し、その子長孺編す、誠齋は萬里の號なり、詩は江西詩派の末流に沿ひ、或は粗厲頹唐を免れずと雖も、而かも才思健拔、包孕宏富、以て羣材を能罩するに足る。

【誠齋詩話】　聖書名。解説宋の楊萬里撰す、主として宋人の詩を論じ、時に唐詩に及び、旁ら熟語典故を解說せり、其の立論往往理に中れりと雖も、

勢

【誠惶誠恐】　聖臣民が天子に上つる書に用ふる辭なり。出典韓愈の潮州刺史謝上表に、臣某誠惶誠恐頓首頓首。

【誠意正心】　聖意を誠にし心を正しくするなり、意は心の發動する端をいふ。出典大學に、欲正其心者、先誠其意。

【誠意伯文集】　聖書名。解説明の劉基の撰する所にして、凡そ二十卷あり、劉基は明の太祖に時務十八策を上り、謀略甚だ至る、太祖の業は、劉基の謀に依るもの多し、因て誠意伯を授けられしなり、此集は青田類稿、郁離子二卷、序記、雜著等共に五卷、詩十卷、春秋明經二卷にして、其文は宋濂王禕に亞ぎ、其詩は高啓と相拮抗す、詩文共に明初の一作手と謂ふべし。

【勢力】（セイリヨク）　聖權勢と威力となり。出典後漢書仲長統傳に、勢力侔於守令。

【割勢】（セイ）　聖割男子の勢を去るなり。解説漢書宦者傳に、外臣爲勢、宮刑男子割勢。

【勢利場】（セイリヤウ）　聖權勢利益のある場所なり。出典劉克莊の詩に、舉世爭馳勢利場、君于冷處看人忙。

【勢利之交】　聖權勢財利の爲めに交るをいふ、道義之交の反なり。出典漢書張耳陳餘傳贊に、勢利之交、古人羞之と。又た文中子に、以勢交者、勢傾則絕、以利交者、利窮則敗、君子不與也。

靖

【靖獻】（セイケン）　意味　人その義の當に盡すべき所に安んじて、以てその志を先王に達するをいふ。出典　書經微子篇に、自靖人自獻于先王。

【靖國】（セイコク）　意味　靖は、安なり、國家を安泰ならしむるなり。出典　左傳僖公二十三年に、子文曰、吾以靖國也。又た孫遜の授牛仙客殿中監制に、出則靖國、方養五利之功、入則訓儆、宜修六尚之戒。

腥

【腥臊】（セイソウ）　意味　腥はナマグサシ、臊はケダモノ（獣）肉腥臊何足食。出典　史記晉世家に、犯

鉦

【鉦】（セイ）　意味　樂器の名、ドラなり。出典　事物紀原に、黄帝內傳曰、玄女請帝、鑄鉦鐃、以凝雷擊之聲、今銅鑼其遺事也。

筮

【筮】（ゼイ）　意味　易占の具、メドギなり。出典　事物紀原に、蓍曰筮、筮本曰、巫咸作筮、古史考曰、商時巫咸善筮也、呂氏春秋亦云、巫作筮、龜藏曰、女媧作筮、聚蓍、雲巫兩枚占、書、舜曰、龜筮協從、蓍筮誠巫咸所作、則夢藏與、書、安得言筮也、古史考曰、庖犧氏作卦、始有筮、此蓍其初也。

【筮仕】（ゼイシ）　意味　初めて官に就くをいふ、もと吉凶を占ふて仕ふる義より出でたり。出典　左傳閔公元年に、畢萬筮仕於晉、遇屯之比、辛廖占之曰吉。

【精爽】（セイサウ）　意味　精は神、爽は明なり、精靈に同じ。出典　左傳昭公二十五年に、心之精爽是謂魂魄、魂魄去之、何以能久。

【精神】（セイシン）　意味　精神四達、並流無所不徹、上際于天、下蟠于地。

【精魂】（セイコン）　意味　精神魂魄をいふ。出典　李華の弔古戰場文に、弔祭不至、精魂何依と。又た潘頂經に、是人精魂、在中人自獻于先王。

【精氣】（セイキ）　意味　體氣をいふ。出典　易經繫辭上傳に、精氣爲物、游魂爲變、是故知鬼神之情狀、與天地相似。

【精力】（セイリキ）　意味　精神力量をいふ。出典　漢書匡衡傳に、尤精力過絶於人。

【精悍】（セイカン）　意味　勇の如し、悍は勁なり。出典　史記游俠傳に、解邪解爲人、短小精悍。

【精核】（セイカク）　意味　核は覈に同じ、精細に究明する義なり。出典　漢書馬援傳に、博覽典籍、精核數術。

【精詳】（セイシヤウ）　意味　事物にくはくしきをいふ。出典　後漢書賢媛傳に、識小心精詳、遂決策向。

【精舍】（セイシヤ）　意味　一生徒を教授する所なり。二佛寺なり。三晉の孝武の時に僧を精舍に置けり、因てその名を襲用して佛寺を精舍と呼ぶに至れり、祇園精舍（シヤウヤ）といふは即ちこれなり。四晉孝武以前には、道士の居る所を精舍といへり。五人の身體を家に喩へていふ。出典　一後漢書包咸傳に、咸在東海、立精舍講授諸生。二學齋嘉錄傳に、劉淑立精舍講授諸生。三學林新編に、晉孝武幼奉佛法、立靜舍于殿門、引沙門居之、因此俗謂佛寺曰靜舍。四赤目精舍。五三國志の裴注に、江表傳云、于吉來吳立精舍、燒香讀書、製作符水、以療病。六管子に、定心在中、耳目聰明、四肢堅固、可以爲精舍。

【精廬】（セイロ）　意味　書齋なり、精舍に同じ。出典　續漢書に、郭泰少孤、年二十、行學至成皐屈伯彥精廬之、食、衣不整形、と。又た後漢書姜歌傳に見ゆ。

【精細】（セイサイ）　意味　事の細かなるをいふ。出典　金樓子に、書極精細。

【精緻】（セイチ）　意味　精細緻密の略語、コマカシキこと。出典　唐書崔元翰傳に、好學不倦、用思精緻。

【精兵】（セイヘイ）　意味　精練の兵なり。出典　史記項羽紀に、精兵三萬人。

【精切】（セイセツ）　意味　緻密にして懇切なること。出典　元史に、布置謹嚴、援據精切。

【精華錄】（セイクワロク）　意味　書名。出典　十二卷あり、清の王士禎撰す、即ち康熙三十九年に至る古今體の詩を編次す、その詩神韻を以て宗とす、辭を措く清新、世に清朝詩家の正宗と稱せらる。

【精神太遒】（セイシンタイシユウ）　意味　精神の勁健なるをいふ。出典　北史崔愧傳に、愧有文學、偉風貌、寡言辭、端嚴如神、以簡貴自處、齊神武賞、崔愧應作令、僕恨其精神太遒。

【精神秀朗】（セイシンシウラウ）　意味　精神の明らかなるをいふ。出典　梁書范雲傳に、嘗就親人食、照學書、一夜不寢、照撫其背、曰、卿精神秀朗、而勤於學、卿相才也。

【精神滿腹】（セイシンマンプク）　意味　精神の充ち滿ちたるをいふ。出典　金史に、李獻甫心思到處、人稱爲精神滿腹。

【精靈畢臻】（セイレイヒツシン）　意味　諸々の精靈みな來至せるをいふ。出典　隋書音樂志に、群望咸秩、精靈畢臻。

【精氣光怪】（セイキクワイ）　意味　物の勢力あるにいふ。出典　歐陽修の蘇氏文集序に、雖其埋沒而未出、其精氣光怪、已能常自發見、而物亦不能掩也。

【精金良玉】（セイキンリヤウギヨク）　意味　人品の純粹且溫潤なるをいふ。出典　名臣言行錄外集に、游酢曰、明道先生、資稟既異、而充養有道、純粹如精金、溫潤如良玉、寬而有制、和而不流、忠誠貫於金石、日月通於神明、觀其色、其接物也、如陽春之溫、聽其言、其入人也、如時雨之潤。

【精衞塡海】（セイエイテンカイ）　意味　精衞は小鳥の名なり、昔、炎帝の女、東海に溺れ、化して精衞と爲る、常に西山の木石を銜んで、以て東海を塡めんとせしも、其効なし、人の無望の事を企て、徒に力を勞するに喩ふ。出典　山海經北山經に、發鳩之山、有鳥焉、其狀如烏、文首白喙赤足、名曰精衞、其鳴自詨、是炎帝之少女、名曰女娃、遊于東海、溺而不返、故爲精衞、常銜西山之木石、以堙于東海。

【得精忘麤】（セイボソ）　意味　道の眞髓を得てその跡を思はざるをいふ。出典　列子說符篇に、得其精而忘其麤。

【精神一到何事不成】（セイシンイツトウナニゴトフセイ）　意味　熱心になれば、如何なる難事にても成し遂ぐるを得るをいふ。出典　朱熹曰、陽氣發處、金石亦透、精神一到、何事不成。

製

【製法】（セイハフ）　意味　物を製造する法をいふ。出典　禮記祭義篇に、製法來自東山東。

【齊齊】（セイセイ）　意味　禮記祭義篇に、齊齊乎其敬也、愉愉乎其忠也、勿勿諸其欲其愛之也。

【齊聖】（セイセイ）　意味　齊は齊なり、ツヽシミ深くして聖智あるをいふ。出典　書經皋陶謨、皇天眷命、予其懋哉、天工人其代之、天聰明、自我民聰明、天討有罪、五刑五用哉、允協于帝、予欲聞六律五聲八音在治忽、以觀古人之象、日月星辰、山龍華蟲、作會、宗彝、藻火粉米、黼黻絺繡、以五采彰施于五色、作服、汝明、予欲聞六律五聲八音、

苗裔子師一以及甘誓湯誥泰誓牧誓費誓是也、又有誓告羣臣之詞、如書秦誓是也、後世雖無秦誓之類、而誓師之詞、亦不多見、豈非放失之故歟。

【誓文】（セイブン）　のみいふ。出典舊唐書に、令立太子中宗相王（睿宗）太平公主（中宗妹）與武攸暨等爲誓文、告天地於明堂。

【誓詞】（セイシ）　宋元豐以後、神前誓詞曰誓然、今俗誓詞亦曰牒。

【誓書】（セイショ）　誓文に同じ。出典文獻通考四裔考に、宜遂以誓書來。

【誓言】（セイゲン）　ひ約する所の言語なり。出典書經湯誓篇に、女不從誓言。

【說項】（ゼイコウ）　ヒの部參八（ヒト）說項斯を見よ。

【說客】（ゼイカク）　能辯を以て諸侯に說き附る人なり。出典史記酈食其傳に、酈生常爲說客。

【說苑】（ゼイエン）　漢の劉向撰す、二十卷あり、其の體例は向の獨に係る新序と同じ、然るに分ちて兩書と爲したる所以は何の意なるか詳にせざれども、蓋し一事にして其調を異にせるを以て、辯書を採擇し、各々其見所に據りて之を記載し、是非を定めず、兩ながら存して傳へたるものならん。

【說難】（ゼイナン）　戰國の世、韓の人韓非の作りし所の文章にて、その著韓非子の中に收めたり、凡そ諸侯に遊說せんに、己の意思を貫徹しその說を用ゐしめんとするは、甚だ難し、先づ人主の意を知りて、後ち之に說くを遊說の秘訣とす、此篇最も善く人情に通じ、委曲に之を述べたり、然れども韓非は遂に秦王に囚はれて殺戮の禍を免れざりき、故に揚雄も非作說難而卒死于說難と評したり。

【說詩晬語】（ゼイシスイゴ）　此書を撰するは、小白陽山の寺に寓する時にて、筆に隨ひて記せしものにて、詩體、詩格、詩法等を論じ、三百篇以下、明朝に至るまでの詩人を論じたり、宛然一部の小詩史にして、頗る簡明なり。

說

說

說

而侈於性。

【贅言】（ゼイゲン）（コブ）なり。出處揚子法言問神篇に、書不レ經、非レ書也、言不レ經、非レ言也、言書不レ經、多多贅矣。

【贅壻】（ゼイセイ）て、妻の家に贅するを贅壻と曰ふと、壻は婿に同じ、ムコなり。出處史記滑稽傳に、淳于髡齊贅壻と。注に、女之夫比于子如レ拠贅、是餘剩也。

【贅子】（ゼイシ）傳に、民得レ賣レ賃贅子以接レ衣食レ。顔注に、如淳曰、淮南俗賣レ子與レ人作レ奴婢、名爲レ贅子、三年不レ能レ贖、遂爲奴婢、師古曰、贅、質也、一說云、質子者、謂レ令レ子出就レ婿家レ爲レ贅壻耳。

【贅旒】（ゼイリウ）ゝ物なり、繫屬せる旒は旗の垂るゝ物なり、繫屬せる旒は下の爲めに執りて動かさる、因りて君主が臣下の爲めに動かされて危きに喩ふ。出處公羊傳襄公十六年に、君若レ贅旒レ然。

三 蜻

【蜻蛉】（セイメウ）を醫するに効ありといふ。出處孟子滕文公下篇に、匡章曰、陳仲子豈不レ誠廉士哉、居レ於陵三日不レ食、耳無レ聞、目無レ見也、井上有レ李、螬食實者過レ半矣、匍匐往將食之、三咽、然後耳有レ聞、目有レ見と。又た晉書に、盛彥字翁子、廣陵人母因疾失明、彥不レ應辟召、躬自侍養、母食必自嚐之、母疾久、婢數見レ撻、婢忿恨倒彥暫行、取レ蜻蛉、炙飼之、母食以爲レ美、然疑是異物、密藏以示レ彥、彥見レ之抱レ母慟哭、絕而復蘇、母目豁然即開、仕吳中書侍郎吳平。

三 齋

【齋威】（セイキエ）を齋といふに取る。出處漢書魏相傳に、心善レ其言、爲レ齋威嚴。

三 小

【小道】（セウダウ）將棋の類にもそれ相應の道あり、人道の大に比して、小道といふ。出處論語子張篇に、子夏曰、雖小道、必有レ可レ觀者焉、致レ遠恐泥、是以君子不レ爲也。

【小流】（セウリウ）荷子勸學篇に、不積小流、無以成レ江海。

【小說】（セウセツ）事實を構造して、世態人情を寫せる文章をいふ。出處漢書藝文志に、小說家流蓋出レ於稗官、街談巷語道聽塗說者之所造也と。顔注に、細米爲レ稗、街談巷說、其細碎之言也、王者欲レ知レ風俗、故立レ稗官、使レ稗說之、今謂レ偶語レ爲レ說、起レ于宋仁時、太平已久、國家閒暇、吾聽稗之稗と。又た兩般秋雨盦隨筆に、小說

【小杜】 和漢 晩唐の詩人杜牧字は牧之なり、杜甫と同姓にして混じ易きを以て、杜甫を老杜といひ、杜牧を小杜といふ。出典 唐書杜牧傳に、牧於詩情致豪邁、人號小杜、以別杜甫云。

【小姓】 和漢 小家の女をいふ。出典 三國吳志虞翻傳に、遠取小姓足使生子。

【小蘇】 和漢 宋の蘇轍をいふ、轍は洵の子にして軾の弟なり。洵を老蘇といひ軾を大蘇といひ轍を小蘇といふ。出典 サの部三蘇、タの部大蘇を見よ。

【小成】 和漢 小事を成し上るをいふ。出典 禮記學記篇に、七年視論學取友、謂之小成。

【小乘】 サウジョウ タの部大乘を見よ。

【小集】 和漢 小人數にて寄合ふをいふ。出典 經史辨錄に、今之人宅、與逐居者、鄰里醵金、治具、過主人飲、謂之曰煖屋、或曰小集、王建宮詞、大儀前日煖房來、則煖屋之禮、其來尚矣。

【小頓】 セウトン 和漢 小休みすることなり。出典 客越志に、過浮橋、小頓補陀寺。

【小事】 和漢 小細なる事をいふ。出典 漢書王莽傳に、親省小事。

【小便】 セウベン 和漢 尿溺なり。出典 漢書張安世傳に、郎有帷小便殿上。

【小屋】 セウヤク 和漢 小さき家屋なり。出典 左傳に、欲小屋。

【小祥】 セウシャウ タの部大祥を見よ。

【小功】 和漢 喪期の名、五箇月の喪なり。出典 儀禮喪服に、小功布衰裳、五月者と。賈疏に、言小功者、對大功、是用功麤大、則小功是用功細小精密者也。

【小桃】 セウタウ 和漢 桃の一種。出典 老學菴筆記に、歐陽公・梅宛陵・王文恭集皆有小桃詩、歐詩曰、雪裏花開人未知、滿枝相顧共驚奇、便當索酒花前醉、初見今年第一枝、但謂桃花有一種早開耳。

【小學】 セウガク 和漢 ㊀古は小學に於て教ふる所學といふ。出典 ㊁古の學校の稱、大學に對して六書に過ぎず、故に字書を小學といふ。㊂書名。出典 ㊃漢書藝文志に、古者八歲入小學、故周官保氏掌養國子、教之六書、謂象形、象事、象意、象聲、轉注、假借、造字之本也と。同書小學家の部に、史籀以下十家四十五篇を收めたり。㊄禮記王制篇に、小學在公宮南之左、大學在郊、天子曰辟雍、諸侯曰頖宮、これは殷の制なり、周は大學は國に在り、小學は西郊に在り。㊅小學書を見よ。

【小失】 和漢 小細なる過失をいふ。出典 荀子に、以小失掩大美。

【小便】 セウベン 和漢 小便なり。出典 漢書東方朔傳に、醉入殿中、小遺殿上。

【小遺】 セウキ 和漢 腰に同じ、女の腰の細きをいふ。出典 管子に、夫楚王好小腰而美人省食。

【小腰】 セウエウ 和漢 いふ。

【小戎】 セウジュウ 和漢 ㊀小兵車の名、六を元戎と曰ひ、小戎と曰ふ。出典 詩經秦風小戎篇に、小戎俴收。注に、小戎、兵車也、軫也、車前橫鋙橫木、以敦金所鞏、軫深四尺四寸、故曰俴。

【小康】 セウカウ 和漢 世の少しく治まるをいふ。出典 禮記禮運篇に、以著其義、以考其信、著有過、刑仁講讓、示民有常、如有不由此者、在勢者去、衆以爲殃、是謂小康。

【小蠻】 セウメン 和漢 ㊀妓の名。㊁酒樓の名。出典 ㊀白居易の詩に、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰。㊁白居易の夢得詩に、還携小蠻去、試覓老劉看。

【小重陽】 セウチウヤウ 和漢 九月九日なり。出典 荊楚歲時記に、京師士女十日再會、爲小重陽。

【小孤山】 セウコザン 和漢 山の名。出典 入蜀記に、過彭浪磯小孤山、二山東西相望、小孤屬舒州宿松縣。

【小黃門】 セウクワウモン 和漢 初めて侍從と爲りたるもの、稱。出典 文獻通考職官考に、凡內侍初補、曰小黃門。

【小四海】 セウシカイ 和漢 小天下の義にて、殆んど四海の中の珍味を聚めたりといふ意に用ふ。出典 清異錄に、節度孫承祐在浙右、嘗饌客、指其盤筵曰、今日坐中、南之鱉蜆、北之紅羊、東之蝦魚、西之棗栗、無不畢備、可謂富有小四海矣。

【小兒醫】 セウニイ 和漢 小兒の病を療治する醫者なり。出典 史記扁鵲傳に、聞秦人愛小兒、即爲小兒醫。又た遊琴漫抄に、抱兒來、京師以示小兒醫張荊篋。

【小兒輩】 セウニハイ 和漢 小供等といふことにて、人を輕んじていふ。出典 世說雅量篇に、謝公與人圍棊、俄而謝玄淮上信至、看書竟、默然無言、徐向局、客問淮上利害、答曰、小兒輩大破賊、意色舉止、不異於常。

【小由基】 セウイウキ 和漢 弓術の名人楚由基に比していふ。出典 名臣言行錄に、堯舜姓陳、稱小由基。

【小國人】 セウコクジン 和漢 身の丈の矮小なる國人。出典 史記大宛傳安息國の正義の注に、括地志云、小人國在大秦南、人纔三尺、其耕穫之時、懼鶴食、大秦衞助之、即焦饒國、其人穴居也。

【小荀子】 セウジュンシ 和漢 書名。出典 漢の荀悅の撰す、書中政體篇に前漢既明、後復申之、云云、謂之申漢とあるを以て名く、後世荀子に別たんが爲めと、小荀子と稱せり、後漢書荀淑傳に、獻帝の時侍講となり、政權曹氏に移るを見て、志慮尋に在りしが、謀用いられざりしを以て、乃ち申鑒五篇を作る、其論ずる所、政體を通見せりとあり、今其の致體時事二篇を觀るに、皆制治の要旨を得、俗儒一篇は讖緯の學を排斥し、雜言上下二篇は、義理を剖析し、皆儒術の言に原本せり、明の黃省曾之に注せるが、大抵悅の本意を得たり。

【小心文】 セウシンブン タの部放謹文を見よ。

【小學書】 セウガクシヨ 和漢 書名。出典 舊本、宋の朱子編すと題すれども、朱子が門人劉子澄に與ふる書に據りて之を考ふれば、實に子澄の編輯したるものなり、此書は、內篇外篇に分ちて、その中に就て立教、明倫、敬身、稽古、嘉言、善行の諸目を立て、灑掃應對、進退より、修身道德の格言、忠臣孝子の事迹を集め、學童課程の書とせるものなり、明の陳選の注したるもの小學集注十卷是なり。

【勤小物】 セウ 和漢 小事を勤むるをいふ、物は事なり。出典 書經畢命篇に、惟公懋德、克勤小物。

【小心翼翼】 セウ 和漢 翼翼は恭慎の貌なり。出典 詩經大雅大明篇に、維此文王、小心翼翼と。又た同書大雅烝民篇に、令儀令色、小心翼翼。

【小心謹慎】 和漢 謹み探きこと。出典 漢書霍光傳に、二十餘年、小心謹慎、未嘗有過。

【小宗大宗】 セウ 和漢 小宗は二男三男の別れて分家を成すもの、大宗は嫡子の繼ぎたる本家をいふ。出典 禮記喪服小記に、別子爲祖、繼別爲宗、繼禰者爲小宗と。鄭成注に、諸侯之庶子、別爲後世、爲始祖也、謂之別子者、公子不得禰先君、別子之世長子、爲其族人爲宗、所謂百世不遷之宗、別子庶子之爲子、爲其昆弟爲宗也、謂之小宗者、以其將遷也。

【小范老子】 セウ タの部大范老子を見よ。

【小學紺珠】 セウガクシュ 和漢 書名。出典 十卷あり、宋の王應麟撰す、天道・律曆・地理・人倫・性理・人事・藝文・歷代・聖賢・名臣・氏族・職官・治道・制度・器用・儆戒・動植の十七類に分ち、名數によりて編次し小學の者に便ぜり、紺珠とは、唐の張說の故事に取れり、說多讀して記すること少し、紺碧の大珠一顆を得、握りて以て自ら照らすに記する所了々として忘れずと。

【小學彙函】 セウ 和漢 書名。出典 清の鐵鋏鈞編す、古經を解せし諸書を類聚せしものにて、漢の劉熙の釋名八卷、揚雄の方言十三卷、魏の張揖の廣雅十卷、唐の顏師古の匡謬正俗八卷、漢の史游の急就章一卷、漢の許慎の說文解字十五卷、南唐徐鍇の說文繫傳四卷、同說文篆韻譜五卷、梁の顧野王の玉篇三卷、唐の顏元孫の干祿字書一卷、唐の張參の五經文字三卷、唐の唐元度の九經字樣一卷、廣韻五卷、明の內府本唐韻五卷を合集したるものなり。

【小人之勇】 セウ 和漢 血氣の勇をいふ、匹夫の勇に同じ。出典 荀子

に、輕死而暴、是小人之勇也。

【小人革面】 訓義 小人の性は移らず外面のみを革めて惡を肆にせざるをいふ。出處 易經革卦に、上六、君子豹變、小人革面と。象傳に、小人革面、順以從君也。

【小辯害義】 訓義 小細なる辯才は卻て義理を害するをいふ。出處 孔子家語に、小辯害義、小言破道。名類 文子に、小辯害治、小善害道、小義破道、小義破道。○淮南子に、小辯破言、小利破義、小義破道。○同書に、小快害義、小慧害道、小辯害治。○說苑に、小快害義、小惠害道。

【勿輕小事】 訓義 小事なりとて侮ること勿れとの義。出處 關尹子に、勿輕小事、小隙沈舟、勿輕小物、小蟲毒身。

【小人窮斯濫】 訓義 小人の不德なるものは、困窮するときは、法に濫れて刑を犯すことあるをいふ。出處 論語衛靈公篇に、子在陳絕糧、從者病莫能興、子路慍見曰、君子亦有窮乎、子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣。

【小倉山房詩集】 訓義 書名。七卷、附錄二卷あり、三十。清の袁枚撰す、枚の詩性靈を主として古を師とせず、務めて新奇を求むるの弊あり、一時輕薄の徒翕然として之を學べり。

【小倉山房外集】 訓義 書名。六卷、補遺一卷あり、清の袁枚撰す、この書は枚の四六文を收錄す、而して四六文はその尤も長ずるところ、抑揚跌宕實に古文に勝るものあり。

【小人之過必文】 アの部文〈過〉アヤマチ〉を見よ。

【小雅巷伯之倫】 カの部巷伯之悲を見よ。

【小不忍亂大謀】 訓義 匹夫の勇の如きは、忍ぶこと能はず、故に大事を誤り之を破すこと能はざるなり。出處 論語衛靈公篇に、巧言亂德、小不忍則亂大謀。

【小屈必有大伸】 訓義 小しく身を屈すれば、後には必大に伸ぶることあるをいふ。出處 宋書に、孝武以張岱爲新安王子鸞別駕、謂之曰、無謂小屈、終當大伸。

【赦小過舉賢才】 訓義 宰相の人を使ふや、少々の過失は之を許容して、以て只賢良の才は之れを採り用ゐよといふことなり、出處 論語子路篇に、仲弓爲季氏宰、問政、子曰、先有司、赦小過、舉賢才。

【貪小利失大利】 訓義 小さき利益を貪りて、却て大利を失ふをいふ。出處 呂覽慎大覽に、小利、大利之殘也、達子請金齊王、以賞軍、齊王怒不給、及戰大敗、燕人入國、相與爭金于美唐、此食子小利以失大利者也。又た新論貪愛篇に、秦欲伐蜀、路險不通、乃鑿石爲牛、多以金置牛後、號牛糞之、蜀侯使五丁力士、塹山填谷以迎石牛、秦人隨、滅其國、以食小利、失其大利也。

【小絃急而大絃緩】 訓義 琴の絃の細きもの急なれば、太き絃は緩なりといふ。出處 淮南子、泰族訓に、張弩者、小絃急而大絃緩、立事者、賤者勞而貴者逸と。又た同書詮言訓に見ゆ。

【小兒常病傷于飽】 訓義 童兒の病は多く多食に因るをいふ。出處 晉夫蕭貴忠篇に、小兒常病傷于飽也、貴臣常嗣傷于寵也、名類 史記に、嬰兒常病在飽、貴臣常禍在寵。

【嫌小人而踏高位】 訓義 其の德なくして以て高位を踏むを惡むの意。出處 賈島の王屋風賦に、嫌小人而踏高位、鵲有巢軒、惡利口之報邦家、雀能穿屋。

【小敵之堅大敵之擒】 訓義 小人數の敵の堅く守るは、多人數の敵に擒にせらるるをいふ。出處 孫子謀攻篇に、小敵之堅、大敵之擒也。

【以小人之腹爲君子心】 訓義 己の拙き考を以て、他人の心を推測すること。出處 國語晉語九に、魏獻子が閻沒叔寬の二人に陪食を命じたるに、二人食事中に、三たび嘆息せり、獻子因て何故に嘆息するやと問ひければ、二人同答對曰、吾小人也、食饋之始至、懼其不足、故歎、中食而自咎也、曰豈主之食而有不足、是以再歎、主之既食、顧以小人之腹爲君子之心、屬厭而已、是以三歎と。又た左傳昭公二十九年に見ゆ。

【規小節者不能成榮名】 訓義 小節を守れるものは、大名譽を爲す能はざるをいふ。出處 史記魯仲連鄒陽傳に、規小節者、不能成榮名、惡小知者、不能立大功。

【不去小利則大利不得】 訓義 目前の小利を棄てざれば、大なる利益を得る能はざるをいふ。出處 呂氏春秋に、不去小利、則大利不得、不去小忠、則大忠不至。名類 韓非子十過に、一曰、行小忠則大忠之賊、二曰、顯小利則大利之殘。○說苑敬慎篇に、小忠大忠之賊、小利大利之殘、好小怒傷義。○管子に、小利害信、小怒傷義。○論語子路篇に、見小利則大事不成。○新論に、小利大利之蠹、小忿大禍之津。○陸贄の奏議に、遠小利者昧遠圖。

【小人溺於水君子溺於口】 訓義 君子小人各その好む所に溺るるをいふ。出處 禮記表記篇に、子曰、小人溺於水、君子溺於口、大人溺於民、皆在其所褻也、夫水近於人而溺人、德易狎而難親也、易以溺人、夫民閉於人而有鄰心、可敬不可慢、易以溺人、故君子不可以不愼也。

【少少】 訓義 スコシばかりといふ義。出處 後漢書度尚傳に、所亡少少、何足介意。

【少小】 訓義 老大に對する語にて、年齡の若きをいふ。出處 賀知章の回郷偶書の詩に、少小離鄉老大回、鄉音無改鬢毛摧と。又た白居易の琵琶行の序に、自叙少小歡樂事。

【少】 訓義 年齡に用ゐて、多大の反對とせるは誤りなり。

【少室】 訓義 嵩山にあり。出處 連珠の退居せし處、河南の山少林、初祖面壁之處、西域記云、其山東爲太室、西謂少室、高八百六十丈、上方十里、少室與太室相望、但小耳。

【少海】 訓義 東海の名。出處 山海經東山經に、無皐之山、南望幼海と。郭注に、即少海也、淮南子曰、東方大渚曰少海。

【少卿】 訓義 今の各省の次官をいふ。出處 事物起原に、後魏官氏志云、太和十五年、初置少卿以納爲大夫。

【少詹】 訓義 詹事府の佐官。出處 事物紀原に、唐始於詹事府、置少詹事一人、以貳詹事。

【少選】 訓義 シバラクのこと。出處 呂覽に、少選發而視之と。注に、少選は須臾なり。

【少艾】 訓義 ㊀艾は、美好なり、容色美好の少女をいふ。㊁孟子萬章上篇に、知好色則慕少艾と。又た楚辭注に、麗姬、艾封人之子也、故美女謂之艾、猶姬貴姓因謂美爲姬耳。㊂國語に、國君好艾、大夫殆、云云、好內遠子殆と。この艾の字は、左右の幸臣を指すなり。

【少陵】 訓義 唐の杜甫の號なり。出處 島原詩話に、杜甫を少陵と稱することは、少陵野老呑聲哭、寂寞の句あり、又杜陵有布衣、老大意轉拙の句あり、王闓運杜詩箋云、長安城東有霸陵、文帝所葬、霸南五里、即樂遊原、宣帝築以爲陵、曰杜陵、杜陵東南十餘里、又有陵澤小、許后所葬、謂之少陵、其東即杜曲、陵西即子美舊宅、自稱少陵野老、以此、とれにて分明なり、漢書地理志杜陵注云、古杜伯國、漢宣帝葬此、因曰杜陵、在長安南五十里、以上杜詩偶注引之。

【少牢】 訓義 奈饌の名、羊豕を供ふること。出處 國語楚語の注に少牢羊豕。

【愛少】 訓義 年の少きものを愛すること。出處 新論に、人皆愛少而惡老、重榮而輕悴。

【少少許】 訓義 少しばかりといふこと。出處 莊子に、以少々許、驚人多多許。

【少男風】 訓義 天將に雨降らんとして、俄に颯と風の吹き來るをいふ。出處 三國魏志管輅傳の裴注に、清河旱、倪太守問輅雨期、輅言樹上曰有少女發風、樹間陰鳥和鳴、又少男風起、衆鳥和翔、其應至矣、須臾果大雨。

【積少成多】 訓義 塵を積みて山を成すといふ如き意。出處 董仲舒の對策に、衆少成多、積小致鉅。

【少成若天性】 訓義 シの部習〈シフ〉慣成自然なるを見よ。

【少陵奇絶處】 杜甫の詩句の奇絶なる處といふ義。

【少壯不努力老大徒傷悲】 人生少壯なる時は幾ばくもなし、直に老境に至るをいふ。漢の武帝の秋風辭の句なり。秋(シウ)風

【少壮幾時兮奈老何】 壯なる時は

【少小離家老大回】 賀知章の回郷偶書に、少小離家老大回、郷音無改鬢毛摧、兒童相見不相識、笑問客從何處來。

【少室山人索價高】 むることの高きをいふ。唐の李渤は少室山に隱るるこの高士、即ち此書の寄盧仝詩に、水北山人(石洪)得名屋、去年去作幕下士、水南山人(温造)又繼往、鞍馬僕從塞閭里、少室山人索價高、兩以諫官徵不起、彼皆割口論世事、有力未免遭驅使と。韓文の注に、孫曰、李渤、字濬之、剿志於學、與仲兄涉、僧晉隱廬山、久從少室山元和元年、以左拾遺召、不至、四年、河陽少尹杜兼遣吏持詔敦促、又不赴、公爲河南令、遣渤書、發說、渤著公言、竄出家東都。

【少年易老學難成】 朱熹偶成の詩に、少年易老學難成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲。

【少壯不努力老大徒傷悲】 古人の詩の句。沈約の長歌行に、青青園中葵、朝露待日晞、陽春布德澤、萬物生光輝、常恐秋節至、焜黃華葉衰、百川東到海、何時復西歸、少壯不努力、老大徒傷悲。

【少壮幾時兮奈老何】 壯なる時は幾ばくもなし、直に老境に至るをいふ。漢の武帝の秋風辭の句なり。秋(シウ)風辭を見よ。

【召募】 兵卒を召し集むるをいふ。

【召誥】 書經周書の篇名にして、眞古文なり。

【召】

【肖象】 ふ、似ほ像に同じ。

【肖】

【抄寫】 分筒に、闕里泣麟、傳畫肖象。

【抄】

【抄書】 王筠好抄書、偶見晉祝、皆即疏記、未嘗倩人假手、並躬自錄と。又た蘇軾の詩に、白首猶抄書。

【抄沒】 財産を官に沒收すること。明律に、抄沒人口財産と。又た云、依律抄沒。

【抄本書】 拔き書きせる書なり。

【抄紙槽】 開物に、凡抄紙槽上合方寸、尺寸濶狹、槽視簾、簾視紙。

【抄】

【抄招】 詩經邶風、匏有苦葉篇に、招招舟子。

【招來】 人を招き寄せて己の方へ至らしむるをいふ。史記に、大夏之屬、皆可招來而爲外臣。

【招提】 寺のことなり。僧史に、後魏始光元年、創立伽藍、爲招提之館と。又た杜甫の詩に、已從招提遊、更宿招提堂。

【招牌】 カンバンなり。莊子駢拇篇に、自虞氏招仁義、以撓天下也、天下莫不奔命於仁義と。注に、林希逸曰、招、猶今人言招牌也。

【招麾】 指麾に同じ、サシマネクなり。荀子成相篇に、呂尙招麾殷民懷。

【招】

【招請】 人を招待するをいふ。

【招】

【招搖】 三國魏志張範傳に、備、禮招請。遵遂に同じ、サマヨウ貌。星の チザスをいふ。揚雄の甘泉賦に、徘徊

招搖。漢書禮樂志に、麗招搖若永望と。顏注に、招搖、申動貌。淮南子時則訓に、招搖指寅。

【招魂】 魂を招き返すなり、古人て之を招くなり。生者の魂を招くなり。儀禮士喪禮に、復者、一人以爵弁服、簪裳、衣左、何之扱領于帶、升自前東榮、中屋北面、招以衣、曰、皋某復三と。鄭注に、復者、有司招魂復魄也と、賈疏に、朝服卒生所服、震精神識之而來反依。楚詞に招魂篇あり。王逸の楚詞章句に、招魂は宋玉の作る所なり、宋玉、屈原の忠にして、斥棄せられたるを傷哀す、故に招魂を作り、以て其の精神を復し、其の年壽を延ばさんと欲すと。柳宗元の與蕭翰林俛書に、然後收召魂魄、置土一廛、爲耕甿と。これ宗元自ら其の魂を招くなり。

【招討使】 招き撫て討ち征する義により官の名とす、戰時に設くるなり。事物紀原に、唐百官志曰、招討使掌征伐、兵部則省云、天寶末置招討都統之名、始於此、事始云、開元十七年宰相奏置招討使、天寶十五載以來、璵爲顯川太守、兼招討使、職林曰、正元時置、注又云、德宗建中年、以馬燧爲魏博招討使、舊唐志曰、正元末置用兵權、兵罷則停也。

【招隱詩】 左思、字は太冲の作にして、文選の注に、劉良曰く、天下の溷濁を思苦す、故に隱者を招尋し、退いて仕へざらんことを欲すと。左思の招隱詩二首、その一に曰く、枝葉招隱士、叢薄橫古今、巖穴無結構、丘中有鳴琴、白雲停陰岡、丹葩曜陽林、石泉漱瓊瑤、纖鱗或浮沉、非必絲與竹、山水有清音、何事待囂塵、聊欲投吾簪、躊躇足力煩、聊欲投吾簪、臨流聽濤歌、流水自悲吟、秋菊餐芳蕊、蘭蘭間重襟、躊躇足力煩、聊欲投吾簪、其の二に曰く、經始東山麓、果下自成蹊、前有寒泉井、聊可盥心神、哺翫芳餘蕊、竹柏得其眞、弱葉棲霜雪、飛榮流餘津、曾服無常玩、好惡有屈伸、結綬生蘿萊、彈冠去塵網、惠連非吾屬、昔陽非吾鄉、闕闕

祖　宗　昭　昭　昭
宗　穆　穆　穆　穆
廟門
天子七廟の圖
東　昭　昭
大祖　都宮門
穆　穆
西
北　寢　廟　廷　門
北　廟制圖
南
王者始受命、諸侯始封之君、皆爲大祖、以下五世、而迭毀廟之主、藏于大祖、五年而再殷祭。
○韋元成等周廟圖
大祖后　○昭武王世室　昭　昭
○穆文王世室　穆　穆
周之所以七廟者、以有居稷始封、文王武王受命而王、是以三廟不毀、與親廟四而七、
○劉歆宗無數圖
大祖后　○武武王世室　昭昭昭
○文文王世室　穆穆穆
七者其正法、數可常數者、宗不在此數中、宗變也、苟有功德、則宗之、不可預爲殷數、故殷有三宗、周公舉之、以勸成王、由是言之、宗無數也、

次に文獻通考宗廟考の說が載す。
○韋元成王者五廟圖

消　俏　炤

㊀禮記祭統篇に、夫祭有昭穆、昭穆者、所以別父子遠近長幼親疏之序而無亂也、是故有事於大廟、則群昭群穆、咸在而不失其倫。

【昭儀】 熟語 女官の名。出處事物紀原に、漢元帝置昭儀封、後代或省、元魏置左右昭儀、視大司馬、北齊文宣時、比丞相、唐爲九嬪也。

【昭代叢書】 熟語 書名。出處清朝人の雜著を編次す、甲乙丙の三集は、張潮の輯、丁集以下は後人の續輯に係る。

【炤炤】 熟語 明智の意。出處荀子儒效篇に、炤炤乎其用智之明也。

【俏然】 熟語 琴を反へす聲。出處莊子讓王篇に、孔子俏然反琴而弦歌。

【消化】 熟語 物が消滅して變化すること。出處周書蘇綽傳に、使百姓壓世中遷於善、邪僞之心、嗜慾消以消化、而不知其所以然、此之謂化也。

【消摩】 熟語 按摩すること。出處周亮工の書影に、消摩自是導引按摩之意、以爲藥恐非。

【消磨】 熟語 スリキエて無くなること。出處歐陽修の豐樂亭記に、及宋受天命、聖人出而四海一、獨之險常恃險阻、剗削消磨、百年之間、漠然徒見山高而水流、欲問其事而遺老盡矣。

【消息】 熟語 ㊀往來なり。出處 ㊁を息とし、陰氣の死するを消とす。㊂音信なり。㊃人身の熱度の高低を形容するにいふ。㊄動靜の義なり。出處 ㊅易經豐卦彖傳に、日中則昃、月盈則食、天地盈虛、與時消息。㊆晉書陸機傳に、機語人曰、我家絕無書信、汝能賫書取消息不、人遂至家、得報還洛。又た杜甫の詩に、寒雅情親四十年、中間消息兩茫然。㊇公羊傳昭公十九年の何休注に、殷然疾除親也、言消息得其節。㊈三國蜀志諸葛亮傳に、承知消息、寂然永嘆。

【消搖】 熟語 逍遙に同じ。出處禮記檀弓上篇に、孔子蚤作、負手曳杖消搖于門。

【消長】 熟語 猶ほ榮枯といふがごとし。出處易經泰卦彖傳に、君子道長、小人道消也と。又た同書否卦彖傳に、小人道長、君子道消也。

【哨】 熟語 正字通に、凡そ屯戍盜を防ぐ處に、宜遠遣馬步捕快一會同晉哨、飛騎追擒。

【哨船】 熟語 盜賊を防ぐ爲めに乘りて巡行する船なり。出處正字通に、艇、晉哨、今俗呼兵卒偵巡者、曰哨艇、讀若譟、一曰金翅、即哨船、噍迅疾也。

【悄悄】 熟語 憂ふる貌。出處詩經鄘風柏舟篇及び荀子宥坐篇に、憂心悄悄。

【陪直】 熟語 在れ附きキビシキ人をいふ、陪は、嗜に同じ、峻隈なるをいふ。出處漢書蘇綽傳に、綽爲人剛直剛潔。

【宵衣】 熟語 ㊀宵は霄と通ず、紹の衣なり。㊁天子が政に務めらるゝを

いふ。出處 ㊀儀禮士昏禮に、壻纁袡宵衣在其右、と。鄭注に、宵讀て詩の素衣朱綠の綠の如し。㊁宵衣旰食を見よ。

【宵旰】 熟語 宵衣旰食の略語なり。出處唐書劉蕡傳に、終任賢之効、無宵旰之憂。

【宵人】 熟語 明迫の途に由らざるものを、いふ、卽ち小人なり。出處莊子列御寇篇に、宵人之離外刑者、金木訊之、離內刑者、陰陽賁之、夫免乎外內之刑者、唯眞人然後之。

【宵行】 熟語 蟲名、如蠶、夜行、喉下有光如螢、詩幽風（東山篇）に、熠燿宵行。

【宵衣旰食】 熟語 宵衣は、未だ夜の明けざる中に衣を着くるなり。旰食は、日傾きて後ち食事をするなり。天子が政事に勤勞せらるゝをいふ。出處唐書劉蕡傳に、朕顧唯昧道、祇荷不構、率若謨訓、不敢怠荒、任賢揚隅、宵衣旰食、追三王之遐軌、庶紹祖宗之鴻緒。又た同書李德裕傳に、德裕上丹扆六箴、其一曰、宵衣謁朝希晚也。カの部旰食を見よ）

【笑疾】 熟語 笑の疾をいふ。出處宋史扈蒙傳に、蒙性沉厚、不言人是非、好釋典、不喜殺、嘗神稱善人、有笑疾、雖上前不自禁。

【笑談】 熟語 笑ひぐさとなすべき話なり。出處 谷座新聞に、聞者以爲笑談。

【笑林】 熟語 笑ふべき事を記したる書籍の名。出處能改齋漫錄に、嵇康撰有笑林、其存者、如魯人有笑疾、聞者以爲笑、人言趙伯雀笑、而害之爲、さんとするをいふ。傳に、李義府、翻柔媚、與人言趙伯雀笑、而害之爲、さんとするをいふ。

古笑林十卷。

【笑柄】 熟語 笑ひ草といふこと。（タの部に、陳太常嘗誤入戶部、見入殺銀者、驚曰、誰路公行、至此極矣、人以爲笑柄、と。又た趙翼の納涼の詩に、夜深歸去就橫陳、一語應添笑柄新、我比齊人有妻妾、專房偏寵竹夫人。

【笑噱】 熟語 わらふなり、嘲は大笑なり。出處趙翼の詩に、餘白供笑噱。

【笑具】 熟語 世の人の笑ひものとなること。出處太平廣記に、趙存傳論最醜、謂兄象先、曰、家兄爲三輔刺史、今乃成天下笑具。

【笑殺】 熟語 笑ふことを甚しきなり、殺は助字、番サツなり、サイと讀むべからず。出處南史桓崇祝傳に、自可拍手笑殺、と。又た唐書鄭綮傳に、制詔下、命爲相、敕曰、萬一無、笑殺天下人。

【笑留】 熟語 笑ひながら留め置くこと。出處水滸傳第一回に、酬謝大郎不殺恩、不要推卸、望乞笑留。

【笑面虎】 熟語 人に對して善く笑を含みて腹に一物あるをいふ。出處酉陽雜俎元英談藪に、王公裒居常若嬉笑、人謂之笑面虎、酉陽雜俎老學菴筆記に、蔡元度對人言、諸尊笑、雖見所憎者、亦親厚無間、人莫能測、謂之笑面夜叉。

【笑中有刀】 熟語 表面には親切にて、內心には敵を結び、陰に害を爲さんとするをいふ。出處唐書姦臣傳に、李義府、翻柔媚、與人言趙伯雀笑、而害之爲、さんとするをいふ。

一 逍

【逍遙】 熟語 彼地此地と遊び行くこと。出處詩經鄘風清人篇に、河上乎逍遙、又た莊子に逍遙遊篇あり。同義字、また消搖、徜徉に作る。

【逍遙劍】 熟語 莊子の異稱なり。出處王維の詩に、漆園有傲吏逍遙劍。

紹

【紹介】 熟語 猶ほ媒介のごときなり、禮に賓至るときは必介に因りて以て辭を傳ふ、紹は繼なり。出處史記魯仲連傳に、平原君曰、勝請爲紹介而見之於先生。國語禮記聘義篇に、介紹而傳命。

稍

【稍】 熟語 船の舵をいふ。出處字彙に、船尾曰稍、今人謂篙師爲稍子。

【稍稍】 熟語 漸く進む貌。出處戰國策に、稍稍聲食之。

【稍食】 熟語 小吏に給する扶持米なり。出處周禮に、內宰均其稍食、と。注に稍食、史祿稟也。

【稍事】 熟語 少しばかりのこと、卽ち小事に同じ。出處周禮地官小宰に、凡王之稍事。

二 稍

陰賊福忌者、于心、凡阡陌者皆中傷之、時號義府笑中刀、又以柔而害物、號曰人貓。

【笑罵從汝好官須我爲之】 熟語 人が笑ひ罵るも、その人の爲すに任す、我は唯高位高官に登らんのみゝいふ意。出處宋史鄧綰傳に、綰諛王安石、除集賢校理、鄉人在都者皆笑且罵、綰曰、笑罵從汝好官須我爲之。

硝

【硝子】（セウシ）硝酸カリウム・ビイドロなり。出典本草に、藥燒成者有二氣眼一謂之硝子、一名海水精、抱朴子言、交廣人作二假水精盤一是此。

【硝子遮眼】（セウシ）に、給二賜外夷硝子遮眼一。出典會典

【避硝仍奪硝】（セウ）奪ひ硝を避けたる妙術をいふ。出典唐書尉遲敬德傳に、敬德名表、其戰善避二矢一、雖二矢刺之一不レ能レ傷、又能奪二取賊矛一、盡刺之、帝（太宗）嘗問奪矛與レ避矛孰難、對曰、奪矛難、試使二與一齊王一（太宗弟元吉）戰、少選、王三失レ矛、遂大愧服。

詔

【詔】（セウ）劉禮云、古者王言、若二軒轅唐虞一同稱爲レ命、至二三代一始兼二誥誓一而稱レ之、今見二於書者一、是也、秦并二天下一、改レ命曰レ制、令曰レ詔、後世因レ之、夫詔者昭也、告也、古之詔詞皆用二散文一、故能深厚雅感二動乎人一、六朝而下、文尚二偶儷一、而詔亦用レ之、然非獨用二於詔一也、後代漸復古文、而專以四六施二於詔誥勸勵表箋啓等類一、則失レ之矣、然亦有用二散文一者、不レ可レ謂二古法衰廢一也、今取二漢以下諸作一、分爲二古俗二體一而列レ之、使二代言者有レ考云。

【詔板】（セウバン）に、書節召二尚書官屬一、使レ作詔板。出典後漢書寶武傳

【詔格】（セウカク）に、法令之書、共別有四、敕令格式是也、神宗熙寧三年前條に同じ。出典

【詔獄】（セウゴク）罪人を鞫するをいふ。出典漢の時に天子の詔を奉じて胡注に、漢時左右都司空上林中都官皆有二詔獄一、蓋奉レ詔以鞫レ囚、因以爲名と。又た漢書成帝紀顏注に、凡詔所二繫治一皆爲二詔獄一。

【焦明】（セウメイ）大なる鳥の名、鳳皇に似たりといふ。出典司馬相如の上林賦に、捲二焦明一と。注に、焦明似レ鳳、通作二鷦一。出典極めて小さき鳥なり。出典

【焦冥】（セウメイ）列子湯問篇に、江浦之間生二鷦鳥一、其名曰二焦冥一と。又た張華の鷦鷯賦に、焦冥巢於蚊睫、大鵬彌乎天隅。

【焦萃】（セウスイ）人に對して己れの女を稱し、有二絲麻一無二棄管圖一、蓬有二蒿萊一無二棄焦萃一、凡百君子、莫不代匱。

【焦獠】（セウレウ）いちだち、さわぐことなり。出典水滸傳第一回に、高殿帥焦獠、那里肯信。

【焦土】（セウド）大火にて宮室も燒けて土となるをいふ。出典杜牧の阿房宮賦に、楚人一炬、可憐焦土。

【焦尾琴】（セウビキン）琴の異名なり。出典後漢書、邕聞二火烈之聲一、知二其良木一、因請而裁爲レ琴、果有二美音一、而其尾猶焦、故時人名曰二焦尾琴一焉。注に、傳元孚賦序曰、齊桓公有二鳴琴一、曰二繞鐘一、楚莊有二鳴琴一、曰二繞梁一、司馬相如有二綠綺一、蔡邕有二焦尾一、皆名器也。

【焦尾宴】（セウビエン）見錄に、貞觀中太宗嘗以燒尾專一問二朱子奢一、子奢曰、新羊入群、衆羊群觸之、必燒二其尾一、乃定、故士人登進選除、設レ宴謂二燒尾一、又說魚化爲レ龍者、必有二雷燒一其尾、談賓錄、公卿大臣、初拜レ官者、例許レ獻レ食、名曰二燒尾宴一、又士人登第、必展レ歡宴、亦謂二燒尾宴一、觀者謂虎化爲人、惟尾不レ化、須レ爲二燒之一乃得成人。

【焦頭爛額】（セウ）キの部曲（キヨク）突徙薪を見よ。

【焦眉之急】（セウ）燒（ゼウ）眉之急を見よ。

【焦遂五斗方卓然】（セウ）句。出典杜甫の飲中八仙歌に、焦遂五斗方卓然、高談雄辯驚二四筵一。

【鈔】（セウ）紙幣なり。出典儼山外集に、鈔之名、始見二金史一、時有二交鈔之制一、以

一貫至二五十貫一、名二大鈔一、一百文至二七百文一、名二小鈔一、元以來治二國其制一。

椒

【椒丘】（セウキウ）たるが如きをいふ。出典土地の高くして四方の削り離騷に、聽二椒丘且焉止息一。

【椒房】（セウバウ）皇后の居る所なり。出典皇后をいふ、椒房は殿の名、班固の西都賦に、後宮、則有二被庭椒房后妃之室一と。又た三輔黃圖に、椒房殿、在二未央宮一、以レ椒和レ泥塗、取二其溫而芬芳一也と。又た漢官儀に、皇后稱二椒房一、取二其實蔓延盈レ升、以レ椒塗レ室、取二溫暖除二惡氣一也、漢天子朱二泥殿上一、曰二丹墀一。

【椒風】（セウフウ）漢代宮中女官の殿の名。出典漢書董賢傳に、爲二昭儀一更レ名、其舍爲二椒風一、以配二椒房一云。

【椒酒】（セウシユ）山椒及び種々の藥品を調合して作りたる酒、屠蘇酒の類。出典荆楚歲時記に、正月一日長幼以次拜賀進二椒酒一。

【椒態】（セウシヤウ）前條に同じ、態はサカヅキ。出典進定の月令に、元日進二椒柏酒一、椒是玉衡星精、服之令人卻老、柏是仙藥、尊卑次列、以年少者爲レ先、各進二此酒於尊長一、稱二觴壽一、欣欣如也。

【椒闕】（セウケツ）香のよき焚きものなり。出典荀子禮論篇に、椒蘭芬芳、所二以養鼻也一。

雪

【雪照】（セウ）新年の祝詞。出典晉書列女傳に、劉臻妻陳氏、聰辨能賜レ文、嘗正旦獻二椒花頌一、其詞曰、旋穆周廻、三朝肇建、青陽散煙、登景載煥、標美齋庭、受

照

【照管】（セウクワン）り、又世話を承けて世話をするなり。出典委託を承けて世話をするなり。出典

【照臨】（セウリン）與二鎮于之間一云、某不二久出一、欲二且奉二託照管三數小字一。出典客の來りしを敬していふ。出典左傳文公十二年に、襄仲辭レ玉曰、若不レ忘二先君之好一、照二臨魯國一。出典

【照冥】（セウメイ）孟蘭盆の祭に送火として墓や庭にて火を焚くをいふ。出典荆楚歲時記に、除夕點燈、曰二照冥一。

【照歲燈】（セウサイトウ）除夜の燈をいふ。出典荆楚歲時記に、除夕點燈、曰二照之照冥一。

【照海鏡】（セウカイキヤウ）鏡なり。出典明史に、舵後置二照海鏡、大徑數尺、能照二數百里一。

【照病鏡】（セウビヤウキヤウ）腹中の病を照し見る鏡なり。出典書言故事に、葉法善有二鐵鏡一、鑑レ物如レ水、人有疾以照之、盡見二臟腑中所滯之物一、然後以藥療之、竟至二疾愈一。

稱

【稱德】（セウトク）其の物が其の德に叶ふをいふ。出典禮記に、稱二天下之物一、無可以稱二其德一者、如此則得二不以少爲貴其德一也。

紵

【紵素】（セウ）白き絹なり。出典歷代名畫記に、有二好手畫人一、自言能畫雲氣、余謂曰、古人畫雲雲未爲レ妙、若能沾

酉

【酉光】（セウクワウ）春の光景をいふ。出典朱熹の四時讀書樂の詩に、蹉跎勿レ使二韶光老一。

【酉華】（セウクワ）年齡の若きをいふ。出典白居易の寫眞の詩に、勿レ歎韶華子、俟成二僊叟仙一。

【酉濩】（セウガ）韶は虞舜の樂、濩は殷の湯王の樂。出典舜意の上、襄陽于相公書に、正聲謂二韶濩一。

【酉武】（セウブ）樂の名なり。韶は虞舜の樂、武は周の武王の樂なり。出典論語八佾篇に、子謂二韶、盡二美矣、又盡二善也一、謂レ武、盡二美矣、未盡二善也一。

【酉酉】（セウセウ）一節しき貌。二明察の貌。出典一禮記曲禮下篇に、庶人儦儦。二荀子不苟篇に、其誰能以己之儦儦、受二人之緘緘一者哉。

【儦儦】（セウ）短人なり。出典列子湯問篇に、從二中州一以東四十萬里、得二儦儦國一、人長一尺五寸と。又た史記仲尼世家に、儦儦氏三尺、短之至也。

五

【銷】（セウ）鍋と通ず、スキなり。出典釋名に、鍋或曰二銷一、銷、削也、能有二所穿削一也。

【銷夏】（セウカ）夏日の炎暑を銷するをいふ。出典皮日休の詩に、太湖有二曲處一、其門爲二兩浙一、嘗中數十頃、洌如二一天地一、號爲二銷夏澳一、此名無二所私一。

【銷金帳】（セウキンチヤウ）花柳の巷をいふ、黃金を費すこと故事に、宋陶學士穀、有二妾本党大尉

馮詡家一、點二綠輕粉一、縱口吹之、謂二之吹雪一。

樵

【樵】（セウ）薪なり。出典論語、子路篇、樊遲請學レ稼、子曰、吾不如老農、請學レ爲レ圃、曰、吾不如老圃、樊遲出、子曰、小人哉樊遲、上好レ禮、則民莫敢不敬、上好レ義、則民莫敢不服、上好レ信、則民莫敢不用、夫如是、四方之民襁負其子而至矣、焉用レ稼、注に、樵薪、所二以爲レ薪、故樵薪連二稼圃一、皆爲二小人一、故樂二其所一、則民不レ敢レ不レ敬、義、則民不レ敢レ不レ服、信、則民不レ敢レ不レ用、皆小人之事、故上能

遍家餞、一日雪、殺取雪水、烹團茶、顧妾曰、覺家有此景否、曰、彼粗人安識此景、但能於銷金帳下、淺斟低唱、飲羊羔美酒耳、毅大慚。又た水滸傳第四回に、把銷金帳子一下了。

【銷魂橋】 [熟語] 政は喜び或は悲むにより此の名あり。[出典] 天寶遺事に、長安灞陵有橋、迎來送去、皆至於此、呼爲銷魂橋。

【銷暑招涼之珠】 [熟語] 暑氣を消し、涼氣を招く寶玉なり。[出典] 太平廣記寶三に、陰泉有黑蟒、千歲一生、珠、燕昭王常懷握此珠、當盛暑之月、體自輕涼、謂曰銷暑招涼之珠。

【霄漢】 [熟語] 霄は空なり、漢は天漢アマノガハなり、高き天を指していふ。[出典] 宋書武帝紀に、公精貫朝日、氣陵霄漢、奮其靈武、大殲羣慝、剋復皇邑、奉帝歸神。

【霄壤】 [熟語] 高峻の貌。[出典] 淮南子原道訓に、上游於霄壤之野、下出無垠之門。

【霄牛】 [熟語] 天牛といふに同じ。[出典] 李德裕の詩に、潭蕪入海底、岩蕊從霄牛。

【霄月】 [熟語] 空に在る月なり。[出典] 潘岳の京陵公主女王氏哀詞に、皎皎霄月、載盈載微、冥冥公子、一往不追。

【霄壤】 [熟語] 天地なり。[出典] 張説の詩に、縱思霄壤閒、實與逆旅均。

【無噍類】 [熟語] 死し盡して、一人も活き殘りて、噍食するものなきを謂ふ。[出典] 漢書高帝紀に、襄城無噍類。

噍

【噍殺之音】 [熟語] シヤガレ聲なり、聲のかれてたゝぬをいふ、噍は殺なり。[出典] 禮記樂記篇に、其哀心感者、其聲噍以殺。

【噍悴】 [熟語] 憂ひて憔せ衰へたる形容。[出典] 詩經小雅北山篇に、或燕燕居息、或憔悴事國と。又た孟子公孫丑上篇に、民之憔悴於虐政、未有甚於此時者也と。又た史記屈原傳に、顏色憔悴、形容枯槁。[熟語] 或は鑿顇・癯悴・焦卒に作る、古字相通ずるなり。

【蕭蕭】 [熟語] (一)風の吹くザワ〳〵としなる形容。(二)物靜かなる形容。[出典] (一)史記刺客傳に、風蕭蕭兮易水寒。(二)詩經小雅車攻篇に、蕭蕭馬鳴、悠悠旆旌、徒御不驚、大庖不盈と。朱傳に、蕭蕭、靜肅貌、於南郊賦に、蕭蕭悠悠、皆閑暇之貌と。又た杜甫の有る事に、蕭蕭然、皆閑暇之貌と。

【蕭然】 [熟語] 記平準書に、自是之後、嚴助朱買臣等招來東越事、閩越、江淮之間、蕭然煩擾費矣。

【蕭條】 [熟語] 前條に同じ。[出典] 班固の西都賦に、原野蕭條。

【蕭森】 [熟語] 樹木の多き貌。[出典] 潘岳の射雉賦に、蕭森繁茂と。又た張九齡の詩に、江城何寂歷、秋樹亦蕭森。

【蕭疎】 [熟語] 草木などの枯落してマバラとなること。[出典] 范成大の詩に、蕭疎草蘆已似秋。

【蕭瑟】 [熟語] 秋風の蕭蕭と吹くをいふ。[出典] 楚辭九辯に、悲哉秋之爲氣也、蕭瑟兮、草木搖落而變衰。

【蕭散】 [熟語] 蕭條として閑散なること。[出典] 唐書に、野服蕭散。

【蕭寺】 [熟語] 梁の武帝、佛を信奉し、寺を造りて、その姓蕭を以て寺に名けしより、後世因て寺の通稱とす。[出典] 南史任孝恭傳に、少從蕭寺雲法師讀維摩經論、明佛理、至是蔬食持戒、信受甚篤と。又た杜陽雜編に、梁武帝好佛、造浮屠、命蕭子雲、辨白大書曰蕭寺。

【蕭曹】 [熟語] 漢の高祖の時の宰相蕭何と曹參となり。[出典] 漢書丙吉傳に、高祖開基、蕭曹爲冠。

【蕭牆之憂】 [熟語] 内亂をいふ、蕭牆は屏なり、憂、屏の内より起らんとの意なり。蕭牆數解あり、鄭康成云、蕭は、肅なり、君臣相見るの禮、此に臣りて肅するなりと、金仁山云、蕭疏にして通じて望むべし、故に蕭墻と曰ふと、爾雅翼に云、蕭は、草なり。[出典] 論語季子篇に、吾恐季孫之憂、不在顓臾、而在蕭牆之内也と。又た韓非子用人篇に、不謹蕭牆之禍、而因金城於遠境。

【蕭規曹隨】 [熟語] 漢の高祖の臣蕭何が規模を作りて、曹參がこれに從ひ守りしをいふ。[出典] 揚子法言渾樂篇に、或問蕭曹、曰蕭也規、曹也隨。

【蕭何作法】 [熟語] 漢の高祖の時蕭何が法律を作りしをいふ。

[出典] 漢書蕭何傳に、高祖初入關約法三章、曰殺人者死、傷人及盜抵罪、蠲削煩苛、秦民大說、其後四夷未附、兵革未息、三章之法不足以滿人、於是相國蕭何據秦法、取其宜於時者、作律九章。

【蕭朱結綬】 [熟語] 蕭育、朱博といふ人て官綬を結ぶといふ。[出典] 漢書蕭育傳に、蕭育字次君、東海蘭陵人、哀帝時爲光祿大夫執金吾、少與陳咸朱博爲友、著聞當世、往者有王陽貢禹、故長安諺曰蕭朱結綬、王貢彈冠、言薦達也。

【蕭何爲相顏若畫一】 [熟語] 蕭何が宰相となりて、政を爲すに明なること、一の字を畫せるが如く、整齊せるをいふ。[出典] 漢書に誇に作る。[出典] 史記曹相國世家に、蕭何薨、參代何相、擧事無所變更、一遵何之約束、參薨百姓歌之曰、蕭何爲相、顏若畫一、曹參代之、守而勿失、載其清淨、民以寧一。

【蕭颯涼風與衰鬢誰教計會一時秋】 [熟語] 唐人の詩の句。[出典] 白居易行獨語曲江頭、回馬遲遲上樂遊、蕭颯涼風與衰鬢、誰教計會一時秋。

燒

【燒餅】 [熟語] 焼きたる餅。[出典] 淵素雜記に、凡以麪爲食具者、皆謂之餅、故火煑而食者呼爲燒餅、水瀹而食者爲湯餅、籠蒸而食者爲蒸餅、而饅頭謂之籠餅是也と。又た餅餌閑談に、入爐熟者名熬餅、赤曰燒餅。

【燒酒】 [熟語] 燒酎なり。[出典] 白居易の詩に、燒酒初開琥珀光と。又た通俗編に、東坡言唐時酒有名燒春者、蓋即燒酒也、元人謂之汗酒、十息、義有味、汗酒、詩、李宗表柳阿剌古酒作歌云、年梁始作、汗酒と。又た飲譜正要に、燒酒之法自元始。

【燒痕】 [熟語] 燒きたるその燒け跡といふ義。[出典] 蘇軾の詩に、稍聞決決流氷谷、盡放青青沒燒痕と。又た党懷英の詩に、東風欲弱放萌芽、已有疲牛餐燒痕と。又た周弼の思歸の詩に、夜月添鄉夢、春風入燒痕、[熟語] 譚用之の塞上の詩に、碩嗇更無岩樹影、地平時有野燒痕。

【燒眉之急】 [熟語] 眉毛を燒けば、急に之を滅ぶべきことに喩ふ。[出典] 五燈會元に、僧問蔣山佛慧如何是急切一句、慧曰、火燒眉毛、[熟語] 或は燃眉に作る、故事成語考身體部に、求物濟用謂燃眉之急と。注に、三國志張昭謂諸葛亮曰、久聞先生自比管樂、今支德得先生、乃棄新野走樊城、敗荊陽走夏口、有燃眉之急、豈有管樂萬分之一耶と。今の三國志に此の文なし。又た燃眉の語あれど、未だ出處を檢出せず。

【燒香禮拜】 [熟語] 香を燒て佛に禮するなり。[出典] 管書佛圖澄傳に、王度疏斷、漢人悉不聽、詣寺燒香禮拜、以遊典禮と。又た魏書釋老志に、金人率長丈餘、不祭祀、但燒香禮拜而已。

蕉

【蕉布】 [熟語] 芭蕉を織りたる布をいふ。[出典] 南越志に、蕉布之品有三、有蕉布、有竹子布、又有葛子布、雖精麤之殊、皆同出而異名。

【蕉葉】 [熟語] 底の淺き杯をいふ。[出典] 唐以蕉葉喻之と。又た東坡志林に、東坡、嘗少時望見酒杯而醉、今亦能飲一三蕉葉矣。[熟語] 蕉葉杯とは、杯の底淺くして多量の酒を受くること能はざるをいふ、芭蕉葉の平かにて雨露を受くる能はざる義に取る、世人之を蕉葉の形狀に摸造せる杯、若しくは蕉葉の如き長大の杯と思惟せるは、大いなる誤解なり、夜飲餘話に、蕉葉杯は、東坡志林に云云と云る、其狀蕉葉の如きには非ず、平たく淺き杯を謂ふなり、芭蕉は葉大なれども、雨露を受け容ること能はず、故に聊受ればこぼれる杯を、これに比して稱するなり、其狀蕉葉に象たらば、底は淺くても長大なるべし、下戸の堪ゆべきに非ず、蕉葉聯を引證するは非なり。

【蕉鹿】 [熟語] 薪を採る人が、鹿を打ち殺して芭蕉の葉に掩ひて之を藏し置き、後に他人に取り去られ、卻て之を夢となりとせし故事にて、人事は皆夢の如きに喩ふ。[出典] 列子周穆王篇に、鄭人有薪於野者、遇駭鹿、御而擊之、斃之、恐人見之也、遽而藏諸隍中、覆之以蕉、不勝其喜、俄而遺其所藏之處、遂以爲夢焉、順塗而詠其事、傍人有聞者、用其言而取之、既歸告其室人曰、向薪者、夢得鹿、而

不知其處、吾今得之、彼直眞夢者矣、室人曰、若將是夢、見薪者之得鹿邪、眶有薪者邪、今眞得鹿、是若之夢眞邪、夫曰、吾據得鹿、何用知彼夢我夢邪。出典宋齋の嘘嘯雪樵賦に、既遊遙而詠歸、忘蕉鹿于今昔。出典錢謙貞の詩に、鹿蕉覆處雜分鄉。

【樵蘇】 薪を取り、蘇は草を取るものなり。出典史記淮陰侯傳に、樵蘇後爨、師不宿飽。

【樵夫】 キコリなり。薪材を伐る人なり。出典康熙字典に、采薪曰樵、詩小雅白華篇樵彼桑薪、卬烘于煁、故採薪者謂之樵夫、史記孟嘗君傳、樵夫牧豎。

礁 【礁】 アの部暗(アン)礁を見よ。

簫 【簫】 に、通禮義纂曰、伏犧作簫十六管、事始云、女媧造、風俗通曰、舜作竹簫、其形參差以象鳳翼、十管長尺二寸、世本亦曰、舜造長二尺、隋音樂志曰、簫十六管、長二尺、舜所造者也、各不同、而古今以爲舜作。

【簫郎】 女夫(おつと)の通稱なり。出典釋常談に、簫郎即簫史也、後世女夫通稱也、唐詩云、嫁得簫郎愛遊遊。

【簫史】 古の道術を得たる人の名なり、此人善く簫を吹き、鳳皇の鳴聲をなすといふ。出典鮑照の升天行の李善注に、列仙傳曰、簫史者、秦穆公時人也、善吹簫、穆公有女號弄玉、好之、公以妻焉、遂教弄玉作鳳鳴、居數十年、吹似鳳聲、鳳皇來止其屋、爲作鳳臺、夫婦止其上、一旦皆隨鳳皇飛去。

【簫韶九成】 簫韶は、舜の樂の名なり、成は樂の一終をいふ。出典書經益稷篇に、簫韶九成、鳳皇來儀。

繞 【繞朝贈策】 秦の大夫繞朝が晉人の離間策を覺知せる故事。出典左傳文公十三年に、晉人患秦之用士會也、乃使魏壽餘僞以魏叛者、以誘士會、將行、繞朝贈之以策、曰、子無謂秦無人、吾謀適不用也。杜注に、繞朝、秦大夫、示己覺其情。

優 【優優】 ゆたかなる貌。出典國語に、鮒ほ紛紛のごとし、唯有諸侯、故優優焉。

瀟 【瀟瀟】 雨霧に、風雨瀟瀟。出典詩經邶風風雨。

【瀟洒】 鮒ほ清淨のごとし。出典孔德璋の北山移文に、瀟洒出塵之表。

瀟 【瀟湘八景】 湖南省に屬す、湘水は、永州府の北を過ぎて、湘江に至りて瀟水と合す、此間風景甚美し、因て八景の目あり。出典夢溪筆談に、度支員外郎宋迪工畫、尤善爲平遠山水、其得意者、有平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村夕照、謂之八景、舒亭者多傳之。補八景に關し、過庭紀談に下の如く言へり、南渡宋以後の詩人、陳衡仲、晁叔安、周公謹、葵偉然、青西湖十景の詩あり、其後ここかしこに是れに擬して、八景十景の名あり、金に至りて、燕都八景あり、元人燕都八景の詩あり、小曲あり、明に至りて永樂の間、館閣の諸侯相集つて倡和し、燕京八景の名いよいよ盛にて、或は又二景を增して、燕京十景とも稱せり、其外處々方々の區々瑣々たるは あげて數ふるにたらず、陋俗の弊、日本はかりにても無しと見えたり、故に趙恒夫も、今時十室之邑、三里之城、五畝之園、以及琳宮梵宇、靡不有八景十景詩、可愍甚矣と云へり。

譙 【瀟湘何事等閑回】 唐人の詩の句。出典錢起の歸雁の詩に、瀟湘何事等閑回、水碧沙明兩岸苔、二十五絃彈夜月、不勝清怨卻飛來と。卻は退卻なり、來は助字。

【譙護】 口頭を以て詰責することなり。出典史記高祖紀に、因譙讓羽と。羽は項羽なり。

【譙門】 破樓なり、門の上に設く樓なり。出典漢書陳勝傳に、戰譙門中。

醮 【醮祭】 宋玉の高唐賦に、醮諸神、禮太一と。李善注に、醮祭也と。又た隋書經籍志に、道經又有諸潛災度厄之法、依陰陽五行數術、推人年命、書之、如章表之儀、并具醮祭、檢香陳讀、云奏上天曹、請爲除厄、謂之上章、夜中於星辰之下、陳設

酒脯麪餌幣物、謂祀天皇太一、祀五星列宿、爲書如上章之儀、以奏之、名之爲醮。

樵 【樵樛】 木の長き形容。出典張衡の西京賦に、樵爽樛樓。

鏦 【鏦斗】 我邦にていふ、長柄の銚子の類なり、廣韻に、溫器、三足而有柄とあり。出典傳古圖に、漢熊足鏦斗、高四十八分、深三寸二分、口徑三寸三分、容二升四合、有半、重一斤十兩、有流有柄、三足、流蓋與柄多爲象、足飾以熊龍首、鏦斗高七寸八分、深二寸三分、徑四寸三分、容三升、重三斤一兩、有耳有流有柄、首飾以龍、皆銅爲之、趙彊子使廚人操斗以食、太工、古者行食以斗、而此有柄與流、知其爲盛羹湯之具也。

饒 【饒舌】 五行志に、霄時謠、百老公背受大斧、饒舌老母不得語と。(カの部寒山拾得を見よ。)

鳥 【鳥鵶巢林不過一枝】 鵶(ミヤウ)は小鳥の名なり、自ら小成に安ずるに喩ふ。出典梁元帝の鵶(ミヤウ)の部偃鼠飲河不過滿腹を見よ。

夕 【夕然】 安寧なる貌。出典梁元帝の玄覽賦に、蘭釭夕然、含鑾斜天。

【夕曛】 ユフヒ、曛はいり日の餘光なり。出典謝靈運の晚出西射堂詩に、夕曛嵐氣陰。

【夕月】 夕方に西に在る月をいふ。出典庾闡の渡江賦に、夕月將昏。

【夕陽】 入り日なり、又た山西をいふ。出典摹書札記に、宋景文筆記曰、度其夕陽、又曰梧桐生矣、于彼朝陽、故詩指山之處耳、後人便用夕陽爲斜日、誤矣、然予見劉琨詩、夕陽忽西流、古人亦誤用久矣、案爾雅、山西曰夕陽、郭注、且即見日、則莒公之言、信矣。

【夕郎】 黃門郎の異名。出典漢官儀に、黃門郎日暮入對、青瑣門、拜名曰夕郎。

【夕陽春】 日の沒せんとする形容なり。春とは此の頃に人が春をツク故にいふ。(カの部高(カウ)春を看)出典薛能の詩に、隔溪遙見夕陽春。

【夕陽黃葉村舍】 清の沈德潛字は確士の居る所の名なり、沈は、唐宋八家文讀本の編者なり。出典沈德潛の唐詩別裁序に見えたり。補我邦にて菅茶山翁も、その詩集を夕陽黃葉村舍詩と名づけたり。

【夕殿螢飛思悄然】 悲歌の句なり。出典チの部長(チヤウ)悲歌を見よ。

【夕陽無限好只是近黃昏】 唐人の詩の句。出典李商隱の登樂遊原の詩に、向晚意不適、驅車登古原、夕陽無限好、只是近黃昏。

尺 【尺】 一尺のこと。出典康熙字典に、說文、十寸也、人手卻十分、動脈爲寸口、十寸爲尺、規矩事也、从尸从乙、乙所識也、周制、寸・尺・咫・尋・常・諸度量、皆以人體爲法、家語、布指知尺、舒跬知尋、前漢律歷志、度量衡皆起於黃鐘之律、一黍爲分、十分爲寸、十寸爲尺、蔡邕獨斷、夏十寸爲尺、殷九寸爲尺、周八寸爲尺、周禮地官、匠丈尺於絺布之市。

【尺一】 詔書を寫す版なり、版の長け一尺一寸、故に詔書を尺一といふ。出典漢書倪寬傳に、漢遣單于書以尺一牘と。又た後漢書陳蕃傳に、尺一選舉と、注に、版長尺一以寫詔書。

【尺書】 書翰のことをいふ。(前條參看)出典史記淮陰侯傳に、李左車曰、發一乘之使、奉咫尺之書。

【尺楮】 前條に同じ。出典王逸離騷註に、不就啓に、敵戟尺楮、往白前茅。

【尺牘】 書簡なり、牘はもと方版なり、古長き者を簡といひ、短き者を牘といふ、尺はその寸法なり。出典史記匈奴傳に、漢遣單于書、以尺一寸匈奴遺漢書、以四寸、漢書倪寬傳、寬以尺二寸牘、又、文帝紀、賜匈奴書、以尺一寸牘、又、文帝紀、賜匈奴書、以尺二寸牘、又、文帝紀、賜匈奴書、以尺一寸牘、又、文帝紀、賜匈奴書、以尺一寸牘、又、文帝紀、賜匈奴書、以尺一

魚中有尺素書、長跪讀素書、書中竟何如、上有加餐食、下有長相憶と。又た陸機の文賦に、函蘇邈於尺素。

【尺寸】 音義 蚩尤傳少といふ義なり。出處 後漢書鄧禹傳に、禹得教其尺寸、垂功名於竹帛耳。

【尺鐵】 音義 一尺の鐵器にて、スコシの刃物。出處 李陵の答蘇武書に、兵盡矢窮、人無尺鐵。

【尺五天】 音義 家を去ること纔に一尺にて、至て近きをいふ。出處 陶雅崧の詩に、顧家望近尺五天。

【尺寸之效】 音義 少しばかりの手柄といふこと。出處 漢書孔光傳に、卒無尺寸之效。

【尺澤之鯢】 音義 小澤の鯢（メダカ）をいふ、以て所見の窄き人に喩ふ。出處 宋玉の對楚王問に、鯤魚朝發昆崙之墟、暴鬐於碣石、暮宿於孟諸、夫尺澤之鯢、豈能與之量江海之大哉。

【尺籍伍符】 音義 史記馮唐傳に、安如尺籍伍符と。注に、李奇曰、尺籍所以書軍令、軍士五五相保之符信也。

【尺山寸水】 音義 高き山より眺望せる景色の形容なり。出處 張船山の詩に、曾向華嚴頂上來、尺山寸水皆能說。

【尺吳寸楚】 音義 所作に同じ。吳と楚とは國の名なり。出處 袁中郎の由天池至三峽測記に、圓岩所覆目與之際、絲蔘黍稷、尺吳寸楚、少焉霧作、長風捲湖而來、心怖乃下。

【枉尺直尋】 音義 小な屈して大を伸ぶるをいふ。出處 孟子滕文公下篇に、志曰、枉尺而直尋。志は、古人の書なり、疑は、八尺なり。音義 文子上義篇に、屈寸而申尺、小枉而大直、聖人爲之と。又た尸子に、孔子曰、詘寸而信尺、小枉而大直、吾爲之也と。鎧に志の語と同意なり。

【尺蠖屈求伸】 音義 尺蠖（シャクトリ蟲）が身を屈むるは伸びんことを求むる爲めなり、以て人の身を屈し心を忍ぶは他日大に發展せんが爲めなるをいふ。出處 易經繫辭下傳に、尺蠖之屈、以求信也、龍蛇之蟄、以存身也。

【尺地莫非其有】 音義 僅か一尺程に非るものなしとて、天子が全く天下を保てるをいふ。出處 孟子公孫丑上篇に、尺地莫非其有也、一民莫非其臣也、然而文王猶方百里起、是以難也。

【不貴尺璧重寸陰】 音義 聖人不食尺璧而重寸陰をみよ、

【尺有所短寸有所長】 音義 一尺の長きも時にはその短きに苦しむこともあり、又た一寸の短きもその長きを感ずることもあり、因て物には用ゐ處によりて、優れ劣ることあるに喩ふ。出處 楚辭卜居に、尺有所短、寸有所長、物有所不足、智有所不明、數有所不逮、神有所不通と。又た史記白起王翦傳贊に、尺有所短、寸有所長、云云彼各有所短也。

【尺蚓穿堤能漂一邑】 音義 納災は小處より起るの喩へ。出處 劉子に、尺蚓穿堤、能漂一邑、寸煙泄穴、致灰千室。

【尺蠖食黃則其身黃】 音義 生物の形色はその所食に基づくをいふ。出處 說苑に、尺蠖食黃則其身黃、食蒼則其身蒼。

【石然】 音義 石の燃るなり。出處 幹寶石季龍載記に、石然於泰山、八日而滅。

五　石

【石門】 音義 岩石の門の聳立せるものをいふ。出處 袁宏道の姑蘇游記に、石門尤奇、兩石突起如門、下臨絕壑。

【石垣】 音義 石造の垣なり。出處 西域記に、周峙石垣。

【石橋】 音義 石造の橋なり。出處 三齊略記に、始皇作石橋。

【石筍】 音義 石の尖りて鋭なるをタケノコに比していふ。又た道しるべの標石（タテ石）の義とすることあり。出處 高蟹の詩に、石筍倒垂僧離塊。

【石鼓】 音義 周代の古石碑にして、その形、鼓に似たり、故に石鼓といふ。石鼓の歌、韓愈蘇軾竝にこれを作る、載せて古文眞寶前集に在り、石鼓文の作者に就いて、古來區區の說あり、韋應物は文王の鼓にして、宣王の臣史籀が文を作りしものとせり、而して後人はまた字文周の

周鼓陽石鼓之一

（在北京國子監大成門左右共十鼓）

時のものとする說あり、要するに史籀とするを穩當とす、歐陽修の集古錄にも、之を考證せり、且つ云、石鼓は今の鳳翔孔子廟中に在り、且つ云、石鼓は今の鳳翔孔子廟中に在り、鼓は十あり、先時數野に弃つ、然餘慶廟に置く、その文見るべき者四百六十五、磨滅して識り難き者過半なりと、（此此）元の季に燕京（今の北京）國子監に移せり。出處 異苑に、晉武時、吳郡臨平湖崩、出一石鼓、打之無聲、以問張華、華曰、可取羽中桐材刻作魚形扣之、則鳴矣、於是如言、聲聞數十里と。又た石索に、石鼓文字雄渾觀百家、超今邁古、洵成周之鉅制、篆刻之極軌也、秦漢以來、遺佚隳翫田野中、未顯于世、至唐賢始盛稱之、韋應物以爲文王鼓、宣王刻、詩、李嗣眞、張懷瓘、韓退之、直以爲宣王鼓、其後董逌、程大昌等、又定爲成王時鼓、然以車攻之詩合史籀之篆、其爲宣王復禍、有斷斷不爽者、鄭漁仲謂、岐陽鼓二字、以爲秦鼓、馬定國謂、其非、歐陽脩既謂、史籀書、又以爲三可疑、趙古則以爲三不足疑、楊用修得可疑者九、乃極詆歐陽氏、斥其爲所惑、持論甚激、而所載石鼓全文、云、得唐人拓本於

避車既工避馬既同避車既攻避馬既臨君子員邁員狩麀鹿速君子之求輶鹿弓鼓以寺避酈其時其來遾蹊蹊即趨即時隮鹿速其來大盍避酈其橫其來遾射其豬獨

李文正者、多至七百二字、其字句位置往往異、現存石鼓、龜鐍、則又不足信也、薛氏・鄭氏・施氏・傅・劉互異、至潘氏、音訓備存、三百八十六字、惟鐍・鼓・范氏天一閣所藏北宋舊拓四百六十二字稱善本焉、方石鼓之散在陳倉也、韓吏部爲博士時、嘗請於祭酒、欲以數乘駝、輿刻鼓太學、不從、迨至鄭餘慶始遷之鳳翔孔廟中、經五代之亂、又復散失、宋向傳師搜訪足之、大觀中、於京師、道君命塡其字、宮殿奉之、完顏剔去其金、泥沙棄之、此石鼓之大刼也云云。

右第一鼓高一尺七寸、圍六尺六寸、凡十一行、行六字、重文九、遊、即吾亦釋、我、工即攻、孜即好、斷即阜、弼弼即闕闕、殘疵尙有彰、潘氏迪以爲書有孫字者、非、鹵即鹵、鹵弓或是盧弓寺、或待趨宇俱作趨、今按范氏天一閣本、殘雖走勞之右存、牢、下載从走、不从辵也、鐍即莫、衆多意、遊或音御、鐍獨或即豚獨、酉陽雜俎に、震縣天鼓山有石如鼓、河鼓星搖動則石鼓鳴。○臨海記に、郡西白鵠山有石鼓、元嘉中居人記山神、乃椎此鼓、聲聞數十里。○後秦記に、姚泓永和元年、天水石鼓鳴、野雉皆雊。○神異經に、八方之荒有石鼓焉、蒙之以皮、其音如雷。○郡縣志に、石鼓文在鳳翔天星縣南、石形如鼓、其數有十、黃記周宣王敗、鐫之蹟也。

【石燈】 音義石造の燈、イシトウロウ。 出處山齋志に、畫燕印香、夜燃石燈。

【石椁】 音義石にて造れる棺の箱なり。 出處禮記檀弓上篇に、桓司馬自爲石椁、三年而不成。

【石籠】 音義川などにて水を拒ぐに用ゆるもの、俗に之を蛇籠といふ。 出處三才圖會に、石籠又謂之臥牛、判竹或用藤蘿或木條、編作圓眼大籠、長可三丈、高約四五尺、以鐵椿止之、就置田頭、內貯魂石、用擗桑水、或相接連延、遠至百步、若水勢稍高、則壘作重籠、亦可遏止、如遇陂岸盤曲、尤宜周折、以禦奔浪、併作洞流、不致衝蕩環岸、農家顏溪護田多習此法、比於起壘堤防、甚省功力、又有石笼・辮木、與此相類。

【石臼】 音義石にて造りたるウス。 出處後漢書梁鴻傳に、力舉石臼。

【石磨】 音義石のヒキウス。 出處後漢書に、譬如石磨、磨褒功德也。

【石皺】 音義石のシワなり、卽ち石紋の畫法をいふ。 出處畫鑒に、董元山水有二種、一樣水墨鑿頭、疎林遠樹、平遠幽深、山石作麻皮皴、一樣著色、皴文甚少、用色橋。

【石田】 音義さゞるに喩ふ。 出處左傳哀公十一年に、吳將伐齊、子胥諫曰、得志於齊、猶獲石田也、無所用之と。杜注に、石田不可耕。

【石火】 音義石を擊ち合せて火を發すること、其遠なるをいふ。 出處新論に、人之短生、猶如石火、爍然以過、唯立德貽愛、爲不朽也と。又た碧巖錄に、擊石火、閃電光。 使用白居易の對酒の詩に、蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身。

【石佛】 音義石にて彫刻せる像。 出處將氏日錄に、掘石佛四軀。

【石人】 音義㊀永久に存在して死せざるをいふ、又人の形あるのみにて事を可否せざることにもいふ。㊁墓道に立つるもの、又た翁仲ともいふ。 出處㊀史記魏其武侯傳に、太后曰、帝寧能爲石人邪。㊁客越志に、過史丞相墓、石垣四圍、不崩而堅、石翁軍二、石翁仲二、雕刻如練、皆非今制可及。(オの部翁仲を參看せよ)

府門之卒　漢故樂　大守應君亭長

漢魯王墓の石人

石人、二、右、高漢尺九尺三寸許、左、高漢尺一丈一寸許、在曲阜縣屬屈莊。(石索)

【石丈】 音義奇石を尊びて丈人と稱せしなり。 出處イの部拜と石を見よ。

【石女】 音義婦女の懷胎せざる者をいふ。正字通に、石女は、猶ほ石に土なければ物を生ぜざるがごとしといへり。 出處齊已の詩に、石女能生是聖胎と。又た太玄經に、靡無了室石蟜と。注に、求室而得石蟜、無了室石蟜と。

【石馬】 音義石にて馬を作り墓門に立つ、我國の高麗犬(コマイヌ)の如きものなり。 出處漢書霍去病傳注に、霍去病冢前有石人馬。

【石燕】 音義零陵山の石の風雨に遇ふて飛ぶものをいふ。 出處北齊書奚慈傳に、湘中石燕、沐風雨而翠飛と。又た初學記天部下に、湘州記曰、零陵山有石燕、遇風雨即飛、止還爲石。

【石獬】 音義奇石を愛する癖をいふ。 出處雲林石譜に、臨江士人、魯子明有石獬。

【石交】 音義堅き交りを結ぶこと。 出處史記蘇秦傳に、此所謂秦仇讎而得石交者也。

【石經】 音義漢の靈帝諸儒に詔して、五文を刊せしむ、蔡邕等に命じて書して古篆隸の三體と爲し、大學の門に立つ、之を石經と謂ふ、其後ち魏の世唐の世にも亦石經あり、唐石經は、開成二年、西安府學石本にて、十三經の中、孟子なかりしを、明人補刻す、清石經は、乾隆五十八年敕刊、嘉慶八年敕して改定す、國子監本にて、十三經備る、清の顧炎武及び萬斯同並に石經考の著あり、各代石經に關することを述べたり、また梳世說も石經考異の著あり。 出處後漢書蔡邕傳に、熹平四年、炎求正定六經文字、書丹于碑、鐫刻立太學門外、

晉書荀崧傳に、世祖經始明堂、嘗建辟雍大學、有石經古文先儒典訓と。又た隋書經籍志に、後漢鐫刻立一字石經、相承以爲七經正字と。又た唐書文宗紀に、開成二年宰臣判祭酒鄭覃進石壁九經一百六十卷。

□其或迪自恐曷
□之勞獨先予不
□館迪古我先后
與陟不永於戲今
建乃家盤庚□□
(尙書盤庚篇)

【石本】（セキホン）　意味 石ずりの本なり。出處 米芾の寶章待訪錄に、世多石本と。又た同書に、以石本見寄。

【石絨】（セキジウ）　意味 石綿にて織りたる布なり。出處 元史に、石絨織以爲布、火不能燒。

【石地】（セキチ）　意味 イシ地なり。出處 晉書索靖傳に、行見姑臧城南石地。

【石炭】（セキタン）　意味 礦物の名、セキタン。出處 本草綱目に、時珍曰、石炭南北諸山、產處亦多、昔人不用、故識之者少、今則人以代薪炊爨、煅鍊鐵石、大爲民利、土人皆鑿山爲穴、橫入十餘丈、取之有大塊如石而光者、有疎散如炭末者、俱作硫黃氣。

【石灰】（セキクワイ）　意味 イシバイ。出處 後漢書楊璇傳に、璇乃特制馬車數十乘、以排囊盛石灰於車上、繫布索於馬尾。

【石乳】（セキニウ）　意味 茶の異名。出處 北苑茶錄に、石乳、太宗皇帝至道二年詔造也。

【石敢當】（セキカンダウ）　意味 石敢當は、本と五代晉の世の力士の姓名なり、この人の名を石に刻して、守護神とするなり。出處 嘉莊漫錄に、慶歷中、張緯宰莆田、得銅一百奥、壓災殃、官吏稱百姓、風聲盛、禮樂昌、有大歷五年縣令鄭押字記と。又た姓源珠璣に、五代劉智遠爲晉組押衙、隨主從珂反、愍帝出奔遇于衛州、智遠力士石敢當、抽鐵鎚侍、晉組與愍帝戰、智遠擁入、石敢當格鬪而死、智遠盡殺帝左右、因機傳國璽、石敢當生平造、凶化吉、繫梅防危、故後人凡橋路衝要之處、必以石刻其形、書其姓字、以捍民居、或附以詩曰、甲胄當年一武臣、鐵鎚百煉、泥金百戰身、銅柱承陪閒紫塞、玉關守禦老紅塵、英雄來往休相問、見盤英雄來往人と。又た王象之輿地碑記に、夔層中張鋒宰蒲田新江沼、得一石銘、其文云、石敢當、鐵百奥、壓災殃、官吏禍、百姓厭、風教廢、盤桑張、居六歷五年縣令鄭押字記、今人家用碑石、書曰石敢當、三字鎸于門、蓋此風之所流傳云。

【石鐘乳】（セキシヨウニユウ）　意味 石より滴る乳にて、藥となるものなり。出處 桂海虞衡志に、桂林宜融山洞穴中見石脈、捕處爲乳脉、融結下垂、其端輕薄中空、水乳且滴、且凝如鐘乳狀者數。

【石鐘山】（セキシヨウザン）　意味 江西省九江府湖口縣にあり。二あり、一は縣治の南にあり、これを上鐘山といひ、一は縣治の北にあり、これを下鐘山といふ。各縣治を距ること、一里、皆高さ五六十丈。周廻十里許その勢相向ふ。出處 寰宇記に、石鐘山、西枕彭蠡、連豫章、峭立削峻、西南北面皆水、四時如一、白波撼山、其聲若鐘と。蘇軾、石鐘山記あり、唐宋八家文讀本に載す。

【石火光】（セキクワクワウ）　石火を見よ。

【石翁仲】（セキオウチユウ）　石人及びオの部翁仲を見よ。

【石經考】（セキケイカウ）　意味 書名。出處 二種あり、清の顧炎武の撰するものは顧氏石經考と稱す、石經の本末を叙述する顧る詳細あり、又清の萬斯同の撰するもの

は、萬氏石經考と稱す、大旨顧氏の石經考に因りて諸家の說を採錄し、以て相證明す、炎武の書は漢魏に詳かにして唐宋に略す、萬氏の書は唐宋に詳かなり、二書互に相補ふに足る、皆一卷とす。

【石壕吏】（セキガウリ）　意味 唐人の詩なり。出處 杜甫の石壕吏詩に、暮投石壕村、有吏夜捉人、老翁踰牆走、老婦出門看、吏呼一何怒、婦啼一何苦、聽婦前致詞、三男鄴城戍、一男附書至、二男新戰死、存者且偸生、死者長已矣、室中更無人、所有乳下孫、孫有母未去、出入無完裙、老嫗力雖衰、請從吏夜歸、急應河陽役、猶得備晨炊、夜久語聲絕、如聞泣幽咽、天明登前途、獨與老翁別と。邵寶集注に、九節度師潰郭子儀從濟之謀、以守河陽、故徵兵於石壕、驅民之丁壯、盡置死地、而又急其老弱、哀哉。

【石尤風】（セキイウフウ）　意味 人の舟に乘じて遠く行なり。出處 江湖紀聞に、石尤風者、傳聞石氏女嫁爲尤郎、婦情好甚篤、尤爲商遠行、妻嘆之、不從、尤出不歸、妻憶之、病臨亡、長商旅遠行者、吾當作大風、爲天下婦人阻之、自後商旅、發船值打頭逆風、則曰、石尤風也、遂止不行と。又た容齋五筆に、石尤風不知其職、意其爲打頭逆風也、唐人詩好用之、陳子昂入峽苦風云、故鄉今日友、戴叔倫送裴明州云、瀟水連湘水、千波萬浪中、知君未得去、慚愧石尤風。司空文明留盧奉御云、知有前期在、難分此夜中、無將故人酒、不及石尤風と。又た群書札記に、古樂府宋武帝丁都護歌、顧作石尤風、四面飯行旅、石尤二字、此、容齋以爲打頭逆風者、是也、竊疑石尤二字、乃愁字之切音、謂客行遇逆風、則愁也、耶懷記造、爲尤郎石女事、妄矣。

【石渠閣】（セキキヨカク）　意味 漢の天子の書庫の名。出處 漢書施讎傳に、與五經諸儒、雜論同異於石渠閣と。又た三輔故事に、石渠閣在未央殿北、以藏祕書也。

【石虛中】（セキキヨチユウ）　意味 硯の異名。出處 文房四譜に、石虛中字居默、南越高要人也、隱遁不仕、因探訪、遇之端陽、拜卽晶侯、與宣城毛玄銳、管城侯筆、燕人易玄光、（松滋侯墨）會稽、褚知白（好時侯紙）同出處。

【石渠天祿】（セキ）　意味 漢の天子の書庫の名にして、史籍を貯ふる處。出處 班固の西都賦に、右有天祿石渠之府。

【石林詩話】（セキ）　意味 宋の葉夢得の撰にして、一卷あり、此書に論ずる所は六朝より北宋の元豐年間に及ぶ、凡て八十條あり、夢得は蔡京の門下に出で、京は王安石の股肱なれば、此書は安石の詩を稱揚すること甚し、故に後人の誹りを免れざるなり。

【石林燕語】（セキ）　意味 書名。出處 宋の葉夢得の撰する所、八卷あり、夢得は徽宗の時に編纂を掌り、朝章國典を究めしことあり、故に其記する所、當時の掌故にして、官制科目の事に於て尤も詳なり。

【石破天驚】（セキ）　意味 意外の事にて、人を驚ますをいふ。出處 李賀の李憑箜篌引に、吳絲蜀桐張高秋、空白凝雲雲不流、江娥啼竹素女愁、李憑中國彈箜篌、崑山玉碎鳳凰叫、芙蓉泣露香蘭笑、十二門前融冷光、二十三絲動紫皇、女媧鍊石補天處、石破天驚逗秋雨、夢入坤山數神嫗、老魚跳波瘦蛟舞、吳質不眠倚桂樹、露脚斜飛溼寒兔。

【石心鐵腸】（セキ）　テの部鐵石心腸を見よ。

【石慶數馬】（セキ）　意味 漢の石氏の家庭は嚴格なりしにより、石慶は事々謹慎ぜり、嘗て天子の御者となり居しとき、六馬を御したりしに、天子が馬の數を問はれしにより、一つ〳〵數へて、然る後に答へたりといふ。出處 史記萬石君傳に、石奮趙人孝文時官至太中大夫、無文學、恭謹無與比云云、武帝時爲太僕、御出、上問車中幾馬、慶以箠數馬、畢、舉手曰、六馬、慶於兄弟、最爲簡易、然猶如此、後爲丞相。

【石將軍戰場歌】（セキ）　意味 明人の詩なり。出處 李夢陽の石將軍戰場歌に、落風店南逢父老、告我已巳年間事、店北尙存古戰場、遺鏃猶帶勒王字、憶昔鑾塵實倉皇、反覆勢如風雨蟲、紫荊關頭畫吹角、殺氣軍聲滿幽朔、胡兒飲馬彰義門、烽火夜照燕山雲、內有于尙書、外有石將軍、石家官軍如雷電、天清野曠來酣

戰、朝廷已失紫荊關、吾民豈保清風店、率盜負子無處逃、哭聲震天風怒號、兒女眯頭伏鼓角、野人屋上看旌旄、將軍此時提戈出、殺敵不異草與蒿、追北歸來血洗刀、白日不動蒼天高、萬里塢塵一劍揮、父子英雄古來稀、單于痛哭倒馬關、羯奴半死飛孤狐、處處懽歌聲鼓旗、家家牛酒犒王師、應追漢室燕姚將、還憶唐家郭子儀、沈吟此事六十春、此地經過淚滿巾、黃雲落日枯骨白、砂礫慘憺愁行人、行人來折戰場柳、下馬坐望居庸口、卻憶千官迎駕初、千乘萬騎下皇都、乾坤將見中興主、殺伐重開載造國、姓名應勒雲臺上、如此戰功天下無、嗚呼戰功今已無、安得再生此輩西備胡。

【石上不生五穀】 出典 石上には穀物を生ぜず、物は猶り生ぜず、その原因あるないふ。出處 淮南子道應訓に、石上不生五穀、亮山不游麋鹿、無所隆蔽也。

【石崇殺妓侑酒】 出典 晉の石崇豪奢に酒を勧めたるをいふ。出處 世說汰侈篇に、石崇往來客燕集、常令美人行酒、飲酒不盡者斬、美人、王丞相(名導)與大將軍王敦晉共詣崇、丞相素不能飲、輒自勉釃、至於沈醉、每至大將軍、固不飲以觀其變、已斬三人、尚不肯飲、丞相讓之、大將軍曰、自殺伊家人、何預卿事。

【石破天驚逗秋雨】 出典 李賀の詩の句。出處 石破天驚を見よ。

【斥候】 出典 敵の動靜を指斥偵察するなり。出處 左傳襄公十一年に、納斥候、禁侵略、と。又た六韜の龍韜必出篇に、斥候常戒。

【斥兵】 出典 史記白起傳に、犯秦斥兵なり。出處 敵の動靜を伺ふ兵なり。

【斥賣】 出典 品物をシリゾケ賣るなり。出處 史記貨殖傳に、畜牧及樂、斥賣求奇繒物、閒獸戎王と。索隱に、斥而賣之、以求奇物也、閒獸猶私獸也。

【斥鹵】 出典 斥は地鹹なり。鹵は、廣韻に、鹽澤なり、天生を鹵といひ、人造を鹽と曰ふと。又た說文に、鹵は、鹹地なり、東方は之を斥と曰ひ、西方は之を鹵と曰ふと。出處 史記夏本紀に、海濱廣潟、厥田斥鹵。

【斥鷃】 出典 澤中の小鳥、斥は澤、鷃はフなきうづらなり。出處 莊子逍遙篇に、有鳥焉、其名爲鵬、背如泰山、翼若垂天之雲、摶扶搖羊角而上者九萬里、絕雲氣、負青天、然後圖南、且適南冥、斥鷃笑之曰、彼且奚適也。

【斥言】 出典 事物の得失を指斥していふ義。出處 後漢書蔡邕傳贊に、斥言金商、南徂北徙。

【赤】 出典 一物もなきをいふ。赤心赤脚の類皆この義なり。出處 漢書五行志に空藏無物曰赤。出典 空地千里と。顏注に、空藏貧窮なるをいふ。

【赤道】 出典 太陽の行道をいふ。出處 書經洪範篇の疏に、當天之中、二極中等之處、謂之赤道、去南北極、各九十一度。

【赤壁】 出典 楊子江岸の地名にして、三國の時、吳の周瑜が魏の舟軍を燒き拂ひたる處にして、其の後蘇東坡の賦に因つて、其の名益々顯はる、但しその地の所在、異說あり。出處 荊州記に、沌口縣沿江南岸百里名赤壁、昔周瑜破曹操處、黃州赤壁、乃赤鼻山と。又た水經注に、江水左逕赤鼻山下、爲赤鼻山、蘇軾赤壁前賦及長短句、人道是三國周郎赤壁、蓋傳疑也と。又た東坡志林に、黃州守居之數百步、爲赤壁、或曾即周瑜破曹公處、不知果是否、斷岸壁立、江水深碧、二鵰巢其上、有二鮫、或見之、遇風浪鼓鬣、鵰擊小舟、至其下、拾舟登岸、入徐公洞、非有洞穴也、但山崎嶇邃耳と。又た徐氏筆精に、東坡赤壁賦、誤以黃州赤鼻山、認爲周瑜破曹操處、後人不甚指摘之、寔爲盛名所掩耳と。又た吳船錄八月庚寅の條に、發三江口、辰時過赤壁、泊黃州臨皐亭下、赤土山也、未詳賦、後見所謂鳳石穿空及梁岸巉崖之境、東坡詞賦、徵奈焉。

【赤心】 出典 一點の私なき心をいふ。赤は空藏物なきの謂なり。出處 後漢書光武紀に、降者更相語曰、蓋王推赤心置人腹中、安得不投死乎。

【赤子】 出典 あかごをいふ。出處 正字通に、始生小兒曰赤子、君謂民赤子、漢書故使臨下赤子盜弄兵于澤池。出典 兩敏秋雨盦隨筆に、康語曰、如保赤子、傳曰、赤子未詳何義、或曰、始生之兒、其色赤、故名、庾兆蓬天香樓偶得云、赤尺古通用、引文獻通考深赤者十寸之赤也、

以爲證、曰、赤子者、言始生小兒長僅一尺也、其說頗當、有據。

【赤堰】 出典 皇宮階上の地をいふ、階上といふ、堰は二ヤと訓ず。出處 漢書元后傳に、曲陽侯根(王根)驕奢僭上、赤堰青瑣。

【赤帳】 出典 赤き色のハタなり。出處 史記淮陰侯傳に、人持一赤幟。

【赤繩】 ケの部月下氷人を見よ。

【赤脚】 出典 素足なり。出處 杜甫の詩に、安得赤脚踏層冰、と。又た韓愈の詩に、一紳赤脚老無齒。

【赤髭】 出典 あかひげなり。出處 梁簡文帝の大法頌に、蹈乎青目黑齒、爲彼廣鬚赤髭、と。又た蘇軾の九日尋臻閣梨詩に、白足赤髭迎我笑、拒霜黃菊爲誰開。

【赤舄】 出典 禮服に用ゆるクツにて、其色赤く塗りたるなり。出處 文獻通考に、古者六冕皆赤舄、詩曰、王賜韓侯玄舄赤舄、則諸侯之舄與王同、孔穎達亦謂舄大夫服、冕者、赤舄、餘服則履。

【赤痣】 出典 赤きホクロなり。出處 南史梁丁貴嬢傳に、生而有赤痣、在左臂、療之不滅、又體多疣子。

【赤地】 出典 地に草の生ぜざるなり。出處 史記樂書に、晉國大旱、赤地三年。

【赤士】 出典 前條に同じ。出處 白居易の捕蝗詩に、雨飛雲食千里間、不見青苗空赤土。

【赤衣】 出典 罪人の著る赤色の衣なり。出處 說苑善謀篇に、赤衣塞路。

【赤貧】 出典 甚極貧窮なるをいふ。出處 南史臨汝侯坦之傳に、撿家、赤貧、唯有質錢帖子數百。

【赤族】 出典 一族罪を蒙りて誅せられ空しくなるをいふ。出處 揭傑の解嘲に、不知秦之光武位、卽赤吾之族也。

【赤伏符】 出典 後漢の光武位に卽くときに、赤き色の符ふ獻ぜしものあり、天より授くといふ。出處 後漢書光武紀に、光武先在長安、時、同舍生彊華自關中奉赤伏符、曰、劉秀發兵捕不道、四夷雲集、龍鬬野、四七之際、火爲主、群臣因復奏曰、受命之符、人應爲大、萬里合會、不議同情、周之白魚、曷足比焉。

【赤松子】 出典 古の仙人の名なり。出處 史記留侯世家に、願棄人間事、從赤松子、游耳。

【赤子心】 出典 空藏にして一物もなきを赤といふ、因て純一にして僞りなきをいふ。出處 孟子離婁下篇に、大人者不失其赤子之心者也。

【赤壁賦】 出典 宋の蘇軾が赤壁の下に舟遊して作れる文章なり。赤壁を參看せよ。出處 東坡年譜に、元豐五年壬戌、先生年四十七、在黃州、爲居臨皐亭、七月遊赤壁、有前赤壁賦、十月又遊之、有後赤壁賦、と。賦は、文章軌範、古文眞寶後集等に載す。出處 明道雜志に、古人作詩賦、率不必皆實、如謝宣城登江得如練、宜城去江近百里、州治左右無江、但有雎溪耳、或當時謂溪爲江、亦未可知也、入羽記、竹樓下稍東卽赤壁磯、赤茆岡陽、略無草木、故韓子蒼詩云、豈有危峯與栖鶻、赤無陳迹但飛鳴、此磯圖經及傳者皆以爲周公瑾敗曹操之地、然江上多此名、不可考實、

【赤條條】 出典 裸體となりて、身に一物をも附けざるなり。出處 水滸傳第四回に、脫得赤條條地、跳上床去坐了。

【赤洪厓】 出典 洪厓は、錢監の名、赤洪厓は、空藏監の義、人の貧僧に應ぜざるに答ふる辭。出處 者言故事に、宋丁晉公爲鹽鐵使、同年白續爲判官、稱一日以片紙、假緡五環、公笑曰、榜下新姻、京國富室、豈無半千貫物耶、懼我攜之耳、簡尾書曰、赤洪厓、天行、當唯何有、立地機關子大乖、五百青蚨兩家闕、赤洪厓打白洪厓。

【立赤幟】 出典 趙の幟を抜き、漢の赤幟を立つ、韓信の謀計なり。出處 史記淮陰侯傳に、韓信與張耳、擊趙、選輕騎二千人、人持一赤幟、誡曰、趙見我走、必空壁逐我、若疾入趙壁、拔趙幟、立漢赤幟、趙果空壁逐信耳、信所出奇兵二千騎馳入趙壁、皆拔趙幟、立漢赤幟二千、趙軍不能勝信等、欲還歸壁、壁皆漢赤幟、而大驚、以爲漢已得趙王將矣、兵遂亂、於是漢兵夾擊、大破之、虜趙軍、陳餘死、戮安君、禽趙王歇。

【赤衣使者】 意義赤き色の蜻蜓なり。出處古今注に、蜻蜓、一名赤衣使者、亦名赤弁丈。

【赤縣神州】 意義漢土の異稱なり。出處史記孟荀傳に、中國名曰赤縣神州、赤縣神州内、自有九州、禹之序九州是也、不得爲州數、中國外如赤縣神州者九、乃所謂九州也と。又た河圖括地象に、崑崙東南地方五千里名曰神州、其中有五山、帝王居之。餘説晉書孝武紀に、神州赤鮮、成被髮之郷。

【乘赤鯉魚】 意義琴高といふ仙人ば、赤鯉魚に乘じ水上に游ぶといふ。出處水經注に、趙人有琴高者、以善鼓琴、爲康王舍人、行彭涓之術、浮游碭郡間二百餘年、後入碭水中、取龍子、與弟子期、日、皆潔齋待於水傍設屋祠、果乘赤鯉魚出、入坐祠中、碭中有千萬人觀之、留月餘復入水也。

【以赤手障江河】 意義空手を以て江河の流れを障ふをいふ、獨力を以て大事に當るに喩ふ。出處庾信の連珠に、大厦既焚、不可謂之以淚、長河一決、不可障之以手。

【不失赤子之心】 意義赤子の心は、純質にして曷良なり、成長の後には、多くは之を失ふ、唯々大人は、これを失はざるなり。出處孟子離婁下篇に、孟子曰、大人者、不失其赤子之心者也。

【推赤心於人腹中】 意義誠信の心を人の腹中に推し入るとて、人に疑はしめざるなり。出處後漢書光武紀に、更始立、光武、爲蕭王、光武擊銅馬於鄗、高湖重連與銅馬一合、光武悉破降之、封其渠帥爲列侯、降者皆不自安、光武知其意、敕令各歸營勒兵、廼自乘輕騎、案行部陳、降者更相語曰、蕭王推赤心置人腹中、安得不投死乎、由是皆服と。又た宋史太祖紀に、南漢劉鋹歸朝、從幸講武池、帝酌巵酒、賜鋹、鋹疑有毒、捧杯泣曰、臣罪在不赦、陛下既待臣以不死、願爲大梁布衣、未敢飲、此酒、帝笑而謂之曰、朕推赤心於人腹中、寧有毒邪、即取酒自飲。

【赤水遺珠象罔得之】 意義赤水といふ所にて、象罔といふもの之を索む。出處莊子天地篇に、黄帝遊乎赤水之北、登乎崑崙之丘、而南望、還歸、遺其珠、使知索之、而不得、使離朱索之而不得、使喫詬索之、而不得也、乃使象罔、象罔乃可以得之乎。

【昔昔】 意義夜夜といふが如し。出處列子周穆王篇に、昔昔夢爲國君。

【昔談】 意義過ぎ去りたる昔の話。出處昔談。

【昔人已乘黄鶴去】 意義唐人の詩の句。出處クの部黄(クワウ)鶴樓を見よ。

【昔年辛苦地今日負初心】 意義もと唐の世試驗官の作れる七言の詩を、落第者が五言として自らその境遇を述べたるなり。出處邵氏聞見後錄に、唐人知貢舉者、(魏扶)有詩云、梧桐葉落井亭陰、鎖閉朱門試院深、曾是昔年辛苦地、不堪今日負初心、後爲下第者裁作五言、以誚之。

【昔年有狂客號爾謫仙人】 意義唐人の詩の句。出處杜甫の寄李白詩に、昔年有狂客、號爾謫仙人、筆落驚風雨、詩成泣鬼神、原名從此大。

【昔年顧我長青眼今日逢君已白頭】 意義唐人の詩の句。出處許渾の贈蜀歌管送春愁、昔年顧我長青眼、今日逢君已白頭、莫向尊前更惆悵、古來投筆盡封侯。

【負析薪】 意義その父が薪を割ければ、其の子が之を負ふとて、子孫が能く父祖の業を繼ぎて失墜せざるに喩ふ。出處左傳昭公七年に、古人有言、其父析薪、其子弗克負荷と。又た陳琳の書に、聞魏周榮屬伸綱、各紹、能負析薪。

【舍筭】 釋(セキ)筭を見よ。

【舍菜】 釋(セキ)菜を見よ。

【刺刺】 意義多言の貌。出處管子白心篇に、惕惕者、不以天下爲、爽、刺刺者、不以萬物爲、莫、孰能寡、刺刺、而爲

惕惕乎と。又た韓愈の送殷員外序に、持被入直三省、丁寧顧婢子、語剌剌不能休。

【拓彈】 意義拓彈の實の如き細き彈丸を言ふ。出處南部烟花記に、陳宮人於春林放拓彈。

【隻】 意義船の字に附けて呼ぶ、又た船を數ふるに用ふ、一艘二艘といふが如し。出處姚合の秋曉江次の詩に、沙渚殘行雁、風灣一隻船と。又た祖惠全書に、本處船爲一甲、以一船爲十長と。又云、船若干隻、原註この字、本と船舶の義あるに非ず、支那の俗間に之を用ふるなり、隻は單なり、因て物を數ふるに用ふるなり、遂に船を數ふるにも之を用ゐ、その後ち專ら船のことに限りて用ふることゝなりしならん、或しかこれ皆余の臆説なり、博雅の垂教を待つ。

【隻堠】 意義一里塚をいふ。出處康熙字典に、封土爲壇以記里也、五里堠堠路傍堠、十里雙堠と。又た韓愈の路傍堠詩に、隻堠路傍堠、一隻復一隻。

【隻日】 意義一三五七九の奇數の日をいふ。出處玉壺清話に、唐高宗時褒宇寧靜、長孫無忌請隔日視事、自後雙日不坐、隻日御視。

【隻履西歸】 意義達磨が一つの革履を携へて西方の國に去りしをいふ。出處景德傳燈錄に、梁天監二十八年達磨、端居而逝、後三歲魏宋雲使西域、遇師

【席】

【席卷】 意義牧め取る如く易さをいふ、又た物を卷くが如く取ること。出處戰國楚策に、雖無出甲、席卷常山之險と。又た賈誼の過秦論に、有席卷天下、包舉宇内、囊括四海之意、并吞八荒之心。

【席門】 意義ムシロを門に下げて、戶に代ふるなり、貧家の形容。出處史記陳丞相世家に、平家乃負郭窮巷、以弊席爲門、然門外有長者車轍と。又た南史寶榮傳に、席門常掩、三徑纔通。

【前席】 意義人と熱心に語りて、坐席を進むるをいふ。出處史記賈生傳に、賈生徵見、孝文帝方受釐坐宣室、上因感鬼神事、而問鬼神之本、賈生因具道所以然之狀至夜半、文帝前席、既罷、曰、吾久不見賈生、自以爲過之、今不及也。

【逃席】 意義酒宴の席をハヅスをいふ。出處本事詩に、連飛十數觥、不向去。

【席上珍】 意義席は陳なり、堯舜の道を陳ねて以て諸侯の聘召を待つなり。出處禮記儒行篇に、儒有席上之珍以待聘。

【席不暇暖】 意義東西に奔走して一所に安んじず、故に席暖まるの暇なきなり。出處孔席不暇暖、墨突不黔。

【射】

【射策】 意義疑義を難問する爲に之を紙に書し、其大小を量り、署して甲乙の科と爲し、之を列置きて彩鬮せしめず、射者をして其取り得る所に隨て之を解釋せしめ、以て優劣を判つなり。出處漢書蕭望之傳に、以射策甲科爲郎と。又た同書兒寬傳に、以都國選、詣博士、受業孔安國、以射策爲掌故。

【射覆】 意義蓋もて諸物を覆ひ置き、暗をいふ、アテモノなり。出處漢書東方朔傳に、上嘗使諸數家射覆、置守宮盂下、射之、皆不能中。

【射中】 意義弓にて射て中つるなり。出處史記項羽紀に、射中謫玉。

【射殺】 意義弓にて射て殺すなり。出處史記項羽紀に、歡射殺之。

【射雕者】 意義クマタカを射る者なり。出處史記季將軍傳に、何叔三人、射傷匈奴人、中貴人走廣、廣曰、是必射雕者也。

【射鵰手】 意義弓を射る名人をいふ。出處北齊書辯律尤傳に、嘗從文襄、校獵雲表、見一大鳥、射之正中、其頭、形如車輪、旋轉而下、乃鵰也、邢子高歎曰、此射鵰手也、時號爲射鵰都督。

【戚戚】 意義一親子親。二憂ひ悲しむ貌。三心の動く貌。出處一詩經大雅行葦篇に、戚戚兄弟。二論語述而篇に、小人長戚戚。三韓愈の與于襄陽書に、爲材多戚戚之氣。四孟子梁惠王上篇に、夫子言之、於我心有戚戚焉。

【戚里】（セキリ）　意義天子の外戚、即ち后妃の家をいふ。出典史記萬石君傳に、高祖召其姉爲美人、以奮爲中涓、徙其家長安中戚里、以姉爲美人故也。注に、於上有親戚者、則皆居之、故名其里爲戚里。

【戚揚】（セキヤウ）　カの部手カ、戈を見よ。

【戚施】（セキシ）　キの部龠キ、隙戚施を見よ。

賣

【賣任】（セキニン）　意義事を擔任して其責を負ふを人休焉、休則虛、虛則實、實者倫矣、虛則靜、靜則動、動則得矣、靜則無爲、無爲也、則任事者責矣。

【賣沈】（セキシン）　意義己れが時の名賢を知らざるを自ら愧づるの喩。出典晉書故事に、陳瑩中元開豐、爲鍾離部監官、與范淳夫同舍、淳夫論顏子不遷不貳、伯淳有一之、公問伯淳誰也、淳夫曰、不識、伯淳耶、公謝、賣瑩公作賣沈文。伯淳は、程明道の字なり、瑩公は、名は沈、孔子の何人なるを知らずして、子路に問ふ、今、陳瑩中は、伯淳を知らず、故に賣沈を作りて、自ら賣む。

寂

【寂乎】（セキコ）　意義しづかなる貌。出典莊子天下篇に、芴乎若亡、寂乎若清。

【寂寥】（セキレウ）　意義前條に同じ。出典皮日休の寒夜聯句に、寂寥萬籟清、皎然諸鶴鳴。

【寂寞】（セキバク）　意義寂寞に同じ、さびしきことをいふ。出典楚辭九歎惜賢に、聲嗷嗷以寂寞兮。

【寂寞】（セキバク）　意義人靡なくさびしきをいふ。出典楚辭招隱士哀命に、卒捱情以紛寞兮、然惆悵而自悲。

【不寂寞】（セキバクセズ）　意義さびしからずといふ意。出典李翰の韓公行狀に、生徒喜曰、韓公來爲祭酒、國子監不寂寞矣。

【寂然不動】（セキネンフドウ）　意義心を靜にして、物に動せざるなり。出典易經繫辭上傳に、易无思也、无爲也、寂然不動、感而遂通天下之故。

【寂若無人】（セキジャクムジン）　意義ヒッソリとして人の居らざる如きをいふ。出典世說德行下篇に、傅茂遠泊然靜處、不妄交遊、袁司徒尋經其戶、驚歎曰、經其戶、寂若無人、披其帷、其人斯在、豈得非名賢。

惜

【惜陰】（セキイン）　スの部寸陰を見よ。

【惜春御史】（セキシュンギョシ）　意義唐の世の官名にして、花を保護するを掌る。出典玉塵集に、穆宗宮中花開、以重頂帳、蒙覆、置惜春御史、號曰拓春。

【惜抱軒文集】（セキホケンブンシュウ）　意義書名。出典清の姚鼐の撰にして、文集十六卷と、後集十卷と、詩十卷とあり、其文簡古にして迂餘蕩漾とし、餘韻盡きず、劉大櫆の門に出づるといへども、巧力は遙に之に過ぐ。

【嘒嘒】（セキセキ）　意義雁の鳴く聲なり。出典爾雅釋鳥に、行鷹嘒嘒、宵鷹嘯嘯。

浙

【浙然】（セキゼン）　意義秋氣の立つ貌。出典韓愈の詩に、夏半除氣始、浙然雲容秋。

【浙瀝】（セキレキ）　意義霰の降る聲なり。出典謝惠連の雪賦に、霰浙瀝以先集。用法嚼ゼ霰の聲のみならず、雪の聲、風の聲に用ふるも妨げなし。

跖

【跖之徒】（セキノト）　意義盜跖の仲間とて、利にのみ走る者をいふ。出典孟子盡心上篇に、雞鳴而起、孳孳爲利者、跖之徒也と。莊子胠篋篇に、跖之徒問於跖曰、盜亦有道乎。

【跖犬吠堯】（セキケンバイギョウ）　意義人其の仕ふる所の主に忠を致すに喩ふ。出典戰國齊策に、韶物常惡田單、安平君田單聞之、爲酒而召韶物曰、單何以得罪於先生、韶物曰、跖之狗吠堯、堯非貴跖而賤堯也、狗固吠非其主也と。又た史記淮陰侯傳に、跖之狗吠堯、堯非不仁、狗固吠非其主。

哲

【哲哲】（セキセキ）　意義明らかなる貌。出典詩經陳風東門之楊篇に、明星晳晳と、毛傳に晳晳猶煌煌也。註釋俗本に、木に从ふは誤りなり。

三　腊

【腊肉】（セキニク）　意義乾肉なり。出典易經噬嗑卦に、六三、噬腊肉、遇毒、小吝、无咎。

舄

【舄鹵】（セキロ）　意義瘠せ燕の地なり、或は渤海に作る。字彙に、東方謂之斥、西方謂之鹵とあり。出典漢書溝洫志に、於古舄鹵兮生稻粱。

四　碩

【碩學】（セキガク）　意義猶ほ鴻儒といふがごとし、碩は大なり。出典後漢書儒林傳

に、夫書理無二二義、儒有一宗、而碩學之徒、莫之或徙、或通人鄭其固焉。

【碩儒】（セキジュ）　意義前條に同じ。出典後漢書荀淑傳に、荀爽遭董卓、避亂于海上、又南遷漢濱、十餘年以著述爲事、遂稱爲碩儒。

【碩大】（セキダイ）　意義大いなる貌。出典詩經陳風澤陂篇に、有美一人、碩大且儼。

【碩人之邁】（セキジンノマイ）　意義大人の餞うるなり。出典詩經衞風考槃篇に、考槃在阿、碩人之邁、獨寐寤歌、永矢弗諼。

【碩果不食】（セキクワフショク）　意義小人盛んにして、君子の僅かに殘れるに喩ふ。出典易經剝卦に、上九、碩果不食、君子得輿、小人剝廬。

五　械

【械械】（セキセキ）　意義木の葉の落る聲。出典六書故に、械械、借以狀落葉之聲、解爲頹落。

六　積

【積水】（セキスイ）　意義海をいふ。出典荀子儒效篇に、積水而爲海。

【積流】（セキリウ）　意義大海をいふ。出典木虛の海賦に、茫茫積流、含形內虛。

【積氣】（セキキ）　意義天なり。中典列子天瑞篇に、天積氣耳、亡處亡氣。

【積素】（セキソ）　意義雲烟の白く重なるをいふ。出典謝靈運の詩に、浮氛晦崖巘、積素亂原疇。

【積聚】（セキシウ）　シの部積（シ）聚を見よ。

【積欠】（セキケン）　意義租稅の不足金の積りたるをいふ。出典異聞錄に、爲積欠所厭、如負千鈞而行と。又た文獻通考に、鬻民間積欠。

【積極】（セキキヨク）　意義事を成してその極度に達したるをいふ。出典蘇軾の始皇論に、積信之極、至始皇。

【積著】（セキチヨ）　意義積み貯ふる貌、著は貯と通ず。出典史記貨殖傳に、積著之理、務完物無息幣、以物相貿易、腐敗而食之、貨勿留、無敢居貴、論其有餘不足、則知貴賤、貴上極則反賤、賤下極則反貴、貴出如糞土、賤取如珠玉、財幣欲其行如流水。

【積玉之圃】（セキギヨクノホ）　意義名文章の多きに喩ふ。出典晉書陸機傳に、機字士衡、葛洪著書、稱機文猶玄圃之積玉無非夜光、五河之吐流、泉流如一。

【積土成山】（セキドセイザン）　トの部積土（ト）成山を見よ。

【積毀銷骨】（セキキシヨウコツ）　意義讒毀の昔多きときは、骨と雖も、遂に銷盡すといふ意なり。出典鄒陽の獄中上梁王書に、衆口鑠金、積毀銷骨。

【積羽沈舟】（セキウチンシウ）　意義羽の如き輕き物も、多く積めば其の力能く船を沈むるなり、因て衆合の力の畏るべきに喩ふ。出典史記張儀傳に、積羽沈舟、群輕折軸、衆口鑠金。

【積水不可極】（セキスイフカキヨク）　意義唐人の詩の句。出典王維の送祕書晁監還日本一の詩に、積水不可極、安知滄海東、九州何處遠、萬里若乘空、向國唯看日、歸帆但信風、繁身映天黑、魚眼射波紅、鄉國扶桑外、主人孤島中、別離方異域、音信若爲通。

七　績

【積善之家有餘慶】（セキゼンノイヘニヨケイアリ）　意義善事を積み行ふときは、己の身のみならず、其慶子孫にまで及ぶをいふ。出典易經文言に、積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、中典說苑說叢篇に、爲善者、天報以福、爲不善者、天報以禍、○史記に、爲善者、天報之以福、爲非者、天報之以殃、○晏子に、行善者、天賞之、行不善者、天殃之。

【決積水於千仞之溪】（ケツセキスイヲセンジンノケイ）　意義勢ひの迅急猛烈なるをいふ。出典孫子軍形篇に、勝者之戰、若決積水於千仞之溪、者形也と。又た同書兵勢篇に、如轉圓石於千仞之山、者勢也と。又た淮南子兵略訓に、善用兵者、勢如決積水於千仞之隄、若轉圓石於萬丈之谿。

【積裹征人三十萬】（セキクワセイジンサンジユマン）　意義唐人の詩の句。出典李益の從軍北征に、天山雪後海風寒、橫笛偏吹行路難、積裹征人三十萬、一時回首月中看。

【考績】（コウセキ）　意義官吏の賞否と功過とを調査するなり。出典書經舜典篇に、三載考績、三考黜陟幽明と。考は實を核するなり、三考は九歲なり。註釋柳宗元の送薛存義序に、吾聞且辱、不得與考績幽明之說。

八　藉

【藉田】（セキデン）　意義天子の親耕に祭る米を作る田をいふ、藉は蹈藉（フム）の義なり。出典漢書文帝紀に、詔曰、農天下之本也、其開藉田、朕親率耕以給宗廟粢盛と。顏注に、應劭曰、藉者帝王典藉之常也、章昭曰、藉借也、借民力以治之、以奉宗廟、且

以勸率天下一使務農也、臣瓚曰、藉謂蹈藉也、師古曰、瓚說是也、國語、宣王不藉千畝、韋昭注、周禮、天子孟春躬耕帝藉田、則藉非假借明矣。又た事物紀原に、周制、天子孟春躬耕帝藉田、國語韋昭注、周禮、天子孟春躬耕帝藉田、於周官甸師之職及禮記、則其禮周制也、禮記武王耕藉田、然後諸侯知所以敬。

【籍籍】 ㊀語聚なり、また藉に作る。㊁縱横の貌。㊂猶ほ紛紛のごとし。出處㊀漢書江都易王傳に、國中口語籍籍と。顏注に、籍籍、讙聚意。㊁漢書燕刺王傳に、亭藉藉如此、何可祕也。

【籍甚】 猶ほ盛の意にて、名聲の弘まること。出處史記陸賈傳に、名聲籍甚。

釋

【釋】 文體の名。出處文體明辯に、按、釋、字書云、釋、解也、文既有解、又復有釋、則釋者解之別名也、蓋自蔡邕作釋誡、而郤正釋譏、皇甫謐釋勸、束晳玄居釋、繼有作、然其詞旨不過遷相祖述而已、至唐韓愈作釋言、別出新意、乃能追配邕文、而免於蹈襲之譏、即此二篇、亦可以備一體矣。

【釋然】 胸中が爽かになること。出處莊子齊物論篇、及び庾桑楚篇に、南面而不釋然。

【釋奠】 釋菜に同じ、釋奠二字とも置くなり、釋また舍に作る、祭るに尸なく、食飲酬酢の事なく、唯祭る所の物を奠き置くのみ。出處禮記文王世子篇に、凡學、春官、釋奠于其先師、及行二、凡始立學者、必釋奠于先聖先師、及行事必以幣。

【釋菜】 學校にて先聖先師（周公又は孔子）を祭る禮なり、釋は舍（オク）なり、菜は蘋蘩の類なり、祭るに蘋蘩の屬を供へ舍くのみにして、牲牢幣帛を設むることなし、祭禮の輕き者なり。出處禮記文王世子篇に、始立學者、既興器用幣、然後釋菜。又た周禮大胥に、春入學、舍奠合樂。

【釋褐】 カの部釋褐（カウ）を見よ。

【釋名】 書名。出處後漢の劉熙撰す、八卷あり、爾雅の體に倣ひ、釋天・釋地等の二十七類に分ちて、名物の訓詁を敍せたり、其の解を下すに、音に從つて義を求めたり、故に往々牽強を免れざるものあり、明の郎奎金は、逸雅と改稱して、爾雅・小爾雅・廣雅・埤雅と合せて、五雅とあり、此書は漢の劉熙の釋名二十篇、音に隨つて義を求め、古を去る遠からざるを以て、三代の器物も古制を徵見すべしとて、之が疏を作り、別に補遺を附したり。

鶴

【鶴鳴在原】 鶴鳴篇、ぺば則ち鳴き、行けば則ち搖く、兄弟急難を相救ふて自ら舍つ可からざるに喩ふと。又た鶴鳴は首尾相應ず、急難の際兄弟相應ずること是の如しとの意に取る。出處詩經小雅常棣篇に、鶴鳴在原、兄弟急難、每有良朋、況也永歎。每は雖、況は只なり。

セツ 切

【切切】 ㊀朋友の情の切なるにいふ。㊁悲愴なる聲にいふ。㊂愁ふる心の切なるにいふ。出處㊀論語子路篇に、朋友切切偲偲。㊁歐陽修の秋聲賦に、淒淒切切、呼號奮發。（秋の聲と、又た白居易の琵琶行に、小絃切切如私語。（琵琶の音）㊂江淹の傷愛子賦に、形憔悴而外論、心切切而內圮。

【切偲】 切切偲偲を見よ。

【切玉】 利劍よく堅き玉を切斷する により、寶刀を切玉と呼ぶなり。出處列子湯問篇に、周穆王征西戎、西戎獻昆吾之劍、鋒銅赤刃、用之切玉如切泥。又た博物志に、昆吾獻切玉刀、刀切玉如曝布。又た歐陽修の日本刀歌に、昆夷道遠不復通、世傳切玉誰能窮、寶刀近出日本國、越賈得之滄海東。

【切磨】 玉を切りて磨くが如く、研究すること。（切磋琢磨を見よ）出處唐書に、切磨之益不盡矣。

【切劇】 劇は莫麥反、音磨（マ）、劇なり、劇なり、切なり。出處劉禹錫の砥石賦に、切劇下上、眞質悉見。

【切諫】 ねんごろに諫むること。出處史記主父偃傳に、不遽切諫。

【切齒】 切齒扼腕を見よ。

セツ 切舌

【切服】 服を壓へて病狀を祭するなり、切は按ずるなり。出處史記扁鵲傳に、越人之爲方也、不待切脈。

【切字】 を切磨して、別に一の音を出だすをいふ。出處事物紀原に、切字本出於西域、漢人翻字、止曰讀如某字、未用反切、然古語已有二音合爲一字、如不可爲叵、如是爲嗣、而已爲耳、之乎爲諸之類、似西國二合音、蓋切字之原也、如奚字從爰而大、亦切音、殆與聲俱生、莫知從來也。又た封氏聞見錄に、周顒好爲體語、因此切字皆有紐、紐有平上去入之異、永明中沈約文詞精拔、盛解音律、遂撰四聲譜、文章八病、平頭上尾蜂腰鶴膝、以爲自靈均以來、此秘未覩。

【切韻】 前條に同じ。出處夢溪筆談に、切韻者上字爲切、下字爲韻、切須歸本母、韻須歸本等、と。又た事物紀原に、陸法言切韻序曰、隋開皇初、劉臻等八人論法言、論及音韻、法言記之、後取諸家字書所記、定爲切韻五卷、其書成於仁壽元年、唐天寶十三載孫愐增修、目曰唐韻。

【切夢刀】 夜半の風をいふ。出處蘇軾に、三更風作切夢刀、萬種愁成係夢線。

【切切偲偲】 は勉强なり。出處論語子路篇に、朋友切切偲偲、兄弟怡怡と。何晏注に、馬曰、切切偲偲、相切責之貌と。邢疏に、朋友以道義切磋琢磨、敎施於朋友也。

舌

【切齒扼腕】 商鞅切し扶をまくり て憤慨するなり。出處戰國燕策に、荊軻私見樊於期曰、願得將軍之首、以獻秦王、秦王必喜而召見臣、臣左手把其袖、右手搤其腕、則將軍之仇報、而燕國見陵之恥除矣、樊於期曰、此臣之日夜切齒腐心也、乃今得聞教、遂自刎、史記張儀傳に、天下之遊談士、莫不日夜切齒腐心、乃今得聞教、以目以言從之便、以說人主。

【切磋琢磨】 骨角を治むる者は、既に切りてまた之を磋す、玉石を治むる者は、既に琢してまた之を磨く、之を治むるとは、既に精し、而して益々其の精を求むるなり、以て學業を務むることに喩ふ。出處詩經衞風淇澳篇に、瞻彼淇澳、菉竹猗猗、有斐君子、如切如磋、如琢如磨。又た大學に、如切如磋、道學也、如琢如磨、自修也、と。又た爾雅釋器に、骨之切、象謂之磋、玉謂之琢、石謂之磨。

【切問近思】 實地に適切なることを問ひ質して、近く之を身に行はんことを思慮するなり。出處論語張篇に、子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。

【舌學】 拿（タナゴコロ）に書籍の語を書き、舌にて之を嘗めて記憶して、舌學と名けたる故事なり。出處太平御覽に、董謠鈔書于掌、以舌舐之、掌爲隱然舌學。

【舌耕】 ㊀學問を以て糊口の資とするものをいふ。㊁小說をいふ。出處㊀漢書賈誼傳に、遂通經、門徒來學者數千人、以勸率天下、使務農也、臣瓚曰、藉謂蹈藉也、師古曰、瓚說是也、國語、宣王不藉千畝、韋昭注、周禮、天子孟春躬耕帝藉田、國語韋昭注、周禮、天子孟春躬耕帝藉田、於周官甸師之職及禮記、則其禮周制也、禮記武王耕藉田、然後諸侯知所以敬。

セツ 舌折

者、獻果殽食、或曰、遂非力耕、乃舌耕也、と。又た從容錄に、才士豫耕、辯士舌耕。㊁戒庵漫筆に、醉翁談錄引子京、小說者或名演史、或謂合生、或稱舌耕、或作挑閃。

【舌人】 通譯者なり。出處國語周語に、使舌人體委與之、韋注に、舌人能達異方之志、象胥之官也。

【舌本强】 舌の根が固くなるといふこと。出處世說文學下篇に、三日不讀道德經、便覺舌本閒强。

【折俎】 牛羊等の牲の體を折解して、俎に載せて客に供するをいふ。出處左傳宣公十七年に、晉侯使士會平王室、定王享之、廢、襄公相、禮、殺烝、王召士會曰、王享有體薦、宴有折俎、公當享、制當宴、王室之禮也、と。杜注に、乘則半解其體而薦之、宴則體解節折、升之於俎、使皆可食、所以示惠也。

【折膠】 何叔の傳、秋氣至り折膠の時を待ちて、軍を出すを常とす、故に秋の期節をいふ。出處漢書龜錯傳に、欲立、或者始於折膠、と。顏注に、蘇林曰、秋氣至、膠可折、弓寄可用、匈奴常以爲候而出軍。

【折角】 ㊀人の傲慢なるを打ち折じくなり。㊁頭巾の角を折るなり。出處㊀漢書五鹿充宗傳に、五鹿嶢嶢、朱雲嶢嶢、充宗學、雲折其角。㊁後漢書郭泰傳に、林宗（郭泰の字）有重譽、嘗行遇雨、中一角墊、時人乃故折一角、以爲林宗用、其見慕如此。

【折簡】 全紙を二つ切りにして認めたる短き手紙なり、古は竹の札

を用ふ、故に館といふ。出典晉書宣帝紀に、王浚面縛迎帝曰、浚若有罪公當折簡召一浚、何苦自來耶、帝曰、以君非折簡之客一故耳。

【折戟】セツゲキ 意味戟の折れたるをいふ。出典杜牧の赤壁の詩に、折戟沈沙鐵牛銷。

【折桂】セツケイ 意味試驗に及第して第一となるをいふ。出典晉書郗詵對策東堂、自云桂林一枝也、自唐以來用之、溫庭筠詩云、猶喜故人先折桂、自憐羈客尚飄蓬。

【折還】セツセン 意味折れ曲ることをいふ。出典禮記玉藻篇に、周還中規、折還中矩と。鄭注に、曲行也宜方。

【折北】セツペイ 意味戰爭に負けて逃れることをいふ。出典漢書副通傳に、漢王一日數戰亡尺寸之功、折北不救。

【折獄】セツゴク 意味訴訟を判斷して、罪を定むるをいふ。出典易經賁卦象傳に、君子以明庶政、无敢折獄。

【折檻】セツカン 意味漢の朱雲が天子を諫め御殿の欄干を攀ぢて之を折りたる故事なり。出典漢書朱雲傳に、朱雲字游、魯人也、爲槐里令、坐廢銀、成帝時張禹以帝師位特進、甚尊重、雲上書求見、公卿在前、雲曰、今朝廷大臣、上不能匡主、下亡益於民、皆尸位素餐、臣願賜尚方斬馬劍、斷佞臣一人、以厲其餘、上問誰也、對曰、安昌侯張禹、上大怒曰、小臣居下、訕上、廷辱師傅、罪死不赦、御史將雲下、雲攀殿檻、折、呼曰、臣得下從龍逢比干、遊於地下、足矣、求知聖朝何如耳、後當治檻、上曰、勿易、因而輟之以旌直臣、雲自後不復仕。

【折腰】セツヨウ コの部折腰(コシ)を見よ。

【折柳】セツリウ 意味吾樂の曲の名なり、又た折楊柳ともいふ。出典李白の春夜洛城聞笛に、誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城、此夜曲中聞折柳、何人不起故園情。

【折衷】セツチウ 意味折は斷なり、衷は中なり、事ふ、衷まる中に作る。出典史記孔子世家の贊に、孔子布衣、傳十餘世、學者宗之、自天子王侯、中國言六藝者、折衷於夫子、可謂至聖矣。

【折中】セツチウ 意味前條に同じ。出典漢書賈禹傳に、發孔子之言、亡所折中。

【折閱】セツエツ 意味折は損なり、閱は賣なり、損なりして賣るをいふ。出典荀子修身篇に、良賈不善、折閱不市と。楊注に、折は、損なり、閱賣する所の物價を損するを謂ふなり。

【折衝】セツシヨウ 意味敵人の衝き來るを折き止むる人なり。出典晏子春秋に、孔子曰、晏子之謂也、樽俎之間、而折千里之外、晏子之謂也と。又た張協の詩に、折衝尊俎間、制勝在兩楹と。又た蘇洵の送石昌言引に、折衝于口舌之間。(折衝禦侮を參看せよ)

【折楊柳】セツヤウリウ 意味客を送りて、水邊に至り、楊柳を折りて、贈別となした る時の情景を敍したる詩なり。出典三輔黃圖に、灞橋在長安東、跨水作橋、漢人送客至此橋、折柳贈別と。又た唐詩紀事に、雍陶典陽安、送客至情盡橋、問其故、左右曰、送迎之樂、止此、故名、陶命筆爲一詩云、從來只有情難盡、何事名爲情盡橋、(自)此始名爲折楊柳曲。

【折腰步】セツヨウホ 意味婦人の少しく腰を折りて步むをいふ。出典後漢書に、梁冀爲大將軍、其妻孫壽封襄城君、加賦赤紱、比長公主、壽色美、善爲妖態、作愁眉、啼粧、墮馬髻、折腰步、齲齒笑、以爲絕惑、生徐息能制御冀、冀甚寵愛之、及冀敗、自殺。

【折轅車】セツエンシヤ 意味轅の折れたる車、後漢の張堪が儉約なる故事。出典後漢書に、張堪字君游、南陽宛人、年十六受業長安、志美行厲、諸儒號曰聖黃、世祖即位拜蜀郡太守、又爲漁陽太守、捕擊姦猾、賞罰必信、吏民皆樂、爲用、公孫述破時、珍寶山積、捴撫之物、足富十世、而堪去職之日、乘折轅車、布被囊而已、帝聞歎息。

【折衝禦侮】セツシヨウギヨブ 意味敵の突き來るを打ち擋きて、其の我を侮れる心を挫き止めて懼れしむるなり。出典詩經大雅緜篇に、予曰有禦侮と。毛傳に、武臣折衝曰禦侮と。又た胡銓の上高宗封事に、有如虜騎長驅、尚能折衝禦侮、(折衝を參看せよ)

【折臂三公】セツヒサンコウ 意味臂を折りて後ち三公となるをいふ。出典晉書羊祜傳に、有善相者、嘗言、祜與嘉所有帝王氣、若鑿之則無後、祜遂鑿之、相者見曰、豬出折臂三公、而祜竟墜馬折臂、位至公而無子。

【折臂太守】セツヒタ 意味臂を折りて郡の太守となりしをいふ。出典梁書に、劉之遴、字思貞、初在荊府、嘗寄居南郡、郡、忽夢前太守袁彖謂曰、卿後當爲折臂太守、即居此中、之遴後果損臂、遂臨此郡。

【折角如意】セツカクノイ 意味角(カド)の毀れたるなり、如意は多く玉にて作れり。出典世說排調上篇に、庾征西大舉征胡、既或行、止鎮襄陽、殷僚、章與書、送一折角如意、以調之、庾答書曰、得所教、鑿是敗物、猶欲理而用之。

【拙速】セツソク 意味拙劣ながら其の出來上ることが早しといふこと。出典コの部巧(コウ)遲不如拙速を見よ。

【拙者】セツシヤ 意味晉識の乏しきものをいふ。出典漢書貨殖傳に、拙者不足。

【拙業】セツゲフ 意味拙なる生業をいふ。出典史記貨殖傳に、田畜、拙業也、賣漿、小業也。

【拙刑】セツケイ 意味我妻のことを謙遜していふ。出典水滸傳第六回に、恰逢與拙刑一同來問壁嶽崩裏、還香願と。又た類書纂要に、自稱妻曰、拙刑、又荊房、荊妻、山妻、老妻、敝房、房下。

【拙修】セツシウ 意味藝術は、天才下劣なるものも、久く之を修むれば、自然に上達するをいふ。出典詩人玉屑に、高適五十始爲詩、爲少陵所推、老蘇三十始讀書、爲隙公所許、功深力到、無早晚也、聖賢之學亦然矣、東坡詩云、貧家淨掃地、貧女巧梳頭、下士晚聞道、聊以拙自修、朱文公每借此句作、語頭、接引窮鄉晚學之士。

【蔵拙】ゾウセツ 意味下手(ヘタ)なる處を匿すなり。出典世說賞譽下篇に、袁宏常侍聘齊、時魏收文學、北朝之秀、收錄其文集、以示徐、令傳之江左、徐遽齊江沈之曰、吾爲魏公蔵拙。

九 苗

【刹】セツ 意味刹を蔵する石塔なり。出典世說輕詆下篇に、徐孝嗣、一(もと)石塔の事なり。(一)康熙字典に、釋氣上立柱、中蔵舍利子、赤曰刹、王巾頭陀寺碑、列刹相望と。注に、列刹、佛塔也と。又た余靖の遊水南寺詩に、雙刹拏、浮雲、層軒絕世塵。(二)蘇軾の遊眞如詩に、獨携三子出、古刹訪禪禪。

【刹那】セツナ 意味イの部一(イツ)刹那を見よ。

【茁茁】セツセツ 意味草芽の出で初めたる貌。出典詩經召南騶虞篇に、彼茁者葭。

【屑屑】セツセツ 意味(一)猫ほ切切の如し、くたくどの細く落つる貌。(二)人のグズ〳〵として居る形容。出典(一)左傳昭公五年に、屑屑焉習儀以亟。(二)江淹の水上神女賦に、雨屑屑而稍落。(三)後漢書崔駰傳に、子笑我之沈滯、吾亦病子屑屑而不已也。

【不屑】フセツ 意味事物を輕視して意を加へざるをいふ。出典詩經邶風谷風篇に、宴爾新昏、不我屑以。又た同書鄘風君子偕老篇に、蝱髮如蝟、不屑髢也。

【殺生】セツシヤウ 意味(一)物を殺し、或は生すなり。(二)生命あるものを殺すをいふ、生の字は帶說なり。出典(一)荀子に、賞賤殺生興害、(二)梁大藏法數に、殺生者、謂自殺、亦教人殺、害一切衆生之物命也。

【殺害】セツガイ 意味人を殺し又は傷害すること。出典後漢書西域傳に、疏勒王連相殺害。

十一 雪

【雪然】セツゼン 意味雪の降るが如く、白鷺の飛び下るを形容せる辭。出典陸龜蒙の白鷺の詩に、雪然飛下立者苔、塵伊江鷗二拒、我來。

【雪客】セツカク 意味鷺の異名。出典楊文公談苑に、鷺曰雪客。

【雪堂】セツダウ 意味蘇東坡の築きたる堂なり。出典蘇長公年譜に、公年四十七在黃州寓居臨皐亭、就東坡築雪堂、自號東坡。又た蘇軾の後赤壁賦に、自雪堂步、而將歸于臨皐と。又た蘇軾の詩に、今年刈草著雪堂と。王注に、按、先生擬斜川云、元豐壬戌之春、予躬耕於東坡、築雪堂、居之、南浦、四望亭之後丘、西接北山微泉、又雪堂文云、蘇子得廢圃於東坡之脅、作雪堂、號曰雪堂、以大雪中爲之、因繪雪於四壁之間、無容隙、其名蓋起於此、嘗見先生有帖云、已作得雪堂記、而其本不傳、未詳其故。

【雪山】セツザン 意味西域にある山の名なり。四時雪を戴けるにより名づく。出典後漢書班超傳注に、西域有白山、通疏有雪、亦名雪山。

【雪鬙】セツヒン 意味白き鬙を形容していふ。出典白居易の寒亭留客詩に、令落若爲留客住、氷池霜竹雪鬙鬙。

【雪隱】（セツイン）便所なり、雪峯禪師が、便所を掃除することを常職とせられたるによりていふ。出處烏巢沙彌經注に、羅州雪峯義存禪師常住掃除、於是大悟、故名矣。

【雪兒】（セツジ）兒者、唐李密之愛姬、能歌舞、每見賓朋有文章奇麗入意者、即付雪兒一叶音律以歌之、故號雪兒歌。

【雪洞】（セツトウ）碗に、小齋之外別置茶寮、高燒明爽、勿令閉塞、臨邊列置兩爐、爐以小雪洞覆之、止開一面用者灰塵勝散。

【雪月花】（セツゲツクワ）雪と月と花とをいふ、此の三は皆賞玩すべきものなり。出處キの部琴詩酒伴皆抛我を見よ。

【雪衣兒】（セツイジ）韓小品に、樹蘋錄、鸚鵡錄に雪衣兒。

【雪衣娘】（セツイジヤウ）錄に、開元中、嶺南獻白鸚鵡、養之宮中、頗聰慧、洞曉人言、上及貴妃皆呼雪衣娘と。又た蘇軾の常調道中有懷錄、塘、寄遠古の詩七律に、去年樽架飛時節、記得金籠放雪衣と。自注に、杭人以放鵝（ハト）爲太守壽と。この自注に據るときは、雪衣娘は鵝の異名ともなるなり。

【雪面娘】（セツメンジヤウ）史補に、八百哥、雪面娘、寒地鵲、術蟬奴、皆魏王繼筏馬名。

【雪中松柏】（セツチ）松柏は雪中にてもその色を變ぜず、因て人の節操あるに喩ふ。出處論衡得の詩に、雪中松柏意背青。全篇ナの部南八見終不屈に見ゆ。

【雪車冰柱】（セツシヤ）唐の韓愈の友人劉叉の作れる二詩の名なり。出處唐書韓愈傳に、劉叉者亦一節士、聞愈盛仕天下士、步歸之、作冰柱雪車二詩、出盛仕孟郊右。

【雪魄冰姿】（セツハク）花容の潔白なるに喩ふ。出處蘇軾、唐人詠茉莉詩、冰姿素淡廣寒女、雪魄輕盈姑射仙。

【雪泥鴻爪】（セツデイ）蘇軾の和子由詩に、人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥、泥上偶然留指爪、鴻飛那復計東西。出處雲山陽の鴻雪處記に云、鴻之歸也、爪於雪以記其所過、其來、雪滅而痕不可知也、古人以喩人之游歷無跡、此を以て使用の一端とすべし。

【雪月花時最憶君】（セツ）キの部琴酒詩伴皆抛我を見よ。

【雪中騎驢孟浩然】（セツ）宋人の詩の句。出處林逋の梅花詩に、花時、吟懷長恨負芳時、腐見梅花一驛入、雪後閑林纔半樹、水邊籬落忽橫枝、人間紅艷多塵俗、天與清香似有私、堪笑胡孫赤風味、解尋酸調角中吹。

【雪後園林纔半樹】（セツ）もと東坡の詩の句にて、唐の孟浩然が雪中に驢馬に騎りて詩を吟ぜしとの故事なり。出處蘇軾の贈寶眞何秀才詩に、君不見、蹄州別駕眼如電、左手挂弓橫撫筍、又不見、雪中騎驢孟浩然、敝裘凍合雲生肩、吟詩聳肩山如鶴、恐是襄陽孟浩然と云へる人にて、唐末の人なり、孟浩然が事は、書傳に見る所なし、然るに東坡詩に、雪中騎驢孟浩然、敝裘吟詩聳如鶴、恐是襄陽孟浩然と、王蒙前題、詩人不長寒侵骨、千載風流誰浩然と、金の元遺明雪行の詩に、五更驢背滿靴霜、殘雪離離原樹荒、身在景中無句寫、卻教人比孟襄陽と、此れ唐七賢雪中過藍田關圖中より云ひ傳へたるなるべし、決して別に所出なし、七賢は張說・張九齡・李白・李華・王維・鄭虔・孟浩然なり、其人亦不盡同時、好事者畫いて圖とせしより、終に眞の故事となる、虞伯生題孟浩然像詩に、風雪雲蒸朝暮、七人圖裡一人存と、張籍の詩に、二李清狂別二張、吟猿遮指孟襄陽、鄭虔旣作春風滿、摩詰圖中詩興長と、委く仙弇卷全集第五十九、七賢過關の論辯あり、蓋王晉卿西園雅集、假りに當時名高の士に託するの類也、實その事あるに非ず、然るに元の馬臻賓宣の詩に、緣溪路滑蹇驢遇、水色山光總入詩、還勝襄陽孟夫子、騎

身風雪瀰漫時と云へるは、鄭綮が語と二事混用す、慣慣と謂つべし。

【接物】（セツブツ）出處梁に當るをいふ。出處英書司馬遷傳に、我以慎于接下物。

【接待】（セツタイ）出處人に飲食を供し、厚遇するをいふ。出處佛祖統記に、法師宗曉、鑿義井於城南隙、此日、法華泉、以飲行者、作亭其上、施湯茗、無問道俗、結屋數間、創爲接待。

【接踵】（セツシヨウ）出處踵は、跡なり、跡を交ゆるは韓魏父子兄弟接踵而死、於秦者世矣。

【接武】（セツブ）出處武は、跡なり、後者の足、前者の跡の半を踏む、故に接すといふ。出處禮記曲禮上篇に、堂上接武、堂下布武。

【接樹】（セツジユ）出處つぎ木なり。出處土冤の村居の詩に、灌畦晴抱甕、接樹遍封泥。又た正字通に接樹曰驢鬃。

【接輿】（セツヨ）出處孔子の時の人。出處ホの部鳳（ホウ）兮鳳兮を見よ。

【接換】（セツクワン）出處花鏡に、凡木之必須接換、實有至理存焉と。又た燕居筆記に、接換、妙惟在時之暄融。

【接任】（セツジン）出處後任者をいふ。出處蔡曦雜記に、官滿而去、接任者來。

【接脚夫】（セツキヤクフ）出處人夫をいふ。出處居家必用に、接脚夫謂以異姓繼寡婦者。

【設色】（セツシキ）出處畫に種種の彩色を加ふるをいふ。出處揮麈錄に、李思訓設色山水。

三 梲 嫋 渫 絕

【渫梲】（セツ）山、節薦、稅を見よ。

【嫋瀆】（セツトク）出處女色になれけがれる義、嫋は狎なり、瀆は汚なり。出處漢書枚乘傳に、嫋瀆貴幸。

【渫惡】（セツアク）出處けがれてあしきをいふ。出處漢書匈奴傳に、今聞漢惡民、食降其趣。

【絕倫】（ゼツリン）出處人に超ゆるなり、倫は類なり、人類に超えて勝る義。出處漢書孝武紀に、博學絕倫と。又た同書揚雄傳に、雷匡衡傳に、經學絕倫と。又た同書揚雄傳に、超諸以爲絕倫。

【絕國】（ゼツコク）出處遠く離れたる國、絕はカケ離れたる義なり。出處淮南子修務訓に、絕國殊俗と。又た漢書孝武紀に、使絕國と。又た後漢書班超傳に、遠國絕國。

【絕域】（ゼツイキ）出處中國よりカケ離れたる外國なり。出處漢書武帝紀に、詔州郡察吏民有可爲將相使絕域者。

【絕景】（ゼツケイ）出處絕佳なる景色をいふ。出處蔡渚紀聞に、於郡城絕景處、增廣樓居。

【絕紘】（ゼツシヨウ）ケの部絕紘（ゲン）を見よ。

【絕緒】（ゼツシヨ）出處繼嗣の斷絕するをいふ。出處揚雄の賦に、天命湯武、絕其緒。

【絕唱】（ゼツシヤウ）出處詩歌の妙人に過絕なるをいふ。出處宋書謝靈運傳に、絕唱高聲、久無嗣音。

【絕句】（ゼツク）出處詩の體の名にして絕句の名稱に就いては、古來數說あつて、定まらず。出處文體明辯に絕の言たる義なり、律詩に即いて之を載るなりと。胡元瑞の詩藪に、絕句の淵源する所、律より古し、蓋、古詩を截りたるなりと、又た云、南史に劉昶兵敗奔魏、樂府蕪惟擒姦一人、駿馬自隨、慷慨作斷句曰、白雲滿窗來、黃鶴時一矢起、關山四面絕、故鄉幾千里と、斷は即ち絕なり、詩篇大抵長し、今倉卒口に信せて四句に止るを以て斷絕の義に取り、斷を絕と轉用せしならん、漢魏に四句の小詩あれど、絕句と言はず、劉昶傳には、斷句と曰ひ、正德傳には、一絕と曰ふ、絕句の名、宋（劉宋）の時已に立てりと。又た市川寬齋の談唐詩選に、近世宇士朗は、一句一絕の義なりと云ふ、これ陶潤明が春水滿四澤などに據ると云へり、然れども未だ確かならず、按ずるに六朝人の詩集に、五言四句の詩を或は絕句と題し、又斷句、截句と題す、六朝に此名あれば、決して唐代より始むる名にあらず、又律詩を截取したるにもあらず、余竊に思ふに必ずこれ聯句の一半を截取する者ならん、聯句の體、往古は、一人一句づゝ、云つらぬ、又一人二句づゝ作るもあり、宋梁の比、陶潤明、何遜が盟の作れる聯句は、みな一人四句づゝと云ふことなり、詩四句に至りては必ず起結相應じ、一首の體をなす、後人とれを截截して、其人の家集に入る、そのもと聯句より截取せるが故に、截句・絕句なども稱せしならん、基よりして四句の者は絕句と稱することになりたるなるべし、杜少陵集に、絕句の題あるも、恐くは此

義なるべし、七言絶句は、古樂府の挽歌、烏栖曲、怨詩行など皆唐の藍本なり、其時にこれを絶句と稱せしを見ず、唐初に至りて、聲調諧和し、人々多くこれを作る、五言四句を久しく絶句と稱し來れるに因つて、誰が名附るとなく五言に因つて此名を成せし者なるべしと、要するに、絶句の體は、唐に至つて成り、其の體或は前は散な以て起し、後二句對結し、或は前二句對起し後散を以て結び、或は四句俱に對し、或は前後俱に散す、各々作者の意に任す。たゞ絶句は、特に聲調を尙ぶ故に婉曲回環、その中に微旨遠意ありて讀む者をして含咀不盡の妙あらしむるを要す。

【絶纓】 出典 楚の莊王の故事なり。出典 說苑復恩篇に、楚莊王賜羣臣酒、日暮酒酣燈燭滅、有引美人之衣者、美人援絶其冠纓、告王趣火來上視絶纓者、王曰、賜人酒、使醉失禮、奈何欲顯婦人之節而辱士乎、乃命左右曰、今日與寡人飲、不絶冠纓者不歡、群臣百餘人皆絶冠去其冠纓、而上火、盡歡而罷、後晉與楚戰、有一臣常在前、五合五獲首、卻敵卒得勝人、莊王怪問、乃夜絶纓者。

【絶交】 出典 人と交りを絶むること。出典 戰國策に、西生秦魯、北絶齊交、則兩國之兵必至矣。出典 筆を止むるなり。出典 杜預

【絶筆】 の左氏傳序に、絶筆於獲麟之一句と。孔子春秋を書して哀公十四年西の狩に麟を獲たりといふ處にて筆を止めたるによりていふ。

【絶麟】 出典 絶筆をいふ、孔子春秋を修め筆を獲麟に絶つに取る。出典 蘇軾の詩に、明發復慢慢、吾詩其絶麟。出典 春秋哀公十四年春、西狩獲麟と。杜注に、復慢慢、見渡す限りなり。出典 鮑照仲尼絶筆於獲麟之一句、所感而作、因所以爲終也。

【絶食】 出典 物を食はざるなり。出典 書樊深傳に、絶食、若因斷食、當得大福。氏要覽に、絶食、見渡す限りなり。出典 鮑照

【絶目】 の詩に、絶目盡平原。出典 總べて感情極度に達して、溢れ出ること、種々の場合に用ふ。一大に笑ふ、絶倒、捧腹絶倒と連用することあり。二感嘆の極、氣を奪はれ容を失ふをいふ。三悲哀の極。その容を失ふなり。四大に驚けるときにいふ。五甚しく愁ふること。出典 一五代史晉家人傳に、出帝居喪、納其叔母馮氏爲后、酣飲歌舞過梓宮前、醉而告曰、皇太后之命與先帝不一任大度、左右皆失笑、帝亦自絶倒。二晉書衛玠傳に、衛玠好言玄理、王澄字平子、每聞玠言、輒歎息絶倒、時人爲之語曰、衛玠談道、平子絶倒。又た唐書に、劉晏十歲賜官秘書正字、明皇問曰、汝正字、晏曰、字正、唯朋字不正、帝亦自絶倒。三隋書陳孝意傳に、孝意居父喪、朝夕哀臨、每登夜分正理軍書、幕客唐舜申至、登忽絶倒、五蘇出血而卒。四元の趙秉文の雜擬詩に、不敢上高樓、惟恐愁絶倒。

【絶交書】 出典 朋友と交際を絶つとき に與ふる書なり。出典 文選に、嵇康が與山巨源絶交書を載せたり。

【絶德絶力】 出典 すぐれたる德と力となり。出典 揚子法言淵騫篇に、或問絶德、曰、舜以孝、禹以功、皐陶以謨、非絶德耶、力、秦悼武、烏獲、任鄙、扛鼎拊牛、非絶力耶。

【絶世獨立】 出典 世にすぐれて、獨り立ちなるをいふ。美人にいふ。出典 イの部一(イツ)顧傾國を見よ。

【絶妙好辭】 出典 文章詩歌の格段に優れたるを賛する辭なり、蔡邕が曹娥の碑の文を評せし語なり、即ち黃絹(絶)幼婦(妙)外孫(好)齏臼(辭)これなり、この四字の說明は、クの部黃(クワウ)絹幼婦外孫齏臼を見よ。出典 會稽典錄に、上虞長度尙弟子邯鄲淳、字子禮、時甫弱冠、有異材、尙先使魏朗作曹娥碑、文成未出、子禮至、就使爲之、操筆而成、無所點定、朗嗟歎不暇、遂毀其草、以下碑文)孝女曹娥者、上虞曹盱之女也、其先與周同、祖、末曹荒流、爰玆適居、盱能絃節按歌、婆娑樂神、以漢安二年五月、時迎伍君、逆濤而上、爲水所淹、不得其尸、時娥年十四、號慕思盱、哀吟澤畔、旬有七日、遂自投江死、經五日抱父尸出、以漢安二年、元嘉元年、青龍在辛卯、莫之有妻、度尙設祭誄之、辭曰、曶伊孝女、嘩嘩之姿、偏其反而、令色孔儀、窈窕淑女、巧笑倩兮、宜其家室、在洽之陽、大禮未施、曉喪慈父、彼蒼伊何、無父孰恃、訴伸告哀、赴江永號、魂

三 桑

セツ 絶桑

死如歸、是以眇然輕絶、投入沙泥、嗣嗣孝女、厥沈載浮、或拍洲渚、或在中流、或趨淄瀕、或逐濤濤、千夫失聲、悼痛萬餘、觀者慟道、雲集路衢、泣淚掩潮、驚動國都、是以哀姜哭市、杞崩城隅、或有賦而引鏡、撫耳用刀、坐豪待水、抱樹而燒、於戲孝女、德茂此儔、何者大國、防禮自修、豈況庶賤、蓽屋草茅、不扶自直、不鑄自彫、越巫過宋、此之有殊、哀此良厲、千載不渝、嗚呼哀哉、辭曰、名勒金石、質之乾坤、歲數歷紀、立廟起墳、光于后土、顧昭天人、生賤死貴、利之義門、何恨華落飄零、早分蓋鬱窈窕、永世配神、若堯二女、爲湘夫人、時効髣髴、以昭後昆、止此、漢議郎蔡邕聞之來觀、夜闇以手摸其文而讀之、邕題文云、黃絹幼婦外孫齏臼。

【絶代有佳人幽居在空谷】 出典 唐人の詩の句。出典 杜甫の佳人の詩に絶代有佳人、幽居在空谷、自云良家子、零落依草木、關中昔喪亂、兄弟遭殺戮、官高何足論、夫壻輕薄兒、新人美如玉、合昏尚知時、鴛鴦不獨宿、但見新人笑、那聞舊人哭、在山泉水清、出山泉水濁、侍婢賣珠回、牽絲補茅屋、摘花不插鬢、采柏動盈掬、天寒翠袖薄、日暮倚修竹。

【桑梲之材】 出典 小才に喩ふ。桑は櫨(マスガタ)なり、梲は梁上の短柱、(リダチ)なり。出典 班彪の王命論に、桑梲之材、不荷棟梁之任。

四 說

【說】 出典 文體の名。出典 宇書、說、解也、述也、解釋義理、而以己意述之也、說之名起於說卦、漢許慎作說文、亦祖其名、以命篇、而魏晉以來、作者絶少、獨曹植集中有二首、而文選不載、故其體闕焉、嬰之傳於經義、而更出己見、縱橫抑揚、以詳贍爲上而已、與論無大異、此外又有名也、今取名家數篇、以備一體、此外又有名說、字說、其名雖同、而所施則異、故別爲一類。

【說郛】 出典 一郛は郭なり、衆說皆其郭內にあるをいふ。出典 二青名。出典 三揚子法言問神篇に、大哉天地之爲萬物郛、五經之爲衆說郛。四百二十卷あり、明の陶宗儀の原本に、郁文博及び涛陶庭の增補せしものなり、この書は一大叢書なれど、或は全書を節錄し、或は類書中より古書を分鈔したり、要するに首尾完備せし書を收めたるに非ず、然れども經書諸史隨筆傳記の類數百種を收錄せり。陶庭また纘說郛四十六卷を編せり。說郛は元代に止るを以て、續篇は主として明人の雜著を鈔錄せり。

【說文】 說文解字を見よ。

【說法】 出典 教法の話を爲すなり。正確に讀むときは說の音は「セイ」なり。今俗に從ふて「セツ」とす。出典 道藏大上經に、末世道士講經說法と。又た維摩詰經佛國品に、彼時佛與無量百千之衆恭敬圍遶而爲說法、譬如須彌山王顯于大海安處衆寶師子之坐蔽於一切諸來大衆。

【說鈴】 出典 鈴の如き小き聲といふことにて、小說といふ義に用ふ。出典 シの部書肆を見よ。

【說文解字】 出典 書名。出典 漢の許慎字叔重の撰にして、三十卷あり、凡そ十四篇、目錄一篇、五百四十部に分つ、文九千三百五十三、重文一千一百六十三、注文十三萬三千四百四十字、部を分ち類に從ひ、六書の義を推究し、頗る精密なり、然れども訓詁簡質にして、通じ易からず、又音韻改め移り、古今讀を異にし、諧聲の諧字、また明にし難し、故に傳本往々異なれり、其の書に名づくる所以は、序に云、類に依て形に象る、故に之を文と謂ふ、其の後ち形聲相益す、即ち之を字と謂ふと、即ち文を說き字を解くの義なり、清の段玉裁之が注を作れり、說文の學を爲すものは、宜くこれより入るべし。但しその文字排列の序、字彙又は康熙字典等と大にその趣きを異にすれば、文字を引き出だすに、甚だ困難を感ずることあり、幸に說文通檢と名くる書あり、宜しく此書を以て索引となすべし。清の朱駿聲の說文通訓定聲は舊本の順序を易ふ、亦檢索に便なり。

綴

【綴綴】 出典 連續の義。出典 荀子非十二子篇に、譬然淵然、綽綽然と。楊注に、綴綴不乖離之貌、謂相連綴也。

【綴文】 出典 漢書劉向傳贊に、自孔子之後、綴文之士衆矣。

五 節

【節】 ㊀軍帥たるものに、天子より賜はる證符なり、牛毛を以て之を飾る。㊁時節の義にして日を定めて種々の儀式を行ふをいふ、我邦に節句といふは是れなり。出典㊀唐書百官志に、節度使掌總軍旅、賜以節旄、節、樹二六纛、と。又た事物紀原に、周禮地官之屬、掌節有玉角虎人龍符鷃旌等節、漢文有施節之制、西京雜記曰、漢大駕鹵簿有節十六、在左右、則漢始用焉、儀仗也、兼談曰、古節如今虎符、其用則有圭璋龍虎之別、皆權將之、英湯是也、漢人有持節、乃古施也、然則節自周始、而施節則起於漢也。㊁荆楚歲時記に、按每月皆有節、望晦朔、以正月初年、時俗重以爲節也。

【節操】 ㊀みさをなり。出典後漢書趙熹傳に、熹少有節操。

【節若】 ㊀程よくする意。出典易經節卦に、六三、不節若、則嗟若、无咎。

【節儉】 ㊀いぶ。出典揚雄の長楊賦に、垂意於至寧、躬服節儉。

【節用】 ㊀前條に同じ。出典論語學而篇に、節用而愛人と。又た荀子富國篇に、上以法取焉、而下以禮節用之、餘若丘山。

【節俠】 ㊀をとこだて、氣節を尚び、腕力を誇ふをいふ。出典史記刺客傳に、爲行而使人疑之、非節俠也。

【節槩】 ㊀節操あることをいふ。出典左思の吳都賦に、俗有節槩之風。

【節會】 ㊀いぶ。出典英雄記に、公孫瓚每朝制限を爲し抑へること。

【節搏】 ㊀管子に、節飲食、節衣服。出典都合能く節して文飾すること。

【節文】 ㊀と。出典史記叔孫通傳に、禮者因時世人情、爲之節文者也。

【節目】 ㊀細目といふに同じ、竹の節と、網の目の義に取る。出典禮記樂記篇に、先其易者、後其節目。

【節取】 ㊀人の惡節を棄てて善節のみを取るなり。因て文章などの一段一節を切り取ることにもいふ。出典左傳依公三十三年に、白季聚糞欲、曰、君取節焉可也。

【節度】 ㊀指令をいふ。出典事物紀原に、後漢公孫瓚討烏桓、詔令受節度、唐室名、使、密取此義、唐制緣邊戎寇之地、則加以旌節、謂之節度使、自睿宗景雲二年四月以賀拔延嗣爲河西節度使也、蓋宗至德以後、天下用兵、中原刺史一例受號也。唐書方鎭表云、開元二十二年、朔方節度始兼處置使、兵志曰、高宗永徽以後、都督帶使持節者、始謂之節度使、然猶未以名官也。

【折節】 ㊀主持する所の意を屈くること。出典戰國策に、以秦之强、折節而下、與國、臣恐其害於東周、と。鮑彪注に云、節を屈折して以て事に服するなりと。

【節上生枝】 ㊀段々と語を重ねる。出典朱子語錄に、隨語生解、節上生枝、更讀爲卷書、亦無用處也。

【山節藻梲】 ㊀節は、柱頭の斗かたなり、節に山を刻し、梲に水藻を畫く、これ天子の廟の飾なり。出典論語公冶長篇に、臧文仲居蔡、山節藻梲、と。又た禮記禮器篇に、管仲鏤簋、而朱紘、山節藻梲、君子以爲濫矣。又た同書玉藻篇に、大廟、天子明堂、庫門、天子皐門、雉門、天子應門、振木鐸於朝、天子之政也、山節藻梲、復廟重檐、刮楹達鄉、反坫出尊、崇坫康圭、疏屏、天子之廟飾也。

【節義之士不可以刑威脅】 ㊀みさをを守る士は、威力を以て脅すべからざるをいふ。出典黃石子に見ゆ。

【薛燭】 ㊀善く劍を相する人。出典次條を見よ。

【薛十】 ㊀薛燭と、十和となり、薛は善く劍を相し、十は善く玉を相す。出典越絕書に、越王勾踐有寶劍五、聞於天下、客有相劍者名薛燭、王召問之、青萍結綠各參看ぜよ、十和のことはクの都

七 薛

和(クワ)氏之璧を見よ)。

【薛濤】 ㊀蜀妓の異名。出典唐詩紀事に、薛濤奏之而罷、後遂呼之。

【薛濤箋】 ㊀詩箋なり。出典資暇錄に、薛濤尚松花箋、而好制小詩、惜其幅大、乃命匠狹小爲之、蜀中才子以爲便、後減詩箋、亦如是、特名曰薛濤箋。

【薛家盤石】 ㊀唐の薛道衡が侍郎たりし時、據りて以て詔を草せし盤石をいふ。出典唐書薛元超傳に、高宗即位、轉中書舍人、省中有盤石、道衡每見、嘿然流涕。

【薛氏鐘鼎款識】 ㊀書名。出典宋の二十卷あり、本は歷代彝器款識法帖と稱す、古器物の銘詞を鈎摹して、之が箋釋を爲す、考古博古の二圖を主とし、脫遺を收拾して、之に增補したり、然れども其訂譌考異備さに辯證あるは、二圖の遺く及ばざる所なり。

【薛王沈醉壽王醒】 ㊀唐人の詩の句。出典李商隱の龍池に、龍池賜酒壽雲屏、親故盤高衆樂停、夜半宴歸宮漏永、薛王沈醉壽王醒。

【褻衣】 ㊀平常に衣る皮衣なり。出典論語鄉黨篇に、褻衣長、短右袂。

【褻服】 ㊀私居の服なり。出典論語鄉黨篇に、紅紫不以爲褻服。

【褻器】 ㊀大小便を爲すに用ふる器。出典シュビン。出典周禮に、王府凡褻器と。注に、褻器、淸器虎子之屬。

【褻政有賢姊】 ㊀刺客聶政の姉榮の賢女なるをいふ。出典刺客聶政の姉榮

二 攝

【攝然】 ㊀に、天下攝然、人安其生。出典攝は持なり、君位に即かずして假りに君の事を行ふなり。

【攝政】 ㊀して假りに君の事を行ふなり。出典史記五帝紀に、舜得堯用事二十年、而堯遂使攝政。

【攝生】 ㊀猶ほ生を養ふといふが如し。出典韓非子解老篇に、動無死地、而謂之善攝生矣。

【攝位】 ㊀假りに君の位を攝持するなり。出典左傳隱公元年に、不書即位、攝也。

【攝提格】 ㊀寅なり。出典淮南子の部十二シの部に見よ。

三 竊

【竊政有賢姊】 ㊀戰國策に、聶政刺韓傀、遂以死、韓屍於市、購之千金、莫知誰子、政姊榮聞之曰、弟至賢、不可愛妾之軀、滅弟之名、抱屍而哭曰、此吾弟軹深井里聶政也、亦自殺於屍下、晉楚齊衛聞之、曰、非獨政之能、乃其姊者亦列女也。

【竊位】 ㊀その才なくして其の位に居るをいふ。出典論語衛靈公篇に、臧文仲其竊位者與、知柳下惠之賢而不與立也。

【竊視】 ㊀私かにぬすみ見るなり。出典漢書金日磾傳に、莫不竊視。

【竊鈇】 ㊀鈇は斧なり、斧を竊みしかりと思ふ、所謂疑心暗鬼を生ずるなり。出典列子說符篇に、人有亡鈇者、疑其隣之子、視其行步、竊鈇也、顏色、竊鈇也、言語、竊鈇也、動作態度、無爲而不竊鈇也、他日復見其隣人之子、動作態度、無似竊鈇者。

【竊盜】 ㊀漢の孝子熊宛が家に、前娶而櫛數、米百炊、竊竊乎又何足以濟世哉。

【竊竊】 ㊀窃かに盜むもの。出典淮南子氾論訓に、天下縣官注、曰、發墓者誅、竊盜者刑、此執政之所司也。

四 錢

【錢本糞土】 ㊀賤きものなるをいふ。出典晉書殷浩傳に、官本臭腐、故將得官而夢戶、錢本糞土、故將得錢而夢穢。

【錢如水】 ㊀錢を惜氣なく使ふこと。出典鶴林玉露に、軍無貫、士不往、軍無財、士不用、兵之法、使錢如使水。又た梅堯臣の詩に、用錢如水聞舞兒。

【雨錢助葬】 ㊀貧にして親の喪に遇ふ、天錢をその家にふらせしといふ。出典廣事類賦錢賦自注に、任昉述異記曰、周成王時、武陽雨錢、漢世潁川民家、雨金五萬錢、熊宛性孝、家貧遭親喪、天雨錢於其家。出典徐鉉の稽神錄に、許州有林氏、一日天

忽雨錢、充積其家、林氏仰天視曰、非常之事、必將爲禍於此、遂止林氏之禍也、應驗、寡而止、所收已鉅萬云。○宋史五行志に、紹興二年、天雨錢。

【錢至十萬可通神】 意義 錢の力の偉大なるをいふ。出處 幽閒鼓吹に、相國張延賞將判度支、知一大獄、頗有冤濫、每其扼腕、及判使、即召獄吏、驗訊之、且曰、此獄已久、旬日須了、明旦視事、案上有一小帖子、曰、錢三萬貫、乞不問此獄、公大怒、更促之、明日帖子復來、曰錢五萬貫、公益怒、命兩日須畢、明日復見帖子、曰、錢十萬貫、公曰、錢至十萬可通神矣、無不可回之事、吾懼及禍、不得不止。

【有錢者生無錢者死】 意義 錢は人の命を左右するの力あるをいふ、我邦の俗言に、地獄の沙汰も金次第といふもこれなり。出處 漢書に、諺曰、延尉獄平、如砥、有錢生、無錢死。補註 魯褒の錢神論に、死可使活、生可使殺。

六 妾

【妾媵】 意義 下婢なり。出處 後漢書樓賜傳に、今妾媵婢人閹尹之徒、共專國朝、欺罔日月。

【妾婦之道】 意義 是非を辨ぜず、只人に從ふものをいふ。出處 孟子滕文公下篇に、以順爲正者、妾婦之道也。

【妾心如笙簧時時待君暖】 意義 唐人の詩の句なり。出處 李嘉祐の詩なり。

一 浹

【浹洽】 意義 徧く行き渡くこと、水の紙を潤すがごときをいふ。出處 漢書禮樂志に、教化浹洽。

【浹和】 意義 能く浹洽して平和なることを。出處 韓愈の新修滕王閣記に、人吏浹和。

【浹辰】 意義 浹は周匝なり、辰は十二辰なり、子より亥に至る、即ち十二日なり、秦漢以前は、日を數ふるに干支を用ゐたるなり。補註 左傳成公九年に、莒恃其陋而不修城郭、浹辰之間、而楚克其三都、無儲也矣。

【浹日】 意義 十日なり、甲より癸に至るをいふ。浹はアマネク・メグル義なり。出處 國語楚語に、近不過浹日。

二 涉

【涉獵】 意義 涉は水を涉る、獵は獸を獵る、轡を歷覽するに喩ふ。出處 漢書賈山傳に、賈山、潁川人也、祖父祛、故魏王時博士弟子也、山受學於學於所言涉獵書記、不能爲醇儒。

二 捷

【捷】 意義 捷疾なる貌。出處 漢書郊祀志に、征夫捷捷。

【捷報】 意義 戰爭の勝ちたる知らせを。出處 漢書郊祀志に、未逾月而捷報聞。

【捷徑】 意義 捷は速かなり、徑は小路なり、近路といふこと。出處 離騷に、夫唯捷徑以窘步。

婕

【婕妤】 意義 漢代女官の名。出處 漢書外戚傳に、前漢有婕妤、班馬皆見於傳、南史后妃傳叙曰、婕妤漢舊號、蓋漢置官也、隋煬帝以爲世婦、而品正第二、通典曰、漢武置婕妤、視二千石、上卿比列侯。

唼

【唼唼】 意義 魚、又は水鳥が物を食ふ貌。出處 溫庭筠の昆明池水戰詞に、唼唼游魚近畫橈、又の張籍の春水曲に、鴨鴨將唼唼、青蒲生春水。

【唼喋】 意義 鳥の啄む聲。出處 司馬相如の上林賦に、唼喋菁藻と。注に、唼喋、鳥食之聲也。

【唼佞】 意義 讒言する人をいふ、唼はいはつはるなり。出處 反離騷に、鷙鳥之性、固以鷙之、今、既信椒蘭之唼佞。

三 睫

【交睫】 意義 カの交(カウ)睫をみる見よ。

四 箑

【箑】 意義 扇なり。出處 淮南子精神訓に、冬日之箑、夏日之裘と。高注に、箑扇也、楚人謂扇爲箑と。又た揚子方言に、扇自關而東謂之箑、自關而西謂之扇。

五 燮

【燮理】 意義 燮は和なり、理は治なり、宰相が國を治むるをいふ。出處 書經周官篇に、兹惟三公、論道經邦、燮理陰陽。

【燮和之任】 意義 宰相の職は陰陽の氣を燮和するに在り、故に宰相の任をいふ。出處 韓愈の爲裴相公讓官表に、委臣以燮和之任。

二 囁

【囁嚅】 意義 ㊀言はんと欲して復た口をつぐむなり。㊁さゝやくなり。出處 ㊀韓愈の送李愿歸盤谷序に、口將言而囁嚅。㊁楚辭七諫沈江に、改前聖之法度兮、寄囁嚅而妄作。

六 聲

【聲服】 意義 おそれて服するなり。出處 漢書項籍傳に、諸將聲服と。顏注

に、聲、失氣也。

セミ 蟬

【蟬五德】 意義 蟬に五の德あるをいふ。出處 陸雲の寒蟬賦に、蟬有五德、頭上有緌、則其文也、含氣飲露、則其清也、委穀不享、則其廉也、處不巢居、則其儉也、應候守節、則其信也。

三 セン 千

【千萬】 附 意義 幾重にもといふがごとし。出處 通俗編に、千萬、今簡牘丁寧語也、唐宋已皆用之、師古漢書注、多申謝若今人言千萬問訊矣。

【千鈞】 イの部一(イツ)鈞を見よ。

【千斤】 イの部一(イツ)斤を見よ。

【千頃】 イの部一(イツ)頃を見よ。

【千鍾】 イの部一(イツ)鍾を見よ。

【千仞】 イの部一(イチ)仞及びシの部(ジン)を見よ。

【千章】 意義 大木一本を一章といふ、千章は千本なり。出處 史記貨殖傳に、山居千章之材。

【千字文】 意義 毎句四字、隔句押韻の體にして、一篇一千字、これを千字文と名く、今此に三種の千字文を揭ぐ。出處 銀雨亭隨筆に、玉溪清話、梁武帝得鍾繇破碑、愛其書、命周興嗣次韻成文、或又云、武帝欲學書、命殷鐵石、選二王千文、召周興嗣次韻、二說不同、然皆武帝時事也、按次韻謂次韻字以成文也、與後世詩人次韻異、梁書蕭子範傳、南平王使子範製千字文、其辭甚美、命蔡薿注、釋之、自是別本と。又た妾穗錄に、武帝制千文詩、沈衆爲之注例。

天地玄黃、宇宙洪荒、日月盈昃、辰宿列張、寒來暑往、秋收冬藏、閏餘成歲、律呂調陽、雲騰致雨、露結爲霜、金生麗水、玉出崑崗、劍號巨闕、珠稱夜光、菓珍李柰、菜重芥薑、海鹹河淡、鱗潛羽翔、龍師火帝、鳥官人皇、始制文字、乃服衣裳、推位讓國、有虞陶唐、弔民伐罪、周發殷湯、坐朝問道、垂拱平章、愛育黎首、臣伏戎羌、遐邇壹體、率賓歸王、鳴鳳在樹、白駒食場、化被草木、賴及萬方、蓋此身髮、四大五常、恭惟鞠養、豈敢毀傷、女慕貞烈、男效才良、知過必改、得能莫忘、罔談彼短、靡恃己長、信使可覆、器欲難量、墨悲絲染、詩讚羔羊、景行維賢、克念作聖、德建名立、形端表正、空谷傳聲、虛堂習聽、禍因惡積、福緣善慶、尺璧非寶、寸陰是競、資父事君、曰嚴與敬、孝當竭力、忠則盡命、臨深履薄、夙興溫凊、似蘭斯馨、如松之盛、川流不息、淵澄取映、容止若思、言辭安定、篤初誠美、愼終宜令、榮業所基、籍甚無竟、學優登仕、攝職從政、存以甘棠、去而益詠、樂殊貴賤、禮別尊卑、上和下睦、夫唱婦隨、外受傅訓、入奉母儀、諸姑伯叔、猶子比兒、孔懷兄弟、同氣連枝、交友投分、切磨箴規、仁慈隱惻、造次弗離、節義廉退、顚沛匪虧、性靜情逸、心動神疲、守眞志滿、逐物意移、堅持雅操、好爵自縻、都邑華夏、東西二京、背邙面洛、浮渭據涇、宮殿盤鬱、樓觀飛驚、圖寫禽獸、畫綵仙靈、丙舍傍啓、甲帳對楹、肆筵設席、鼓瑟吹笙、升階納陛、弁轉疑星、右通廣內、左達承明、既集墳典、亦聚群英、杜藁鍾隸、漆書壁經、府羅將相、路夾槐卿、戶封八縣、家給千兵、高冠陪輦、驅轂振纓、世祿侈富、車駕肥輕、策功茂實、勒碑刻銘、磻溪伊尹、佐時阿衡、奄宅曲阜、微旦孰營、桓公匡合、濟弱扶傾、綺回漢惠、說感武丁、俊乂密勿、多士寔寧、晉楚更霸、趙魏困橫、假途滅虢、踐土會盟、何遵約法、韓弊煩刑、起翦頗牧、用軍最精、宣威沙漠、馳譽丹青、九州禹跡、百郡秦并、岳宗恆岱、禪主云亭、雞田赤城、昆池碣石、鉅野洞庭、曠遠綿邈、巖岫杳冥、治本於農、務茲稼穡、俶載南畝、我藝黍稷、稅熟貢新、勸賞黜陟、孟軻敦素、史魚秉直、庶幾中庸、勞謙謹勅、聆音察理、鑑貌辨色、貽厥嘉猷、勉其祗植、省躬譏誡、寵增抗極、殆辱近恥、林皐幸即、兩疏見機、解組誰逼、索居閑處、沈默寂寥、求古尋論、散慮逍遙、欣奏累遣、慼謝歡招、渠荷的歷、園莽抽條、枇杷晚翠、梧桐早凋、陳根委翳、落葉飄颻、游鵬獨運、凌摩絳霄、耽讀翫市、寓目囊箱、易輕攸畏、屬耳垣牆、具膳餐飯、適口充腸、飽飫烹宰、饑厭糟糠、親戚故舊、老少異糧、妾御績紡、侍巾帷房、紈扇圓潔、銀燭煒煌、晝眠夕寐、藍筍象牀、弦歌酒讌、接杯舉觴、矯手頓足、悅豫且康、嫡後嗣續、祭祀烝嘗、稽顙再拜、恬惶恐惶、顧答審詳、骸垢想浴、執熱願涼、驢騾犢特、駭躍超驤、誅斬賊盜、捕獲叛亡、布射僚丸、嵇琴阮嘯、恬筆倫紙、鈞巧任釣、釋紛利俗、並皆佳妙、毛施淑姿、工顰妍笑、年矢每催、曦暉朗曜、璇璣懸斡、晦魄環照、指薪修祐、永綏吉凶、矩步引領、俯仰廊廟、束帶矜莊、徘徊瞻眺、孤陋寡聞、愚蒙等誚、

謂語助者、焉哉乎也。

廣千字文（明の周履靖撰す夷門廣牘に載す）

大樸肇判、胚渾餘萌、窮然旻昊、渺矣寰瀛、
鳥瞻濠汜、鏡透蒼溟、卯昇酉沒、望溢弦停、
敘輪衍曆、英秀詳貫、緯巻躔度、咎測晉昕、
春晷漸燠、品彙咸亨、暘燥漾雨、晦霧籠晴、
杏櫻迷塢、絮墜漂萍、翅翻蝴蝶、舌囀鶯鶯、
驕驄紺幢、雕俎瑤觥、渡濱篙槳、村墅犁耕、
怨逾狎海、又覺炎炘、鰥嵐滴露、霹靂轟霆、
藹花淺沼、藤蔓幽扃、睡便筠草、奕戰楸枰、
柄司嶧嶽、候屆庚辛、闌干遍倚、爽榭堪凭、
坡前樵笛、磯畔漁罾、蕙蘭喧念、螢燐晶熒、
玲瓏簾箔、旋繞閨屏、綆敲砧杵、拍按竿箏、
暮杓乍北、渥冷尤凝、朔鴈驚冽、亂鍛先零、
岸橋低壓、氷鏡稜層、蝗銷種類、獸蟄狰環、
釀斟醽醁、果剝柑橙、窰烘炭熾、斟頓茵漫、
組遜雲梗、費鍵贈刀、貢獻輯麗、澳紐綸綍、
箱印紆綬、搭紳影裾、清置蟠輪、倉儲煮摘、
茗醒秘麗、梯航琛船、謠沸絡繹、恩沾葵戟、
伋覬併潤、恂仍借一、倖貳解蕖、眷彰緹軾、
廬統展驥、庾當積幀、貧敖范甑、賑稀偃室、
薄惜棲蠶、尉俱識鴉、緊吾衆產、全材宏偉、
鑊鄉淬剔、璠璵呈璃、旨顯笙陵、綽遠蟹蛟、
咀嚼加勤、蟻侮蒼蛇、函丈模楷、膽陟擢桂、
梓里奪魁、楓廷賜第、歐詹聯榜、邵詵擢桂、
寨館該膽、愈鑿看棄、館築孫弘、榻邀徐穉、
曼嬰貶陵、蔡邕倒屣、園苑蓴蓴、崙峯屹峙、
但逢朋美、鮐延彭蓢、返還鉛須、補壇肌髓、
開馭班螭、浪遨朱鯉、鶯崖佛像、院塔僧伽、
繡綻稻鞋、膝迸蠶芽、屠蘇遞酌、椒頌愛猷、
登穩煥嶸、嵊蛾紺顯、狄踝泛扈、禁烟息義、
蹴蹤逞技、歌綢慵伴、酵滴淵桑、符揮午筯、
彩縷爭繫、君笛酣吸、復嚶鄰陰、窓寫曼倩、
穿鍼貫紐、擘紙遺鍋、牆梁飼座、茶英把玩、
醪濁須臾、朝欲卻戀、李灰驗箭、細鼓添鍼、
臘綺報賀、鄉儺敷井、胶鼓翊舜、億兆戴堯、
吞詢謹譏、遣送蒼髦、詠總蕭曹、諫仲顯汲、誦詳鄭儀、
鄰欽名畢、揆總蕭曹、諫仲顯汲、誦詳鄭儀、
綾金瑤珥、扈寺鳴拗、鑿峻黑鹿、掀飛皂鵰、
男拝食俟、整廟班俊、趣裝纖棹、隼檄代庖、
厖郎雖魂、訴譜復興、油幕晉護、絳庭亟消、
濤船鎖艦、震騎標鋩、鎧授犀鉸、臘消譏詐、靖勤雄驍、
弓樂管陝、鎧授犀鉸、臘消譏詐、靖勤雄驍、
羆彝支許、梵竺遮鄙、浮瓶筯笠、齊鉢裂裟、
酥娛拂妓、衛質吳娃、親旌筋宛、嬌態婆娑、
愁眉整柳、醉眼涵波、香縞邸麝、製餐堆鴉、
强恢饑旬、勢壯江山、蜻雍澹巡、鄭鄒邯鄲、
淮濕藪藪、巴峽岑巒、岷蛾嵐帆、漢南瀰漫、
渾沱涉涌、淇澳泮淵、淄濟洶湧、瀑瀉蕩涙、
荆揚寶兌、濱涯斥鹵、源淩畎澮、財審邦賦、
包瞞著茅、搞讒參紵、橋柚篠蕩、琅玕蒲籙、
剔斡六珈、蓋珩琚瑀、簡鎮鑑鑛、鐘鏘鐘虡、
倍垌鞏駱、稔廐騂駒、倉猴鶴鷺、
飭興鏞鑓、鮑鮪鯖鱸、
蚯蚓飲泉、蝗蝦攘臂、
芍陂蔬渚、茇堤葺沚、
費篤濂濮、樣稠瑣碎、
砌綻苔蘚、屋瞰稊飼、
嫁娶婚送、腰掘稍餞、
穎禾滯穗、鮮獸撥毅、
鋼鞍鞘炙、聚鮑昔貨、
梁鈞昔貨、章綱今錄、
梅壇狂叟、姓喬巒貴、

妾謝歡好、巾衣侍傍、是顧孫二、優養隨常、
適饒帷薄、奉嬌燕嘗、聿求才識、密勿廊廟、
使臣牧佐、冠弁寵光、稱任政訓、陵義絜方、
乘鈞鑣陟、翠戶華堂、既作丹毅、累被金章、
檀綵樓觀、讌濯杯觴、席設羔酒、筵肆鱗湯、
驥載輪駕、藻帶鎧箱、徘徊自得、殷盛煌煌、
驥鄙易去、執扇入涼、田橫坐覆、韓信頻傷、
沙場顛沛、紫塞恐惶、蓋技悲悅、孰非亡羊、
就殆晉壁、繡蹶苍歌、積毀封樂、甚譽烹阿、
主愛瞋笑、家規睦和、力雖超海、口會懸河、
食餘賞芥、服厭紵羅、蒙恬筆妙、左慈釣神、
匡衡抗疏、陵讓漆身、陪登近幸、嘉猷面陳、
比說伊尹、號稱行鑒、君右納史、階東接賓、
事矯寡弊、慮妍篤倫、渠荷雅景、園葬東薪、
詩指鑑背、志飽來祿、益聞交友、仁勉出門、
車陶執法、孟軻知言、墨流斬筯、鑑捕判伐、
其及即若、並隸於律、競利囂棄、遣將驅滅、
淵別渭涇、邙巨碑碣、藥委積紡、啓量問答、
露獨抽條、霜零落葉、川皆冥漠、樹茂起凋、
幾枝分布、林蔚匯碼、猷處散伏、鄙運道遙、
勒駒逸騏、振鳥凌霄、裂鹿疲頓、鉅野寂寥、
誰劭康乂、仕効賢勞、矢蹤投的、笙吹調音、
魚聽奏瑟、民阜鼓琴、精新紘曲、珠履并臨、
再拜稽顙、瞻仰特深、俯要霜幾、外每敦直、
藩似福基、安貽嶋賊、詳論結聆、耽讀取則、
陋宜感悚、愚擧簸箕、熱巧火裏、夕照蕃魄、
眺遠弔古、人俠雖俗、積歸南畝、稼穡初熟、
委穢穫收、見助翰育、盡守貢稅、士廉爵祿、
珍修路車、連映銀燭、長途增感、升沈榮辱、
閒談舊院、善寫斯鍾、默靜車辟、莊嚴釋容、
蕭闕昏闢、賓蔽岳宗、槐柰棠笋、枇杷梧桐、
冬辰儲遍、鬱英如松、高岡鳴鳳、雲雨興龍、

大哉孔子、富也周公、竟充墳典、心瓶中廣、
習此往跡、千字文終

【千戶侯】 諸侯が千戶の領地を有するをいふ。史記貨殖傳に、渭川千畝竹、若千畝漆韭、此其人皆與千戶侯等。

【千乘國】 ハの部萬（メン）乘國を見よ。

【千鎰裘】 千鎰の價ある裘なり。鎰は二十四兩なり。墨子に、江河之水非一水之源、千鎰之裘非一狐之白。

【千石舟】 大きなる舟の稱にて、米千石を積み得る義に取る。我邦にては千ゴクブネと讀む。陸游の詩に、可憐使氣尚未減、打鼓順節千解船。

【千秋節】 唐の玄宗皇帝の誕生日をいふ。唐書禮樂志に、千秋節者、明皇以八月五日生、因以其日名節、而君臣其爲荒樂、自玄宗以後、皆以生日爲節と。又た明皇實錄に、開元十七年百官上表、請以八月五日爲千秋節、天寶七年改爲天長節と。又た唐玄宗の詩葉間發生、深綠色、冬夏不枯、又名萬年青、昊中家家植之、以備諸吉事、連根葉一束置上、以爲祥瑞。

【千佛會】 富み國のことをいふなり。寄國寄所寄に、江西有一僧、創千佛會、人出銀一兩、投木櫃、擲骰點多者得百金、歸不必復來、而往來之行人、國之傳信不過二三日、即來千人、僧則利其一會得抽分數金耳。

【千人塚】 多くの人を合葬せる塚をいふ。閱書に、五代時、留從效與朱文進戰於此、殺傷過當、坎地瘞之、號千人塚、後因建廟以慰冥魂。

【千里馬】 一日に千里の路を歩む名馬なり。戰國燕策に、郭隗曰、古之人君有以千金使涓人求千里馬者、馬已死、買其骨五百金、而歸以示天下、年千里馬至者三。

【千里眼】 遠方の事にても能く識るをいふ、探偵を使ふなり。魏書楊逸傳に、逸爲政愛人、尤憎豪猾、廣設耳目、其兵吏出使下邑、皆自持權、人或爲設食者、雖在閨室、終不遺、成曾楊使君有千里眼、那可狀之。

【千里鏡】 遠に、今西洋國千里鏡、磨玻璃、所成者、以長筒窺之見數十里、復制小者于扇角、近視者能使之遠と。又た乾隆帝の千里鏡の詩に、巧製傳西海、（自注是物傳自西洋國、初始名之爲千里鏡。）佳名錫上京、欲窮千里勝、先辨寸心平、（自注、持此鏡者、手或欹斜、則不能見遠矣。）

【千日酒】 イの部一（イツ）醉千日を見よ。

【照千里】 千里をも照らす名玉をいふ。史記田敬仲完世

七略旁覽、三篇繼就、俱詮詁注、俾誨髮幼、
序讚卷末、聊示悠久。

易千子文（撰者上に同じ）

洪荒之始、杳乎邈焉、陰鬱機籟、定分地天、
宇宙俶立、環亟璣旋、晝夜早晚、日月昃圓、
盈虛世故、因果夙緣、皇帝王霸、禪讓用純、
歷溪而居、更嗣以傳、惟我聖明、承命萬年、
戎羌諸夏、咸惠推宣、改過存誠、祭理索玄、
八表奄有、百郡亦從、衆議甲令、治粉桑工、
勤良誅罪、刑惡賞功、名弗浮實、慶祐攸同、
率土來朝、垂拱廣庭、遐邇引領、老少傾誠、
闕陛宮殿、鱗次在京、府州赤縣、列市張兵、
丙吉受相、趙武述躬、達衍縷組、居欲肥輕、
國輯英俊、鑄錫俶貞、錢蹶具蕩、簡紙書經、
德重盡性、學必踐形、湯盤裕垢、發劍刻銘、
懷息讒諂、約致欣寧、克擧五石、蹶辨壹丁、
倫尺短寸、貴珠所能、都邑可璞、陵谷合登、
昆池空洞、洛水平霞、崑玉眞白、厥草染青、
羽屬解語、微物轉丸、猜宰釀淡、歲移暑寒、
禮溪晦呂、官止盟桓、驚秋雉鴈、唱且者鵝、
鑲飯鑲步、蟹最多鬚、西施佳貌、毛女仙姿、
念孤官食、辭讓色絲、黃袞正體、絳幅對師、
秦遊閥位、震禹誓時、生父興母、當絕內思、
溫清祭祀、永惹男兒、伯叔姑嫂、且述給綴、
牀眠假寐、飯喰飯飢、兩饑造化、動植尊卑、
乃爲定制、節操耻廉、務本省己、持滿退謙、
扶弱鬥堅、被寬何恃、貴賤尊卑、夫豈不異、
忠上匪躬、孝親下氣、恭慎敬兄、側隱懷弟、
射御成禮、日謂游藝、頗前解驍、李杜詠麗、
遊齊長城、端木美哉、千足耳目、遊俎敢忘、
虛集星宿、宅寓垣墻、鑑磨朗曜、金想鑒翔、
云亭四顯、九瓣切驚、結髮舊情、甘因轉轍、

家に、梁王曰、寡人國小也、尙有徑寸之珠照車前後、各十二乘者十枚、何以萬乘之國無寶乎、威王曰、寡人所寶者、與王異、吾臣有檀子者、使守南城、則楚人不敢爲寇、東取泗上十二諸侯、皆來朝、吾臣有盼子者、使守高唐、則趙人不敢漁於河、吾吏有黔夫者、使守徐州、則燕人祭北門、趙人祭西門、徙而從者七千餘家、吾臣有種首者、使備盜賊、則道不拾遺、將以照千里、豈特十二乘哉。

【千金之子】 意義富家の子を稱す。出處史記越世家に、千金之子、不死於市。

【千里之駒】 意義㊀千里の馬に同じ。㊁年少にして才の優れたるものを、一日に千里を致す駿馬の如くなるに比していふ。出處㊀楚辭卜居に、寧昂昂若千里之駒乎。㊁漢書楚元王傳に、德、字路叔、少修黃老術、有智略、少時數言事召見甘泉宮、武帝謂之千里駒。(アの部吾(アガ)家千里駒を參看せよ。) 補遺千里駒の稱に就いて、隋餘叢考卷三十九に、漢魏以下宋代に至るまで、人を目して千里駒と稱せしものを列擧し、最後に魯連子を引いて、千里駒三字、實起於戰國、謂年少而逸才者、後遂以爲美稱後輩之佳稱耳といへり。

【千年一清】 カの部如俟河(カ)清を見よ。

【千載一遇】 意義再び遇ふ可からざる好時機なり、載は歲に同じ。出處袁安の三國名臣序贊に、夫萬歲一期、有生之通塗、千載一遇、賢智之嘉會、遇之不能無欣、喪之何能無慨。又た韓愈の潮州刺史謝上表に、所謂千載一時、不可逢之嘉會。

【千歲一時】 意義前條に同じ。出處晉書雲載記に、機運龍遊、千歲一時、公焉得辭也と。又た王羲之の興會稽王書に、千載一時之運。

【千篇一律】 意義詩文の作り方が皆同しきをいふ。出處藝苑巵言に、白樂天詩、千篇一律、輕看最能易人心手。

【千慮一得】 意義愚者にても希れには考へることあるをいふ。出處晏子春秋に、晏子曰、嬰聞之、聖人千慮必有一失、愚人千慮必有一得、意者管仲之失、而嬰之得耶と。又た史記淮陰侯傳に、廣武君曰、智者千慮、必有一失、愚者千慮、必有一得、故狂夫之言、聖人擇焉。

【千花萬卉】 意義多くの花草をいふ、卉は草なり。出處職貢分紀に、太宗至上林、春融、千花萬卉、研麗冠絕、上必曲宴、宰衡勳舊、召兩制詞臣、賦詩終日乃罷。

【千兵萬馬】 意義兵馬の多きをいふ。出處南史陳慶之傳に、洛中謠曰、名軍大將莫自牢、千兵萬馬避白袍と。又た齊東野語に、李德裕云、文章當如風恬雨霽、寂無人聲。

【千變萬化】 意義變化多端にして極りなきなり。出處列子湯問篇に、千變萬化、惟意所適。

【千門萬戶】 意義㊀禁中の宮室の多きをいふ。㊁市中人家の稠き宮、度爲千門萬戶と。又た班固の西都賦に、張千門而立萬戶と。又た張衡の西京賦に、開庭隧與門千戶萬。㊂桃合の晦日送窮の詩に、年年到此日、遮酒拜街中、萬戶千門看、無人不送窮。補遺夜航詩話に、千門萬戶、本出西京賦、謂宮室之麗、詩家所用、亦專指禁中、岑參千門柳色遲、青瑣李頎鴻欲度千門雪、盧綸卻望千門草色閒、皆用建章宮千門萬戶事也、此方詩人或用謂肆廛之盛、誤矣、但姚合晦日送窮云云、此似謂市井、然亦在長安所作、或謂邸第之盛耳。

【千巖萬壑】 意義多くの岩や溪といふこと、深山の形容なり。出處晉書顧愷之傳に、千巖競秀、萬壑爭流。

【千山萬水】 意義深山九形容せるなり、山又山、川又川、其極を知る可からざるなり。出處續元怪錄に、韋義方往三天城南尊妹、千山萬水、不見有路、問樵人、無知服老莊者。

【千呼萬喚】 意義頻りに呼ぶこと。出處白居易の琵琶行に、千呼萬喚始出來。

【千秋萬歲】 意義千年も萬年も長生するをいふ、人を祝する語なり。出處韓非子顯學篇に、風說之說人、使若千秋萬歲、千秋萬歲之聲聒耳、而一日之壽、無徵于人。

【千枝萬葉】 意義道の千萬殊るをいふ。出處淮南子俶眞訓に、道

有經紀條貫、得一之道、逆千枝萬葉。

【千斤大牛】 意義重さ千斤ある大牛をいふ。出處管書桓溫傳に、與諸僚屬、登平乘樓、眺矚中原、慨然曰、遂使神州陸沈、百年邱墟、王夷甫諸人、不以得不任其責、袁宏曰、運有興廢、豈必諸人之過、溫作色謂四座曰、顧開、劉景升有千斤大牛、啖芻豆十斛、若一飯盡、安得不思治、武入荊州、以享軍士、意以況宏、坐中皆失色。

【千古笑端】 意義千歲の笑ひぐさといふが如し。出處世說識鑒篇に、韓熙載在南唐、多蓄女僕、晝夜歌舞、謂人云、吾爲此行、正欲避入相之命、問何故避之、曰、中原常虞視於此、一旦眞出、江南棄甲不暇、吾不能爲千古笑端。

【千葉蓮華】 意義をいふ、仙家佛者の說なり。出處華山記に、山頂有池生千葉蓮華、服之羽化、因名之。又た崔融の賀千葉瑞蓮表に、按華嚴經云、蓮華世界、是盧舍那佛成道之國、一蓮華有百億國。

【千里蓴羹】 意義吳郡千里湖の蓴を羹にす、其の味甚だ美なり。出處世說言語中篇に、陸機謂王武子、武子前置數斛羊酪、指以示陸曰、卿江東何以敵此、陸云、有千里蓴羹、但未下鹽豉耳。補遺因話錄に、千里蓴羹、末下鹽豉、世多以談者謂蓴羹末關鹽與豉相調和、非也、蓴末字誤書爲末、末下乃地名、千里亦地名、此二處產此二物耳、其地今屬平江。

【千里同風】 意義天地の開到る所同一の風が吹くといふことに喩ふ。出處論衡に、千里不同風、百里不共俗。補遺蘇軾の詩に、須知千里事同風と、これは風俗の風なり。

【千里好山】 意義長く連れる山水をいふ。出處類苑に、陳文惠公未遂時、嘗作詩曰、千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴。

【千里神交】 意義遠方の親友をいふ。出處本事詩微異に、元相公稹爲御史、鞫獄、梓潼白尙書與名輩、遊慈恩、小酌花下、爲詩寄元曰、花時同醉破春愁、醉折花枝當酒籌、忽憶故人天際去、計程今日到梁州、時元果及褒城、亦寄夢遊詩曰、夢君兄弟曲江頭、也向慈恩院裏遊、驛吏喚人排馬去、忽驚身在古梁州、千里神交、合若符契。

【千里命駕】 意義友人を思ふて、千里とて、車を仕立てさせるをいふ。出處晉書嵇康傳に、東平呂安、服康高致、每一相思、輒千里命駕。

【千里絕迹】 意義千里の間、復た比類なきをいふ。出處梁書王規傳に、大同二年卒、詔贈散騎常侍光祿大夫、皇太子出臨哭、與湘東王繹令曰、威明昨宵、奄復殂化、甚可痛傷、其風韻遒正、神峰標映、千里絕迹、百尺無枝、文辯縱橫、才學優贍、映宕之情彌遠、濠梁之氣特辯多、斯實後民也。

【卻千里馬】 意義漢の文帝の賢明なる故事なり。出處通鑑綱目前漢孝文紀に、時有獻千里馬者、帝曰、爰旗在前、屬車在後、吉行日五十里、師行三十里、朕乘千里馬、獨安先之乎、於是還馬與道里費、下詔曰、朕不受獻也。補遺通鑑綱目後漢光武紀に、時有異國獻名馬者、日行千里、又逆寶劍、價值百金、詔以劍賜騎士、馬駕鼓車。

【彈千仞雀】 意義千尋もある高き所の雀を彈丸にて射るといふこと。出處莊子讓王篇に、以隋侯之珠、彈千仞之雀、世必笑之。

【尺寸千里】 意義千里の遠方の景も、僅に一尺一寸程の場所へ集るなり。出處アの部注然を見よ。

【覺跌千里】 意義大事を過まる者を覺すの意。出處荀子王霸篇に、楊朱哭衢涂曰、此夫過舉顚步而覺跌千里者夫、哀哭之。

【千歲之信士】 意義堅く道義を守る士をいふ。出處荀子王霸篇に、人無百歲之壽、而有千歲之信士、何也、曰、以夫千歲之法、自持者、是乃千歲之信士矣。

【千里不齎糧】 意義天下太平にして、豐年なるをいふ。出處梁書王國機傳に、人行數千里、不齎糧、民物蕃息、青齊之間、斗米三錢。

【千里不留行】 意義千里の遠き道を行くも、進り止むるものなしとは、天下に敵なきをいふなり。

出處 莊子說劍篇に、莊子謂趙文王曰、臣聞大王喜劍、故以劍見王、王曰、子劍何能禁制、曰臣劍十步一人、千里不留行、王大說之曰、天下無敵。

【千里猶對面】 意味 書狀を以て隔遠を褒めていふ。出處 唐書房玄齡傳に、高祖曰、房玄齡機識、實宜委任、每爲吾兒陳事、千里之外、猶對面語。

【千金子不垂堂】 意味 富人の子は自らを愛するの深きをいふ、不垂堂とは、堂の外邊に坐して墜墮せんことを恐るゝが爲めなり。出處 史記袁盎傳に、盎曰、臣聞、千金之子不垂堂、百金之子不騎衡、聖主不乘危而徼幸。出處 司馬相如の上諫獵書に、鄙諺曰、家累千金、坐不垂堂。〇蘇軾の留侯論に、千金之子、不死於盜賊。

【千鈞得船則浮】 ものは勢ひを得るを貴ぶの喩。出處 韓非子功名篇に、夫難有材無勢、則難賢不能制不肖、故立尺材於高山上、而下臨千仞谿、非材長也、位高也、桀爲匹夫、不能正三家、非不肖也、位卑也、千鈞得船則浮、錙銖失船則沈、非千鈞輕錙銖重也、有勢與無勢也、故短之臨長也、以位、不肖之制賢也以勢。

【以千鈞弩潰癰】 意味 強力を以て疲弊に乘ずるときは之を破ること甚だ易きをいふ。出處 戰國策に、齊龍國也、以天下一擊之、譬猶以千鈞之弩、潰癰也と。癰は背に發する瘡の名。

【千里江陵一日還】 アの部朝(アシタ)辭白帝彩雲間を見よ。

【千山萬水玉人遙】 意味 唐人の詩の句。出處 張喬の寄維揚故人詩に、離別江邊柳絮、千山萬水玉人遙、月明記得相尋處、城鎖春風十五橋。

【千秋萬古北邙塵】 意味 唐人の詩の句。出處 劉廷芝の公子行に、古來容光人所羨、況復今日遙相見、顧作輕縫著細腰、願爲明鏡分嬌面、與君相向轉相親、與君雙棲共一身、願作眞松千歲古、誰論芳桂一朝新、百年同謝西山日、千秋萬古北邙塵。(全篇は唐詩選七言古の部に載す)

【千里鶯啼綠映紅】 意味 唐人の詩の句。出處 杜牧の江南春に、千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中。參考 楊升菴、千の字を十の誤とせり、津阪東陽、これを駁して曰く、千里は、猶ほ到處と言ふがごとし、且つ幾何を稱す、その六朝の舊都たるを以て、此詩誠に詩人に作れば、意味索然たりと、の風懷を得たり。

【千秋人物三分國】 意味 清人の詩の句。出處 趙翼の赤壁の詩に、依然形勝扼荆襄、赤壁山前故壘長、烏鵲南飛無魏地、大江東去有周郎、千秋人物三分國、一片山河百戰場、今日經過已陳迹、月明漁父唱滄浪。

【千丈隄自蟻穴潰】 意味 細事を謹まざれば大害を生ずるに喩ふ。出處 韓非子喩老篇に、天下之難事、必作於易、天下之大事、必作於細、云云、千丈之隄、以螻蟻之穴潰、百尺之室、以烟隙之烟焚と。又た淮南子人間訓に、千里之隄、以螻蟻之穴潰、百尋之屋、以突隙之烟焚。〇呂覽に、亘勝容螻而漂邑殺人、突洩一燥而焚宮燒積。〇說苑に、江河大潰從蟻穴。〇應璩の雜詩に、細微可不慎、隄潰自蟻穴。

【千里行始於足下】 意味 千里の旅行も其始は足下の一歩より始まる、苟も自ら強めて息まざれば、遠しと雖、遂に達することを得るをいふ。出處 老子第六十四章に、合抱之木、生於毫末、九層之臺、起於累土、千里之行、始於足下。參考 白居易の綾座右銘に、千里始足下、高山起微塵、吾道亦如此、行之貴日新。

【千金裘非一狐皮】 意味 裘を爲くるには一狐の腋の能く成る所にあらず、國を爲むるも亦衆賢の力に資るに喩ふ、狐白裘は、狐の腋下の毛を以て之を爲る、其價千金なり。出處 史記劉敬叔孫通傳に、太史公曰、千金之裘非一狐之腋也、臺榭之橫、非一木之枝也、三代之際非一士之智也。參考 說苑建本篇に、腋を皮に作り、榭を廟に作り、三代之際を、先王之法に作る。參考 莊子に、千鎰之裘非一狐之白。

【千里蓴羹未下鹽豉】 意味 千里は、湖の名なり、千里湖に產する蓴菜(ジュンサイ)の羹に未だ味噌を加へざるも、其味尤も美なり、若し味噌を加ふれば其美味言ふ可らざるものあらんとの意。出處 世說言語中篇に、陸機詣王武子、武子前置數斛羊酪、指以示陸曰、卿江東何以敵此、陸云、有千里蓴羹、但未下鹽豉耳と。羊酪は、羊乳汁を以て之を作る、其の味淡にして滑なり、蓴菜未だ鹽豉を下さざるは、亦淡にして滑なり、故に佳對とす。參考 千里蓴羹の參考欄を見よ。

【千人所指無病而死】 意味 多數の人に指ゆびさゝるれば死するをいふ。出處 漢書王嘉傳に、諺を引て云云と。又た舊唐書柳亨傳に、孫澤の上書に、千人所指、無病自死。

【千緒萬端罔有遺漏】 意味 千緒萬端にして多事なるも、取遺すことなしといふ義。出處 晉書陶侃傳に、遷荊州刺史、侃性聰敏勤於吏職、關外多事、千緒萬端、罔有遺漏、遠近書疏、莫不手答、筆翰如流、未嘗壅滯。

【千雀萬鳩與鷂爲仇】 意味 弱なるものは、强者に敵する能はざるに喩ふ。出處 易林に、千雀萬鳩、與鷂爲仇、威勢不敵、雖衆無益。

【適千里者三月聚糧】 意味 遠地へ行く者は、それに障ふて多く糧を携へ行くをいふ。出處 莊子逍遙遊篇に、適百里者宿舂糧、適千里者三月聚糧。

【欲觀千歲則審今日】 意味 遠きを知るは近きを知るに在る喩へ。出處 荀子非相篇に、欲觀千歲、則審今日、欲知億萬、則審一二。

【富於千篇貧於一字】 意味 千篇の文を書く程の能力あるも、或る場合には、一個の穩當なる文字を求めても、得られぬことあるをいふ。出處 文心雕龍練字篇に見ゆ。

【千金不死百金不刑】 意味 遠きを知るを、千金を有する者には、死罪をも免し、百金を有する者には刑罰を免すをいふ。出處 尉繚子將理篇に、今世諺云、千金不死、百金不刑。

【垂千鈞重於鳥卵上】 意味 重大なる物を輕小の物に加ふれば、忽ち破滅するの意なり。出處 史記張儀傳に、張孟賁烏獲之士、以攻不服之弱國、無異垂千鈞之重於鳥卵上、必無幸矣。

【千丈城拔之尊俎閒】 意味 高き城にても、之を尊俎を竝べたる廟前にて拔き取るといふ。古は謀を廟前に於てせり、故にいふ。出處 戰國策に、千丈之城拔之尊俎之閒、百尺之衝折之衽席之上。

【千里馬常有伯樂不常有】 意味 拔羣の人才はあれども、之れを用ふる名宰相なき喩へ。出處 韓愈の雜說に、世有伯樂、然後有千里馬、千里馬常有、而伯樂不常有、故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、駢死於槽櫪之閒、不以千里稱也。

【千金之珠必在九重之淵】 意味 深淵に非れば名珠を出ださざるをいふ。出處 莊子列御寇篇の語。

【千人諾諾不如一士諤諤】 意味 是非の別なく君命に聽從する多數の諛臣よりは、君の非を諫正する一人の直士の勝れたるをいふ。出處 史記商君傳に、趙良曰、千羊之皮、不如一狐之腋、千人之諾諾、不如一士之諤諤。(千羊皮不如一狐腋の條を參看せよ。)

【千鈞之弩不爲鼷鼠發機】 意味 大志ある者は小事を眼中に置かざるに喩ふ。出處 三國魏志に、杜襲曰、千鈞之弩不爲鼷鼠發機、萬石之鐘不以尺挺起音、區區許攸何足勞神武、太祖曰、善。

【千羊之皮不如一狐之腋】 意味 羊の皮は價賤くして狐の腋の皮は價貴し、因て衆然は一賢に如かざるに喩ふ。出處 史記趙世家に、趙簡子有臣曰周舍、好直諫、周舍死、簡子每聽朝常不悅、大夫請調、簡子曰、大夫無罪、吾聞、千羊之皮、不如一狐腋、諸大夫朝、徒聞唯唯、不聞周舍之

鄂鄂は是以憂也と。又た同書商鞅傳に、趙良曰、千羊之皮、不如一狐之掖、千人之諾諾、不如一士之諤諤。

【千樹一葉之影卽是濃陰】 意義 其所小なるも、其の心の厚さを取るをいふ。 出處 陶英雄傳に、鄭太穆爲金州刺史、致書於于司空頔曰、分千樹一葉之影、卽是濃陰、減四海數滴之泉、便爲青澤。

【千里往來征馬疲十年離別故人稀】 意義 唐人の詩の句。 出處 許渾の題河君恩未報不言歸、舊精烏篠語書稀、新授龍貂識戰機、千里往來征馬疲、十年離別故人稀、生平志氣何人見、空上西樓望落暉。

川

【川】 意義 廣々としたる田野をいふ。 出處 夜航詩話に、平衍田野謂之川、杜預左傳注、平川廣澤可井者井之、原阜陂防不可井者町之、蓋井田溝洫之制、自途達於溝、自溝達於洫、自洫達於澮、自澮達於川、周體遂人、凡治野夫間有遂十夫有溝、百夫有洫、千夫有澮、萬夫有川、則一川之地、三十二里有半、所以稱平川也、册府元龜、唐明皇賜同州刺史姜師度詔書、今原田彌望、畎澮連屬、由來樣棘之所遍爲杭稻之川、謂平田大闊也、杜甫移居東屯、作平地一川穩、高山四面同、戴叔倫詩、一川紅樹迎霜老、數曲清溪繞寺寒、郭雲寒食、麗陵士女滿平川、郊外紛紛拜古冢、王安石梅殘半林雪、麥漲一川雲、蘇軾目盡孤鴻落照邊、遙知風雨不同川、楊萬里霜紅半臉金罌子、雪白一川蕎麥花、朱熹九曲詩、窮眼霧然、桑陌雨霽見平川、楊慎遊點蒼山記、滿川烈日、農人刈麥、皆謂平田廣衍之地也、玉堂閑話云、興元斗山觀、自平川聳起一山、四面懸絶、其上方於斗底、故號之、此猶言平野也、蜀中曰川、亦謂其入峽數百里、始得平野豁然廣衍、范成大詩、從此蜀川平似掌、更無高處望東吳、是也、謂取岷江、沱江、黑水、白水四大川以爲名者、蓋後世之說已。

【川衡】 意義 官名、川澤を掌る。 出處 周禮地官に、川衡掌巡川澤之禁令。

【川澤納汙】 意義 人に長たる者は、大いふ。 出處 左傳宣公十五年に、詵曰、川澤納汙、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、國君含垢、天之道也。

【川淵深而魚鼈歸之】 意義 河水深に多くの魚類が歸するとて、王者德あれば、人之に歸するに喩ふ。 出處 荀子致士篇に、川淵深而魚鼈歸之、山林茂而禽獸歸之、樹木盛則飛鳥歸之、庶草茂則禽獸歸之、人主賢則豪傑歸之。

【仙人】 意義 道士の方術を行ふものをいふ。 出處 澤名に、老而不死曰仙、遷入山也と。又た南史隱逸傳に、襲祈風委鎬雅、容止可觀、范述見之歎曰、此荆楚之仙人也。

【仙客】 意義 ㊀鶴の異名。㊁仙人をいふ。 出處 ㊀楊文公談苑に、鶴曰仙客。㊁唐の玄宗の詩に、仙客賊入閩。

【仙禽】 意義 鶴の異稱。 出處 白居易の詩に、仙禽狎君子、芳樹倚佳人。

【仙境】 意義 仙人の住む所、又た淸く幽なる地をいふ。 出處 宋之問の奉陪武駙馬宴、唐駙山亭序に、若閟茅軒夢入仙境之境。

【仙寰】 意義 仙人の住む區域をいふ。 出處 陳旅の題龍虎山圖詩に、龍虎之山仙所寰、我昔夢寐游其間。

【仙才】 意義 仙人の才といふことにて人の才の優れたるをいふ。 出處 漢武內傳に、西王母曰、劉徹好道、然形慢神穢、難當語之以至道、殆恐非仙才也と。又た詩話總龜に、宋景文評唐人詩云、太白仙才、長吉鬼才と。又た李白の詩に、稽首再拜之、自愧非仙才。

【仙査】 意義 槎のカダ(筏)をいふ。査は槎に同じ。 出處 博物志に、仙査槎牛斗一と。又た拾遺記に、堯時巨査浮西海上、十二年一周天、名貫月査。

【仙鼠】 意義 蝙蝠の異名。 出處 方言に、蝙蝠自關而東、或謂之仙鼠。

【仙陀】 意義 佛寺の稱。 出處 藝林伐山に、佛寺曰僧陀、又曰仁祠、又曰賓坊、又曰香阜、又曰奈園。

【仙桂】 意義 月桂なり、試驗に及第せしをいふ。(夕の部月桂樹を見よ) 出處 黃鞏の出京別同年詩に、卻說聯曾昇天路、一枝仙桂已攀援。

【仙洞】 意義 仙人の居所、又た宮殿の名。 出處 白居易の春題華陽觀詩に、帝子吹簫逐鳳凰、空留仙洞鎖華陽、落花何處堪惆悵、頭白宮人掃影堂。

【仙人掌】 意義 植物の名、サボテンなり。 出處 花鏡に、仙人掌非草非木、非果蔬、無枝無葉、又并無花、土中突出一片、與手掌無異、其膚色青綠、光潤可觀。

【仙風道骨】 意義 風采骨格の凡人に異なるを稱す。 出處 李白の大鵬賦の序に、余昔於江陵、見天台司馬子微、謂余有仙風道骨、可與神遊八極之表。

【仙姿玉質】 意義 姿質の美なるをいふ。 出處 古今詩話に、元載寵姬薛瑤英能詩書、善歌舞、仙姿玉質、肌香體輕、雖飛旋波、移光、飛燕、綠珠、不能過之。

【仙家九轉丹】 意義 仙人の鍊りたる藥をいふ。 出處 呂溫の題華陽觀李寬中秀才書院詩に、願君此地攻文字、如鍊仙家九轉丹と。又た抱朴子內篇に、金丹九轉之丹、封泥之於釜中、猛火先文後武、其一轉至九轉、運速各有日數。

【仙人鹿野苑】 意義 釋迦の說敎せし處。 出處 釋法顯佛國記に、今現有僧、復順恆水、西行十二由延、到迦尸國波羅捺城、城東北十里許得仙人鹿野苑。

仟

【仟伯】 意義 ㊀田間の道なり。㊁千百に同じ。 出處 ㊁漢書食貨志に、商君開仟伯と。顏注に、仟伯田間之道也、南北曰仟、東西曰伯、㊁漢書食貨志に、仟、農夫之苦、有仟伯之得と。顏注に、仟謂千錢、伯謂百錢、爲一伯、今俗猶謂百錢爲一伯。

占

【占色者】 意義 人相を觀る人をいふ。 出處 因話錄に、王蒙一日謂慈恩僧寺占色者忘其名、蒙問早晚得官、僧曰、觀君之色、殊未見喜兆、此後若干年當得一邊上御史、蒙大笑而歸。

【冉冉】 意義 移り易はることの速なるをいふ。 出處 離騷に、老冉冉其將至、恐修名之不立と。又た奧賀の書に、日月冉冉、歲不與我。

先

【先天】 意義 我が身の未だ生れぬ先きをいふ。 出處 ㊁易經文言に、先天而天弗違、後天而奉天時。

【先帝】 意義 前代の天子をいふ。 出處 諸葛亮の出師表に、臣亮言、先帝創業未半、而中道崩殂。

【先主】 意義 三國の蜀漢の君劉備をいふ。劉備の子を後主といふ。 出處 三國志に、先主傳あり。又た鍾會の檄蜀文に、益州先主以命世英才、興兵新野。

【先秦】 意義 秦の始皇帝の以前の時代、即ち戰國の際をいふ。 出處 漢書河間獻王傳に、獻王所得書、皆古文先秦舊書と。顏注に、先秦とは、猶ほ秦先といふがごとし、未だ書を焚かざる前を謂ふなり。

【先唱】 意義 猶ほ首唱といふがごとし、人に先だちて唱說するをいふ。 出處 抱朴子に、先唱者窮之路也、後動者達之原也。

【先例】 意義 先に例のあるをいふ。 出處 梁書袁昂傳に、事有先例。

【先古】 意義 先祖のことをいふ。 出處 禮記祭義篇に、以祀天地山川社稷、先古也と。注に、先古、謂先祖也。

【先代】 意義 亡父祖以上の人は皆先代といふ。 出處 左傳僖公二十四年に、宋先代之後也、於周爲客。

【先靈】 意義 先祖の靈魂をいふことなり。 出處 後漢書光武紀に、先靈無所依歸。

【先約】 意義 先に約することをいふ。 出處 北周書楊孝偉に、欲背先約。

【先手】 意義 人より先に手を着くることをいふなり。 出處 蘇軾の詩に、告謝師先手。

【先引】 意義 先に立ちて導くこと。 出處 漢書蕭望之傳に、少史冠法冠、爲妻先引。

【先塋】 意義 祖先の墓域をいふ。 出處 過庭錄に、吾恐愚民致疑、害爾先塋。

【先容】 意義 豫め其の人を紹介し置くこと。 出處 鄴陽の獄中上梁王書に、蟠木根抵、輪囷離奇、而爲萬乘器者、何則以左右先爲之容也と。又た蘇軾の上梅直講書に、非左右爲之先容、非親舊爲之請屬。

【先驅】 意義 前導といふに同じ。 出處 史記孟嘗傳に、鄒子如燕、昭王擁彗先驅。

【先祖】（センソ）　意義一家の元祖をいふ。出處詩經小雅四月篇に、先祖匪人、胡寧忍予。と。又た程子遺書に、立春祭先祖。と。注に、先祖、初祖以下高祖以上之祖也（止此業采曰、先祖、始祖而下、高祖以上、非一人也。

【先考】（センカウ）　意義亡父をいふ。出處次條を見よ。

【先妣】（センビ）　意義死したる母をいふ。出處周禮春官に、乃奏夷則歌小月舞大濩、以享先妣。と。爾雅に、父曰考、母曰妣。又た禮記曲禮下篇に、生曰父曰母、死曰考、曰妣。

【先人】（センジン）　意義亡父をいふ。出處聽雨紀談に、今人稱先子・先君・先人爲父、然不獨父也、如曾西稱曾子曰、吾先子之所畏也、則稱祖爲先子、子順曰、吾先君之相魯、則稱六世祖爲先君、孔安國曰、先君孔子、又曰、我先人用藏其家書于屋壁、則稱十一世祖爲先君、五世祖子襄爲先人也。

【先君】（センクン）　意義一既に歿せし父を稱していふ。二祖父以上をいふ。三他人の父を稱していふ。出處一范蠡の藪樂傳序に、先君北蕃回軫、頓駕于吳。二孔叢子に、子順曰、吾先君之相魯と。又た孔安國尚書序に、先君孔子、子順は孔子六世の孫、安國は孔子十一世の孫なり。三北史に、移紹襲元順曰、老身與卿先君亦連職事。

【先子】（センシ）　先人を見よ。

【先鋒】（センホウ）　意義軍の先き手なり。出處唐書薛仁貴傳に、帝遣問先鋒白衣者誰、召見嗟異。

【先住】（センヂウ）　意義前きの住持。出處梵網經に、先住僧獨受請。

【先聖】（センセイ）　意義古聖人をいふ。出處班固の幽通賦に、讀先聖之大猷、今、亦隣德而助信。

【先民】（センミン）　意義猶ほ前輩舊德といふがごとし。出處詩經大雅板篇に、先民有言、詢于芻蕘。

【先哲】（センテツ）　意義古先の賢者をいふ。出處書經召誥篇に、天既遐終大邦殷之命、茲殷多先哲王在天。

【先生】（センセイ）　意義一道術學藝を知りて人に之を教ゆる人の稱なり。二父兄の稱なり。三自ら別號に連ねて呼ぶもの。四官位の稱なり。出處一禮記曲禮上篇に、遭先生于道、趨而進、正立拱手と。又た孟子告子下篇に、先生將何之と。又た韓詩外傳に、古謂知道者曰先生、何也、猶言先醒也、不聞道術之人、則冥冥得失、眊眊乎其猶醉也、故世人有先生者、有後生者、有不生者と。又た曲禮の疏に、謂師爲先生者、言彼先已而生、其德多厚也。二論語爲政篇に、有酒食先生饌。三晉書皇甫謐傳に、謐有高尚之志、以著述爲務、自號玄晏先生と。此外、陶潛が五柳先生と號し、白居易が醉吟先生と號する類これなり。四禮記士冠禮篇に、鄉先生云云。道を知るものを先醒と呼ぶは又た賈誼新書に見えたり。又た漢の時、先の字のみにて先生の義となせり、漢書梅福傳に、叔孫先非不忠也。（注に先は猶ほ先生と言ふがごとし）又た龔舍傳に、公卿言鄭先（注に猶ほ鄭先生といふがごとし）と、これなり。又た生の字のみにて先生の義となせり。漢書貢禹傳に、天子曰、朕以生有伯夷之廉云云、故親近生（注に生は先生を謂ふ）とこれなり。諸生後生の生と混看する勿れ。

【先正】（センセイ）　意義道德才識ある人を死後に稱する辭なり。出處書經說命下篇に、昔先正保衡と、伊尹を指していふ。孔傳に、正、長也、先世長官之臣と。世說言語中篇に、夫人（謝夫人）道韞答曰、亡叔先正、以無用爲心、云云。朝野僉載に云、朱子、司馬公を先正と書れしを見て、今の學者先生といふより、猶尊む事なりと思ひ、我師を先正と書こそおかしけれ、先正は、有德の人死後に書く文字也、先生と同じからず。

【先輩】（センパイ）　意義一官位學問年齡等吾より優れて高き人をいふ。二前輩といふに同じ進士にいふ。出處一詩經小雅采薇篇の鄭箋に、今薇生矣、先輩可以行と。又た三國魏志陶謙傳の注に、郡守張磐同郡先輩與謙父友、而謙不爲之屈。二唐國史補に、進士爲時所尙久矣、互相推敬、謂之先輩と。又た宜室野乘に、司馬溫公勸學歌曰、一朝雲路果然登、姓名亞等呼先輩、詳味溫公之言、則登雲路者、方呼先輩、如今黃甲並呼狀元、一般、先輩猶言前

輩也、又靈客擇星、今人於榜下擇婿、號曰鬻婿、有一新先輩少年、爲貴家所前名明矣、若以女妻之、言新先輩則爲狀元之新字、其義始明。

【先達】（センダツ）　意義前條に同じ。出處庾亮の讓表に、十餘年間、位超先達と。又た世說に、先達知其不常と。又た晉書虞喜傳に、喜邑人賀循爲司空、先達貴顯と。又た韓愈の與于襄陽書に、先達之士、從遊之士の語あり。

【先進】（センシン）　意義先輩・先達に同じ。出處論語先進篇に、先進於禮樂、野人也。

【先覺】（センカク）　意義常人に先だちて道理を悟れる者。出處孟子萬章上篇に、予天民之先覺者也、予將以斯道覺斯民也。

【先見】（センケン）　意義事に先き立ちて知るをいふ。出處シの部舐（シ）犢を見よ。

【先登】（セントウ）　意義衆に先だちて敵の城に登るなり。出處左傳隱公十一年に、穎考叔取鄭伯之旗蓋弧、以先登。蓋弧は、旗の名なり。轉用柳宗元の送婁圖南秀才序に、或推讓爲先登と、これ文壇の首魁といふ意に用ゐしなり。

【先日】（センジツ）　意義先きの日をいふ。出處漢書鄭陽傳に、吾先日欲獻愚計。

【先緒】（センショ）　意義前事・前業といふが如し。出處晉書夏侯湛傳に、作昆弟誥曰、維我后府君侯、熙柔我家道、不墜我先緒と。又た晉書慕容超載記に、史臣曰、先緒僅類、摩莫振。轉用楚辭天問に、篡就前緒、遂成考功。○三國魏志蔣濟傳に、當恢崇前緒、光濟遺業。

【先府君】（センフクン）　意義亡父をいふ、又た單に府君ともいふ、もと牧守の官に在る人を稱する語なれど、後世は官位なき者も、其の神を尊びていふ。出處學山錄に、風俗通稱公卿牧守爲府、劉表稱南陽太守王暢曰府君、見魏志と。又た朱子語類に、無辭曰府君夫人、漢人碑已有、只是尊神之辭、府君如官府之君、或謂之明府、今人亦謂父爲家府。

【先哲王】（センテツワウ）　意義前世の賢明なる王なり。出處書經康誥篇に、求聞由古先哲王。

【着先鞭】（セン）　意義人に先立ちて着手するをいふ。出處晉書劉琨傳に、琨字越石、少負志氣、有縱橫之才、與范陽祖逖爲友、聞逖被用、與親故書曰、吾枕戈待旦、志梟逆虜、常恐祖先吾著鞭、其意氣相期如此。

【先憂後樂】　テの部先天（テン）下之憂而憂後天下之樂而樂を見よ。

【先入爲主】　意義先に耳に入りたる言を以て重しと爲すをいふ。出處漢書息夫躬傳に、親寵古烈、反覆參考、無以先入之語爲主。これ惡しき學、不止記誦、變其良知良能、當以先入之言爲主。これ善き語に就いていふなり。楊文公家訓に、童穉之語に就いて、先入之語爲主。これ惡しき語に就いていふなり。楊文公家訓に、童穉之言爲主。これ善き語に就いていふなり。

【靖獻先王】（セン）　意義先王の爲に忠を盡して、世を安じ謀を獻ずるをいふ。出處書經微子篇に、自靖、人自獻于先王。

【先王之遺言】　意義堯舜禹湯文武周公の遺言をいふ。出處荀子勸學篇に、不聞先王之遺言、不知學問之大也。

【尖尖】（センセン）　意義角立ちたる貌。出處韋孝標の小松詩に、還似天台新雨後、小峰雲外碧尖尖と。又た楊萬里の小池詩に、小荷纔露尖尖角。

【全盛】（ゼンセイ）　意義眞盛りをいふ。出處鮑昭の蕪城賦に、當昔全盛之時。

【全功】（ゼンコウ）　意義十分なるテガラ。出處列子天瑞篇に、天地無全功。

【全唐詩】（ゼンタウシ）　意義書名。出處九百卷、目錄十二卷あり、淸の康熙四十二年彭定求等勅を奉じて編す、作者二千二百餘人、詩數四萬八千九百餘首、先づ帝王后妃の作を錄し、次に樂章樂府を收め、次に諸臣の詩を錄し、次に釋句・逸句・名媛・僧道・外國・神仙・鬼怪・諧謔・及び諸雜體を收む、體例詳嚴にして校訂極めて周密なり。

【全唐文】（ゼンタウブン）　意義書名。出處一千卷あり、淸の嘉慶十九年董誥等勅を奉じて撰す、この書唐人の文集を彙輯し、并せて五代の文をも收む、體例は全唐詩と同じく、首に諸帝、次に后妃、次に宗室諸王、次に公主、次に百官、次に釋道、次に閨秀、次に宦官四裔の作を採錄せり。

【全唐詩錄】（ゼンタウシ）　意義書名。出處一百卷、淸の徐倬撰す、線字は方虎、頭村と號す、この書は御定全唐詩に就き

て其の粋を抜き、集めて一書とせしものなり、巻首に康熙帝の御製の序あり、次に總目録全唐詩人年表各一巻あり、先づ帝王后妃を列し、次に諸臣、次に方外神仙の詩を録し、近古二體に分録せり。

【得全全昌】（セン）　義解凡そ事を謀るに、十んなることを得、否れば則ち亡ぶるをいふ。出典史記田敬仲完世家に、騶忌子見、三月而受相印、諱于髡曰、得全全昌、失全全亡。

七

【芋芋】（センセン）　義解茂美の貌。出典列子力命篇に、齊景公遊於牛山、北臨其國城、曰、美哉國乎、鬱鬱芋芋。

【串子】（センシ）　義解受領證なり、串は（音セン）牌の省字。出典正字通に、串、穿絹切、番鈿、別作牌、文字指歸曰、串子、支取貨契曰牌、今官司倉庫收帖曰串子。

八

【呫嗶】（センヒツ）　義解經書の意義を喚らず、唯口頭にて吟誦するをいふ。出典證記學記篇に、今之教者、呻其佔畢、言今之師、自不曉經之義、但吟誦其所視簡之文。

【沾沾】（センセン）　義解輕薄なる貌、又た自ら整ふ貌。出典史記魏其武安傳に、竇太后數言魏其侯、孝景帝曰、太后豈以臣有愛不和魏其、魏其者、沾沾自喜耳、多易と。注に、徐廣曰、沾、昌兼反、又當諜反、張晏曰、沾沾者自整頓也、多易、多輕易之行也、師古曰、沾沾、輕薄也。又た書經蔡傳に、小人而謂之愆者、形容其沾沾便捷之狀也。

九

【莠夷】（セイイ）　義解刈りて平ぐるをいふ。出典左傳隱公六年に、見惡如農夫之務去草焉、芟夷薀崇之。

【戔戔】（センセン）　義解物の少なきをいふ。集韻に、六五、賁于丘園、束帛戔戔と。又た劉孟陽の碑銘に、有父子、然後有君臣、理財正辭、東帛戔戔。

【呻呻】（シンシン）　義解嘆む貌。出典荀子榮辱篇に、亦呻呻而嘆、鄉鄉而飽已矣と。又た東方朝別傳に、蹇之狀、喙呻呻似馬、色斑斑似虎。

【宣旨】（センシ）　義解天子の詔なり。出典春明退朝錄に、有延朝宣底二卷、其間有云宣頭口命宣旨者。

【宣下】（センカ）　義解詔を下すをいふ。出典後漢書明帝紀に、宣下郡國。

【宣頭】（セントウ）　出典夢溪筆談に、按唐故事中書舍人職掌、詰詔皆寫四本、一本爲宣、此宣謂行出耳、未以名書也、晚唐福密使自禁中受旨、出付中書、即謂之宣頭、中書承受錄之于籍、謂之宣底、今史館中尚有宣底二卷、如今之聖語簿也。

【宣政】（センセイ）　義解唐の宮殿の名にして、四夷の朝貢するときに拜謁する處なり。出典許愈の論佛骨表に、假如其身至今尚在、奉其國命來朝京師、陛下容而接之、不過宣政一見、禮賓一設、賜衣一襲、衛而出之於境、不令惑衆也と。通鑑胡注に、唐時、四夷入朝貢者皆引見於宣政殿、云云、唐有禮賓院、凡胡客入朝殿宴於此、元和九年、置禮賓院於長興里之北。

【宣告】（センコク）　義解事の次第を逐べ告るをいふ、宣はあまねくひろむる意。出典左傳襄公二十八年に、宣昔後人、無忝於德。

【宣言】（センゲン）　義解衆多の人に布き示すをいふ。出典左傳桓公二年に、先宣言曰、司馬則然。

【宣命】（センメイ）　義解天子の詔をいふ。出典管書何曾傳に、宣命遣使。

【宣爐】（センロ）　義解明の宣宗の宣德年間に鑄たる火鉢なり。出典行厨集に、宣爐明宣德年製者曰宣爐。

【宣撫】（センブ）　義解唐の官名、上意の在る所を宣說して、以て下民を撫恤するの義。出典事物紀原に、宋朝會要曰、咸平三年六月、詔遣參政向敏中、充河北東路邊宣撫大使、馮拯、陳堯叟、充副大使、存問官吏、自後隨事即置、事已乃省、蓋自此始也、宣撫、唐官、新書、德宗詔、薛復、充山南江湖等道宣撫安慰使、是也、見復傳。

【宣髮】（センパツ）　義解髮の黑白相雜れるをいふ。出典證耕錄に、易說卦、巽爲寡髮、陸德明曰、寡本作宣、黑白雜爲宣髮、據此則當用宣字、爲是。

【宣政使】（センセイシ）　義解內侍の官なり。出典文獻通考職官考に、凡內侍、其官稱則有內客省使、延福宮使、宣政使、宣慶使、昭宣使。

【宣和博古圖】（セン）　義解書名。出典宋の王黼等敕を奉じて撰する所にして、三十卷あり、此書に載する所の

古器は、眞贋雜糅して、辨證、疎漏多し、然れども音釋謬るも銘字尚ほ存し、論說誤るも器形猶ほ在り、故に考古者或は之に取る所あるなり。

【宣和書譜畫譜】（セン）　義解書名。出典宋の徽宗の朝に、內府藏する所の書畫譜諸帖を記述せしものにして、攬者考ふ可らず、凡そ二十卷あり。

洗

【洗】（セン）　義解器の名、水こぼしなり。出典儀禮士冠禮に、夙興設洗、直于東榮、と。鄭注に、洗、承盥洗者、奉水器也。

【洗如】（センジヨ）　義解さつぱりしたる觀。出典梅堯臣の詩に、靜坐人已眠、我慮久洗如。

【洗心】（センシン）　義解心の煩累を洗ひ去りて、復た一點の塵滓を留めざるをいふ。出典易經繫辭上傳に、聖人以此洗心、退藏於密。

【洗腆】（センテン）　義解饗儀を鄭重にする義、洗は書經酒誥篇に、厥父母慶、自洗腆致用酒。

【洗馬】（センメ）　義解太子の屬官にして、行列の前驅を掌る。又た先馬に作る。出典漢書百官公卿表に、太子屬官有洗馬一と。又た國語韋昭注に、句踐親爲夫差先馬と。又た諷會に、前漢太子太傅少傅屬官有先馬、後漢職如諂者、太子出則當直者前驅導、威儀也。

【洗兵】（センペイ）　義解兵器を收め戰爭を止むること。出典杜甫の洗兵馬行に、安得壯士挽天河、淨洗甲兵長不用。

【洗濯】（センダク）　義解洗ひ濯くをいふ、衣服に限らず汚穢を去ることなり。出典後漢書東坡集に、何時復見一洗濯乎。

【洗滌】（センヤク）　義解洗ひ清むること。出典後漢書に、復見洗滌。

【洗竹】（センチク）　義解竹をスカスなり。即ち竹の葉の繁茂せるを切り拂ふて疎にするをいふ。出典學山錄に、唐詩に有洗竹之言、按陸佃埤雅云、今人穿沐鑽竹、芟其繁亂、不使分、其勢、然後枝幹茂擢、俗謂之洗竹、第如洗華例、非用水也。

【洗塵酒】（センヂンシユ）　義解旅行して遲り來りしものに飲ませんとて作れる酒。出典蘇軾の和錢穆父送別、并求頓遲酒、詩に、佇聞東府開賓閤、便乞西湖洗寒塵。

【洗厨雨】（センチウウ）　義解蘇軾の次韻錢穆父馬上寄蔣穎叔、詩に、多賀黃封作洗泥、使君來自隴山西、○五車韻瑞に、東坡云、方言有洗泥酒。

【洗車雨】（センシヤウ）　義解二月十日に降る雨をいふ。出典田家五行雜占に、二月八日、俗謂祠山神、生辰有接客風、送客風、初十日雨謂之洗厨雨。

【洗馬】（センメ）　義解七月七日に降る雨をいふ。出典田家五行雜占に、七月七日雨名洗車雨。

泉

【洗兒錢】（センニ）　義解浴み料をいふ。出典通鑑綱目に、楊貴妃養安祿山、爲兒、祿山生日、上及貴妃、賜衣服寶器酒饌甚厚、後三日、召入禁中、貴妃以錦繃爲大襁褓、裹祿山、令宮人以綵輿舁之、上聞、後宮喧笑、問其故、左右以貴妃三日洗祿山兒、對、上自抵觀之、喜賜貴妃洗兒金銀錢、自是祿山出入宮掖不禁。

【泉】（セン）　義解古は錢を泉といふ、蓋し流通するゆへなり。出典周禮に、外府掌邦布之入出、と。鄭注に、布、泉也、其藏曰泉、其行曰布、取名於水泉、其流行無不徧、と。又た漢書食貨志に、貨幣於金、流於泉、布於布、東於帛、と。顏注に、如淳曰、流行如泉也。孟康曰、伊藤東涯曰、古用泉字、取其流行也、故周官有泉府、漢曰貨泉、錢乃田器、詩云、庀乃錢鎛、漢以來以其音同、易用錢字。

【泉水】（センスイ）　義解湧泉をいふ。出典詩經小雅四月篇に、相彼泉水、載清載濁。

【泉石膏肓】（セン）　義解深く山泉を愛して、其の癖習殆んど療し難きをいふ。出典世說言語下篇に、田游巖頻召不出、高宗幸嵩山、親至其門、遊岩野服出拜、儀止謹樸、帝問、先生比佳否、游巖對曰、臣所謂泉石膏肓、烟霞痼疾。

染

【染色】（センシヨク）　義解后紀に、此樹特宜染色。出典後漢書皇后紀に、此樹特宜染色。

【染戶】（センコ）　義解染物屋なり。出典北夢瑣言に、有染戶許琛、一旦暴卒。

【染家】（センカ）　義解前條に同じ。出典列仙傳に、賣與染家。

【染草】（ゼンサウ）　雅曙彼洛矣篇に、隊始有爽、以作六師と。毛傳に、茅蒐染草也。

【染溪】（ゼンケイ）　永州府零陵縣の西南にあり。これを愚溪と稱したるは柳宗元より始まる。柳宗元の愚溪詩序に、潯水之陽有溪焉、東流入於瀟水、或曰、冉氏嘗居也、故姓是溪曰冉溪、或曰、可以染也、名之以其能、故謂之染溪。

【前後】（ゼンゴ）　第二章に、前後相隨。柳宗元の雜詩に、詩書置後前。

【前緒】（ゼンショ）　先緒の類語を見よ。

【前星】（ゼンセイ）　皇太子に比す。漢書五行志に、星傳曰、心、大星、天王也、其前星太子、後星庶子也と。又た隋書音樂志に、梁初、皇太子出入奏允雅、灼灼重明、仰承元首、前星比耀、克隆萬壽。

【前哲】（ゼンテツ）　貌は先賢といふがごとし。左傳成公八年に、輒前哲以免也。

【前聖】（ゼンセイ）　古の聖人なり。楚辭七諫沈江に、改前聖之法度兮、寡聞而妄作。

【前修】（ゼンシウ）　古の德を修めし人なり。楚辭騷に、寥吾法夫前修兮、非世俗之所服。

【前程】（ゼンテイ）　樂善錄に、毎以前程所驕。

【前途】（ゼント）　將來に進行する途をいふ。夢溪筆談に、吳僧持一寶鑑來云、齋戒照之、當見前途吉凶。

【前驅】（ゼンク）　天子の行列の先頭に立つもの、サキノリ。周禮に、王出入則自馭而前驅。

【前世】（ゼンセイ）　前の世なり。明帝紀に、以前世行事爲戒。

【前代】（ゼンダイ）　前條に同じ。國語晉語に、佐制物於前代者。

【前殿】（ゼンデン）　宮中に在る前の御殿をいふ。史記秦始皇紀に、先作前殿阿房と。又た漢書外戚傳に、孝成趙皇后比宣帝父悼皇考、制度序昭穆於前殿。

【前軍】（ゼングン）　江夏王道宗傳に、大軍討高麗、道宗曰、我既職在前軍、當清道以待輿駕。

【前疑】（ゼンギ）　古、人君の左右前後に人あり、その前に在る者を疑と名く、因て前疑といふ。禮記文王世子篇に、虞夏商周有前保、有疑丞と。疏に、古者天子必在四隅、前曰疑、後曰丞、左曰輔、右曰弼。

【前卻】（ゼンキヤク）　吳子治兵篇に、前卻退走なり。

【前茅】（ゼンバウ）　前卻に、前卻有節。

茅は旌旗なり、前に敵あれば旌旗を揭げて之を後軍に報ず、今の斥候なり。左傳宣公十二年に、楚爲教爲宰、軍行、右轅左追、前茅慮無、中權、後勁。

【前元】（ゼンゲン）　明の代よりその前の元代を指していふ。寶顏錄凡例に、國朝名公輩出、不亟前元集中、自不可少。

【前妻】（ゼンサイ）　賈充前妻李氏坐徙、後妻郭氏、李以大赦得退詔、充當左右夫人。

【前生】（ゼンセイ）　生れざる前の世のことなり。別世といふに同じ、此世に

【前栽】（ゼンサイ）　徐照の詩に、遠父是前生。うゑこみをいふ。下學集に、前栽前水。

【前菜】（ゼンサイ）　冢の前の舊なり。墓書札記に、夢溪筆談、予見人爲文外屋翼也、謂之東菜西菜、四注屋、則謂之東霤西霤、未知前菜安在、考禮喪大記、升自東菜、降自西北菜、鄭注、菜、屋翼也、天子諸侯言東霤、孔疏、天子諸侯四注爲屋、而大夫以下、不得四注、但南北二注、而爲直頭、頭即屋翼也、賀瑒云、以其簷下於屋、故謂上下、在屋兩頭、似翼、故名屋翼也、又云、天子諸侯言東霤者、謂東西兩頭爲屋舊霤下、一揖、此則不特稱東菜西菜、亦可稱南菜北菜、矣、唐人詩、南菜正好背陽眠、南菜即前菜也、郭璞上林賦注、菜、屋霤舊也。

【前溲】（ゼンシウ）　小便をいふ。史記に、不得前後溲と。索隱に、溲、音所留反、前溲謂小便、後溲大便也。

【前跋後疐】（ゼンバツコウテツ）　マの部跋前（マヘ）疐後を見よ。

【前程萬里】（ゼンテイバンリ）　前途多望なるをいふ。南楚新聞に、魏公崔祖敦之子也、爲童兒時、隨父訪韓滉、指梁

上廣命跡之、遂命陵寮、略無佇思、況就曰、此兒可謂前程萬里也。

【前車覆後車戒】（ゼンシヤフクコウシヤカイ）　前車の傾覆を見て、後車は警戒して、亦覆へらんことを恐るをいふ、前人の失敗せしことを見て、後人が戒とするに喩ふ。漢書賈誼傳に、前車覆、後車誡、秦世所以亡者、其轍迹可見、然而不悔、是後車又將覆也と。又た說苑善說篇に、公叅不仁曰、周書曰、前車覆、後車戒、蓋言其危、と。又た荀子成相篇に、前車已覆、後車未知、更何覺時と。又た潘岳の西征賦に、道覆車而不寤と。李善注に、晏子春秋曰、前車覆、後車戒と。又た韓詩外傳に、前車覆、而後車不誡、是以後車覆也、故夏之所以亡者、而周爲之。張纘の讚鄱山碑に、六國平來四海家、相君當代授才華、誰知頌德山頭石、卻與他人戒後車。

【前度劉郎今又來】（ゼンドリウラウコンユライ）　ケの部玄都觀詩を見よ。

【前門拒虎後門進狼】（ゼンモンキヨコゴモンシンロウ）　ム脫れて又鵶に逢ふをいふ。史記趙世家の評史に、漢和帝論牧寶憲蔡强臣、一朝芟滅殆盡、可謂剛明雄斷、不拙孝昭之烈矣、惟可惜者、當時竇安任隗、居三公之位、帝不與之謀、乃與鄭衆議之、竇氏雙除、而寺人之權從、鼓盛矣、諺曰、前門拒虎、後門進狼、此之謂與。漢書三國吳志張堅傳の裴松之注に、江表傳曰、或謂袁術曰、堅若得洛、不可復制、此爲除狼而得虎也。

【前事不忘後事之師】（ゼンジフボウコウジノシ）　前日行ひし事を忘れざれば、後事を處するによき參考となるをいふ。史記史記始皇紀に、野諺曰、前事之不忘、後事之師也、是以君子爲國、觀之上古、驗之當世、參以人事、察盛衰之理、審權勢之宜。

【前頭更有蕭條物老菊衰蘭三兩叢】（ゼントウコウユウセウデウブツロウキクスイラン）　秋獨夜の詩に、無限少年非我供、可憐清夜與誰同、歡娛牢落中心少、親故凋零四面空、紅葉樹飄風起後、白髮人立月明中、前頭更有蕭條物、老菊衰蘭三兩叢。

【苒苒】（ゼンゼン）　易の詩に、有木香苒苒と。又た草盛貌。

【穿鍼樓】（センシンロウ）　齊の武帝の築ける樓の名。輿地志に、齊武帝起層地觀、七月七日、宮人多登之穿鍼樓、世謂之穿鍼樓。

【穿窬之盜】（センユノトウ）　穿は壁を穿ち、窬は墻を穿つなり、竊盜をいふ。禮記表記篇に、情疏而貌親、在小人則穿窬之盜也と。又た論語陽貨篇に、子曰、譬諸小人、其猶穿窬之盜也。孟子盡心下篇に、人能充無穿窬之心、而義不可勝用也。

【穿鑿之學】（センサクノガク）　穿鑿は穴の無き處へ、強ひて解釋を下して、往々道理を失ふに至るをいふ。蔡軾の文に、王荆公之學、穿鑿至此と。又た漢書禮樂志に、以意穿鑿各取一切。

【旗】（キ）　旗の一種、三孤の官の建つる所。說文に、旗、旗曲柄也、所以表士衆、周禮曰、通帛爲旗と。又た爾雅釋天に、因章曰旗と。注に、以帛練爲旗、因其文章、不復畫之。

【旗檀】（キダン）　檀と。綱目に、總謂之栴檀。

【旗蒙】（キモウ）　乙なり。シの部十（ウフ）干を見よ。

【旗檀從二葉香】（キダンジユウニヨウカウ）　小の頃より香氣あるをいふ。人の幼にして聰慧なるに喩ふ。禮記檀弓に、牛頭栴檀、生於闍毘山中、未及長大、在地下時、芽蘖枝葉如圓浮提竹筍、云云、伸秋滿月卒從地出成栴檀樹、衆皆聞牛頭栴檀上妙之香、永無伊蘭臭惡之氣。

【扇子】（センス）　アフギなり、子は助字。開元遺事に、有一皮扇子。

【扇墜】（センツイ）　扇のシヅなり。宋高宗有摺疊扇、以玉孩兒爲扇墜と。又た剪燈新話に、生贈水晶雙魚扇墜一雙之。

【扇動】（センドウ）　扇を以て風を起して物を動かすが如く、人をオダテルこと

なり。出處三國魏志樂習傳に、更相扇動、往往蔡峰。

閃

【閃閃】（センセン）　意義側きてひらめく貌なり。出處周禮大司樂の鄭注に、魚鮪不レ論と。疏に、論之言、閃也、言魚鮪不二閃閃一畏人也と。唐彥謙の詩に、寒鴉閃閃餘山去と。又た杜甫の望二兜率寺一詩に、閃閃浪花翻。

荐

【荐居】（センキョ）　意義處々に徙り住むをいふ。出處左傳襄公四年に、戎狄荐居と。杜注に、荐は草なり、古、狄人水草を逐ひて居徙し、常處なきなり。

訕

【訕謗】（センボウ）　意義人をソシルなり。出處北史に、坐二訕謗一繫レ獄。

淺

【淺淺】（センセン）　意義淺は濺に同じ、疾く流るる貌。出處楚辭九歌雲中に、石瀨兮淺淺。

【淺士】（センシ）　意義死者を棺に藏めて未だ葬らざるものをいふ。出處書言故事の注に、淺士、殯而未葬。

【淺笑】（センセウ）　意義うす笑ひなり。出處孫嶲の探レ梅詩に、美人淺笑凝二雲鬢一。

【淺斟】（センシン）　意義コサカモリ。出處陸游の詩に、又喚二隣翁一共淺斟。（銷（セウ）金帳を參看せよ）

【淺黃】（センクワウ）　意義黃色の淺きなり。出處左傳昭公十七年に、九扈爲二九農正一、扈民無二淫者一也と。杜注に、扈有二九穗一、冬扈、竊黃と。疏に、竊黃、淺黃也と。又た劉禹錫の秋詞に、山明水淨夜來霜、數樹深紅出二淺黃一。

【淺瀨】（センライ）　意義水のあさせなり。出處蘇軾の詩に、斷橋號二淺瀨一。

船

【船軍】（セングン）　意義海軍のこと。出處匡紀書に、闔閭見二子胥一問二船軍之備一。

【船戰】（センセン）　意義船イクサなり。出處漢書に、越欲レ與二漢用一船戰一、遂仍修二昆明池一。

【船場】（センヂャウ）　意義船を繫ぐ所なり。出處白獺磯に、長山門外船場。

【船長】（センチャウ）　意義船人のカシラ。出處謝宣遠の詩に、榜人理二行艫一と。李善注に、榜人、船長也。

【船人】（センジン）　意義ふなびと。出處呂氏春秋に、船人怒。

【船頭】（セントウ）　意義せんどう。出處唐書劉晏傳に、州縣取二富人一、督二漕輓一、謂二之船頭一。

【船道】（センダウ）　意義ふなみち。出處後漢書虞詡傳に、開二漕船道一。

【船路】（センロ）　意義前條に同じ。出處管書馮跋載記に、船路甚近。

【船中】（センチュウ）　意義船中の略。出處世說に、於二船中一視之。

【船埠頭】（センフトウ）　意義ふなば、又たハトバなり。出處明律に、凡城市鄉村諸色牙行、及船埠頭、並選有二主一市鎮買賣一人口充之。便讀に、官設二牙行一主一市鎮買賣一也、埠頭即寫船經紀主二船紅一客商買賣貨物一也。

專

【專一】（センイツ）　意義力を一途にすること。出處孫子軍爭篇に、既專一、則勇者不レ得二獨進一、怯者不レ得二獨退一。

【專制】（センセイ）　意義獨斷にて事を制定するをいふ。出處漢書文帝紀に、天以二呂太后之戮一、立二諸呂一爲二三王一、擅レ權專レ制。

【專門】（センモン）　意義經書を研究するに或る一種を限りてするをいふ。出處漢書儒林傳に、嚴彭祖、顏安樂、各專門教授、又た夏侯勝從父子建、受二顏門一、名經と、顏は專に通ず。出處後世は經書に限らず、或る學科を限りて、攻究するを專門といふ。

【專攻】（センコウ）　意義一科の學を修むるをいふ。出處韓愈の師說に、術業有二專攻一。

【專利】（センリ）　意義獨りにて利益を占むる意。出處國語周語に、榮公好二專利一。

【專房之寵】（セン）　意義女が獨り君の寵幸を專らにする義。出處晉書胡貴嬪傳に、胡貴嬪名芳、最受二愛幸一、殆有二專房之寵一焉。

【旋日】（センジツ）　意義南日に及ぶをいふ。出處漢書李尋傳に、不二旋日一而至。

旋

【旋乾轉坤】（セン）　意義天地を回轉するの義、天下を一洗するをいふ。出處韓愈の潮州謝上表に、陛下即位以來、躬聽斷、旋乾轉坤、天支所、嚮、莫不二寧順一。

琁

【琁室瑤臺】（セン）　意義みごとなる室と臺となり。出處淮南子本經訓に、晚世之時、帝有二琁室瑤臺象廊玉玦一。

剪

【剪刀】（センタウ）　意義鋏（ハサミ）なり。出處行書集に、剪刀曰二繡剪一、又曰二燕尾一、以形似故。

軟

【軟弱】（セン）　意義身體の柔弱なるをいふ、軟レ得二獨進一、怯者不レ得二獨退一。出處史記春申君傳に、李園、軟弱人也と。又た同書貨殖傳に、家親老、妻子軟弱。

【軟輪】（セン）　意義蒲を以て輪を裹みて柔軟ならしむるなり、蒲輪といふに同

じ。出處後漢書明帝紀に、安車軟輪。

【軟聲】（セン）　意義ヤサシキ聲なり。出處梁簡文帝の詩に、密態隨二流臉一、嬌軟逐二軟聲一。

【軟語】（セン）　意義前條に同じ。出處法苑珠林驕、知二其弊惡不可一、苦語、便更作二軟愛語一、稱二譽之一、驕聞歡喜。

【軟玉】（セン）　意義豆腐なり。出處蘇軾の豆腐の詩に、鎖中軟玉香。補註天祿識餘に、豆腐淮南王劉安造、又名二黎祁一。○清異錄に、時載爲二青陽丞一、日市二豆腐數箇一、邑人呼二豆腐一爲二小宰羊一。

【軟塵】（セン）　意義やはらかきチリ。出處許有壬の詩に、東華足二軟塵一。

【軟飽】（セン）　意義酒を飲むこと。出處四清詩話に、南人以レ飲レ酒爲二軟飽一、北人以レ棗爲二黑甜一と。蘇軾の詩に、三盃軟飽後、一枕黑甜餘。

【軟半】（セン）　意義半分足らずの意。出處白居易の詩に、家醞唯殘軟半瓶と。注に、猶二小半一。

【軟紅】（セン）　意義やはらかなるハナビラなり。出處蘇軾の詩に、軟紅猶戀二屬車塵一と。自注に、前輩戲語、西湖風月、不レ如二東華軟紅香土一。

【軟翠】（セン）　意義軟綠なり。出處吳錫麒の詩に、軟翠從レ風盪。

【軟障】（セン）　意義サヽヤカなる屏障。出處松隱雜記に、得二一飲障一。

【軟脚病】（セン）　意義脚氣病なり。出處韓愈の祭二十二郎文一に、汝去年書云、

訕

【訕謗】（センボウ）　意義洗塵酒に同じ、旅行より歸りし人に飲ましむる酒。出處書言故事に、送レ人行一、設二置酒一、謂二之訕謗一。

謗

【謗王】（センワウ）　意義懦弱の王なり。出處史記張耳傳に、吾王謗王也。

【謗顏】（センガン）　意義赧顏をいふ、謗は山額なり。出處司馬相如の大人賦に、放散畔牢以謗顏と。又た蘇軾の詩に、辯衣步謗額。

渲

【渲刷】（センサツ）　意義畫法なり、畫工の淡墨を再渲。出處郭熙の林泉高致に、擦以二水墨一、再三而洗之、謂二之渲。

踐

【踐】（セン）　意義文體の名。出處文體明辯に、按、劉勰云、踐者、表也、識二表其情一也、字亦作餞、古者君臣同書、至二東漢一始用レ踐、記二公府一、奏記二郡將一、奏踐、若二班固之說一、東平二黃香之奏一、江夏所謂郡將奏踐者也、是時太子諸王大臣皆得稱レ踐、後世專以二上皇后太子一、於是天子稱レ表、皇后太子稱レ踐、

蹠

【蹠奏】（センタウ）　意義天子に上る書面のこと、上虞傳に、文吏試二蹠奏一と。注に、周成雜字曰、蹠表也、漢雜事曰、凡、臣之書通二於天子一者、四品、一曰章、二曰奏、三曰表、四曰啟。

塹

【塹垣】（センエン）　意義崩の外垣內の空地なり。出處漢書申屠嘉傳に、崩塹垣。

覘

【覘人】（センジン）　意義しのびの者をいふ。出處文獻通考に、元豐初以、李覘人李覘毒一之故、妄占二瓶形禁地一。

筌

【筌蹄】（センテイ）　意義筌は竹にて作りたる魚を取る器なり。蹄は兎の脚を繫ぎて取る網なり、魚兎を取るには古人の書によらざるを得ず。因て筌蹄は、其の目的物を得る手段といふ義に用ふ。出處莊子外物篇に、筌者所二以在一魚、得二魚而忘一レ筌、蹄者所二以在一兎、得二兎而忘一レ蹄、言者所二以在一意、得二意而忘一レ言、吾安得二夫忘言之人一而與之言哉と。又た王守仁の文章軌範序に、徒以表其希二寵祿一之筌蹄。

跳

【跳行】（センカウ）　意義跳足にて歩行するなり。出處荀非子說林篇に、越人跳行。

單

【單于】（セン）　意義匈奴の王なり。出處史記匈奴傳に、皇帝敎問匈奴大單于無恙。補註漢書に、王莽、匈奴改め號して恭奴と曰ひ、單于を善于と曰へる由をいへり、然れども善于の號は、新莽の世のみに止りて、後漢の世には、蓋

によりて單子と稱せり。

【喘喘】（ゼンゼン）（訓）あえぐ貌。說文に、喘は疾息也とあり。（出）莊子大宗師篇に、俄而子來有病、喘喘然將死。

【然諾】（ゼンダク）（意）承諾の義、然は許なり。（出）史記張耳陳餘傳に、此固超國立名義、不侵、爲然諾者也。

【善行】（ゼンカウ）（意）よき行狀なり。（出）禮記曲禮上篇に、修身踐言、謂之善行、行修言道、謂之質也。

【善惡】（ゼンアク）（意）事物のヨシ、アシをいふ。（出）史記夏紀に、布政同善惡。（意）性質のよき人。（出）論語子路篇に、善人爲邦。

【善人】（ゼンジン）

【善心】（ゼンシン）（意）よき心。（出）國語魯語に、思則善心生。

【善隣】（ゼンリン）（意）隣國に親しみて道を盡すをいふ。（出）左傳隱公六年に、五父諫曰、親仁善隣、國之寶也。

【善柔】（ゼンジウ）（意）佞くる人に媚びて心の信ならざるをいふ。（出）論語季氏篇に、友便辟、友善柔、友便佞、損矣。

【善賈】（ゼンカ）（意）ヨキネダン。賈は價に同じ。（出）アの部待價（アタヒ）を見よ。

【善根】（ゼンコン）（解）（意）善心なり。（出）金剛經に、種諸善根。

【善逝】（ゼンセイ）（解）（意）佛の十號の一なり。（出）瑜伽論に、上昇最極、永不退還、故名善逝。

【善忘】（ゼンバウ）（意）善く忘るをいふ。（出）莊子達生篇に、氣下而不上、則使人善忘。

【善神】（ゼンシン）（出）人に福を與ふる神。（出）史記始皇紀に、善神可致。

【善禁】（ゼンキン）（意）不思議に人の病をナホスマジナヒ。（出）南史陳顯達傳に、大破、敵矢中左目、而繼戰、於宣陽津陽門、大破、敵矢中左目、而繼步。

【善敗】（ゼンハイ）（意）成敗なり。（出）左傳僖公二十年に、善敗由己、而由人乎哉。

【善善】（ゼンゼン）（意）多く善事を行ふをいふ。（出）漢書隽敞傳に、周積、鑠、紊善十餘世。

【彰善】（ゼンゼン）（意）善行を表彰するをいふ。（出）書經畢命篇に、旌別淑慝、表厥宅里、彰善癉惡、樹之風聲。又た、肥細衣篇に、子曰、有國家者、章善癉惡、以示民厚、則民情不貳、詩云、靖共爾位、好是正直。

【樂善】（ゼンラク）ラの部樂（ラク）善を見よ。

【善知識】（ゼンチシキ）（解）（意）高僧のことゝして用ふ。（出）摩訶般若經に、能說空、無相、無作、無生、無滅法、及一切種智、令人心入、歡寬信樂、是名善知識。

【無留善】（ムリウゼン）（意）善事は、直くに之を行ふて、少しも留滯せざるをいふ。（出）シの部留（シユク）間を見よ。

【爲善最樂】（ゼンゼン）（意）の最も樂むべきことなるをいふ。（出）後漢書東平憲王傳に、日者問王處、家何物最樂、王言爲善最樂。（解）鶴林玉露に、余家藏山谷八大字云、作德日休、爲善最樂、摘經史之語、混然天成、可貫座右。（解）程頤云ふ、書經孔氏傳に、民之行己、盡用道、是多樂也と、東平の語は、蓋之に本けり。

【善氣迎人】（ゼンキ）（意）天眞の物を愛する心を以て人に接するなり。（出）管子心術ト篇に、善氣迎人、親如弟兄、惡氣迎人、害於戈兵。

【善以爲寶】（ゼンイ）（意）金玉は寶に非ず、善人を以て眞の寶となすをいふ。（出）大學に、楚書曰、楚國無以爲寶、惟善以爲寶と、楚書は楚語なり。

【從善如登】（ゼンゼン）（意）善に從ふは甚だ難きをいふ。（出）周語に、諺曰、從善如登、從惡如崩。

【從善如流】（ゼンゼン）（意）善に從ふに躊躇せざるなり。（出）左傳昭公十三年に、從善如流、下善齊肅。

【盡善盡美】（ゼンビ）（意）完全無缺の讚なり。（出）論語八佾篇に、子謂韶、盡美矣、又盡善也、謂武、盡美矣、未盡善也と。韶は舜の樂、武は武王の樂なり。

【善善惡惡】（ゼンゼン）（意）㊀善行を善行とし、惡行を惡行とし、よく之を見分けること。㊁直筆にて歷史を書くこと。（出）㊀新序に、齊桓公出游於野、見亡國故城、郭氏之墟、問於野人曰、是爲何墟、野人曰、是爲郭氏之墟、桓公曰、郭氏者、曷爲墟、野人曰、郭氏者、善善而惡惡、桓公曰、善善而惡惡、人之善行也、其所以爲墟者何也、野人曰、善善而不能行、惡惡而不能去、是以爲墟也、桓公歸以語管仲、管仲曰、其人爲諫、桓公曰、不知也、

管仲曰、若亦一郭氏也、於是招野人而賞焉。㊂歐陽修の王彥章畫像記に、予於五代書、竊有善善惡惡之志。

【賞善罰惡】（ショウゼン）（意）善人を賞し惡人を傳序疏に、春秋者、賞善罰惡之書。（出）公羊虎通諫諍篇に、賞一善而衆臣勸、罰一惡而衆臣懼。

【陳善閉邪】（意）臣下の君に仕ふるに、我が善事を陳述して君の邪曲を閉鎖するをいふ。（出）孟子離婁上篇に、故曰、責難於君、謂之恭、陳善閉邪、謂之敬。

【善行無轍迹】（意）轍は、車輪のあと、迹は足あとなり、眞の善行は、人に目立つことなきに喩ふ。（出）老子第二十七章に、善行無轍迹、善言無瑕謫、善計不籌策。

【見善如不及】（意）務めて善事を行ふべきをいふ。（出）論語季子篇に、孔子曰、見善如不及、見不善如探湯、吾見其人矣、吾聞其語矣、隱居求其志、行義以達其道、吾聞其語矣、未見其人也。

【善言煖於布帛】（意）善言を人に與ふるは布帛を被らすよりも暖なるをいふ。（出）荀子榮辱篇に、與人善言、煖於布帛。

【善人能受盡言】（意）善人は能く人の諫言を聽くをいふ。（出）國語周語に、單襄公見國武子、其言蹙、襄公曰、立子淫亂之間而好盡言、以招人過、怨之本也、惟善人能受盡言と。又た韓愈の諍臣論に、國武子不能得善人、而好盡言於亂國、是以見殺、傳曰、惟善人能受盡言、謂其聞而改之也。

【善書不擇紙筆】（意）家は、紙と筆との好し惡しを擇ばざるをいふ。（出）後山談叢に、善書不擇紙筆、妙在心手と。又た唐書歐陽詢傳に、褚遂良非精筆佳墨、未嘗輒書、嘗問虞世南曰、吾書孰與詢、答曰、吾聞、詢不擇紙筆、皆得如志、君豈得比之。又た王肯堂筆麈に、能書不擇筆、浪語也、古來唯稱率更令不擇筆、然晉人遺墨至歐陽、漸失矣と。又た閻顯宗の論書に、人有云、善書者不擇筆、此亦未爲通論、或指寫行書草書者、言之也、若夫楷書篆書隸書、其筆各有所宜、不可不擇之也。

【善無細而不舉】（意）善事は瑣細と雖、行ふべきをいふ。（出）春秋繁露に、善無細而不舉、惡無細而不去。

【作善降之百祥】（意）人一善を作せば、天は之れに多福を賜ふをいふ。（出）書經伊訓篇に、惟上帝不常、作善降之百祥、作不善降之百殃。

【責善朋友之道也】（意）互いに善事を責め勸むるは友人の道なり。（出）孟子離婁下篇に、責善朋友之道也、父子責善、賊恩之大者。

【能善小斯能善大】（意）小善を能くすれば、終には大善を能くするに至るをいふ。（出）淮南子繆稱訓の語。

【勿以善小而不爲】（ゼンゼン）アの部勿以惡（アク）小而爲之を見よ。

【善不積不足以成名】（意）善事と雖、多く之れを積まざれば、以て我が名を成すに足らぬをいふ。（出）易經繫辭下傳に、善不積、不足以成名、惡不積、不足以滅身、小人以小善爲無益而不爲也、以小惡爲無傷而弗去也、故惡積而不可掩、罪大而不可解。

【善人在患弗救不祥】（意）善人の難に在るを救はざるは不吉の事なるをいふ。（出）國語晉語八に、善人在患弗救不祥、惡人在位弗去亦不祥。

【善惡之報若影隨形】（意）善と惡との報は影の形に隨ふがごとく速なるをいふ。（出）舊唐書張士衡傳に、善惡之報、若影隨形、此是儒書之言、豈徒佛經所說。

【爲善不同同歸于治】（意）善は一端に非ずと雖も、結局は平治に歸するなり。（出）書經蔡仲之命篇に、爲善不同、同歸于治、爲惡不同、同歸于亂。

【雖有善道不學不達其功】シの

部離、有旨酒嘉殽、不、嘗不、知、其旨、を見よ。

【與善人居如入芝蘭之室】シの部如、入、芝蘭之室、を見よ。

【爲善無近名爲惡無近刑】

意味 生を經んじ義に趨くも、名を要するに至らざる、生を貪り利を逐ふも、罪に陷るに至らざるをいふ。**出處** 莊子養生主篇に、吾生也有涯、而知也無涯、以有涯隨無涯、殆已、已而爲知者、殆而已、爲善無近名、爲惡無近刑、緣督以爲經、可以保身、可以全生、可以養親、可以盡年。

【行善不以爲名而名從之】**意味** 人の善事を行ふは、その名譽を欲する爲めに非ざれども、自然に名譽を得るをいふ。**出處** 楊朱の話なり、列子に見ゆ。

【善言不可離口善藥不可離手】**意味** 養生家は常に善言を口にし、又善藥を離すべからざるをいふ。**出處** 唐書孟詵傳に、居常語人曰、養性者善言不可離口、善藥不可離手、當時傳其言。

【善惡到頭終有報只爭來早與來遲】**意味** 善惡は畢竟報あり、只早き緩に、釜雪叢說、善惡若無報、乾坤必有私、此古語也、善惡到頭終有報、只爭來早與來遲、此古詩也、一是反說、一是正說、按、此亦元稹詩、通上二語、爲一首。

【善人者不善人之資】**意味** 善人は不善人の師なり、又た不善人は善人の資となるをいふ。**出處** 老子第二十七章の語なり。

【善人之師不善人者善】**意味** 師は肥肉なり、永は長なり、談論する所、甘美にして、意味深長なるをいふ。**出處** 漢書蒯通傳に、通論、戰國時說士蒯聵、亦自序、其說、凡八十一首、號曰、蒯永。

【善惡人】**意味** 世塵を厭ふて山中に住する人をいふ。**出處** 史記始皇紀に、僊人居之。

【善惡】小辯の貌。**出處** 莊子齊物論篇に、小言詹詹と、注に、詹詹、多言也、

三 舊

【舊官】官名、皇太子附の役なり。**出處** 事物紀原に、秦官掌、太子家、漢加、詹舊官、東宮官序、秦官、蓋始皇帝即位、爲、詹事、

【舊香】**意味** 香木の名。**出處** 南史、槃國傳に、中大通六年、遣使送、舊香木、

【舊永之論】**意味** 高は肥肉なり、永は長なり、談論する所、甘美にして、意味深長なるをいふ。**出處** 漢書蒯通傳に、通論、戰國時說士蒯聵、亦自序、其說、凡八十一首、號曰、蒯永。

【舊事】**意味** 世塵を厭ふて山中に住する人をいふ。**出處** 史記始皇紀に、僊人居之。

【舊詹】**意味** 小辯の貌。**出處** 莊子齊物論篇に、小言詹詹と、注に、詹詹、多言也、

【舊官】官名、皇太子附の役なり。**出處** 事物紀原に、秦官掌、太子家、漢加、詹舊官、東宮官序、秦官、蓋始皇帝即位、爲、詹事、

【舊事】**意味** 歷代因之、通典曰、東宮官序、秦漢加、詹舊事、也、漢官儀曰、秦官、蓋始皇帝即位、爲、太子詹事、孔穎賓帝時、爲、詹事、

【詹檀香】**意味** 傳に、中大通六年、遣使送、舊香木、提國舍利、及、詹塔國、并、舊提樹、秦、詹檀香、等。

【煎餅】**意味** 小麥の煎餅なり、其類なり。**出處** 唐書、南史、槃國傳に、中大通六年、遣使送、舊香木、注に、夏月加、冷淘粉粥、寒食加、鶴粥、正月七日、三月三日、加、煎餅、正月十五日、晦日加、餻糜、五月五日加、粽粽、七月七日加、新餅。

四 銓

【僉議】**意味** 衆議なり。**出處** 晉書、宰祐傳に、稽神僉議と、又た沈約の授蕭惠休右僕射詔に、內著、蕭鷹、外敷、美政、入副、朝論、僉議斯在。

【羨殺】**意味** りラヤムなり、殺は助字。晉サツ。**出處** 袁船山の詩に、羨殺南山豹、烟霞老翠微。

【銓衡】**意味** 銓衡は二字共に、ハカルなり、人物を銓量して官を授くるをいふ。**出處** 晉書、吳隱之傳に、汝若居銓衡、當舉、如此輩人。

【銓衡之職】**意味** 才をはかりて之を官にするなり、銓は分銅(フンドウ)、衡は秤(ハカリ)のサホなり。**出處** 晉書、吳隱之傳に、事、海陵謝、及執、喪、哀毀過、禮、韓康伯母謂、康伯、曰、汝若居、銓衡、當、舉、如、此輩人、及、康伯爲、吏部尙書、隱之遂階、清顯。

【銑銑】**意味** 手裏劍(シユリケン)なり。**出處** 南史、蕭摩訶傳に、西域胡鈔、於弓矢、弦無、虛發、彀弓未、發、摩訶遙、銑銑、正中、其類、座、手而仆。

【踐阼】**意味** 阼は主人の登る階なり。天子、祭祀には阼階に升る、因て天子の位に卽くをいふ。**出處** 禮記文王世子篇に、成王幼不、能、莅、阼、周公相、踐、阼而治、と、又た禮記、曲禮下篇に、踐、阼、臨、祭祀、

【漸漸】**意味** ①山石高峻の貌。②淚の流るゝ貌。**出處** ①詩經小雅、漸漸之

（九一五）　セン　漸　漸漸　漸臺　漸摩　漸摩　漸摩

髯

【髯閣】（センエン）　意義 唐の楊存中髯多くして遠迎に長じ、幾んど閹人に類せるを以て髯閣と呼ぶ。閹は宦官なり。閹人は髯なし。故に嘲りて有髯の閹とせしなり。　出處 癸辛雜識に、周益公日記云、楊存中人號爲髯閹。以其多髯而善逢迎也。王梅溪集載、劉共甫云、范伯達嘗曰、存中爲髯閹、謂形則髯、其所爲則閹也。

【髯參軍】（ゼンサングン）　意義 晉の桓超は髯多くして少卓榮不羈、有聲世之度。善談論義理精微、大司馬桓溫辟爲參軍、溫英氣高邁、罕有所推、與超言、常謂不能測、遂傾意禮待、超亦深自結納、時王珣爲溫主簿、亦爲溫所重、府中語曰、髯參軍、短主簿、能令公喜、能令公怒、桓髯、珣短、故也。

【髯主簿】（ゼンシュボ）　意義 羊一名、髯主簿。

選

【選兵】（センペイ）　意義 すぐりたる兵卒なり。　出處 史記信陵君傳に、得選兵八萬人。

【選擇】（センタク）　意義 えらび、そろへるをいふ。　出處 孟子滕文公上篇に、使巢戰問井地、孟子曰、子之君將行仁政、選擇而使子、子必勉之。

【選擢】（センタク）　意義 えらび、ぬくをいふ。　出處 後漢書に、古者選擢諸侯、以爲公卿。

【選舉】（センキョ）　意義 多くの中より、善き者を五ちび擧ぐるなり。　出處 淮南子に、選舉是以得賢士之心、謀慮是以知强弱之勢。

【選奠】（センセン）　意義 怯れて進まざる貌。奠は人名反（音セン）　出處 漢書西南夷傳に、戰者選奠。

【選佛場】（センブツジョウ）　意義 堂を開き戒を授るをいふ。　出處 傳燈錄に、丹霞將入應舉、道遇一輝客、曰、選官何如選佛、霞曰、選佛當往何所、客曰、江西馬大師出世、此選佛場也。

【戰戰】（センセン）　意義 恐懼する貌。　出處 書經仲虺之誥篇に、小大戰戰、罔不懼于非辜。（戰戰慄慄、及び戰戰兢兢を參看せよ）

【戰爭】（センソウ）　意義 原に、呂氏春秋曰、蚩尤作兵也、利其械、未有蚩尤時、民固創林木以戰、黃帝興、炎帝戰於版泉、是矣、爲戰爭起於炎黃之際也。

【戰鬪】（センタウ）　意義 前條に同じ。　出處 品字箋に、持戈相向爲戰、攘臂而前曰鬪。

【戰捷】（センセウ）　意義 獨志諸葛亮傳に、亮在南中、所在戰捷、聞孟獲者爲夷漢所服、募生致之。

【戰格】（センカク）　意義 車備に用ふるサカモギなり。　出處 通鑑唐紀に、羅城西南隅列木爲之、漢人謂之鹿格、今謂之拒馬。胡注に、戰格守者、焚戰格以應師錄。

【戰國】（センゴク）　意義 二十三年に、晉の家臣韓・魏・趙の三氏を封じて諸侯となせしより始る。漢書高帝紀の類注に、春秋之後、周室卑微、諸侯彊盛、交相攻伐、故總謂之戰國也と

いへり。　出處 史記藺相如傳に、凡天下戰國七、燕處最遠焉と。又た漢書高后紀贊に、孝惠高后之時、海內得離戰國之苦、君臣俱欲無爲。

【戰場】（センジョウ）　意義 戰爭の場所なり。　出處 三國魏志高貴鄉公紀に、沒命戰場。

【戰死】（センシ）　意義 戰爭して死するをいふ。　出處 史記秦紀に、勸戰死之賞劇。

【戰色】（センショク）　意義 戰はオノヽクと訓ず、震ひ懼れて顏色が變ずるなり。　出處 論語鄉黨篇に、勃如戰色。

【戰悚】（センショウ）　意義 震ひ懼るゝをいふ。　出處 晉書に、夙夜戰悚、以祭爲憂。

【戰國策】（センゴクサク）　意義 書名。　出處 此書は漢の劉向が編集せるものにして、落名、國策と曰ひ、或は國事、或は短長、或は事語と曰ふ。周の安王の世より、秦の始皇の世に至る、凡そ二百四十餘年間、戰國の游士が諸國の爲めに策謀を陳べたる文辭を國別に集めたるものにして、其凡て十有二、漢の高誘の注せるもの三十三卷、及び宋の鮑彪の注、元の吳師道の補正戰國策注十卷、共に今に傳はる、鮑本は己の意を以て前後の頗序を換へたる處多く、且つ恣に文字を改削せり、宋の姚宏は、高注を校正し、淸の黃丕烈この本を重校して、剡川姚氏本戰國策と名け、礼記三卷を著はして、頗る諸本の文字の異同を錄せり。

【戰戰慄慄】（センセンリツリツ）　意義 震ひ懼るゝなり。　出處 淮南子人間訓に、兢戒を載せて曰、戰戰慄慄、日慎一日、人莫讓於

山、讓於埵。　出處 黃帝の巾机銘に、予居民上、撫撫恐夕不至朝惕惕、恐朝不至夕、競競懼懼、日慎一日、人莫讓于山、而讓于埵。○太公兵法に、黃帝曰、兢兢業業、日慎一日。

【戰戰兢兢】（センセンキョウキョウ）　意義 恐懼、兢兢は戒謹なり。　出處 詩經小雅小旻篇に、戰戰兢兢、如履薄氷と。又た楚辭に、其誰不戰戰兢兢以事百神。

【戰亡將士】（センボウショウシ）　意義 戰場にて擊ち死にせしサムラヒなり。　出處 宋書に、爲戰亡將士舉哀。

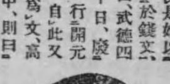
【戰陳無勇非孝也】（センチンムユウヒコウナリ）　意義 戰爭に奮鬪せざるときは、その名を損す、故に不孝となるなり。　出處 コの部五不孝の類語を見よ。

錢

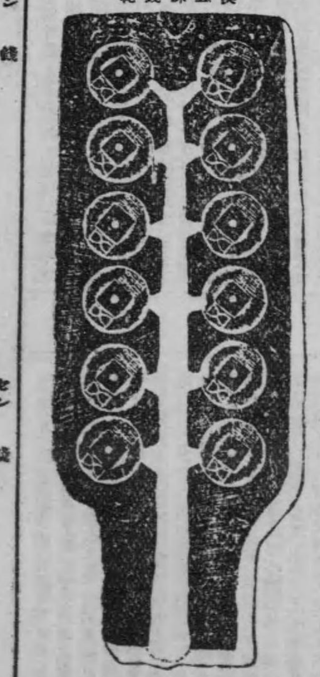
【錢文】（センブン）　意義 錢面の文なり。　出處 事物紀原に、錢貨之典、尙矣、周自太公立九府圜法、其文無見、景王鑄大錢、班固云、文曰寶貨、秦漢則半兩・五銖、王莽則貨泉・貨布、後魏孝文太和十九年、公鑄粗備、文曰太和五銖、又孝莊用楊福計、永安二年福更鑄、文曰永安

趙廉頗馬錢　表　裏

貨布

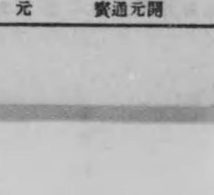

永安五銖

漢五銖錢範



五銖、自是始以年號鑄於錢文、唐會要曰、武德四年七月十日、廢五銖錢、行開元通寶錢、自此又以通寶爲文、高祖封中、則曰乾封泉寶、肅宗乾元時、則曰乾元重寶、五代會要曰、吾天福三年十一月、詔鑄錢、以天福元寶爲文、及偽蜀之制、有光天・咸康・通正・天漢・乾德之號、皆曰元寶、至於宋朝、每改元、又更鑄其號於錢文之矣、蓋錢文之以年、自後魏孝文太和始也、以食者自周景王大錢始也、以通者自唐高祖武德始也、以重者自肅宗乾元始也、以元者自晉高祖天福始也。

【錢範】（センパン）　意義 錢の鑄形。　出處 金索に、此眞錢范也、廣長如圓式、原圓徑約三寸長約八寸なり、蓋今秤二斤半、內列五銖十二陰文反字、有四道支流、可以入銅、鑄錢每穿孔內有細眼者、所以納矣丁、約之使南片不游移也、予得此字范於歷下、其摹范則失之矣。又云、范背正平無文、中間微陰、又凸起一點、有穿孔可以貫索。


開元通寶

【錢癖】（センベキ）　意義 錢を愛するクセなり。出處 晉書和嶠傳に、和嶠家至富、性吝、雖一錢不敢與人、時人曰之錢癖。参考 晉書杜預傳に、嶠有財癖。

【錢樹】（センジュ）　意義 ㊀金のなる木といふこと。㊁木の枝に錢を懸けたるによりていふ。出處 ㊀三國志に、邴原得遺錢、拾以繫樹枝、人效繫之者、遂謂之神樹。㊁樂府雜錄に、許和子者、本吉州永新縣樂家女也、開元末選入宮、即以永新名之、既美且慧、善歌、能變新聲、洎遭陽之亂、永新貧沒於風塵、及卒、謂其母曰、阿母錢樹子倒矣。

【錢神論】（センシンロン）　意義 晉の魯褒が時俗の錢を賞ぶを憂りて作りし文なり。出處 晉書隱逸傳に、魯褒字、元道、好學多聞、以貧素自立、元康之後、綱紀大壞、褒傷時之貪鄙、乃隱姓名、而著錢神論、以刺之、其略曰、云云、蓋疾時者、共傳其文、褒不仕、莫知其所終。事文類聚續集に、錢神論を載す、曰く有司空公子、富貴不齊、盛服而遊京邑、駐駕乎市里、顧見蒙毋先生、徙倚而徒行、公子曰、噫、子年已長矣、徒行空手、將何之乎、先生曰、欲之貴人、公子曰、學詩乎、曰學矣、學禮乎、曰學矣、學易乎、曰學矣、公子曰、詩不云乎、幣帛筐篚、以將其厚意、然後忠臣嘉賓、得盡其心、禮不云乎、男贄玉帛禽鳥、女贄榛栗、傳易云乎、隨時之義大矣哉、吾觀子所以親子所由、豈隨世哉、褒曰、已學吾必謂之未也、先生曰、吾將以清談爲筐篚、以機神爲幣帛、所謂禮云禮云、玉帛云乎哉者已、公子拊髀大笑曰、固哉子之云、既不知古、又不知今、當今之急、何用清談、時易世變、古今異俗、富者榮貴、貧者賤辱、而子尙貧而子守實、無異於遺者、何必然、唯孔方而已、夫錢窮者能使通達、富者能使溫暖、貧者能使勇悍、故曰君無財則士不來、君無貨則士不往、諺曰、官無中人、不如歸田、雖有中人、而無家兄、何異無足而欲行、無翼而欲翔、使才如顏子、容如子張、空手操轡、何所希望、不如早歸廣儲農畝、舟車上下、役使孔方、凡百君子、同塵和光、上交下接、名譽益彰、參考 晉書本傳には、其略曰として、全篇を錄せず、今その文字を校するに、頗る異同あり、而して其の文辭は、最も精采あるを覺ふ。出處 楊升菴外集に、晉惠帝之時、賄賂公行、魯褒所爲作錢神論也、余觀漢文、同時蒙毋民、成公綏、皆有錢神論各一篇、民之論、略曰、黃金爲父、白銀爲母、錢爲長男、錢爲少女、庾辛分士、諸國皆有、長沙越嶲、僕之所守、伊我初生、周末時也、景王口世、大口拔也、貪人見我、如病得醫、饑亨大牢、未足爲飽、綏之論、略曰、路中紛紛、行人悠悠、載讚載飄、惟錢是求、未衣素帶、當塗之士、就我之手、門常如市、諺曰、錢無耳、鬼可使、豈虛也哉、幽求子云、可以使鬼者、錢也、可以使人者、權也、蓋亦同時之語。

【錢愚論】（セングロン）　意義 梁の梁章王綜が臨川王宏を譏りて作りし文なり。出處 南史梁宗室臨川王宏傳に、宏性愛錢、百萬一聚、黃榜標之、千萬一庫、題一紫標、如此三十餘間、晉時有錢神論、豫章王綜以安貧吝、遂爲錢愚論、其文甚切、帝知、以不如天、窮達開塞、賑貧濟乏、天不如錢、若藏武仲之智、士莊子之勇、冉求之藝、文之以成人矣、今之成人者、何必然、唯孔方而已、夫錢窮者能使通達、富者能使溫暖、貧者能使勇悍、故曰君無財則士不來、君無貨則士不往、諺曰、官無中人、不如歸田、雖有中人、而無家兄、何異無足而欲行、無翼而欲翔、使才如顏子、容如子張、空手操轡、何所希望、不如早歸廣儲農畝、舟車上下、役使孔方、凡百君子、同塵和光、上交下接、名譽益彰、參考 晉書本傳には、其略曰として、全篇を錄せず、今その文字を校するに、頗る異同あり、而して其の文辭は、最も精采あるを覺ふ。出處 楊升菴外集に、晉惠帝之時、賄賂公行、魯褒所爲作錢神論也、余觀漢文、同時蒙毋民、成公綏、皆有錢神論各一篇、民之論、略曰、黃金爲父、白銀爲母、錢爲長男、錢爲少女、庾辛分士、諸國皆有、長沙越嶲、僕之所守、伊我初生、周末時也、景王口世、大口拔也、貪人見我、如病得醫、饑亨大牢、未足爲飽、綏之論、略曰、路中紛紛、行人悠悠、載讚載飄、惟錢是求、未衣素帶、當塗之士、就我之手、門常如市、諺曰、錢無耳、鬼可使、豈虛也哉、幽求子云、可以使鬼者、錢也、可以使人者、權也、蓋亦同時之語。

【錢愚論】（セングロン）　意義 梁の梁章王綜が臨川王宏を譏りて作りし文なり。出處 南史梁宗室臨川王宏傳に、宏性愛錢、百萬一聚、黃榜標之、千萬一庫、題一紫標、如此三十餘間、晉時有錢神論、豫章王綜以安貧吝、遂爲錢愚論、其文甚切、帝知、以

激宏、宣旨與綜、天下文章何限、那忽作此、雖令急毀、而流布已遠、宏深病之、案斂稍改。

【錢文用年號】（センブンヨウネンゴウ）　意義 錢面に年號を用ふる事。出處 古今原始に、南北朝魏鑄錢、曰太和五銖、後世以年號爲錢文、始此。

【錢文用寶字】（センブンヨウホウジ）　意義 錢面に元寶・通寶などゝ寶の字を用ふるをいふ。出處 古今原始に、唐初行開通元寶錢、後世錢文用寶字、始此、錢輕重大小、主爲得中、至今用之。

【錢文不用年號】（センブンフヨウネンゴウ）　意義 錢面の文字に寶の字を用ゐざるをいふ。出處 行營雜錄に、近世錢文、皆稱年號、惟開寶中所鑄、及寶光中所鑄、

曰宋通元寶、曰皇宋通寶、惟此二錢、不鑄年號者、以年號有寶字、不可重也。

【錢財不積則貪者憂】（センザイフセキスルトキハドンシャユウ）　意義 貪者は唯だ貨利をのみ好む、故に錢財の多く積まざるを以て憂と爲すなり。出處 莊子、徐鬼篇に、錢財不積、則貪者憂、權勢不尤、則夸者悲。

僭　諂　擅　儉　燃

【僭上】（センジョウ）　意義 身分を越へて長上を侵すこと。出處 漢書食貨志に、僭上亡限。

【僭擬】（センギ）　意義 前條に同じ。出處 唐書に、擅自尊大、忽僭擬之嫌。

【僭越】（センエツ）　意義 身分に過ぐるをいふ。出處 漢書賈誼傳に、諸侯王僭越、地過制、以貧素自立、元康之後、綱紀大壞、褒傷時之貪鄙、乃隱姓名、而著錢神論、以刺之、其略曰、云云、蓋疾時者、共傳其文、褒不仕、莫知其所終。事文類聚續集に、錢神論を載す、曰く有司空公子、富貴不齊、盛服而遊京邑、駐駕乎市里、顧見蒙毋先生、徙倚而徒行、公子曰、噫、子年已長矣、徒行空手、將何之乎、先生曰、欲之貴人、公子曰、學詩乎、曰學矣、學禮乎、曰學矣、學易乎、曰學矣、公子曰、詩不云乎、幣帛筐篚、以將其厚意、然後忠臣嘉賓、得盡其心、禮不云乎、男贄玉帛禽鳥、女贄榛栗、傳易云乎、隨時之義大矣哉、吾觀子所以親子所由、豈隨世哉、褒曰、已學吾必謂之未也、先生曰、吾將以清談爲筐篚、以機神爲幣帛、所謂禮云禮云、玉帛云乎哉者已、公子拊髀大笑曰、固哉子之云、既不知古、又不知今、當今之急、何用清談、時易世變、古今異俗、富者榮貴、貧者賤辱、而子尙貧而子守實、無異於遺者、何必然、唯孔方而已、夫錢窮者能使通達、富者能使溫暖、貧者能使勇悍、故曰君無財則士不來、君無貨則士不往、諺曰、官無中人、不如歸田、雖有中人、而無家兄、何異無足而欲行、無翼而欲翔、使才如顏子、容如子張、空手操轡、何所希望、不如早歸廣儲農畝、舟車上下、役使孔方、凡百君子、同塵和光、上交下接、名譽益彰、參考 晉書本傳には、其略曰として、全篇を錄せず、今その文字を校するに、頗る異同あり、而して其の文辭は、最も精采あるを覺ふ。出處 楊升菴外集に、晉惠帝之時、賄賂公行、魯褒所爲作錢神論也、余觀漢文、同時蒙毋民、成公綏、皆有錢神論各一篇、民之論、略曰、黃金爲父、白銀爲母、錢爲長男、錢爲少女、庾辛分士、諸國皆有、長沙越嶲、僕之所守、伊我初生、周末時也、景王口世、大口拔也、貪人見我、如病得醫、饑亨大牢、未足爲飽、綏之論、略曰、路中紛紛、行人悠悠、載讚載飄、惟錢是求、未衣素帶、當塗之士、就我之手、門常如市、諺曰、錢無耳、鬼可使、豈虛也哉、幽求子云、可以使人者、權也、蓋亦同時之語。

【錢愚論】（セングロン）　意義 梁の梁章王綜が臨川王宏を譏りて作りし文なり。出處 南史梁宗室臨川王宏傳に、宏性愛錢、百萬一聚、黃榜標之、千萬一庫、題一紫標、如此三十餘間、晉時有錢神論、豫章王綜以安貧吝、遂爲錢愚論、其文甚切、帝知、以

膳

【僭上】（センジョウ）　と。出處 漢書食貨志に、僭上亡限。

【僭擬】（センギ）　自尊大、忽僭擬之嫌。出處 唐書に、擅

【僭越】（センエツ）　意義 身分に過ぐるをいふ。出處 漢書賈誼傳に、諸侯王僭越、地過制、以貧素自立、元康之後、綱紀大壞、褒傷時之貪鄙、乃隱姓名、而著錢神論、以刺之、其略曰、云云、蓋疾時者、共傳其文、褒不仕、莫知其所終。事文類聚續集に、錢神論を載す、曰く有司空公子、富貴不齊、盛服而遊京邑、駐駕乎市里、顧見蒙毋先生、徙倚而徒行、公子曰、噫、子年已長矣、徒行空手、將何之乎、先生曰、欲之貴人、公子曰、學詩乎、曰學矣、學禮乎、曰學矣、學易乎、曰學矣、公子曰、詩不云乎、幣帛筐篚、以將其厚意、然後忠臣嘉賓、得盡其心、禮不云乎、男贄玉帛禽鳥、女贄榛栗、傳易云乎、隨時之義大矣哉、吾觀子所以親子所由、豈隨世哉、褒曰、已學吾必謂之未也、先生曰、吾將以清談爲筐篚、以機神爲幣帛、所謂禮云禮云、玉帛云乎哉者已、公子拊髀大笑曰、固哉子之云、既不知古、又不知今、當今之急、何用清談、時易世變、古今異俗、富者榮貴、貧者賤辱、而子尙貧而子守實、無異於遺者、何必然、唯孔方而已、夫錢窮者能使通達、富者能使溫暖、貧者能使勇悍、故曰君無財則士不來、君無貨則士不往、諺曰、官無中人、不如歸田、雖有中人、而無家兄、何異無足而欲行、無翼而欲翔、使才如顏子、容如子張、空手操轡、何所希望、不如早歸廣儲農畝、舟車上下、役使孔方、凡百君子、同塵和光、上交下接、名譽益彰、參考 晉書本傳には、其略曰として、全篇を錄せず、今その文字を校するに、頗る異同あり、而して其の文辭は、最も精采あるを覺ふ。出處 楊升菴外集に、晉惠帝之時、賄賂公行、魯褒所爲作錢神論也、余觀漢文、同時蒙毋民、成公綏、皆有錢神論各一篇、民之論、略曰、黃金爲父、白銀爲母、錢爲長男、錢爲少女、庾辛分士、諸國皆有、長沙越嶲、僕之所守、伊我初生、周末時也、景王口世、大口拔也、貪人見我、如病得醫、饑亨大牢、未足爲飽、綏之論、略曰、路中紛紛、行人悠悠、載讚載飄、惟錢是求、未衣素帶、當塗之士、就我之手、門常如市、諺曰、錢無耳、鬼可使、豈虛也哉、幽求子云、可以使人者、權也、蓋亦同時之語。

【錢愚論】（セングロン）　意義 梁の梁章王綜が臨川王宏を譏りて作りし文なり。出處 南史梁宗室臨川王宏傳に、宏性愛錢、百萬一聚、黃榜標之、千萬一庫、題一紫標、如此三十餘間、晉時有錢神論、豫章王綜以安貧吝、遂爲錢愚論、其文甚切、帝知、以

至牛溺穢、水深不可測、世云、其下多怪物、嶠遂燒犀角而照之、須臾見水族羅列、奇形異狀、或乘車馬、著赤衣者、其夜夢人謂己曰、與君幽明道別、何意相照也、意甚惡之、玉鎮、未句而卒。参考 晉書の文は、僭犀に作る、佩文韻府に云、按、燈或作然、蘇軾詩我欲燃犀看、龍應抱寶眠、燃用人の詐僞または欺事を摘抉するにも、燃犀の字を用ふることあり。

【燃眉之急】（ネンビノキュウ）　焦（セウ）眉之急の類語を見よ。

【膳夫】（ゼンフ）　天子の飲食を掌る官なり。膳は說文に、具食也とあり、徐鍇曰く言、具備此食也、庖人和味必加養、故从善と。出處 周禮天官序官に、膳夫食官之長也。

【膳宰】（ゼンサイ）　膳夫の長なり。出處 左傳昭公九年に、膳宰屠蒯趨入諫、佐公使、賞と。又た公羊傳宣公六年に、趙盾曰、是何也、曰膳宰也と。何休注に、膳宰主割殺膳者、若今大官宰人。

【損膳】（ソンゼン）　意義 天子の時に臨みて膳數を減ずるをいふ。出處 事物紀原に、事始云、後漢鍾離意諫明帝起北宮疏曰、陛下躬自克責、降避正殿、損常膳、錄記以爲二事之始、今檢意傳疏文、止言避正殿、而無損膳之語、又前漢文帝紀、已嘗徹服損膳、及賈山上疏文帝言治亂、名至言、有陛下即位自勉、以厚天下、損食膳、不聽樂、則事始所記謬矣、按周官、膳夫掌王食、宗王一舉、鼎十有二物、皆有�、齊、日三舉、大喪大荒大札、天地有戒、邦有大故、皆不舉、是則王不舉者、損常膳也、

潛

【潛鱗】 意義水中に深くひそめる魚。出處孫逖の詩に、還見躍潛鱗。

【潛夫論】 意義書名。出處漢の王符の撰にして、十卷あり、符字は節信、安定の人なり、後漢書王符傳に、和安の後、世人游宦を務め、當路者更に相薦引せしむ、然れども符は獨り耿介にして、俗に同ふせず、此を以て遂に升進することを得ず、志意鬱憤、乃ち隱居して書二十餘篇を著し、以て當時の得失を議し、其名を顯はすを欲せず、故に號して潛夫論と曰ふとあり、書中述ぶる所治體に明達し、敷陳する所得失に切中せる者多くして、迂儒の激矯して務めて高論を爲す者と其撰を異にせり。

【潛龍時】 意義龍は天子の象なり、天子龍といふ。出處易經乾卦に、初九、潛龍勿用、陽在下と。程傳に、聖人側微、若龍之潛隱と。又た淮南子に、潛龍勿用者、言時之不可以行也。

【潛邱劄記】 意義六卷あり、清の閻若璩撰す、この書は經籍を考證し、雜說・釋地・餘論・策・跋・序・學・哀辭・喪服・說・注・書賦等に分ちて劄記せしもの、潛邱は、作者の故鄉なり、劄は札なり。

【潛研堂文集】 意義書名。解說五十卷あり、又た外に詩集二十卷あり、清の錢大昕の著す所、大昕は考證の學に長ず、故に文集は史學・經學・小學等に於て大に資益する所あり、其の文は風格深厚にして、歸有光に似たり、詩は清醇にして法あり、但し宋調を脫する能はざるなり。

【發潛德幽光】 意義世の中に潛れた有德者の光采を發揮するをいふ。出處韓愈の荅崔立之書に、作者唐之一經、垂之於無窮、誅奸諛於既死、發潛德之幽光。

【鮮腴】 意義鮮は善、腴は厚なり、自ら善厚にする義、自ら豪大にするなり。出處蘇軾の留侯論に、倨傲鮮腴而深折之。

【鮮車怒馬】 意義立派なる車と、勢よきとをいふ。出處後漢書第五倫傳に、蜀地肥饒、人吏富實、掾史家貲多至千萬、皆鮮車怒馬、以財貨自達。

【氈車】 意義毛氈を以て屋を作れる車なり。出處許有壬の詩に、齋厨供玉食、氈車來出鮮車。

【氈裘之君】 意義氈裘は、匈奴人の服する所の獸毛の衣なり、故にその君を氈裘の君といふ。出處司馬遷の報任安書に、氈裘之君長咸震怖。

【禪】 讀ゼン 意義禪學といふべきを略していふ。出處傳燈錄に、禪有五、外道禪、凡夫禪、小乘禪、大乘禪、最上乘禪。

【禪位】 意義禪は讓なり、天子が位を皇太子に禪るをいふ。出處文獻通考經籍考に、文宗禪位于太子享。

【禪師】 讀ゼン 意義禪家高德の僧をいふ。出處善住意天子所問經に、天子問文殊曰、何等比丘得名禪師、文殊曰、於一切法一行思惟、所謂不生、若如是知、得名禪師。

【禪林】 讀ゼン 意義禪僧の多く集る所をいふ、又た其の仲間をいふ。出處禪林寶訓音義に、禪者靜慮也、林者叢林也、蓋謂山林之士、湖海之流、僕集招提、同業共命、結伴參學、修習淨業、以此言之、故曰禪林。

【禪門】 讀ゼン 意義禪家の宗門の義なり。出處梁高僧傳に、頓盡禪門。

【禪定】 讀ゼンヂヤウ 意義禪那の略にて靜慮と譯す、心を一所に留めて散亂せしめざるなり。出處法華經に、深修禪定、得五神通。又た无量壽經に、得深禪定諸通明慧。又た金剛經注に、能所不生是名禪定、禪定即是清淨心也。

【禪杖】 讀ゼンヂヤウ 意義禪僧の杖なり。出處劉基の春谷の詩に、過橋禪杖落、坐石袈裟祖。

蟬

【蟬聯】 意義蟬のつづきて斷えざるなり。出處晉書王羲之傳に、羲之時、王悅來拜、羲、藏子恭往省之、留十餘日方還、羲問其故、恭曰、與阿大語、蟬聯不得斷。

【蟬蛻】 意義蟬の皮を去るが如く、超然として世外に脫するなり。出處史記屈原傳に、濯淖汙泥之中、蟬蛻於濁穢。

擔

【擔擔】 意義衣裳の風に動く貌。出處司馬相如の長門賦に、曖風廻而赴醉兮、擊雉雞之翡翠、桂樹交而相紛兮、芳酷烈之閑閑。

【擔如】 意義衣裳の盛へる貌。出處論語鄉黨篇に、揖所與立、左右手、衣前後擔如也。

【擔袵】 意義單衣をいふ。出處漢書衛不疑傳に、一男子衣黃擔袵。

【擔依】 意義擔は尊び仰ぐなり、依は親み依るなり。出處詩經小雅小宛篇に、維桑與梓、必恭敬止、靡瞻匪父、靡依匪母。

瞻

【瞻望】 意義仰望なり、瞻も亦望むなり。出處詩經邶風燕燕篇に、瞻望弗及、泣涕如雨と。又た南史王茂傳に、茂性寬厚居處方正、在一室、衣冠儼然、雖僕妾、其儕容、終表壞壓、幾眉如畫、爲衆所瞻望。

【瞻視】 意義目附きなり。出處論語先進篇に、正其衣冠、尊其瞻視。

顓

【顓門】 意義專門に六經を修むるの意。出處漢書夏侯勝傳に、勝從父子建字長卿、自師事勝及歐陽高、左右采獲、又從五經諸儒問、與尚書相出入者、牽引以次章句、具文飾說、勝非之曰、建所謂章句小儒破碎大道、建亦非勝、爲學疏略、難以應敵、建卒、自顓門名經。

【顓門名經】 意義專門に六經を修むるの意。出處漢書夏侯勝傳に、勝從父子建字長卿、自師事勝及歐陽高、左右采獲、又從五經諸儒問、與尚書相出入者、牽引以次章句、具文飾說、勝非之曰、建所謂章句小儒破碎大道、建亦非勝、爲學疏略、難以應敵、建卒、自顓門名經。

二 孅

【孅阿】 意義人名、古の善く御するもの。出處司馬相如の子虛賦に、孅阿

謫

【謫材】 意義生れ附きの淺く劣ること、謫は讀に同じ、淺の意。出處史記李斯傳に、能薄而材謫。

【謫紳】 意義指紳に同じ、朝大夫をいふ。出處司馬相如の封禪書に、如雒一狗父老文、蹠紳先生之徒と。又た史記五帝紀に、蹠紳雒書之。

【謫福碑】 意義この碑は歐陽詢の書なり。出處盛洛揮犀に、范文正公守潤、有書生上訴、自言平生未嘗飲、天下寒餓無如某者、時盛稱歐陽率更字、蹠福寺碑最本直、千金文正欲爲打一本、使售于京師、紙墨已具、一夕雷擊其碑、時人語曰、有客打碑來、蹠福無人騎鶴上揚州、東坡作詩措大詩曰、一夕雷轟蹠福碑。

蟾

【蟾蜍】 意義月の中に住めるといふ蝦蟇なり、因て月の異名とす、出處淮南子精神訓に、日中有踆烏、而月中有蟾蜍と。高注に、踆猶蹲、謂三足烏、蹲蹲然之蹲。

【蟾兎】 意義月の異稱。出處古詩に、三五明月滿、四五蟾兎缺。

璠

【璠璣玉衡】 意義璠は美珠なり、璣は機なり、璠を以て璣を飾るなり、衡は橫なり、橫簫を謂ふ、玉を以て管と爲し、橫たへて之を設く、璣を窺ふて日月五星の運行を齊ふる所以なり。出處書經舜典篇に、在璿璣玉衡、以齊七政と。在は察なり、七政は、日月五星なり。

セン 鐵鬩鬪鬩鬩鬩

【纖巧】（センコウ）【意義】ちいさく、たくみなること をいふ。【出處】古樂府類編序に、其末纖巧而不振。

【纖嗇】（センシヨク）【意義】細くして吝嗇なること。【出處】史記貨殖傳に、其贏得過當金於纖嗇。

【纖介】（センカイ）【意義】介は芥と通ず、細き芥といふことにて、些少のことをいふ。【出處】戰國齊策に、無纖介之禍者、馮煖之計也と。又た後漢書袁扶傳に、褒秋毫之善、貶纖介之惡。

【纖離】（センリ）【意義】古の良馬の名。【出處】荀子に、斯の諜、逐客書に、服太阿之劍、乘纖離之馬。

【纖魄】（センハク）【意義】纖は細、魄は月なり、三日月をいふ。【出處】許飛雲の新月の詩に、遠望雲山暮靄浮、初生纖魄挂南樓。

【籤題】（センダイ）【意義】書籍の標題なり。【出處】讀書敏求記に、此書籤題猶是元人筆と。又た通雅に、隋唐藏書金題玉軸、押頭也、猶今書面籤題、唐言帶頭小鞭、以牙玉爲之。

【蟾蜍】（センジヨ）【意義】ナギ、蝦蟇はヰモムシなり、蟾は蛇に似たり、蟾は蝦に似たり、其の形は惡むべきも、利あるを以て人之を執るをいふ。【出處】釋非子說林下篇に、蟾似蛇、蟾似蝦、人見蛇則驚駭、見蝦則毛起、漁者持蟾、蟾人拾蟾、利之所在皆爲貴諸と。又た內篇說上七術得三に、蟾似蛇、蟾似蝦、人見蛇則驚駭、見蝦則毛起、然而蟾人拾蟾、漁者握蟾、利之所在、則忘其所惡、皆爲孟賁。【補說】淮南子說林訓に、今蟾之與蛇、蟾之類、蟾蟾欲類蛇、人見蛇蝦、莫不身戰然、女工修蟾、漁者持蟾、不惡、何也、欲得錢也。【出處】韓詩外傳に、莊子曰、前與母處、是以戰而北也、今母歿矣、請書責。

【塞責】（セメ）【意義】責任を果すなり。【出處】韓詩外傳に、莊子曰、前與母處、是以戰而北也、今母歿矣、請書責。

ソ

阼

【阼階】（ソカイ）【意義】堂に昇るに、東西兩階あり、主人は東階即ち阼階に就き、客は西階に就くなり、阼は、酢なり、主人が客を答酢する義に取る、說文に、阼、主階也とあり。【出處】儀禮士冠禮に、主之玄端爵弁、立于阼階下、直東序西面と。鄭注に、阼、猶酢也、東階、所以答酢賓客也、堂東西牆謂之序。

【踐阼】（セン）セの部踐（セン）阼を見よ。

姐

【姐】（ソ）【意義】姊なり。【出處】正字通に、姐、鼓野猫、北齊稱母爲姊、妻爲妹、至宋則呼嫡母爲大姊、孔子所謂名不正言不順也。

咀

【咀嚼】（ソシヤク）【意義】書を讀みて其味をカミコナシ能く腹に入るゝこと。【出處】荀馬相如の上林賦に、嚥咽醪漢、咀嚼菁華。

【咀華】（ソカ）【意義】花を食ふの義、書中の美味をあぢはふをいふ。【出處】韓愈の進學解に、含英咀華。

狙

【狙公】（ソコウ）【意義】狙は猿の類なり、狙公は猿を養ふ者を見よ。【出處】デの部朝（デウ）三暮四を見よ。

【狙擊】（ソゲキ）【意義】密に伺ひ擊つを謂ふ、狙は伺ふなり。【出處】史記留侯世家に、良與客狙擊秦皇帝。

狙

【狙杙】（ソクヒ）【意義】狙は猿なり、杙は猿を繫ぐクヒなり。【出處】莊子人間世篇に、拱把而上、求狙猴之杙者斬之と。又た王安石の芝園記に、山農野老、築維狙杙、以上至不測之高、下至澗溪壑谷。

【狙喜】（ソキ）【意義】兵略は詐術を尙ぶをいふ。【出處】戰國策に、兵固天下之狙喜也と。注に、狙、猿屬、而狡黠、言兵家如之而可喜。

【狙如】（ソジヨ）【意義】動物の名。【出處】山海經に、倚名曰狙如。

【狙暑】（ソシヨ）【意義】六月の異名。【出處】詩經小雅、又た孫逖の詩に、狙暑迎秋薄、涼風是日驅。

【狙落】（ソラク）狙落に同じ。

【狙徠集】（ソライシフ）【意義】宋の石介の撰にして、二十卷、附錄一卷あり、石介は深く五季以後の文格卑靡なるを惡む、故に集中其主持する所太だ過ぎ、抑揚其平を得ざるも、亦卓然として自ら一家を成せり。

【狙徠先生】（ソライ）【意義】宋の學者なり。【出處】宋史儒林傳に、石介字守道、耕於徂徠山下、以易教授於家、魯人號介徂徠先生。

【狙徠之松】（ソライ）【意義】徂徠山に生じたる松山名と。又た詩經魯頌閟宮篇に、徂徠之松、新甫之柏、是斷是度、是尋是尺。

卒

【卒都婆】（ソトバ）【解】【意義】墓標なり。【出處】涅槃經に、一見卒都婆、永離三惡道、何況造立者、決定生安樂。【補說】法苑珠林に、用諸七寶、造宰堵波。

【俎】（ソ）【意義】祭を行ふ時に用ふる器、俎は、脚四足而已、然則斷木而爲足、不致文飾、創始爲之故也、唐太宗曰、禹雕其俎、至夏乃用雕文、則俎自虞帝始也。【補說】俎は牲體を載する具にして、肉を殺るに用ふる具に非ず、我邦のマナイタは、机の字を用ふるを適當とす。史記に、項羽爲高俎、置太公其上、告漢王曰、不急下、吾烹太公と。又た詩經、項宮篇に、俎豆、不急下、吾烹太公といふも、太公を牲體に擬したるなり。日本外史平氏記に、賴朝措魚于俎、加刀焉、示之、以諷使自殺とあるは、山陽氏も

俎の字を誤り用ゐたるものなり。

【俎豆】（ソトウ）【意義】俎には、肉を載せ、豆には、菜を盛る、並に器の名。【出處】論語衛靈公篇に、俎豆之事則嘗聞之矣。【補說】莊子庚桑楚篇に、俎豆之事則嘗聞之矣と。又た賢人之間とあるは、菜肉を器中に盛る如く、我を賢人の中に加へんと欲すと云ふ意なり、用法尤も奇なり、莊子には往々此の如き活用あり。

【越俎代庖】（ソ）【意義】我分を踰へて他人の職權を犯すをいふ。【出處】莊子逍遙遊篇に、庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之矣と。庖人は、料理人なり、尸は、神像なり、尸祝は神を祀る人をいふ。【補說】他人の職權を侵すことを越俎の罪、又は越俎の責といふ。

【殂落】（ソラク）【意義】天子の崩ずるをいふ、殂は往くなり、人命盡き往くをいひ、落は草木の葉落つるが如きなり。【出處】書經舜典篇に、二十有八載、帝乃殂落。【補說】孟子萬章上篇に、此語を引いて、徂落に作る。

【素王】（ソワウ）【意義】素は空なり、位なくして王たる德ある者。【出處】孔子家語本姓解に、齊太史子餘、見孔子、退謂南宮敬叔曰、天將欲素王之乎と。又た杜預の左傳の序に、或曰、春秋之作、左傳及穀梁無明文、論者以爲仲尼自衞反魯、修春秋、立素王、兵明爲素臣と。又た陳餘叢考に、莊子天道篇、虛靜恬淡以之虛、下、亟稱素王之道也、史記伊尹見湯言素王、及九主之事、注云、素王者、太素之王、其道質素也、是尙未以專稱孔子、蓋古稱原

有此語、謂聖人之窮而在下者耳、家語、齊太史子與見孔子退謂南宮敬叔曰、天將欲與素王之乎、此孔子稱素王之始、王充論衡超奇篇云、孔子之春秋、素王之業也、諸子之傳書、素相之事也、諸子謂陽成子作樂經、揚子雲作太玄經也、又定賢篇云、孔子素王之業在春秋、桓君山素丞相之跡在新論、則又有素相素丞相之稱、杜預左傳序謂、孔子修春秋、立素王、左邱明爲素臣。

【素臣】 素孔子を素王といふにより て、左丘明を素臣と稱せしなり、素王の臣といふ義。出典前條を見よ。

【素封】 素は空なり、財に富める人は其の收入多くして、封土なければも封侯に等しきをいふ。出典史記貨殖傳に、今有無秩祿之奉、爵邑之入、而樂與之比者、命曰素封。

【素養】 素は常なり、平素德を養ひ畜ふるなり。出典漢書李尋傳に、馬不伏櫪、不可以趨遠道、士不素養、不可以重國。

【素餐】 シの部尸位素餐を見よ。

【素面】 素は質なり、面に粉黛を施さざるをいふ。出典韋應物の送宮人入道詩に、辭天素面立、天墀一上又楊太眞外傳に、虢國不施粧粉、自街美艷、常素面朝天と。虢國は、虢國夫人なり。

【素月】 素白くさえたる月なり。出典謝莊の月賦に、白露曖空、素月流天。

【素娥】 素月の異稱なり、月色は白し故に素といふ、娥は嫦娥、又た姮娥なり。出典虞書羅公遠傳に、明皇遊月宮、見素娥十餘人、皓衣乘白鸞、舞於桂下と。又た謝莊の月賦に、引元兎於帝臺、集素娥於后庭と、李周翰の注に、娥、羿妻嫦娥也、竊藥奔月、月色白、故云素娥焉。

【素雪】 素白雪に同じ。出典司馬相如の賦に、素雪飄零。

【素秋】 素秋は五色に配すれば白なり、故に素秋といふ。出典梁元帝纂要に、秋曰白藏、亦曰素秋と。又た劉琨の詩に、朱實隕勁風、繁英落素秋。

【素懷】 素平素心に懷ふをいふ。出典齊書蕭惠基傳に、豈吾素懷之本邪。

【素意】 素平素の意思をいふ。衡の思玄賦に、怨素意之不遂。

【素貧】 素貧揚雄傳に、素貧賤、而好大人之賦、もとよりの貧乏なり。出典漢書揚雄傳に、素貧賤、而好大人之賦、

【素問】 素書名。と曰ひ、黃帝の所傳なりと云ふ、唐の王冰注釋す、二十四卷あり、晁氏讀書志に王砅に作れるは、蓋し杜甫の詩に附會せんと欲して之を改めたるなり、冰、陰陽の說を採りて之を補へり、其の書に云ふ、上古に出でたるものなれば、未だ必しも眞ならず、然れども、亦、必ず周秦間の人、舊聞を傳述して、之を竹帛に著せるもの、故に三才を通貫し、萬變を包括せり、張李劉朱諸人と雖も、終身鑽仰して窺に其蘊奧を罄す能はずと。

【素書】 素書名。出典此書は、黃石圯の張商英の僞托に出でたり、商英は、新津の人にして、崇寧中に相となり、多く蔡京の弊改を革めたり、全部一卷にして、六篇に分てり、大要柔を以て剛を制するを以て其の道とせり。

【素皇內帝】 素天人美大の德を有せる君なり。出典黃帝冠を、此素皇內帝之法と。注に、帝者、天號、王者、人稱、皇者、天人之總、美大之名、謂之素皇內帝、則又其至也。

【素車白馬】 ㊀喪の時に用ふ。㊁史記秦始皇紀に、楚將沛公破秦軍入武關、遂至霸上、使人約、降子嬰、子嬰卽係頸以組、白馬素車、奉天子璽符、降軹道旁、十八史略に之を引て、素車白馬に作れり。㊂史記殷紀に、湯王齋戒、剪爪斷髮、素車白馬、身嬰白茅、以身爲犧牲、禱桑林之野。出典

【素氣清泚】 素氣秋の氣の清くすみたるをいふ。出典宋史夏侯嘉正傳に、秋之爲神、素氣清泚、蕭蕭肅肅、羣籟四起。

【素衣化緇】 素素白衣の黑衣に變化するをいふ。出典陸機の詩に、京洛多風塵、素衣化爲緇。

【素琴無絃葛巾漉酒】 素陶潛明は無絃琴を撫し、琴中の趣を愛し、又葛巾を以て酒を漉して、暑れば復た之を濯るといふ。出典

宋書陶潛傳に、潛不解音聲、而畜無絃琴一張、每酒適、輒撫弄以寄其意、貴賤造之者、有酒輒設、潛若先醉、便語客、我醉欲眠、卿可去、其眞率如此、郡將常候潛、值其釀熟、取頭上葛巾漉酒、漉畢還復著之。

【祖先】 素先祖に同じ。出典三國志毛玠傳に、今有無秩祿之奉、爵邑之入、而樂與之比者、命曰素封。

【祖宗】 素祖は始なり、宗は本なり、皆な先祖の義なり。出典漢書景帝紀に、古者祖有功而宗有德。

【祖師】 素始師なり。出典淨書外戚傳に、定陶丁姬、易祖師、丁將軍之孫。顏注に、祖は始なり、丁寬易の始師なり。附記後世は專ら一派の宗門を開きたる僧をいふ。

【祖述】 素遠くその道を宗として之を紹述するなり。出典中庸第三十一章に、仲尼祖述堯舜、憲章文武。

【祖龍】 素秦の始皇帝をいふ。出典カの部漢(カウ)池君を見よ。

【祖道】 素旅行するものを送る宴會なり、祖の字の解に就いて數說あり。祖は始なり、出立の始の義、卽ちカドデなり。一說に、祖は徂なり、ユクと訓じ、遠地に行くの義に取る。又た一說に、旅行者を送る祭の名なり、もと黃帝の子累祖といふ人、旅行中に死せし故、後世それを道路の神として祀り、その名の一字を取りて送別の祭りの名とす。出典儀禮聘禮記に、使者既受、行日、朝同位出祖、釋奠、載祭、酒

脯、乃飲、酒於其側と。鄭注に、祖、始也、詩傳曰、餞、道祭也、謂祭道路之神、卿大夫處者、於是餞之、飲酒於其側と。又た詩經都風泉水篇に、出宿于泲、飲餞于禰、毛傳に、祖而舍、餞、飲酒於其側、曰餞と。又た同書大雅烝民篇に、仲山甫出祖、四牡業業と。毛傳に、祖、行祭也と。又た同書大雅韓奕篇に、韓侯出祖、宿于屠、顯父餞之、清酒百壺と。又た漢書疏廣傳に、廣受乞骸骨、公、歸卿大夫故人邑子設祖道、供張東都門外と。廣受は、疏廣疏受なり。又た風俗通祀典に、禮傳共工氏之子曰修、好遠遊、舟車所至、足跡所達、靡不窮覽、故祀以爲祖神、祖者祖也と。又た漢書景十三王傳に、祖廟、祭、因饗飲也、昔黃帝之子累祖好遠遊、而死於道、故後人以爲行神也。

【祖載】 素葬に初めて柩を出だすをいふ。出典白虎通に、祖載者、始載、柩於庭、柔輴車、而辭、祖禰、故曰祖載と。禰は父の廟なり。

【祖生之鞭】 セの部著先(セン)鞭を見よ。

【租稅】 素年貢なり。出典杜甫の詩に、生常免租稅。

【租庸調】 素唐の時に年貢に三種の租といひ、人夫に役するを庸といひ、家業田、者、一歲輸粟二斛、謂之租、歲輸絹二疋、布加五之二、綿三兩麻三斤、或輸銀十德二年、初定租庸調法と。胡注に、唐制授出典通樂唐紀に、武

【疏】 素杜甫の詩に、疏廣疏受なり。出典

【疏屬】 素唐の時に、名稱あるなり、地より收るを役するを庸といひ、家業ふ。出典通樂唐紀に、武

【疏略】 素略するなり、精密ならざるなり。出典漢書夏侯勝傳に、爲疏略。

【疏遠】 素遠き血屬なり。出典史記田單傳に、田單者、齊諸田疏屬也。

【疏舉】 素一箇條を分ちて書きたつるをいふ。出典漢書賈誼傳に、藝錯以疏舉。

【疏通證明】 素筋道の通りて明らかなるをいふ。出典漢書儒林

四願、請之調、用人之力、歲廿日、閏加二日、不役日爲絹三尺、謂之庶、加役廿五日免調、卅日租調皆免と。又た唐書食貨志に、租庸調之法、以人丁爲本、又授田十畝、歲輸粟二斛、謂之租丁。

【食租衣稅】 素君上たる人は租稅をいふ。出典漢書食貨志に、蘇官當食、食租衣稅而已。

【祚胤】 素宰相なる子孫の永續するをいふ。出典詩經大雅既醉篇に、君子萬年、永錫祚胤。

【疏疏】 素衣服の簡んなる貌。出典韓詩外傳に、子路盛服見孔子、孔子曰、由、疏疏者、何也、子路趨出改服入。

【疏食】 素疏は、粗なり、粗糲の食をいふ。出典論語述而篇に、子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣と。又た同書鄉黨篇に、雖疏食菜羹瓜祭、必齊如也。

【疏遠】 素疏くして遠きをいふ。出典史記晉世家に、自以疏遠。

【疏略】 素粗にして略するなり、精密ならざるなり。出典漢書夏侯勝傳に、爲疏略。

傳に、喜好自稱譽、得ニ易家侯陰陽災變書、詐言師田生且死時、枕ニ京房ニ疏ニ通證ニ明之ニ曰、田生絕ニ於施讎手中ニ、時喜歸ニ東海ニ、安得ニ此事ニ。

【飯疏食、飲水曲肱而枕之、樂亦在其中矣】 義に協へば、如何なる最下の地位に在りと雖、亦其中に樂む所あるをいふ。 出典 論語述而篇に、飯ニ疏食ニ飲ニ水、曲ニ肱而枕之ニ、樂亦在ニ其中ニ矣、不義而富且貴、於ニ我如ニ浮雲ニ。

【疎慵】 ものぐさき人。 出典 白居易の詩に、世名檢束爲ニ朝士ニ、心性疎慵是野夫。

【疎籬】 マバラに編みたるスダレ。 出典 杜甫の詩に、清草疎籬看奕棊。

【疎影横斜水清淺】 宋の林逋の影が、或は横に或は斜に吨上に印し、その邊を流るゝ水は、清くして淺しとて、極めて閑雅幽邃の境を寫せしなり。 出典 アの部暨（アン）香浮動月黄昏を見よ。

【組織】 構立するをいふ。 出典 劉峻の廣絕交論に、組ニ織仁義ニ、琢ニ磨道德ニ。

【解組】 組は印綬なり、官に在るものを罷るなり。 出典 梁書謝朏傳に、解組昌運、實避ニ昏時ニ。

二　粗

【粗茶淡飯】 楊萬里の詩に、粗茶淡飯終ニ殘年ニ。

【訴訟】 漢書陳寵傳に、訴訟日百數。

【訴狀】 宋書竟陵王誕傳に、並如ニ訴狀ニ。

【訴牒】 弘簡錄に、湖田遇ニ水旱ニ、即有ニ訴牒ニ、按圖示之以鋼可否ニ。

三　措

【措大】 貧生なり。㊀稱揚の語とせるもの。㊁嘲罵の辭とせるもの。 出典 ㊁全唐詩話に、宣宗謂ニ侍臣ニ曰、崔鉉眞貴人、裴休眞措大。㊂雜纂に、猶似ニ措大饑寒則吟。㊃宋史杜衍傳に、衍食ニ於家、惟一麪一飯、曰某本一措大耳。 語源 措大の字面、古來明瞭なし、五雜俎に、今人以ニ秀才ニ爲ニ措大ニ、措、醋也、蓋取ニ寒酸之味ニ。賓暇錄に、世稱ニ士流ニ爲ニ醋大ニ、言ニ其嚙醋而冠ニ四人之首ニ、一說衣冠儼然、聚庶望之、有ニ不可犯之色ニ、犯必有ニ驗ニ、比ニ於醋ニ而更驗、故云、或云、往有ニ士人ニ、貧ニ居新鄭之郊ニ、以ニ鹽負醋、巡邑而賣、復落魄不調、邑人指ニ其醋缺ニ而譏之ニ、新鄭多衣冠所ニ居、因總被ニ此號ニ、亦云、鄭有ニ醋溝ニ、士流名家、其州溝之東、尤多、甲乙鉉之、故曰ニ醋大ニ、愚以爲四說皆非也、醋宜ニ作ニ措、止言ニ其能舉ニ措大事ニ而已といへり、その說の當否は遽に判し難し、後世は窮措大、老措大と用ゐて、美稱には殆んど用ゐざるが如し。（カの部眼孔小を見よ）

三　楚

【訴人】 訟へ出でし人をいふ。 出典 太平廣記張賈條に、案牘分明、訴人不ニ違ニ。

【楚楚】 ㊀鮮明（アザヤカ）なる貌。㊁茨棘（イバラ）の形容していふ。一說に盛密の貌。㊂苦痛の貌。 出典 ㊀詩經鄘風蝃蝀篇に、蝃蝀在ニ東、莫ニ之敢ニ指ニ、蝃蝀はカゲラフなり。㊁詩經小雅楚茨篇に、楚楚者ニ、言抽ニ其棘ニ。㊂後漢書王允傳に、楚楚苦痛と。又た元稹の聽ニ廋及之彈烏夜啼ニ引に、吳調哀絃聲楚楚。

【楚囚】 獄に繫がるゝものをいふ、もと楚國の囚人といふ意なりしを、後世は廣く囚人といふ意に用ふ。 出典 左傳成公九年に、晉侯觀ニ軍府ニ、見ニ鍾儀ニ、問ニ之ニ曰、南冠而絷者、誰、有司對曰、鄭人所獻楚囚也と。又た文天祥の正氣歌に、楚囚縶ニ其冠ニ、傳車送ニ窮北ニ。

【楚痛】 いたみ、いたむといふこと なり。 出典 史記文帝紀に、詔曰、夫刑至ニ斷支體ニ、刺ニ肌膚ニ、終身不ニ息、楚痛而不德也、豈稱ニ爲ニ民父母ニ之意ニ哉。

【楚辭】 此書は周の宋楚國の大夫屈原が作れる詞賦を集めたるものなり、漢の王逸楚辭章句十七卷を著す、初め劉向、屈原及び原の流を汲めり宋玉・景差の作れる諸篇を輯め、附するに漢の賈誼、淮南小山、東方朔、嚴忌、王褒の諸作及び向の自作の九歎を以てし、楚詞十六篇とせるものに、王逸又益すに自作の九思及び班固の二叙を以てし、之に注を加へ、勒して十七卷とせるなり。

語源 朱晦庵、楚詞集注八卷、辨證二卷、後語六卷を著せり。

【楚歌】 シの部四面楚歌を見よ。

【楚三族】 楚國の三王族をいふ。 出典 薛書拾唾に、楚三族、昭・屈・景、皆與ニ楚同姓ニ、而分者也、故曰ニ王族三姓ニ、屈原爲ニ三閭大夫ニ、單ニ此三姓ニ。

【楚三戶】 楚人は秦を怨みたり、故に三戶と號、猶ほ以て秦を亡すに足るといふこと。 出典 史記項羽紀に、楚南公曰、楚雖ニ三戶ニ、亡ニ秦必楚也。

【楚材晉用】 楚も晉も、春秋の世の國の名なり、楚國に生ずる材を取りて晉人が用ふるとて、他のものを取りて我が用となすをいふ。 出典 左傳襄公二十六年に、晉卿不ニ如ニ楚、其大夫則賢、按ニ卿材也、如ニ杞梓皮革ニ、自ニ楚往也、雖ニ楚有ニ材ニ、晉實用ニ之ニ。

【楚狂接輿】 楚の狂人接輿といふもの、歌ふて孔子の前を過ぎたり、是は眞の狂人に非ず、世を避くる人なり。 出典 論語微子篇に、楚狂接輿歌而過ニ孔子ニ、曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從ニ政者殆而ニ。又た莊子人間世篇に、孔子遭ニ楚狂接輿遊ニ其門ニ、曰、鳳兮鳳兮、何如德之衰也、來世不可待、往世不可追也、天下有ニ道聖人成焉、天下無ニ道聖人生焉、方今之時、僅免ニ刑焉ニ。

【楚之白珩】 珩は、佩上の玉飾なり。 出典 國語楚語に、王孫圉聘ニ於晉ニ、定公饗ニ之ニ、趙簡子鳴ニ玉以相、問ニ於王孫圉ニ曰、楚白珩猶在乎、對曰、然、簡子曰、其寶也幾何矣、曰、未嘗爲寶、楚之所寶者、曰ニ觀射父ニ、能作ニ訓辭ニ、以行ニ事於諸侯ニ、使ニ無ニ以寡君ニ爲ニ口實ニ、又有ニ左史倚相ニ、能道ニ訓典ニ、以叙ニ百物ニ、以朝夕獻ニ善敗於寡君ニ、使ニ寡君無ニ忘ニ先王之業ニ、中略若ニ夫白珩ニ、先王之玩也、可ニ寶焉ニ。

【楚幕有烏】 左傳莊公二十八年に、諸侯救ニ鄭ニ、楚師夜遁、鄭人將ニ奔ニ桐邱ニ、諜告曰、楚幕有ニ烏ニ、乃止。

【楚妃守符】 楚の昭王の夫人は漢臺の上に游び、江水大に至る、王は使者をして之を召し遣らしむ、使者其符を忘る、夫人の曰く、王と約す、宮人を召すには必ず符を以てすと、使者急に歸り符を取る、水至りて、夫人流れて死せりとぞ。 出典 劉向列女傳に、貞姜者、齊侯之女、楚昭王之夫人也、王出遊留ニ夫人ニ漢臺之上ニ、王聞ニ江水大至ニ、使ニ使者迎ニ夫人ニ、忘ニ持ニ其符ニ、夫人曰、王與ニ宮人ニ約、召ニ宮人ニ必以符、今使者不ニ持ニ符、妾不ニ敢從ニ、妾知留ニ死也ニ、然不ニ敢棄ニ約、違ニ義而求ニ生ニ、於是使者還取ニ符、水大至、夫人流而死、王乃號之曰ニ貞姜ニ。

【至楚北行】 楚は揚子江の南なり、今楚に行かんとして北へ向ふは方向を誤れるなり。 出典 戰國魏策に、魏王欲ニ攻ニ邯鄲ニ、季梁聞之、中道而反、衣焦不申、頭蹠不去、往見ニ王曰、今者臣來、見ニ人於ニ大行ニ、方北面而持ニ其駕ニ、告ニ臣曰ニ、我欲ニ之ニ楚ニ、臣曰、君之之楚、將奚爲ニ北面ニ、吾馬良、臣曰、馬雖ニ良、此非ニ楚之路ニ也、曰、吾用多、臣曰、用雖ニ多、此非ニ楚之路ニ也、曰、吾御者善、此數者愈善、而離ニ楚愈遠耳、今王動欲ニ成ニ霸王ニ、舉欲ニ信ニ於天下ニ、恃ニ王國之大ニ、兵之精銳ニ、而攻ニ邯鄲ニ、以廣ニ地尊ニ名ニ、王之動愈數、而離ニ王愈遠耳、猶至ニ楚而北行ニ也。 語源 ェの部北、轅（エン）適ニ楚ニを見よ。

【楚之狂者楚言】 楚の國の狂人は、やはり楚言す、國の言はいつまでも變ぜざるなり。 出典 韓詩外傳に、楚之狂者楚言、齊之狂者齊言。

【楚思森茫雲水冷】 唐人の詩の句。 出典 白居易の詩に、江邊黃鶴古時樓、勞置華筵待我遊、楚思森茫雲水冷、商聲清脆管絃秋、白花浪濺頭陀寺、紅葉林籠鸚鵡洲、總是平生未行處、鄂渚堪醒楚客。

【楚王失弓楚人得之】 度量の小なるをいふ。 出典 孔子家語好生篇に、楚恭王出遊、亡ニ烏嘿之弓ニ、左右請求之、王曰、止、楚王失ニ弓ニ、楚人得之、又何求之、孔子聞之曰、惜乎其不ニ大也、不ニ曰ニ人遺ニ弓人得之ニ而已、何必楚也。

【楚王好細腰朝有餓人】 楚が腰の細き美人を好みければ、宮女は皆食を減じて痩せんことを欲して餓死するに至りしをいふ。 出典 荀子君道篇に、楚王好細

腰、故朝有餘人。【附記】晏子春秋には故を其に作る。○後漢書馬廖傳に、傳曰、吳王好劍客、百姓多瘡瘢、楚王好小腰、而美人省食。これは小腰に作れり。○靈王と書したるは韓非子に、楚靈王好細腰、而國中多餓人。○淮南子主術訓に、靈王好細腰、而民有殺身食自餓。○戰國策に、昔者先君靈王好小腰、楚士約己食馮而能立、式而能起。○莊王と書したるは尹文子に、齊桓好衣紫、闔境不爲異采、楚莊愛細腰、一國皆有飢色。○襄王と書したるは劉禹錫の蹈歌行に、爲是襄王故宮地、至今猶自細腰多。【附記】楚王は即ち靈王なり、莊と襄とは皆誤れり。

【楚起章華之臺而黎民散】 【意義】楚王が土木を興し、其國疲弊して、人民が散亂せしをいふ。【出處】漢書に、楚起章華之臺而黎民散、秦興阿房之殿而天下亂。【參考】左傳昭公六年に、楚子成章華之臺。

【塑像】 【意義】土にて造りたる人形をいふ。【出處】邢邵代魏禪に、道家塑像亦如此。

【蘋蘋】 【意義】蘋は蔬菜なり、蘋に漬けたるなり、蘋は乾肉なり、麴と鹽とに漬けたるなり。【出處】淮南子に、蘋鬼侯之女、蘋梅伯之醢。

【菲枕圖史】 【意義】圖書を稀きものにし、枕にすとて、書物に耽るをいふ。【出處】唐書李揆傳に、揆病取士、不考實、徒鄙搜索、禁所挾、而迂學陋生、菲枕圖史、且不能自措於詞、乃大陳書廷中、遍諸儕、約曰、上選、士第務得才、可虛所欲言、由是人人稱美。

【練裳竹筒】 【意義】女を嫁するに、衣裳等ていふ、練音疎ソ、紡ツムギ、きたる粗き絲なり。【出處】書言故事に、漢遼民藏良有五女、練裳布被、竹筒木履而遣之と。又た蘇軾の詩に、竹筒與練裙、願時畢婚嫁。

【練裙】 【意義】水流に逆ふて上るなり。【出處】詩經秦風蒹葭篇に、遡洄從之、宛在水中央。

【遡洄】 【意義】水流に順て下るなり。【出處】詩經秦風蒹葭篇に、遡游從之、宛在水中央。

【遡游】 【意義】水流に逆ふて上るなり。【出處】詩經秦風蒹葭篇に、遡洄從之、道阻且長。

【鼠】

【鼠輩】 【意義】人を罵る辭なり。【出處】魏志華陀傳に、太祖累書呼、又勅郡縣發遣、陀不上道、于是傳付許獄、荀彧請曰、陀術實工、宜合宥之、太祖曰、不憂天下當無此鼠輩耶。

【鼠竄】 【意義】鼠の恐懼迫窘して穴に隱るゝなり。【出處】書劇遇傳に、常山王泰、頭鼠竄以歸漢王。

【鼠鬚筆】 【意義】鼠の口ヒゲにて作りしなり、王羲之がこの筆を用ひたりといふ。【出處】筆經に、世傳、張芝・鍾繇用鼠鬚筆、筆鋒勁强有餘芒、余未之信、鼠鬚用、未必能佳、蓋雖得之。又た太平廣記書二に、王羲之傳、敢硯之頃、揮毫奏序、奚樂而書、用鼠鬚筆、濟洲勁健、絕代更無と。又た韻語陽秋に、近世作筆、專用兎毛、而王羲之・鍾繇・張芝、皆用鼠鬚筆。

【鼠肝蟲臂】 【意義】極めて微細なる者なり、因て我が身は鼠のキモ、蟲のヒヂともなり、すべて天地造化の自然に任かすといふことに用ふ。【出處】莊子大宗師篇に、以汝爲鼠肝乎、以汝爲蟲臂乎と。又た謝枋得の卻聘書に、爲輪爲彈、與化往來、蟲臂鼠肝、隨天付予。

【鼠竊狗偷】 【意義】鼠や狗が竊に物をぬすむが如く、人に隱れて物を取るをいふ。【出處】史記叔孫通傳に、此特群盜鼠竊狗偷耳、何足置齒牙閒哉。

【蔬食】 【意義】野菜の食物をいふ。【出處】論語述而篇に、子曰、飯疏食飲水と。釋文に、疏、本或作蔬、謂菜食也。

【蔬笥之氣】 【意義】象といふことにて、俗に坊主臭きなどいふ意なり。【出處】石林詩話に、近世僧學詩者、極多、皆無超然自得之氣、往往反拾授摸、做士大夫所殘棄、又自作一種體、格律尤見俗、世謂之酸餡氣、子瞻贈惠道詩云、語帶蝦蟹從古少、氣含蔬笥到公無、嘗語人曰、蝦解蔬笥語否、爲無酸餡氣也、聞者無不皆笑と。又た西溪詩話に、東坡言僧詩要無蔬笥氣、固詩人麤鑑、今時懶解、便作世網中語、殊不知

本分家風水邊林下氣象、蓋不可無、若盡洗去清拔之韻、使與俗同科、又何足尚。

【駔儈】 【意義】仲買人なり。【出處】呂氏春秋に、段干木、晉國之大駔也。

【礎潤而雨】 【意義】礎が濕へば雨降るといふ。【出處】蘇洵の辨姦論に、月暈而風、礎潤而雨、人人知之。

【蘇張】 【意義】戰國の世の策士、蘇秦と張儀となり。【出處】班固の答賓戲に、感東方朔揚雄、自喻以不遭蘇張・范蔡之時、貧不折之以正道、明君子之所守、故聊復應焉。

【蘇小】 【意義】古の歌妓の名なり。【出處】卓氏藻林に、蘇小、齊時錢塘名妓也。

【蘇摸稜】 【意義】肋の蘇、味道のこと。【出處】西湖に於いて蘇東坡の築きし堤をいふ。【出處】升菴外集に、東坡先生在杭州、云云、湖南北三十里、環湖往來、終日不遇、若取・戴由・穎之便矣、堤成、杭人名之曰蘇公堤。

【蘇公堤】

【蘇長公】 【意義】蘇東坡をいふ。【出處】南般長公、而實則行(排行なり)二也、公字和仲、序次顯然、黃涪翁題李氏園詩云、題詩未有驚人句、會喚鐫仙蘇二來、歐陽公蘇平、見文丹淵集。

【蘇武節】 【意義】前漢の蘇武が匈奴へ使するときに持ざし節なり、節は、朝廷より使者を外國へ派遣するときに携へ行かしなるもの。【出處】漢書蘇武傳に、武帝遣蘇武持節以使匈奴、武與副張勝等俱至匈奴、武奉使不屈、節旄盡落、云云、武曰、自剌、云云、國聞、武既大驚中、絕不飲食、雪、武臥齧雪與旃毛、并咽之、數日不死、乃徙武海上無人處、使牧羝羊、謂羝不乳、當得歸、而食之、杖漢節而牧羊、臥起操持、節旄盡落、云云、武曰、武帝崩、武留匈奴十九歲、始以强壯出、而武還漢、已至、詔諸陵、及遣須髮盡白矣と。又た文天祥の正氣歌に、在津蘇武節。

【蘇迷盧】 スの部蘇(ス)迷盧を見よ。

【蘇李之詩】 【意義】蘇武と李陵の二人は、漢の臣にして匈奴に在り、其後、蘇武は漢に歸り、李陵は匈奴に留りしが、その時に贈答せし詩なり。【出處】文選に、李陵の與蘇武詩三首に、良時不再至、離別在須臾、屏營衢路側、執手野踟躕、仰視浮雲驰、奄忽互相踰、風波一朝失、各在天一隅、長當從此別、且復立斯須、欲因長風發、送子以餞軀、其一、嘉會難再遇、三載爲千秋、臨河濯長纓、念子悵悠悠、遠望悲風至、對酒不能酬、行人懷往路、何以慰我愁、獨有盈觴酒、與子結綢繆、其三、攜手上河梁、遊子暮何之、徘徊蹊路側、恆恆不得歸、行人難久留、各言長相思、安知非日月、孤望自有時、努力崇明德、皓首以爲期、其三と。蘇武の詩四首に、骨肉緣枝葉、結交亦相因、四海皆兄弟、誰爲行路人、況我遊枝樹、與子同一身、昔爲鶯與燕、今爲參與辰、昔者常相近、邈若胡與秦、惟念當離別、恩情日以新、鹿鳴思野草、可以喻嘉賓、我有一樽酒、欲以贈遠人、願子留斟酌、叙此平生親、其一、黃鵠一遠別、千里顧徘徊、胡馬失其羣、思心常依依、何況雙飛龍、羽翼摧當乖、幸有絃歌曲、可以寫中懷、詩爲遊子吟、泠泠一何悲、絲竹厲清聲、慷慨有餘哀、長歌正激烈、中心怡以揮、欲展清商曲、念子不能歸、俛仰內傷心、淚下不可揮、願爲雙黃鵠、遂飛千俱遠飛、其二、結髮爲夫妻、恩愛兩不疑、歡娛在今夕、燕婉及良時、征夫懷遠路、起視夜何其、參辰皆已沒、去去從此辭、行役在戰場、相見不有期、握手一長歎、淚爲生別滋、努力愛餐花、莫忘歡樂時、生當復來歸、死當長相思、其三、燭燭晨明月、馥馥我蘭芳、芳馨良夜發、隨風聞我堂、征夫懷遠路、遊子戀故鄉、寒冬十二月、晨起發嚴霜、俯觀江漢流、仰視浮雲翔、良友遠離別、各在天一方、山海隔中州、相去整且長、嘉會難兩遇、歡樂殊未央、願君崇令德、隨時愛景光、其四、【附記】三餘側華に、唐徐堅初學記、引蘇李贈答詩、與文選所載、多有同異、如蘇詩黃鵠一遠別、胡馬失其羣、作胡馬去其羣、李詩、風波一失所、作風波一參路、三載繆其三、攜手上河梁、遊子暮何之、徘徊蹊路側、恆恆不得歸、行人難久留、各言長相思、安知非日月、孤望自有時、努力崇明德、皓首以爲期、其三と。蘇武の詩四首に、骨肉緣枝葉、結交亦相因、四海皆兄弟、誰爲行路人、況我遊枝樹、與子同一身、昔爲鶯與燕、今爲參與辰、昔者常相近、邈若胡與秦、惟念當離別、恩情日以新、鹿鳴思野草、可以喻嘉賓、我有一樽酒、欲以贈遠人、願子留斟酌、叙此平生親、其一、黃鵠一遠別、千里顧徘徊、胡馬失其羣、思心常依依、何況雙飛龍、羽翼摧當乖、幸有絃歌曲、可以寫中懷、詩爲遊子吟、泠泠一何悲、絲竹厲清聲、慷慨有餘哀、長歌正激烈、中心怡以揮、欲展清商曲、念子不能歸、俛仰內傷心、淚下不可揮、願爲雙黃鵠、遂飛千俱遠飛、其二、結髮爲夫妻、恩愛兩不疑、歡娛在今夕、燕婉及良時、征夫懷遠路、起視夜何其、參辰皆已沒、去去從此辭、行役在戰場、相見不有期、握手一長歎、淚爲生別滋、努力愛餐花、莫忘歡樂時、生當復來歸、死當長相思、其三、燭燭晨明月、馥馥我蘭芳、芳馨良夜發、隨風聞我堂、征夫懷遠路、遊子戀故鄉、寒冬十二月、晨起發嚴霜、俯觀江漢流、仰視浮雲翔、良友遠離別、各在天一方、山海隔中州、相去整且長、嘉會難兩遇、歡樂殊未央、願君崇令德、隨時愛景光、其四、【附記】三餘側華に、唐徐堅初學記、引蘇李贈答詩、與文選所載、多有同異、如蘇詩黃鵠一遠別、胡馬失其羣、作胡馬去其羣、李詩、風波一失所、作風波一參路、三載

雪千秋、作二戟爲千秋、念子悵然然、作念、別愛阻飯、徘徊蹊路側、作徘徊蹊蹊路、又昔爲鴛與鴦、今爲參與辰、昔者長相近、邈若胡與秦、蘇別李詩也、而以爲李贈蘇詩、又別二鳧俱北飛、一鳧獨南翔、子當留斯館、我當歸故鄉、以爲別李詩、則又文選所載也。【蘇】蘇武の詩、玉臺新詠卷一には、其の第三章を載せ、留別妻二首と題せり、沈德潛の古詩源に云、首章別兄弟、次章別妻、三四章別友、非皆別李陵也、錢蒐陵俱解作別陵、未必然といへり。

【蘇程之戚】 【義】蘇軾その外戚の從弟程德と兄弟の如く親しかりしなるべし。【出】蘇軾の賀表弟程德孺生日詩に、仗下千官散紫延、時閒小酌說蘇程、長身自昔傳明舅、壽骨遙知是弟兄。

【蘇之鄧尉】 【義】鄧尉山は江蘇省蘇州縣の西南七十里に在り、鄧尉山、山峯四立、林木蔥蒨、前一石、屹立太湖中、若奮斧然。

【蘇子美集】 【義】書名。【解】宋の蘇舜欽字は子美の撰にして、歐陽修之を覓輯し、十卷となして序文を附せり、其目は雜文、記・序・書・啓・上書・疏狀・誌銘・行狀・祭文・表・古詩・律詩なり、其歌行は雄放にして、其人と爲りの如しといふ。

【蘇武別妻】 【義】漢の蘇武が匈奴に在りて妻を娶りしが、漢と匈奴と和するに及び、武は漢に歸れり、其の時妻は匈奴に留まりたるにより此の詩を作れり。【解】蘇李之詩を見よ。

【蘇門四學士】 【義】蘇東坡の門下の四學士なり。【出】十駕齋養新錄に、黃魯直、秦少游、張文潛、晁无咎、稱蘇門四學士、宋史、唐故事、館職皆得稱學士、魯直官著作郎祕書丞、少游官祕書省正字、文潛官著作郎、皆館職、故有學士之稱、不特非翰林學士、亦非殿閣諸學士也、唯學士爲館閣通稱、故翰林學士、特稱內翰、以別之。

【禁蘇東坡文】 【義】宋の宣和年間に、士人に蘇文を讀むを禁じたるなり。【解】千百年眼に、宣和間中、中八仙歌に、蘇晉長齋繡佛前、詩中往往愛逃禪。

【蘇州紡故龍頭暗】 【義】唐人の詩の句。【解】白居易の問江南物一の詩に、歸來未及問生涯、先向蘇州紡故龍頭暗、引手摩挲青石笋、廻頭點檢白蓮花、蘇州紡故龍頭暗、王尹橋横鵲尾斜、別有一夜深惆悵事、月明裊裊在誰家。

【蘇老泉先生全集】 【義】書名。【解】宋の蘇洵の撰する所にして二十卷及び附錄二卷あり、徐乾學の刊行するものと、邵仁泓の刊行するものと、最も世に行はるゝなり、邵本の目は總書・衛論・經論・太玄論・洪範・權論・書譜・雜文・雜詩・諡法等にて、吾邦德川氏の末に之を翻刻せり、洵は戰國諸子の文に精熟せり、故に其文も亦縱橫の氣ありて、古雅勁拔、宋一代名家の魁たり。

【蘇則之膝非佞士之枕】 【義】蘇則の故事なり。【出】三國魏志蘇則傳に、董昭嘗枕則膝臥、則推下之、曰、蘇則之膝、非佞人之枕也。

【齟齬】 【義】上下の齒相値はざるなり、因て物事のクヒ違ふをいふ。【出】太玄經に、其志齟齬と。又た楚辭九辯に、圓鑿而方枘兮、吾固知其鉏鋙而難入と。史記孟荀傳の索隱の注に、此文を引いて、齟齬に作れり。

【蘇醒】 【義】粗漏なるをいふ。【出】晉書謝鯤傳に、王敦遣兵敗周顗、而鯤弗知、敦怒曰、君蘇醒耶と。又た北史眞綽傳に、諮爲頭曰、處綽穩就人也。

【蘇癩】 【義】粗食なり、【解】は粗に同じ、癩は力制反(音レイ)又たライ、ラヅの二音あり、しらげざる米。【出】史記酈寄傳に、遇百金者將用爲夫人糲蘇之費。

【蘇笨】 【義】武骨なる人をいふ。【出】宋書王微傳に、王樂小兒時、尤蘇笨。

【蘇相】 【義】蘇野なる觀相をいふ。【出】法苑珠林に、但依蘇士而起蘇相。

【蘇服】 【義】粗末なる衣服をいふ。【出】世說に、蘇服亂頭。

【蘇言細語】 【義】粗樸なる言と些細なる語をいふ。【出】傳燈錄に、蘇言及細語、皆歸第一義。

【蘇枝大葉】 【義】蘇き枝大なる葉といふことにて、文章のコセコセとせざるをいふ。【出】朱子語錄に、書序恐不是孔安國做、漢文蘇枝大葉、今書序細膩、只似六朝時人文字と。又た文章軌範侯字集の小序に、此集皆蘇枝大葉之文。

【匆遽】 【義】イソガハシキこと。【出】顏氏家訓に、世中書翰多稱匆匆相承如此、不知所由と。說文に、匆者州里所建之旗也、象其柄及三遊之形、所以趣民事、故忽遽者、稱爲匆匆と。又た康熙字典に、東觀餘論、今俗匆中加點作匆、爲忽遽字、彌失眞矣。

宋

【宋人】 【義】古人が愚昧なるものゝ喩に多く宋人を稱するなり。【出】三餘偶筆に、閒百詩以孟子言宋人揠苗助長、引莊列之言數條、以證宋人之愚、余謂、宋人事、有見於韓非子、呂氏春秋、及閒子者、如田中有株兎走觸、折頸而死、因釋耒守株、冀復得兎者、宋之耕者也、亡縞衣、而求之於塗、見婦人衣縞衣、援而弗舍、欲取其衣者、宋之澄子也、馬不進、倒而投之淄水、馬復不進、又倒而投之淄水如此者三者、宋之取道者也、得燕石一以爲大寶、周客聞而觀之、捲而口盧胡而笑曰、此燕石也、主人大怒、宋之得燕石者也、是宋多愚人、不值如莊列所云矣、況莊列又卑多寓言也設と。又た九經談に、僞則曰、齊人、愚則曰、宋人、齊東野人之語也(孟子)、宋人揠苗(孟子)、宋人資章甫適諸越(莊子)、及宋人寶燕石之類、是愚也、當時之語如此。

【宋儒】 【義】宋儒の學即ち程朱の學なり。【出】清の江藩の宋學淵源記に、宋興儒生攜迹草莽於火燼之餘、傳經於秦漢之後、厥功偉哉、東京高密鄭君集其大成、尋敎訓、究禮樂、以故訓通聖人之言、而正心誠意之學自明矣、以禮樂爲敎化之本、而修齊治平之道自成矣、爰及趙宋、周程張朱所讀之書、先儒之義疏也、傳經、則聖經賢傳久墜於地、宋儒何能高談性命耶、後人攻擊康成、不遺餘力、豈非敎典而忘其祖歟、惟朱子則不然、其言曰、鄭康成是好人、又曰、康成是大儒、再則曰、康成畢竟是大儒、朱子服膺鄭君如此、而小生竪儒妄肆詆訶、果何謂哉、然而爲宋學者、不第攻漢儒而已也、抑且同室操戈矣、爲朱子之學者攻陸子、爲陸子之學者攻朱子、至明姚江之學興、尊陸卑朱、天下士翕然從風、姚江又著朱子晚年定論一篇、爲調人之說、亦自悔其黨同伐異矣、竊謂朱子主敬、大易敬以直內也、陸子主靜、大學定而後能靜也、姚江良知、孟子良知良能也、其末節雖異、其本則同、要皆聖人之徒也、陸子一傳爲慈湖楊氏、其言頗雜禪理、於是學者乘隙攻之、遂集矢於象山、詎知朱子之言又何嘗本之近於禪耶、蓋所理至微、其言必至涉於虛而無涯涘、斯乃賢者過之、稱中庸之所以爲難、能也、儒生讀聖人書、則於明道、明道在於修身、無他身體力行而已、豈徒以口舌爭哉、有明儒生厭斷辯論、朱陸王三家異同、甚無謂也、我朝聖人首出庶物、以文道化成天下、斥浮僞、勉實行、於是淺陋之士、彬彬有斯文之遺風焉、蕩少長、吳門、習聞碩德耆彥談論、壯游四方、好搜軼遺聞逸事、同章家往往笑以爲迂、近今漢學昌明、個個於寰宇、有一知半解者、無不鄙詆宋學、然本朝爲漢學者、始於元和惠氏、紅豆山房半農人手書楹帖云、六經專服鄭、百行法程朱、不以爲乖、且以爲法、爲漢學者、背其師承、何哉、蓋爲是記、實本師說、嗟乎、吾英彥謝、文獻無徵、甚憤朝道之將墜、聊爲躬行之不遠也、惟願學者求其放心反躬律己、庶幾可與爲善矣、至於執異教同、樂篁之弗譏弗論焉、國朝儒林代不乏人、如湯文正・魏果敏・李文貞・熊文端・張清恪・朱文端・楊文定・孫文定・蔡文勤・雷副憲・陳文恭・王文端・或登臺輔、或居鄉貳、以大儒、爲名臣、其政術之施於朝廷、建於倫物者、具載史冢、無煩記錄、且恐草野下士、見聞失實、貽譏當世也、若陸清獻公、位秩雖卑、然乾隆初、特邀從祀之典、勵史自必有傳矣、蓋所錄者或農下位、

或伏田間、恐歴年久遠、姓氏就湮、故特表而出之、黄南雷・顧亭林・張蒿菴、見於漢學師承記、按不復出、此記之大凡也、附書於此。

【宋鵲】（ソウジャク）　解説戰國宋の國の駿犬の名。　出典博物志に、宋有駿犬、曰鵲。

【宋書】（ソウショ）　解説書名。　解説此書は齊の武帝の永明五年に、沈約と云へる者、命を奉じて、撰せる勅撰の書なり、即ち南北朝の宋の世六十年間の事を紀せるものにして、帝紀十卷、志三十卷、列傳六十卷、志の目は、曆・禮・樂・天文・符瑞・五行・州郡・百官の七志なり、沈約此書を上進せしときの表に據れば七十卷とあり、今の本は一百卷にして表なし、史通の述ぶる所を致ふるに、闕卷をば南史を採りて補へりと云ふ、蔡方炳曰く、宋書は頗る精詳と爲す、但だ魏晉を兼載するは其た銀鞶を失へり、然れども、之を班馬の史體に揆るに未だ疵と爲すに足らず、其創むる所の符瑞の一志は不經にして且つ無益なり、云云と。

【宋史】（ソウシ）　解説書名。　解説此書は元の順帝の編輯せる書にして宋の世三百十七年間の事を紀せるものなり、本紀四十七卷、志一百六十二卷、表三十二卷、傳二百五十五卷、其志の目は、天文・五行・律曆・地理・河渠・禮樂・儀衛・輿服・選舉・職官・食貨・兵・刑法・藝文、表は宰輔宗室の二表にして、總て四百九十六卷あり、此書編纂の大旨は、道學を表章するに在りて、其餘皆姑く數に備ふるのみ、故に疎舛蕪莨の譏あり、此書を略抄せる宋史新編は、反て其要を得たるものなり。

【宋詩鈔】（ソウシセン）　解説書名。　解説九十三卷、清の吳之振撰す、宋詩の選本、往往を選せり、毎人小傳品評あり、全部を四集に分ち、王禹偁に始り僧貫化に終る。

【宋文鑑】（ソウブンカン）　解説書名。　解説一百五十卷あり、宋の呂祖謙勅を奉じて撰す、初めは聖宋文海と名けしが、後に改稱ぜしなり、文鑑と稱すれども、詩賦は有韻の文なれば、幷せて編内に收めたり。

【宋代謝安】　解説寇準の鎭靜して敵に驚かざるを、晉の謝安の沈著にして物を鎭むるに比していふ。　出典夢溪筆談に、景德中車駕欲幸澶淵、獨寇忠愍準贊成上意、渡河、諸將充斥、人情恟恟、上使人微覘準所爲、準方酣寢、鼻息如雷、人以其一時鎭物、比之謝安。

【宋元學案】　解説書名。　解説此書は宋元の道學者胡安定を始め、以下八十七人の略傳及び其學說を輯めたるものにして、一百卷あり、清の黄宗羲明儒學案を編し、更に又此書を編せしが、未だ完成するに至らずして卒せしかば、其子百家續て編輯せしも、其の十の一を補ふ能はざりしを以て、後ち全祖望之を增補して、遂に完成したるものなり。

【宋元通鑑】　解説書名。　解説此書は明の薛應旂撰す、宋の太祖建隆元年より元の順帝至正仁二十八年まで、凡そ四百八十年間の事蹟を記せるものにして、一百五十七卷あり、其體例溫公の資治通鑑に倣て編したるを以て之に名く、明の王宗沐も亦宋元通鑑を著せしが、此書の確なるに及ばずと云ふ。

【宋史新編】（ソウシシンヘン）　解説書名。　出典明の何繼騏の撰する所、二百卷あり、舊宋遼金の三史を合せたるものにて、本紀十四卷、志四一卷、表四卷、列傳一百四十二卷とす、遼金の二朝を以て外國に置き、西夏高麗と列を同じくせり。

【宋景文集】（ソウケイブンシュウ）　解説書名。　出典六十二卷、拾遺二卷、附錄一卷あり、宋の宋祁撰す、祁の文は、謹嚴なるも、往往奇字を用ふるの癖あり、詩は文に劣るも、亦一家の風格を具有せり。

【宋襄之仁】（ソウジョウノジン）　解説春秋の世に、宋の襄公は、敵を憐みて、徒つて敗北を招きし故に、世人が嘲笑して、宋襄之仁といひしなり。　出典左傳僖公二十二年に、冬十一月己巳、朔、宋公及楚人戰于泓、宋人既成列、楚人未既濟、司馬曰、彼衆我寡、及其未既濟也請擊之、公曰、不可、既濟而未成列、又以告、公曰、未可、既陳而後擊之、宋師敗績、公傷股、門官殲焉、國人皆咎公、公曰、君子不重傷、不禽二毛、古之爲軍也、不以阻隘也、寡人雖亡國之餘、不鼓不成列、子魚曰、君未知戰、勍敵之人、隘而不列、天贊我也、且今之勍者、皆吾敵也、雖及胡耇、獲則取之、何有於二毛、明恥教戰、求敵也、傷未及死、如何勿重、若愛重傷、則如勿傷、愛其二

毛、則如服焉、三軍以利用也、金鼓以聲氣也、利而用之、阻隘可也、聲盛致志、鼓儀徽子啓之所封也、後世至春秋、有襄公茲父者、欲翊諸侯、與楚戰、公子目夷諫、及其未陣擊之、公曰、君子不困人於阨、爲楚所敗、世笑以爲宋襄之仁。

【宋朝之美】（ソウチョウノビ）　解説宋の公子にして美男子なり。　出典論語雍也篇に、子曰、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎免於今之世矣。

【宋爵十一等】（ソウシャク）　解説シの部十（ジフ）一等を見よ。

【宋學淵源記】（ソウガク）　解説書名。　解説二卷、附錄一卷あり、清の江藩撰す、藩字は子屏、江蘇甘泉の人、此書は宋學者の傳記にして、孫奇逢に始まり、鄧元昌に終る、すべて三十一人、附記は沈國模以下九人を收む、卷首に宋學の淵源を論じたり。（宋學を參看せよ）

【宋詩百一鈔】（ソウシ）　解説書名。　解説九卷あり、清の張鼐屋・姚培謙・王永祺の三人が共に編する所、凡て百三十七人の作を收む。

【宋學士全集】（ソウガクシ）　解説書名、　解説三十六卷あり、明の宋濂撰す、濂の學最も經訓に根柢し、發して文章となる、明一代の冠冕と稱す。

【宋景文公筆記】（ソウ）　解説書名。　解説三卷あり、宋の宋祁撰す、これその隨筆にして、この書は釋俗・考古・雜說の三門に分ちて記せり。

走

【宋史紀事本末】（ソウ）　解説書名。　解説此書は、初め馮奇が宋の事を類次して袁樞の書に續き、未だ成らずして歿す、是に於て明の陳邦瞻此書を撰し、馮琦の遺稿に依るもの三分自ら補修するもの七分、凡そ百九篇にして二十六卷とす。諸史中にても燕臺の甚きは宋史を最とす、此書は亂絲を排并して條理に就かしめ、瞭然として事實の本末を尋ぬべし。

【走卒】（ソウソツ）　出典走は趨走の用に備ふる卒なり。

【走舸】（ソウカ）　解説書名。　出典通鑑唐紀に、王師範遣走卒齎書至大梁。

解説輕く走る舟、即ちハヤネフネなり。　出典三國吳志周瑜傳に、瑜等逆曹公遇於赤壁、乃取蒙衝鬬艦數十艘、

【走集】（ソウシフ）　解説遂境の壘壁なり、走りて之に集まる義に取る。　出典左傳昭公二十三年に、修其土田、險其走集、と、又た李格非の洛陽名園記序に、洛陽處天下之中、於殺黽之阨、當秦隴之襟喉、而趙魏之走集、蓋四方必爭之地也。

【走百病】（ソウヒャクヘイ）　解説俗にいふ蠶入なり。　出典五雜俎に、齊魯人多以正月十六日、遊寺觀、謂之走百病。

【走馬燈】（ソウバトウ）　解説廻り燈籠なり。　出典荆楚歲時記に、正月上日作燈市、探松柴、結得于通衢、下綴雜燈、燈有諸品、其懸紙人馬於中、以火運之、曰走馬燈、と。又た范成大の上元節物の詩に、轉影騎縱橫、と。自注に、馬騎燈、と。又た姜夔觀燈口號に、紛紛鐵馬小回旋、幻出曹公大戰年、と。又た元の耶律鑄、郭天錫、皆走馬燈の詩あり。

宗

【宗廟】（ソウベウ）　解説祖宗の廟をいふ。廟は貌なり。　出典書經太甲上篇に、社稷宗廟罔不祇畏、と。又た左傳桓公二年に、凡公行告于宗廟、と。又た周禮小宗伯職に、掌建國之神位、右社稷、左宗廟。左は陽にして右は陰なり、宗廟を左にするは、其の親を死せりとせざる意なり。（シの部社稷及びセの部昭（セウ）穆を參看せよ、又たワの部王（ワウ）猷の國を參看せよ。）

【宗祏】（ソウセキ）　解説說文に、祏は宗廟の主なり。　出典杜預云、宗廟中に在る主（位牌）を

藏する石室なり。【出處】左傳莊公十四年に、鄭の原繁が厲公に對へたる語に、先君桓公命ぜ我先人典ぜ司宗祏。

【宗祏】（ソウセキ）【意義】祏は遠祖の廟なり、遷主の寢公二十六年に、敢拜ぜ齊君之安ぜ我宗祏也と。又た同書昭公四年に、鳳有ぜ宗祏之事、於ぜ武城。

【宗社】（ソウシヤ）【意義】宗廟と社稷の略語。【出處】周禮に、小宗伯職、掌ぜ建ぜ國之神位、右社稷左宗廟。

【宗祊】（ソウヘイ）【意義】宗廟の門なり。【出處】左傳襄公二十四年に、以守ぜ宗祊。

【宗禰】（ソウデイ）【意義】宗は中興せし先帝にして、禰は父の廟を稱するなり。【出處】漢書郊祀志に、鼎宜ぜ祀ぜ宗禰廟。と顏注に、宗謂ぜ先帝有德可ぜ尊者也、禰父廟也。

【宗子】（ソウシ）【意義】嫡子をいふ、即ち總領のこと。となり。【出處】禮記內則篇に、適子庶子祇事ぜ宗子宗婦。と。又た詩經大雅板篇に、懷德維寧、宗子維城。

【宗伯】（ソウハク）【意義】官の名にして禮儀祭祀の事を掌る。【出處】周禮春官に、宗伯主禮、治ぜ神人、和ぜ上下。

【宗周】（ソウシウ）【意義】周の起りし處、天子の在る所かれば宗周といふ、今の陝西省西安府なり。【出處】書經多方篇に、王來ぜ自ぜ奄、至ぜ于宗周。

【宗師】（ソウシ）【意義】宗すべき師匠なり。【出處】莊子に、大宗師篇あり。又た漢書朱浮傳に、博士之官爲ぜ天下宗師。使ぜ孔聖之言傳而不絕。

【宗親】（ソウシン）【意義】同母の兄弟の稱なり。【出處】史記五宗世家に、同母者爲ぜ宗親。

【宗正】（ソウセイ）【意義】周の世の官職の名、宋百官春秋に、周官也、在ぜ周禮、實小宗伯之職。【出處】事物紀原に、周曰、周封ぜ兄弟之國、十有五同姓之官、三十有五、還ぜ其宗中之長、而置ぜ正之。謂ぜ之宗正、秦內ぜ其說、置ぜ宗正、掌ぜ雜ぜ姓、晉始兼ぜ庶姓ぜ也、舊唐志曰、星經有ぜ宗正、在ぜ帝座東南、漢高紀七年二月置ぜ宗正官、以序ぜ九族。

【宗室】（ソウシツ）【意義】宋廟といふに同じ。【出處】詩經召南采蘋篇に、于以奠ぜ之、宗室牖下。

【宗匠】（ソウシヤウ）【意義】㊀工師なり。㊁師宗たる者の稱とす。【出處】㊀寅宏の三臣名、臣序賛に、撫讓之與ぜ干戈、文德之與ぜ武功、莫ぜ不ぜ宗匠陶鈞、而羣才緋飛。㊁隋書儒林傳に、爲ぜ宗匠。

【宗仰】（ソウギヤウ）【意義】宗とし尊び仰ぐこと。唐書蓋文達傳に、遠近宗仰。

【宗室顏淵】（ソウシツガンエン）【意義】宋室中の優れたるもの。【出處】三國吳志宗室傳の裴注に、孫桓儀容端正、器懷聰朗、博學强記、能論議應對、權皆稱爲ぜ宗室顏淵。

【宗中千里駒】（ソウチウセンリク）【意義】宋の沈元直の故事。【出處】宋書自序に、沈正宇元直、淹詳有ぜ器度、美風姿ぜ善ぜ容止、好ぜ老莊之學、弱冠州辟ぜ從事、宗人光祿大夫演之稱ぜ之曰、此宗中千里駒也。

九　忽奏

【宗之瀟灑美少年】（ソウシノセウシヤビセウネン）【意義】唐人の詩の句。【出處】杜甫の飲中八仙歌に、宗之瀟灑美少年、舉觴白眼望ぜ青天、皎如ぜ玉樹臨ぜ風前。

【忽忽】（コツコツ）【意義】㊀急速疾速なり、イソガシキ形容、草草に同じ。㊁明かなる貌、聰明の聽と字通ず。【出處】㊀杜甫の醜五孟雲卿ぜ詩に、相逢惟衰衰、告ぜ別莫ぜ忽忽。㊁呂氏春秋下賢篇に、忽忽乎其心之堅固也と。高誘注に、忽忽、明貌。

【奏疏】（ソウソ）【意義】文體の名。【出處】文體明辯に、按奏疏者、軍臣論諫之總名也、奏御之文、其名不ぜ一、故以奏疏括ぜ之也、七國以前皆稱ぜ上書、秦初改ぜ書曰ぜ奏、漢定ぜ禮儀、則有ぜ四品、一曰章以謝ぜ恩、二曰奏、以按ぜ劾、三曰表以陳ぜ情、四曰議以執ぜ異、然當時奏章、或上ぜ災異、則非ぜ專以謝ぜ恩、至ぜ於奏ぜ事、亦稱ぜ上疏、則非ぜ專以按ぜ劾也、又按劾之奏、別稱ぜ彈事、尤可ぜ以微ぜ彈劾ぜ爲ぜ奏之一端ぜ也、又置ぜ八儀密奏陰陽皂囊封板、以防ぜ宣漬、謂ぜ之封事、而朝臣補ぜ外、天子使ぜ人受ぜ所ぜ欲言、及有ぜ事下、議者並以書對、則漢之制、豈特四品而已哉、魏晉已下、啓獨盛行、唐用ぜ表狀、亦稱ぜ書疏、宋人則監前制、而損ぜ益之、故有ぜ劄子、有ぜ狀、有ぜ書、有ぜ表、有ぜ封事、而劄子之用居多、蓋本ぜ唐人啓子錄子之制、而更ぜ其名、乃一代之新式也。

【奏聞】（ソウブン）【意義】臣が天子へ上申するない ふ。【出處】後漢典安帝紀に、既不ぜ奏聞、輒改定者杖八十。

曳

【曳曳】（ソウソウ）【意義】米を淘する聲。【出處】詩經大雅生民編に、釋ぜ之叟叟と。釋文に、叟、先侯切、叟叟、淘ぜ米聲也。

送

【送別】（ソウベツ）【意義】人ぜ他所に行くを送るをいふ。【出處】李嘉祐の送ぜ侍御史四叔歸朝ぜ詩に、淮南頭送別、臨ぜ水、惜ぜ殘春。

【送迎】（ソウゲイ）【意義】人ぜ送り又た迎へるなり。【出處】晉書皇甫謐傳に、吾送迎不ぜ出門、謝通張適の詩に、荒村迎送還雖ぜ免。

【送車】（ソウシヤ）【意義】旅行者ぜ送ぜ車。【出處】蘇洵の送ぜ石昌言爲ぜ北使ぜ引に、從騎數百、送車千乘。

【送葬】（ソウサウ）【意義】死人を野邊に葬るを送るなり。【出處】後漢書梁統傳に、帝親臨送、葬。

【送窮文】（ソウキユウブン）【意義】窮鬼を送る文なり。【出處】韓愈の送窮文に、主人三揖ぜ窮鬼、而告ぜ之曰、聞子有ぜ言於行乎、子之儲朋各有ぜ名字、智窮、學窮、文窮、命窮、交窮、凡此五鬼、爲ぜ吾五患、ぜ鬼曰、雖ぜ遣ぜ斥逐、不ぜ忍ぜ子疎、謂ぜ予不ぜ信、請質ぜ詩書、主人乃上ぜ手稱ぜ謝、延ぜ之上座。

窓

【窓中三楚盡】（ソウチウサンソツジン）【意義】唐人の詩の句。【出處】王維の登辨覺寺ぜ詩に、窗中三楚盡、林外九江平。と。又た史記貨殖傳に、楚有ぜ三俗、自ぜ淮北沛陳汝南南郡、此西楚也、彭城以東、東海吳廣陵、此東楚也、衡山九江江南豫章長沙、是南楚也。

【窓前草不ぜ除】（ソウゼンソウフジヨ）【意義】窓前に生じたる草は、これ天地生生の氣を受けたるものにて、人の意想と、もと同一なり、故に之を除かずして、天地の自然に從ふなり。【出處】程氏遺書に、周茂叔窓前草不ぜ除去、問之、云、與ぜ自家意思一般。（明道程氏の語）【意義】張文潛の庭草詩に、人生羣動中、一氣本不ぜ殊、奈何欲ぜ自私、害ぜ彼安ぜ其餘。

恩

【恩忙】（オンボウ）【意義】心のせわしきをいふ。杜甫の新婚別の詩に、暮婚晨告ぜ別、無ぜ乃太恩忙。

淙

【淙淙】（ソウソウ）【意義】水の流るゝ聲なり。【出處】高適の漁父歌に、石泉淙淙若ぜ風雨、桂子松花常滿地。

曾

【曾孫】（ソウソン）ウの部雲仍を見よ。

【曾臣】（ソウシン）【意義】宋の臣といふこと、謙辭なり。【出處】左傳襄公十八年に、曾臣魯將ぜ率ぜ諸侯、以討ぜ之。杜注に、曾臣ぜ宋臣ぜ。疏に、曾祖、曾孫者、曾爲ぜ重疊、諸侯之於ぜ天子、無ぜ所ぜ可ぜ重、曾臣魯ぜ宋臣、謙卑之意耳。

【曾益】（ソウエキ）【意義】マシ、フヤスなり、益は增なり。【出處】孟子告子下篇に、曾益其所ぜ不ぜ能ぜ。朱注に、曾與ぜ增同。

【曾參殺人】（ソウシンサツジン）【意義】シの部市虎成ぜ三人ぜ を見よ。

【曾太皇太后】（ソウタイクワウタイコウ）【意義】曾祖母にして太皇太后となるによりて此の如く稱するなり。【出處】容齋隨筆に、唐德宗即位、訪ぜ求其母沈大后、歷ぜ順宗及憲宗時、曾祖母故稱爲ぜ曾太皇太后、蓋別ぜ於祖母也。

湊

【曾文正公文集】（ソウブンセイコウブンシフ）【意義】書名。【出處】清の曾國藩の撰する所にして、門人李鴻章の編次なり、凡そ四卷とす、每卷に其目を揭げ、道光十八年より同治五年に至るまでの諸作を識次に因りて、編成せり、其文は正平にして、疎漫ならず、布局も亦頗る大なり、浮薄の詞章を逐るものゝ及ぶ所にあらざるなり。

【曾文正公全集】（ソウブンセイコウゼンシフ）【意義】書名。【出處】清の曾國藩の撰にして一百六十八卷あり、首卷は上諭三道、御製碑文、一首、神道碑を載す、その總目を揭ぐれば、奏稿三十卷、十八家詩鈔二十八卷、經史百家簡編二卷、鳴原堂論文二卷、詩集四卷、文集四卷、書札三十三卷、批牘六卷、雜著四卷、求闕齋讀書錄十卷、求闕齋日記類鈔二卷、年譜十二卷、孟子要略五卷、これなり。

【曾文正公奏議】（ソウブンセイコウソウギ）【意義】曾國藩の撰する所にして、李鴻章之を編次し、三十卷とす、國藩は長髮賊を平定するに當り、奏議すること多多なり、此書年月順に文章を列れたり、全集本にして、單に行刊本は世に稀なり。

【湊】（ソウ）【意義】衆會の義なり、我邦にて轉じて倜處筆記に、今謂海岸商舶四集之地、爲ぜ湊、固係俗語、絕不用ぜ於文詩、然西土古言亦有ぜ類、鄭者、逸周書、城方千七百二十丈、郭方七百里、南繫ぜ于洛水、北因ぜ于刻山、以爲ぜ天下之大湊、但此謂ぜ人民聚會之

地、而非寡屬之海岸也と。又た通雅に、大海爲四方所輻湊也、

【搜神記】の事を集めて此書を作りしなり。出處晉書干寶傳に、寶字令升、爲著作郎、寶父先有寵婢、母甚妒忌、及父亡、母乃生埋婢於墓中、後十餘年、母喪、開墓、而婢伏棺如生、載還、經日乃蘇、言其父常取飲食與之、恩情如生、在家中吉凶輒語之、考校悉驗、又寶兄常病、氣絶、積日不冷、後遂悟云、見天地間鬼神事、寶遂撰集古今神祇靈異人物變化、名爲搜神記、凡二十卷、以示劉惔、惔曰、卿可謂鬼之董狐。

腠

【腠理】 意義皮膚のキメなり。出處史記扁鵲傳に、君有疾在腠理。

僧

【僧】 意義佛伽の略、家を捨てて佛門に入れる人の稱なり。出處隋書經籍志に、佛弟子、男曰桑門、而總曰僧、女曰比邱尼、俗人信馮佛法者、男曰優婆塞、女曰優婆夷と。又た後漢錄卷一に、漢明帝聽陽城侯劉峻等出家、僧之始也、東晉濟陽縉女阿潘等出家、尼之始也。

【僧伽】 意義僧徒といふこと、衆多の伽藍言、衆僧、史略云、凡四人以上名僧、今一人亦稱僧、蓋從衆之名也、亦如一萬二千五百人爲軍一人亦稱軍也。

【僧坊】 意義僧の住する家、即ち寺をいふ。出處晉書羅什傳に、不住僧坊。

漱

【僧俗】 意義僧と俗に非る人とをいふ。出處桑苑雌黃に、僧俗創見。

【僧衆】 意義宋書蕭開傳に、自宜悉供僧衆。

【僧正】 意義僧の官なり、僧中の行の正しからざるものを正すことを掌る。出處山堂肆考に、參玄語錄、後秦姚萇立道翌爲僧正、秩同侍郎と。又た釋氏要覽に、蓋以比丘無法、若馬無轡勒、漸染俗風、將乖雅則、故標有德望者、以奉僧翌爲始也。

【僧錄】 意義僧の官なり。出處參玄語錄に、元魏以沙門僧顯爲京師統、隋分置十統、唐置統立兩錄司、於京邑、謂之僧錄と。又た六一詩話に、吳僧贊寧初爲僧錄、爲乎正、故云僧正、此以僧爲僧錄。

【僧衣】 意義僧の着る衣服なり。出處五燈會元に、世尊告迦葉、吾將金縷僧伽梨衣、傳付于汝、轉授補處、至慈氏佛出世、勿令朽墜。

【漱玉】 意義玉を漱ぐなり、潔の飛沫に喩ふ。出處文選に、山澗何泠泠、飛泉漱鳴玉。

五 瘦

【瘦羸馬】 意義やせたる羸と、つかれたる馬となり、轉ぜて疲羸の意をいふ。出處南唐書伍喬傳に、詩詞寒苦、無有復意羸馬之嘆。

粽

【粽茭】 意義チマキなり。出處事物原始に、粽子、其制不一、有角粽、粒粽、菱粽、雜粽、筒粽、九子粽、拜線粽、宋時有楊梅粽。

【粽核】 意義事の本末をすべて明かにする義、核は骸なり。出處漢書宣帝紀に、綜核名實。

葱

【葱葱】 意義青々としたる貌。出處後漢書光武帝紀に、望氣者至南陽、曰氣佳哉、鬱鬱葱葱然と。又た王儉の靈丘竹賦に、幹蓋葱而特秀。

【葱靈】 意義隱權に同じ、衣物を裝飾する車にて、前後に轅あり、兩旁隱を開き、其の中に榻を設け、觀望することを得しむ。出處左傳定公九年に、鞍葱蔥、寢於其中、而逸と。杜注に、輜車之名。

【葱肆】 意義葱などを賣る市場をいふ。出處梁書呂僧珍傳に、授南袁州刺史、從父兄宏、以蔥爲藥、寒藥欲求州官、僧珍曰、汝等自有常分、豈可妄求、但當速反葱肆耳。

增

【增補】 意義前人の著作せるものに、增し補ふをいふ。出處後漢書胡廣傳に、初揚雄依度箋、作十二州二十五官箴、其九箴亡闕、後涿郡崔駰及子瑗、及臨邑侯劉陶、除增補十六篇、廣復經作四篇。

【增減】 意義マシ、ヘラスをいふ。出處漢書西域傳に、其水停、冬夏不增減。

減。

【增年】 意義年齡を增加すること。出處歐陽詹の除夜の詩に、算甲恨增年と。又た陸游の詩に、身老怯增年。

六 檜

【檜巢】 意義薪を聚めてつくれる巢居なり。出處禮記禮運篇に、冬則居營窟、夏則居檜巢。

七 總

【總額】 意義總計の高をいふ、額は高の通、縣總額、並無各里細額、是以不注原額、止注原弁額若干。

【總禮】 意義一列の人に總て禮すること。出處五分律に、總禮而去。

【總名】 意義幾個のものを總べて名づくるなり。出處五經要義に、終南、山之總名。

【總領】 意義家事を引きすべて主ること。出處詩經大雅烝民篇第三章の朱傳に、外則總領諸侯、內則輔翼君德と。又た漢書魏相傳に、總領衆職。

【總督】 意義軍機を總べ括くりて監督するなり。出處明の世より官名となれり。出處漢書西域傳贊に、總督城郭三十有六と。又た陳書蕭摩訶傳に、吳明徹曰、步軍既多、否爲總督、必身居其後。

【總監】 意義官名。出處南史雷次宗傳に、山、聚徒教授、置生百餘人、會稽朱膺之、顧川庾蔚之、並以儒學總監諸生。

【總管】 意義官名。出處事物紀原に、晉有都督諸軍事、後周改爲總管、唐武德初、邊要之地、亦置總管、以統軍、正觀三年李靖除定襄道大總管、是也、宋朝初有兵馬都部署、而平初避英宗諱、改爲總管、亦法古號也、續事始載周武帝建德六年以王謙爲益州總管、記爲命官之始。

聰

【總帳】 意義本と帳なり。出處歷代史略に、末後一盤總帳。

【總角之好】 意義小兒の頭髮を總べ束めて頭の兩端に角の形をなすを總角（アゲマキ）といふ、因て幼時の親交を總角之好といふなり。出處詩經齊風甫田篇に、婉兮孌兮、總角丱兮、未幾見兮、突而弁兮と。丱は朱傳に兩角貌と。又た三國吳志周瑜傳に、瑜字公瑾、有姿貌、策公瑾、有姿貌、相友善と。裴注に、江表傳曰、策令曰、周公瑾英俊異才、與孤有總角之好、骨肉之分と。又た晉書何劭傳に、劭字敬祖、少與武帝同年、有總角之好。

【聰察】 意義聰明なり。出處漢書宣元六王傳贊に、淮陽憲王、于時諸侯王聰察宏恕。又た東觀奏記に、白敏中感上聰察宏恕。

【聰明睿智】 意義聖人の四德なり、聰は聞かざる所無く、明は見ざる所無く、智は知らざる所無きをいふ。出處易經繫辭上傳に、古之聰明睿智、神武而不殺者夫、荀子宥坐篇に、聰明聖知、守之以愚、功被天下、守之以讓。

（孫策）與瑜同年、相友善、瑜字公瑾、有姿貌、策曰、策令曰、周公瑾英俊異才、與孤有總角之好、骨肉之分と。又た晉書何劭傳に、劭字敬祖、少與武帝同年、有總角之好。

飯

【坐飯】 意義飯は、飯を炊ぐ器、コシキなり、飯の中に坐するとは、夏月暑氣の厳しきをいふ。出處陸龜蒙の詩に、五月困暑溫、如坐蒸飯甑、蒸炒。

【飯不顧】 意義決斷に富めるをいふ。出處後漢書郭泰傳に、孟敏、字叔達、鉅鹿人也、荷甑墮地、不顧而去、林宗（郭泰の字）見而問、其意對曰、甑已破矣、視之何益、林宗以此異之、因勸令遊學、十年知名。

【飯中生塵釜中生魚】 意義極めて貧しき形容なり。出處後漢書范冉傳に、冉、字史雲、陳留外黃人也、云云、識者欲以爲侍御史、因遁身逃命於梁沛之間、徒行敝服、賣卜於市、遺黨人禁錮、遂推鹿車、載妻子、拾拾自資、或寓息客廬、或依宿樹陰、如此十餘年、乃結草室、而居焉、所止單陋、有時絕粒、窮居自若、言貌無改、閭里歌之曰、甑中生塵范史雲、釜中生魚范萊蕪。

增

【增繳】 意義細き生絲を以て網を造り、之を矢の先に附けて、鳥に中てば、網直に鳥を掩ふ、之を繳といふ、又た弋射といふ。出處史記留侯世家に、橫絕四海、當可奈何、雖有增繳、尙安所施と。又た淮南子修務訓に、雁銜蘆而飛、以備增繳と。又漢書翼注に、古云、增、短尖也、繳生絲也、以繳係短、仰射高鳥、謂之弋射。

叢

【叢脞】 意義細碎にして大略なきなり。出處書經益稷篇に、歌曰、元首叢脞哉、股肱惰哉、

萬事瑣哉。

【叢書】（ソウシヨ）　語義一書籍を聚めて之を堆積するなり。二叢脞（解は前條にあり）の書といふこと。出典一韓愈の詩に、門以二兩板一叢書其間。二唐の陸龜蒙自らその詩文を集めて笠澤叢書と名く、蓋し謙辭なり。補説後世に至り、古今の書を聚めて一部の書とし、某某叢書といふは、幹愈の詩の意より取りしなり。

【叢祠】（ソウシ）　語義樹の茂りたる中に建てたる神祠なり。出典史記陳涉世家に、涉又間令二吳廣一之二次近所傍叢祠中一、夜篝火、狐鳴、呼曰、大楚興、陳勝王。

【叢棘】（ソウキヨク）　語義罪人を捕縛し、囚へ置く處。出典易經坎卦に、上六、係用徽纆、寘二于叢棘一、三歲不得、凶と。又た左傳哀公八年に、邾子無道、吳子囚二諸楚一、葬之以棘。

【叢輕折軸】（ソウ）　語義叢の部羽細飛、肉を見よ。

【掞叢雲之奥詞】（ソウ）　語義叢雲といふ音樂の奥妙なる詞を引くといふこと。出典李善の上二文選注一表に、竭二叢雲之後一、掞二叢雲之奥詞一。

【叢蘭欲秀秋風敗之】（ソウ）　語義惡しきものゝ障害を爲すに喩ふ。出典文子に、叢蘭欲秀、秋風敗之、人性欲平、嗜欲害之。補説帝範に、叢蘭欲茂、秋風敗之、王者欲明、讒人蔽之。

叢

【叢叢】（ソウソウ）　語義叢、注云、以盆盛物、戴二于頭一者、則以叢叢也、言衡竹器、則不能入穴、蓋儲鏡之類、或有足、或方、或員、皆是也。

【蹤蹤】（ソウソウ）　語義勢を失ふ貌。出典木虛の海賦に、蹤蹤窮波、陸二死鯨田一。

【叢澤】（ソウタク）　語義土地廣くして草木の叢生せること。出典史記司馬相如傳に、鶴明已翔二乎寥廓一、而羅者猶視二乎叢澤一。補説後漢の桓典の嚴正なりし故事。出典後漢書に、沛郡龍亢人、太傅桑玄孫、拜二侍御史一、時宦官秉權、典執正無所回避一、常乘二駑馬一、京師長側、爲之語曰、行行且止、避二駑馬御史一、後以、豎宦官、七年不調、獻帝時、爲二光祿勳一。

【髻髻】（ソウソウ）　語義亂髮の貌。出典黃綺の愚譯開平、次魯子擧韻詩に、明對髻髻髮。

仄

【仄慝】（ソクナク）　語義月の行くの遲きをいふ。出典漢書五行志に、朔而月見二東方一謂之仄慝一と。按注に、仄慝とは、月の行くこと遲くして日後に在り、當に沒すべくして更に見はるるなり。補説詩の變格にして、律八句ともの第一字に、仄字を用ゐて作るものなり。出典詩人玉屑に、八句仄入格。

【仄室】（ソクシツ）　語義側室。出典漢書賈誼傳に、非二有二仄室之執一、以踰席之也と。顏注に應劭曰、禮制大夫之支子爲二側室一。

【仄陋】（ソクロウ）　語義身の微賤なることをいふ。出典漢書衛吏傳に、孝宣蘇仄陋、而登二至尊一。

【仄注冠】（ソクチウクワン）　語義そばだちて先の下に垂るる冠なり。出典漢書五行志に、昌邑王賀、遣二治二仄注冠一と。顏注に、謂二之側注一者。言二形側立而下注一也、非二法冠及高山一也。

【足心】（ソクシン）　語義足の裏の中心をいふ。出典何以謗二黃昌一邪、對曰、昌左足心有二黑子一、常自言當二爲二千石一、昌乃出足示之。

【足下】（ソクカ）　語義人に對して直ちに其の人を指さずして足下の人を指す意なり、他を敬ふ辭とす。出典への部陛下を見よ。補説戰國の際、君前に談說し、又は上書にも、多く足下の語を用ふ、秦の關樂、二世皇帝に對して陛下と曰はずして足下といへり、鄒食其も漢の高祖に說して、大王と足下との語を交へ用ゐたり、これ秦漢の際は、足下の語は至尊に對するにも用ゐたり、後世は天子には用ゐず、事物紀原に、異苑曰、介之推逃二綿抱一樹燒死、文公折木哀號、伐而製屐、每懷二其功一、俯視二其屐一曰、悲乎足下、足下之稱實據二此謂一と。これ小說家の言のみ信ずるに足らず。

【足音跫然】（ソクオン）　語義跫然は足音の響なり。出典への部空谷足音を見よ。

束

【束脩】（ソクシウ）　語義一古は相見るに必贄（二）を執りて以て禮とす、束脩はその至て薄き者なり、脩は乾肉なり、束は十脡なり、脡とは肉の一片を稱する語なり。二始めて師に見ゆるときに贈る贄なり。餘は前解に同じ。三約束脩整の義にて、品行を慎むとなり。出典一漢書朱邑傳に、廉潔守節、退食自公、無二疆外之交一、束脩之餘。二論語述而篇に、子曰、自二行一束脩一以上、吾未嘗無二誨焉一と。又た北史裴儁傳に、時俗人學書、亦行二束脩之禮一、謂二之謝章一と。又た容齋續筆に、唐六典、國子生初入、置二束帛一筵、酒一壺、脩一案、爲二束脩之禮一。三課幣に、人知二東脩爲二子弟餽一師之禮一、不レ知二鄭后紀云故能東脩不二謝一羅絢一、注以二約束脩整一釋之。

【束匏】（ソクスウ）　語義その部生（セイ）匏一束を見よ。

【束髮】（ソクハツ）　語義結髮に同じ、始めて冠するをいふ。出典漢書叙傳に、兒生聖賢、束髮修學と、兒生は、兒寬なり。兒音倪（ゲイ）。

【束縛】（ソクバク）　語義繫囚せらるゝなり。出典楚辭九思傷時に、管束縛兮拴梏と。管は管仲なり。

【束閤】（ソクカウ）　語義コの部束之（コレ）高閣一を見よ。

【束帶】（ソクタイ）　語義禮服を着け、大帶を束ぬるなり。出典論語先進篇に、束帶立二於朝一。

卽

【束帛加璧】（ソクハク）　語義十端の絹を一束にし、帛を兩の端より卷きて中にて卷き合せ束れたるを束帛といふ、加璧は、その上に璧を載せるなり、人を敬禮するに用ふ。出典アの部安車蒲輪を見よ。

【卽位】（ソクイ）　語義人君がその位に卽くこと。出典春秋桓公元年に、春王正月、公卽位と。又た白虎通に、不二曠一年無二君、故逾二年卽位一、改元、名二元年一、年以紀事、君名二其事一矣、而未發二號令一也、何以言二逾年卽位一、謂改元卽位春秋傳曰、以二諸侯踰年卽位一、亦知二天子踰年卽位也。補説天子の位に卽くをいふ。出典史記孝文紀に、皇帝卽阼。

【卽日】（ソクジツ）　語義直ぐ其日なり。出典史記項羽紀に、項王卽日因留二沛公一與飲。

【卽時】（ソクジ）　語義即急なるをいふ。出典漢書張禹傳に、卽時徙咸。

【卽刻】（ソクコク）　語義時を違へず、直に其刻といふこと。出典皇明通紀に、卽刻遽捕。

【卽席】（ソクセキ）　語義其坐においてするをいふ。出典禮士冠禮に、卽席坐と。又た梁書蕭介傳に、高祖招延後進二十餘人、置酒賦詩、蔵盾以詩不成罰酒一斗、盾飲盡顏色不變、言笑自若、介染筆便成、文無加點、高祖兩美之曰、蔵盾之飲、蕭介之文、卽席之美也と。又た青箱記に、卽席和呈、文不加點。

【卽死】（ソクシ）　語義即坐に死するをいふ。出典唐書夏侯孜傳に、當史署制、仆二於朝一。

促

夜饌中卽死。

【卽黑侯】（ソクボクコウ）　語義碪の異名。出典書言故事に、文當の石虛中傳に、南慧人、姓石名虛中、字居默、葬二卽黑侯一。

【卽心是佛】（ソク）　語義我が心は卽ち是れ佛にして、心の外に佛なきをいふ。出典傳燈錄に、有僧問二大梅和尙一、見二馬祖一得二個甚麼一、便住二此山一、大梅曰、馬祖道卽心是佛、僧曰、馬祖近日又道二非心非佛一、大梅曰、這老漢惑二亂人一、未有了日、任二汝非心非佛一、我只管卽心是佛、馬祖後聞二大梅一、曰、梅子熟と。又た張船の贈二盧山僧一詩に、便知心是佛、堅坐尋二寒灰一。

【卽時一杯酒】（ソク）　語義目前一杯の酒といふこと、俗に後の百より今五十といふと同義なり。出典世說任誕上篇に、張季鷹縱任不拘、時人謂爲二江東步兵一、或謂之曰、卿乃可二縱適一一時、獨不レ爲二身後名一邪、答曰、使二我有二身後名一、不レ如二卽時一杯酒一。

【促促】（ソクソク）　語義一ツガハシキこと。又た迫る意。出典魏文帝の書紙誄に、惟人之生、忽若二朝露一、促促百年、慶慶行暮。

【促織】（ソクシヨク）　語義蟲の名、コホロギ。出典謝朓の詩に、秋夜促織鳴と。又た古謠に、促織鳴、蠟蟀驚。

【促坐】（ソクザ）　語義急屈に二人竝び坐するをいふ。出典魏承班の詞に、促坐王孫公子醉。

【促膝】（ソクシツ）　語義膝をつき合して急屈に坐するなり。出典呂嚴の與潯州知府寺慧覺一詩の引に、促膝靜坐。

俗

【俗人】 [音義]凡庸の人をいふ。[出處]老子第二十章に、俗人昭昭。

【俗語】 [音義]野鄙なる言語をいふ。[出典]後漢書蔡邕傳に、其高者頗引經訓風諭之、言下則連偶俗語、有類俳優。

【俗姓】 [音義]未だ僧とならざる時の姓名を俗姓俗名といふ。[出處]唐高僧傳に、釋志超、俗姓田。

【俗樣】 [音義]世間一般の俗なる樣式をいふ。[出處]池北偶談に、不惟俗樣。

【俗說】 [音義]世間俗人の論說なり。[出處]漢書刑法志に、又因俗說而論之。

【俗物】 [音義]鄙俗なる人をいふ。[出處]晉書王衍傳に、興既敗、竹林遊、衍後嘗至、語曰、俗物已復來敗人意。

【俗緣】 [音義]僧とならざる時の親族をいふ。[出處]唐高僧傳に、釋智興俗緣宋氏。

【俗儒】 [音義]見識せまくして心卑しき學者をいふ。[出處]論衡に、俗儒好長古而短今、言瑞則遁、論而薄後。

【俗煞】 [音義]煞は殺に同じ、俗語の助辭なり、俗了といふに同じ。[出處]張船山の詩に、俗牧汾陽軟脚筵と、又た故應、俗煞蘇秦貂塵。

【俗耳針砭】 [音義]鄙しき耳を療治すとの義なり、砭は石の針。[出處]世說言語下篇に、戴仲若(名は顒)春日携雙柑斗酒、人問之、答曰、往聽黃鸝聲、此俗耳針砭、詩腸鼓吹。

息則

【俗不可醫】 [音義]俗物は濟度す可からざるをいふ。[出處]蘇軾の綠筠軒の詩に、無肉令人瘦、無竹令人俗、人瘦尚可肥、士俗不可醫。

【俗儒不達時宜】 [音義]俗儒は時勢に暗きをいふ。[出處]漢書元帝紀に、且俗儒不達時宜、好是古非今、使人眩於名實、不知所守、何足委任。

【俗之所欲因而予之】 [音義]衆俗の欲する所は、之を授け與ふるをいふ。[出處]史記晏子傳に、俗之所欲、因而予之、俗之所否、因而去之。

【則劇孩兒】 [音義]小兒の演劇なり。[出處]西湖遊覽志餘に、楊皇后以琵琶、誅惡稱宮。

【息偃】 [音義]臥して休息するをいふ。[出處]詩經小雅北山篇に、或息偃在牀、或不已于行。

【息交】 [音義]世人と交際を息めるをいふ。[出處]陶潛の歸去來辭に、歸去來兮請息交以絕遊。

【息銀】 [音義]利息銀のこと。[出處]史記晏子傳に、俳、每年息銀一計之。

【息壤】 [音義]㊀秦の國の地名。㊁土地の天然に高くして長く連れる處を壤といふ。[出處]㊀史記甘茂傳に、王迎甘茂於息壤、二人二人、王曰、寡人不聽也、請與子盟、卒使甘茂將兵伐宜陽、五月而不拔、樗里子公孫衍爭之、王欲罷兵、茂曰、息壤在彼、王曰、有之、因悉起兵使甘茂擊之、遂拔宜陽。㊁康熙字典に、土自長息無限曰息壤、山海經騬騬、帝之息壤、以堙洪水、一曰、息壤、壤土也、路史炎生之土長而不竭、柳宗元有永州龍興寺息壤記。[音義]秦王が甘茂と息壤に盟ひし故事に本づきて、息壤の二字を約束といふ意に用ふることあり。

【息耗】 [音義]息は、蕃息の義、耗は、耗減の義なり。[出處]㊀漢書董仲舒傳に、蓋天下之息耗。㊁後漢書章德竇皇后紀に、家既覆壞、數呼相工問息耗。[音義]後世はたゞ耗の字一字にて、音信の意とし、音耗・近耗・信耗などゝ用ふ。

【息肩】 [音義]勞苦を休むる意なり。[出處]左傳襄公二年に、鄭子駟請息肩于齊。

【息燕】 [音義]休息するをいふ。[出處]考工記梓人に、則王以息燕。

【息男】 [音義]息は生なり、生む所の男をいふ。[出處]曹植の表に、封臣息男苗爲高陽鄉公、志爲穆鄉公。[音義]我が子を稱して子息・兒息といひ、謙遜して息といふ。

【息女】 [音義]息は生なり、生む所の女を謂ふ。[出處]史記高祖紀に、臣有息女、願爲季箕帚妾。季は高祖の字なり。

【受息】 [音義]利息を受るをいふ。[出處]周禮の注に、王莽時、民貸以治產業者、受息無過歲什一。又た康熙字典に、田錢生子曰息、周禮泉府、凡民之貸

者、以國服爲之息。

【息焉遊焉】 [音義]學校に優遊安息して、その德器を成すをいふ。[出處]禮記學記篇に、藏焉修焉、息焉遊焉、夫道、是以雖離師輔而不反也。

【娖娖】 [音義]齷齪に同じ、持整の貌。[出處]史記張蒼傳に、娖娖廉謹爲丞相、備員而已。

涑捉

【涑水】 [音義]水の名。[出處]通雅に、呂相絕秦縣、今解州聞喜縣是、至蒲州入河、今光山有涑水書院、涑水司馬溫公別號、光父池爲邑令時、生光于此。

【涑水紀聞】 [音義]宋の司馬光の撰する所にして十六卷あり、宋代の舊事を雜記し、太祖より神宗に及ぶ、凡て四百二十七條あり。

側

【側徼】 [音義]側陋に同じ、微賤の義なり。[出處]史記自序に、尙父側微卒歸西伯。

【側陋】 [音義]僻側賤陋の處なり、微賤の人をいふ。[出處]書經堯典篇に、明揚側陋。

【側言】 [音義]かたよりたる一偏の說なり。[出處]書經蔡仲之命篇に、詳乃視聽、罔以側言改其度。

【側息】 [音義]片息なり、須臾の間をいふ。[出處]孔叢子に、不忘於側息也。

【側聽】 [音義]耳なそばだて、聽くなり。[出處]潁延之の詩に、側聽風薄木、盜聞月開雲。

速族

【側理】 [音義]紙の異名なり。[出處]太平廣記器玩三に、晉張華博物志、奏武帝賜青鐵硯、此鐵是子闌國所獻、鑄爲硯、麟角管、此蓋四國所獻也、側理紙萬番、南越所獻也、漢昔陟鑾、南人以海苔爲紙、其理縱橫斜側、因爲名焉。

【側室】 [音義]㊀もと門側の居なり、轉じて衆子即ち次男以下のことゝす。㊁妾をいふ。[出處]㊀左傳桓公二年に、天子建國、諸侯立家、卿置側室。杜注に、側室は衆子なり。㊁淮南修務訓に、以楚莊之琴、側室爭鼓之。高注に、側室之寵人也。又た漢書に、文帝曰、陛下高皇帝側室之子也。

【側席而坐】 [音義]心憂ふる所ありて席に安んぜざるをいふ。[出處]荀子賦篇に、故虞有宮之奇、晉獻公之終夜不寐、楚有子玉得臣、文公爲之側席而坐。

【速戒】 [音義]急速に事を成すなり。[出處]論語季氏篇に、非求益者也、欲速成者也と、又た宋文鑑、范質の詩に、速成不堅牢、亟走多顛踣。

【族譜】 [音義]家族の系譜をいふ。[出處]宋の蘇洵(老泉)蘇氏族譜を作れり、又た族譜序記あり。

【族子】 [音義]姪(オイ)をいふ、兄弟の子なり。[出處]韻會に、今謂兄弟之子爲姪、蓋取子林晉義作文乙切、如秋色傑譙、武后云、姑姪與子母、孰親、猶指武姓人爲姪也、姪字惟可施之書問、以便俗呼、或有著述二不、若稱兄之子弟之子從子・族子之爲雅也。

【族望】 [音義]氏族門閥なり。[出處]事物紀原に、筆談曰、世人以氏族相高、雖從古有之、然未著證、自魏氏、登總人物、以氏族、亦不專任門地、唯四爽則全以爲貴賤、如天竺、以刹利婆羅門爲貴種、自餘爲庶姓、是也、國主大臣、各有種姓、苟非貴種、國人英俊、皆爲之庶姓、有勞能、亦自甘居大姓之下、後魏孝文中原、此俗遂盛、於中國、唐末方衰息也。

惻

【惻怛】 [音義]心に痛く悼むこと。[出處]禮記問喪篇に、惻怛之心、痛疾之意。

【惻隱之心】 [音義]惻は傷の切なるなり、隱は痛の深きなり、此れ即ち人に忍びざる心なり。[出處]孟子公孫丑上篇に、惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心、智之端也と。又た同書告子上篇に、乃若其情、則可以爲善矣、乃所謂善也、若夫爲不善、非才之罪也、惻隱之心、人皆有之、羞惡之心、人皆有之、恭敬之心、人皆有之、是非之心、人皆有之、惻隱之心、仁也、羞惡之心、義也、恭敬之心、禮也、是非之心、智也、仁義禮智、非由外鑠我也、我固有之也、弗思耳矣。

測

【測字】 [音義]一種の卜筮の方にて、人にて運命を判斷するなり。[出處]新廣聞に、陳某江南吉水人、善觀枚測字、稱陳神仙、又た隨園叢考に、少時見一拆字者、一人跟論來問其父之病、隨手拈得一字、術者曰、一者、生字之蓋、斧字之初也、汝父殆

不レ起矣、問汝父生年云何、其子曰、丁丑生屬牛、衛者曰、然則關父不レ死、牛加二一畫一、則生字矣、其聽否不レ可知、然思致自佳、按此術不知起二於何時一、後漢黄公孫述夢有レ人告レ之曰、八厶子系十二爲レ期、述以爲二公孫當レ貴之兆一、遂稱レ帝、蔡茂傳、茂夢坐二大殿上一、有二三禾一、茂取レ之、得二其中穗一、又失、郭賀曰、於レ字、禾失爲レ秩、難曰、失レ之、乃所二以得一祿也、此後世測字之權輿。

【唧筒】（ソクトウ）（ポンプ）ポンプなり、又ジョウロなり。（中国）種樹書に、凡木早晩宜二沃以一水、以二唧筒一唧二水其上一。

粟

【量レ粟而舂】（ソクリ）（ショウ）小事に心を用ふるに喩ふ。（中国）淮南子詮言に、量レ粟而炊、數レ米而炊、可二以治一家一、而不レ可二以治一國一。（中国）淮南子泰族訓に、秤レ薪而爨、數レ米而炊、可二以治一小一、而未二可一以治一。

【給レ粟多馬瘦】（ソクタ）大也（中国）宋の張思光の故事。（中国）世說排調篇に、宋太祖嘗面許二張思光一、爲二司徒長史一、數寬不レ下、張乘二一馬甚瘦一、太祖見之問曰、卿馬何瘦、給レ粟多少、張曰、日給粟一石、上曰、食レ粟不レ少、何緣如レ此、張曰、臣許而不レ與、明日、即除二司徒長史一。

【粟盡則有レ生】（ソクジン）（ソクスレハ）穀粟は盡くるとあるをいふ。（中国）管子に、粟盡則有レ生、貨散則有レ聚。

【若二粟之有一粃】（ソクノ）（ヒ）雜ぜれるに喩ふ。（中国）書經伸懲之誥篇に、若二苗之有一莠、若二粟之有一粃、小大戮戰、罔レ不レ懼二于非一者。

鳥

塞　賊

【有レ粟不レ食無益於饑】（ソクアリテ）（ムエキ）穀粟ありて之を食はざれば、饑餓を救ふに益なしといふ。（中国）論衡論に、有レ粟不レ食、無二益於饑一、觀賢不レ用、無二益於削一。

【鳥婦做レ婆】（ソクフ）（ソクバ）鳥婦はよめなり、嫁が姑となるの時あるをいふ。（中国）傳家寶に、也有二鳥婦做一婆時一。

【塞淵】（ソクエン）塞は實なり、淵は深なり、誠實にして深淵なるなり。（中国）詩心に賊害するの深意あるを

【賊深】（ソクシン）いふ。（中国）史記張湯傳に、始條侯相二趙禹一急、至晚節事益多、吏稍爲二賊賊一、禹治加一緩而名爲一平。

【擊レ賊笏】（ソクシ）（ソクシ）正義の心が笏に振り固れるをいふ。（中国）唐書に、姚宗時、段秀實爲二涇原節度使一、以二脩爲一、詔爲二司農卿一云云、朱泚召二秀實及源休等一、議潛襲事、秀實勃然起執二林琬一、奪其象笏、奮前唾二泚面一、大罵曰、狂賊、吾恨不二斬汝萬段一、豈從二汝反邪一、因以笏擊泚中二其額一、血濺地、泚御劍脫走、秀實知事不レ成、大呼曰、批奪、批奪、曰、我不二同汝反一、何不二我殺一、衆前殺之、後隆思殺二と。又た文天祥の正氣歌に、或爲二擊一賊笏一。

【遇賊爭死】（ソクジ）（ソクシ）賊の爲に捕はるゝ聞き、身を以て之に代らんと乞ふ、賊遂に兩人を赦すといふ。（中国）後漢書趙孝傳に、王莽時、任二孝爲一郎、及二天下亂一、人相食、孝弟禮爲二賊所一得、孝聞之、即自縛詣レ賊、曰、請久餓、願獲二一飯一、如レ孝肥白、賊大驚、並放之、時汝南有二王孫者一、弟季卿遇二赤眉一、將レ殺、孝謂曰、聽自縛詣二先季一、先季死、賊矜而放遣、又嘗國兒萌、梁國睢陵人、兄弟並見二執於赤眉一、將食之、萌成叩頭乞以身代、賊亦哀而兩釋焉。（中国）漢書淳于恭・姜肱、此に之に類せることあり、又た後漢書に見えたり。

【擒賊先擒王】（ソクセン）（ソクオウ）充づ賊魁を擒にすれば、其手下は自然に擒にせらるるをいふ。（中国）杜甫の出塞の詩に、射二人先射一馬、擒二賊先擒一王。

【借賊兵齎盜糧】（ソクヘイ）（ソクリ）賊に便利を與ふるとて、我身の害となるをいふ。（中国）荀子大略篇に、非二其人一而教之、齎二盜糧一、借二賊兵一也と、又た史記范雎傳に、此所謂借二賊兵一而齎二盜糧一者也と。又た李斯の諫逐客書に、此所謂藉二寇兵一而齎二盜糧一者也。（中国）新書に、假二賊兵一、與二虎翼一。

蕪

【蕪蕪】（ソクソク）（ソクソク）㊀ハゲシキ風の聲。㊁物の鮑照の蕪城賦に、蕪蕪蔽之、孝書注に、樹蕪風聲、勁疾之貌。㊂南史王曇傳に、曇見二屋蕪子一、悉是大蛇、就視之、猶木也、曇惡之、方以紙裹、擲子、猶祇內動搖蕪蕪有聲。

老

【簌簌】（ソクソク）元稹の連昌宮詞に、風飄落花紅蕪蕪。又た劉洁の靈山水賦に、秋景則水天一色、稹鐵疎林。

鐵

【鐵礪括羽】（ソクレイ）學を修め智を研きて有用の器と爲るをいふ。

（中国）孔子家語に、子路曰、南山有レ竹、不レ揉自直、斬而用之、達二乎鼻甲一、如此言之、何學之有、孔子曰、括而羽之、鏃而礪之、其入之不二亦深一乎。

續

【絲續】（ソクソク）（中国）引き續く號。（中国）白居易の琵琶行に、低眉信手續續彈。

【續絃】（ソクゲン）弓の弦の斷れたるを續ぐなり、再び妻を娶るに喩ふ。（中国）海內十洲記鳳麟洲條に、洲土多二鳳麟一、數萬各爲レ羣、羣鳳嗛及麟角、合煎作レ膏、名之爲二續弦膠一、此膠能續二弓弩已斷之弦一と。又た王僧孺の爲二姬人自傷詩一に、斷弦猶可レ續、心去最難レ留と。又た劉禹錫の懷二妓詩一に、金盆已覆難レ收水、玉砌長拋不レ續レ絃と。又た杜甫の詩に、麟角鳳鬚世共珍、煎膠續レ絃奇自見と。又た杜牧の詩に、天上鳳凰難レ得レ偶、世間那有二續絃膠一。

【續孟子】（ソクモウシ）（中国）書名。（中国）唐の林愼思の撰する所にして二卷あり、愼思以爲らく、孟子七篇は、阿の自ら著はす所にあらずして、弟子其言を記するものなり、故に孟軻の意を盡す能はず、因て孟子の言に據りて、梁大夫・梁惠王・梁王子・公都子・高子・公孫丑・屋廬子・戚丘蒙・齊宣王・萬章・宋臣・莊暴・彭更・陳臻の十四篇に分ちて編次せり、その體例は莊子・列子に似たり。

【續世說】（ソクセ）（セツ）書名。（中国）宋の孔平仲撰す、十二卷あり、此書は世說新語の續篇なり、德行・言語・政事・文學・方正・雅量等三十八門に分てり。

【續三通】（ソクサンツウ）書名。（中国）清、與一百四考二百五十二卷を合稱して、續三通と、皆清の乾隆帝の勅撰にして、續通典は、門目體例一に唐の杜佑の通典に據る、而して佑の書は私家の本に依るを以て、其見る所狹し、此書は國府の藏に徵したるを以て、收むる所廣し、續通志は門目體例一に鄭樵の書に依る、宋遼金元明五朝の事を記して、兼て唐代の紀傳を補ふ、考證の精確なる、學者を裨益すること尠からず、續通考は五代の事蹟を編め、馬端臨の書を續ぐ、故に續文獻通考といふなり。

【續弘簡錄】（ソクコウ）（中国）清名、南齊清の邵遠平の撰する所にして、四十二卷あり、祖父經邦の志を繼き、元史類編の事迹を詳かにするものなり。

【續列女傳】（ソクレツ）（中国）書名。（中国）作者詳かならず、劉向の古列女傳に續ぎ撰するものにして、一卷あり、東漢以來の婦女のみを集め、頌贊共に無し、古列女傳は、母儀・賢明・仁智・貞順・節義・辨通・醫の七傳に分つも、續列女傳は、其目を分たざるなり。

【續貂之譏】（ソクチウ）（中国）紹蟬の冠を著すべき用ふるを譏るなり。紹（テン）蟬は侍中の冠なり、蟬の羽を附けて文とし、貂の尾を飾とす。因て善からぬ物を善き物につゞいふとに用ふ。（中国）晉書趙王倫傳に、倫僭即帝位、孫秀爲侍中、中書監、濫用諸黨皆登二卿將一、其餘同謀者、皆超階超級、數日之間、遍滿二朝市一、貂蟬之飾、不二足以別一、狗尾續二貂蟬一、時人爲之語曰、貂不足、狗尾續、

【續資治通鑑】（ソクシ）（中国）書名。（中国）清の畢沅の撰にして、二百二十卷あり、司馬光の資治通鑑に續ぎ、宋遼金元の事跡を編年體に叙述せしもの、通鑑を續げる書數多あるも、此書を以て白眉とす。

【續文章軌範】（ソクブン）（中国）書名。（中国）七卷あり、舊本、明の鄒守益批選と署せり、然れども是書は、明代坊賈の手に成りしものにして、決して鄒の著選に非ず、謝疊山の文章軌範の例に倣ひ、七卷に分ち、放膽文小心文と題したれど、其の選む所の文は、必ずしも古文の律を拔けるに非ず、然れども上は周末より、下は明代に及び、名篇大作も亦往往其中に存すれば、座右に備へ、誦讀に供するも亦可なり。（中国）蘇山陽は、此書を不滿として、別に續柳歐蘇の文を鈔出して、謝選拾遺を作れり。

【續資治通鑑長編】（ソクシ）（中国）書名。（中国）宋の李燾の撰にして、五百二十卷を、原本殘缺して、今本は永樂大典より校補せしなり、司馬光の通鑑の例に倣ひ、宋の一朝八宗の事跡を採り、此書を作り、自ら長編と名づく、統鑑の朝に史臣に命じ、永樂大典より校補するに及び、畢沅之によりて、續資治通鑑の撰あるを得たり、以て此書の眞史たるを知

ゾベし。

【屬文】（ソクブン） 屬文章を綴ることをいふ。出典漢書賈誼傳に、誼年十八、以能誦詩書屬文稱於郡中。

【屬託】（ソクタク） 屬託は、ひに同じ、事を頼むなり。出典三國魏志諸葛誕傳に、有屬託、則顯其百、而承用之。

【屬纊】（ソククワウ） シの部屬（ショク）纊之際を見よ。

ソシリ 誘

【分誘】（ソシリ） 意人と俱に責めを受くるの意。出典國語に、敢不分誘乎。

【止誘莫如修身】 意誹謗を止るは、我身を修むるに如くなきをいふ。出典徐幹の中論に、語稱、救寒莫如重裘、止誘莫如修身、索晏莫如親冰。

ソツ 卒

【卒卒】（ソツソツ） 意急遽の貌。出典漢書司馬遷傳に、相見日淺、卒卒無須臾之間。

【卒然】（ソツゼン） 意前條に同じ。出典孟子梁惠王上篇に、卒然問曰、天下惡乎定と。又た史記滑稽傳に、朋友交游、久不相見、卒然相視、歡然道故。

【卒爾】（ソツジ） 卒（ソツ）爾に同じ。

【卒伍】（ソツゴ） 意一庶民の編制なり、五人を伍とし、百人を卒とす。二民籍なり、因て村閭の義とす。出典一周禮地官小司徒に、乃會萬民之卒伍而用之、五人爲伍、五伍爲兩、四兩爲卒。二史記項羽紀に、顧賜騎骨、歸卒伍。

【卒乘】（ソツジョウ） 意兵士の歩するを卒といひ、車に乘るを乘といふ。出典左傳隱公元年に、大叔完聚、繕甲兵、具卒乘。

【卒業】（ソツゲフ） 意事業を卒るをいふ。出典司馬相如の難蜀父老に、今又接之以西夷百蠻、力屈恐不能卒業。

【帥先】（ソツセン） 意率先に同じ、眞つ先きに立ちて行くこと。出典晉書に、躬稼穡之艱難、以帥先天下。

【率爾】（ソツジ） 意輕遽の貌。出典論語先進篇に、子路率爾對曰、云云。

【率爾】（ソツジ） 意蛇の名なり。出典孫子九地篇に、率然者、常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。

【率然】（ソツゼン）

【率吏】（ソツカウ） 意官名、時刻を測るを掌る。出典漢書百官公卿表に、太子率更令。顏注に、掌知刻漏、故曰率更。

【率循】（ソツジュン） 意率從ひ行ふ義なり。出典詩雅輔詁に、遵・遵・率・循・由・從・自也、遵・遵率循也と。又た書經顧命篇に、臨君周邦、率循天下、變和天下、用答揚文武之光訓。

【率先】（ソツセン） 意率を率ひ先きて事を行ふなり。出典史記絳侯世家に、丞相吾所重、其率先之。

【率爾人】（ソツジヒト） 意輕しハヅミなる人物。出典世說賞譽下に、王僧祐少便聰悟、叔父晉安撫其首、曰、見神明意用、當不作率爾人。

【率士之濱】 ヲ部普ヲ天之下を見よ。

【率乘】（ソツジョウ） 意兵士の歩するを卒といひ、車に乘るを乘といふ。出典左傳隱公元年に、大叔完聚、繕甲兵、具卒乘。

【率然】（ソツゼン） 意筆に、率然者、常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。

【率吏】（ソツカウ） 意官名、時刻を測るを掌る。出典漢書百官公卿表に、太子率更令。顏注に、掌知刻漏、故曰率更。

【率循】（ソツジュン） 意輕詁に、遵・遵・率・循・由・從・自也、遵・遵率循也と。又た書經顧命篇に、臨君周邦、率循天下、變和天下、用答揚文武之光訓。

【率先】（ソツセン） 意率を率ひ先きて事を行ふなり。出典史記絳侯世家に、丞相吾所重、其率先之。

【率爾人】（ソツジヒト） 意輕しハヅミなる人物。出典世說賞譽下に、王僧祐少便聰悟、叔父晉安撫其首、曰、見神明意用、當不作率爾人。

【率士之濱】 ヲ部普ヲ天之下を見よ。

【率地】（ソツチ） 意恨かなる意。出典唐の玄宗の詩に、洛陽芳樹映天津、瀟洒垂楊翠地新。

【無求備於一人】（ソナハル） 意才德兼ね備はるを一人に望むべからざるを戒めたるなり。出典論語微子篇に、無求備於一人。出典書經君陳篇に、爾無忿疾于頑、無求備于一夫。○書經伊訓篇に、與人不求備、檢身若不及。○論語子路篇に、君子不責備於一人。○淮南子氾論訓に、君子不責備於人也、求備焉、出典淮南子によりて、「此れ責備の論なり」と用ゐ、求備於一人の義とす。

【其旨遠】（ソノムネトホシ） 意旨意の深遠なるをいふ。出典易經繫辭下傳に、其稱名也小、其取類也大、其旨遠、其辭文、其言曲而中。

【佛其首】（ソノ） 意鳥を獻ずるものは、其の首を誤ちて轉ずるを佛といふ、佛は拂に通ず。出典禮記曲禮上篇に、獻鳥者佛其首、舌鳥則勿佛と。鄭注に、恐鳥噪害人、爲小竹竿、以挑轉其首也。

【晉其角】（ソノ） 意角は頭の上に在り、極めて上頭に進むことをいふ。出典易經晉卦に、上九、晉其角、維用伐邑、厲吉、无咎、貞吝。

【得其意】（ソノ） 意其人の意中を得るをいふ。出典北魏書寇謙仙勝傳に、甚得其意。

【思其艱】（ソノ） 意其の事の艱難なるを思ふをいふ。出典書經君牙篇に、厥惟艱哉、思其艱、功圖其易、民乃寧。

【有其善】（ソノ） 意其の一善事あるを自負するをいふ。出典書經說命中篇に、有其善、喪厥善、矜其能、喪厥功。

【失其守】（ソノ） 意狄が執り守るを失ふに、失其守者其屈。出典易經繫辭下傳

【其歸一也】（ソノ） 意其歸着する所は一樣なりといふ意。出典史記儒林傳に、然其歸一也。

【其麗不億】（ソノ） 意數の多きをいふ。麗は數なり。出典詩經大雅文王篇に、商之孫子、其麗不億。

【其爲人也】（ソノ） 意其の人柄をいふ。出典論語學而篇に、有子曰、其爲人也、孝弟、而好犯上者、鮮矣と。又た荀子脩身篇に、其爲人也、多暇日者、其出人也不遠矣。

【格其非心】（ソノ） 意其の不善の心を正すをいふ。出典書經冏命篇に、格其非心、俾克紹先烈。孟子離婁上篇に、惟大人爲能格君心之非、君義莫不義、君正莫不正、一正君而國定矣。

【河漢其言】（ソノ） 意言論の旨意を深遠荒渙たらしめ、測知するに難からしむる義なり。出典莊子逍遙遊篇に、吾驚怖其言、猶河漢而無極也。

【二三其德】（ソノ） 意心を一にせざるなり。出典詩經衞風氓篇に、士也罔極、二三其德と。又た同書小雅白華篇に、之子無良、二三其德。

【朱丹其轂】（ソノ） 意車の轂を朱塗にするなり、高貴の官吏となるなり。

【揭其航掛其背】（ソノ） 意揭雄の解嘲に、客嘲揚子曰、吾聞上世之士、人綱人紀、不生則已、生必上尊人君、下撫安世、折人之禁、信人之符、分人之祿、好青旄紫朱、丹其轂、懷人之符、分人之祿、好青旄紫朱、丹其轂と。又た淡書に、史二千石朱、兩龜、千石並六百石朱、左龜。出典史記田叔傳に、漢廷諸臣、孟、能出其右者。

【知其雄守其雌】（ソノ） 意雄は、剛にして、雌は、柔なり、柔弱の道を守りて、勝を求めざるなり。出典老子第二十八章に、知其雄、守其雌、爲天下谿。

【握其肮掛其背】（ソノ） 意事の要所をおさへるをいふ、肌はのどぶなり。出典史記劉敬傳に、夫與人鬬不搤其肮、拊其背、未能全其勝也。出典史記孫子傳に、批亢擣虛。

【叩其兩端而竭】（ソノ） 意兩端は兩頭の精粗を盡して、餘蘊なきをいふ。出典論語子罕篇に、子曰、吾有知乎哉、無知也、有鄙夫問於我、空空如也、我叩其兩端而竭焉。

【其進銳者其退速】（ソノ） 意其進行の銳利なるものは、退歩も速なるをいふ。出典孟子盡心上篇に、孟子曰、於不可已而已者、無所不已、於所厚者薄、無所不薄也、其進銳者、其退速と。又た論衡に、其進銳者、退速。

【其文好者身必剝】（ソノ） 意虎豹の如き森文の好き者は、それが爲めに皮を剝ぎとられる禍を招くをいふ。出典晏子春秋に、其文好者、身必剝、其角美者、身見殺、甘泉必竭、直木必伐。

【其施厚者其報美】（ソノ） 意多く人に物を施せば、又た大なる報酬を得るをいふ。出典淮南子繆稱訓に、其施厚者、其報美、其怨大者、其禍深。

【操其名以責其實】（ソノ） 意上たる人は名を正しくして、其實の行はるを責む、子の名あれば孝を責むるが如し。出典淮南子主術訓に、上操其名以責其實、臣守其業以效其功。

【知其一不知其二】（ソノ） 意事理の一端を知るも、其他に深き理由あるを知らざるをいふ。

ふ。【出典】莊子天地篇に、子貢以漢陰丈人事告孔子、孔子曰、彼識其一、不知其二と。又た史記に、上(漢の高帝)曰、公知其一未知其二。【出典】詩經小雅小旻篇に、人知其一、莫知其猷。

【正其誼不謀其利】【意義】凡そ一事を行ふに、唯その事をして義に叶はしめんことを務めて、利益の有無は、置て問はざるなり。【出典】漢書董仲舒傳に、夫仁人者、正其誼不謀其利、明其道不計其功、是以仲尼之門、五尺之童羞稱五霸、爲其先詐力而後仁義也。

【見其表未見其裏】【意義】事の本末を洞見する能はざるをいふ。【出典】尙書大傳に、孔子謂子夏曰、子見其表未見其裏。

【食其食者死其事】【意義】養はれて生活するものは、一旦急あるときには、一命を擲ちて其人の爲に盡すべきをいふ。【出典】說苑に、食其食者死其事、受其祿者畢其能。【出典】史記淮陰侯傳に、乘人之車者載其患、衣人之衣者懷其憂、食人之食者死其事。○新序に、食其食者不毀其器、蔭其樹者不折其枝。

【入其國者從其俗】【意義】入れば、其土地の風俗に從ふべしといふ。【出典】淮南子齊俗訓に、入其國者從其俗、入其家者避其諱。【出典】禮記曲禮上篇に、入竟而問禁、入國而問俗、入門而問諱。○孟子梁惠王下篇に、臣始至於境、問國之大禁、然後敢入。

【非其地樹之不生】【意義】樹を栽るに各〻その性に適する地あるをいふ。【出典】史記日者傳に、非其地樹之不生、非其墓敎之不成、夫家之敎子孫、當視其所以好。

【不知其子視其友】【意義】其の子の性行の善惡を知らんとせばその友人を見れば分るといふこと。【出典】荀子性惡篇に、不知其子視其友、不知其君視其左右。【出典】說苑に、欲知其子視其友、不知其君視其左右。○韓詩外傳に、不知其子視其母、不知其君視其所使、不知其子視其所友。○孔子家語に、不知其子觀其父、不知其人觀其友、不知其君觀其所使、不知其地觀其草木。

【其曲彌高其和彌寡】【意義】高尙なる音樂はこれに和するも彌寡きをいふ。【出典】宋玉の對楚王問に、是其曲彌高、其和彌寡。(ヤの部陽(ヤウ)春白雪を見よ)

【其大無外其小無內】【意義】廣大極無邊の意。【出典】呂氏春秋に、其大無外、其小無內、此之謂至貴。

【非其位而居之曰貪位】【意義】分外のことを望むをいふなり。【出典】史記商君傳に、非其位而居之曰貪位、非其名而有之、曰貪名。

【非其鬼而祭之諂也】【意義】吾等の祭るべき祖先にあらざるものを祭るは神に諂ふものなるをいふ。【出典】論語爲政篇に、子曰、非其鬼而祭之、諂也、見義不爲、無勇也。

【甄其磧礫不窺玉淵】【意義】村居は、共に通邑大都の事を談ずるに足らざるをいふ。【出典】左思の吳都賦に、甄其磧礫、不窺玉淵者、未知驪龍之所蟠也、習其弊邑、不覩上邦者、未知英雄之所聚也。

【金玉其外敗絮其中】【意義】表面のみを飾りて、裏面の之に伴はざるをいふ。【出典】劉基の賣柑者言に、又何往而不金玉其外敗絮其中也哉。

【不揣其本而齊其末】【意義】根本を糾めずして、枝葉にのみ驕せるの非なるをいふ。【出典】孟子告子下篇に、不揣其本而齊其末、方寸之木、可使高於岑樓。

【不以其所能者病人】【意義】君子の人を待つ道をいふ。【出典】禮記表記篇に、子曰、仁之難成久矣、唯君子能之、是故君子不以其所能者病人、不以人之所不能者制人、是故聖人之制行也、不制以己。

【與其媚於奧寧媚於竈】【意義】これ周の時の俗諺なり、竈を祀るには、尸(カタシロ)を迎へて奧に祭る、奧は室の西南隅に

して、室中の最も貴き座席なり、因てその君に親ぶるには、朝廷の上に將順して、無過の時に逢迎せざるに比す。舊解往往語意を失へり、今顧炎武の說に從ふて解釋せり。【出典】論語八佾篇に、王孫賈問曰、與其媚於奧、寧媚於竈、何謂也、子曰、不然、獲罪於天、無所禱也。

【殺其身有益於君則爲之】【意義】人臣の君に事ふる道をいふ。【出典】禮記文王世子篇に、仲尼曰、云云、問之、曰、爲人臣者、殺其身有益於君則爲之、況于其身以善其君乎。

【與其有諾責也寧有已怨】【意義】君子の交際の法をいふ。已は、人に許さざるをいふ、言ふは諾して與へざるより大なればなり。【出典】禮記表記篇に、子曰、口惠而實不至、怨富及其身、是故君子與其有諾責也寧有已怨、國風曰、言笑晏晏、信誓旦旦、不思其反、反是不思、亦已焉哉。

【其父殺人報仇其子必且行劫】【意義】其父が人を殺して仇を報じたるを見て、其子は人を殺して劫盜を爲す、これ徒らに外形を見て內意を察する能はざるをいふ。【出典】蘇軾の荀卿論の語。

【與其譽堯而非桀也不如兩忘而閉其所譽】【意義】堯帝の善行を譽めて桀王の惡行を誹らんよりは善惡兩方とも忘るるに如かざるをいふ。【出典】莊子外物篇の語なり。

二 厥

【告厥成功】【意義】天子に告げ奏するをいふ。【出典】書經禹貢篇に、禹錫玄圭、告厥成功。

【貽厥子孫】【意義】家業を立てゝ子孫に遺すをいふ。【出典】書經五子之歌篇に、明明我祖、萬邦之君、有典有則、貽厥子孫、關石和鈞、王府則有、荒墜厥緒、覆宗絕祀。【出典】詩經大雅文王有聲篇に、貽厥孫謀、以燕翼子。

【若崩厥角】【意義】物の一角を崩すが如く、易すきをいふ。厥は古の其の字。【出典】書經泰誓中篇に、予若崩厥角、予視天下、無辜、寧執非敵、百姓懷德、若崩厥角、嗚呼乃一德一心、立定厥功、惟克永世。

【慎厥初惟其終】【意義】人は、すべての終りを思ひて、その身を完うすべきをいふ、惟は思ふなり。【出典】書經蔡仲之命篇に、慎厥初惟厥終、終以不困、不惟厥終、終以困窮。【出典】書經仲虺之誥篇に、嗚呼、慎厥終、惟其初。

三 存

【存問】【意義】安否を問ふなり。【出典】史記孟嘗君傳に、孟嘗君使人存問馮諼、馮諼乃至薛、未到薛、百姓聞孟嘗君之賢、扶老携幼、而迎其主於道、馮諼乃以車載其券、而往焉、孟嘗君怪其早、而問之、馮諼曰、臣來過薛、而聞其民、扶老携幼、而迎其主於道、此所以爲君之所收者、而今君有千乘之權、而不能以義動之、而使之親其主者、此其所以爲君之所寄者、而今君有數千之積

纂三續に、强陪奉、村漢、見二貴覩一と。又た書畫金湯に、落劫九、一日、入二村漢一手。

【村儒】 ソンジュ 田舍の學者なり、固陋なるものをいふ。出處事文類聚に、遊旅中遇二村儒一、狀極耳鄙。

【村邑】 ソンイウ 村ムラなり、邑は城邑。出處宋書潘綜傳に、孫恩之亂、妖黨攻破二村邑一。

【村市】 ソンシ 村ムラのイチ場。出處書箱記に、嶺南村市滿時少、虛時多、故謂二之虛一。

【村郊】 ソンカウ 村ムラなり、郊は野なり。出處唐彥謙の和二陶淵明貧士詩一に、村郊各二父老一、面垢頭如レ蓬。

【村墅】 ソンシヨ 村ムラの別莊。出處謝詠の渡二淮河一詩に、天色混二波濤一、岸陰原二村墅一。

【村路】 ソンロ 村ムラのミチ。出處張謂の早梅詩に、一樹寒梅白玉條、迥臨二村路一傍二溪橋一。

【村閭】 ソンリヨ 村ムラの入口の門。出處唐書に、多出二菽粟一、盈之羅逝、散入二村閭一、下戶力農不レ能レ詣レ市。

【村校】 ソンカウ 村ムラの學校。出處元稹の白見二村校一、諸童競習レ詩。

【村店】 ソンテン 村ムラのセミ。出處歐陽詢の晨裝行に、村店月西出、山林鳥始來。

【村舍】 ソンシヤ 鄉人驚休上人一別詩に、山夜獨徒多信、大雨天村舍未レ催。

【村寺】 ソンヂ 村ムラのテラ。出處李咸用の早行詩に、發來經二畿縣一、村寺遠鐘聲。

【村中】 ソンチユウ 村ムラのナカ。出處杜甫の詩に、野外貧家遠、村中好客稀。

【村內】 ソンナイ 村ムラのナカ。出處梁武帝撰二流移詔一に、若流移之後、本鄉無二復居宅一者、村司三老及親即爲詣レ縣、占二請村內官地官宅一、令二相容受一。

【村笛】 ソンテキ 村ムラのフエ。出處白居易の琵琶行に、豈無二山歌與一村笛一、呦呦啞啞聊似レ鶯。

【村鼓】 ソンコ 村ムラの大鼓。出處杜甫の屏跡詩に、村鼓時急、漁舟熟簡輕。

【村妓】 ソンギ 村ムラの藝妓。出處白居易の酬二思黯相公見レ過詩一に、村妓不レ辭出、感君驟然咽。

【村童】 ソンドウ 鄉村ムラの小兒。出處王維の宿樣摩戍樓一詩に、田父草際歸、村童雨中牧。

【村翁】 ソンオウ 村ムラのオキナ。出處杜甫の詠懷古跡二の詩に、古廟杉松巢二鶴鶴一、荒村枳橘帶二烏鳶一。

【村史】 ソンシ 前條に同じ。出處開河記に、於二雍丘一至二大林一、林中有二小祠廟一、村史曰、古老相傳呼爲二隱士墓一。

【村酒】 ソンシユ 李倍巡官歸二永樂舊居一詩に、山泉飲レ懷流多變、村酒經レ歲味可レ憐。

【村樹】 ソンジユ 登二隱望一水詩に、旅泊依二村樹一、江樣擁戍樓。

【村家】 ソンカ 村ムラのイヘ。出處方干の山中言事詩に、日與二村家一事漁罔、樂二松蹊一若學二鄧翁一。

【村女】 ソンヂヨ 村ムラのオンナ。出處李端の送二路司諫侍一從叔一赴二洪州一詩に、村女解收レ魚、津童能用機。

【村神】 ソンシン 村ムラのカミ。出處賈島の送二韓湘一詩に、孤霞臨二石鏡一、絕澗映二村神一。

【村歌】 ソンカ 村ムラの歌。出處白居易の小庭亦有レ月詩に、村歌與二社舞一、客酒主人詩。

【村名】 ソンメイ 村ムラのナ。出處陸游の題二旅舍壁一詩に、村名步頭換、縣界驛前分。

【村流】 ソンリウ 村ムラのナガレ。出處杜甫の江村詩に、清江一曲抱二村流一、長夏江村事事幽。

【村夫子】 ソンフウシ 先生といふ義。出處陸游の詩に、今朝偶遇二村夫子一、借得齊民一卷書。

【村學師】 ソンガクシ 村里の固陋なる學者をいふ。出處小補韻會に、角里先生、今按角音錄、假借也、其實字形無二二、謂一撮鼻點之分、乃村學師欺童蒙語。

【村學究】 ソンガクキウ 醉編に、楊用修曰、杭俗有二社拾遺廟一、有二村學究一、題爲二杜十娘一、遂作二女傑一以配二劉伶一。又た林鬲の群書歸正集に、學究、謂府以官名、非也、唐選舉志有二學究科一、王莉公曰、本欲變二村學一爲二秀才一、不謂變二秀才一爲二村學一、蓋即今鄉落間小學師耳、故古人有二村學究之記一。

【村園門巷多相似】 出處唐人の詩の句。出處雍陶の城西訪二友人別墅一詩に、澄水橋西小路斜、日高翁未レ到二君家一、村園門巷多相似、處處春風枳殼花。

【孫子】 ソンシ 書名。出處周の孫武の撰にして、魏の武帝之に注す、三卷あり、史記孫武列傳に武の書十三篇を載す、漢書藝文志に孫子兵法八十二篇圖九卷を載す、其篇數の異同疑ふべし、故に杜牧の注に云ふ、武の書數十萬言、武帝其の繁冗を削り、其の精粹を筆して此の書をなすと、然らば則ち、漢志の八十二篇は、史記の十三篇にあらず、梅聖俞も此書に注して、これ戰國相傾くの說なりと云ひ、葉正は春秋の末、戰國の初め山林の士の爲る所、其書に吳に用ゐらるゝと云ふは其徒の詩大の說なりと言へり、然れども其文辭簡古奇古春秋の時の作ならん、兵法を論ずる所、亦、奇正兼ね至る、百代談兵者の最たり、其の所謂虛實奇正の論の如き、古今の勝敗皆之に由らざるはなし。

【孫吳】 ソンゴ 孫武と吳起となり、并に古吳子あり。出處史記に、孫武吳起列傳あり。又た史記貨殖傳に、白圭曰、吾治二生產一、猶二伊尹呂尙之謀一、孫吳用レ兵商鞅行レ法。

【孫卿】 ソンケイ 荀卿なり、孫と荀と聲相近し、故に又た孫卿といふ。出處漢書藝文志に、孫卿子三十二篇。出處清の謝墉の荀子序に、荀卿又稱二孫卿一、自司馬貞、顏師古に以來、相承以爲二避二漢宣帝諱一、故改レ荀爲レ孫、著漢宣名詢、漢時尙不レ諱二嫌名一、且如二後漢李恂、與二荀爽一、荀爽荀淑、但書二本字一、距反於周時人名、見二諸載籍一者二、而改稱之、若然則左傳自二荀息一至二荀瑤一、多矣、何不レ改耶、且即前漢書、任敖公孫敖、俱不レ避二元帝之名驚一也、蓋荀音同レ孫、語遂移易、如二荊軻在一衛、衛人謂二之慶卿一、而之燕、燕人謂二之荊軻一、又如二張良爲一韓信都一、漢夫論云、信都者、司徒也、俗音不レ正、曰、然則荀之爲レ孫、正如二此比一、以爲二避二宣帝諱一、當レ不レ然。

【孫枝】 ソンシ 白居易の詩に、稍桐老去長二孫枝一。出處老樹の新たに生じたる枝をいふ。

【孫山外】 ソンサンクワイ 孫山といふ人試驗に及第して、末席となるをいふ。出處逸齋閒覽に、孫山未レ名、得レ解有二同試者一、托山探得失、山曰、解名盡處是孫山、餘人更在二孫山外一。

【詒孫謀】 ソンボウ 後世子孫の爲めに有利なる計を爲すをいふ。出處詩經大雅文王有聲篇に、豐水有レ芑、武王豈不レ仕、詒二厥孫謀一、以燕二翼子一、仕は事なり。

【孫康映雪】 ソンカウエイセツ 孫康が家貧して油を買ふを得ず、故に冬夜に照らして書を讀みしをいふ。出處蒙求に、孫康映雪、車胤聚螢と。注に、孫氏世錄曰、康家貧無油、常映雪讀書、少小荷介、交遊不雜、後至二御史大夫一。

【孫可之集】 ソンカシシフ 書名。出處唐の孫樵の撰する所にして十卷あり、樵は文章を來無擇に學び、無擇は皇甫湜に學び、湜の文は退之に似て、稍奇を求む、又樵は湜に學びて亟らざるものなり、然れども、唐三百年間に在りて、散文體は韓二柳家の外に、李翺と孫樵とを推さゞるを、得ざるなりといふ。

【孫居士長嘯】 ソンキヨシチヨウセウ 晉の阮籍の友人に、孫居士といふものあり、長嘯に妙にして、鸞鳳の音ありて山谷に響くといふ。出處故事成語考に、孫居士長嘯一聲、山鳴谷應と。又た晉書阮籍傳に、嘗於蘇門山遇二孫登一、與商二略終古及二栖神道氣之術一、登皆不レ應、籍因長嘯而退、至二半嶺一聞有レ聲、若鸞鳳之音、蓋乎巖谷、乃登之嘯也。

【孫臏減竈策】 ソンヒンゲンソウサク 齊の孫臏の奇策、日每に竈の數を減じて、兵卒の次第に散じ去るの狀を爲して、弱を示したるなり。出處史記孫武吳起傳に、魏伐レ韓、韓請二救於一齊、齊使二田忌一爲二將以救一韓、魏將龐涓聞レ之、去二韓而歸一、魏使二太子申一將レ軍、以二龐涓一爲二上將軍一、涓自以二所能不一及、以法斷二其兩足一而黥之、齊使二至一魏、魏載以駕、至二孫臏一爲二齊軍師一、直走二魏都一、涓去、韓而歸、臏使二齊軍入一魏地一者爲二十萬竈一、明日爲二五萬竈一、又明日爲二二萬竈一、涓大喜曰、我固知齊軍怯、入二吾地一三日、士卒亡者過半矣、乃倍二日并行逐之、臏度二其行暮當一至二馬陵一、道隘而勞多、隱二可一伏兵、乃斫二大樹一、白而書曰、

龐涓死ニ此樹下ニ、令齊師萬弩射者、萬弩爽ニ道
謂伏ニ期ニ、暮見ニ火舉而發、涓果硬至ニ斫木
下ニ、見ニ白書ニ以火燭ニ之、萬弩俱發、魏師大
亂相失、涓自剄曰、遂成ニ豎子之名ニ、齊大破ニ
魏師ニ、虜ニ太子申ニ。【解】後漢書に、太后知ニ虞
詡ニ、詔停不ニ遣ニ、宣言請ニ兵須ニ到乃發ニ、兗閉
之、分鈔ニ傍縣ニ、詡因ニ其散ニ日夜進ニ、令ニ軍
士各作ニ兩竈ニ、日增ニ倍之ニ、或曰、孫臏減ニ竈ニ、
而君增ニ之ニ、兵法日行不ニ過ニ三十里ニ、而今日
且ニ二百里ニ、何也、詡曰、虜衆多ニ、吾兵少ニ、徐行
易ニ爲ニ所及ニ、速進則彼不ニ測ニ、虜見ニ吾竈日
增ニ、謂ニ郡兵來迎ニ、衆多行速ニ、必憚ニ追ニ我ニ、孫
臏見ニ弱ニ、吾今示ニ強ニ、勢不ニ同也。

【孫臏之用ニ兵】【解】文章の妙を形容する辭。【出】宋史畢士安傳に、天下論ニ君之文ニ、如ニ孫臏之用ニ兵ニ、孫臏之用ニ兵ニ、固所ニ指名者ニ矣。

【有ニ孫孟之風ニ】【解】學者、荀子孟子の風あるをいふ。孫は荀卿なり。【出】晋書李重傳に、受ニ業者千里而應ニ、有ニ孫孟之風ニ、猷鄉之操ニ。

【孫弘閤開無閑客ニ】【解】唐人の詩の句。【出】白居易の宿ニ鳳翔ニ、忘ニ御平津ニ、是要ニ津ニ、松閣晴看ニ山色近ニ、石渠秋放ニ水聲新ニ、孫弘閤開無ニ閑客ニ、傳說舟忙不ニ借ニ人ニ、何似綸ニ才濟ニ川外ニ、別開ニ池館ニ待ニ交親ニ。

尊

【尊】【解】酒を容るる器なり。【出】周禮に、六樽、犧樽、象樽、著樽、壺樽、大樽、太古瓦樽、山樽、刻ニ

其朝踐用ニ兩獻尊ニ、其再獻用ニ兩象尊ニ、皆有ニ
罍ニ、諸臣之所ニ昨也、秋嘗冬蒸、祼用ニ斝彝黃
彝ニ、皆有ニ舟ニ、其朝獻用ニ兩著尊ニ、其饋獻用ニ兩
壺尊ニ、皆有ニ罍ニ、諸臣之所ニ昨也、凡四時之閒
祀、追享朝享、祼用ニ虎彝蜼彝ニ、皆有ニ舟ニ、其朝
踐用ニ兩大尊ニ、其再獻用ニ兩山尊ニ、皆有ニ罍ニ、諸
臣之所ニ昨也。

【尊公】【解】人の父を稱するなり。【出】前漢文帝紀に、郡超請ニ省ニ其
父ニ、帝曰、致ニ意尊公ニ、志士痛ニ朝危ニ、忠臣哀ニ
王辱ニ。

【尊君】【解】前條に同じ。【出】一齊書に、虞人于ニ人干之前ニ稱ニ其父ニ曰ニ
尊君ニ。

【尊兄】【解】㊀我が兄を尊でいふ。㊁親しき友をいふ。【出】㊀齊書に、虞
平王鏗子ニ南宮ニ見ニ新沐早李ニ、遽怒曰、尊兄
已有、我何意無ニ。㊁三國蜀志馬良傳に、與ニ
諸葛亮書ニ曰、尊兄應期贊ニ世ニ、配ニ堯光ニ國ニ。

【尊屬】【解】目上の親屬なり。【出】家禮儀節に、尊屬謂ニ伯叔祖父母伯叔
父母之類ニ。

【尊者】【解】有德なるものをいふ。【出】無量壽經に、其名曰ニ尊者ニ、
了ニ本際ニ。注に、浮影云、有ニ德可ニ尊ニ、故曰ニ
尊者ニ。

【尊顏】【解】人を尊びていふ詞なり。【出】楞伽經に、不ニ愧ニ孫顏ニ。

【尊意】【解】人を敬して其意思を指していふ。【出】朱子文集に、聞ニ尊意ニ。

【尊像】【解】有德の人の像をいふ。【出】元好問の詩に、人言尊像神所ニ造ニ。

【尊敬】【解】尊び敬ふをいふ。【出】後漢書王符傳に、夫帝王所ニ尊敬者ニ天也。

【尊號】【解】天皇の號をいふ。【出】事物紀原に、項峻始學書曰、天地立有ニ天皇ニ、號曰ニ天靈ニ、卽帝王尊號之始也、堯曰ニ放勳ニ、舜曰ニ重華ニ、禹曰ニ文命ニ、成以謂ニ三帝之號ニ、周列國或有ニ之ニ、如ニ楚郟敖紀ニ東樓公ニ、吾敖平公ニ、是也、秦有ニ天下ニ、李斯王綰請上ニ尊號ニ曰ニ泰皇ニ、至ニ唐高宗上元二年九月上ニ尊號ニ曰ニ
始稱ニ天皇ニ、中宗神龍元年十月上ニ尊號ニ曰ニ
應天皇帝ニ、景龍元年八月丙戌加號應天神
龍玄宗開元已後、宰相始率ニ百官ニ上ニ尊號ニ
以爲ニ常制ニ、宋朝神宗熙寧中上ニ以ニ舊名無
實ニ、遂絕ニ之也ニ。又た蓋唐青太宗紀ニ、夏
四月丁酉御ニ顧天門ニ、軍吏執ニ諷利ニ、以獻捷ニ
自ニ是西北諸蕃ニ、咸請上ニ尊號ニ、爲ニ天可汗ニ
ト。又た石林燕語に、唐武后天授中加ニ尊號ニ曰ニ
聖ニ、曰ニ聖神皇帝ニ、中宗ニ神龍初ニ、加ニ尊號ニ曰ニ
應天皇帝ニ、明皇又以年冠ニ之ニ、稱ニ開元皇帝ニ、

其後更相衍多至ニ十餘字ニ、此乃生而爲ニ諡ニ、
果何禮哉。

【尊大】【解】傲慢なるをいふ。【出】後漢書に、馬援謂ニ隴囂ニ曰、子擥井底蛙耳、而妄自尊大ニ。子陽は公孫述の字なり。

【尊俎】【解】尊は酒を盛る器、俎は牲を載する器。【出】後漢書孔融傳に、起ニ謀於尊俎之閒ニ。

【尊酒相逢】【解】相逢ふて樽酒を酌み
かはすをいふ。【出】韓愈の
題ニ張籍ニ詩に、尊酒相逢十載前、君爲ニ壯夫ニ、
我少年、尊酒相逢十載後、我爲ニ壯夫ニ、君白
首。

【尊中酒不ニ空】【解】樽中に酒が滿ち
て居るをいふ。【出】世
說豪爽篇に、孔北海居ニ家失ニ勢ニ、賓客日滿ニ
其門ニ、愛ニ才樂ニ士ニ、常若不ニ足ニ、歎曰、坐上客
常滿ニ、尊中酒不ニ空ニ、吾無ニ憂矣ニ。

【尊客之前不ニ叱ニ狗】【解】貴賓を敬
ふなり。【出】禮
記曲禮上篇の語。

【巽ニ】ソン　ト部滕(トウ)六巽二を見よ。

【巽與言】【解】乖き悖ふ所なく其の言を誠にして人を導くなり。【出】論語子罕篇に、巽與之言、能無ニ說乎ニ、繹之爲ニ貴ニ。

四　殘

【殘饔】【解】朝夕の食なり、夕食を飧と
いひ、朝食を饔といふ。【出】孟子
滕文公上篇に、賢者與ニ民並耕而食、饔飧
而治。

五　遜　損

【傳ニ殘】【解】辨當を使ふをいふ。【出】史
記淮陰侯傳に、令ニ其裨將傳ニ殘ニ、
曰、今日破ニ趙會食ニ。

【損友】【解】交ければ卻て我に損ある友な
り。【出】エの部益友を見よ。

【損膳】【解】食膳の費を減ずるなり。
【出】セの部損ニ膳(ゼン)ニ を見よ。

【遜志】【解】志を遜下するをいふ。【出】
書經說命下篇に、惟學遜ニ志ニ、務ニ
時敏ニ、厥修乃來、允懷ニ于ニ茲ニ、道積ニ于厥躬ニ。

【遜志齋集】【解】明の方孝孺の撰する所にして、二十四
卷あり、孝孺は宋濂に學び、王道を明にし、
太平を致すを以て己の任とす、建文帝の
卽位するや、召されて侍講學士となる、建
文三年に北燕の兵寇に入るや、防戰大に
苦しみ、帝自焚して孝孺執はる、成祖は孝
孺を降服せしめんと、殷懃に慰諭するも
肯を投じ且つ哭し且つ罵る、成祖大に怒
りて、市に磔殺せしむ、是より殿に其文を
禁じたりしが、宣德年閒に至りて、稍傳播
し、黃孔昭、謝鐸と共に之を綴し、四十卷
となせしを其後顧璘之を合して刊行する
ものなり、其目は雜著・書・序・記・題跋・贊祭
文・誄・哀辭等なり。

六　撙　噂

【撙節】【解】裁抑なり、おさへて節限す
るなり。【出】禮記曲禮上篇に、君
子恭敬撙節、退讓以明ニ禮ニ。

【噂喈】【解】目の前にては諂ひ、蔭にて
は謗るをいふなり。【出】詩
雅十月之交篇に、噂喈背憎。

七　餐　樽　蹲

【餐霞】【解】仙人をいふ。餐は飧に通ず。
【出】類延年の五言詩に、中散(嵇
康)不ニ偶世ニ、本自餐霞人ニ。

【樽俎折衝】【解】筵席に樽俎を陳ね、外
閒に、其の要求を卻けて、自己の意志を貫
くは、卽ち千萬里外の兵衝を挫折するに
同じ、故にいふ。【出】晏子春秋に、不ニ出ニ樽
俎之閒ニ、而折ニ衝千里之外ニ。【解】戰國策に、
千丈之城、拔ニ之尊俎之閒ニ、百尺之衝、折ニ之
席之上ニ。

【樽前勸ニ醉是春風ニ】【解】唐人の詩
の句。【出】白居
易の詩に、花下忘ニ蹄因ニ美景ニ、樽前勸ニ醉是
春風ニ。

【鐏】【解】戈や鉾のイシヅキをいふ。【出】
禮記曲禮上篇に、進ニ戈者前其鐏ニ、
後ニ其刃ニ、進ニ予殺者ニ、前ニ其鐏ニ、鄭注に、鋭
底曰ニ鐏ニ、取ニ其鐏ニ地、平底曰ニ鐏ニ、取ニ其鐏ニ
地。

【蹲蹲】【解】舞ふ貌。又た喜ぶ貌。【出】詩
經小雅伐木篇に、蹲蹲舞ニ我ニ。又
た周雅釋訓に、坎坎蹲蹲喜也ト、注に、皆鼓
舞懽喜。【解】蹲は蹲に同じ。說文に、詩經々
引いて蹲の字を士に從へり。

【蹲鴟】【解】芋魁(ヤツガシラ)なり、卽ち
都賦の注に、蹲は坐なり、居なり、芋魁、鴟
鳥の蹲するに似たりといへり。【出】史記
貨殖傳に、卓氏曰、吾聞汶山之下、沃野、下
有ニ蹲鴟ニ、食ニ之ニ、至ニ死不ニ饑ニ。【解】史記の注
に、徐廣曰、古蹲字作ニ踆字ニ、といへり。又た

漢書貨殖傳には蹲鴟に作れり。【語源】頼山陽の集に、蹲鴟子傳あり、甘蔗「薩摩芋」の義とせり、これもと游戯の文なり、故に姑く假り用ゐしなり。

【蹲鴟爲羊】【語源】文選左思の蜀都賦あるを、羊なりと讀み誤りて蹲鴟を羊の略稱となせしなり。【出典】顔氏家訓勉學篇に、江南有二一樗貴、讀本蜀都賦注、作蹲鴟芋也、乃爲羊字、人饋羊肉、答書云、損惡蹲鴟、舉朝驚駭、不解字義久、後亦跡方知如此。

【蹲鴟爲惡鳥】【語源】蹲鴟を鴟梟と讀み誤りたる故事にて、不學のものを譏るに用ふ。【出典】諧噺錄に、張九齡知蒼吳不學、故相調謔、一日送芋書稱蹲鴟、蕭答云、損芋拜嘉、惟蹲鴟未至耳、然僕家多怪、亦不願見此惡鳥也、九齡以書示客、滿坐大笑。又た郎嶽記には千古の笑資となれど、漢書貨殖傳に、下有蹲鴟と。顔注に、玉篇曰蹲、音蹲、水鄕多鴟、其下有沃野千畝一とあり、顔師古は之を非として芋也と解せり、さらば蹲鴟を鴟とするは古人既にその說あり、これ聊以て蒼吳の爲めに氣を吐くに足らん。

ソレ 其

【其魚乎】ゥの部微ノ禹否其魚乎を見よ。

【其然豈其然乎】【語源】其れ然りとは、言者の說に同意するなり、豈に其れ然らんやとは、言者の說を疑ふて信じざるなり。【出典】論語憲問篇に、子問二公叔文子於公明賈一曰、信乎夫子不レ言不笑不レ取乎、公明賈對曰、以告者過也、夫子時然後言、人不レ厭二其言一、樂然後笑、人不レ厭二其笑一、義然後取、人不レ厭二其取一、子曰、其然、豈其然乎。

夕

【大戴禮】【語源】書名。【出典】此書は前漢の戴德の撰なり、宣帝の時、后蒼といふ者禮に明かなりしを以て、梁の人戴德、及び德が從兄の子戴聖、沛の人慶普に傳授したり、是に於て大戴小戴慶氏の三家並び立てり、劉向經籍を校し、禮一百三十篇を檢得し、第に因りて之を叙し、又明堂陰陽記三十三篇、孔子三朝記七篇、王氏史氏記二十一篇、樂記二十三篇、合して二百十四篇を得たり、戴德其煩重を刪り、合して之を記し、八十五篇と爲す、是則ち大戴禮なり、今の本は闕る缺けたり、第三十九篇を始めとせり。【考】後周の歴辯之が注十三卷を作れり、清の孔廣森補注十二卷を作れり。

五 他

【他】【語源】㊀カレと訓ず、字義に、他、彼也と。正字通に、方言呼人曰他と。㊁助字なり。【出典】㊀水滸傳第四回に、我去等史進商議、他又不知投那里去了。㊁玉緯の與盧員外象過祖處士興宗林亭の詩に、科頭箕踞長松下、白眼看他世上人と。白眼にして看る世上の人をと讀む。

【他年】【語源】前年に同じ。【出典】陸游の詩斗牛中、他年鈹角標調路、馬上遙看與此同。

【他日】【語源】㊀前日のことなり。㊁後日のことなり。【出典】㊀孟子梁惠王

下篇に、斃人藏倉者請曰、他日君出則必命有司所二之一と。又た滕文公上篇に、文公の世子の言を述べて、吾他日未二嘗學一問。㊁孟子滕文公上篇に、昔孔子沒二云一、他日子夏子張子游以二有若似一聖人一、欲レ以二所レ事二孔子一事之一と。又た同篇に、他日又求、見二孟子一。

【他言】【語源】他人の言語なり。【出典】國語楚語に、寧聞二他言一。

【他所】【語源】外の土地をいふ。【出典】漢書五行志に、風發二於他所一。【語源】南史に、落二他處一。

【他行】【語源】他の地に行くなり。【出典】魏書列女傳に、始云二他行一。

【他國】【語源】外の國。【出典】史記商鞅傳に、欲レ之二他國一。

【他力】【語源】淨土門に說く所にして、極惡の凡夫も愚痴の衆生も極樂に往生することを得るは、全く自力にあらず、彌陀願力の回向なりとの義なり。【出典】棲炭經に、或依二他力一と。又た敎行信證に、言二他力者、如來本願力也。

【他家】【語源】㊀他人の家。㊁彼といふこと、家は助字。【出典】㊀詩經唐風葛生篇の毛傳に、喻二婦人外成一於他家一。㊁杜審言の、戲贈趙使君美人一の詩に、羅敷獨向二東方一去、謾學二他家一作二使君一。

【他客】【語源】招かざる人をいふ。【出典】詩談餘に、康節笑曰、他客得レ至此耶。

【他見】【語源】他人の見たる所をいふ。【出典】遺敎法律に、他見生、謗。

【他志】【語源】心の專一ならずして他に思ふことあるをいふ。【出典】左傳襄公三十一年に、令尹似二君矣一、將有二他志一。

【他出】【語源】外へ出て行くこと。【出典】名山記、胡世寧傳に、調二兵江西一、方他出と。又た西陽雜俎に、沙彌道廣、因レ他出夜歸、中路忽遇虎。

【無他】【語源】外にこれといふべき事もなしといふ意。【出典】孟子告子上篇に、學問之道無二他、求二其放心一而已矣。

【靡他】【語源】前條に同じ。【出典】詩經鄘風柏舟篇に、之死矢靡他。

【無他端】【語源】他の奇策の以て端を發するなきをいふ。【出典】史記信陵君傳に、今有二難一無二他端一、而欲レ赴二秦軍一、譬如二以レ肉投二餓虎一、何效之有哉。

【無他腸】【語源】心腸の內、他の惡意なきをいふ。【出典】史記樗裏傳に、上以爲二廉忠實無二他腸一。

【託他出】【語源】留守を使ふこと。【出典】過庭錄に、有二建章黃生者一、問二先子所一居、以刺投一、誤、先子眛二其人一、託以二他出一。

【他山之石】【語源】石の粗惡なる、因より玉の比に非ず、然れども石を以て玉を磨きて始めて玉の美を成す、以て不善の人も善人の德器を增すの具たるに喩ふ。【出典】詩經小雅鶴鳴篇に、他山之石、可二以攻一玉と。又云、他山之石、可二以爲一錯と。錯は礪石なり。朱子集傳に、程子曰、玉出美也、石至惡也、然兩玉相磨、不レ可二以成一器一、以石磨之、然後成焉、猶君子之與小人、橫逆侵加、然後動二心忍一性、而遂德成焉。

【他鄕遇故知】【語源】他國に來て、故鄕の知己に出會すること。【出典】キの部久(キウ)旱逢二甘雨一を見よ。

【他席他鄕送客杯】【語源】唐の王勃キの部九月九日望鄕臺を見よ。

【爲他人作嫁衣裳】【語源】唐人の詩の句。【出典】全唐詩、秦韜玉の貧女の詩に、蓬門未識綺羅香、擬托良緣亂自傷、誰愛風流高格調、共憐世俗妒鴛鴦、敢將十指鈒圓巧、不把雙眉鬬畫長、苦恨年年壓金線、爲他人作嫁衣裳。【語源】今唐詩の注に、爲二他人一作二嫁衣裳一。又た一本に此の詩を載せて、爲を誠に作り、苦を最に作れり。【出典】薛逢の貧女吟に、殘妝滿面淚闌干、幾許閨情欲話難、蛮鬢頓梳愁拆鳳、翠蛾羞畫怨雙鸞、南鄰送女初鳴鼓、東壁迎妻已夢蘭、惟有深閨堪賀歲、年年長見繡林看。

【他人有心予忖度之】【語源】他人の心を、予は之を善く推測するといふことなり、【出典】詩經小雅巧言篇の語。【考】孟子梁惠王上篇に、齊宣王之を引けり。

打

【打】【語源】後世俗間の助語なり。【出典】項氏家說に、俗助語、每與本辭相反、其於打字用之尤多、凡打疊、打聽、打量、打睡、無非打者一と。又た字詁に、凡起而作其事一皆謂之打一耳。【考】大塚嘉樹の蒼梧隨筆卷五、打の字に就いて詳述せり。

【打扮】（ダフン）種々の裝飾をなして、形貌を變へること。打は助語。（中略）正字通に、扮、道息切、班去聲、今俗以爲裝飾、謂之扮戲と。又た黄公紹の詩に、十分打扮是杭州と。又た何應龍の詩に、尋常打扮最相宜。

【打包】（ハウ）（中略）行脚僧のフロシキ包を負ひたるをいふ。（中略）陸游の詩に、挈壺人沽村市酒、打包僧趁寺樓鐘。

【打算】（サン）數（かぞ）へることなり。打は助辭なり。（中略）錢塘遺事に、賈似道忌害一時任事國臣、行打算法、以汚之、向士璧守潭、費用委浙西閫、打算、趙葵守蕪、則委建康閫、打算、江淮廣帥皆受、監錢之苦。

【打頭】（トウ）數子由詩に、當時低頭誦經史、忽然欠伸屋打頭。（全篇ノ部讀書（シヨ）萬卷不讀律數君莫舞、知無術の條に見ゆ）

【打碑】（ヒ）張文潛の詩に、時有遊人打碑寶。（中略）碑文を石摺りにするなり。

【打碎】（サイ）（中略）うちくだく。（中略）南齊書に、即時打碎。

【打殺】（サツ）（中略）うち殺す。（中略）後漢書注に、使人撻打殺。

【打飯】（ハン）（中略）飯の支度をすること。（中略）歸田錄に、役夫餉飯曰打飯、本作投。

【打魚】（ギヨ）（中略）魚を網するをいふ。（中略）歸甫の集に、觀打魚詩あり。

【打瘍】（ヤウ）（中略）打ち疵を爲したるをいふ。（中略）周禮に、打瘍醫、跌者。

【打毬】（キウ）（中略）數人一團となり、毬（マリ）を打ちて爭ふ遊戲なり。（中略）荊楚歲時記に、寒食打毬と。注に、蹴鞠黄帝所造、本兵勢也、或云、起於戰國、按鞠與毬同、古人蹋蹴以爲戲也と。又た通鑑に、唐僖宗令陳敬瑄等四人擊毬、賜三川節度使、第一籌、即以爲西川節度使。

【打戮】（ダイ）（中略）ふ、戮は小印を押捺することをいふ。（中略）顧體集に、銀色低假、不肖之徒、造作愈巧、非銀匠識認、不能辨別、所押州縣微敗錢、設立銀匠數家、在於公署左右、令其鋒剪倍色眞故則打戮赴納不、足則下、爐傾銷、誠爲民便。

【打秋風】（シウフウ）（中略）人に依頼し來るものをいふ。（中略）呼絲由筆に、今人干謁者、謂之打秋風。

【打魚船】（ギヨセン）（中略）水滸傳に、兩隻打魚船。

【打夜胡】（ヤコ）（中略）やくはらひ、除夜に行はるゝ者、追儺なり。（中略）月令廣義除日下に、夢華錄自入此月、貧者每十數人爲群、裝神鬼、男婦以鐘馗、鬼門乞錢、名打夜胡、亦驅祟之類。

【打埃塵】（アイヂン）ふ（中略）清嘉錄に、風將發、擇蕙書宜掃、舍字日去、庭戶塵穢、或有在二十三日、二十四日及二十七日者、俗呼打埃塵。

【耕田欲雨刈欲晴】（中略）宋人の詩の句。（中略）蘇軾の泗州僧伽塔の詩に、我昔南行舟繫沛、逆風三日沙吹面、舟人共勸禱靈塔、香火未敢旗脚轉、回頭頃刻失長橋、卻到龜山下、未朝飯、至人無心何厚薄、我自饑、私欣所便、耕田欲雨刈欲晴、去得順風來者怨、若使人人禱輩遂、造物應須日千變、我今身世兩悠悠、去無所、逐來無戀、得行固願留不惡、每到有求神亦倦、退之舊云三百尺、澄觀所骨今已換、不緣俗士汚丹梯、一看雲山塗淮甸、（中略）因學杞聞に、嘗夢得何卜賦云、同涉於川、其時在風、沿者之吉、泝者之凶、同藝於野、其時在澤、伊種之利、乃穫之尼、東坡詩、耕田欲雨刈欲晴、去得順風來者怨、本此意。

【多聞】（タブン）（中略）博聞に同じ、モノシリなり。（中略）書經說命下篇に、人求多聞、時惟建事學于古訓、乃有獲と。又た荀子修身篇に、多聞曰博、少聞曰淺。

【多藝】（ダイ）多材多藝を見よ。

【多能】（ノウ）才能多きをいふ。（中略）論語子罕篇に、子聞之曰、大宰知我乎、吾少也賤、故多能鄙事。

【多少】（セウ）（一）多きと少きとなり。（二）多きをいふ。（中略）（一）老子第六十三章に、大小多少、報怨以德と。又た史記禮書に、聖人者道之極也、以財物爲用、以貴賤爲文、以多少爲異、以隆殺爲要。（二）孟浩然の春曉の詩に、夜來風雨聲、花落知多少。

【多言】（タゲン）（中略）能言なり。（二）多辯なり、饒舌に同じ。（中略）禮記に、是夫多言。（三）詩經鄘風將仲子篇に、仲可懷也、人之多言、亦可畏也。

【多疾】（シツ）（中略）身に疾の多きをいふ。（中略）史記留侯世家に、性多疾、即道引不食穀。

【多分】（ブン）（中略）多くといふこと。（中略）諸經要集に、我與汝多分。

【多謝】（シヤ）（中略）厚く禮を述ぶること、多は厚なり。（中略）漢書趙廣漢傳に、界上亭長曰、至府爲我多謝問趙君。

【多故】（コ）（中略）多難に同じ。（中略）國語に、王室多故、余懼及焉。

【多事】（ジ）（中略）種々事の多きをいふ。（中略）孔子家語觀周篇、金人銘に、毋多事、多事多患と。又た莊子天地篇に、多男子則多懼、富則多事。

【多士】（シ）（中略）書經周書の篇名にして眞古文なり。（中略）武王已に洛邑に都せんとするの志あり、故に周公殷を伐ちし後も、其餘民猶ほ反覆常なきを以て、之を洛邑に遷し、然る後に成周を建て、廬舍を造り、疆場を定め、其完く成るに及び、此等多士に成王の命を勵て告げしもの、即ち此篇にして、又其名の因て來る所なり、然るに序に成周既成、遷殷頑民、周公以王命誥作多士と曰ふは謬れり、而して此篇に言ふ所は周の殷に代て天下を有ちしは、即ち殷の祖湯王夏の命を革めしと一般にして、皆天意民心に從ひて爲せるもの、敢て一個の私より出でしものに非ず、故に汝等多士能く周に服事し、此邑に於て替偽あり、毒考あり、以て爾子孫の爲めに家を興すの始祖となし、若し然らざれば、鞏寇に其身に及ばんとの意なり

【多方】（ハウ）（中略）書經周書の篇名にして眞古文なり。（中略）成王政に即くの明年、奄と淮夷と叛きしを以て、成王奄を滅し、役より歸りて此篇を作る、亦誥の體なり、當時天下粗定ると雖、猶殷民にして周の粟を食むを屑とせざる者あり、殊に四方の士、紛々焉として周に心服せざる者も亦尠からず、故に天下四方の衆に誥諭せしなり、即ち序に成王歸自奄在宗周誥庶邦作多方と曰へるが如し、此篇は夏を滅しゝは殷にあらず、殷を殄ちしは周にあらず、皆是不德を以て自ら速けるもの、而して天實に之を致す、今周の天下を得るは修德の餘に出ず、而して亦天之を致す、故に爾多方克く周王の命を奉じて悖ることなかれ、必ず賚の大なるものあらんとの意を反復す、又た古人此篇を評して曰く會已に畢て猶餘情あり、語已に終て猶餘語あり、曖昧の光、猶ほ嘩然として簡冊に溢ると。

【多錢翁】（センオウ）（中略）金錢を多く有する老人をいふ。（中略）貨耳集に、有一多錢翁、每自誇侈。

【無多子】（ダ）（中略）多きことなしといふこと。（中略）陶煬帝の詩に、見面無多子、開名爾許時と。又た傳燈錄に、臨濟曰、元來黄檗佛法無多子。

【無多地】（ダ）（中略）少きをいふ、地の字は助辭なり。（中略）潘芳勳の詩に、水村選勝無多地。

【多多益善】（中略）兵數の多き程、益々善く之を用ふるをいふ。（中略）史記淮陰侯傳に、高帝嘗與韓信言諸將能否、各有差、上問曰、如我能將幾何、信曰、陛下不過能將十萬、上曰、於君何如、曰、臣多多而益善耳。（中略）漢書に、多多益辨に作る。

【多言數窮】（中略）言多ければ、しばしば困窮するをいふ。（中略）老子第五章に、多言數窮、不如守中。

【多賤寡貴】（中略）天下の商品多寡によりて其の價の高下をなすをいふ。（中略）管子に、夫物多則賤、寡則貴、重則散、輕則聚、人君知其然、故謹國之衆、不足而御、其財物。

【多材多藝】（中略）才能の多きこと。（中略）書經金縢篇に、予仁若考、能多材多藝、能事鬼神也。予とは周公自ら言ふなり。

【多識君子】（中略）博識の君子といふ意。（中略）庾書褚遂良傳に、帝悅曰、人之立身、不可以無學、遂良所謂多識君子也。

【多岐亡羊】（中略）學問の道多端なるを以て、眞理を失ふに喩ふ。（ハの部亡（バウ）羊之暎を參看せよ）（中略）列子說符篇に、楊子之隣人亡羊、既率其黨、又請楊子之豎追之、楊子曰、嘻亡一羊、何追者之衆、隣人曰、多岐路、既反、問、

獲羊乎。曰、亡羊之矣。曰、奚亡之。曰、岐路之中又有岐焉、吾不知所之之、所以反也、都子曰、大道以多岐亡羊、學者以多方喪生、學非本不同、非本不一、而末異若是、唯歸同反一、爲亡得喪。【韓非】韓非子說林篇に、楊子見岐路而哭之、爲其可以南可以北也。

【多錢善賈】チの部長（チャウ）袖善舞多錢善賈を見よ。

【多知爲雜】卻て雜駁にして、紀律なきをいふ。【出處】揚子法言問神篇に、或曰、淫南太史公言、其多知歟、何其雜也、曰雖乎雜、人病以多知爲雜、惟聖人爲不雜。

【多方以誤之】【意義】種々の方略を廻らして敵を欺くをいふ。【出處】左傳昭公三十年に、伍員對曰、楚執政衆而乖、莫適任患、若爲三師以肄焉、師至、彼必皆出、彼出則歸、彼歸則出、楚必道敝、或肄以罷之、多方以誤之、既罷而後以三軍擊之、必大克之。

【無多言多言多敗】【意義】多辯は弄す可からず、饒舌せば過ち多しとの意。【出處】孔子家語觀周篇に、金人銘云、無多貫、多言多敗、無多事、多事多患。

【吒食】【意義】舌鼓をうちて食ふこと。【出處】禮記曲禮上篇に、母放飯、毋流歠、毋吒食、毋囓骨。

【朶頤】【意義】頤を垂れ動かして物を求めて食はんとするなり。【出處】易經頤卦に、初九、舍爾靈龜、觀我朶頤。

七

【佗佗】【意義】人の書翰を稱する敬語なり。【出處】コの部五雲の二を見よ。【意義】優美なる貌にて、俗にシトヤカといふこと。【出處】詩經齊風君子偕老篇に、委委佗佗。

【佗傺】【意義】志を失ふ貌、佗は立つ貌、傺は住なり。【出處】離騷に、忳傺鬱邑人謂住曰傺。注に、佗傺、失志貌、傺住也、楚辭に、文章の宇句の穩當なるをいふ。品字三二字ともに易ゆるなり。【出處】唐の丁芝仙の詩に、十千萬酒、家常談に、支那の俗語の拿げて、那は ッシ、カフル、ことなり、居家必用に云、時暫移用曰那移。那換の語を拿げて、那は ッシ、カフ那又移也、今以移動謂之那移と。又た品字箋に云、スと讀むべし、又はカフルと讀みてもよし（正此）といへり。疑ふらくは那換は兌換の借字ならん。

【妥帖】【意義】妥換、二字ともに易ゆるなり。【出處】唐の丁芝仙の詩に、十千萬酒、家常談に、支那の俗語の拿げて、那は ッシ、カフ那移。那換の語を拿げて、那は ッシ、カフルことなり、居家必用に云、時暫移用曰那、變改原物曰換と。又た品字箋に云、那又移也、今以移動謂之那移と。ウツスと讀むべし、又はカフルと讀みてもよし（正此）といへり。疑ふらくは那換は兌換の借字ならん。

【妥帖】【意義】文章の宇句の穩當なるをいふ。妥は安なり、帖は定なり。品字箋に、帖、貼也、又凡事之靜而不動、謂之妥帖と。又た王逸の楚辭序に、義多邪易、事不妥帖と。又た韓愈の薦士の詩に、妥帖力排奡。

【拖】【意義】カヂをれちる。【出處】王安石の彭蠡詩に、東西拖、舵萬舟回。

【拖子】【意義】鑿に、儚傀、背曲不伸也、俗謂之拖子。

強國が弱國を并呑せんとするに用ふ。

【朶雲】【意義】人の書翰を稱する敬語なり。【出處】コの部五雲の二を見よ。【意義】優美なる貌にて、俗にシトヤカといふこと。【出處】詩經齊風君子偕老篇に、委委佗佗。

【佗傺】【意義】志を失ふ貌、佗は立つ貌、傺は住なり。【出處】離騷に、忳傺鬱邑人謂住曰傺。注に、佗傺、失志貌、傺住也、楚辭に、文章の宇句の穩當なるをいふ。品字箋に云、支那の俗語の拿げて、那は ッシ、カフ那移。那換の語を拿げて、那は ッシ、カフルことなり、居家必用に云、時暫移用曰那、變改原物曰換と。又た品字箋に云、那又移也、今以移動謂之那移と。ウツスと讀むべし、又はカフルと讀みてもよし（正此）といへり。疑ふらくは那換は兌換の借字ならん。

【妥帖】【意義】文章の宇句の穩當なるをいふ。妥は安なり、帖は定なり。品字箋に、帖、貼也、又凡事之靜而不動、謂之妥帖と。又た王逸の楚辭序に、義多邪易、事不妥帖と。又た韓愈の薦士の詩に、妥帖力排奡。

【兌換】【意義】兌換、二字ともに易ゆるなり。【出處】唐の丁芝仙の詩に、十千萬酒、家常談に、支那の俗語の拿げて、那は ッシ、カフ那移。那換の語を拿げて、那は ッシ、カフルことなり、居家必用に云、時暫移用曰那、變改原物曰換と。又た品字箋に云、那又移也、今以移動謂之那移と。ウツスと讀むべし、又はカフルと讀みてもよし（正此）といへり。疑ふらくは那換は兌換の借字ならん。

【拖】【意義】カヂをれちる。【出處】王安石の彭蠡詩に、東西拖、舵萬舟回。

【拖子】【意義】鑿に、儚傀、背曲不伸也、俗謂之拖子。

二

【拿獲】【意義】拿は叔加反、（音ダ）拏の俗字なり、康熙字典に、拘捕罪人曰拏、俗作拿とあり。【出處】漢書卷二十三に、巡路捕壯拿獲盜賊逃人と、又た云、協力擒拿。

【蛇行】【意義】蛇の行くが如く、匍匐して行くをいふ。【出處】戰國秦策に、蘇秦將說楚王、路過洛陽、父母聞之、清宮除道、張樂設飲、郊迎三十里、妻側目而視、傾耳而聽、縷蛇行匍伏、四拜自跪而謝。

【蛇足】畫蛇添足を見よ。

【蛇態】【意義】蛇は大、態は小、皆人を害する者に喩ふ。【出處】國語に、爲態弗振、爲蛇將若何。

【蛇身人首】【意義】身は蛇にして、首は人なり、古の天皇の異樣の相貌を形容していふ。【出處】司馬貞の三皇本紀に、太皞庖犧氏風姓、代燧人氏、繼天而王、母曰華胥、履大人迹於雷澤、而生庖犧於成紀、蛇身人首有聖德と。又云、女媧氏亦風姓、蛇身人首、有神聖之德。

【蛇身人面】【意義】神の異形をいふ。【出處】拾遺記に、又見一神、蛇身人面、禹因與語、神即示禹八卦之圖、列於金板之上。

【畫蛇添足】【意義】蛇は固と足なし、然るに蛇を畫きて足を添ふ、以て無用贅物の事に喩ふ。【出處】戰國齊策に、昭陽爲楚伐魏、覆軍殺將、得八城、移兵攻齊、陳軫爲齊王使、見昭陽曰、楚有制者、賜其舍人巵酒、舍人相謂曰、數人飲之、不足、一人飲之有餘、請畫地爲蛇、先成者飲酒、一人蛇先成、引酒且飲、乃左手持巵、右手畫地、曰、吾能爲之足、未成、一人之蛇成、奪其巵曰、蛇固無足、子安能爲之足、遂飲其酒、爲蛇足者終亡、其酒、今君攻魏、破軍殺將、得八城、不勝兵欲攻齊、猶爲蛇足也、昭陽以爲然、解軍而去。

【見蛇首知長短】【意義】蛇の首を見れば其の身の長短を知る、一斑を見て全豹を知るの類なり。【出處】淮南子氾論訓に、蛇舉首尺而縊短可知也、象見其牙而大小可論也。

【蛇化爲龍不變其文】【意義】小物或は大物と化し去るも、猶ほその舊態を存するものあるをいふ。【出處】史記外戚世家に、蛇化爲龍、不變其文、家化爲國、不變其姓。

【舵工】【意義】楫を取る船頭なり。【出處】顧樂集に、舵工宜加稿俸、稍婆勿與言錢、疑與飲食勿輕入口、邂逅之交不可傾心。

【援涉】【意義】手にてもみなり。【出處】詩經邶風匏有苦篇に、薄言涉我私と。鄭箋に、汗煩擾之と。釋文に、涉援莎也、錢音諸何切。

【茶毘】【意義】火にて物を焚くことを茶毘といふ。即ち梵語闍毘多の略なり。或說に茶は茶に作るを正しとす。【出處】藝林の曹溪夜話、傳燈錄、燈花落、一僧字上一口占に、山堂夜半淚、燈下看傳燈、不覺燈花落、茶毘一個僧と。又た翻譯名義

に、天竺第九祖入滅、衆以旃檀香油、屠維羅、燈、屠維即茶毘、燒化也。【出處】人が死したるとき、之を火化するを、茶毘一片の烟となるといふは、之を焚くによりていふなり。

【唾壺】【意義】ツバキを吐き入るゝ壺なり。【出處】孔叢子に、孔臧與子魚書、侍中子國、名達淵博、故叢與衆臣並參、侍見待崇禮、不供褻事、獨得掌御唾壺、朝廷之士莫不榮之と。又た西京雜記に、廣川王發、魏襄王冢、得玉唾壺と。又た世說豪爽篇に、王處仲每酒後、輒詠老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已、以如意打唾壺、壺口盡缺。

【唾如花】【意義】美人趙飛燕の唾液が飛びて花の如くなりしをいふ。【出處】飛燕外傳に、后（飛燕）與昭儀（趙合德）坐、誤唾昭儀好袖、昭儀曰、后能若此、以爲石華、假令尚方爲之、未必廣袖。

【淡巴菰】【意義】烟草なり。【出處】類聚に、姚名達淡巴菰、一名金絲醺、旅舍書を引て云、呂宋國有草、名淡巴菰、一名金絲醺。

【嬉】【意義】ナマケルなり。【出處】漢書張膠傳に、惰慢亡狀。

【嬉游之具】【意義】具。【出處】漢書谷永傳に、車馬嬉游之具。

【酡顏】【意義】酒に醉ふた顏なり。【出處】劉禹錫の詩に、酡顏俠少停歌聽。

【躲閃】【意義】玉篇に、躲は丁果切、（音ダ）身なりとあり、躲閃は身をかはして避け讓るゝなり。【出處】水滸傳第五回に、撲仗躲閃、抵當不住。

【駝鳥】【意義】鳥の名、西域の產、形、駱駝に似たり、故に名づく。【出處】後漢書和帝紀の注に、大爵類及身膺蹄、都似橐駝、擧頭高八九尺、張翅丈餘、食大麥、其卵如甕、即今之鴕鳥也。

【駝峯炙】【意義】駝鳥の背の隆起する肉を取りて炙ものとなしたるをいふ。【出處】錦字箋に、將軍曲良娥、爲駝峯炙。

【墮落】【意義】上より下へ落つるなり、因て物の搖け落つること、又た人の惡道惡事に陷るにもいふ。【出處】詩經召南摽有梅篇の毛傳に、盛極則墮落と。又た荀子富國篇に、毀壞墮落と。注に、墮荀求功利、旋即毀壞墮落、必反無成功也と。又た潘岳の西征賦に、名節溢以墮落と。又た法華經に、或當墮落爲火所燒。

【墮淚碑】ケの部覩山碑を見よ。

【墮胎藥】【意義】南史徐孝嗣傳に、孝嗣在孕、母不願有子、以撊衣杵自叉其腰、并服墮胎藥、胎更堅。

【墮馬髻】【意義】婦人の髻の名、髻の一邊に、にかたよれるもの。【出處】後漢書梁冀傳に、冀妻孫壽、色美而善爲妖態

一作二愁眉一、啼妝、隨馬聲、折腰步、巖齋笑、以爲二嫺態一。注に、風俗通曰、隨馬聲者側、在二一邊一。

【隨紫飄紅】 紫色紅色の花が散へり落つるをいふ。出典潘岳の詩に、紛紛墜紫又飄紅。

【懦夫】 懦弱者の弱き者。出典孟子萬章下篇に、聞二伯夷之風一者、頑夫廉、懦夫有二立志一。

【懦弱】 懦は怯る、弱は柔なり。出典左傳昭公二十年に、子產曰、水懦弱、民狎而翫之、則多死焉。

難

【儺】 難儀 ㊀また難に作る。オニヤラヒと訓じて、鬼面を着けて疫鬼を驅る儀式なり。㊁疫鬼を驅る儀式を行ふ人。出典㊀周禮に、方相氏掌二蒙二熊皮一、黃金四目、玄衣朱裳、執二戈揚一盾帥二百隸一而時儺以索二室毆一疫。又た禮記月令篇に、季春命二國難一九門一。又た論語鄉黨篇に、鄉人儺、朝服而立二於阼階一。又た後漢書禮儀志に、季冬月、大享羣、先二臘一日、發二大儺一、曰二大逐疫一。㊁海塗臣の詩に、豈異二帶面鼉一。

【鼉】

【鼉鼓】 鼉は蜥蜴に似て長け一丈餘、皮は鼓に冒ふべし。出典詩經大雅靈臺篇に、鼉鼓逢逢と。又た史記李斯傳に、建二翠鳳之旗一、樹二靈鼉之鼓一。

乃

【乃父】 ナの部乃(ナイ)父を見よ。

【乃公】 ナの部乃(ナイ)公を見よ。

大

【乃至】 ナの部乃(ナイ)至を見よ。

【乃往】 ナの部乃(ナイ)往を見よ。

【乃者】 ナの部乃(ナイ)者を見よ。

【大圜】 天をいふ、圜は圓に同じ。出典呂氏春秋序意篇に、黃帝之法二天地一、大圜在上、大矩在下、汝能法之、爲二民父母一。高注に、圜、天也、矩、地也。

【大明】 太陽の異稱なり。出典禮記學記篇に、大明生二於東一。

【大昕】 晨なり。出典禮記學記篇に、天子視二學、大昕鼓徵、所以警二衆一也。

【大雪】 オホユキなり。出典左傳隱公八年に、平地尺爲二大雪一。又た孝經緯に、小雪後、斗指二壬日一爲二大雪一、十一月節也、積陰爲雪、至二此日一興然而大。

【大地】 輿地をいふ。出典中阿含經に、統二領大地一。

【大東】 猶ほ極東といふがごとし。出典詩經商頌閟宮篇に、海荒二大東一。毛傳に、大東、極東海邦近海之國也。

【大海】 海なり。出典列子湯問篇に、渤海之東有二大壑一焉、名曰二歸墟一。又た莊子天地篇に、大海之爲二物也一、注

【大塊】 ㊀天地なり。㊁天地が萬物を生ずることにいふ、造化といふと相似たり。出典㊀莊子齊物論篇に、夫大塊噫氣、其名爲二風一。㊁莊子大宗師篇に、大塊載二我以形一、勞二我以生一、佚二我以老一、息二我以死一。又た郭璞の江賦に、煥二大塊之流形一。

【大山】 大なる山。出典山海經に、有二大山一、名曰二崑崙之丘一。

【大野】 廣大なる野原をいふ。又た地名。出典書經禹貢篇に、大野既瀦。

【大潮】 潮の大に滿るときをいふ。出典宋史河渠志に、遇二大潮一必盤越流注。

【大藪】 大なる林藪のこと。出典宋史吳廷祚傳に、秦州夕陽鎮、西北接二大藪一。

【大庭】 朝廷の廟庭をいふ。出典韓非子解老篇に、議二於大庭一。

【大冢】 大なる墓域をいふ。出典越絕書に、獨山大冢者、勾踐自治以爲冢。

【大麓】 大なる林麓をいふ。出典書經舜典篇に、納二于大麓一、烈風雷雨弗迷。

【大陸】 大なる陸地なり。出典爾雅に、高平曰二陸一、陸曰二阜一。

【大路】 大道に同じ。出典詩經鄭風遵大路篇に、遵二大路一兮。注、子之

【大城】 高大いなる城。出典後漢書馮奔傳に、至二臨淄大城一、東將攻奔、奔色挫、其餘、令步不敢進、故示二弱以盛一、其氣、乃引歸二小城一、陳二兵於內一。

【大府】 財幣を掌る官なり。出典康照字典に、掌二中幣之官一、皆曰二府一。又た周禮天官に、大府、玉府、內府、外府。

【大內】 ㊀天子の寢所をいふ。㊁品字箋に、凡人寢室皆曰二臥內一、而天子之禁中則曰二大內一、大言二其廣一、謂二非二諸王以下之所一敢比擬一也。㊂左思の魏都賦に、同服二大內一。又た史記景帝紀に、以二大內一爲二二千石一、董二左右內官一屬二大內一。注に、大內は京師の府藏なり。

【大門】 正門をいふなり。出典禮記曲禮上篇に、車驅而騶、至二于大門一。

【大統】 天子の系統なり、即ち繼嗣をいふ。出典漢書に、皇后之子、宜承二大統一。

【大邦】 大國といふが如し。出典書經武成篇に、大邦畏二其力一、小邦懷二其德一。

【大臣】 道を以て君に事ふる者。出典論語先進篇に、所謂大臣者、以道事レ君、不可則止。

【大寶】 天子の位なり。出典易經繫辭下傳に、聖人之大寶曰二位一。

【大君】 天下の君となるものをいふ。出典易經師卦象傳に、大君有レ命、以正レ功也。

【大吏】 高き官吏をいふ。出典史記秦始皇紀に、大吏持二祿取一容。

【大尉】 官名なり、軍事を掌る。出典漢書百官公卿表に、大尉秦官、掌二武事一。

【大夫】 官名、位塊は卿の下士の上なり。出典白虎通に、大夫之爲二言大扶一、進人者也、故傳云、進賢達能、謂之之大夫也。

【大赦】 罪人を總らず放免するなり。出典史記始皇紀に、大二赦天下一。又た文獻通考刑考に、宋朝赦令之制、其非二尊親一則常赦不レ原者咸除、之、其大釋二雜犯死罪以下一、皆謂二之大赦一、或止謂之赦、新犯死減等、而餘罪釋之、流以下減一等、杖笞釋之、皆謂二之德音一、亦有二釋雜犯罪至一死者、其恩霈之及、有止於京城、兩京兩路一、路數州之地者、則謂二之曲赦一。

【大守】 外郡に、漢以丞相史、刺二察州郡一、謂二之刺史一、刺史太守不レ同、今混呼爲一、非也。觀二後漢郡國志一、可二見矣一。漢制自三輔之外分二九州一、九州控二郡國一、州部有二刺史一、郡國有二太守一、今按、閻斷曰、守者秦置也、天下置二三川守一、伊河洛也、漢改曰二河南守一、如二豫州刺史部一、則潁川汝南六郡國、冀州刺史部、則魏郡而下九郡國、幽內則河南尹、京兆尹、而以司隸校尉部之外、則刺史部之郡國、則太守治之、州部則自二河南京兆兩尹一至二豫冀袞徐青荊益梁并幽交一爲尹、二刺史十一而已、郡國則自二河南一至二日南一爲二郡國一、凡一百十有二、太守亦百十有二、雖能鷹揚、有二膂力之才一、刺史之職也、安二邦寬仁一、有二懷悌之德一、太守之職也と。又た古今原始に、漢景帝更名二郡守一爲二太守一、稱二太守一始二此一。

【大科】 官吏登用試驗科目中、各最拔萃の士を待つものをいふ。出典日知錄に、唐制天子自詔曰二制舉一、所二以待一非常之才一、宋人謂之大科、文獻通考選舉考曰、宋朝之制、國初制舉、有二賢良方正能直言極諫一、經學優深可二爲師法一、詳閑吏理、通二於教化一、凡三科、又曰、制科不過三事、一曰二通罰業一、二曰二試六論一、三曰二制策一、惟六論一場、人以爲難、又白、巽巖李氏、制科題目編序曰、蓋古之所二謂賢良方正者一、能直言極諫而已、今則惟博習强記也、直言極諫則罷而不問。

【大比】 官吏をして民家の衆寡及び財物を簡閱せしむるをいふ、今の市勢調査の類なり。出典周禮地官鄉大夫に、三年則大比、致二其德行道藝一而興二賢者一と。疏に、三年一問、天道小成、則大安比賞鄉之內一。

【大資】 宋の時に、資政殿大學士をいふ。出典避暑錄話に、本朝觀文資政殿皆有二大學士、觀文稱二大觀文一、而資政稱二大資一。

【大理】 官の名、今の司法官なり。出典事物紀原に、齊職儀曰、古官也、管子曰、黃帝得二后土一、辨二於四方一、使爲二李一、春秋元命包曰、堯爲二天子一、得二皐陶一爲二李一、時爲二士官一、韓詩外傳有二管文公使李齮爲二大理一、舜時爲二士官一、衛侯與二元咺一訟、士榮爲二大理一、新序楚平王以二伍奢一爲二大理一、

【大經】（ダイケイ）　意義一大道といふが如し。二經書を分ちて大經中經となせるをいふ。出處一中庸第三十二章に、惟天下至誠爲能經綸天下之大經。二唐書選舉志に、凡禮記・春秋左氏傳爲大經、詩・周禮・儀禮爲中經、易・尚書・春秋公羊傳・穀梁傳爲小經と。又た宋史選舉志に、元祐四年、以詩・禮記・周禮・左氏春秋爲大經、書・易・公羊・穀梁・儀禮爲中經。

【大法】（ダイハウ）　意義大法則をいふ。出處書經洪範篇の孔傳に、洪、大、範、法也、言天地之大法。

【大較】（ダイカウ）　意義前條に同じ。出處史記律書に、世儒闇於大較、不權輕重。

【大事】（ダイジ）　意義大なる事件なり、古は宗廟の祀と軍旅とを大事といへり。出處左傳隱公五年に、凡物不足以講大事、其材不足以徇器用、則君不舉焉と。又た同書成公十三年に、國之大事在祀與戎と。又た史記留侯世家に、漢王之將、獨韓信可屬大事、當一面。

【大道】（ダイダウ）　意義大なる道理にて、天地の道なり。又た廣き道路をもいふ。出處列子說符篇に、大道以多岐而亡羊、學者以多方喪生と。又た禮記禮運篇に、大道之行也、天下爲公、選賢與能、講信修睦。

【大猷】（ダイイウ）　意義前條に同じ。出處詩經小雅斯干篇に、秩秩大猷、君子攸之と。又た書經周官篇に、若昔大猷、制治于未亂、保邦于未危。

【大德】（ダイトク）　意義一大なる道德を有する人。二僧侶道士の號なり。出處一詩經小雅谷風篇に、忘我大德と。又中庸第十七章に、大德者必得其位、得其祿、必得其名、必得其壽と。又云、大德者必受命と。又云、小德川流、大德敦化。二因話錄に、元和以來、京城諸僧及道士、尤多大德之號。

【大廟】（ダイベウ）　意義天子諸侯の始祖の廟をいふ、魯の周公の廟の如し。出處禮記明堂位篇に、以諦禮記周公於大廟と。又た論語八佾篇に、子入大廟、每事問と。又た公羊傳文公十三年に、周公稱大廟、魯公稱世室、羣公稱宮。

【大祖】（ダイシヤ）　意義家なり、家上に大祖を立つ、故に家を大祖といふ。出處詩經大雅緜篇に、乃立冢土、戎醜攸行と。毛傳に、冢土、大祖也。

【大神】（ダイジン）　意義大明なる神なり。出處周禮小宗伯に、辨造上帝、封于大神、祭兵于山川と。注に、大神社及方嶽也。

【大惡】（ダイアク）　意義大なる惡事。出處左傳莊公二十四年に、先君有共德、而君納諸大惡。

【大憝】（ダイタイ）　意義憝は惡なり、大に惡むべき者。出處書經康誥篇に、元惡大憝、矧惟不孝不友。

【大猾】（ダイクワツ）　意義大いなる狡猾なる者。出處史記叔孫通傳に、劇言大猾、何也。

【大凱】（ダイガイ）　意義大に凱旋するをいふ。出處史記主父偃傳に、天下既平、天子大凱。

【大衆】（ダイシユウ）　意義一大なる道德を有する人。二僧侶道士の號なり。出處一詩子篇に、不足以合大衆。

【大敵】（ダイテキ）　意義大いなる對手をいふ。出處漢書衛青傳に、小敵之堅、大敵之禽也。

【大願】（ダイグワン）　意義大いなる願望なり。出處史記范雎傳に、所大願也。

【大學】（ダイガク）　意義一大學校なり、周の世に大學小學あり。二書名なり。出處一禮記王制篇に、小學在公宮南之左、大學在郊と。郊は、西郊なり、辟雍は、西郊に在り、公宮南之左とは、卽ち師保之學なりと。又た大戴禮保傅篇に、古者年八歲而出就外舍學小藝焉、履小節焉、束髮而就大學、學大藝焉、履大節焉と。又た白虎通に、八歲入小學、十五入大學。三此書は、本と禮記中の一篇なりしを、宋の司馬光之を裁出せり、朱熹に至りて之を崇尙し、四書の一に加へたるものなり、此書の作者及び名義に就て諸說あれども、朱熹は孔子の弟子たる曾子の作とし、大人の學と解けり、又た經と傳とに分ち、錯簡脫文ありとなし、改竄補正して之に注釋を加へ三綱領八條目とす、明明德・親民、止於至善これを三綱領とし、格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下これを八條目とす、大學章句一卷是なり、故に朱熹の書は古書の眞面目にあらず、古書のまゝなるか古本大學といふ、陽明學派は此本を用ふ。

【大誥】（ダイカウ）　意義書經周書の篇名にして、眞古文なり。出處初め武王殷の餘民を以て紂の子武庚を封ずるや、三叔をして之を監せしむ、後武王崩じて成王立則大理自古有矣、秦爲廷尉、漢景帝中元中更名大理、舊漢復古號也、舊唐書志曰、取天官貴人之牢曰大理之義、卽周禮士師之職、孟詵錄前書載、三代法官之名、則曰士、夏曰大理也。

【大甕】（ダイヤウ）　意義大いなる宴饗をいふ。出處唐書劉蕡傳に、先時大饗雜倡。

【大呂】（ダイリヨ）　意義一律の名。二鐘の名なり。出處一シの部十（ジフ）二律を見よ。二戰國策に、大呂陳于元英、故鼎反于磨笠と。注に、大呂齊鐘名と。又た史記平原君傳に、使趙重于九鼎大呂と。注に、正義曰、大呂、周廟大鐘。

【大人】（ダイジン）　意義一父を稱す。二母を稱す。三他人の母を稱す。四大德ある人を稱す。五官位ある人を稱す。六徳と位とを兼ねたる人を稱す。七聖轉輪王を稱す、韓愈の一般に佛菩薩を稱す。出處一史記高祖紀に、高帝寒玉巵、爲太上皇壽、曰、始大人常以恬爲無賴。二漢書宣元六王傳に、淮陽王の外舅張博が我が母を稱せし也と。又た後漢書黨錮傳に、范滂謂母曰、惟大人割不可忍之恩、勿以滂戚戚。三韓愈の柳子厚墓誌銘に、子厚泣曰、云云、吾不忍爲夢得之窮無辭以白其大人。四孟子離婁下篇に、大人者、不失其赤子之心者也。五左傳昭公十八年に、閔子馬曰、夫必多有是說、而後及其大人と。又た孟子滕文公上篇に、有大人之事、有小人之事。六易經乾卦に、九五、飛龍在天、利見大人。七長阿含經に、初民主王號大人と。又た佛祖統記に、如來之光、起自大人。

【大母】（ダイボ）　意義祖母（バヽ）なり。出處漢書三王傳に、李太后、親平王之太母也と。顏注に、太母、祖母也。

【大老】（ダイラウ）　意義賢人にして年老いたる者をいふ。出處孟子離婁上篇に、二老天下之大老也と。二老とは伯夷と太公望とを指す。

【大父】（ダイフ）　意義祖父（ザヽ）なり。出處史記張良傳に、大父開地。

【大兄】（ダイケイ）　意義大兄といふに同じ。出處カの部哥（カ）を見よ。

【大姊】（ダイシ）　意義姊を尊敬して呼ぶ辭なり。出處漢書外戚傳に、大姊何藏之深也。

【大士】（ダイシ）　意義一道德の高き人をいふ。二聖德の高き人を稱する語なり。出處一韓詩外傳に、孔子與子路子貢、曰、辯士哉、謂子路、曰勇士哉、謂子貢、曰、辯士哉、謂顏淵、曰、大士哉。二五燈會元に、釋迦牟尼佛、姓刹利、父淨飯、天母大淸淨妙、位登補處、生兜率天上、名曰勝善天人、亦名護明大士。

【大奴】（ダイド）　意義奴隸の頭なり。出處書叙指南に、奴之魁曰大奴。

【大體】（ダイテイ）　意義物のアラマシをいふ。出處淮南子汎論訓に、觀小節、足以知大體。

【大儒】（ダイジユ）　意義眞に道を知りたる大學者なり。出處荀子儒效篇に、彼大儒者、雖隱於窮閻陋巷、無爵而王公不能與之爭名。

【大醫】（ダイイ）　意義宮中の侍醫なり。出處梁書に、數大醫不得以生類爲藥。

【大家】（ダイカ）　意義一天子の近侍の官をいふ。二家姑、シウトメなり、大家といふは之を尊稱せるなり。三學問又は詩文等に秀でたる人。出處一鶴林に、親近侍從官稱曰大家と。又た國語晉語に、大家隣國と。韋注に大上廻也。二康熙字典に、家與姑同、大家、女之尊稱、漢曹世叔之妻班昭、稱大家、卽超妹。三明の茅坤の唐宋八大家文鈔、及び淸の儲欣の唐宋十大家文集錄の類これなり。

【大昏】（ダイコン）　意義天子諸侯の婚禮をいふ。昏は婚に同じ。出處禮記哀公問篇に、大昏至矣。

【大期】（ダイキ）　意義妊娠の婦人の臨月をいふ。出處史記呂不韋傳に、姬自匿、有身、至大期時、生子政。

【大歸】（ダイキ）　意義妻の離婚して實家に歸るをいふ。出處詩經邶風燕燕篇の鄭箋に、歸、嫁于人、是大歸と。疏に、歸寧者、有時而反、此卽謂不復來、故謂之大歸と。又た左傳文公十八年に、穆人姜氏歸于齊、大歸也。出處南史梁徐孝嗣傳に、及大還之日、又大嘗震。

【大去】（ダイキヨ）　意義去りて再び反らざるをいふ。出處秦始皇二四年に、紀侯大、去其國。

【大噱】（ダイギヤク）　意義オの部驅（オツ）驛を見よ。

【大業】（ダイゲフ）　意義大いなる事業なり。出處易經繫辭上傳に、富有之謂大業。

に及び、周公之に相たり、然るに三叔の流言の爲めの故に、寔に其位を去る、幾もなくして、成王其寃なるゝを知り、復之を朝に立たしむ、故に三叔倡れて、遂に武庚と亂を作す、是に於て周公、成王の命を受け、將に東征せんとして大に天下に告ぐ、即ち此の誥なり、故に序に曰く、武王崩、三監及淮夷叛、周公相成王、將黜殷、作大誥と、而して篇に大誥と題せしは、其首めに大誥の二字あるを以ての故なり、此篇の誥誥皆卜を主として言ふ、是を以て文中、卜ノ字を出す者八個の多きに及ぶ、蓋し諸有司中此征行を難ずる者あり、故に周公の吉なるゝを示し、且つ聽く者をして誥の意を解し易からしめんが爲め、極めて平易の言を用ゆ、故に當時の俗語多く後世の讀む者をして、卻て難からしむ、是れ佶屈聱牙と評せらるゝ所以なり。

【大蘇】 蘇軾をいふ、軾の弟轍を小蘇といふ。〔附註〕蘇轍の詩に、雖將察集過燕都、每被行人問大蘇、莫把文章動權貴、恐妨談笑臥江湖。

【大篆】 テの部篆書を見よ。

【大戶】 徒にいふ。〔附註〕餘冲序錄に、人能飲不能飲、有大小戶之稱、唐宋酒令詩話言之多矣、今人殆相傳而云、竊、或問此稱定起何時、吳志孫皓每饗宴人、以七升爲限、小戶雖不入口、並澆灌取盡、是三國以前、事無徵者、已有此品目也。

【大功】 〔喪服〕喪服の名なり、九ケ月の喪服、ノサの部喪服を參看せよ。〔附註〕韻會に、大功小功、喪服名、謂治布有精麤之分、或作紅、史記漢書大功小功、作大紅小紅と。又た儀禮喪服に、大功布喪、九月者、傳曰、大功布九升、小功布十一升と。鄭注に、大功布者、其鍛治之功麤沽而已。賈公彥疏に、鍛治加灰、但麤沽而已。

【大過】 〔喪服〕一大に過ぐるをいふ。二大過ぐるをいふ。〔附註〕二易經に、大過卦あり。三論語遠而篇に、子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣。

【大言】 〔喪服〕大なる言論。〔附註〕莊子齊物論篇に、大言炎炎、小言詹詹。

【大知】 〔喪服〕大なる知識。〔附註〕莊子齊物論篇に、大知閑閑、小知閒閒。

【大息】 〔喪服〕久く氣を蓄へて息を大にして嘆ずるなり。〔附註〕史記蘇秦傳に、仰天大息。

【大損】 〔喪服〕損失の大なること。〔附註〕魏書皮豹子傳に、未有大損。

【大儺】 儺（ダ）を見よ。

【大美】 〔喪服〕大に美なるなり、道をいふ。〔附註〕莊子知北遊篇に、天地有大美而不言。

【大區】 〔喪服〕天地の內をいふなり。〔附註〕淮南子に、摯志舒節以馳大區。

【大聲】 〔喪服〕大なる聲を發するをいふ。〔附註〕漢書王莽傳に、大聲而嘶。

【大布】 〔喪服〕粗末なる布をいふ。〔附註〕莊子山木篇に、莊子衣大布。

【大佛】 〔喪服〕大なる佛像。〔附註〕北史齊幼主紀に、鑿晉陽四山爲大佛像、一夜燃油萬盞、光照宮內と。又た行都紀事に、中塑大佛。

【大覺】 〔喪服〕大に覺めるといふこと、佛の異稱なり。〔附註〕翻譯名義集に、惛夢惺而大覺常明。

【大論】 〔喪服〕高大なる議論なり。〔附註〕申鑒に、不聞大論、則志不弘、不聽至言、則心不固。

【大乘】 〔喪服〕大乘は佛教中の高尙なる者なり。乘はノセルなり、衆生を運載して彼岸に至るの義なり。〔附註〕釋氏要覽に、梵云摩訶衍、此云大乘、大者簡小之稱、乘者運載爲義、小者簡非大也、譯如來觀根逗機、方便施設。

【大形】 〔喪服〕おほかたなり。〔附註〕南齊書垣榮祖傳に、作大形棺材。

【大音】 〔喪服〕大聲なり。〔附註〕後漢書百官志に、大音讀數畢と、又た三國魏志公孫瓚傳に、有委儀大音聲。

【大樂】 〔喪服〕眞成の樂は陰陽相和し、百物その宜しきを得、正に天地とその調を同一にするをいふ。〔附註〕禮記樂記篇に、大樂與天地同和。

【大夏】 〔喪服〕夏の禹王の樂の名。〔附註〕周禮春官に、大司樂舞大夏以祭山川、鍾師掌金奏、凡樂事以鐘鼓奏九夏。

【大雅】 〔喪服〕雅は正なり、正樂の歌なり、其の篇に大小の別あり。〔附註〕詩

經に、大雅小雅の目あり。又た李白の古風の詩に、大雅久不作、吾衰竟誰陳。

【大冊】 〔喪服〕大なる書册。〔附註〕夢谿筆談に、悉以黃紙爲大冊寫之。

【大部】 〔喪服〕浩瀚なる書籍をいふ。〔附註〕梁高僧傳に、大部經文。

【大湊】 〔喪服〕大に物の輻湊する所。〔附註〕周書作洛解に、以爲天下之大湊。

【大除】 〔喪服〕大晦日にて、十二月三十一日のこと。〔附註〕蕭鳴章に、大除與元旦。

【大勢】 〔喪服〕一天下の形勢に就ていふ。二人數の多きをいふ。〔附註〕一三國魏志劉放傳に、放說王祕曰、曹公能挾天子、秦嶽乘天子、秦嶽伐罪、所向必克、威刑既合、大勢以見。二數兩心史に、元慶大勢、合圍月餘。

【大名】 〔喪服〕大なる名あるもの。〔附註〕左傳閔公元年に、卜偃曰、畢萬之後必大、萬盈數也、魏、大名也。

【大全】 〔喪服〕大にマッタシといふこと。〔附註〕莊子田子方篇に、吾不知天地之大全也。〔附註〕後世、四書大全五經大全等の字面は此に取れり。

【大成】 〔喪服〕孔子が伯夷、伊尹、柳下惠三聖人の事を集めて、一大聖人の成を集めて、一大成を爲せるが如くなるをいふ。音樂の一終を成といふ。〔附註〕孟子萬章下篇に、孔子謂之集大成。

【大同】 〔喪服〕少しの差異を論ぜず、混同して細別せざるなり。〔附註〕莊子天地篇に、不同同之之謂大と。注に、萬物萬形各〻其の分に止まり、彼を引きて、以て我に同じくせず、乃ち大を成すのみ。

【大凡】 〔喪服〕大旨に同じ。オホヨソ。〔附註〕荀子禮論篇に、禮之大凡、事生飾歡也、送死飾哀也、師旅飾威也、又た韓愈の送王埜野序に、大凡物不得其平則鳴。

【大槩】 〔喪服〕アラマシなり。〔附註〕漢書に、期其大槩。

【大略】 〔喪服〕大凡といふことなり。〔附註〕孟子滕文公上篇に、此其大略也。

【大抵】 〔喪服〕前條に同じ。〔附註〕史記酷吏傳に、大抵皆誣以不道。

【大半】 〔喪服〕三分の二をいふ。〔附註〕漢書高帝紀上に、今漢有天下大半と。注に、韋昭云、凡數三分有二爲大半。

【大觀】 〔喪服〕造人大觀を見よ。

【大侵】 〔喪服〕大鐘なり。〔附註〕コの部五穀不升を見よ。

【大造】 〔喪服〕大功といふがごとし、造は作なり、爲なり。〔附註〕方傳成公十三年に、是我有大造于西土也。

【大變】 〔喪服〕非常なる出來事、人の死するなどをいふ。〔附註〕三國魏志三少帝紀に、以致大變。

【大分】 〔喪服〕大凡のきまりなり。〔附註〕荀子榮辱篇に、榮辱常通、辱者常窮、是榮之大分也。

【大錢】 〔喪服〕大形の錢をいふ。〔附註〕國語周語に、將鑄大錢。

【大纛】 〔喪服〕頡會に、纛は旄牛尾をぬて之を爲る左驂馬の首に在りと。唐の世に、節度使行くときは、節を建て纛を樹つ、今我邦にて天皇族のことに用ふ。（タの部黃（クワウ）屋左纛を參看せよ。〔附註〕歐陽修の雲錦堂記に、高牙大纛不足爲公榮。

【大祥】 〔喪服〕既に葬りしより後ち十三ケ月にして祭る、之を小祥（一周忌）といひ、二十五ケ月にして祭る、之を大祥（三周忌）といふ。又た二十七ケ月にして祭るを禫といふ。〔附註〕儀禮士虞禮記に、期而小祥、又期而大祥、中月而禫と。中はノダツルなり。

【大旆】 〔喪服〕日月、及び升り降りの龍を畫きし大なる旗なり。〔附註〕儀禮に、天子乘龍旂大旆。

【大旗】 〔喪服〕大なる旗なり。〔附註〕周禮に、遂人以遂之大旗致之。

【大牙】 〔喪服〕天子の旗、また大將軍の旗。〔附註〕張衡の東京賦に、牙旗鏡紛と。注に、古者天子出、建大牙旗、竿上以象牙飾之。

【大鼓】 〔喪服〕武器の名、タイコ。〔附註〕史記周紀に、幽王爲烽燧大鼓。

【大弓】 〔喪服〕大いなる弓。〔附註〕魏書獎豚牛傳に、故作大弓兩張。

【大黄】（ダイクワウ）　意義大なる弓をいふ。出處史記李將軍傳に、以大黄射其裨將と。注に、服虔曰、黄肩、弩也。晉灼曰、黄肩、即黄閣也、大黄、其大者也。

【大刀】（ダイタウ）　意義薙刀（ナギナタ）をいふ。出處經國雜略に、大刀柄長五尺、帶刀纂、共長七尺五寸、方可大敵、名爲神葉刀、連柄共重五斤官秤。

【大砲】（ダイハウ）　意義オホヅヽなり。出處守汴日志に、安大砲百位。

【大煩】（ダイカウ）　の字は字書に載せず、俗字なり。出處經國雜略に、佛狼機、大煩銃。

【大輅】（ダイロ）　意義輅は、大なり、天子の乘る車なり。出處書經顧命篇に、大輅在賓階面、綴輅在阼階面、先輅在左塾之前、と。又た禮記月令篇に、中央、上天子居太廟太室、乘大路、駕黄騮、

と。又た釋名に、天子所乘曰玉輅、謂之輅者、言行於道路也。

【大器】（ダイキ）　意義大器量ある人をいふ。出處管子に、施伯謂魯侯曰、管仲者天下之賢人也、大器也。

【大幅】（ダイフク）　意義おほはゞ。掛軸などにいふ。出處清齋位置に、堂中宜挂大幅横挾。

【大白】（ダイハク）　意義白は、罰酒（サカヅキ）の名なり。出處淮南子道應訓に、魏文侯觴諸大夫於曲陽、云云、饗重擊、白而進之曰、請浮君と。浮は、罰なりと。又た左思の吳都賦に、黑齒巷飲、飛觴舉白と。注に、行觴如飛、大白、杯名、有犯令者、舉而罰之、と。出處白は、もと罰杯の名なれども、廣く酒杯の義に用ふることあり。漢書叙傳に、諸侍中皆引滿舉白と。又た研北雜志に、蘇子美が漢書張良傳を讀んで、その爽快の處に至れば、一大白を滿引するを首へり、とれ并に罰杯の義に非ず。

【大軍】（ダイグン）　意義多人數の軍勢をいふ。出處周書陳忻傳に、大軍西還。

【大勇】（ダイユウ）　意義義理より出る勇をいふ。出處孟子公孫丑上篇に、子好勇乎、吾嘗聞大勇於夫子矣。

【大福】（ダイフク）　意義大なる恩なり。出處漢書王莽傳に、大福之恩。

【大慶】（ダイケイ）　意義大なるサヒハヒ。出處晉書王濬傳に、誠爲大慶、と。又た通鑑宋孝武紀に、江州佐吏造鄧琬曰、殿下又開黄關、實爲公私大慶。

【大祿】（ダイロク）　意義厚祿をいふ。出處國語魯語に、無大功而欲大祿。

【大吉】（ダイキツ）　意義大に吉き事なり。出處易經家人卦に、六四、富家、大吉と。又た荀子議兵篇に、始於一、是之謂大吉。

【大量】（ダイリヤウ）　意義大度の器量をいふ。出處魏書に、盧敏少有大量。

【大膽】（ダイタン）　意義勇氣の盛なるをいふ。出處蘇軾の詩に、阿咸大膽忽持去。

【大力】（ダイリヨク）　意義大なる腕力あるをいふ。出處晉書郭璞傳に、大力而遲鈍。

【大度】（ダイド）　意義大いなる度量あるをいふ。出處漢書高帝紀に、常有大度。

【大恩】（ダイオン）　意義大いなる恩澤なり。出處漢書宣元六王傳に、加大恩。

【大嚼】（ダイシヤク）　意義大に食ふことをいふ。出處曹植の與吳季重書に、過屠門而大嚼、豈不快意と。又た蘇軾の蘇筠軒の詩に、若對此君仍大嚼、世間何有梁州鵝。

【大辟】（ダイヘキ）　意義死刑をいふ。辟は刑なり。出處書經呂刑篇に、大辟疑赦、其罰千鍰、

【大罪】（ダイザイ）　意義大なる罪をいふ。出處書經康誥篇に、乃有大罪。

【大火】（ダイクワ）　意義大なる火災をいふ。出處列子黄帝篇に、范氏之藏大火。

【大役】（ダイエキ）　意義大なる工事をいふ。出處莊子人間世篇に、上有大役、則支離以有常疾、不受功。

【大工】（ダイク）　意義良工なり。出處六韜に、大農、大工、大商。

【大風】（ダイフウ）　意義癩病なり。出處素問に、病名大風、骨節重、鬚眉墮、名曰大風。

【大病】（ダイビヤウ）　意義病氣の容易ならざるものをいふ。出處禮記檀弓上篇に、至乎大病。

【大故】（ダイコ）　意義一父母の喪をいふ。二大なる惡事をいふ。出處一禮記檀弓上篇に、非有大故、不宿於外。二論語微子篇に、故舊無大故、則不棄也。

【大漸】（ダイゼン）　意義大に進むなり、病の危篤なるにいふ。出處書經顧命篇に、疾大漸惟幾、病日瘳、既翼日、綱留、（大漸綱留を見よ）

【大行】（ダイカウ）　意義一帝王の崩じて未だ葬らざるをいふ。二賓客の禮を掌る官をいふ。出處一史記李斯傳に、大行未發、喪禮未終と。又た風俗通に、有天命、終往而不返、故曰大行と。又た癸辛雜識に、宮車晏駕曰大行、大行者、不返之詞也、宋理宗之喪、湖州教官劉憶讀觀、行字作去聲、以爲大行受大名、細行受細名者、誼法也、天子新崩、尚未有謚、故且稱大行皇帝也。（大行皇帝を參看せよ）三史記叔孫通傳に、大行設九賓臚句傳。

【大鳥】（ダイテウ）　意義大なる鳥、即ち鴻鵠の類をいふ。出處史記滑稽傳に、國中有大鳥。

【大鵬】（ダイホウ）　意義鳥の名、オホトリ。出處莊子逍遙遊篇に、北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大、不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背、不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲、云云、摶扶搖羊角而上者九萬里、絕雲氣、負青天。

【大魚】（ダイギヨ）　意義大なる魚、鯨鯢の類をいふ。出處戰國齊策に、海大魚（カの部海（カイ）大魚を見よ）

【大蟲】（ダイチユウ）　意義虎の異稱なり。出處傳燈錄に、百丈問希運、見大蟲、運便作虎聲。

【大蛇】（ダイジヤ）　意義大なるヘビ。出處韓非子說林上篇に、小蛇謂大蛇曰、

【大木】（ダイボク）　意義大なる樹木をいふ。出處書經金縢篇に、天大雷電、以風、禾盡偃、大木斯拔。

【大椿】（ダイチン）　意義上古の大木の名。人の長壽を賀するに用ふ。出處莊子逍遙篇に、上古有大椿者、以八千歲爲秋、而彭祖乃今已久特聞、

【大樹】（ダイジユ）　意義將軍の異稱なり。出處後漢書馮異傳に、馮異字公孫、潁川人、謙退不伐、諸將論功、異常獨屏樹下、軍中號爲大樹將軍、及破邯鄲二乃更部分諸將、各有配隸、軍士皆言、願屬大樹將軍、

【大蒜】（ダイサン）　意義一種の葷菜、即ちヒルなり。出處事物紀原に、切韵、張騫使西域、得大蒜、而還也。

【大將軍】（ダイシヤウグン）　意義軍の總指揮官なり。出處事物紀原に、戰國時始有大將軍之號、隨事即置、亦不主官、劉劭爵制以謂秦十八爵、大庶長即大將軍也、左右庶長、即左右偏裨將軍也、楚懷王與秦戰、秦虜其大將軍屈丐、是也、項羽時范增稱大將軍、漢途置大將軍、開府如三公、至煬帝於諸衛悉置。

【大鎮國】（ダイチンコク）　意義都督をいふ。出處文獻通考職官門に、都督之名、始於魏晉、謂之假黄鉞都督中外軍事、權任甚重、至唐則每道有都督府、特以爲州牧之職而已、宋中興後、所命都督、始復魏晉之舊焉、と。又た唐書方鎮表に、上元二年、以華州置鎮國節度。

【大柱史】（ダイチユウシ）　意義官名、諸道の州縣を巡回して、官吏の善惡人民の疾苦を監察するを掌る。出處唐書百官志に、御史臺、察御史十五人、掌分察百寮、巡按州縣、と。又た明史職官志に、洪武十年七月、詔遣監察御史、巡按州縣、二十三年、更名監察御史、印、曰巡按某處監察御史印、其巡按印、曰某道監察御史印、と。又た初學記職官部下に、漢官儀曰、侍御史、周官也、爲柱下史。

【大憲副】（ダイケンフク）　意義官名、按察司の副使をいふ。按察司は、刑法按勘の事を掌る處、按察使を憲臺と稱するにより、副使を憲副と稱す。出處宋史職官志に、國初官無定制、有使則置副と。又た明史職官志に、提刑按察司、按察使一人、正三品、副使正四品、僉事正五品、無定員、按察使掌一省刑名按勘之事、副使僉事、分道巡察、布政司參政參議、分司諸道、督糧道、督册道、分守道、按察司副使僉事、分司諸道、提督學道、清軍道、驛傳道、分巡道、兵備道。

【大撫臺】（ダイブダイ）　意義官名、諸都御史の諸道巡撫を兼ぬる者をいふ。出處宋